



大正十三年十一月二日印刷
大正十三年十一月五日發行

漢文叢書
古文眞寶、楚辭

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
塚本哲三

發行者兼印刷者　東京市神田區錦町一丁目十九番地
三浦理

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地
有朋堂印刷部

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地
有朋堂書店

兮綴二萬方一。斥二蜥蜴一兮進二龜龍一。策謀從兮翼二機衡一。配二稷契一兮恢二唐功一。嗟二英俊兮未一レ爲レ雙。

(四)策謀從ひて機衡を翼け。(五)稷契に配して唐功を恢にせんとし。英俊の未だ雙を(六)爲さざるを嗟く。

(一)天明かに覧請ゆ　(二)日月星辰に天端を顯す　(三)小人を斥け賢人を擧ぐるに喩ふ　(四)ともに謀りて、善政を睹く　(五)賢を輔佐に伴ひ、君主の功を大にせんとす（稷契は堯の臣、俱に賢者なり）　(六)賢俊の士なほ余に伴はざるを歎く。

繞二曲阿一兮北次。造二我車兮南端一。謁二玄黃一兮納レ贄。崇二忠貞一兮彌堅。歷二九宮一兮徧觀。睹二祕藏兮寶珍一。就二傳說一兮騎レ龍。與二織女一兮合レ婚。舉二天罼一兮掩レ邪。穀二天弧一兮䠶レ姦。隨二眞人一兮翱翔。食二元氣一兮長存。望二太微一兮穆穆。睨二三階兮炳分一。相二輔政一兮成レ化。建二烈業一兮垂レ勳。目瞥瞥兮西沒。道遐迥兮阻歎。志稸積兮未レ通。悵敞罔兮自憐。

亂曰。天庭明兮雲霓藏。三光朗

曲阿を繞りて北に次し。我車を(一)南端に造し。(二)玄黃に謁して贄を納れ。忠貞を崇みて彌〻堅し。九宮を歷て徧く觀。祕藏の寶珍を睹。(三)傳說に就きて龍に騎り。織女と婚を合せ。(四)天罼を舉げて邪を掩ひ。(五)天弧を穀して姦を䠶。(六)眞人に隨ひて翱翔し。元氣を食ひて長く存し。(七)太微の穆穆たるを望み。(八)三階の炳分を睨し。政を相輔けて化を成し。烈業を建てて勳を垂れんとす。目瞥瞥として西に沒し。(九)道遐迥にして阻歎す。志稸積して未だ通ぜず。悵として敞罔して自ら憐む。

(一)また南方に行く　(二)中央の帝　(三)殷王武丁の相、天に登りて星となる　(四)星の名　(五)上に同じ　(六)仙人に從ひて遊ぶ　(七)天宮の和順せるを望み　(八)天宮三階の明かなるを見る　(九)道遠く、志の通ぜざるを歎く

亂に曰く。

(一)天庭明に雲霓藏し。(二)三光朗にして萬方を鏡す。蜥蜴を斥けて(三)䖸龍を進め。

陟二玉巒一兮逍遙。覽二高岡一兮嶢嶢。桂樹列兮紛敷。吐二紫華一兮布レ條。實孔鸞兮所レ居。今其集兮惟鶉。烏鵲驚兮啞啞。余顧瞻兮怊怊。彼日月兮闇昧。障二覆天一兮祲氛。伊我后兮不レ聰。焉陳レ誠兮効レ忠。攄二羽翮一兮超レ俗。遊陶遨兮養レ神。乘二六蛟兮蜿蟬一。遂馳騁兮陞レ雲。揚二彗光一兮爲レ旗。秉二電策一兮爲レ鞭。朝晨發二兮鄢郢一。食時至二兮增泉一。

守志

(一)玉巒に陟りて逍遙し。高岡の嶢嶢たるを覽る。(二)桂樹列りて紛敷し。紫華を吐き條を布く。實に(三)孔鸞の居る所なり。今其の集は惟れ鶉。烏鵲驚きて啞啞たり。余顧瞻して怊怊たり。彼の日月の闇昧なるは。天を障へ覆ふの(四)祲氛あればなり。伊れ我が后聰ならず。焉ぞ誠を陳べ忠を効さん。羽翮を攄べて俗を超え。遊んで(五)陶遨して神を養ふ。(六)六蛟の(七)蜿蟬たるに乘り。遂に馳騁して雲に陞り。(八)彗光を揚げて旗と爲し。電策を秉りて鞭と爲し。(九)朝晨に鄢郢を發し。食時に增泉に至る。

(一) 崑崙山 (二) 特に高き貌 (三) 孔雀鳳凰 (四) 惡氣あればなり (五) 心のまゝにす (六) 龍の角なきもの (七) 長くうねる貌 (八) 彗星の光 (九) 晨に楚都を發し、食時に天漢に至る

不レ章。寶彼兮沙礫一。捐二此兮夜光一。椒瑛兮涅汙。菓耳兮充レ房。攝レ衣兮緩レ帶。操二我兮墨陽一。昇レ車兮命レ僕。將レ馳二兮四荒一。下レ堂兮見レ蠹。出レ門兮觸レ蠭。巷有二兮蚰蜒一。邑多二兮螳螂一。睹二斯兮嫉賊一。心爲兮切傷。

㈠ 秋冬の天高く朗かなり ㈡ 草木凋み初む ㈢ 夜光の名玉を棄つ ㈣ 香木汚され、惡草、房に滿つ ㈤ 墨陽の劍を操る ㈥ 毒蟲の如き衆小人を見、心ために傷む ㈦

俛念二兮子胥一。仰憐二兮比干一。投レ劍兮脫レ冕。龍屈兮蜿蟤。潛二藏兮山澤一。匍匐叢攢。窺二見兮溪澗一。流水兮沄沄。黿鼉兮欣欣。鱣鮎延延。羣行兮上下。騈羅兮列陳。自恨二兮無レ友。特處兮煢煢一。冬夜兮陶陶。雨雪兮冥冥。神光兮熲熲。鬼火兮熒熒。脩レ德兮困控。愁不二聊兮遑一生。憂紆兮鬱鬱。惡所二兮寫レ情。

俛して子胥を念ひ。仰いで比干を憐み。劍を投じ冕を脫ぎ。龍屈して蜿蟤たり。山澤に潛藏し。匍匐して叢攢す。溪澗を窺ひ見れば。流水沄沄たり。黿鼉欣欣たり。鱣鮎延延たり。羣行上下し。(三)騈羅列陳す。自ら友なく。特處して煢煢たるを恨む。冬夜(四)陶陶たり。雨雪冥冥たり。(五)神光(六)熲熲たり。鬼火(七)熒熒たり。德を脩めて困控し。愁へて聊むに(八)遑あらず。憂紆ひて鬱鬱たり。惡んぞ情を寫す所ぞ。

㈠ 龍の如く屈しちゞまる ㈡ 沸き流る ㈢ 並びつらなる ㈣ 長き貌 ㈤ 山川の精の光 ㈥ かゞやく貌 ㈦ 光の弱き貌 ㈧ 原文「生」の字は助辭

故余轡兮策駉、忽風騰兮雲浮。踰飛杭兮越海。從安期兮蓬萊。緣天梯兮北上。登太一兮玉臺。使素女兮鼓簧。乘戈龢兮謳謠。聲噭誂兮淸和。音晏衍兮要婬。咸欣欣兮酣樂。余眷眷兮獨悲。顧章華兮太息。志戀戀兮依依。

㊀黃支（南極の國）に止まり、赤帝に詣きて疑をたゞす　㊁北方の神に遇ひ、宮に侍す　㊂蓬萊山にて仙人安期生に從ふ　㊃仙人乘弋、和して歌ひ　㊄聲淸く響び　㊅音長く引きつゝ舞ふ　㊆楚の章華臺を顧み、憂ひて太息す

旻天兮清涼。玄氣兮高朗。北風兮潦烈。草木兮蒼唐。蛜蚗兮噍噍。蝍蛆兮穰穰。歲忽忽兮惟暮。余感時兮悽愴。傷俗兮泥濁。矇蔽兮

哀歲

旻天清涼にして。玄氣高朗なり。北風潦烈にして。草木蒼唐たり。蛜蚗噍噍たり。蝍蛆穰穰たり。歲忽忽として惟れ暮れ。余時に感じて悽愴たり。俗の泥濁たる。矇蔽して章ならざるを傷む。彼の沙礫を寶とし。此の夜光を捐つ。椒瑛湼汙し。葈耳房に充つ。衣を攝げて帶を緩うし。我が墨陽を操り。車に昇り僕に命じ。將に四荒に馳せんとす。堂を下りて蠆を見。門を出でて蜂に觸る。巷に蚰蜒あり。邑に螳螂多し。斯の嫉賊を睹。心爲に切傷す。

碎糜。時混混兮澆饡。哀ニ當世ー兮莫ニ知。覽ニ往昔ー兮俟彥。亦詘辱兮係纍。管束縛兮桎梏。百貿易兮傳賣。遭ニ桓繆ー兮識舉。才德用兮列施。且從容兮自慰。玩ニ琴書ー兮遊戲。迫ニ中國ー兮迮陋。吾欲ㇾ之ニ兮九夷ー。

欲す。

(一)苦菜茂り榮ゆ　(二)香草、凋み衰ふ　(三)混濁し亂れ、忠臣を知るものなし　(四)管仲　(五)百里奚　(六)齊の桓公、秦の穆公　(七)中國にありて志を得ず、九夷(えびす)の地に行かんとす

超ニ五嶺ー兮嵯峨。觀ニ浮石ー兮崔嵬。陟ニ丹山ー兮炎野。屯ニ余車ー兮黃支。就ニ祝融ー兮稽ㇾ疑。嘉ニ己行ー兮無ㇾ爲。乃回揭兮北逝。遇ニ神嬿ー兮宴娭。欲ニ靜居兮自娛ー。心愁慼兮不ㇾ能。

五嶺の嵯峨たるを超え。浮石の崔嵬たるを觀。丹山と炎野とを陟り。余が車を(一)黃支に屯し。祝融に就きて疑を稽へ。己の行を嘉して爲す無し。乃ち回り揭つて北に逝く。(二)神嬿に遇ひて宴娭し。靜居して自ら娛まんと欲す。心愁慼して能はず。余が轡を放ちて騁に策つ。忽風騰り雲浮び。飛杭に蹠して海を越え。(三)安期に蓬萊に從ひ。天梯に緣りて北に上り。太一の玉臺に登り。素女をして簧を鼓せしめ。(四)乘戈龢して謳謠し。(五)聲噭誂して淸和に。(六)音晏衍して要婬す。咸欣欣として酣樂し。余眘眘として獨り悲む。(七)章華を顧みて太息し。志戀戀として依依たり。

遑悴兮失レ氣。踊躍兮距跳。便二旋兮中原一。仰レ天兮增レ歎。菅蒯兮壄莽。雚葦兮千眠。鹿蹊兮䟤䟤。貒貉兮蟫蟫。鸇鷂兮軒軒。鶉鷃兮甄甄。哀二我兮寡獨一。靡レ有二兮匹倫一。意欲二兮沈吟一。迫二日兮黃昏一。玄鶴兮高飛。增逝二兮青冥一。鶬鶊兮喈喈。山鵲兮嚶嚶。鴻鸕兮振レ翅、歸鴈兮于征。吾志兮覺悟。懷二我兮聖京一。垂レ屣兮將レ起。跓俟兮須レ明。

人孔子、陳蔡の間に苦しみ、賢人擯斥、害に囚へらる　(八) 鳥の名(伯勞)　(九) 草の茂る貌　(十) 相随ふ貌　(十一) 止らんとする貌　(十二) 小鳥の飛ぶ貌　(十三) 天上に行く　(十四) 清く鳴く貌

傷時

惟昊天兮昭靈。陽氣發兮清明。風習習兮龢煖。百草萌兮華榮。菫荼茂兮敷疏。蘅芷彫兮瑩嫇。愍二貞良兮遇レ害。將二夭折兮

惟れ昊天昭靈。陽氣發して清明なり。風習習として龢煖に。百草萌して華榮す。(一)菫荼茂りて敷疏たり。(二)蘅芷彫んで瑩嫇たり。貞良の害に遇ひ。將に夭折して碎糜せんとするを愍む。(三)時混混として澆饡し。當世の知る莫きを哀む。往昔の俊彦を覽るに。亦詘辱せられて係纍す。(四)管束縛せられ桎梏せられ。(五)百貿易して傳賣し。(六)桓繆に遭ひて識り擧げられ。才德用ひられて列施す。旦に從容として自ら慰め。琴書を玩んで遊戲し。(七)中國に迫りて迮陿し。吾九夷に之かんと

嗟嗟兮悲夫。
殽亂兮紛挐。
第絲兮同綵。
冠屨兮共絢。
督萬兮侍宴。
周邵兮負芻。
白龍兮見䠶。
靈龜兮執拘。
仲尼兮困厄。
鄒衍兮幽囚。
伊余兮念茲。
奔遁兮隱居。
將升兮高山。
上有兮猴猿。
欲入兮深谷。
下有兮虺蛇。
左見兮鳴鵙。
右睹兮呼梟。

悼亂

嗟嗟悲しいかな。殽亂し紛挐す。(一)第絲綵を同じうし。冠屨絢を共にす。(二)督萬宴に侍し。(三)周邵芻を負ふ。白龍䠶られ。靈龜執拘せられ。(四)仲尼困厄し。鄒衍幽囚せらる。伊余茲を念ひ。奔遁し隱居す。將に高山に升らんとすれば。上に猴猿あり。深谷に入らんと欲すれば。下に虺蛇あり。左に(五)鳴鵙を見。右に呼梟を睹る。惶悸して氣を失ひ。踊躍して距跳す。中原に便旋し。天を仰ぎて歎を增す。菅蒯壄莽。(六)雚葦千眠たり。(七)鹿蹊躖躖。(八)貒貉蟫蟫たり。(九)鸇鷂軒軒。鶉鵪甄甄たり。我が寡獨にして。匹倫あるなきを哀み。意沈吟せんと欲し。日の黃昏に迫る。玄鶴高く飛び。增〻(一〇)青冥に逝く。(一一)鶬鶊喈喈たり。山鵲嚶嚶たり。鴻鸕翅を振ひ。歸鴈于に征く。吾が志覺悟し。我が聖京を懷ひ。屐を垂れて將に起たんとし。跓竢して明を須つ。

㊀ 善惡を混同し、上下の別なきに喩ふ ㊁ 宋の大夫、華督と宋萬(君を弑せし逆臣) ㊂ 周公・邵公 ㊃ 孔

鵰、遊兮華屋。鵔鸃棲兮柴蔟。起奮迅兮奔走。違羣小兮謑訽。載青雲兮上昇。適昭明兮所處。躡天衢兮長驅。踵九陽兮戲蕩。越雲漢兮南濟。秣余馬兮河鼓。雲霓紛兮晻翳。參辰兮回顚倒。

(一)流行に志すものなく　(二)羣小人に背き、誹り辱めらる　(三)日に近づき行き　(四)日の出づる處に行き　(五)牽牛星の別名　(六)星宿の名　(七)顚倒して、路を失ふ

逢流星兮問路。顧指我兮從左。徑娵觜兮直馳。御者迷兮失軌。遂踢達兮邪造。與日月兮殊道。志閼絕兮安如。哀所求兮不耦。攀天階兮下視。見鄢郢兮舊宇。意逍遙兮欲歸。衆穢盛兮杳杳。思哽饐兮詰詘。涕流瀾兮如雨。

流星に逢ひて路を問へば。我を顧指して左よりせしむ。娵觜を徑りて直に馳せ。御者迷ひて軌を失ひ。遂に踢達して邪に造る。(一)日月と道を殊にし。志閼絕して安にか如かん。(二)求むる所耦はざるを哀み。天階に攀ぢて下視し。鄢郢の舊宇を見。(三)意逍遙して歸らんと欲するも。衆穢盛にして杳杳たり。(四)思哽饐して詰詘し。(五)涕流瀾して雨の如し。

(一)廻り過ぎて邪路に至る　(二)志絶え行くべき所なし　(三)楚都の舊居を見る　(四)佞人多くその勢盛なり　(五)思胸にふさがる

霜雪兮漼溰。氷凍兮洛澤。東西兮南北。罔レ所二兮歸薄一。庇二廕兮枯樹一。匍二匐兮巖石一。踡跼兮寒局數。獨處兮志不レ申。年齒盡兮命迫促。魁纍擠摧兮常困辱。含レ憂强レ老兮側無レ樂。鬚髮蓬領兮顏鬢白。思二靈澤一兮一二膏沐一。懷二蘭英一兮把二瓊若一。待二天明一兮立躑躅。雲濛濛兮電倏爍。孤鶴驚兮鳴呴呴。思怫鬱兮肝切剝。忿悁悒兮孰訴告。

（六）長くして多き貌　（七）多き貌　（八）木の多き貌　（九）積り集る　（一〇）水盛く氷となる　（一一）身を曲げちゞめ　（一二）促り屈し　（一三）天の潤ひ（徳政に喩ふ）に浴せんとし　（一四）足をつまだつ

悼三屈子兮遭レ厄。沈二玉躬兮湘汨一。何楚國兮難レ化。迄二于今一兮不レ易。士莫レ志二兮羔裘一。競二佞諛一兮讒閲閲。指二正義一兮爲レ曲。訿二璧玉一兮爲レ石。鴟

遭厄

屈子の厄に遭ひて。玉躬を湘汨に沈めしを悼む。何ぞ楚國の化し難き。今に迄るまで易らず。士羔裘(一)に志す莫く。佞諛を競ひて讒閲閲たり。正義を指して曲れりとなし。璧玉を訿りて石となし。鴟鴞華屋に遊び。鵕鸃柴蔟に棲み。起つて奮迅して奔走し。(二)羣小に違ひて謑詬せらる。青雲に載りて上昇し。(三)昭明の處る所に適く。天衢を躡みて長驅し。(四)九陽に踵りて戲蕩し。雲漢を越えて南に濟り。余が馬に(五)河鼓に秣ひ。霄霓紛として晻翳し。(六)參辰回りて(七)顚倒す。

憫上

哀世兮睩睩。諓諓兮嗌喔。
衆多兮阿媚。骫靡兮成俗。
貪枉兮黨比。貞良兮煢獨。
鵠竄二兮枳棘一。鵜集二兮帷幄一。
蘮蕠兮靑蔥。槀本兮萎落。
覩二斯兮僞惑一。心爲兮隔錯。
逡二巡兮圃藪一。率二彼兮畛陌一。
川谷兮淵淵。山岊兮硌硌。
叢林兮崯崯。株榛兮岳岳。

哀む世の睩睩として。諓諓嗌喔たるを。(一)衆多く阿媚し。骫靡俗を成す。(二)貪枉黨比し。貞良煢獨なり。鵠枳棘に竄れ。鵜帷幄に集り。蘮蕠靑葱し。槀本萎落し。斯の僞惑を覩て。心爲に隔錯す。(三)圃藪に逡巡し。(四)彼の畛陌に率ふ。川谷淵淵たり。(五)山岊硌硌たり。(六)叢林崯崯たり。(七)林榛岳岳たり。(八)霜雪漼溰たり。氷凍洛澤たり。東西南北。歸り薄る所罔し。枯樹に庇廕し。巖石に匍匐し。(九)蹠踞して寒扃數し。(一〇)獨處して志申びず。年齒盡きて命迫促し。魁壘擠摧して常に困辱す。(一一)憂を含み老を強ひて愁みて樂なし。鬚髮薴顇して顠鬢白し。(一二)靈澤を思ひて膏沐を一にし。(一三)蘭英を懷きて瓊若を把り。天明を待ちて立ちて躑躅す。(一四)雲濛濛たり電儵爍たり。孤鴟驚きて鳴くこと呴呴たり。思怫鬱として肝切剝し。忿として悁悒して孰にか訴へ告けん。

(一) 讒に諂りて顔を容る　(二) 面柔俗を成す　(三) 心亂れて性を失ふ　(四) 山野田間に徘徊し　(五) 深き貌　(六)

濵ニ滄海一兮東遊。沐ニ盥浴兮天池一。訪ニ太昊兮道要一。云靡レ貴ニ兮仁義一。志欣樂兮反征。就ニ周文兮邠岐一。乗ニ玉英一兮結レ誓。日欲レ暮兮心悲。惟天祿兮不レ再。背ニ我信一兮自違。踰ニ隴堆一兮渡レ漠。過ニ桂車兮合黎一。赴ニ崑山一兮馽レ騄。從レ卬遨兮棲遲。吮ニ玉液一兮止レ渴。齧ニ芝華一兮療レ饑。居ニ嵺廓一兮尠レ疇。遠梁昌兮幾迷。望ニ江漢兮濩渃一。心緊絭兮傷懷。時暆暆兮且レ旦。塵漠漠兮未レ晞。憂不レ暇ニ兮寢食一。吒増レ歎兮如レ雷。

滄海を濵りて東に遊び。天池に沐盥浴し。太昊に(一)道要を訪ふ(二)。云く仁義より貴きは靡しと。志欣樂して反り征き。周文に(三)邠岐に就き。玉英を乗りて誓を結ぶ。日暮れんと欲して心悲む。惟天祿(四)は再びせず。我が信に背くに自ら違ふなり。隴堆を踰えて漠を渡り。桂車と合黎とを過ぎ。崑山に赴きて(六)騄を馽ぎ。卬に從ひ遨びて棲遲す。玉液を吮ひて渇を止め。芝華を齧みて饑を療す。(七)嵺廓に居りて疇尠し。遠く(八)梁昌して幾たびか迷ふ。江漢の(九)濩渃を望み。(一〇)心緊絭して傷懐す。(一一)時暆暆として且に旦けんとし。塵漠漠として未だ晞えず(一二)。憂へて寢食に暇あらず。吒して歎を増して雷の如し。

(一) 東方の神 (二) 天道の祕要を問ふ (三) 文王に邠岐(周の本國)に就き (四) 祿は再び返らず (五) 忠信に背くは、我が本心に違ふなり (六) 駿馬の名 (七) 淋しき地に居て、伴侶なく (八) 據るべき所を失ひ、幾たびか迷ふ (九) 大なるを望み (一〇) 心結ぼれ傷む (一一) 光明未だ發ならず (一二) 霜深くして消えず

狐狸兮徽徽。哀吾兮介特、獨處兮罔依。螻蛄兮鳴東、蟊蠽兮號西。蛓緣兮我裳、蠋入兮我懷。蟲豸兮夾余、惆悵兮自悲。佇立兮忉怛。心結縎兮折摧。

周徘徊兮漢渚。求水神兮靈女。嗟此國兮無良。媒女詘兮謰謱。鴳雀列兮譁讙。鴝鵒鳴兮聒余。抱昭華兮寶璋。欲衒鬻兮莫取。言逝邁兮北徂。叫我友兮配耦。日陰曀兮未光。闚睄霓兮靡睹。紛載驅兮高馳。將諮詢兮皇羲。遵河皐兮周流。路變易兮時乖。

疾世

周く漢渚を徘徊す。水神と靈女とを求む。(一)此の國の良なく。媒女詘して謰謱たるを嗟く。鴳雀列りて譁讙し。(二)鴝鵒鳴いて余を聒しくす。(三)昭華と寶璋とを抱き。衒鬻せんと欲するも取る莫し。言に逝き邁ぎて北に徂く。(四)我が友を叫びて配耦せん。日陰曀して未だ光さず。(五)睄霓を闚ふに睹る靡し。紛として載ち驅りて高く馳せ。(六)將に皇羲に諮詢せんとす。河皐に遵つて周流し。(七)路變易して時乖く。

(一) 楚國に良臣なく、なかだちの者正しからざるを歎く (二) 小鳥羣れ噪しき如く、讒人余を苦しむ (三) 美玉を抱き、賣らんとすれども買ふものなし(忠諫すれども用ひられざるに喩ふ) (四) 友を尋ねてともに遊ばんとす (五) 暗き中をうかがへども、何物も見えず (六) 伏羲に問ひ、自ら安んぜんとす (七) 志を得ず、空しく時に背く

朱紫兮雜亂。曾莫二兮別レ諸。倚二此兮巖穴一。永思兮窈悠。嗟二懷兮眩惑。用レ志兮不レ昭。將下喪二兮玉斗一。遺中失兮鈕樞上。我心兮煎熬。惟是兮用憂。集二嘉兮九句一。退顧二兮彭務一。擬二斯兮二蹤一。未レ知二兮所レ投。

退いて(七)彭務を顧る。斯の(八)二蹤に擬せんとするも。未だ投ずる所を知らず。

㊀ 令尹（楚官）徒に妄語し ㊁ 羣僚、辨佞を競ふ ㊂ 一國並に亂る ㊃ 小草はびこり、香草枯れ ㊄ 君子（朱）小人（紫）亂れ雜る ㊅ 政衰へ賢臣を失はんとするにたとふ ㊆ 彭咸務光（古の君子）の行を思ふ ㊇ 二賢の行に傚はんとするもなほ行くべき所を知らず

謠二吟兮中壄一。上察二兮璇璣一。大火兮西睨。攝提兮運低。雷霆兮硠磕。雹霰兮霏霏。奔電兮光晃。涼風兮愴悽。鳥獸兮驚駭。相從兮宿棲。鴛鴦兮噰噰。

中壄に謠吟し。上璇璣を察すれば。(一)大火西に睨し。攝提運ること低し。雷霆硠磕として。雹霰霏霏たり。奔電光晃として。涼風愴悽たり。鳥獸驚駭し。相從ひて宿棲す。(二)鴛鴦噰噰たり。狐狸嶽嶽たり。吾が介特にして。獨處して依る罔きを哀む。(三)螻蛄東に鳴き、蟊蠽西に號び、蛓我が裳に緣り。蠋我が懷に入り。蟲豸余を夾み、惆悵して自ら悲む。(四)佇立して忉怛し、心結縎して折摧す。

㊀ 天上を望めば、大火星西流し、斗尾低く運る ㊁ 鴛鴦和鳴し、狐狸相隨ふ ㊂ 蜀、山野に居り、衆蟲と伍をなす ㊃ 佇立して歎息し、心結ぼれ氣折れ摧く

活復蘇。虎兕爭兮於廷中。豺狼鬪兮我之隅。雲霧會兮日冥晦。飄風起兮揚塵埃。走鬯羑兮作東西。欲竄伏兮其焉如。念靈閨兮奧重深。願竭節兮隔無由。望舊邦兮路委隨。憂心悄兮志勤劬。魂煢煢兮不遑寐。目眩眩兮寤終朝。

にか如かん。(七)靈閨を念ふも奧重深なり。輒ち節を竭さんことを願ふも隔てて由なし。舊邦を望めば(八)路委隨たり。憂心悄として志勤劬し。魂煢煢として寐ぬるに遑あらず。目眩眩として寤めて(九)終朝す。

(一) 周の太公望呂尙と殷の傅說 (二) 楚の大夫費無忌と呉の太宰伯嚭 (三) 楚と郢(郢は楚の都なり) (四) 憤懣して死せんとし、また後に蘇る (五) 虎兕の如き姦臣、朝廷に爭ふ (六) 多くの小人、我が傍にあり (七) 懷王の居を思ふも、奧深くして達するを得ず (八) 路遠し (九) 夜の明くるまで寐ねず

令尹兮謷謷。羣司兮譨譨。哀哉兮同淈。上下兮淈流。菽藟兮蔓衍。芳䕡兮挫枯。

怨上

(一)令尹謷謷たり。(二)羣司譨譨たり。哀しいかな淈淈として。(三)上下流を同じうす。(四)菽藟蔓衍し。芳䕡挫枯し。(五)朱紫雜亂し。曾て諸を別つ莫し。此巖穴に倚り。永く思ひて窈悠たり。懷の眩惑して。志を用ふる昭ならざるを嘆く。將に玉斗を(六)喪ひ。鉏樞を遺失せんとす。我が心煎熬し。惟是れ用つて憂ふ。九旬に集募し。

心煩憒兮意無聊。嚴載駕兮出戲遊。周八極兮歷九州。求軒轅兮索重華。世既卓兮遠眇眇。握佩玖兮中路躇。羨皐繇兮建典謨。懿風后兮受瑞圖。愍余命兮遭六極。委玉質兮於泥塗。遽傽遑兮驅林澤。步屛營兮行丘阿。車軌折兮馬虺頽。惷悵立兮涕滂沱。思丁文兮聖明哲。哀平差兮迷謬愚。

繇の典謨を建てしを羨み。(五)風后の瑞圖を受けしを懿とし。(六)余が命の六極に遭ひ。玉質を泥塗に委するを愍む。遽に傽遑して林澤に驅り。歩して屛營して丘阿に行く。(七)車軌折れて馬虺頽す。惷悵して立てば涕滂沱たり。(八)文の聖明哲に丁らんことを思ひ。(九)平差の謬愚に迷へるを哀む。

(一)屈原に代りていふ　(二)そしりを蒙り　(三)黃帝舜帝の如き聖者を求む　(四)美德を懷きて、空しくさまよふに喩ふ(佩玖は佩玉なり)　(五)風后(黃帝の師)天瑞受けしを羨み　(六)放逐せられ、美質を抱きて辱めらるゝを憐む　(七)馬病み斃る　(八)文王の時に遇はんことを願ひ　(九)楚の平王、吳王夫差の迷へるを哀む(平王は忠臣伍奢を殺し、夫差は奢の子伍子胥を殺せり)

呂傅擧兮殷周興。忌嚭專兮郢吳虛。仰長歎兮氣餲結。悒殟絶兮

呂傅擧げられて殷周興り、(一)忌嚭専にして郢吳虛し。仰いで長歎して氣餲結し。(二)悒殟絶して活復た蘇。(四)虎兕廷中に爭ひ。(五)豺狼我が隅に瑚ふ。(六)雲霧會して日冥晦。(四)飄風迴りて塵埃を揚ぐ。走り罜嵣して東西を作し。竄伏せんと欲するも其れ焉

悲兮愁哀兮憂。天生ㇾ我兮當ニ闇時一。被ニ諑譖一兮虛獲ㇾ尤。

卷之十七

九思第十七

（王）九思は王逸の作りし所なり。屈原終沒してより後、忠臣介士、遊覽学者、離騷九章の文を讀み、愴然として心ために悲感し、その節行を高しとし、その麗雅を妙とせざるはなし。劉向王褒の徒に至るまで、咸その義を嘉し、賦を作り辭を騁せ、以てその志を讚す、則ち皆譜錄に列り、世世相傳ふ。逸屈原と、土を同じうし國を共にし、悼傷の情凡と異なるあり。竊かに向褒の風を慕ひ、頌一篇を作り、號して九思と曰ひ、以てその辭を裨ふ。未だ解說あらず、故に聊か誼を訓ず。

逢尤

悲み愁ひ哀み憂ふ。天我を生みて闇時に當る。(一)諑譖を被りて虛しく尤を獲。心煩憒して意聊むなし。嚴載駕して出でて戲遊す。八極を周くして九州を歷。(二)軒轅を求め重華を索む。世既に卓く遠く眇眇たり。(三)佩玖を握りて中路に躊ぶ。阜

漢渚一沸淫淫兮。鍾牙巳死誰作ㇾ聲兮。纖阿不ㇾ遇焉舒ㇾ情兮。曾哀悽欷心離離兮。還二顧高丘一泣如ㇾ灑兮。

さん。纖阿遇はずんば焉んぞ情を舒べん。曾ねて哀み悽欷して心離離たり。(五)高丘を還顧すれば泣灑ぐが如し。

㊀ 倘佯の山、坂土番黒なり ㊁ 漢水のほとりにさまよへば ㊂ 鍾子期も伯牙もすでに死し、よく琴を彈くものなし ㊃ 古の名高き御者 ㊄ 心破れ裂く

遻余車於南郢兮、復往軌於初古。道修遠其難遷兮、傷余心之不能已。背三五之典刑兮。絕洪範之辟紀、播規集以背度兮。錯權衡而任意。

操繩墨而放弃兮。傾容幸而侍側。甘棠枯於豐草兮。藜棘樹於中庭。西施斥於北宮兮。仳倠侍於彌楹。烏獲戚而驂乘兮、燕公操於馬圉。蒯瞶登於清府兮。咎繇棄於塈外。蓋見玆以永歎兮。欲登階而狐疑。乘白水而高騖兮。因徙弛而長詞。

繩墨を操りて放弃せられ。(一)傾容幸せられて側に侍す。(二)甘棠豐草に枯れ。藜棘中庭に樹ち。西施北宮に斥けられ。(三)仳倠彌楹に倚る。(四)烏獲戚へて驂乘し。燕公馬圉を操る。(五)蒯瞶清府に登り。咎繇塈外に棄てらる。蓋し玆を見て以て永歎し。(六)階に登らんと欲して狐疑す。白水に乘りて高く騖せ。(七)因りて徙弛して長く詞す。

(一)小人愛せられて君側に侍す　(二)甘棠の木、茂れる草の中に枯る　(三)醜女(小人に喩ふ)左右に侍す　(四)烏獲(力士)車に乘り、邵公(燕に封ぜらる)馬を養ふ　(五)不孝の子蒯瞶清府に登り、賢人皐陶野外に棄てらる。(蒯瞶は衞の靈公の太子にして親にそむき、繼母を殺さんとせし人なり)　(六)身を進めんとして疑ひためらふ　(七)退きて長歎す

歎曰。倘佯壚阪沼水深兮。容與

歎に曰く。(一)倘佯壚阪沼水深し。(二)漢渚に容與すれば湍深湲湲たり。(三)鍾牙已に死す、誰か聲を作

以湫戾。悲二余生之無一レ歡兮。愁倥二傯於山陸一。且徘二徊於長阪一兮。夕彷徨而獨宿。髮披披以鬤鬤兮。躬劬勞而瘏悴。魂侹侹而南行兮。泣霑レ襟而濡レ袂。心嬋媛而無レ告兮。口噤閉而不レ言。違二郢都之舊閭一兮。回二湘沅一而遠遷。

(一)高く、樹木日を蔽ふ　(二)雲切き、巻き戻る　(三)山野に困苦す　(四)髮の解け亂るゝ貌　(五)苦しみ、衰ふ　(六)悽しく南に行く　(七)心傷むも告ぐる所なし

念二余邦之橫陷一兮。宗鬼神之無一レ次。閔二先嗣之中絶一兮。心惶惑而自悲。聊浮二遊於山陝一兮。步周二流於江畔一。臨二深水一而長嘯兮。且倘佯而氾觀。興二離騷之微文一兮。冀二靈修之壹悟一。

(一)余が邦の橫陷して。宗鬼神の次なきを念ひ。先嗣の中絶するを閔み。心惶惑して自ら悲む。聊か山陝に浮遊し。(二)步して江畔に周流し。深水に臨んで長嘯し。且く倘佯して氾觀す。(三)離騷の微文を興し。靈修の壹たび悟らんことを冀ふ。(四)余が車を南郢に還し。往軌を初古に復せんとす。道修遠にして其れ遷り難し。余が心の已む能はざるを傷む。(五)三五の典刑に背き。洪範の辟紀を絶て。規槷を播てて以て度に背き、(六)權衡を錯きて意に任す。

(一)祖國危く、鄕廟の神次序を失ひて祀られず　(二)山陬に遊ぶ　(三)微妙なる離騷の文を興す　(四)車を舊路に返さんとす　(五)三皇五帝の常法に背き、洪範(尚書の篇名)の法紀を棄て　(六)曲直輕重を考へず、たゞ私意を恣にす

歎曰。嘉皇既歿終不返兮。山中幽險郢路遠兮。讒人諓諓孰可愬兮。征夫罔極誰可語兮。行唫累欷聲嚁嚁兮。懷憂含慼何侘傺兮。
冥冥深林兮。樹木鬱鬱。山參差以嶄巖兮。阜杳杳以蔽日。悲余心之悁悁兮。目眇眇而遺泣。風騷屑以搖木兮、雲吸吸

歎に曰く。
(一)嘉皇既に歿して終に返らず。山中幽險にして郢路遠し。讒人諓諓たるも孰にか(二)愬ふべき。征夫(三)罔極きも誰にか語るべき。行唫累に欷きて聲嚁嚁たり。
(四)憂を懷き慼を含み何ぞ侘傺する。

(一)懷王已に死す　(二)讒言の貌　(三)罔極りなきをいふ　(四)憂へいたみてとゞまる

思古

冥冥たる深林。樹木鬱鬱たり。山參差として以て嶄巖。(一)阜杳杳として以て日を蔽ふ。余が心の悁悁たるを悲しみ。目眇眇として泣を遺す。風騷屑として以て木を搖し。雲吸吸として以て湫戾す。余が生の歡なきを悲しみ。愁へて(三)山陸に恍惚す。旦に(二)長阪に徘徊し。夕に仿偟して獨宿す。髮披披として以て(四)鬤鬤。躬(五)劬勞して瘁悴す。魂俇俇として南に征き。泣襟を霑し袂を濡す。(七)心嬋媛として告ぐるなく。口(六)噤閉して言はず。郢都の舊閭を違り。湘沅を回りて遠く遷る。

行夫將而攻レ城。

莞芎棄二於澤洲一兮。瓟蠡蠹二於筐簏一。麒麟奔二於九皐一兮。熊羆羣而逸レ囿。折二芳枝與二瑤華一兮。樹二枳棘與二薪柴一。掘二荃蕙與二射干一兮。耘二藜藿與二蘘荷一。惜今世其何殊兮。遠近思而不レ同。或沈淪其無レ所レ達兮。或清激其無レ所レ通。哀二余生之不一レ當兮。獨蒙レ毒而逢レ尤。雖二謇謇以申一レ志兮。君乖差而屏レ之。誠惜二芳之菲菲一兮。反以レ茲爲レ腐兮。懷二椒聊之藹藹一兮。乃逢レ紛以罹レ詬。

(一)莞芎澤洲に棄てられ。瓟蠡筐簏に蠹す。麒麟九皐に奔り。熊羆羣りて囿に逸す。(二)芳枝と瑤華とを折り。枳棘の薪柴とを樹ゑ。荃蕙と射干とを掘り。藜藿と蘘荷とを耘る。惜むらくは(三)今の世其れ何ぞ殊なる。(四)遠近思うて同じからず。或は沈淪して其れ達する所なく。或は清激して其れ通ずる所なし。余が生の當らざる。獨り毒を蒙りて尤に逢ふを哀む。(五)謇謇として以て志を申ぬと雖も。君乖差して之を屏く。誠に芳の菲菲たる。反つて玆を以て腐となすを惜む。(六)椒聊の藹藹たるを懷き。乃ち紛に逢ひ以て詬に罹る。

(一)香草を澤邊に棄て、瓠瓢の類を筐(方器)簏(圓器)に藏む (二)香草を掘り棄て、賤草を植う (三)今世の人、賢愚性を異にす (四)思慮或は遠く、或は近く、智謀同じからず (五)忠誠を盡し志を述ぶるも、君そむき斥く (六)香草の芳しきを懷く(誠意を抱くに喩ふ)

遐。遂下佚於後堂兮。迎宓妃於伊雒。刜讒賊於中廇兮。選呂管於榛薄。叢林之下無怨士兮。江河之畔無隱夫。三苗之徒以放逐兮。伊皐之倫以充廬。

皐陶の如き賢人を集む

今反表以爲裏兮。顚裳以爲衣。戚宋萬於兩楹兮。廢周邵於遐夷。却騏驥以轉運兮。騰驢贏以馳逐。蔡女黜而出帷兮。戎婦入而綵繡服。慶忌囚於阱室兮。陳不占戰而赴圖。破伯牙之號鐘兮。挾人箏而彈緯。藏瑉石於金匱兮。捐赤瑾於中庭。韓信蒙於介冑兮。

今表を反して以て裏となし。裳を顚して以て衣と爲す。(一)宋萬を兩楹に戚しみ。(二)周邵を遐夷に廢し。騏驥を却けて以て轉運し。驢贏を騰けて以て馳逐す。(三)蔡女黜けられて帷を出で。戎婦入りて綵繡服す。(四)慶忌阱室に囚はれ。陳不占戰つて赴き圍む。(五)伯牙の號鐘を破り。人の箏を挾んで緯を彈ず。(六)瑉石を金匱に藏し。赤瑾を中庭に捐つ。(七)韓信介冑を蒙り。行夫將として城を攻む。

(一) 宋萬(宋閔公の臣)の如き弑臣を近づけ親しみ (二) 周公・召公の如き賢き親族を遠ざけ逐ふ (三) 蔡國の女(賢女)戸外に斥けられ、戎狄の女入りて美服す (四) 慶忌(吳の公子)の如き勇士を幽囚し、陳不占(齊の臣)の如き怯者を戰はしむ (五) 名工伯牙の號鐘(琴の名)を破り、凡人の小箏を執り彈く(緯は張りたる絃) (六) 瑉石(玉に次ぐもの)を金の匱に納め、美玉を庭中に捨つ (七) 韓信(漢の勇將)甲冑を被りて宿衞を守り、行伍の凡夫、將として敵城を攻む

若ㇾ流兮。

昔皇考之嘉志兮。喜ㇾ登ㇾ能而亮ㇾ賢。情純潔而罔ㇾ薉兮。姿盛質而無ㇾ愆。放二佞人與一諂諛一兮。斥三讒夫與二便嬖一。親二忠正之悃誠一兮。招三貞良與二明智一。心溶溶其不ㇾ可ㇾ量兮。情澹澹其若ㇾ淵。回二邪辟一而不ㇾ能ㇾ入兮。誠願ㇾ藏而不ㇾ可ㇾ

愍命

(一)昔皇考の嘉志。能を登して賢を亮するを喜ぶ。情純潔にして薉罔く。姿盛質にして愆なし。佞人と諂諛とを放ち。讒夫と便嬖とを斥く。(二)忠正の悃誠を親しみ。貞良と明智とを招く。(三)心溶溶として其れ量るべからず。情澹澹として其れ淵の若し。(四)邪辟を回けて入る能はず。(五)誠に藏を願ひて遷すべからず。(六)下秩を後堂に逐ひ。宓妃を伊雒に迎へ。(七)讒賊を中霤に剃り。呂管を榛薄に選び。(八)叢林の下怨士なく。江河の畔隱夫なく。(九)三苗の徒は以て放逐し。伊皐の倫は以て廬に充てたり。

(一)我が父嘉德あり、能ある者を擧げ、賢人を愛せり (二)忠臣正士の厚き誠を親しむ (三)心廣くして量るべからず、情深くして淵の如し (四)邪辟の言を避け、小人入ることを得ず (五)君に事へんことを願ひ、心永く變らず (六)賤しき妾御を後堂に斥け、神女宓妃を水に迎ふ (七)讒者を堂中に斬り、賢士(太公望、管仲の如きもの)を草野の中に選む (八)山林江湖の中に、怨み怒るものなし (九)三苗(堯の佞臣)の如き惡人を逐ひ、伊尹

韶兮。好遺風之激楚。潛周鼎於江淮兮。爨土鬵於中宇。且人心之有舊兮。而不可保長。邅彼南道兮。以征夫宵行。思念郢路兮。還顧睠睠。涕流交集兮。泣下漣漣。

且つ人心の舊ある。(三)而も保長すべからず。彼の南道を邅り。(四)以て征夫宵行す。郢路を思念し。還顧睠睠して。涕流交集し。泣下りて漣漣たり。

(一) 虞舜簫韶の正樂を惡み、淫佚激楚の俗樂を好む (二) 寶鼎を江淮の水中に沈め、土釜を堂上に置きて炊ぐ (三) 賢人君子の志す所古法舊則あり (四) 江南の道をめぐり、夜を日に繼いで行く

歎曰。登山長望中心悲兮。菀彼青青泣如頹兮。留思北顧涕漸漸兮。折銳摧矜凝氾濫兮。念我煢煢魂誰求兮。僕夫慌悴散

歎に曰く。山に登り長く望み中心悲しむ。菀たる彼の青青泣くこと頹るゝが如し。(一)留り思ひ北を顧み涕漸漸たり。銳を折り矜を摧き凝りて氾濫す。(二)念ふ我が煢煢たる魂誰をか求めん。僕夫慌悴し散じて流るゝが若し。(三)

(一) 青く茂れる草木を見、傷み悲しみ、涙崩れ落つ（菀は盛なる貌） (二) 精銳の志を折り、忠直の心を屈し、俗人と共に浮沈す (三) 僕御の人傷み悲み逃れ去ること流水の如し

不レ可レ得。欲二還レ志而改一レ操兮。心紛結而未レ離。外彷徨而遊覽兮。內惻隱而含レ哀。聊須臾以時忘兮。心漸漸其煩錯。願假レ簧以紓レ憂兮。志紆鬱其難レ釋。歎二離騷一以揚レ意兮。猶未レ殫二於九章一。長噓吸以於悒兮。涕横集而成レ行。傷二明珠之赴レ泥兮。魚眼璣之堅藏一。同三駑贏與二乘駔一兮。雜三斑駮與二闒茸一。葛藟虆二於桂樹一兮。鴟鴞集二於木蘭一。偓促談二於廊廟一兮。律魁放二乎山間一。

臾して以て時に忘るゝも。心漸漸として其れ煩錯す。願くは（七）簧を假りて以て憂を舒べん。志紆鬱して其れ釋き難し。（八）離騷を歎じて以て意を揚ぐれば、（九）猶ほ未だ九章を殫さず。長く噓吸して以て於悒し。涕横集して行を成す。（一〇）明珠の泥に赴き。魚眼璣の堅藏せらるゝを傷み。（一一）駑贏と乘駔とを同じうし。（一二）斑駮と闒茸とを雜ふ。（一三）葛藟桂樹に虆ひ、鴟鴞木蘭に集り、（一四）偓促廊廟に談じ。律魁山間に放たる。

㊀ 鳥の如くに歸らんと欲す ㊁ 三鳥に託し君に忠言を寄せんと ㊂ 鳥の飛び去ること疾く、忠言を託するを得ず ㊃ なほ忠信の念を忘れず ㊄ 山野にさまよひ遊ぶも ㊅ 暫く憂を忘るゝも、漸にして又亂る ㊆ 簧を吹き、憂を忘れんとす（簧は笙の中に舌あるものなり） ㊇ 離騷を吟じ、己の意を揚ぐ ㊈ 未だ九章を讀み盡さざるにまた結ぼる ㊉ 明珠（忠臣）棄てられ、魚眼（佞人）寶重せらる ⑪ 駑馬と駿馬とを同一視し ⑫ 雜色と闒茸とを交ふ ⑬ 惡草、香木にまつはり、貪鳥桂樹に集る ⑭ 小人、朝廷に談じ、賢者山野に放たる

惡二虞氏之簫

（一）虞氏の簫韶を惡み。遺風の激楚を好む。（二）周鼎を江淮に潛め。土鬵に中宇に爨ぐ。

年而不レ復兮。獨煢煢而南行。思ニ余俗之流風一兮。心紛錯而不レ受。遵ニ壄莽一㠯呼レ風兮。步從ニ容於山藪一。巡ニ陸夷之曲衍一兮。幽空虛以寂寞。倚ニ石巖一㠯流レ涕兮。憂憔悴而無樂。登ニ巑岏一㠯長企兮。望ニ南郢一而闚レ之。山修遠其遼遼兮。塗漫漫其無レ時。聽ニ玄鶴之晨鳴兮。于ニ高岡之峨峨一。獨憤積而哀娛兮。翔ニ江洲一而安歌。

に遵ひて㠯て風に呼び、歩して山藪に從容す。(四)陸夷の曲衍を巡れば、幽空虛にして以て寂寞たり。石巖に倚りて㠯て涕を流し。憂へて憔悴して樂なし。(五)巑岏に登りて㠯て長く企て、南郢を望んで之を闚ふ、山修遠にして其れ遼遼たり。(六)塗漫漫として其れ時なし。玄鶴の晨に鳴き。高岡の峨峨たるに于てするを聽く。獨り憤積して哀娛し、江洲に翔りて安歌す。

(一) 孤獨の貌 (二) 楚の風俗の戀しきを思ひ (三) 偽りを受くるを得ず (四) 大阜衍澤をめぐれば (五) 阻しき山に登り、足をそばだつ (六) 路遠く、歸る時なし

三鳥飛飛以自レ南兮。覽ニ其志一而欲レ北。願レ寄ニ言於三鳥一兮。去飄疾而

(一)三鳥飛び飛んで以て南よりす。其志を覽て北せんと欲す。(二)言を三鳥に寄せんことを願ふも、(三)去ること飄疾にして得べからず。志を遷して操を改めんと欲するも、心紛結して(四)未だ離れず。(五)外彷徨して遊覽するも。內惆隱して哀を含む。(六)聊か須

進レ之。心憤恨㠯寃結兮。情外錯㠯曼憂。搴二薜荔於山野一兮。采二橪枝於中州一。望二高丘一而歎涕兮。悲吸吸而長懷。孰契契而委レ棟兮。日晻晻而下頹。

亂れて鷹の如く (三) 僅かなる忠節を盡さんとするも讒人しきりに妨ぐ、（鳩は小鳥なり、小さき忠節に喩ふ）(四) 時俗に從ひ、衆人ともに浮沈せんとし、なほためらひて進まず (五) 香草（薜荔橪枝）を山野に採り、善を修めて忘らず (六) 誰か國を憂ひ、君の補けとなるものぞ

歎曰。油油江湘長流汩兮。挑揄揚波盪迅疾兮。憂心展轉愁怫鬱兮。寃結未レ舒長隱忿兮。丁レ時逢レ殃孰可二奈何一兮。勞心悁悁涕滂沱兮。

歎に曰く。油油たる江湘長流汩たり。挑揄揚波盪して迅疾なり。憂心展轉して愁へて怫鬱たり。寃結未だ舒びず長く隱忿す。時に丁り殃に逢ふ孰か奈何すべき。勞心悁悁として涕滂沱たり。

悲二余心之悁悁一兮。哀二故邦之逢レ殃。辭九

憂苦

余が心の悁悁たるを悲しみ。故邦の殃に逢ふを哀しむ。辭して九年にして復らず。(一)獨り煢煢として南に行く。(二)余が俗の流風を思ひ、(三)心紛錯して受けず。壄莽

雖レ暎兮。荊和氏之泣レ血。吳子胥之抉レ眼兮。王子比干之橫廢。欲二卑レ身而下レ體兮。心隱惻而不レ置。方圜殊而不レ合兮。鉤繩用而異レ態。欲レ竢レ時於須臾兮。日陰曀其將レ暮。時遲遲其日進。年忽忽而日度。

て其れ將に暮れんとす。時遲遲として其れ日に進み。年忽忽として日に度る。

(一) 王子喬に從ひて登僊せんとし、また申徒狄、世を避けて水に赴けるを見る (二) 伯夷許由の行、純潔にして美なるが如し (三) 皆九章に解す (四) 身を卑くし、衆俗に混ぜんとするも (五) 心痛み、忠正の行を棄つるを得ず (六) 方と圓とは形異る (七) 鉤は曲り繩は直く、その態を異にせり (八) 時の來るを待たんとするも、君の德暗く、年又老いんとせり（日を君に喩ふ）

妄周容而入レ世兮。內距閉而不レ開。竢二時風之清激一兮。愈氛霧其如レ塺。進二雄鳩之耿耿一兮。讒紛紛而蔽レ之。默順レ風㠯偃仰兮。尚由由而

(一)妄に周容して世に入る。內距閉して開けず。(二)時風の清激を竢てば。愈〻氛霧して其れ塺の如し。(三)雄鳩の耿耿を進むれば。讒紛紛として之を蔽ふ。(四)默して風に順ひて㠯て偃仰す。尚ほ由由として之を進む。心懭悢として㠯て冤結し。情舛錯して㠯て曼憂す。(五)薜荔を山野に搴げ。菸枝を中州に采り。高丘を望んで歎涕し。悲吸吸として長く懷ふ。(六)孰か契契として棟を委せん。日晻晻として下頹す。

(一) 妄に人に阿り、世に容れられんとするも、心の不快なるに堪へず (二) 時俗の清く改まるを待つも、いよ〳〵

悴。撥諂諛而匡邪兮。切淟涊之流俗。盪渨涹之姦咎兮。夷蠢蠢之溷濁。懷芬香而挾蕙兮。佩江離之婓婓。擥申椒與杜若兮。冠浮雲之峨峨。登長陵而四望兮。覽芷圃之蠡蠡。遊蘭皋與蕙林兮。睨玉石之嵾嵯。揚精華目眩燿兮。芳鬱渥而純美。結桂樹之旖旎兮。紉荃蕙與辛夷。芳若茲而不御兮。捐林薄而菀死。羈子僑之犇走兮。申徒狄之赴淵。若夷由之純美兮。介子推之隱山。晉申生之

若とを握り。浮雲の峨峨たるを冠し。長陵に登りて四望し。(三)芷圃の蠡蠡たるを覽る。蘭皋と蕙林とに遊び。玉石の嵾嵯たるを睨し。精華を揚げて目て(四)眩燿し。芳鬱渥として純美なり。桂樹の(五)旖旎たるを結び。荃蕙と辛夷とを紉ぶ。芳茲の(六)若くにして御せられず。林薄に捐てられて菀死す。

(一)呼ぶ聲 (二)濁れる世俗を正し、穢れたる姦慝をきよむ (三)列をなす貌 (四)光明に目を眩す (五)茂れる貌 (六)此の如くして用ひられず

(一)子僑の犇走を羈り。申徒狄の淵に赴く。(二)夷由の純美なるが若く。(三)介子推の山に隱る。晉の申生の殃に離ふ。荊和氏の血に泣く。吳子胥の眼を抉ぐる。王子比干の横廢する。身を卑くし體を下さんと欲せるも。(五)心隱惻して置かず。(六)方圓殊にして合はず。(七)鉤繩用つて態を異にす。(八)時を竢たんと欲して須臾す。日陰曀し

惟一日諸諸兮。風邑邑而蔽レ之。日暾暾其西舍兮。陽炎炎而復顧。聊假レ日以須臾兮。何騷騷而自レ故。

歎曰。

譬彼蛟龍乘レ雲浮兮。汎淫澒溶紛若レ霧兮。潺湲轇轕雷動電發馺高舉兮。升レ虛淩レ冥沛レ濁浮レ清入二帝宮一兮。搖レ翹奮レ羽馳レ風騁レ雨遊二無窮一兮。

歎に曰く。

譬へば彼の蛟龍の雲に乘り浮ぶごとく。汎淫澒溶紛として霧の若し。潺湲轇轕雷動電發馺高く舉る。虛に升り冥を淩ぎ濁を沛ぎ清に浮び帝宮に入り。翹を搖かし羽を奮ひ風を馳せ雨を騁せて無窮に遊ばん。

惜賢

覽二屈氏之離騷一兮。心哀哀而怫鬱。聲嗷嗷以寂寥兮。顧二僕夫之憔

屈氏の離騷を覽れば。心哀哀として怫鬱す。聲嗷嗷として以て寂寥。僕夫の憔悴するを顧み。諂諛を撥めて邪を匡し。淟涊の流俗を切し。渨涹の姦咎を盪し。蠢蠢たる溷濁を夷ぐ。芬香を懷きて蕙を挾み。江蘺の菲菲たるを佩び。申椒と杜

鳥飛而送迎兮。騰群鶴於瑤光。排帝宮與羅囿兮。升懸圃以眩滅。結瓊枝以雜佩兮。立長庚以繼日。淩驚雷以軼駭電兮。綴鬼谷於北辰。鞭風伯使先驅兮。囚靈玄於虞淵。遡高風以徘徊兮。覽周流於朔方。就顓頊而陳詞兮。考玄冥於空桑。旋車逝於崇山兮。奏虞舜於蒼梧。濟楊舟於會稽兮。就申胥於五湖。見南郢之流風兮。殞余躬於沅湘。望舊邦之黯黮兮。時溷濁猶未央。懷蘭茝之芬芳兮。妒被離而折之。張絳

に遡りて以て徘徊し。朔方に覽周流す。顓頊に就きて詞を陳べ。（九）玄冥を空桑に考へ。車を旋して崇山に逝き。虞舜に蒼梧に奏し。楊舟を會稽に濟し。申胥に五湖に就き。南郢の流風を見。余が躬を沅湘に殞さん。舊邦の黯黮たるを望めば。時（一〇）溷濁なるも猶ほ未だ央きず。蘭茝の芬芳を懷き。（一一）妒被離して之を折く。（一二）絳帷を張りて以て襜襜たるも。（一三）風邑邑として之を蔽ふ。日暾暾として其れ西に舍し。陽炎炎として復た顧る。（一四）聊か日を假りて以て須臾せん。何ぞ（一五）騷騷として故に自る。

（一）北極星を中央に舍し、虹旗を建てて指揮せしむ （二）孔雀送迎す （三）鶴羣を從へ、瑤光の星を過ぐ （四）天帝の苑 （五）懸圃の山に升り、眼、眩燿す （六）長庚星を以て日につぎ （七）百鬼を北極星につなぐ （八）太陽の神を虞淵(日の入る處)に囚ふ （九）太陰の神と空桑山に遇ひ、何故に賢人を害するかを問ふ（太陰は刑罰を司る神なり、考は考問なり） （一〇）德化なほ盡きず （一一）忠信の心を抱くも、小人妒みて禍をなす （一二）王、朱帷を垂れて鮮明なるも （一三）風信弱く、その德蔽はる(邑々は弱き貌) （一四）暫く餘年を假り心のまゝに遊ばんと （一五）心憂ひて舊の如し

太清。欲與天地參壽兮。與日月而比榮。登崑崙而北首兮。悉靈圉而來謁。選鬼神於太陰兮。登閶闔於玄闕。回朕車俾西引兮。褰虹旗於玉門。馳六龍於三危兮。朝西靈於九濱。結余軫於西山兮。橫飛谷以南征。絕都廣以直指兮。歷祝融於朱冥。枉玉衡於炎火兮。委兩館於咸唐。貫澒濛以東朅兮。維六龍於扶桑。

を絶りて以て直に指し。(一二)祝融を朱冥に歴へ。(一三)玉衡を炎火に枉げ。委に兩び咸唐(一四)に館す。(一五)鴻濛を貫きて以て東に朅り。六龍を扶桑に維ぐ。

㈠苦しめらるゝも心を變へず　㈡高明盛大の德を養ひ、衆俗に異る　㈢高き貌　㈣大なる貌　㈤崑崙山諸神、悉く來り謁ゆ　㈥天門に登り天闕に入る　㈦虹の旗を玉門山にかゝぐ　㈧三危山に馳す　㈨西方の神を召し、大海九曲の濱に會す　㈩日の行く所の道　(一一)西南の廣野の名、方三百里　(一二)南方の神を朱冥の野に訪ふ　(一三)玉車　(一四)再び咸池に宿る　(一五)濛氣を衝く

周流覽於四海兮。志升降以高馳。徵九神於回極兮。建虹采以招指。駕鸞鳳以上遊兮。從玄鶴與鷦明。孔

周く四海を流覽し。志升降して以て高く馳す。(一)九神を回極に徵し。虹采を建てて以て招指し。鸞鳳に駕して以て上り遊び。玄鶴と鷦明とを從ふ。(二)孔鳥飛んで送迎し。(三)羣鶴を瑤光に騰ぐ。(四)帝宮と羅囿とを排し。(五)懸圃に升りて以て眩滅す。瓊枝を結んで以て雜佩し。(六)長庚を立てて以て日に繼ぎ。驚雷を淩ぎて以て駭電を軼ぎ。(七)鬼谷を北辰に綴け。風伯を鞭ちて先驅せしめ。(八)靈玄を虞淵に囚へ。高風

歎曰。飄風蓬龍埃坲坲兮。屮木搖落時槁悴兮。遭レ傾遇レ禍不レ可レ救兮。長吟永欷涕發發兮。舒レ情歟レ詩冀二㠯自免一兮。頽流下逝身日㠯遠兮。

悲二余性之不レ可レ攺兮。屢懲艾而不レ迻。服二覺晧一㠯殊レ俗兮。貌揭揭㠯巍巍。譬若下王僑之乘レ雲兮。載二赤霄一而淩中

歎に曰く。

飄風蓬龍(一)して埃坲坲たり。屮木搖落して時に槁悴す(二)。傾に遭ひ禍に遇ひて救ふべからず。長吟永欷(三)して涕發發たり(四)。情を舒べ詩を歟べて㠯て自ら免れんことを冀ふ。頽流下逝し身日々に㠯て遠し。

(一)風の強き貌　(二)草木の萎落ち、枯れ衰ふ　(三)長く泣きて　(四)涙止まらず

遠逝

余が性の攺むべからざるを悲しむ。屢々懲艾(一)せらるゝも迻らざるを悲しむ。覺晧(二)に服して㠯て俗に殊なり。貌揭揭(三)として㠯て巍巍たり(四)。譬へば王僑の雲に乘り。赤霄に載りて太清を淩ぐが若し。天地と壽を參し。日月と榮を比せんと欲す。崑崙に登りて北首すれば。靈圉(五)を悉して來り謁す。鬼神を太陰に選み。閶闔(六)に玄闕に登り。朕が車を回して西に引かしめ。虹旗(七)を玉門に褰ぐ。六龍を三危(八)に馳せ。西靈(九)を九濱に朝し。余が軫を西山に結らし。飛谷(一〇)に橫りて㠯て南に征く。都廣(一一)

雪雰雰而薄レ木兮。雲霏霏而隕集。阜隘狹而幽險兮。石嵾嵯以翳レ日。悲二故鄉一而發レ忿兮。去二余邦一之彌久。背二龍門一而入レ河兮。登二大墳一而望二夏首一。

横二舟航一而濟レ湘兮。耳聊啾而懮慌。波淫淫而周流兮。鴻溶溢而滔蕩。路曼曼其無レ端兮。周容容而無レ識。引二日月一以指レ極兮。少須臾而釋レ思。水波遠以冥冥兮。眇不レ睹二其東西一。順二風波一以南北兮。霧宵晦以紛闇。日杳杳以西頹兮。路長遠而窘迫。欲二酌レ醴以娛一レ意兮。蹇騷騷而不レ釋。

舟航を横へて湘を濟れば。耳聊啾として懮慌す。(一)波淫淫として周流し。鴻溶(二)溢として滔蕩す。路曼曼として其れ端なく。(三)周く容容として識るなし。日月を引きて以て極を指し。(四)少須臾して思を釋く。水波遠くして以て冥冥たり。眇として其東西を睹ず。風波に順ひて以て南北すれば。霧宵のごとく晦く以て紛闇なり。日杳杳として以て西に頹れ。路長遠にして窘迫す。(五)醴を酌みて以て意を娛ましめんと欲するも。蹇騷騷として釋けず。(六)

㊀耳鳴り心憂ふ　㊁廣　溢る（溶は大に同じ）　㊂漫遠く、限りなし　㊃日月を引き北極星を指して盟を誓ふ　㊄心苦しむ　㊅憂ふる貌

中兮。太一爲レ余聽レ之。云服二陰陽之正道一兮。御二后土之中和一。佩二蒼龍之蚴虬一兮。帶二隱虹之逶蛇一。曳二彗星之皓旰一兮。撫二朱爵與二鵕䴊一。遊二清霧之颯戾一兮。服二雲衣之披披一。杖二玉策與二朱旗一兮。垂二明月之玄珠一。擧二霓旌之墆翳一兮。建二黃昏之總旄一。躬純粹而罔レ愆兮。承二皇考之妙儀一。

㈤長く大なる虹　㈥白く輝く　㈦高く飛ぶ鳥　㈧清涼の貌　㈨長き貌　㈩五色の旗　⑪先人巧妙の法を承く

惜二往事之不一レ合兮。橫二汨羅一而下厲。乘二隆波一而南度兮。逐二江湘之順流一。赴二陽侯之潢洋一兮。下二石瀨一而登レ洲。陸魁堆以蔽レ視兮。雲冥冥而闇レ前。山峻高以無レ垠兮。遂曾閎而迫レ身。

往事の合はざるを惜み。汨羅に橫りて下厲し。(一)降波に乘りて南に度り。江湘の順流を逐ひ。陽侯の潢洋(二)に赴き。石瀨を下りて洲に登れば。陸魁(三)堆として以て視を蔽ひ。雲冥冥として前に闇し。山峻高しにて以て垠なく。遂に曾閎(四)して身に迫り。雪雰雰として木に薄り。雲霏霏として隕ち集る。阜險狹にして幽險に。石嶔嵯として以て日を翳ふ。故鄕を悲みて忿を發し。余が邦を去ること彌〻久し。龍門(五)に背きて河に入り。大墳(六)に登りて夏首を望む。

㈠身を沈む　㈡大波　㈢高くして日を蔽ひ　㈣重りて大なり　㈤郢の東門　㈥高地に上り、夏水の口を望む

杳冥冥兮。乘レ騏驥レ紆二吾情一兮、歸二散舊邦一。莫二誰語一兮。長辭遠逝乘レ湘去兮。志隱隱而鬱怫兮。愁獨哀而冤結。腸紛紜以繚轉兮。涕漸漸其若レ屑。情慨慨而長懷兮、信二上皇一而質正。合二五嶽與二八靈一兮。訊二九魁與二六神一。指二列宿一以白レ情兮。訴二五帝一以置レ詞。北斗爲レ我質レ

にか語るべき莫し。長く辭し遠く逝き湘に乘りて去らん。

㊀ 車の走る聲　㊁ あわたゞしき貌　㊂ 原野の中を行く（南北を經といふ、東西を緯といふ）

怨思

志隱隱として鬱怫たり。愁獨り哀んで冤結す。腸紛紜として以て繚轉し。涕漸漸として其れ屑の若し。情慨慨として長く懷ふ。上皇を信じて質し正さん。(一)五嶽と八靈とを合せ。(二)九魁と六神とに訊ねん。(三)列宿を指して以て情を白にし。(四)五帝に訴へて以て詞を置かん。北斗我が爲めに中を質し。太一余が爲に之を聽け。云く陰陽の正道を服せよ。后土の中和に御し。蒼龍の蚴虬たるを佩び。(五)隱虹の逶蛇たるを帶び。彗星の皓旰たるを曳き。(六)朱爵と鵔鸃とを撫し。(七)淸霧の颯戾なるに遊び。(八)雲衣の披披たるを服し。玉策と朱旗とを杖き。明月の玄珠を垂れ。霓旌の墆翳を舉げ。(九)黃昏の總旗を建て。(一〇)躬純粹にして愆罔く。(一一)皇考の妙儀を承く。

㊀ 五方の山（泰山・華山・衡山・恆山・嵩山）と八方の神　㊁ 北斗七星と六宗の神　㊂ 二十八宿　㊃ 五方の帝

若兮。漸藁本於汚瀆。淹芳芷於腐井兮。弃雞駭於筐簏。執棠谿以剸蓬兮。秉干將以割肉。筐澤瀉以豹鞹兮。破荊和以繼築。時溷濁猶未清兮。世殽亂猶未察。欲容與以竢時兮。懼年歲之既晏。願屈節以從流兮。心鞏鞏而不夷。寧浮沅而馳騁兮。下江湘以邅迴。

弃て。棠谿を執りて以て蓬を剸り。干將を秉りて以て肉を割く。澤瀉を筐たすに豹鞹を以てし。荊和を破るに繼築を以てす。時溷濁して猶ほ未だ清まず。世殽亂して猶ほ未だ察ならず。容與して以て時を竢たんと欲するも。年歲の既に晏きを懼る。願みて節を屈して以て流に從へば。心鞏鞏として夷ばず。寧ろ沅に浮んで馳騁し。江湘を下りて以て邅迴せん。

(一) 香草を汚き溝にひたし (二) 文犀の角を筐中に置き (三) 名刀を以て、草を切り肉を割き (四) 豹革の嚢に惡草を滿たし (五) 和氏の名玉をつき摧く (六) しびるゝ貌

歎曰。山中檻檻余傷懷兮。征夫皇皇其孰依兮。經營原野

歎に曰く。

山中に檻檻として余傷懷す。征夫皇皇として其れ孰にか依らん。原野を經營すれば杳に冥冥たり。騏に乘り驥を騁せ吾が情を舒べん。骸を舊邦に歸するも誰

傷厭次而不發兮。思沈抑而不揚。芳懿懿而終敗兮。名靡散而不彰。背玉門以奔騖兮。蹇離尤而干詬。若龍逢之沈首兮。王子比干之逢醢。念社稷之幾危兮。反爲讒而見怨。思國家之離沮兮。躳獲愆而結難。若青蠅之僞質兮。晉驪姬之反情。恐登階之逢殆兮。故退伏於末庭。孽子之號咷兮。本朝蕪而不治。犯顏色而觸諫兮。反蒙辜而被疑。

厭次を傷みて發せず。思沈抑して揚らず。芳懿懿として終に敗れ。名靡散して彰れず。玉門に背きて以て奔騖し。蹇尤に離ひて詬を干む。龍逢の首を沈め。王子比干の醢に逢ふが若し。社稷の幾たびか危きを念ひ。反つて讒とせられて怨まる。國家の離沮を思ひ。躳愆を獲て難を結ぶ。青蠅の質を僞り。晉驪姬の情に反くが若し。恐くは階に登るの殆きに逢はんことを。故に退いて末庭に伏す。孽子の號咷する。本朝蕪して治らず。顏色を犯して觸諫し。反つて辜を蒙りて疑はる。

(一) 德正しきも終に敗れ　(二) 名消えて顯れず　(三) 君門に背きて走り　(四) 敗誠を忌む　(五) 青蠅の黑々變化するが如く　(六) 晉の驪姬、申生を讒せしが如し　(七) 佞人衆り呼ぶ

菀蘼蕪與菌

蘼蕪と菌若とを菀み。(一)藁本を洿瀆に漸し。芳芷を廢井に淹し。(二)雜駮を筐簏に

夫黨旅其目兮。河水淫淫情所願兮。顧瞻郢路終不返兮。

惟鬱鬱之憂毒兮。志坎壈而不違。身憔悴而考旦兮。日黃昏而長悲。閔空宇之孤子兮。哀枯楊之冤鶵。孤雌吟於高墉兮。鳴鳩棲於桑榆。玄蝯失於潛林兮。獨偏弃而遠放。征夫勞於周行兮。處婦憤而長望。申誠信而罔違兮。情素潔於紉帛。光明齊於日月兮。文采燿於玉石。

（一）むたゆらふ　（二）讒人朋黨の多き故なり　（三）滿ち流るゝ貌　（四）心に願ふ所なり（投じて死せんとする意）

離世

惟れ鬱鬱たる憂毒。（一）志坎壈して違はず。（二）身憔悴して旦を考へ。日黃昏にして長く悲む。空宇の孤子を閔み。枯楊の冤鶵を哀む。（三）（四）孤雌高墉に吟じ。（五）鳴鳩桑榆に棲み。玄蝯潛林を失ひ。獨り偏弃して遠放せらる。（六）征夫周行に勞し。處婦憤りて長く望む。誠信を申ねて違ふ罔く。情素紉帛より潔く。（七）光明日月に齊しく。文采玉石より燿く。（八）

（一）不遇なれども忠信を忘れず　（二）身瘦せ衰へ晩まで眠るを得ず　（三）憐なる雛　（四）一羽の雌鳥（雛の母）高き墉に鳴く　（五）鳩鳴きて桑楡の枝に棲む（小人時を得るに喩ふ、楡はにれなり）　（六）旅人遠路に勞る　（七）束ねたる絹より潔く　（八）文章玉よりかゞやく

長流。違二曲江之逶移一兮。觸二石碕一而衡遊。波澧澧而揚レ澆兮。順二長瀨之濁流。淩二黄沱一而下低兮。思二還流而復反。玄輿馳而並集兮。身容與而日遠。櫂二舟杭一以橫濿兮。濟二湘流一而南極。立二江界一則長吟兮。愁哀哀而累息。情慌忽以忘レ歸兮。神浮遊以高厲。志蛩蛩而懷顧兮。魂眷眷而獨逝。

玄輿馳せて並び集る。身容與して日に遠し。舟杭に櫂して以て橫に濿り。湘流を(六)濟りて南に極まる。江界に立ちて長吟す。愁哀哀として(七)累息し。情慌忽として以て歸るを忘る。神浮遊し(八)高厲す。志蛩蛩として(九)懷顧し。魂眷眷として(一〇)獨り逝く。

(一) 殷の紂王の臣にして、紂王のために新聲北里の樂を作り、紂王亡ぶる後、自らその樂器を抱き、濮水に投じて死せり (二) 長き貌 (三) 橫流に同じ (四) 渦を巻く (五) 江の別名なり (六) 水を車とし、輿と並び馳す（玄は水なり） (七) 太息す (八) 高く飛り、遠く行く (九) 憂ひ悲しむ貌 (一〇) 顧る

歎曰。余思二舊邦一心依違兮。日暮黄昏。嗟幽悲兮。去郢東遷。余誰慕兮。讒

歎に曰く。余舊邦を思ひて心(一)依違す。日暮れて黄昏なり。嗟幽悲す。郢を去りて東に遷る。余誰をか慕はん。讒夫(二)黨旅す其れ茲を以ての故なり。河水淫淫として(三)情の願ふ(四)ところ。郢路を顧瞻して終に返らず。

容以晦レ光兮。皇輿覆以幽辟。輿中塗以回畔兮。駟馬驚而横奔。執レ組者不レ能レ制兮。必折レ軛而摧レ轅。斷二鑣銜一曰馳騖兮。暮去次而敢止。路蕩蕩其無レ人兮。遂不レ禦二乎千里一。身衡陷而下沈兮。不レ可二獲而復登一。不レ顧二身之卑賤一兮。惜二皇輿之不一レ興。出二國門一而端指兮。方冀二壹寤而錫一レ還。哀二僕夫之坎毒一兮。屢離レ憂而逢レ患。

執る者制する能はず。必ず軛を折りて轅を摧く。(五)鑣銜を斷ちて曰て馳騖し。暮に去り次して敢て止る。(六)路は蕩蕩たるも其れ人なし。(七)遂に千里を禦がず。身衡陷して下り沈み。獲て復た登るべからず。身の卑賤を顧みず。皇輿の興らざるを惜む。國門を出でて端指し。(八)方に壹たび寤りて還を錫はんことを冀ふ。僕夫の坎毒を哀む。屢〻憂に離りて患に逢ふ。

(一)先王の正法を述ぶ (二)多くの小人阿りて君を暗ます（幽辟は暗きをいふ） (三)國人中途に背き、賢臣驚き走る（駟馬を賢臣に喩ふ） (四)御者も制することを得ず、車破れ摧く (五)くつわを斷ちて走る (六)平易なるも (七)賢臣の遠く去るを防がず (八)君、非行をさとり、召還の恩命あらんことを望む

九年之中不二吾反一兮。思二彭咸之水遊一。惜二師延之浮一レ渚兮。赴二汨羅之

九年の中吾を反さず。彭咸の水遊を思ひ。(一)師延の渚に浮ぶを惜み。汨羅の長流に赴く。曲江の(二)逶移たるに遵ひ。石碕に觸れて(三)衡遊す。波(四)澧澧として澆を揚ぐ。長瀨の濁流に順ひ。(五)黄花を凌ぎて下低す。還流して復り反らんことを思ひ。

懷之皇祖一兮。愬二靈懷之鬼神一。靈懷曾不二吾知一兮。即聽二夫讒人之諛辭一。余辭上參二於天隧一兮。旁引二之於四時一。指二日月一使二延照一兮。撫二招搖一以質正。立二師曠一俾レ端レ詞兮。命二咎繇一使二並聽一。兆出レ名曰二正則一兮。卦發レ字曰二靈均一。余幼既有二此鴻節一兮。長愈固而彌純。不二從レ俗而詖行一兮。直レ鮐指而信レ志。不下枉レ繩以追レ曲兮。屈二情素一以從上レ事。

し。旁ら之を(四)四時に引く。日月を指して(五)延照せしめ。(六)招搖を撫して以て質正す。(七)師曠を立てて詞を端さしめ。(八)咎繇に命じて並び聽かしむ。(九)兆名を出して正則と曰ひ。(一〇)卦字を發して靈均と曰ふ。余幼にして既に此の(一一)鴻節あり。長じて愈〻固く彌〻純なり。俗に從ひて詖行せず。鮐を直くし指して志を信ぶ。(一三)繩を枉げて以て曲を追ひ。(一二)情素を屈して以て事に從はず。

(一)懷王　(二)寃を懷王の祖先に訴ふ　(三)天地　(四)四時の神　(五)長く照さしめ　(六)北斗七星　(七)晉平公の時の人、耳のさときを以て聞ゆ　(八)堯の臣にして五刑を明かにす　(九)生れて形兆あり、正則(原)と名けて天に則り　(一〇)また卜筮に依り、靈均(平)と字して地に法る　(一一)大節あり　(一二)俗人に從ひ邪行をなさず　(一三)道を枉げて曲事をなし情を僞りて俗に從はず

端二余行一其如レ玉兮。述二皇輿之踵跡一。羣阿

余が行を端しうして其れ玉の如く。(一)皇輿の踵跡を述ぶ。(二)羣阿容して以て光を晦し。皇輿覆うて以て幽辟す。(三)輿中塗にして以て回畔し。駟馬驚きて横奔す。(四)組を

恨以永思兮。意晻晻而自頹。白露紛紛曰塗塗兮。秋風瀏瀏曰蕭蕭。身永流而不ㇾ還兮。魂長逝而常愁。

歎曰。譬彼流水紛揚磕兮。波逢洶涌紛滂沛一兮。揄揚滌盪漂流隕往觸二崟石一兮。龍卬脟圏繚戻宛轉阻相薄兮。遭ㇾ紛逢ㇾ凶蹇離ㇾ尤兮。垂ㇾ文揚ㇾ采遺二將來一兮。

歎に曰く。譬へば彼の流水紛として揚磕。波洶涌し紛として(一)滂沛たるに逢ふ。揄揚滌盪漂流し隕ち往きて(三)崟石に觸る。(四)龍卬脟圏繚戻宛轉として阻と相薄るごとし。紛に遭ひ凶に逢ひ(五)蹇尤に離り。(六)文を垂れ采を揚げて將來に遺る。

(一)激する貌 (二)流の盛なる貌 (三)高き石 (四)水、亂れ狂ひ、險阻にせまりて激す (五)尤を受く (六)文をのこし、光彩をあげて後人におくる

靈懐

靈懐其不二吾知一兮。靈懐其不二吾聞一。就二靈

靈懐其れ吾を知らず。靈懐其れ吾に聞かず。靈懐の皇祖に就き。靈懐の鬼神に(一)愬ふ。靈懐曾て吾を知らず。卽ち夫の讒人の(二)訣辭を聽く。余が辭上は(三)天陛に參

哀而使高丘兮。心愁愁而思舊邦。願承間而自恃兮。徑淫曀而道壅。顏黴黧以沮敗兮。精越裂而衰耄。裳襜襜而含風兮。衣納納而掩露。赴江湘之湍流兮。順波湊而下降。徐徘徊於山阿兮。飄風來之洶洶。

(一)香木樹枝、霜にかゝりて枯る(屈原に喩ふ)　(二)讒人集りて、朝廷に、人を汚し辱かしむ　(三)初め余と朝室に處り、半途にして背く　(四)香草を懷にし(忠いの情を抱き)　(五)君の間隙をうかゞひ、忠言を進めんと欲するも　(六)進見の路、暗くして塞がる　(七)顏垢つきて、黒く、敗れ衰ふ　(八)動く貌　(九)濕ふ貌　(一〇)山の隅に徘徊す

馳余車兮玄石。步余馬兮洞庭。平明發兮蒼梧。夕投宿兮石城。芙蓉蓋而蔆華車兮。紫貝闕而玉堂。薜荔飾而陸離薦兮。魚鱗衣而白蜺裳。登逢龍而下隕兮。逢故郢之漫漫。思南郢之舊俗兮。腸一夕而九運。揚流波之潢潢兮。體溶溶而東回。心怊

余が車を玄石に馳せ。余が馬を洞庭に歩ませ。平明に蒼梧を發し。夕に石城に投宿す。芙蓉の蓋菱華の車。紫貝の闕玉堂。薜荔の飾陸離の薦。魚鱗の衣白蜺の裳。(一)逢龍に登りて下り隕つ。故郢を違つて(二)漫漫たり。南郢の舊俗を思ひ。腸一夕にして(三)九運す。(四)流波の潢潢たるを揚け。體溶溶として東に回る。心怊悵として以て永く思ひ。意晻晻として自ら顧る。(五)白露紛紛として巳て塗塗たり。(六)秋風瀏瀏として巳て蕭蕭たり。身永流して還らず。魂長逝して常に愁ふ。

(一)山の名　(二)路遠し　(三)九轉す　(四)大なる波を揚ぐ　(五)露亂れて濃たり　(六)秋風疾くして寒し

名。齊二名字於天地一兮。並二光明於列星。吸二精粹一而吐二氣濁一兮。橫邪世而不レ取レ容。行レ叩レ誠而不レ阿兮。遂見レ排而逢レ讒。后聽レ虛而黜レ實兮。不二吾理一而順レ情。腸憤悁而含レ怒兮。志遷蹇而左傾。心懭悢而不二我與一兮。躬速速而不二吾親一。辭二靈修一而隕レ意兮。吟二澤畔之江濱一。

せず。躬速速として吾に親まず。(一一)靈修を辭して意を隕し。澤畔の江濱に吟ず。

（一）後（二）忠直（三）楚の懷王の親族（四）行、大道に合し、並名あり（五）名平は天を意味し、字の原は地を意味す（六）德明かに行高く、天に列星あるに同じ（七）苟も容れらんとして人に媚び諂はず（八）吾が諫るを容れず、私情に順ふ（九）志移り、身遠く去る（一〇）心あわたゞし（一一）君と別れて心悲しみ

椒桂羅以顚覆兮。有二竭レ信而歸ヒ誠，讒夫藹藹而曼著兮。曷其不レ舒二予情一。始結二言於廟堂一兮。信中塗而叛レ之。懷二蘭蕙與二衡芷一兮。行二中壄一而散レ之。聲哀

椒桂羅りて以て顚覆す。信を竭して誠に歸するあり。(一)讒夫藹藹として曼著し。(二)曷ぞ其れ予が情を舒べざる。(三)始めて言を廟堂に結び。信に中塗にして之に叛く。蘭蕙と衡芷とを懷にし。中壄に行きて之を散ず。聲哀哀として高丘を懷ひ。心(四)愁愁として舊邦を思ふ。願くは閒を承けて自ら恃まんことを。(六)徑淫曀にして道離がる。(七)顏黴黧にして以て(五)沮敗し。精越裂して衰耄す。(八)裳襜襜として風を含み。衣(九)納納として露を掩ふ。江湘の湍流に赴き。波湊に順つて下り降る。徐に(一〇)山阿を徘徊すれば。飄風來りて洶洶たり。

伊伯庸之末
冑兮。諒皇直
之屈原。云余
肇二祖于高陽一
兮。惟楚懷之
嬋連。原生受二
命于貞節一兮。
鴻永路有二嘉

卷之十六

九歎第十六

（十）九歎は、漢の左都水使者光祿大夫劉向の作りし所なり。向博古敏達を以て、經書を典校し、書文を辯章し、屈原忠信の節を追念す。故に九歎を作る。歎とは傷なり、息なり。屈原放たれて山澤に在り、猶ほ君を傷み念ひ、歎息已むなきを言ふ。所謂賢を讃して以て志を輔け、詞を騁せて以て德を曜かす者なり。

逢紛

伊伯庸の末冑。（一）諒に皇直の屈原。（二）云に余祖を高陽に肇む。惟れ楚懷の嬋連。（三）原生れて命を貞節に受け。（四）鴻永の路嘉名あり。（五）名字を天地に齊しうし。（六）光明を列星に並ぶ。精粹を吸ひて氛濁を吐き。（七）横邪の世にして容を取らず。誠を叩つを行ひて阿らず。遂に排せられて讒に逢ふ。后虚を聽きて實を黜け。（八）吾を理めずして情に順ふ。腸憤悁して怒を含み。（九）志遷蹇して左に傾く。（一〇）心懭恍して我與

飛揚。乘レ虹驂レ蜺兮。載レ雲變化。鷦鵬開レ路兮。後屬ニ青蛇一。步驟ニ桂林一兮。超ニ驤卷阿一。丘陵翔儛兮。谿谷悲歌。神章靈篇兮。赴レ曲相和。余私娛レ茲兮。孰哉復加。還ニ顧世俗一。壞ニ敗罔羅一。卷佩將レ逝兮。涕流滂沲。

亂曰。

皇門開兮照ニ下土一。株穢除兮蘭芷覩。四佞放兮後得レ禹。聖舜攝兮昭ニ堯緒一。孰能若兮願爲レ輔。

亂に曰く。

皇門開きて下土を照す。(一)株穢除かれて蘭芷覩ゆ。(二)四佞を放ちて後に禹を得。(三)聖舜攝して堯緒を昭にす。孰か能く若のごとくならん、願くは輔と爲らん。

(一) 小人除かれ、君子顯る (二) 堯、四凶(共工・驩兜・三苗・鯀)を放ち (三) 舜、政を攝し、堯の偉業を明にす

色悶兮中怠、意曉陽兮燎寤。乃息レ軫兮在レ玆。思二堯舜兮襲興一。幸二咎繇兮獲一レ謀。悲二九州兮靡一レ君。撫レ軾歎兮作レ詩。

悲哉于嗟兮。心内切嗟。欵冬而生兮、凋二彼葉柯一。瓦礫進レ寶兮、捐二棄隨和一。鉛刀厲御兮、頓二棄太阿一。驥垂二兩耳一兮、中坂蹉跎。蹇驢服駕兮。無用日多。修潔處幽兮、貴寵沙劘。鳳皇不レ翔兮、鶉鴳

株昭

悲いかな于嗟。心内切嗟す。欵冬而して生じ。彼の葉柯を凋ましむ。瓦礫を寶と進め。(一)隨和を捐棄し。鉛刀厲御し。(二)太阿を頓棄す。驥兩耳を垂れ。中坂に蹉跎し。蹇驢服駕し。無用日に多し。(三)修潔幽に處り。貴寵沙劘す。鳳皇翔らず。鶉鴳飛揚し。虹に乘り蜺を驂にし。雲に載りて變化す。鵕鸃路を開き。後に青蛇を屬す。桂林に歩驟し。巻阿を超驤す。丘陵翔り舞ひ。谿谷悲み歌ふ。(四)神章靈篇。(五)曲に赴いて相和す。余私に玆を娯み。(六)孰か復た加へん。世俗を還顧すれば。(七)罔雞を壞敗す。(八)巻佩して將に逝かんとし。涕流滂沲たり。

(一)名玉の名　(二)名劍の名　(三)賢臣斥けられ、佞臣行を恣にす　(四)河圖洛書、聖賢の文　(五)樂曲の聲に和す　(六)之にまさるものなし　(七)仁義の大法を破る　(八)束帶して去らんと欲し

兮溷亂一。將二奮レ
翼兮高飛一。駕二
八龍兮連蜷一。
建二虹旌兮威
夷一。觀二中宇兮
浩浩一。紛翼翼
兮上躋。浮二溺
水一兮舒レ光。淹
低二佪兮京沚一。
屯二余車一兮索レ
友。覩二皇公一兮
問レ師。道莫レ遺
兮歸レ眞。羨二余
術兮可レ夷。吾
乃逝二兮南娭一。
道二幽路兮九
疑一。越二炎火兮
萬里一。過二萬首
兮嶷嶷一。済二江海一兮蟬蛻。絶二北梁一兮永辭。浮雲鬱兮晝昏。霾土忽兮塵塵。息二陽城兮廣夏一。衰

浩たるを觀。紛翼翼として上に躋る。溺水に浮びて光を舒べ。淹しく京沚に低佪す。(四)余が車を屯めて友を索め。皇公を覩て師を問ふ。(五)道遺る丶莫くして眞に歸し。余が術の夷ぶべきを羨む。(六)吾乃ち南娭に逝き。幽路に九疑に道す。(七)炎火を萬里に越え。萬首の嶷嶷たるを過ぎ。(八)江海を濟りて蟬蛻し。(九)北梁を絶りて永く辭す。浮雲鬱として晝昏し。霾土忽として塵塵たり。陽城の廣夏に息ひ。(一〇)衰色罔として中に怠る。(一一)意曉陽して燎寤し。(一二)乃ち軫を息めて茲に在り。堯舜の襲ぎ興れるを思ひ。咎繇の謀を獲んことを幸ふ。九州の君靡きを悲み。軾を撫し歎じて詩を作る。(一三)

(一) 世俗の濁れるを見 (二) 光輝の亂る丶を見 (三) 虚空の廣きを見つ丶、靈氣を振ひて昇る (四) 高き洲に徘徊す (五) 天帝に見えて教を乞ひ (六) 南方陽地に行く (七) 九嶷山に至り、舜の墓を過ぐ (八) 海中に聳ゆる諸山を越ゆ (九) 俗界を超脱し (一〇) 炎土の廣屋にいこひ (一一) 宍倦み、身疲る (一二) 心、明かに覺め (一三) 車に伏し、歎じて詩を作る (軾は車前の横木なり)

慘慄。心愴愴兮自憐。駕玄螭兮北征。曏吾路兮蔥嶺。連五宿兮建旄。揚氣氛兮爲旌。歷廣漢兮馳騖。覽中國兮冥冥。玄武步兮水母。與吾期兮南榮。登華蓋兮乘陽。聊逍遙兮播光。抽庫婁兮酌醴。援匏瓜兮接糧。畢休息兮遠逝。發玉軔兮西行。惟時俗兮疾正。弗可久兮此方。寤辟摽兮永思。心怫鬱兮內傷。

く。(一一)庫婁を抽きて醴を酌み。(一二)匏瓜を援りて糧を接ぐ。畢に休息して遠く逝き。(一三)玉軔を發して西行す。(一四)惟れ時俗の正を疾む。此方に久しうすべからず。(一五)寤辟摽して永く思ひ。心怫鬱して内に傷む。

(一)九天に上り、精神を集ましむ　(二)神女、夜歌ふ　(三)大丘の高茂り、枝葉いたづらに亂るゝを悲しむ　(四)正しき枝抑へられて枯る　(五)浮車を美しき雲に載す　(六)衆星を列ねて旗となし　(七)霧を擧げて旌(はた)となす　(八)天龜と水神と歩し　(九)余に南方の野に會せんと約す　(一〇)北北斗に乗ぢて房星を窺み　(一一)婁宿二星を引きて、酒を酌み　(一二)匏瓜(神果なり)を採りて糧を繼ぐ　(一三)車を發して西行す　(一四)時俗、正士を嫉む、久しくこゝに止り難し　(一五)胸を拊ちて考ふ

覽杳杳兮世惟。余惆悵兮何歸。傷時俗

陶壅

(一)覽る杳杳たる世惟。余惆悵として何にか歸せん。時俗の溷亂を傷み。將に翼を奮つて高飛せんとす。八龍の連蜷たるに駕し。(二)虹旌の威夷たるを建つ。(三)中宇の浩

飛二翔兮靈丘一。望レ谿兮滃鬱。熊羆兮呴嗥。唐虞兮不レ存。何故兮久留。臨レ淵兮汪洋。顧レ林兮忽荒。修二余兮袿衣一。騎レ霓兮南上。乘レ雲兮回回。亹亹兮自強。將レ息二兮蘭皐一。失レ志兮悠悠。蒶蘊兮黴黧。思レ君兮無聊。身去兮意存。愴恨兮懷レ愁。

に息はんとし。志を失ひて悠悠たり。(七)蒶蘊たる黴黧。(八)君を思ひて無聊なり。身去りて意存し。愴恨して愁を懷く。

㊀百草を動かし、芳黴せしむ　㊁再歸りて神山に飛ぶ　㊂堯舜すでに世になし　㊃上服を整へ　㊄いよいよ昇りて自ら力む　㊅蘭の茂るつゝみ　㊆顏に垢づき黑む　㊇君を念ひて樂なし

思忠

登二九靈一兮遊レ神。靜女歌二兮微晨一。悲二皇丘兮積葛一。衆體錯兮交紛。貞枝抑兮枯槁。枉車登二兮慶雲一。感二余志一兮

(一)九靈に登りて神を遊ばしむ。(二)靜女微晨に歌ふは(三)皇丘の積葛。衆體錯りて交紛するを悲む。(四)貞枝抑せられて枯槁し。(五)枉車慶雲に登る。余が志を感じて慘慄し。心愴愴として自ら憐む。玄螭に駕して北征し。曏く吾蔥嶺に路し。(六)五宿を連ねて旄を建て。(七)氛氣を揚げて旌となす。廣漠を歷て馳騖し。中國を覽るに冥冥たり。(八)玄武水母に步し。(九)吾と南榮に期す。(一〇)華蓋に登りて陽に乘り。聊か逍遙して光を播

亦多兮遭レ殃。
伍胥兮浮レ江。
屈子兮沈レ湘。
運レ余兮念レ茲。
心内兮懷レ傷。
望レ淮兮沛沛。
濱レ流兮則逝。
榜レ舫兮下レ流。
東注兮磕磕。
蛟龍兮導引。
文魚兮上レ瀨。抽レ蒲兮陳レ坐。援二芙蕖一兮爲レ蓋。水躍二兮余旌一。繼以二兮微蔡一。雲旗兮電騖。倏忽兮容裔。河伯兮開レ門。迎レ余兮歡欣。顧二念兮舊都一。懷レ恨兮艱難。竊哀二兮浮萍一。汎淫兮無レ根。

引し、文魚瀨に上る。(七)蒲を抽きて坐に陳し。芙蕖を援りて蓋と爲す。水余が旌に躍り。(八)繼ぐに微蔡を以てす。雲旗電騖し。倏忽として容裔す。(九)河伯門を開き。余を迎へて歡欣す。舊都を顧み念ひ。恨を懷きて艱難す。(一〇)竊かに浮萍の。汎淫して根無きを哀む。

(一) 晩春三月　(二) 蘭の枝葉摧折し、狼藉たるを悲しむ　(三) 尚賢を思ふに、多く禍に逢へり　(四) 我心をめぐらして之を思ふ　(五) 流るゝ浪　(六) 舟に棹して下れば　(七) 蒲を抜きて坐に敷き、芙蕖(はす)を採りて笠とす　(八) つゞいて草芥を舟に入る　(九) たなびき動く　(一〇) 浮萍に根なく、水のまゝに漂ふを悲しむ

秋風兮蕭蕭。
舒レ芳兮振レ條。
微霜兮眇眇。
病二殀兮鳴蜩一。
玄鳥兮辭歸。

蓄英

秋風蕭蕭たり。(一)芳を舒べて條を振ふ。微霜眇眇として。鳴蜩を病殀せしむ。(二)玄鳥辭し歸り。靈丘に飛翔す。谿を望めば滃鬱たり。熊羆咆嘷す。(三)唐虞存せず。何の故にか久しく留らん。淵に臨めば汪洋たり。林を顧れば忽荒たり。(四)余が桂衣を修め。霓に騎りて南に上る。雲に乘りて回り回る。(五)亹亹として自ら彊む。將に(六)蘭皐

余安能兮久居。志懷逝兮心懰慄。紆二余轡一兮躊躇。聞二素女兮微歌一。聽二王后兮吹レ竽。魂悽愴兮感レ哀。腸回回兮盤紆。撫二余佩兮繽紛一。高太息兮自憐。使二祝融兮先行一。令二昭明兮開レ門。馳二六蛟一兮上征。竦二余駕一兮入レ冥。歷二九州一兮索レ合。誰可二與兮終レ生。忽反二顧兮四囿一。視二彩丘兮崎傾一。橫垂涕兮泫流。悲二余后兮失レ靈。

橫垂する涕泫流し。（一五）余が后の靈を失ふを悲む。

（一）袍の赤きを重ぬ　（二）彩衣の響よきを曳き　（三）高山に登りて顧み　（四）神明を持して、容貌を動かし　（五）楚國の暗く亂るゝを見　（六）心いたみおそれ　（七）神女のかすかに歌ふを聞き　（八）伏妃の竽を吹くを聞く　（九）南方の神に前驅せしめ　（一〇）炎神に路を開かしめ　（一一）空中に入る　（一二）天下を周遊して友を求む　（一三）隨猶の境を見る　（一四）山陵の險しきを見る　（一五）我が君の大法に違ふを悲しむ

季春兮陽陽。列草兮成レ行。余悲二兮蘭生一。委積兮從橫。江離兮遺捐。辛夷兮擠臧。伊思二兮往古一。

尊嘉

（一）季春陽陽たり。列草行を成す。（二）余蘭生を悲む。委積して從橫たり。江離遺捐せられ。辛夷擠臧せらる。（三）伊れ往古を思ふに。亦多く殃に遭へり。伍胥江に浮び。屈子湘に沈む。（四）余を運らして玆を念ふ。心內傷を懷く。淮を望むに沛沛たり。（五）流に濱して則ち逝く。（六）舫に榜して流を下れば。東注すること磕磕たり。蛟龍導

觀二幽雲一兮陳浮。鉅寶遷兮砏磤。雉咸雊兮相求。泱莽莽兮究レ志。懼二吾心一兮𢥞𢥞。步二余馬一兮飛柱。覽レ可二與兮匹儔一。卒莫レ有二兮纖介一。永余思兮怞怞。

昭世

世溷兮冥昏。違レ君兮歸レ眞。乘レ龍兮偃蹇。高回翔兮上臻。襲二英衣兮緹䌙一。披二華裳兮芳芬一。登二羊角兮扶輿一。浮雲漠兮自娛。握二神精一兮雍容。與二神人一兮相胥。流星墜兮成レ雨。進瞵盼兮上二丘墟一。覽二舊邦滃鬱一。

世溷りて冥昏なり。君を違りて眞に歸す。龍に乘りて偃蹇し。高く回翔して上り臻る。(一)英衣の緹䌙たるを襲ね。(二)華裳の芳芬たるを披き。(三)登りて扶輿に羊角し。浮雲漠として自ら娛しむ。(四)神精を握りて雍容し、神人と相胥つ。流星墜ちて雨を成し。進みて瞵盼して丘墟に上る。(五)舊邦の滃鬱たるを覽。余安んぞ能く久しく居らんや。(六)志懷逝きて心懰慄し、余が轡を紆べて躊躇す。(七)素女の微歌を聞き。(八)王后の竽を吹くを聽く。魂悽愴として哀を感じ。腸回り回りて盤紆す。余が佩の繽紛たるを撫し。高太息して自ら憐む。(九)祝融をして先づ行かしめ。(一〇)昭明をして門を開かしめ。六蛟を馳せて上り征き。余が駕を竦して(一一)冥に入る。(一二)九州を歷て合を索め。誰か與に生を終ふべき。(一三)忽ち西閫を反顧し。(一四)軫丘の崎傾するを觀る。

林不容兮鳴蜩。余何留兮中州。陶嘉月兮總駕。搴玉英兮自脩。結榮茝兮逶逝。將去烝兮遠遊。徑岱土兮魏闕。歷九曲兮牽牛。聊假日兮相佯。遺光燿兮周流。望太一兮淹息。紆余轡兮自休。晞白日兮皎皎。彌遠路兮悠悠。顧列孛兮縹縹。

危俊

(一)林鳴蜩を容れず。余何ぞ中州に留らん。(二)嘉月に陶して駕を總べ。玉英を搴げて自ら脩む。(三)榮茝を結んで逶逝し。將に烝を去りて遠く遊ばんとす。(四)岱土を徑て魏闕。九曲を歷て牽牛。聊か日を假りて相佯し。光燿を遺して周流す。太一を望んで淹息し。余が轡を紆べて自ら休す。白日に晞かせば皎皎たり。(五)遠路を彌れば悠悠たり。列孛を顧みれば縹縹たり。幽雲を觀れば陳り浮ぶ。(六)鉅寶遷りて磤磤し、(七)雉咸く雊いて相求む。(八)決莽莽として志を究め。(九)吾が心を懼れしめて憒憒たり。余が馬を(一〇)飛柱に歩ませ。(一一)輿に匹儔すべきを覽るに。卒に繼介ある莫し。永く余思ひて怞怞たり。(一二)

(一) 楚王賢士を養はざるに喩ふ（蜩は秋蟬なり） (二) 吉時に及びて、車を馳せ、瓊華採りて自ら飾る (三) 香草を結びて信とし、君を去りて遠く遊ばんとす (四) 北荒を出でて九天星宿のほとりを行く (五) 群星を見ればかすかなり (六) 太歲星轉じ移る (七) 雉鳴いて雌雄相求む (八) 遠く廣く天地周遊の志を成し (九) 心を憂ひ傷ましむ (一〇) 神山の名 (一一) 同氣の友を求むるも、遂に一人もなし (一二) 憂極りなき貌

處。鯨鱏兮幽潛。從ㇾ蝦兮遊ㇾ陼。

乘ㇾ虹兮登ㇾ陽。載ㇾ象兮上行。朝發二兮葱嶺一。夕至二兮明光一。北飲二兮飛泉一。南采二兮芝英一。宣二遊兮列宿一。順ㇾ極兮彷徉。紅采兮騂衣。翠縹兮爲ㇾ裳。舒ㇾ佩兮綝纚。竦二余劍兮干將一。騰蛇兮後從。飛駏兮步ㇾ旁。微觀二兮玄圃一。覽二察兮瑤光一。啓ㇾ匱兮探ㇾ筴。悲命兮相當。紉ㇾ蕙兮永詞。將ㇾ離二兮所思一。浮雲兮容與。道ㇾ余兮何之。遠望二兮仟眠一。聞二雷兮闐闐一。陰憂兮感ㇾ余。惆悵兮自憐。

虹に乘りて陽に登り。象に載りて上り行く。朝に葱嶺を發し（一）。夕に明光に至る（二）。北飛泉に飲み。南芝英を采る。列宿に宣遊し。極に順ひて彷徉す。紅采騂衣（三）。翠縹を裳となす。佩を舒べて綝纚（四）。余が劍の干將を竦つ（五）。騰蛇後に從ひて（六）。飛駏旁に歩す（七）。微かに玄圃を觀。瑤光を覽察し。匱を啓き筴を探り（八）。悲命相當る（九）。蕙を紉んで永詞し（一〇）。將に所思に離れんとす。浮雲容與し。余を導きて何にか之く。遠く仟眠を望めば（一一）。雷の闐闐たるを聞く。陰憂余を感ぜしめ。惆悵して自ら憐む。

（一）西極の山　（二）東極の山　（三）赤き衣　（四）衣裳の垂るゝ貌　（五）劍の名　（六）勢よき神蛇　（七）騾に似たる獸　（八）金匱を開き、筴を取りて占ひ　（九）身の禍を知る　（一〇）香草を結んで誓をなし、懷王に別る　（一一）遠く楚國の暗きを見

遊二心兮鄗酆一。
彌二覽兮九隅一。
彷二徨兮闕宮一。
芷閭兮葯房。
奮二搖兮衆芳一。
菌閣兮蕙樓。
觀レ道兮從橫。
寶金兮委積。美玉兮盈レ堂。桂水兮潺湲。揚レ流兮洋洋。蓍蔡兮踊躍。孔鶴兮回翔。撫レ檻兮遠望。念レ君兮不レ忘。怫鬱兮莫レ陳。永懷兮內傷。

(六)蓍蔡踊躍し。孔鶴回り翔る。檻を撫して遠く望み。君を念ひて忘れず。怫鬱して陳ずる莫し。永く懷うて內に傷む。

㊀心を縱し、力を盡すも君と合はず ㊁いたみ悲しむ ㊂忠諫せんとせしも ㊃周の文王(鄗に都す)武王(酆に都す)を追慕し ㊄九州の隅々を見、天界に遊ぶ ㊅蓍龜喜び躍り、孔雀回り飛ぶ(蓍は筮なり)

天門兮墜戶。
孰由二兮賢者一。
無レ正二兮溷廁一。
懷レ德兮何覩。
假寐兮愍レ斯。
誰可レ與二兮寤語一。
痛二鳳兮遠逝一。
畜レ鴳兮近

通路

(一)天門墜戶。孰か賢者に由らん。(二)溷廁を正すなし。德を懷くも何ぞ覩ん。假寐して斯を愍ふるも。誰か寤語を與にすべき。鳳の遠く逝くを痛み。(三)鴳を畜ひて近く處らしむ。(四)鯨鱏幽潛し。鰕を從にして陼に遊ばしむ。

㊀天地に俯仰するも、賢者に遇ひ難し ㊁邪道を正すことなく、賢人もその德を示し難し ㊂小人に喩ふ ㊃同上

極運兮不レ中。來將レ屈兮困窮。余深愍兮慘怛。願二一列一兮無レ從。乘二日月一兮上征。顧

卷之十五

九懷第十五

（王）九懷は諫議大夫王襃の作りし所なり。懷とは思なり。言は屈原放逐せらると雖も、猶ほ其の君を思念し、國の傾危を憂ひ、忘るゝこと能はず。襃、屈原の文を讀み、その溫雅にして藻采敷衍なるを嘉す。金玉を執握し、之を汚瀆に委し、世の溷濁に遭ひ、之を能く識るなし。追ひて之を愍む。故に九懷を作り、以てその詞を裨ふ。史官錄第し、遂に篇に列す。

匡機

（一）極運して中らず。來り將に屈せんとして困窮す。余深く愍みて慘怛す。（二）一たび（三）列せんことを願へども從なし。日月に乘じて上り征し。顧みて心を鄗酆に（四）遊ばしめ。（五）九隅を彌覽し。閬宮に彷徨す。芷閭葯房。衆芳を奮搖す。菌閣蕙樓。道を觀て從橫。寶金委積し。美玉堂に盈つ。桂水潺湲として。流を揚ぐること洋洋たり。

而不用兮。且隱伏而遠身。聊竄端而匿迹兮。嘆寂默而無聲。獨便悁而煩毒兮。焉發憤而抒情。時曖曖其將罷兮。遂悶歎而無名。伯夷死於首陽兮。卒夭隱而不榮。太公不遇文王兮。身至死而不得逞。懷瑤象而佩瓊兮。願陳列而無正。生天墜之若過兮。忽爛漫而無成。邪氣襲余之形體兮。疾憯怛而萌生。願壹見陽春之白日兮。恐不終乎永年。

如下游乎清波。寧幽隱以遠禍兮。孰侵辱之可爲。子胥死而成義兮。屈原沈於汨羅。雖體解其不變兮。豈忠信之可化。志怦怦而內直兮。履繩墨而不頗執權衡而無私兮。稱輕重而不差。概塵垢之枉攘兮。除穢累兮反眞。形體白而質素兮。中皎潔而淑清。時厭飫

垢の枉攘を概ぎ。(三)穢累を除きて眞に反る。形體白うして質素に、中皎潔にして淑清なり。(四)時厭飫して用ひず。且く隱伏して身を遠ざけ。(五)聊か端を竄し迹を匿し。嘆として寂默して聲なし。(六)獨り便悁として煩毒す。(七)焉んぞ憤を發して情を抒べん。時曖曖として其れ將に罷めんとす。遂に悶歎して名なし。伯夷首陽に死し。卒に天隱して榮えず。太公文王に遇はざれば。身死に至るまで逞きことを得ず。瑤象を懷いて瓊を佩にし。(八)陳列せんことを願へども(九)正すことなし。(一〇)天墜に生れて過ぐるが若く。(一一)忽ち爛漫として成ることなし。邪氣余の形體を襲ふ。疾憯怛して萌生す。願はくは壹たび陽春の白日を見ん。(一二)恐くは永年を終へざらんことを。

(一)水の旋回する貌　(二)身死するも節操を變へず　(三)穢を除き、清明の質にかへる　(四)時の王讒言にあきて之を用ひず　(五)顔をかくし、足をかくし　(六)忠直の心を抱き、獨り煩悶す　(七)時、明ならず、善をいふに從む　(八)忠信を守り、志を述べんとするも　(九)君聽いて行を正さず　(一〇)天地に生れて年徒に過ぐ　(一一)忽ち老いて成ることなし　(一二)永壽を保ち難からん

淋レ雨。怊茫茫而無レ歸兮。悵遠望二此曠野一。下垂二釣於谿谷一兮。上要二求於僊者一。與二赤松一而結レ友兮。比二王僑一而爲レ耦。使二梟楊先導一兮。白虎爲二之前後一。浮二雲霧一而入レ冥兮。騎二白鹿一而容與。

雲罩りて軒に入る (一) 深く依るべき所なし (二) 仙人赤松子と交り、王子喬と對す (三) 山神なり (四) 心のまゝに遊ぶ

魂眐眐以寄獨兮。汨徂往而不レ歸。處卓卓而日遠兮。志浩蕩而傷懷。

魂(一)眐眐として以て寄獨なり。汨として徂き往いて歸らず。處(二)ること卓卓として日に遠し。志浩蕩として傷み懷ふ。

(一) 孤獨の貌 (二) 高きに居り、日に故郷に遠ざかる

鸞鳳翔二於蒼雲一兮。故矰繳而不レ能レ加。蛟龍潛二於旋淵一兮。身不レ挂二於罔羅一。知レ貪レ餌而近レ死兮不レ

鸞鳳蒼雲に翔る。故に矰繳も加ふること能はず。蛟龍(一)旋淵に潛る。身罔羅に挂らず。餌を貪れば死に近づくことを知る。淸波に下り游ぶに如かず。寧ろ幽隱して以て禍に遠ざからん。孰か侵辱することを爲すべき。子胥死して義を成し、屈原汨羅に沈めり。體解すと雖も其れ變ぜず。豈忠信の化ふべけんや。志怦怦として內直し。繩墨を履んで頗まず、權衡を執つて私なし。輕重を稱りて差はず。塵

蒸一兮。機ニ蓬矢一以射レ革。負擔荷以ニ丈尺一兮。欲レ伸レ要而不レ可レ得。外迫ニ脅於機臂一兮。上牽ニ聯於矰隿一兮。肩傾側而不レ容兮。固陿腹而不レ得レ息。

傾き側ちて容れられず。固に陿腹にして息ふことを得ず。

(一) 矢竹を機括に繫へ、蓬矢を以て革を射る　(二) 物を負ひ荷ひて丈尺の下(低くつかへる處)を行けば、腰を伸すことを得ず　(三) 外は機臂(弩身)に迫られ、上はいぐるみに繫がる　(四) 肩を傾け、腹を縮め、屏息する外なし

務光自投ニ於深淵一兮。不レ獲ニ世之塵垢一。孰魁摧之可レ久兮。願退レ身而窮處。鑿ニ山楹一而爲レ室兮。下ニ被衣於水渚一。霧露濛濛其晨降兮。雲依斐而承レ宇。虹霓紛其朝霞兮。夕淫淫而

(一)務光自ら深淵に投じ。世の塵垢を獲ず。孰か魁摧(二)の久しかるべき。願はくは身を退けて窮處せん。(三)山楹を鑿ちて室となし。被衣を水渚に下す。霧露濛濛として其れ晨に降り、(四)雲依斐として宇に承く。虹霓紛として其れ朝の霞あり。夕に淫淫として雨を淋ぐ。(五)悄茫茫として歸するなし。悵として遠く此曠野を望む。下つて釣を谿谷に垂れ。上つて僊者を要め求む。(六)赤松と友を結び。王僑に比して耦をなす。(七)梟楊をして先導せしめ、白虎之が前後を爲す。雲霧に浮んで冥きに入り。白鹿に騎つて容與す。(八)

(一) 古の清士なり　(二) 摧きくだかれ、久しく身を保ち難し　(三) 岩を鑿ちて、室となし、衣服を水涯に洗ふ　(四)

守二此曲隅一兮。然欲切而永歎。愁二脩夜一而宛轉兮。氣涫䨥其若レ波。握二剞劂一而不レ用兮。操二規榘一而無レ所レ施。

を握りて用ひず。規榘を操りて施す所なし。

㈠ 獨り山野に居る ㈡ 長き夜を徒に過ごし、あちらこちらに轉返す ㈢ 湧きかへる ㈣ 道徳法度あるも、措いて用ひざるをいふ、剞劂は刻刀なり

騁二騏驥於中庭一兮。焉能極二夫遠道一。置二猨狖于櫺檻一兮。夫何以責二其捷巧一。

騏驥を中庭に騁す。焉んぞ能く夫の遠道を極めん。㈠猨狖を櫺檻に置く。㈡夫れ何を以てか其捷巧を責めん。㈢

㈠ 千里の能を顯し難し ㈡ をりの中に置く ㈢ 敏捷に動作せしめ難し

駟二跛鼈一而上レ山兮。吾固知三其不二能レ陞。釋二管晏一而任二臧獲一兮。何權衡之能稱。

跛鼈を駟にして山に上る。吾固に其の陞ること能はざらんことを知る。管晏を釋てて臧獲に任ず。㈠何ぞ權衡を之れ能く稱らん。㈡

㈠ 管仲・晏嬰の如き賢人を棄て、政を賤者に任すも ㈡ 事理の輕重をはかり、善政をなすを得ず

箟簬雜二於黀

箟簬黀蒸に雜り、㈠蓬矢を機ちて以て革を䠶る。負ひ擔ひ荷うて丈尺を以てす。㈡要を伸べんと欲するも得べからず。㈢外機臂に迫り、脅され、上檐雉に牽聯す。㈣肩

爲二鳳皇一作二鶉籠一兮。雖レ翕レ翅其不レ容。靈皇其不二寤知一兮。焉陳レ詞而效レ忠、俗嫉妬而蔽レ賢兮。孰知二余之從容一。願舒レ志而抽レ馮兮庸レ詎知二其吉凶一。璋珪雜二於甑窒一兮、隴廉與二孟娵一同レ宮、擧レ世以爲二恒俗一兮、固將二愁苦而終窮一。幽獨轉而不レ寐兮。惟煩懣而盈レ匈。魂眇眇而馳騁兮。心煩寃之忡忡。

鳳皇のために鶉の籠を作る。(一)焉んぞ詞を陳べて忠を效さん。(二)翅を翕すと雖も其れ容れず。(三)靈皇其れ寤り知らず。俗嫉み妬んで賢を蔽ふ。(四)孰か余の從容を知らん。願くは志を舒べて馮を抽んでん。詎を庸つてか其吉凶を知らん。(五)璋珪甑窒に雜り、(六)隴廉と(七)孟娵と宮を同じくす。世を擧げて以て恒の俗となし、固に將に愁苦して終に窮らんとす。幽にして獨り轉じて寐ねられず。惟煩懣して匈に盈つ。魂眇眇として馳騁す。(八)心煩冤して忡忡たり。

(一) 鳳凰を鶉の籠に入れし如く、賢者を亂世に置く (二) 身を屈するも容れられず (三) 王之を悟らず (四) 道に安んずる貌 (五) 玉と土器とまじる (六) 醜婦の名 (七) 美女の名 (八) 憂ふる貌

志欲レ憾而不レ憺兮、路幽昧而甚難。塊獨

志欲み憾んで憺かならず。路幽昧にして甚だ難し。(一)塊獨にして此曲隅を守り、然く欿切して永く歎く。(二)脩夜に愁へて宛轉し。(三)氣涫灩して其れ波の若し。(四)剞劂

徙倚而彷徉。悵惝罔以永思兮。心紆軫而增㆑傷。倚躊躇以淹留兮。日饑饉而絶㆑糧。廓抱㆑景而獨倚兮。超永思㆓乎故鄉㆒。廓落寂而無㆑友兮。誰可㆔與玩㆓此遺芳㆒。白日晼晩其將㆑入兮。哀㆓余壽之弗㆒㆑將。車既弊而馬罷兮。蹇邅徊而不㆑能㆑行。身既不㆑容㆓於濁世㆒兮。不㆑知㆓進退之宜㆒㆑當。冠崔嵬而切㆑雲兮。劍淋離而從橫。衣攝葉以儲與兮。左袪挂㆓於榑桑㆒。右衽拂㆓於不周㆒兮。六合不㆑足㆓以肆行㆒。上同㆓鑿枘於伏戲㆒兮。下合㆓矩矱於虞唐㆒。願尊㆑節而式㆑高兮。志猶卑㆓夫禹湯㆒。雖㆑知㆑困其不㆑改㆑操兮。終不㆘以㆓邪枉㆒害㆖㆑方。世並舉而好㆑朋兮。壹㆓斗斛㆒而相量。衆比周以肩迫兮。賢者遠而隱藏。

肆に行くに足らず。(一四)上鑿枘を伏戲に同じくし。下矩矱を虞唐に合す。願くは節を尊んで高きに式らん。(一五)志猶ほ夫の禹湯を卑しむ。困しめらるゝを知ると雖も其れ操を改めず。(一六)終に邪枉を以て方を害せず。世並び舉りて朋を好すれども。(一七)斗斛を壹にして相量る。(一八)衆比周して以て肩迫し。賢者遠ざかりて隱れ藏る。

(一) 憂へ痛み　(二) 仕進の道塞がり、江河の渡り難きに似たり　(三) 崑崙山西北の山、淮南子に「鍾山の玉、之を燒くこと三日なるも、その色變ぜず」とあり　(四) 木の名　(五) 閬風板桐の諸山を窮む　(六) 水中を行くことを得ず、又室中を翔ることを得ず　(七) 失意する貌　(八) 獨、形影を守りて立ち　(九) 誰とともに正道を守らん　(一〇) 德をためらひて進まず　(一一) 彼よりて悦びざる貌　(一二) 不周山なり　(一三) 廣き天地も恣に行くに足らず　(一四) 伏羲に同じうし、法を堯舜に合す　(一五) 志禹湯より高く　(一六) 邪を以て正を害せず　(一七) 賢愚正邪を同一視す　(一八) 多くの小人、黨を結びて親しむ

懷二隱憂一而歷レ茲。心鬱鬱而無レ告兮。衆孰可二與深謀一。欿愁悴而委惰兮。老冉冉而逮レ之。

居二處愁一以隱約兮。志沈抑而不レ揚。道壅塞而不レ通兮。江河廣而無レ梁。願至二崑崙之懸圃一兮。采二鍾山之玉英一。擥瑤木之橝枝一兮。望二閬風之板桐一。弱水汨其爲レ難兮。路中斷而不レ通。勢不レ能二淩レ波以徑度一兮。又無二羽翼而高翔一。然隱憫而不レ逹兮。獨

愁へに居處して以て隱約し。志沈抑して揚らず。道壅塞して通ぜず。江河廣うして梁なし。願くは崑崙の懸圃に至り。鍾山の玉英を采らん。瑤木の橝枝を擥りて。閬風の板桐を望む。弱水汨として其れ難を爲し。路中斷して通ぜず。勢波を淩いで以て徑に度ること能はず。又羽翼して高く翔るなし。然して隱憫して逹せず。獨徙倚して彷徉す。悵として惝罔して已て永く思ふ。心紆ひ軫んで傷を增す。倚つて躊躇して以て淹留し。日に饑饉して糧を絕つ。廓として景を抱いて獨り倚り。超として永く故鄉を思ふ。廓落として寂にして友なし。誰か與に此遺芳を玩ぶべき。白日晼晩して其れ將に入らんとし。余が壽の將からざるを哀む。車既に弊れて馬罷れ。蹇邅徊して行く能はず。身既に濁世に容られず。進退の宜しく當るべきを知らず。冠崔嵬として雲を切り。劍淋離として從橫なり。衣攝葉して以て儲與し。左の袪榑桑に挂り。右の衽不周を拂ふ。六合以て

哀時命之不及古人兮。夫何予生之不遘時。往者不可扳援兮。徠者不可與期。志憾恨而不逞兮。杼中情而屬詩。夜炯炯而不寐兮。

巻之十四

哀時命 第十四

（王）哀時命は嚴夫子の作りし所なり。夫子名は忌、司馬相如と倶に辭賦を好み、梁に客遊し、梁の孝王甚だ之を奇重す。忌、屈原性を受くること忠貞なるも、明君に遭はずして暗世に遇へるを哀み、斐然として辭を作し、歎じて之を述ぶ。故に哀時命と曰ふ。

（一）時命の古の人に及ばざるを哀む。夫れ何ぞ予が生の時に遘はざる。往く者は扳ぢ援くべからず。（二）徠る者は與に期すべからず。志憾み恨みて逞からず。（三）中情を杼べて詩を屬す。夜（四）炯炯として寐ねられず。隱憂を懷いて玆を歷。心鬱鬱として告ぐるところ無し。衆孰か與に深く謀るべき。（五）欿として愁へ悴れて委惰すれば。老冉冉として之に逮べり。

（一）この世に生れ、古聖賢と時を同じうせざるを悲しむ　（二）將來の事は豫期すべからず　（三）情を述べて、詩を賦す　（四）心澄む貌　（五）心惓む

衆奔亡兮。騰駕橐駝。鉛刀進御兮、遥棄太阿。拔搴玄芝兮。列樹芋荷。橘柚萎枯兮。苦李旖旎。甂甌登於明堂兮。周鼎潛乎深淵。自古而固然兮。吾又何怨乎今之人。

列ね樹う。橘柚萎枯し。苦李旖旎す。(七)甂甌明堂に登り。周鼎深淵に潛む。(八)古より
して固より然り。吾又何ぞ今の人を怨みん。

(一)孔雀なり　(二)駿馬と駱駝なり　(三)駿馬逐れ、駑馬用ひらる　(四)鈍刀進み用ひられ、太阿の名劍棄てらる
(五)神草なり　(六)賤草なり　(七)瓦器貴まれ、鼎寶深淵に沈めらる　(八)古來みな此の如し、小人用ひられ賢士
斥けらるゝは古來の世の習ひのみ、余何ぞ今の人を怨みんや

欲ニ闔レ口而無レ言兮。嘗被ニ君之厚德。獨便悁而懷レ毒兮。愁鬱鬱之焉極。

口を闔ぢて言ふ無からんと欲するも。嘗て君の厚德を被る。(一)獨り便悁として毒を懷く。愁鬱鬱として焉にか極らん。

(一) 悁、善行をなし、却つて禍に逢ふ

念ニ三年之積思一兮。願壹見而陳レ詞。不ニ及レ君而騁レ說兮。世孰可ニ爲明レ之。身寢レ疾而日愁兮。情沈抑而不レ揚。衆人莫レ可ニ與論レ道兮。悲ニ精神之不レ通。

三年の積思を念ひ。願くは壹たび見えて詞を陳べん。(二)君に及んで說を騁せずんば。世孰か爲に之を明にすべけんや。身疾に寢ねて日に愁ふ。情沈抑して揚らず。衆人は與に道を論ずべき莫し。精神の通ぜざるを悲む。

(二) 已に賢君に遇ひて忠說を騁する能はず、則ち時世闇蔽、爲めに眞僞を明かにすべき無し

亂曰。鸞皇孔鳳日以遠兮。畜鳧駕鵞。鷄鶩滿ニ堂壇一兮。鼃黽游ニ乎華池。要

亂に曰く。(一)鸞皇孔鳳日に以て遠かり。畜鳧駕鵞。鷄鶩堂壇に滿つ。(二)鼃黽華池に遊び。(三)要褭奔亡し。槖駝を騰駕し。(四)鉛刀進み御し。遙に太阿を棄つ。(五)玄芝を拔き搴げ。(六)芋荷を

同レ音者相和兮。同レ類者相似。飛鳥號二其羣一兮。鹿鳴求二其友一。故叩レ宮而宮應兮。彈レ角而角動。虎嘯而谷風至兮。龍擧而景雲往。音聲之相和兮。言二物類之相感一也。

音を同じうする者は相和し。類を同じうする者は相似る。飛鳥其羣に號き。鹿鳴いて其友を求む。故に宮(一)を叩いて宮應じ。角(二)を彈じて角動く。虎嘯いて谷風至り。龍擧りて景雲(三)往く。音聲の相和する。物類の相感ずるを言ふなり。

(一)五音の一なり　(二)同上　(三)光彩ある雲

夫方圓之異レ形兮。勢不レ可二以相錯一。列子隱レ身而窮處兮。世莫レ可二以寄託一。衆鳥皆有二行列一兮。鳳獨翔翔而無レ所レ薄。經二濁世一而不レ得レ志兮。願側二身巖穴一而自託。

夫れ方圓の形を異にする。勢以て相錯るべからず。列子身を隱して窮處せしは。世以て寄託すべき莫ければなり(一)。

(一)世に僞り多く、身を託し難ければなり

衆鳥皆行列あるも(一)。鳳獨り翺翔して薄る所なし。濁世を經て志を得ず。願くは身を巖穴に側てて自ら託せん。

(一)我一人世俗と異なる高遠の志を抱きて遂に之を展ぶるを得ず

多レ曲兮。正法弧而不レ公。直士隱而辟匿兮。讒諛登二乎明堂一。

棄二彭咸之娯樂一兮。滅二巧倕之繩墨一。菎蕗雜二於廱蒸一兮。機二蓬矢一以射レ革。

駕二蹇驢一而無レ策兮。又何路之能極。以二直鍼一而爲レ釣兮。又何魚之能得。

伯牙之絶レ弦兮。無二鍾子期一而聽レ之。和抱レ璞而泣レ血兮。安得二良工一而剖レ之。

（一）彭咸の娯樂を棄て。巧倕の繩墨を滅し。（二）菎蕗（三）廱蒸に雜り。（四）蓬矢を機ちて以て革を射る。

（一）潔白の行を棄て、先王の法に背く（彭咸巧倕は前に解せり）（二）香草也（三）をがらと竹也（四）蓬の莖の矢也、脆きをいふ

（一）蹇驢を駕して策無ければ。又何の路か之れ能く極めん。（二）直鍼を以て釣を爲すも。又何の魚か之れ能く得ん。

（一）愚人に高位を與ふるをいふ（蹇はあしなへ也、策は鞭なり）（二）賢士を招くに禮を知らざるをいふ（鍼は針也）

（一）伯牙の弦を絶つは。鍾子期にして之を聽く無ければなり。（二）和璞を抱いて血に泣く。安ぞ良工を得て之を（三）剖かん。

（一）伯牙琴を破り絃を絶ちしは、鍾子期すでに死し、その音を聽くものなければなり（二）卞和なり、前に解す（三）治むるに同じ

路。當世豈無二騏驥一兮。誠無二王良之善馭一。見レ執レ轡者一非二其人一兮。故駒跳而遠去。

不レ量レ鑿而正レ枘兮。恐榘矱之不レ同。不レ論レ世而高擧兮。恐操行之不レ調。

弧弓弛而不レ張兮。孰云知二其所一レ至。無二傾危之患難一兮。焉知二賢士之所一レ死。

俗推レ佞而進レ富兮。節行張而不レ著。賢良蔽而不レ群兮。朋曹比而黨譽。邪說飾而

㊀鑿を量らずして枘を正すも。恐らくは榘矱の同じからざらんを。㊁世を論ぜずして高く擧るも。恐らくは操行の調はざらんを。

㊀規矩に解す　㊁世の濁れるを知らず、行を高くするも、衆人と調和し難からん

㊀弧弓も弛めて張らざれば。㊁孰か云に其の至る所を知らん。傾危の患難無くんば。㊂焉んぞ賢士の死する所を知らん。

㊀矢の遠きに達するを知らず　㊁賢士の義のために死するを知らず

㊀俗佞を推して富を進む。㊁節行張りて著れず。賢良蔽はれて羣せず。朋曹比して㊂黨譽し。邪說飾りて曲多く。正法弧りて公ならず。直士隱れて辟匿し。讒諛明堂に登る。

㊀佞人を推して賢しといひ、富者を進めて能ありといひ　㊁節操あるものは顯れず　㊂賢士は孤立し、小人は黨を結びて互に譽む

情以寂寞兮。然惆悵而自悲。

玉與石而同匱兮。貫魚眼與珠璣。駑駿雜而不分兮。服罷牛而驂驥。

年滔滔而日遠兮。壽冉冉而愈衰。心悇憛而煩寃兮。蹇超搖而無冀。

固時俗之工巧兮。滅規榘而改錯。却騏驥而不乘兮。策駑駘而取

〇(一)王の開眼をうかゞひ忠言を進めんことを願ふも　(二)その心に逆ひ、怒りに觸れんことを恐る　(三)よりて心を抑へて言はず、ひとり痛み悲しむ

(一)玉と石と匱を同じうし。魚眼と珠璣とを貫く。駑駿雜りて分れず。罷牛を服にし驥を驂にす。

〇(一)凡て賢愚正邪の區別なきをいふ(匱はひつ、罷牛は疲れたる牛なり)

(一)年滔滔として日に遠く。壽冉冉として愈ゝ衰ふ。(二)心悇憛して煩寃す。(三)蹇超搖して冀ふなし。

〇(一)年月は流水の如く去り　(二)憂ひ煩ふ　(三)心安からず

(一)固より時俗の工巧なる。規榘を滅して改め錯き。騏驥を却けて乘らず。駑駘に(二)策ちて路を取る。當世豈に騏驥無からん。誠に王良の善く馭する無し。轡を執る者を見るに其人に非ず。故に駒跳りて遠く去る。

〇(一)九辯に解す

媛兮。涕泣流乎於悒。我決死而不生兮。雖重追吾何及。戲疾瀨之素水兮。望高山之蹇産。哀高丘之赤岸兮。遂沒身而不反。

雖も吾れ何ぞ及ばん。疾瀨の素水に戲れ。高山の蹇産を望み。高丘の赤岸を哀み。遂に身を沒して反らず。

㊀姉女顔の引き留めしを思ひ　㊁再び追ひ來るも、余は故鄕に歸らざるべし

謬諫

怨靈修之浩蕩兮。夫何執操之不固。悲太山之爲隍兮。孰江河之可涸。願承間而效志兮。恐犯忌而干諱。卒撫

㊀靈修の浩蕩たるを怨む。夫れ何ぞ執操の固からざる。㊁太山の隍と爲るを悲む。孰か江河の涸ぐべけんや。

㊀楚王の心定りなく、志操の固からざるを悲しむ　㊁泰山崩れて隍（ほり）となり、江河決して涸ぎ竭きが如く、國漸く亂れ亡びんとせり

願はくは間を承けて志を效さんことを。㊂恐くは忌を犯して諱を干さんことを。㊃卒に情を撫して以て寂寞たり。然く怊悵して自ら悲む。

而偃蹇。舍二素水一而蒙深兮。目眇眇而既遠。哀二形體之離解一兮。神罔兩而無レ舍。惟椒蘭之不レ反兮。魂迷惑而不レ知レ路。願レ無レ過之設レ行兮雖二滅沒一之自樂。痛二楚國之流亡一兮。哀二靈脩之過到一。

(一)山石崔嵬、已の居るべき所に非ず、魂偃蹇くして止まり難し、之を去らんと欲す (二)白水也、遠行すとも清白の節を失はずと也

形體の離解を哀み。(一)神罔兩として舍する無し。惟椒蘭の反らざる。魂迷惑して路を知らず。(二)過なきを願ひて行を設け。滅沒すと雖も自ら樂まん。楚國の流亡を痛み。(三)靈脩の(四)過到を哀む。

(一)精神の據依して舍止する所なきを哀む (二)行に過なきを願ひ、身亡ぶるも安んじ樂む (三)國土をさしていふ (四)過りて隱行をなすを悲しむ

固時俗之溷濁兮。志瞀迷而不レ知レ路。念二私門之正匠一兮。遙涉レ江而遠去。念二女須之嬋

固より時俗の溷濁なる。(一)志瞀迷して路を知らず。(二)私門の正匠を念ひ。遙に江を渉りて遠く去る。

(一)心迷ひて行く所を知らず (二)匠は教也、衆臣皆其私を營み相教ふるに利を以てす、之を念ひて忍びず遠く去らんとす

(一)女須の嬋媛たるを念ひ。涕泣流れて於悒す。我死を決して生きず。(二)重ねて追ふと

侍之潔白一兮。遭二亂世一而離レ尤。惡二耿介之直行一兮。世溷濁而不レ知。何君臣之相失兮。上二沅湘一而分離。

の相失へる。沅湘に上りて分離す。

㊀ 忠直の人の惡まるゝは、君の心暗くして、之を用ふるを知らざるに依る ㊁ 忠臣は沅湘に放逐せられ君臣分離す

測二汨羅之湘水一兮。知二時固而不レ反。傷二離散之交亂一兮。遂側レ身而既遠。

汨羅の湘水を測る。知る時固にして反らざるを。離散の交ゝ亂るゝを傷み。遂に身を側てて既に遠ざかる。

㊀ 長沙、湘陰の川にして湘水に注ぐ ㊁ 身を汨羅の水に沈め、楚國に歸らざるべし

處二玄舍之幽門一兮。穴二巖石一而窟伏。從二水蛟一而爲レ徒兮。與二神龍一乎休息。

玄舍の幽門に處り。巖石に穴して窟伏し。水蛟に從うて徒を爲し。神龍と休息せん。

㊀ 己れ德を修むれども用ひられず、退きて巖穴の中に伏せんと欲すと也

何山石之嶄巖兮。靈魂屈

何ぞ山石の嶄巖たる。靈魂屈して偃蹇す。素水を含みて蒙深。目眇眇として既に遠し。

望兮。好二桂樹之冬榮一。觀二天火之炎煬一兮。聽二大壑之波聲一。引二八維一以自道兮。含二沆瀣一以長生。

き。(二)八維を引きて以て自ら道き。(三)沆瀣を含みて以て長生す。

● (一)天火の燃ゆるを見、大海の波聲を聽き ● (二)天の八維をとりて進み（維はつななり） ● (三)仙界清和の氣を吸ひて長生す

居不レ樂以時思兮。食二草木之秋實一。飲二菌若之朝露一兮。構二桂木一而爲レ室。雜二橘柚一以爲レ囿兮。列二辛夷與二椒楨一。鶤鶴孤而夜號兮。哀二居者之誠貞一。

居樂まず以て時に思ひ。草木の秋實を食ひ。(一)菌若の朝露を飲み。桂木を構へて室となし。橘柚を雜へて以て囿となし。辛夷と椒楨とを列す。(二)鶤鶴孤にして夜號き。居者の誠貞を哀む。

● (一)居所を潔くし、飲食を香しくするをいふ ● (二)余の隱れて誠忠なるを悲しむ

哀命

哀二時命之不一レ合兮。傷二楚國之多一レ憂。內懷二

時命の合はざるを哀み。楚國の憂多きを傷む。內情の潔白を懷き。亂世に遭ひて尤に離ふ。(一)耿介の直行を惡むは。世溷濁して知らざればなり。何ぞ君臣

至而徘徊兮。疾風過之湯湯。聞南藩樂而欲往兮、至會稽而且止。見韓衆而宿之兮。問天道之所在。

（一）南藩の樂しきを聞きて往かんと欲し。會稽に至りて且く止る。（二）韓衆に見えて之に宿り。天道の在る所を問ふ。

㊀南國の樂しきを聞きて往かんとし、會稽山に至りて暫く留る　㊁仙人韓衆に見え、天道長生の道を問ふ

借浮雲以送予兮。載雌霓而爲旌。駕青龍以馳鶩兮。班衍衍之冥冥。忽容容其安之兮。超慌忽其焉如。苦衆人之難信兮。願離羣而遠擧。

浮雲を借りて以て予を送り。雌霓を載てて旌となす。青龍に駕して以て馳鶩し。（一）班衍衍として（二）冥冥たり。

㊀長くうねる貌　㊁遙かなる貌

忽容容として其れ安にか之く。超慌忽として其れ焉にか如く。衆人の信じ難きを苦み。（一）願はくは羣を離れて遠く擧らん。

㊀世俗を離れて遠を去らん事を願ふ

登巒山而遠

巒山に登りて遠く望み。桂樹の冬榮を好し。（一）天火の炎煬を觀。大壑の波聲を聽

孰能施ニ於無報一。苦ニ衆人之皆然一兮。乘レ風而遠遊。

(一)故舊の忠臣は日に疎んぜられ、新進の佞人は日に親まる　(二)人の見ざる所に善を行ふものなく、君の報いざる所に忠を致すもの少し　(三)遠く天外に遊ぶ

淩ニ恆山一其若レ陋兮。聊愉娛以忘レ憂。悲ニ虛言之無レ實兮。苦ニ衆口之鑠レ金。過ニ故鄕一而一顧兮。泣歔欷而霑レ衿。

(一)恆山を淩ぎ其れ陋なるが若し。聊か愉娛して以て憂を忘る。虛言の實なきを悲み。衆口の金を鑠すを苦む。故鄕を過ぎて一顧し。(二)泣歔欷して衿を霑す。

(一)恆山に登れば、高き峰も低く見ゆ　(二)すゝりなきして涙のたゞに衿をぬらす

厭ニ白玉一以爲レ面兮。懷ニ琬琰一以爲レ心。邪氣入而感レ內兮。施ニ玉色一而外淫。

(一)白玉を厭けて以て面と爲し。琬琰を懷きて以て心と爲す。(二)邪氣入りて內に感じ。玉色を施して外淫ふ。

(一)行を潔くし、內心外貌、ともに玉の如し　(二)邪氣外より入るも、心少しも變らず、玉の外うるはひて內明なるが如し

何靑雲之流瀾兮。微霜降之蒙蒙。徐風

何ぞ靑雲の流瀾なる。微霜降りて(一)蒙蒙たり。徐風至りて徘徊し。疾風過ぎて湯湯たり。

(一)盛なる貌(佞人羣聚して虛辭を造作するに喩ふ)

其若レ湯。

氷炭不レ可二以相並一兮。吾固知二乎命之不一レ長。哀二獨苦死之無一レ樂兮。惜二予年之未一レ央。

悲レ不レ反二余之所一レ居兮。恨レ離二予之故鄕一。鳥獸驚而失レ羣兮。猶高飛而哀鳴。狐死必首レ丘兮。夫人孰能不レ反二其眞情一。

故人疏而日忘兮。新人近而兪好。莫三能行二於杳冥一兮。

氷炭以て相並ぶべからず。吾固より命の長からざるを知る。獨り苦死して樂なきを哀み。(一)予が年の未だ央きざるを惜む。

(一) 年齡未だ盡きざるに、非命に死するを悲む

余の居る所に反らざるを悲み。予の故鄕に離るゝを恨む。鳥獸驚きて羣を失ふも。猶ほ高飛して哀鳴す。狐死するときは必ず丘に首す。(二)夫れ人孰か能く其眞情に反らざらん。

(二) 死する時、鄕里の情を起さゞるものなからん

(一)故人疏んぜられて日に忘られ。新人近きて兪ゝ好せらる。(二)能く杳冥に行ふ莫し。(二)孰か能く無報に施さん。衆人の皆然るを苦み。(三)風に乗りて遠く遊ぶ。

鳥飛而高翔。願壹往而徑逝兮。道壅絕而不通。

居二愁懃一其誰告兮。獨永思而憂悲。內自省而不レ慙兮。操愈堅而不レ衰。隱三年而無レ決兮。歲忽忽其若レ頹。憐下余身不レ足二以卒一レ意兮。冀一見而復歸。

自悲

愁懃に居りて其れ誰にか告げん。獨り永く思うて憂悲す。內に自ら省みて慙ぢず。操愈〻堅くして衰へず。(一)隱るゝこと三年にして決するなし。歲忽忽として其れ頽るゝが若し。余が身の以て意を卒ふるに足らざるを憐み。冀くは一たび見えて復た歸らん。

(一) 隱るゝこと三年に及びしも、運命未だ定まらず

哀二人事之不幸一兮。屬二天命一而委二之咸池一。身被レ疾而不レ閒兮。心沸熱

人事の不幸を哀む。(一)天命に屬して之を咸池に委す。身疾を被りて(二)閒えず。(三)心沸熱して其れ湯の若し。

(一) 運命を天に委ぬ（咸池は天の神なり） (二) 少しの快き間もなし (三) 心わきかへりて湯の如し（もだえ苦しみて堪へかたきをいふ）

怨思

賢士窮而隱處兮。廉方正而不容。子胥諫而靡軀兮。比干忠而剖心。子推自割而飤君兮。德日忘而怨深。行明白而日黑兮。荊棘聚而成林。

賢士窮して隱處し。廉方正にして容れられず。子胥諫めて(一)軀を靡し。比干忠にして心を剖かれ。(二)子推自ら剖きて君に飤はしめ。(三)德日に忘れられて怨深し。行明白にして日に黑く。(四)荊棘聚りて林を成す。

(一)身を失ひ　(二)晉の文公秦楚に走り、路に餓えんとせし時、介子推自ら股を割きその肉を獻ぜしも　(三)その德日に忘れられ、子推怨みて汶上の山に隱る　(四)いばら集りて林をなす如く、讒人集りて君を蔽はす

江離棄於窮巷兮。蒺藜蔓乎東廂。賢者蔽而不見兮。讒諛進而相朋。梟鴞並進而俱鳴兮。鳳

(一)江離窮巷に棄てられ。蒺藜東廂に蔓る。賢者蔽はれて見えず。讒諛進みて相朋せり。梟鴞並び進んで倶に鳴き。鳳皇飛んで高く翔る。(二)願くは壹たび往きて徑に逝かん。道壅絕して通ぜず。

(一)香草遠く棄てられ、惡草近くはびこる(廂はひさしなり)　(二)一たび君に見え、忠言を進めんとすれども、讒人に妨げられて果さず

眇而無ㇾ所㆓歸薄㆒。專㆓精爽㆒而以明兮。晦冥冥而壅蔽。年既已過㆓太半㆒兮。然轗軻而留滯。欲㆓高飛而遠集㆒兮。恐離ㇾ罔而滅敗。獨寃抑而無ㇾ極兮。傷㆓精神㆒而壽夭。皇天既不㆓純命㆒兮。余生終無ㇾ所ㇾ依。願自沈㆓於江流㆒兮。絕㆓横流㆒而徑逝。寧爲㆓江海之泥塗㆒兮。安能久見㆓此濁世㆒。

㊀ 心を君に通ずるを得ず ㊁ 東西にさまよひて依り所なし ㊂ 專ら忠を盡し、耳目を明にして君を助けんとするも ㊃ 小人に壅蔽せられて進むを得ず

(一)年既に已に太半を過ぐ。然も轗軻して留滯す。(二)高く飛びて遠く集らんと欲するも。恐らくは罔に離りて滅敗せん。獨り寃抑して極なし。(三)精神を傷けて壽夭せん。

㊀ 年すでに五十を過ぎ、不遇にして逆境にとゞまる ㊁ 遠く他方に逃れんとするも、罪に觸れ、忠厚の志を敗破すべし ㊂ 心を傷め、年齡短からん

(一)皇天既に純命ならず。余が生終に依る所なし。願くは自ら江流に沈み。横流を絕りて徑に逝かん。(二)寧ろ江海の泥塗と爲るとも。安んぞ能く久しく此の濁世を見んや。

㊀ 天命明かならず ㊁ 寧ろ江中の泥となるも、久しく濁世を見るに忍びず

事。
悲二楚人之和
氏一兮。獻二寶玉一
以爲レ石。遇二厲
武之不一レ察兮。
羌兩足以畢
斵。
小人之居レ勢
兮。視二忠正一之
何若。改二前聖
之法度一兮。喜二
囁嚅一而妄作。
親二讒諛一而疏二
賢聖一兮。訟二謂
閭娵一爲二醜惡一。
愉二近習一而蔽
遠兮。孰知二察
其黑白一。
卒不レ得レ效二其
心容一兮。安眇

楚人の和氏を悲む。寶玉を獻じて以て石とせらる。厲武の察せざるに遇ひ。羌（一）兩足以て畢く斵らる。

（一）楚の卞和、嘗て寶玉のあらたまを得、之を厲王に獻ぜり、ある人そしりて石なりといふ、王怒りて卞和の左足を斷つ、後また之を武王に獻ぜしに武王怒りてその右足を斷つ、卞和乃ち璞を抱きて荊山の下に泣き、悲極つて涙につぐに血を以てせしといふ（身に智德を備ふるも、君に用ひられざるに喩ふ）

（一）小人の勢に居る。忠正を視る何若ぞや。前聖の法度を改め。（二）囁嚅を喜んで妄作し。讒諛を親んで賢聖を疏んじ。（三）閭娵を訟謂して醜惡と爲し。（四）近習を愉んで蔽遠す。孰か其黑白を知察せん。

（一）小人勢位を得る時は、いかに忠正の人を視るか　（二）利害を謀りてさゝやき合ひ　（三）美人をそしりて醜しといひ　（四）小人を近づけ喜び、君子を忌み遠く

（一）卒に其心容を效すを得ず。（二）安眇眇として歸り薄く所なし。（三）精爽を專にして以て自ら明さんとし。（四）晦冥冥として壅蔽せらる。

之濁世一兮。今安所レ逹ニ乎吾志一。

意有レ所レ載而遠逝兮。固非ニ衆人之所レ識。驥躊ニ躇於弊輦一兮。遇ニ孫陽一而得レ代。呂望窮困而不レ聊レ生兮。遭ニ周文一而舒レ志。甯戚飯レ牛而商歌兮。桓公聞而弗レ置。

(一)意載する所ありて遠く逝く。固より衆人の識る所に非ず。(二)驥弊輦に躊躇し。孫陽に遇ひて代るを得。(三)呂望窮困して生を聊んぜず。周文に遭ひて志を舒ぶ。甯戚牛を飯ひて商歌す。桓公聞きて置かず。

(一)忠誠の心を抱きて遠く去る　(二)千里の馬も敗車に繋がるれば走ることを得ず、伯樂に遇ひて、始めてその能を顯はすなり（孫陽は伯樂の姓名なり）　(三)以下の故事歷々前に解す

路室女之方桑兮。孔子過レ之以自侍。吾獨乖剌而無レ當兮。心悼怵而耄思。思ニ比干之怦怦一兮。哀ニ子胥之愼一。

(一)路室の女の方に桑する。孔子之に過ぎて以て自ら侍す。(二)吾獨り乖剌して當る無し。心悼怵して耄思す。(三)比干の怦怦たりしを思ひ。子胥の事を愼みしを哀む。

(一)孔子出でて遊びし時、客舍の女まさに桑を採り、心を專一にして他を見ず、孔子之を喜び己に侍せしめたり　(二)余ひとり明君に知られず、心傷み惱む　(三)比干の直直なりしを思ひ、伍子胥の死後まで國を憂ひしを悲む

加。棄三捐藥芷與二杜衡一兮。余奈二世之不一レ知芳何。何周道之平易兮。然蕪穢而險戲。高陽無レ故而委レ塵兮。唐虞點灼而毀議。誰使レ正二其眞是一兮。雖レ有二八師一而不レ可レ爲。

如く、佞人親近せられ虛僞の輩時を得たり（床第に御すは君に親まるゝをいひ、踸踔はほしいまゝに長じ茂るをいふ）（四）詩に「周道砥の如く、その直きこと矢の如し」とあり、周の政道の平易公正なるをいふ（五）顓頊高陽氏は共工氏と天下を爭ひ故なくして塵に汚され（六）堯舜は德明かなるも、なほ不慈の譏を受けたり（七）堯舜に忠臣八人ありしも、小人の讒を拒ぐことを得ず

皇天保二其高一兮。后土持二其久一。服二清白一以逍遙兮。偏與二乎玄英一異レ色。西施媞媞而不レ得レ見兮。嫫母勃屑而日侍。桂蠹不レ知レ所二淹留一兮。蓼蟲不レ知レ徙二乎葵菜一。處二湣湣

皇天其高きを保ち。后土其久しきを持す。（一）淸白を服して以て逍遙し。偏に玄英と色を異にせん。（二）西施媞媞として見ゆるを得ず。嫫母勃屑して日に侍す。（三）桂蠹淹留する所を知らず。蓼蟲葵菜に從ることを知らず。湣湣の濁世に處り。今安んぞ吾が志を達する所あらん。

（一）身を潔くして道に遊び、小人と行を異にすべし（玄英は純黑なり、潔白に對していふ）（二）賢人疎んぜられ、小人親まるゝにたとふ（西施は美人、媞々は美しき貌、嫫母は醜女、勃屑は膝行するなり）（三）潔白の人位を保ち難く貪濁の人害に罹らざるにたとふ（桂蠹は桂を食む虫、蓼虫はたでを食ふ虫、葵菜は甘菜なり）

輕積而折レ軸兮。原咎雜而累重。赴二湘沅之流澌一兮。恐逐レ波而復東。懷二沙礫一而自沈兮。不レ忍レ見二君之蔽壅一。

湘沅の流澌に赴くも。(一)恐らくは波を逐ひて復た東せん。沙礫を懷きて自ら沈み。(二)君の蔽壅を見るに忍びず。

㊀東に流れて大海に入らん ㊁君の蔽さるゝを見るに忍びず

怨世

世沈淖而難レ論兮。俗岭峨而嵾嵯。清泠泠而殲滅兮。溷湛湛而日多。梟鴞既以成レ羣兮。玄鶴弭レ翼而屏移。蓬艾親入御二於床第一兮。馬蘭踸踔而日

(一)世沈淖して論じ難く。俗岭峨にして嵾嵯たり。(二)清泠泠として殲滅し。溷湛湛として日に多し。梟鴞既に以て羣を成し。玄鶴翼を弭めて屏き移る。(三)蓬艾親しく入りて床第に御し。馬蘭踸踔して日に加はる。葯芷と杜衡とを棄捐し。余世の芳を知らざるを奈何せん。(四)何ぞ周道の平易にして。然く無穢にして險戲なる。(五)高陽故なくして塵に委し。(六)唐虞點灼して毀議せらる。誰か其眞是を正さしめん。(七)八師ありと雖も爲すべからず。

㊀世人利慾に溺れて事理を論じ難く ㊁清廉の人は日に少く、溷濁の人は日に多し ㊂惡草の蓬艾馬蘭茂る

不二開寤一而難ㇾ道兮。不ㇾ別二横之與一ㇾ縦。聽二姧臣之浮説一兮。絶二國家之久長一。滅二規榘一而不ㇾ用兮。背二繩墨之正方一。

開寤せずして道き難し。横と縦とを別たず。姧臣の浮説を聽き。國家の久長を絶ち。規榘を滅して用ひず。繩墨の正方に背く。

(一)王はたは前非を悟らず、故に善に導き難し　(二)古人の遺法を用ひず、仁義の道に背く

離二憂患一而乃寤兮。若ㇾ縦二火於秋蓬一。業失ㇾ之而不ㇾ救兮。尚何論二乎禍凶一。

憂患に離ひて乃ち寤るも。火を秋蓬に縱つが若し。業に之を失ひて救はず。尚ほ何ぞ禍凶を論ぜん。

(一)國難へ、憂に遭ひて後に悟るも、火を秋草に放てる如く之を救ふこと難かるべし（秋草は枯れて燃え易ければなり）　(二)すでに道を失ひ身を危うせば、國の禍を論ずるも詮なし

彼離畔而朋黨兮。獨行之士其何望。日漸染而不二自知一兮。秋毫微哉而變ㇾ容。衆

彼離畔して朋黨す。獨行の士其れ何をか望まん。日に漸く染みて自ら知らず。秋毫微哉にして容を變ず。衆輕積りて軸を折り。衆咎雑りて累重なる。

(一)讒佞の徒道にそむきて朋黨をなす　(二)日に邪惡に染みて、自ら覺らず　(三)微細の事も積れば其容を變じ　(四)小さきものも、多くを積めば車軸を折る　(五)小さき過も、集れば身の累を重ぬ

退而毀敗兮。虛偽進而得ㇾ當。

追ニ悔過一之無ㇾ及兮。豈盡ㇾ忠而有ㇾ功。廢ニ制度一而不ㇾ用兮。務行ㇾ私而去ㇾ公。

終不ㇾ變而死ㇾ節兮。惜ニ年齒之未ㇾ央。將ニ方ㇾ舟而下ㇾ流兮。冀ニ幸君之發ㇾ曚。

痛ニ忠言之逆ㇾ耳兮。恨ニ申子之沈ㇾ江。願ㇾ悉ニ心之所ㇾ聞兮。遭ニ値君之不ㇾ聰。

(一)過を追悔するも及ぶ無し。(二)豈忠を盡して功あらんや。制度を廢して用ひず。(三)務めて私を行ひて公を去る。

(一)虛偽の臣を進用し國家傾危す、追悔するも及ぶなし (二)己れ忠直の節を盡さんと欲するも其功を成す能はず (三)公正に背きて私利を專らとす

(一)終に變ぜずして節に死せんとし。(二)年齒の未だ央きざるを惜む。將に舟を方べて流を下らんとし。(三)君の曚を發かんことを冀幸す。

(一)終に忠貞の道を變へず、節義に死せんとし (二)天壽未だ盡きざるに、死に逢へるを惜む (三)王の萬一にも蒙より覺めん事を冀む

忠言の耳に逆ふを痛み。(一)申子の江に沈むを恨む。(二)心の聞くところを悉さんことを願ひ。君の聰ならざるに遭値す。

(一)伍子胥(申に封ぜらる、故に申子といふ) (二)聞く所を述べ、政を輔けんと欲し、君の聰明ならざるに遭へり

浮雲陳而蔽晦兮。使二日月乎無レ光。忠臣貞而欲レ諫兮。讒諛毀而在レ旁。

秋草榮其將レ實兮。微霜下而夜降。商風肅而害生兮。百草育而不レ長。衆並諧以妬レ賢兮。孤聖特而易レ傷。

(一)浮雲陳じて蔽晦し。日月をして光なからしむ。忠臣貞にして諫めんと欲するも。讒諛毀りて旁に在り。

(一)浮雲空にひろがりて日月の光をおほひくらくす

秋草榮えて其れ將に實らんとし。微霜下りて夜降る。(一)商風肅として害生じ。百草育して長ぜず。(二)衆並び諧ひて以て賢を妬み。(三)孤聖特にして傷み易し。

(一)秋風淋しく吹き、草木を傷ふ　(二)小人心を併せて、賢人を妒み　(三)聖人孤獨にして心悲みやすし

懷二計謀一而不レ見レ用兮。巖穴處而隱藏。成功隳而不レ卒。兮。子胥死而不レ葬。

世從レ俗而變化兮。隨レ風靡而成レ行。信直

計謀を懷きて用ひられず。巖穴に處りて隱藏す。(一)成功隳れて卒へず。(二)子胥死して葬られず。

(一)功あるも終りを全うせず　(二)伍子胥劍を賜ひて死し、屍を江に棄てらる

世俗に從ひて變化し。風に隨ひて靡きて行を成さん。信直退けられて毀敗し。(一)虛僞進みて當を得。

(一)虛僞の人、進みて當路の高位を得

明二法令一而修理兮。蘭芷幽而有レ芳。苦二衆人之妬一レ予兮。箕子寤而佯狂。不レ顧レ地以貪レ名兮。心怫鬱而内傷。

聯二蕙芷一以爲レ佩兮。過二鮑肆一而失レ香。正臣端二其操行一兮。反離レ謗而見レ攘。

世俗更而變化兮。伯夷餓二於首陽一。獨廉潔而不レ容兮。叔齊久而逾明。

法令を明にして修理すれば。（一）蘭芷幽にして芳あり。衆人の予を妬むを苦む。箕子寤りて佯り狂し。（二）地を顧みずして以て名を貪り。（三）心怫鬱として内に傷む。

㊀幽地の蘭も香る如くに、隱士みな賢名を揚ぐ　㊁國を棄てゝ去り潔白の名を貪るとも　㊂心なほ結ぼれて傷む

蕙芷を聯ねて以て佩と爲すも。（一）鮑肆を過ぐれば香を失ふ。正臣其操行を端しうするも。反つて謗に離ひて攘けらる。

㊀乾魚の市（惡臭深きをいふ）

世俗更りて變化し。伯夷首陽に餓う。獨り廉潔にして容れられず。（一）叔齊久しうして逾〻明なり。

㊀伯夷叔齊の名、年を經ていよ〳〵顯はる

失兮。覽私微之所傷。堯舜聖而慈仁兮。後世稱而弗忘。
齊桓失於專任兮。夷吾忠而名彰。晉獻惑於驪姬兮。申生孝而被殃。
偃王行其仁義兮。荊文寤而徐亡。紂暴虐以失位兮。周得佐乎呂望。修往古以行恩兮。封比干之丘隴。賢俊慕而自附兮。日浸淫而合同。

て忘れず。

（一）古代より道に順ふものは榮え、道に背くものは衰へ、私曲陰微の言葉は遂は國を亡すを傷む

（一）齊桓專任に失し。（二）夷吾忠にして名彰る。（三）晉獻驪姬に惑ひ。申生孝にして殃せらる。

（一）齊の桓公重く易牙豎刁の二人を用ひ、政を之に委ねて國を亂し （二）管仲（字は夷吾）桓公を諫めて納れられざりしりも、獨り忠名を顯はせり （三）晉の獻公驪姬に迷ひて太子申生を廢し、遂に驪姬の孫をたてし、申生孝にして禍に遭へり

（一）偃王其仁義を行ひ。（二）荊文寤りて徐亡ぶ。紂暴虐にして以て位を失ひ。（三）周佐を呂望に得。（四）往古を修めて以て恩を行ひ。比干の丘隴を封ず。賢俊慕ひて自ら附き。（五）日に浸淫して合同せり。

（一）徐の偃王、よく仁道の消を行ひ、諸侯の歸服するもの三十餘國に及べり （二）楚の文王、徐國の盛んなるを患へ、兵を起して之を撃ち、遂に之を亡せり （三）周は太公望呂尚の輔けを得 （四）古聖人の道を修めて恩を施し、比干の墓を封じ （五）是日に盛に、遂に四海を合せ保てり

翔兮。當レ道宿。擧世皆然兮。余將ニ誰告一。斥ニ逐鴻鵠一兮。近ニ習鴟梟一。斬ニ伐橘柚一兮。列ニ樹苦桃一。便娟之脩竹兮。寄ニ生乎江潭一。上葳蕤而防露兮。下泠泠而來風。孰知ニ其不一レ合兮。若ニ竹柏之異一レ心。

の情を告ぐべきものなし

鴻鵠(一)を斥逐し。鴟梟を近習し。橘柚を斬伐し。苦桃を列樹す。便娟(二)の脩竹。江潭に寄生す。上(三)葳蕤して露を防ぎ。下泠泠として來り風く。孰(四)か其の合はざるを知らん。竹柏の心を異にするが若し。

(一) 凡ゝ賢を遠け邪を近くるに喩ふ (二) 美しき竹ありて潭上に寄生せり（屈原に喩ふ） (三) 上は茂りて雨露を蔽ひ下は涼くして清風を送る（王に勸め民を憐むに喩ふ） (四) 王と屈原との合はざるは竹と栢との心異なるが如し

往者不レ可レ及兮。來者不レ可レ待。悠悠蒼天兮。莫ニ我振理一。竊怨ニ君之不一レ寤兮。吾獨死而後已。

往者は及ぶべからず。來者は待つべからず。悠悠(一)たる蒼天。我を振理する莫し。竊(二)に君の寤らざるを怨む。吾獨り死して後已まん。

(一) 古人はすでに追ふべからず、未來の知己は待つべからず (二) 蒼天余を救ふことなし

沈江

惟往古之得

惟(一)れ往古の得失。私微の傷ふ所を覺る。堯舜の聖にして慈仁なる。後世稱し

褊能兮。聞見又寡。數言二便事一兮。見レ怨二門下一。

(一)屈原楚國に生れ、君に遠けられて原野に住む　(二)言語に拙く、朋友の輔けもなし　(三)智淺く能少く　(四)屡々忠言を進め、國政に便ぜんとせしも、却つて近臣に怨まれたり

王不レ察二其長利一兮。卒見レ棄二乎原壄一。伏念思レ過兮。無二可レ改者一。羣衆成レ朋兮。上浸以惑。

(一)王其長利を察せず。卒に原壄に棄てらる。(二)伏して念ひ過を思ふも。改むべき者無し。(三)羣衆朋を成し。上浸以て惑ふ。

(一)王その言の利あるを察せず　(二)自ら省みるに改むべき過なし　(三)衆人黨をなし王之に惑へるなり

巧佞在レ前兮。賢者滅息。堯舜聖已沒兮。孰爲二忠直一。

巧佞前に在れば。賢者滅息す。(一)堯舜の聖已に沒しぬ。孰か忠直を爲さん。

(一)堯舜の聖明今已に沒せり、誰が爲めにか忠直を盡さん

高山崔巍兮。水流湯湯。死日將至兮。與二麋鹿一同レ坑。塊

高山崔巍たり。水流湯湯たり。(一)死する日將に至らんとす。(二)麋鹿と坑を同じうせん。(三)塊鞠として道に當りて宿す。(四)擧世皆然り。余將に誰にか告げんとする。

(一)流の盛なる貌　(二)鹿の類と同じ穴に葬らんとす　(三)孤獨にして親なき貌　(四)世人みな僞りを行ひ、忠信

卷之十三

七諫 第十三

（王）七諫は東方朔の作りし所なり。諫とは正なり。法度を陳べて以て君を諫正するを謂ふなり。古者人臣三たび諫めて從はざれば、退いて放を待つ。屈原は楚と同姓なり。相去るの義なし。故に加へて七諫をなす。慇懃の意忠厚の節なり。或は曰く、七諫は天子に爭臣七人あるに法るなりと。東方朔、屈原を追憫し、故にこの辭を作りて以てその志を述ぶ。忠信を昭にし、曲朝を矯むる所以なり。

初放

平生二於國一兮。長二於原壄一。言語訥澀兮。又無二彊輔一。淺智

（一）平國に生れて原壄に長ず。（二）言語訥澀にして。又彊輔なし。（三）淺智褊能にして。聞見又寡し。數〻便事を言ひて。門下に怨まる。

麚兮或騰或倚。狀貌崟崟兮峨峨。淒淒兮漇漇兮。獼猴兮熊羆。慕レ類兮以悲。

攀ニ援桂枝ー兮聊淹留。虎豹鬭兮熊羆咆。禽獸駭兮亡ニ其曹ー。王孫兮歸來。山中兮不レ可ニ以久留ー。

桂枝を攀ぢ援いて聊か淹留す。虎豹鬭ひて熊羆咆え。禽獸駭いて其曹を亡ふ。王孫歸り來れ。山中には以て久しく留るべからず。

㊀ 禽獸驚き走りて羣を失ふ

谷嶄巖兮水曾波。猨狖羣嘯兮虎豹嘷。攀ニ援桂枝一兮聊淹留。

王孫游兮不レ歸。春草生兮萋萋。歲暮兮不ニ自聊一。蟪蛄鳴兮啾啾。坱兮軋山曲岪。心淹留兮洞荒忽。罔兮沕憭兮慄虎豹蚙。叢薄深林兮人上慄。

嶔崟碕礒兮、碅磳磈硊。樹輪相糺兮林木茷骫。青莎雜レ樹兮薠草靃靡。白鹿麏

(一)人跡稀なる地 (二)枝葉相交り卷曲し茂る (三)山氣重疊し、石嶮しく峙つ (四)桂樹の芳潔なるを愛し、その枝を攀いて暫くとゞまる

(一)王孫游んで歸らず。(二)春草生ひて萋萋たり。歲暮れて自ら聊からず。(三)蟪蛄鳴いて(三)啾啾たり。(四)坱軋として山曲岪し。(五)心淹留して洞んで荒忽たり。(六)罔として(七)沕れ(八)憭として慄き虎豹蚙せり。叢薄深林人上り慄る。

(一)屈原をいふ (二)春草萋々たる時より、歲の暮れんとする時まで、自ら安んじたのしむを得ず (三)今や秋蟬(ひぐらし)鳴いて啾々たり(啾々は虫の聲のかまびすしき貌) (四)霧深くして山盤曲し (五)心なほ留らんとするも、いたみ憂ひて恍惚たり (六)失意する貌 (七)心ひそみかくるゝ也 (八)懼るゝ貌

(一)嶔崟碕礒碅磳磈硊たり。(二)樹輪相糺りて林木茷骫たり。(三)青莎樹に雜りて薠草靃靡たり。白鹿麏麚或は騰り或は倚る。(四)狀貌崟崟として峨峨たり。(五)凄凄として漇漇たり。獼猴熊羆。類を慕つて以て悲む。

(一)山嶮しく巖亂れ峙つ貌 (二)林樹相交はり枝葉亂れ茂る(輪は幹枝相交り、形、車輪の如きをいふ) (三)草の蕤柔かになびく (四)角の高き狀を形容していふ (五)毛色の濡るゝ如き貌

桂樹叢生兮山之幽。偃蹇連蜷兮枝相繚。山氣巃嵸兮石嵯峨。谿

卷之十二

招隱士 第十二

(王)招隱士は淮南小山の作りし所なり。昔淮南王安、博雅にして古を好み。天下俊偉の士を招懷し、八公の徒より咸その德を慕ひてその仁に歸し、各々才智を竭して篇章を著作し、辭賦を分造し、類を以て相從ふ。故に或は小山と稱し、或は大山と稱す。その義猶ほ詩に小雅大雅あるが如し。小山の徒、屈原を閔傷し、又その文、天に昇り雲に乘じ、百神を役使して仙者の若きに似、身沈沒すと雖も名德顯聞し、山澤に隱處するものと異るなきを愍む。故に招隱士の賦を作り、以てその志を章にするなり。

(一)桂樹山の幽に叢生す。(二)偃蹇連蜷として枝相繚れり。(三)山氣巃嵸として石嵯峨たり。谿谷嶄巖として水曾ねて波たち。猨狖羣嘯して虎豹嘷ゆ。(一)桂枝を攀ぢ援いて聊か淹留す。

彼聖人之神徳兮。遠二濁世一而自藏。使下麒麟可レ得二羈而係一兮。又何以異二乎犬羊一。

（一）彼の聖人の神徳ある。濁世に遠りて自ら藏る。（二）麒麟をして羈して係ぐことを得べからしめば。又何を以て犬羊に異ならん。

（一）聖人は濁世に遠かり危害を避けて隱るゝなり　（二）麒麟を束縛して飼ふことを得しめば、その平凡なること、牛羊と異る所なからん（聖人と雖もまた然りとの意）

玉兮。相與貴夫礫石。梅伯數諫而至醢兮。來革順志而用國。悲仁人之盡節兮。反爲小人之所賊。

賤の別なきを悲しむ　(二) 崑崙山の玉大璧の寶を棄てて價なき小石を貴ぶ如く、賢人を斥けて愚人を用ふ　(三) 小人來革紂王に諂ひ順ひ、遂に重く用ひられたり　(四) 仁人は忠節を盡し、却つて小人に害せらる

比干忠諫而剖心兮。箕子被髮而佯狂。水背流而源竭兮。木去根而不長。非重軀以慮難兮。惜傷身之無功。已矣哉。獨不見夫鸞鳳之高翔兮。乃集大皇之壄。循四極而回周兮。見盛德而後下。

(一)比干は忠諫して心を剖かれ。箕子は髮を被りて佯り狂す。(二)水は流に背いて源竭き。木は根を去つて長からず。(三)軀を重んじて以て難を慮るに非ず。身を傷くるの功無きを惜む。

(一) 屢々前に出づ　(二) 仁義に背くものは遂にその身を亡ぼすに喩ふ　(三) 身を傷けて難に當るも寸效なきを悲しむ

已んぬるかな。獨り夫の鸞鳳の高く翔りて。(一)乃ち太皇の壄に集り。(二)四極を循りて回周し。(三)盛德を見て後に下るを見ずや。

(一) 大荒廣漠の野に戻り　(二) 四方のはてを回りて遊び　(三) 盛德の王あるを見て、始めて降り來るを見ずや

衰兮。固儃回而不レ息。俗流從而不レ止兮。衆枉聚而矯レ直。
或偸合而苟進兮。或隱居而深藏。苦下稱量之不レ審兮。同二權槩一而就レ衡。
或推迻而苟容兮。或直言之諤諤。傷下誠是之不レ察兮。幷二紉茅絲一以爲レ索。方二世俗之幽昏一兮。眩二白黑之美惡一。放二山淵之龜

て直きを矯む。

(一)俗人、君に諂ひて止まず (二)小人羣集し、忠直の人を屈從せしめんとす

或は偸も合うて苟も進み。或は隱れ居て深く藏る。(一)稱量の審かならず。權槩を同じうして衡に就くに苦しむ。

(一)物の輕重多少を考へず、同一に計量せらるゝを苦しむ（賢愚を分たず同一視せらるゝにたとふ、權ははかりの錘、槩は斛のとかき、衡は平かなり）

或は推し迻りて苟も容れられ。或は直言して諤諤たり。誠に是をこれ察せず。(二)茅絲を幷せ紉んで以て索となすを傷む。世俗の幽昏に方つて。白黑の美惡に眩ひ。(三)山淵の龜玉を放つて。相與に夫の礫石を貴ぶ。梅伯は數〻諫めて醢にせらるゝに至り。(四)來革は志に順つて國に用ひらる。(五)悲いかな仁人の節を盡して。反つて小人の賊する所となること。

(一)俗に從ひて容れられんとするものあり、直言を進めて恐れざるものあり (二)茅と絲とを繩に綯ふ如く、正邪賢

之衆人一兮。託二回颺乎尙羊一。乃至二少原之埜一兮。赤松王喬皆在レ旁。二子擁レ瑟而調均兮。余因稱二乎淸商一。澹然而自樂兮。吸二衆氣一而翱翔。念二我長生而久僊一兮。不レ如レ反二余之故鄕一。

㊀神に從ひ遊ばんとし ㊁西南大夏國の風俗を見 ㊂一擧して山川の紆曲を知り、再擧して天地方圓を見る(黃鵠は高く飛ぶ鳥なり、自ら喩ふ) ㊃下土中國の衆人を見つゝ回颺(めぐり吹く辻風)につきて消遙し ㊄赤松子・王子喬の二僊人旁にあり ㊅淸商の曲を唱ふ ㊆多くの淸氣を吸ひて逍遙す ㊇長生久僊の術を得たるも、なほ故鄕に歸るに如かず

黃鵠後レ時而寄處兮。鴟梟羣而制レ之。神龍失レ水而陸居兮。爲二螻蟻之所一レ裁。夫黃鵠神龍猶如レ此兮。況賢者之逢二亂世一哉。

(一)黃鵠時に後れて寄り處れば。鴟梟羣りて之を制し。神龍水を失ひて陸居すれば。(二)螻蟻の裁する所となる。夫れ黃鵠神龍すら猶ほ此の如し。況んや賢者の亂世に逢へるをや。

㊀時を失ひて宿りを求むれば ㊁けらありにも制裁せらる

壽冉冉而日

壽冉冉として日に衰へ。固に儃回して息はず。(一)俗流從して止らず。(二)衆枉聚り

之霧濡。攀北極而一息兮。吸沆瀣以充虛。飛朱鳥使先驅兮。駕太一之象輿。蒼龍蚴虬於左驂兮。白虎騁而爲右騑。建日月以爲蓋兮。載玉女於後車。馳鶩於杳冥之中兮。休息虖崑崙之墟。

虬たり。白虎騁せて右の騑と爲る。(四)日月を建てて以て蓋となし。玉女を後車に載せ。(五)杳冥の中に馳せ鶩せて。崑崙の墟に休息す。

(一)四海を渉りて水に衣を濡はし (二)清和の氣を吸ひて、腹に充て (三)太一の神の象牙を飾れる輿に乘り (四)月日を以て蓋とし (五)空中を馳せ崑崙山に休息す

樂窮極而不猒兮。願從容虖神明。渉丹水而駝騁兮。右大夏之遺風。鴻鵠之一擧兮。知山川之紆曲。再擧兮。睹天地之圜方。臨中國

樂窮極して猒かず。(一)神明に從容せんことを願ひ。丹水を渉りて駝騁し。(二)大夏の遺風を右にす。鴻鵠の一たび擧るや。山川の紆曲を知り。再び擧るや。天地の圜方を睹。(三)中國の衆人に臨んで回颻に(四)尙羊に託き。乃ち少原の壄に至れば。(五)赤松・王喬皆旁に在り。二子瑟を擁いて調均し。(六)余因つて清商を稱ぐ。澹然として自ら樂しみ。(七)衆氣を吸うて翱翔す。(八)我が長生して久しく僊せんことを念へども。余が故郷に反るに如かず。

惜余年老而日衰兮。歲忽忽而不反。登蒼天而高擧兮。歷衆山而日遠。觀江河之紆曲兮。離四海

卷之十一

惜誓第十一

(王)惜誓は誰の作る所なるかを知らず。或は賈誼なりといふも疑ふらくは明かなる能はず。惜とは哀なり。誓とは信なり約なり。言は懷王己と信約して復た之に背きしを哀惜せるなり。古者君臣將に共に治を爲さんとするや、必ず信誓を以て相約し、然る後言乃ち從ひ、身以て親らするなり。蓋し懷王の始ありて終なきを刺れるなり。

惜むらくは余年老いて日に衰へ。歲忽忽として反らざるを。蒼天に登つて高く擧り。衆山を歷て日に遠し。(一)

㊀ 故鄕日に遠し

江河の紆曲を觀。(二)四海の霑濡に離ひ。北極を擧ぢて一たび息ひ、沆瀣を吸うて以て虛に充て。朱鳥を飛ばして先驅せしめ。(三)太一の象輿に駕し。(二)蒼龍左驂に蚴

雄雄赫赫天德明只。三公穆穆登二降堂一只。諸侯畢極立二九卿一只。昭質既設大侯張只。執レ弓挾レ矢揖辭讓只。魂乎歸徠尙二三王一只。

雄雄赫赫として天德明かなり。(一)三公穆穆として堂に登降し。(二)諸侯畢く極りて九卿を立つ。(三)昭質既に設けて大侯張り。弓を執り矢を挾みて揖して辭讓す。魂や歸り徠れ(四)三王を尙ばん。

(一) 太師・太傅・太保の位を設け、堂に升降せしめ(穆々は和美の貌) (二) 諸侯皆楚に朝するを待ち、新に九卿を立て (三) 昭質(射の的)大侯(まと)を設け、揖讓して升りて射 (四) 三王(禹湯文王)の遺法を貴び、政を天下に布かん

田邑千畛人阜昌只。美冒二衆流一德澤章只。先レ威後レ文善美明只。魂乎歸徠賞罰當只。名聲若二日照一レ四海一只。德譽配レ天萬民理只。北至二幽陵一南交阯只。西薄二羊腸一東窮レ海只。魂乎歸徠尚二賢士一只。發レ政獻レ行禁二苛暴一只。擧レ傑壓レ陛誅二譏罷一只。直贏在レ位近二禹麾一只。豪傑執レ政流澤施只。魂乎歸徠國家爲只。

(一)田邑千畛人阜昌に。(二)美衆流を冒ひて德澤章かなり。(三)威を先にし文を後にして善美明かなり。魂や歸り徠れ賞罰當らん。

(一)田野開け人民榮え（畛はあぜ道なり）(二)善政衆民に及び、德澤明かなり(三)まづ武威を以て從へ、後に文德を以て懷く。

名聲日の若くして四海を照し。德譽天に配して萬民理る。(一)北のかた幽陵に至り南のかた交阯までし。(二)西のかた羊腸に薄り東のかた海を窮む。魂や歸り徠れ賢士を尚ばん。

(一)楚の國境次第に廣まり、北は幽州より南は交阯に至り(二)西は羊腸山より東は滄海に及ぶ

政を發し(一)行を獻りて苛暴を禁じ。(二)傑を擧げ陛を壓して(三)譏罷を誅す。(四)直贏位に在つて禹麾に近く。豪傑政を執つて流澤施す。魂や歸り徠れ國家爲らん。

(一)仁義の行を進め(二)俊傑を擧げて、百官の上に置き(三)人を讒るもの、罷ぐ怠るものを誅す(四)行正しく才滿つる者位に就き、禹王賢良の臣を取る法に叶ふ

孔雀盈レ園畜ニ鸞皇一只。鶤鴻羣晨雜ニ鶖鶬一只。鴻鵠代遊曼ニ鷫鷞一只。魂乎歸徠鳳皇翔只。

孔雀園に盈ちて鸞皇を畜ふ。鶤鴻羣り晨して(一)鶖鶬に雜へ。鴻鵠代ゝ遊んで鷫鷞を曼れしむ。(二)魂や歸り徠れ鳳皇翔る。

(一)晨に鳴き　(二)吉祥を示して飛べり

曼澤怡面血氣盛只。永宜ニ厥身一保ニ壽命一只。室家盈レ廷爵祿盛只。魂乎歸徠居室定只。

(一)曼澤怡面血氣盛なり。永く厥身に宜しうして壽命を保ち。室家廷に盈ちて爵祿盛なり。(二)魂や歸り徠れ居室定かならん。

(一)肌つやつやしく顏色樂しげに　(二)宗族朝廷に滿ち、爵祿榮えたり

接徑千里出若レ雲只。三圭重侯聽類レ神只。察ニ篤夭隱一孤寡存只。魂乎歸徠正ニ始昆一只。

(一)接徑千里出づること雲の若し。(二)三圭重侯聽くこと神に類せり。(三)篤夭隱を察かにして孤寡存す。魂や歸り徠れ(四)始昆を正しうせん。

(一)楚の境に徑路遠く連なり、民の多きこと雲の如し　(二)三圭重侯の位にあるもの、下情を察すること神の如く(三圭は公侯伯に當り、重侯は子男に當るといふ、皆楚の重臣なり)　(三)病む者、夭する者、隱るゝ者を憐み、寡婦孤兒を安らかにせり　(四)終始の行を正しうし、その德世に顯るべし

善留客只。魂乎歸徠以娛昔只。

㊀夕を樂しむによろし（昔と夕とは音通なり）

青色直眉美目婳只。靨輔奇牙宜笑嫣只。豐肉微骨體便娟只。魂乎歸徠恣所便只。

青色の直眉美目婳たり。靨輔奇牙笑むに宜しくして嫣たり。豐肉微骨體便娟たり。魂や歸り徠れ便ずる所を恣にせん。

㊀また一人の美女、靨（えくぼ）と愛らしく齒を現はし、笑顔にこやかに　㊁[illegible]くして美し

夏屋廣大沙堂秀只。南房小壇觀絕霤只。曲屋步壛宜擾畜只。騰駕步遊獵春囿只。瓊轂錯衡英華假只。茝蘭桂樹鬱彌路只。魂乎歸徠恣志慮只。

夏屋廣大にして沙堂秀で。南房小壇觀霤を絕つ。曲屋步壛擾畜に宜し。騰駕步遊して春の囿に獵す。瓊轂錯衡英華假なり。茝蘭桂樹鬱として路に彌れり。魂や歸り徠れ志慮を恣にせん。

㊀屋宇廣大にて、丹砂を塗りし堂秀で（夏は廈に同じ）　㊁高く聳え　㊂周閣長廊のほとりに禽獸を飼ひならし飼ふによし　㊃車に乗りて遊び　㊄玉の車轂と黄金の衡（よこぎ）と、[illegible]かに輝きたり

調以娛只。魂乎歸徠安以舒只。嫮目宜笑蛾眉曼只。容則秀雅穉朱顏只。魂乎歸徠靜以安只。姱脩滂浩麗以佳只。曾頰倚耳曲眉規只。滂心綽態姣麗施只。小腰秀頸若鮮卑只。魂乎歸徠思怨移只。易中利心以動作只。粉白黛黑施芳澤只。長袂拂面

のびた楽ぎ娯しむ

嫮目笑むに宜しうして蛾眉曼し。(一)容則秀雅、穉き朱顏あり。魂や歸り徠れ靜かにして以て安らかならん。

(一) また一人の美女、ながしめに視て笑顏よく (二) 容儀すぐれ雅かなり

姱脩滂浩として麗しうして以て佳く。(三)曾頰倚耳曲眉規なり。(四)滂心綽態姣麗施す。(五)小腰秀頸鮮卑の若し。(六)魂や歸り徠れ思怨移らん。(七)

(一) また一人の美女、身の丈高く體大きく (二) 頰の肉肥え (三) 耳朶(みゝたぼ)しなやかに(倚は頭につかず、突起せざるなり) (四) 眉圓く (五) 心豐かに、態度おだやかに (六) 腰細く頸秀で、鮮卑帶をしめたるに似たり(鮮卑は胡國の名なり) (七) 怨も消え去るならん

易中の利心以て動作し。(一)粉白く黛黑く芳澤を施す。(二)長袂面を拂つて善く客を留む。(三)魂や歸り徠れ以て昔を娛まん。

(一) また一人の美女は心和ぎて動作し(易は和の意なり) (二) 芳しき香(あぶら)をつけ (三) 長き袖を顏にかざし

乎歸徠。不遽惕只。代秦鄭衞。鳴竽張只。伏戲駕辯。楚勞商只。謳和揚阿。趙簫倡只。魂乎歸徠。定空桑只。二八接舞。投詩賦只。叩鐘調磬。娛人亂只。四上競氣。極聲變只。魂乎歸徠。聽歌譔只。朱脣皓齒。嫭以姱只。比德好閒。習以都只。豐肉微骨。

（注はかうぢなり）

代秦鄭衞竽を鳴らして張る。伏戲の駕辯楚の勞商。揚阿を謳ひ和いで趙簫倡ふ。魂や歸り徠れ空桑を定めん。

㊀ 代秦鄭衞諸國の樂工竽を吹きて音樂をなし ㊁ 駕辯等古曲揚阿等の曲につぎ趙の樂工簫を吹く ㊂ 空桑（琴の名）を彈じ、正しき音節を定めん

二八舞を接ねて詩賦に投す。鍾を叩ち磬を調べて人を娛しましめ亂め。四上氣を競ひ聲を極めて變る。魂や歸り徠れ歌譔を聽け。

㊀ 十六人の美女、歩を進れ舞ひて、歌に合はせ ㊁ 音樂の調、羽より宮に上り ㊂ 聲を極め曲を變へてやまず ㊃ 歌ひ述ぶる所を聽け

朱脣皓齒嫭かにして以て姱し。德を比へて好く閒かに習ひて以て都かなり。豐肉微骨調ひて以て娛しむ。魂や歸り徠れ安かにして以て舒かなり。

㊀ 一人の美女、脣赤く齒白く ㊁ 才德すぐれ、禮に習ひてみやびやかなり ㊂ 肉豐かに骨細やかに、姿とゝ

味ニ豺羹一只。魂乎歸徠恣ㇾ所ㇾ嘗只。鮮蠵甘鷄和ニ楚酪一只。醢ㇾ豚苦ㇾ狗膾ニ苴蓴一只。吳酸蒿蔞不ニ沾薄一只。魂兮歸徠恣ㇾ所ㇾ擇只。炙鴰烝鳧黏鶉瞰只。煎鰿臛雀遽爽存只。魂乎歸徠麗以先只。四酎幷孰不ㇾ澀ㇾ嗌只。清馨凍飲不ㇾ歠ㇾ役只。吳醴白糵和ニ楚瀝一只。魂

よく煮熟し、其のまゝに案に満ち (三) 肉桂、薑等を加へ芳香を極む (四) 釜中に鶬鴿鵠の肉を入れ、豺の肉をも交ふ

(一)鮮蠵甘鷄楚酪を和し。豚を醢にし(二)狗を苦にし苴蓴を膾にす。(三)吳酸蒿蔞沾薄ならず。魂や歸り徠れ擇ぶ所を恣にせん。

(一) 新鮮なる大龜と肥えたる雞とを煮、乳汁を交ふ (二) 狗の膾を醬にひたし、蓴菜を細く切りてなますとす (三) 吳法によりて酸味を調へ、蒿蔞(水菜の名)をとりてあへものにす (四) 濃からず薄からず、味甘美なり

(一)炙鴰烝鳧黏鶉瞰なり。(二)煎鰿臛雀遽爽存す。魂や歸り徠れ麗めて以て先んぜん。

(一) 鴰のあぶりもの鳧のむしもの、鶉の肉を陳ね (二) ふなのいりもの、雀の臛を作り、庖丁を促して順次に進む

(一)四酎幷せ孰し、嗌に澀らず。清馨凍飲役しきに歠らしめず。(三)吳醴の白糵楚の瀝に和す。魂や歸り徠れ遽かに惕れず。

(一) 四種の醇酒熟し (二) 冷きまゝに飲み、卑しき者にすゝらしめず (三) 吳の醴(ひとよざけ)を楚の酒に和す

目被レ髮鬤只。長爪踞牙誒笑狂只。魂乎無レ西多二害傷一只。

魂乎無レ北。北有二寒山一逴龍赩只。代水不レ可レ涉。深不レ可レ測只。天白顥顥寒凝凝只。魂乎無レ往盈二北極一只。魂魄歸徠閒以靜只。自恣二荊楚一安以定只。逞レ志究レ欲心意安只。窮レ身安樂年壽延只。魂乎歸徠樂不レ可レ言只。

魂や北することなかれ。北に寒山あり、逴龍として赩なり。代水渉るべからず、深うして測るべからず。天白くして顥顥寒くして凝凝たり。魂や往くことなかれ、北極に盈てり。魂魄歸り徠れ、閒に以て靜かなり。自ら荊楚に恣にして、安かに以て定かなれ。志を逞しうし欲を究めて心意安からん。身を窮めて安んじ樂しみて年壽延ぶ。魂や歸り徠れ樂言ふべからず。

(一)高く聳えて草木なし　(二)寒空白く輝き、水凍りたり　(三)寒さ北極に滿つ　(四)楚國に居り、心のまゝにして安らかなるべし

五穀六仞設二菰粱一只。鼎臑盈レ望和致レ芳只。內二鶬鴿鵠一

五穀六仞菰粱を設く。鼎臑望に盈ちて和芳を致す。鶬鴿鵠を內れ豺羹を味ふ。魂や歸り徠れ嘗むる所を恣にせん。

(一)地肥えて五穀の高さ六仞に及び　(二)菰粱（草の實にて、香しくして柔かなるもの）の飯を備ふ　(三)鼎中の肉

魂乎歸徠無レ東無レ西無レ南無レ北只。東有二大海一溺水浟浟只。螭龍並流上下悠悠只。霧雨淫淫白皓膠只。魂乎無レ東。湯谷宋只。

魂や歸り徠れ、東することなかれ西することなかれ南することなかれ北することなかれ。東に大海あり、溺水(一)浟浟(二)たり。螭龍並に流れて、上下すること悠悠たり。霧雨淫淫(三)、白くして皓膠たり。魂や東することなかれ。湯谷(四)宋たり。

(一)物を沈溺せしむる水　(二)廣く流るゝ貌　(三)雨久しく止まず、白く亂れて降る　(四)日の出づる所

魂乎無レ南。南有二炎火千里一蝮蛇蜒只。山林險隘虎豹蜿只。鰅鱅短狐王虺騫只。魂兮無レ南蜮傷レ躬只。

魂や南することなかれ。南に炎火千里(一)あり蝮蛇蜒(二)たり。山林險隘虎豹蜿(三)たり。鰅鱅(四)短狐(五)王虺騫(六)たり。魂や南することなかれ蜮躬を傷けん。

(一)炎熱の地千里に亙れり　(二)長くうねる貌　(三)はらばひ行く貌　(四)魚の名　(五)蜮ともいふ　(六)うはばみありて首を擧げたり

魂乎無レ西。西方流沙漭洋洋只。豕首縱

魂や西することなかれ。西方には流沙漭洋洋(一)たり。豕首縱目髮を被りて鬤たり(二)。長爪踞牙誒しみ笑ひて狂ふ。魂や西することなかれ害傷多からん。

(一)沙漠の地廣くして限なし　(二)怪しき神あり、頭は、猪の如く目を縱にして、亂髮を被る

青春受謝白日昭只。春氣奮發萬物遽只。冥凌浹行魂無逃只。魂魄歸徠無遠遙只。

卷之十

大招第十

（王）大招は屈原の作りし所なり。或は景差といふも疑ふらくは明かなる能はず。屈原放流せらるゝこと九年。憂思煩亂、精神越散して形と離別し、命將に終らんとして行ふところ遂げざるを恐る。故に憤然として大に其の魂を招き、盛に楚國の樂しきを稱し、懷襄の德を崇め、以て三王能く賢を任用し、公卿明察して、能く人を薦擧し、宜しく之を輔佐して以て王治を興すべきに比し、因つて以て風諫して、己の志を遂す。

青春謝を受けて白日昭かなり。(一)春氣奮發して萬物遽ふ。(二)冥凌浹行して魂逃るることなかれ。(三)魂魄歸り徠れ、遠く遙にするなかれ。(四)

(一)萬物凋謝の季につぎ、春の日明かなり　(二)萬物競ひて生育す　(三)陰氣の中をかたより走りて　(四)遠くに逃るゝなかれ

朱明承レ夜兮時不レ可二以淹一。皐蘭被レ徑兮斯路漸。湛湛江水兮上有レ楓。目極二千里一兮傷レ心悲。魂兮歸來哀二江南一。

朱明夜に承いで時以て淹しうすべからず。(一)皐蘭徑を被ひて斯に路漸さる。(二)

(一) 日月空しく過ぎ、久しく墳地に止り難し（朱明は日なり） (二) 春に入りて、蘭茂りて徑を覆ひ、水漲りて路を浸せり（皐は澤曲なり）

湛湛たる江水上に楓あり。(一)目千里を極めて心を傷ましめて悲む。(二)魂や歸り來れ江南を哀しむ。

(一) 水深き江上には、たゞ楓樹の茂れるあるのみ (二) 千里の廣きを望み、淋しさに心を傷ましむ

厭些。酎飲盡歡樂先故些。魂兮歸來反故居些。

亂曰。獻歲發春兮汨吾南征。菉蘋齊葉兮白芷生。路貫廬江兮左長薄。倚沼畦瀛兮遙望博。

青驪結駟兮齊千乘。懸火延起兮玄顏烝。步及驟處兮誘騁先。抑騖若通兮引車右還。與王趨夢兮課後先。君王親發兮憚青兕。

飲み歡を盡し、舊時の愉快を再びせん

亂に曰く。

獻歲の發春汨として吾南に征く。菉蘋葉を齊しうして白芷生ひたり。路廬江を貫き長薄を左にす。(一) 沼に倚り瀛に畦して遙に望むこと博し。(二)

(一) 年の初、早春の時、余遥に南方に行く (二) 沼に倚り池を横ぎり廣くして目に障るものなし

青驪の結駟千乘を齊しうす。(三) 懸火延き起して玄顏烝せり。(四) 步及び驟處誘き騁せて先つ。(五) 騖するを抑へて若ひ通じて車を引きて右に還れり。(六) 王と夢に趨りて後先を課す。(七) 君王親ら發して青兕を憚れしむ。

(三) 嘗て楚王の獵せし時、驪車千乘に各々青毛の四馬を駕し (四) 火を林木に放ちて天を焦し (五) 步む者あり、走るものあり、止まるものあり (六) 余之を導きて先驅し (七) 順序を整へて道を進む (八) 王と夢澤に走り一卒の先後を考へ (九) 王自ら射て青兕牛を得たり(往時の狩獵を想ひていふ)

敶組纓、班其相紛些。鄭衛妖玩來雜陳些。激楚之結獨秀先些。

(一)座席亂れて男女の區別なく　(二)印綬と冠の紐とを解き亂し　(三)美女來り雜り　(四)聲高くして清く、衆女に先ちて進む

菎蔽象棊有六簿些。分曹並進遒相迫些。成梟而牟呼五白些。晉制犀比費白日些。鏗鍾搖虡揳梓瑟些。

菎蔽(一)象棊六簿あり。曹を分つて並び進んで遒つて相迫る。梟を成して牟つて五白と呼ぶ。(二)晉制の犀比(三)白日を費し。(四)鐘を鏗き虡を搖かして梓瑟を揳らす。(五)

(一)遊戯の名にてさいを投じて勝負を爭ふもの　(二)勝負の名にて、最も勝てるを梟といひ、倍し勝てるを牟といふ　(三)晉の製法にて、犀角を集めて彫りしさい　(四)遊戯に時を費し　(五)鐘を架くる木

娛酒不廢沈日夜些。蘭膏明燭華鐙錯些。結撰至思蘭芳假些。人有所極同心

酒を娛んで廢まず日夜に沈み。蘭膏の明燭華鐙錯る。至思を結び撰べて蘭芳假なり。(一)人極むる所ありて心を同じうして賦ひ。(二)酎飲徹を盡して先故を樂まん。(三)魂や歸り來つて故居に反れ。

(一)各詞賦を作り、その妙なること蘭の香の遠く傳はる如く　(二)樂みを極め、心を同じうしてうたひ　(三)酒を

肴羞未ㇾ通女樂羅些。敶ㇾ鍾按ㇾ鼓造ニ新歌一些。涉江采菱發ニ揚荷一些。美人既醉朱顏酡些。娭光眇視目曾ㇾ波些。被ㇾ文服ㇾ纖麗而不ㇾ奇些。長髮曼鬋艶陸離些。

(一)肴羞未だ通ぜず女樂羅る。鍾を敶ね鼓を按ちて新歌を造る。(二)涉江采菱揚荷を發し。美人既に醉うて朱顏酡けり。(三)娭光眇視して目波を曾ぬ。(四)文を被り纖を服して麗にして奇ならざらんや。(五)長髮曼鬋艶陸離たり。

(一)よき食膳を列ねしまゝにて　(二)楚の歌曲涉江采菱揚荷等を發し　(三)美人の眺るゝ目、波紋の重ずる如く　(四)刺繡(文)羅絹(纖)の美しき衣服を著け　(五)髪長くしてつやつやし

二八齊ㇾ容起ニ鄭舞一些。衽若ニ交竿一撫案下些。竽瑟狂會搷ニ鳴鼓一些。宮庭震驚發ニ激楚一些。吳歈蔡謳奏ニ大呂一些。士女雜坐亂而不ㇾ分些。放ニ

(一)二八容を齊うして鄭舞を起す。(二)衽交竿の若く撫案下る。竽瑟狂會して鳴鼓を搷ち。宮庭震驚して(三)激楚を發し。(四)吳歈蔡謳、大呂を奏づ。

(一)十六人の美女の舞ひて鄭國の舞をなし　(二)衣衽回轉して竿を交ふる如く、手もて案へて徐行し　(三)高く清き聲を發し　(四)吳の歌、蔡の歌、大呂の調に叶ふ

(一)士女雜り坐して亂れて分れず。組纓を放敶して班として其れ相紛る。鄭衞の妖玩(二)來つて雜へ陳ね。(三)激楚の結獨り秀で先つ。

多方些。稲粢穱麥挐黄粱些。大苦鹹酸辛甘行些。肥牛之腱臑若芳些。和酸若苦陳吳羹些。胹鼈炮羔有柘漿些。鵠酸臇鳧煎鴻鶬些。露雞臛蠵厲而不爽些。

甘行る。肥牛の腱、臑若として芳し。(二)酸きと苦きとを和して吳羹を陳ね。(三)胹(四)鼈炮羔柘漿あり。鵠酸(五)鳧を臛にし、鴻鶬を(六)煎にす。露雞蠵を臛にし、厲(七)ねて爽れず。

(一)宗族之を尊み、食を設くるにも方法多し　(二)熟爛して香し　(三)呉法によるあつものを陳ね　(四)煮たる鼈(すつぽん)と炮りたる小羊と甘諸の汁とあり　(五)鵠を煮て酸味を帶びしめ　(六)雞のまる煮を作り　(七)多く陳ねて腐敗せず

粔籹蜜餌有餦餭些。瑤漿蜜勺實羽觴些。挫糟凍飲酎清涼些。華酌既陳有瓊漿些。歸來反故室。敬而無妨些。

粔籹(一)蜜餌(二)餦餭(三)あり。瑤漿勺を蜜ひて羽觴に實てり。(四)糟を挫りて凍飲し、(五)酎ぐこと清涼なり。華酌既に陳ねて瓊漿あり。(六)歸り來りて故室に反れ。敬んで妨げ無けん。

(一)米の粉を水にこね、環状にして油煎りにしたるもの　(二)蜜をまぜて作りし餅　(三)餳(あめ)　(四)美しき飲物を酌み、翠羽を飾れる觴(さかづき)に滿てたり　(五)冷さまゝ飲む　(六)また美漿を備へ、酒の渇きをとゞむるに用ふ

態緪ニ洞房一些。蛾眉曼睩目騰ノ光些。靡顏膩理遺視矊些。離榭脩幕侍ニ君之閒一些。

翡帷翠幬飾ニ高堂一些。紅壁沙版玄玉之梁些。仰觀刻ノ桷畫ニ龍蛇一些。坐堂伏檻臨ニ曲池一些。芙蓉始發雜ニ芰荷一些。紫莖屏風文緣ノ波些。文異豹飾侍ニ陂陁一些。軒輬既低歩騎羅些。蘭薄戸樹瓊木籬些。魂兮歸來。何遠爲些。

侍す。

(一)顏柔しく、心堅く、意態愛すべし (二)美しくして心緻く、旁室に滿ちたり (三)眉長く、美目に光彩あり (四)顏のきめ、こまかにして、光澤あり (五)目を擧げて遠く視る (六)列榭の幕中に坐し、君の淸閑に侍す

翡帷翠幬高堂を飾る。(一)紅壁沙版玄玉の梁。仰ぎ觀れば桷を刻んで龍蛇を畫き。坐堂伏檻曲池に臨む。芙蓉始めて發いて芰荷を雜へ。(二)紫莖屏風、文波に緣る。(三)文異豹飾して陂陁に侍し。(四)軒輬既に低りて歩騎羅る。(五)蘭薄戸樹、瓊木籬あり。魂や歸り來れ、何ぞ遠きことをなさん。

(一)赤き壁、丹沙の軒版、黑き玉を飾れる梁 (二)荷葉風を防ぎ。波紋細かに起り (三)虎豹の皮、異彩の飾をなせる者、長陛に侍衞し (四)輕車とゞまり、歩騎列る (五)蘭の叢戸傍に茂り美しき樹を籬とす

室家遂宗食

(一)室家遂に宗んで、食多方ならん。稻粢麥を稽んで、黄粱を挐ふ。大苦鹹酸辛

砥室翠翹挂曲瓊些。翡翠珠被爛齊光些。蒻阿拂壁羅幬張些。纂組綺縞結琦璜些。室中之觀多珍怪些。蘭膏明燭華容備些。二八侍宿射遞代些。九侯淑女多迅衆些。盛鬋不同制實滿宮些。容態好比順彌代些。弱顏固植謇其有意些。姱容脩

(一)砥室翠翹、曲瓊を挂け。(二)翡翠珠被、爛として光を齊しうす。(三)蒻阿壁を拂つて、羅幬張れり。(四)纂組綺縞、琦璜を結べり。

(一)石壁の室に翡翠の羽を飾とし、玉鉤を掛け (二)翡翠の羽と珠玉の衣と、光彩爛々たり (三)柔なる蒲にて室隅を飾り、綺羅の帷を垂れ (四)模様ある白絹に組紐を付け、美玉を結ぶ

室中の觀珍怪多し。(一)蘭膏の明燭、華容備る。(二)二八宿に侍し、射へば遞に代る。(三)九侯の淑女、多く迅衆なり。(四)盛鬋制を同じうせずして、實に宮に滿てり。

(一)蘭香の油を焚き、華かにして美し (二)美女十六人を侍せしめ、厭く時は互に代らしむ (三)また九國諸侯の淑女あり、才德すぐれて衆女に勝れり (四)髮飾り美しく、その樣各々異れり(鬋は鬢毛を剪りて下に垂れ、飾とするをいふ)

容態の好比、順ひ彌りて代る。(一)弱顏固植、謇其れ意あり。(二)姱容脩態、洞房に絙れり。(三)蛾眉曼睩、目光を騰ぐ。(四)靡顏膩理、(五)遺視矊なり。(六)離榭脩幕、君の閒に

魂兮歸來入ニ脩門一些。工祝招レ君背行先些。秦篝齊縷。鄭綿絡些。招具該備永嘯呼些。魂兮歸來反ニ故居一些。天地四方多ニ賊姦一些。像ニ設君室一靜閒安些。

高堂邃宇。檻層レ軒些。層臺累榭。臨ニ高山一些。網戸朱綴。刻レ方連些。冬有ニ突夏一。川谷徑復。流潺湲些。光風轉レ蕙。氾ニ崇蘭一些。經レ堂入レ奧。朱塵筵些。

魂や歸り來つて脩門に入れ。(一)工祝君を招いて背行して先ち。(二)秦の篝齊の縷。鄭の綿絡へり。(三)招具該ね備りて永く嘯呼す。(四)魂や歸り來つて故居に反れ。

(一)楚都郢城の門　(二)男巫の術に巧なる者、背後倒行して君を迎へ　(三)秦齊二國の縷を織り、鄭の綿を入れて魂の服を作り(篝は糸を入る、籠なり)　(四)長聲大呼して、君を招く

天地の四方賊姦多し。君が室を像設する。(一)靜閒にして安し。

(一)君が室は靜かに安らかに造られたり

高堂邃宇。(一)檻軒を層ねて。(二)層臺累榭。高山に臨めり。網戸朱綴。(三)方を刻して連れり。冬は突夏あり。(四)〔夏室は寒し。〕(五)川谷徑り復り。流れて潺湲たり。光(六)風蕙を轉じ。崇蘭を氾し。堂を經奧に入り。(七)朱の塵と筵とあり。

(一)奧深き家　(二)欄干　(三)門戸に網の目の如き模樣を刻み、朱泥を點じ、方形の紋樣を連ぬ　(四)奧深き温室あり。「夏」朱本「廈」に作る、從ふべし　(五)此一句朱本によりて補ふ　(六)晴るゝ日の風、蕙を搖がし、崇蘭を動かす　(七)朱のなげしと、たかむしろとあり

無レ上レ天些。虎豹九關。啄二害下人一些。一夫九首。拔レ木九千些。豺狼從目。往來侁侁些。懸レ人以娭。投二之深淵一些。致二命於帝一。然後得レ瞑些。歸來歸來。往恐危レ身些。

木を拔くこと九千。豺狼(三)從目して。往來侁侁たり。(四)人を懸けて以て娭み。之を深淵に投ず。(五)命を帝に致して。然して後に瞑ることを得。歸り來れ歸り來れ。往かば恐らくは身を危うせん。

(一)虎豹の類、九重の門を守り、登り行くものを嚙み殺せり　(二)また一身九首の大夫あり、日に大木九千本を拔けり　(三)豺狼皆目を縱にし、群がりて往來し　(四)人の頭を樹に掛けて弄び、後に深淵に投じ　(五)之を天帝に復命し、然る後に眠れり

魂兮歸來。君無レ下二此幽都一些。土伯九約。其角觺觺些。敦脄血拇。逐レ人駓駓些。參目虎首。其身若レ牛些。此皆甘レ人。歸來歸來。恐自遺レ災些。

魂や歸り來れ。君此の幽都(一)に下ることなかれ。土伯の九約(二)。其角觺觺たり。敦脄(三)血拇。人を逐ふこと駓駓たり。(四)參目虎首。其身牛の若し。此れ皆人を甘なふ。歸り來れ歸り來れ。恐らくは自ら災を遺さん。

(一)地下の暗き處　(二)土伯は身體九つに屈折し、角甚だ鋭く　(三)背肉厚く、拇指血に染み、走りて人を逐ひ　(四)眼三つありて首は虎の如し

魂兮歸來。西方之害。流沙千里些。旋入二雷淵一。爢散而不レ可レ止些。幸而得レ脫。其外曠宇些。赤蟻若レ象。玄蠭若レ壺些。五穀不レ生。叢菅是食些。其土爛レ人。求レ水無レ所レ得些。彷徉無レ所レ倚。廣大無レ所レ極些。歸來歸來。恐自遺レ賊些。

魂や歸り來れ。西方の害。（一）流沙千里。旋りて雷淵に入り。爢散して止るべからず。幸にして脫るゝを得れども。（二）其外曠宇。（三）赤蟻象の若く。（四）玄蠭壺の若し。五穀生ぜず。菅を叢めて是れ食ふ。（五）其土人を爛す。水を求むれども得る所無し。彷徉して倚る所無く。廣大極る所無し。歸り來れ歸り來れ。恐らくは自ら賊を遺さん。

（一）廣き沙漠の地あり、恰も深淵に陷つる如く、沙土飛散して歇み止り難し（二）西方廣やかなり（三）赤き蟻（四）黑き蜂（五）酷暑人を爛らし、水を求むれども容易に得難し。

魂兮歸來。北方不レ可二以止一些。增冰峨峨。飛雪千里些。歸來歸來。不レ可二以久一些。

魂や歸り來れ。北方には以て止るべからず。（一）增冰峨峨として。飛雪千里。歸り來れ歸り來れ。以て久しくすべからず。

（一）層氷が山の如くに疊る

魂兮歸來。君

魂や歸り來れ。君天に上ることなかれ。（一）虎豹九關。下人を啄害す。（二）一夫九首。

方不レ可ニ以託一些。長人千仞。唯魂是索些。十日代出。流レ金鑠レ石些。彼皆習レ之。魂往必釋些。歸來歸來。不レ可ニ以託一些。

索む。(一)十日代ゝ出で。金を流し石を鑠す。彼皆之に習る。魂往かば必ず釋けん。歸り來れ歸り來れ。以て託くべからず。

(一) 身長千仞の巨人あり、人の魂を求めて食へり　(二) また扶桑の大樹あり、十日代る〴〵上に出て、その熱きこと金石をも鑠せり

魂兮歸來。南方不レ可ニ以止一些。雕題黑齒。得ニ人肉一而祀。以ニ其骨一爲レ醢些。蝮蛇蓁蓁。封狐千里些。雄虺九首。往來倏忽。呑レ人以益ニ其心一些。歸來歸來。不レ可ニ以久淫一些。

魂や歸り來れ。南方には以て止るべからず。(一)雕題黑齒あり。人の肉を得て以て祀り。其骨を以て醢と爲す。(二)蝮蛇蓁蓁として。封狐千里。(三)雄虺九首あり。往來倏忽。人を呑んで以て其の心を益す。歸り來れ歸り來れ。以て久しく淫るべからず。

(一) 額に入墨し齒を染めたる人あり　(二) 蝮蛇聚り、大狐千里に走れり　(三) 虺(蛇の一種)は一身に九つの首あり走ること速にして人を呑みて身を肥せり

帝告二巫陽一曰。有レ人在レ下。我欲レ輔レ之。魂魄離散。汝筮予レ之。

巫陽對曰、掌夢。上帝其命難レ從。若必筮予レ之。恐後之謝。不レ能レ復用二巫陽一焉。

乃下招曰。魂兮歸來。去二君之恒幹一。何爲乎四方些。舍二君之樂處一。而離二彼不祥一些。

魂兮歸來。東

(一)帝巫陽に告けて曰く。(二)人あり下に在り。我之を輔けんと欲す。(三)魂魄離散す。汝筮して之に予へよと。

(一)天帝、陽と名くる巫(みこ)に告げていふ　(二)下土に賢人(屈原)あり、我之を輔けんと思へり　(三)その魂魄すでに身を離れたり、汝之を卜ひて所在を求め、その身に歸り來らしめよと

巫陽對へて曰く。(一)掌夢は。上帝其命に從ひ難し。(二)若し必ず筮して之に予へば。(三)恐くは後謝りて、復た巫陽を用ふること能はざらんと。

(一)夢の吉凶を司る職にて巫陽自らいふなり　(二)夢の吉凶は占ふべきも、魂魄の在る所は占ふべからず、よりてその命に從ひ難し　(三)後人占筮を輕んじ、之を用ひざるに至るべし

乃ち下り招きて曰く。魂や歸り來れ。(一)君の恒幹を去りて。何爲れぞ四方にする。(二)君の樂處を舍いて。彼の不祥に離へる。

(一)君の常居を離れ、何故に四方に行けるぞ　(二)君の樂地(楚)を離れ、何故に不祥の鄕に走れるぞ

魂や歸り來れ。東方には以て託くべからず。(一)長人の千仞なるありて。唯だ魂是れ

朕幼清以廉潔兮。身服ㇾ義而未ㇾ沫。主二此盛德一兮。牽ㇾ於ㇾ俗而蕪穢。上無ㇾ所ㇾ考二此盛德一兮。長離ㇾ殃而愁苦。

巻之九

招魂第九

（王）招魂は宋玉の作りし所なり。招とは召なり。手を以てするを招といひ、言を以てするを召といふ。魂とは身の精なり。宋玉屈原の忠にして斥棄せられ、山澤に愁懣し、魂魄放佚し、其の命將に落ちんとするを憐哀す。故に招魂を作り、以てその精神を復し、その年壽を延さんと欲し、外は四方の惡を陳べ、内は楚國の美を崇め、以て懷王を諷諫し、その覺悟して之を還さんことを冀ふ。

（一）朕幼より清くして以て廉潔なり。身義を服うて未だ沫からず。（二）此の盛德を主とするも。俗に牽かれて蕪穢す。上（三）此の盛德を考ふる所なし。長く殃に離ひて愁へ苦しむ。

（一）屈原に代りていふ　（二）道德を主とするも、俗に引かれて穢ることあり（自ら戒めていふなり）　（三）王我が盛德を考へず

容。計專專之不レ可レ化兮。願遂推而爲レ臧。賴二皇天之厚德一兮。還及二君之無レ恙。

㊀ 輕車を前にし、輜重車を後にし（輬は窓ある車をいふ、鏘々從々は共に鈴の聲なり）㊁ 雲旗を長くなびかせ從騎を隨へたり ㊂ 余はたゞ專ら君のために計り、棄てゝ他に行くことを得ず ㊃ 故に今の心を推して善をなし ㊄ 君の恙なき中にまた歸りて之を輔けん

願賜不肖之軀而別離兮、放遊志乎雲中。乘精氣之摶摶兮、騖諸神之湛湛。驂白霓之習習兮、歷羣靈之豐豐。左朱雀之茇茇兮。右蒼龍之躍躍。屬雷師之闐闐兮。通飛廉之衙衙。前輕輬之鏘鏘兮。後輜乘之從從。載雲旗之委蛇兮。扈屯騎之容

(一)願ふらくは不肖の軀を賜りて別離し。放に志を雲中に遊ばしめんことを。(二)精氣の摶摶たるに乘り。諸神の湛湛たるを騖せ。(三)白霓の習習たるを驂にし。羣靈の豐豐たるを歷。

(一)身を乞うて去り、風ふまゝに天界に遊ばんとし (二)日月の輝きに乘り、神々を伴ひ馳せしめ（摶々は團々に聚し、湛々は厚く集るなり） (三)白霓をそへうまとし羣靈の集れる所を歷（習々は飛び動く貌なり）

(一)朱雀の茇茇たるを左にし。蒼龍の躍躍たるを右にし。(二)雷師の闐闐たるを屬け。飛廉の衙衙たるを通ず。

(一)朱雀（南方の星）の飛び翔けるを左にし、蒼龍（東方の星）の躍り進むを右にし (二)雷師を從へ、風神に導かしめ（闐々は鳴る聲、衙々は行く貌なり）

(一)輕輬の鏘鏘たるを前にし。輜乘の從從たるを後にし。(二)雲旗の委蛇たるを載て。屯騎の容容たるを扈ふ。(三)計るに專專として化すべからず。(四)願くは遂に推して臧きを焉し。皇天の厚德に賴りて。還つて(五)君の恙無きに及ばん。

見兮。尚欲布名乎天下。然潢洋而不遇兮。直怐愗而自苦。莽兮洋而無極兮。忽翱翔之焉薄、國有驥而不知乘兮。焉皇皇而更索、甯戚謳於車下兮。桓公聞而知之。無伯樂之善相兮。今誰使乎譽之・罔流涕以聊慮兮、惟著意而得之、紛純純之願忠兮、妒被離而鄣之。

して遇はず。直に怐愗して自ら苦む。

㊀隠れて自ら修めんとし、なほ名を後世に傳へんと欲せり ㊁時に後れて世に遇はず、愚にして自ら苦めり

莽洋洋として極なきも。忽翱翔して焉に薄らん。國に驥あれども乘ることを知らず。焉んぞ皇皇として更に索めん。

㊀四海は廣くして極りなきも、逃れ去るべき所なし ㊁楚國すでに余を用ひざれば、他國に行きて求むるも詮なし

甯戚車下に謳ひ。桓公聞いて之を知る。伯樂の善く相ること無くんば。今誰か之を譽めしめん。罔として涕を流して以て聊か慮る。惟意を著けて之を得たり。紛純純として忠を願へども。妒被離して之を鄣ぐ。

㊀伯樂の馬を相する如く、王よく賢士を見るの明なくば、誰か之をば賞せんや ㊁直心忠を盡さんとするも、衆人に嫉み妨げらる（純々は專一の貌なり）

○

堯舜皆有レ所二擧任一兮。故高レ枕而自適。諒無レ怨二於天下一兮。心焉取二此怵惕一。乘二騏驥之瀏瀏一兮。馭安用二夫强策一。諒城郭之不レ足レ恃兮。雖レ重二介之何益。邅翼翼而無レ終兮。忳惛惛而愁レ約。生二天地一之若レ過兮。功不レ成而無レ效。願二沈滯而無レ

堯舜皆擧任する所あり。(一)故に枕を高うして自適し。諒に天下に怨なし。心(二)焉んぞ此の怵惕を取らん。騏驥(三)の瀏瀏たるに乘れば。馭(四)安んぞ夫の强策を用ひん。諒に城郭の恃むに足らざる。重(五)介すると雖も何の益あらん。

㊀皆擧げ用ひたる賢臣あり　㊁この憂慮に逢ふことなし　㊂駿馬の疾きものに乘れば（よく賢人を用ふるに喩ふ）瀏々は水の流るゝ貌　㊃馭するに强ひて鞭つの要なし（民自ら治まり、刑罰の要なきに喩ふ）　㊄甲（よろひ）を重ぬる、恃むに足らず

(一)邅翼翼として終なく。(二)忳惛惛として約を愁ふ。(三)天地に生るゝこと過ぐるが若し。功成らずして效なし。

㊀恐れ愼みて極りなし　㊁心、憂ひて止まず（約は窮るなり）　㊂生涯はたゞ路を行くが如く、何事をもなさずして死に近けり

(一)沈滯して見るなからんことを願ふも。尙は名を天下に布かんと欲す。(二)然く潢洋と

而不可帶。既驕美而伐武兮。負左右之耿介。憎慍惀之脩美兮。好夫人之慷慨。衆踥蹀而日進兮。美超遠而逾邁。農夫輟耕而容與兮。恐田野之蕪穢。事綿綿而多私兮。竊悼後之危敗。世雷同而炫燿兮。何毀譽之昧昧。

を伐り。左右の耿介を負み。慍惀の脩美を憎み。夫の人の慷慨を好す。衆踥蹀して日に進み。超遠を美して逾邁す。(三)農夫耕を輟めて容與す。恐くは田野の蕪穢せんことを。(五)事綿綿として私多し。(四)竊に後の危敗を悼む。(六)世雷同して炫して燿す。(七)何ぞ毀譽の昧昧たる。

㊀蓮葉の鮮衣を被らんとするも、敗れやすくして著くべからず　㊁楚王はその美質と武威とを誇り、又左右の勇猛なるを恃めり　㊂以下四句、莊郭に出づ　㊃農夫は耕作を廢して遊び樂しむ　㊄國事に私曲多し　㊅俗人雷同して相稱譽し　㊆毀譽明かならず

今脩飾而窺鏡兮。後尚可以竄藏。願寄言夫流星兮。羌儵忽而難當。卒壅蔽此浮雲兮。下暗漠而無光。

(一)今脩飾して鏡を窺はば。後尚ほ以て竄藏すべし。(二)願くは言を夫の流星に寄せん。羌儵忽として當ひ難く。(三)卒に此の浮雲に壅蔽せられて。下暗漠として光なし。

㊀王、今にして德を修め政を行ひ、よく往事を考へて自ら顧みば、その身隱れて滅亡せざるべし　㊁一言を寄せて忠諫せんとするも、遂にその人に遇ひ難し(流星は君側の良臣に喩ふ)　㊂日の雲に蔽はるゝ如く、小人に妨げられ、忠誠の心を通ずるを得ず

願二皓日之顯行一兮。雲濛濛而蔽レ之。竊不二自聊一而願レ忠兮。或黕點而汙レ之。
堯舜之抗行兮。瞭冥冥而薄レ天。何險巇之嫉妬兮。被以二不慈之僞名一。
彼日月之照明兮。尙黯黮而有レ瑕。何況一國之事兮。亦多端而膠加。
被二荷裯之晏晏一兮。然潢洋

(一)皓日の顯行を願へども。雲濛濛として之を蔽ふ。(二)竊に自ら聊らずして忠を願へども。或は黕點して之を汙す。

(一)白日の顯かならんことを願ふも、雲立ちて之をおほふ（羣小君明を蔽ふ） (二)自ら料らず敢て忠を盡し功を立てんとするも、却つて讒人に汚し辱めらる（黕は垢なり）

(一)堯舜の抗行。瞭冥冥として天に薄る。(二)何ぞ險巇の嫉妬し。被らしむるに不慈の僞名を以てせる。

(一)堯舜の高德は明にして天にせまれり (二)小人はなほ之を妬み不慈の惡名を被らしむるは何故ぞ（位をその子に讓らざりしを以て不慈と爲すをいふ）

彼の日月の照明なるも。(一)尙ほ黯黮として瑕あり。何ぞ況んや一國の事。(二)亦多端にして膠加せるをや。

(一)雲に蔽はるゝことあり (二)多端にして道に戻れるをや

(一)荷裯の晏晏たるを被れども。然も潢洋として帶ぶべからず。(二)既に美に驕りて武

將入兮。明月銷鑠而減毀。歲忽忽而遒盡兮。老冉冉而愈弛。心搖悅而日幸兮。然怊悵而無冀。中憯惻之悽愴兮。長太息而增欷。

き。老冉冉として愈ゝ弛る。(三)心搖悅して日に幸ふも。然も怊悵して冀ふなし。中憯惻して悽愴し。長太息して欷を增す。

(一)日暮れて將に入らんとし、月また漸々缺く　(二)歲月忽々として老いよ〳〵迫り至る　(三)心に幸運を願ふも、遂にその望なきを知り、悲傷歎息するのみ

年洋洋以日往兮。老嵺廓而無處。事亹亹而覬進兮。蹇淹留而躊躇。

年洋洋として以て日に往き。(一)老嵺廓として處なし。(二)事亹亹として進むことを覬へども。(三)蹇淹留して躊躇す。

(一)年去りて流水の如し　(二)徒に老いて安んずるところなし　(三)事、志と違ひ、位に進むことを得ず、躊躇徘徊するのみ

○

何氾濫之浮雲兮。猋壅蔽此明月。忠昭昭而願見兮。然霠曀而莫達。

何ぞ氾濫せる浮雲。(一)猋として此の明月を壅蔽する。忠昭昭として見えんことを願へども。(二)然も霠曀して達することなし。

(一)立ちあふれたる浮雲忽ちに明月を蔽ふ（讒人君明を蔽ふ）　(二)雲の日を蔽ふ如く、小人に妨げられて見ゆるを得ず

詩人之遺風一兮願託二志素餐一。蹇充倔而無レ端兮。泊莽莽而無レ垠。無二衣裘以禦一レ冬兮。恐溘死而不レ得レ見二乎陽春一。

して垠なし。衣裘の以て冬を禦ぐことなくんば。(三)恐くは溘死して陽春を見ることを得ざらん。

(一)古詩人の遺風を慕ひ、素餐することなからんとするなり（魏風伐檀篇に、君子素餐せざるを稱するをいふ、素餐とは功なくして祿を食むをいふなり）(二)心屈して爲すべき所を知らず (三)忽ち死して、春に逢ふことなからん

○

靚杪秋之遙夜兮。心繚悷而有レ哀。春秋逴逴而日高兮。然惆悵而自悲。四時遞來而卒レ歲兮。陰陽不レ可二與儷偕一。

(一)靚かなる杪秋の遙夜。心繚悷して哀あり。(二)春秋逴逴として日高く。然く惆悵して自ら悲む。(三)四時の遞に來つて歲を卒ふ。(四)陰陽與に儷偕すべからず。

(一)秋の末の長夜、思念みだれて心かなしむ (二)春秋遠く去り日月再び返らず (三)四時代る〲來り、年將に暮れんとせり (四)陰陽互に到るも、永く相共にするを得ず

白日晼晩其

(一)白日晼晩して其れ將に入らんとし。明月銷鑠して減け毀る。(二)歲忽忽として遒り盡

按而學レ誦。性愚陋以褊淺兮。信未レ達二乎從容一。竊美二申包胥之氣盛一兮。恐時世之不レ固。

たよりたり（五）眞に未だ從容として道に安んずるを得ず（六）申の包胥の忠に效はんとするも時勢すでに異なり人に信ぜられざるを恐る（申包胥は楚の大夫にして、呉の兵楚を破つて郢都に入りし時、自ら秦に赴きて之を告げ哀求すること七日、遂に救を得て敵を退けし人なり）

何時俗之工巧兮。滅二規榘一而改レ鑿。獨耿介而不レ隨兮。願慕二先聖之遺教一。處二濁世一而顯榮兮。非二余心之所一レ樂。與二其無レ義而有一レ名兮。寧窮處而守レ高。

何ぞ時俗の工巧なる。規榘を滅して鑿を改む。（一）獨り耿介にして隨はず。願くは先聖の遺教を慕はん。（二）濁世に處りて顯榮なるは。余が心の樂ふ所に非ず。（三）其の義なくして名あらんよりは。寧ろ窮處して高きを守らん。

（一）法度を棄てて道を變ふ（二）獨り時俗に隨はず、先王の遺教を慕はんとするなり（耿介は俗と合はざるを云ふ）（三）不義にして美名あらんよりは、むしろ窮して行を高くせん

食不二媮而爲一レ飽兮。衣不二苟而爲一レ溫。竊慕二

食は媮もして飽くことを爲さず。衣は苟もして溫きことを爲さず。竊に詩の遺風を慕ひ。願くは志を素餐に託せん。（一）蹇充倔して端なく。泊莽莽と

獨悲愁其傷ㇾ人兮。馮鬱鬱其安極。

霜露慘悽而交下兮。心尙幸其弗ㇾ濟。霰雪雰糅其增加兮。乃知ㇾ遭ニ命之將ㇾ至。願徼ㇾ幸而有ㇾ待兮泊莽莽兮與ニ埜草一同死。

願自往而徑遊兮。路壅絕而不ㇾ通。欲ㇾ循ニ道而平驅一兮。又未ㇾ知ニ其所ㇾ從。然中路而迷惑兮。自壓

㊀ 跡を晦まして去らんとするも、何は ㊁ 憂、胸に滿ちて極りなし

○

霜露慘悽として交〻下る。心尙ほ幸に其れ濟らず。(一)霰雪雰糅して其れ增し加ふ。(二)乃ち命の將に至らんとするに遭ふことを知る。(三)願くは幸を徼めて待つあらんことを。泊莽莽として埜草と同じく死れん。(四)

㊀ 志なほ未だ成らず ㊁ 降りまじる ㊂ 運命窮らんとするを知る ㊃ 幸の再來を待つも、野草と共に枯死するならん（泊莽莽はその儘に荒れ寂びる貌）

(一)願くは自ら往きて徑に遊ばん。路壅絕して通ぜず。(二)道に循ひて平に驅らんと欲すれば。又未だ其の從らん所を知らず。(三)然も中路にして迷惑し。自ら壓按して誦はんことを學ぶ。(四)性愚陋にして以て褊淺なり。(五)信に未だ從容に達らず。竊に申包胥の氣の盛ならんことを美す。(六)恐くは時世の固からざることを。

㊀ 人の媒を待たず、直に往きて王に見えんとするも、衆邪路をおほひて通じ難し ㊁ 禮を備へて見えんとするも、そのたよりなし ㊂ 而も路にして猶豫して心まどひ疑ひ、愼を抑へ、誦を學んで自ら慰む ㊃ 性愚にしてか

謂二騏驥一兮安歸。謂二鳳凰一兮安棲。變レ古易レ俗兮世衰。今之相者兮擧レ肥。騏驥伏匿而不レ見兮。鳳皇高飛而不レ下。鳥獸猶知レ懷レ德兮。何云二賢士之不一レ處。

騏驥を安にか歸ると謂ひ。鳳凰を安にか棲むと謂ふ。古を變へ俗を易へて世衰へ。今の相る者は肥えたるを擧ぐ。

(一) 安歸、安棲は疎外して意に留めざるをいふ (二) 古道を變じ、風俗を易へ (三) 今の馬を見るものは、たゞ肥馬のみを喜び、眞の駿馬を知らず

騏驥伏し匿れて見えず。鳳皇高く飛んで下らず。鳥獸すら猶ほ德に懷くことを知る。何ぞ賢士處らずと云はん。

(一) 今や駿馬伏し匿れ、鳳皇高く飛去れり（仁者隱れ智者去る） (二) 鳥獸すら德なきには懷かず、賢士の遠く去りて肯て處らざるをば何ぞ怪むべき

驥不二驟進一而求レ服兮。鳳亦不三貪レ餧而妄食一。君棄遠而不レ察兮。雖レ願レ忠其焉得。欲二寂寞而絶一レ端兮。竊不三敢忘二初之厚德一。

驥驟に進んで服くことを求めず。鳳亦餧を貪つて妄りに食はず。君棄て遠けて察せずんば。忠を願ふと雖も其れ焉んぞ得ん。

(一) 駿馬は妄りに事に附かず、鳳凰は妄りに飼養を求めず（賢士は妄りに仕へざるに喩ふ） (二) 君賢士を遠ざけてその能を察せざるやうにては、其の己に忠ならん事を求むるも得べからず

寂漠として端を絶たんと欲するも。竊かに敢て初の厚德を忘れず。獨り悲み愁ふれば其れ人を傷ましめ。馮鬱鬱として其れ安んぞ極らん。

驥ニ而不レ乗兮。策ニ駑駘ニ而取レ路。當世豈無ニ騏驥一兮。誠莫ニ之能善御一。見ニ執レ轡者一非ニ其人一兮。故踢跳而遠去。鳧鴈皆唼ニ夫粱藻一兮。鳳愈飄翔而高擧。

(四)轡を執るものを見るに其人に非ず。(五)故に踢跳して遠く去る。(六)鳧鴈皆夫の粱藻を唼ひ。鳳愈〻飄り翔りて高く擧る。

㊀ 世人巧に偽りをなし ㊁ 正道に背きて曲事を行ひ ㊂ 駿馬(賢者)を斥けて駑馬(愚者)を用ふ ㊃ 操縦その人を得ず ㊄ 駿馬(賢者)ありとも直に遠く逃るゝなり(踢跳ははねをどるをいふ) ㊅ 鳧雁(愚者)は米や藻(粱藻)を食み鳳(賢者)は高く飛び去る

圜鑿而方枘兮。吾固知ニ其鉏鋙而難一レ入。衆鳥皆有レ所ニ登棲一兮。鳳獨惶惶而無レ所レ集。願ニ銜レ枚而無一レ言兮。嘗被ニ君之渥洽一。太公九十乃顯榮兮。誠未レ遇ニ其匹合一。

(一)圜鑿にして方枘。吾固に其鉏鋙して入り難きを知る。(二)衆鳥皆登り棲む所あり。鳳獨り惶惶として集る所なし。(三)枚を銜んで言ふなからんことを願ふも。嘗て君の渥洽を被れり。(四)太公九十にして乃ち顯榮す。(五)誠に未だ其匹合に遇はず。

㊀ 丸い穴に四角な枘をすげる如く、所詮くひちがひて入り難きを知る ㊁ 衆鳥みな棲む所あるに、鳳凰のみは居る所なし(小人皆禄位を得、賢者のみ困窮するをいふ、惶々一に遑々に作る、暇なき貌) ㊂ 口をつぐんで言はざらんとするも、嘗て君の厚恩を蒙る ㊃ 太公望呂尚は年九十にして栄えたり ㊄ 余の不遇なるは、未だその時を得ざるならん

傺之慘悽兮。願二一見而有レ明。重二無レ怨而生離一兮。中結軫而增レ傷。豈不二鬱陶而思一レ君兮。君之門以九重。猛犬狺狺而迎吠兮。關梁閉而不レ通。皇天淫溢而秋霖兮。后土何時而得レ漧。塊獨守二此無一レ澤兮。仰二浮雲一而永歎。

何時俗之工巧兮。背二繩墨一而改錯。卻二騏

して傷を增す。

(一) 忠信の君に通ぜざるを悲しみ、國を棄てて去らんとせしも (二) 內自ら哀念して忍ぶに堪へず (三) なほ一たび君に謁え、思ふ所を明かにせんことを願ふ (四) 君我を怨む節なきに、漸く我を放逐せらるゝを思へば心結ぼれて悲しみを增す(重は深く念ふ也)

豈に(一)鬱陶として君を思はざらんや。(二)君の門以に九重。猛犬狺狺として迎へ吠え。(三)關梁閉ぢて通ぜず。(四)皇天淫溢して秋霖あり。后土何の時にか漧くことを得んと。(五)塊として獨り此の澤なきを守り。浮雲を仰いで永く歎ず。

(一) 如何で我心に懷念滿ちくして君を思はざるべき (二) 君門の奧深く、猛犬(讒人に喩ふ)かしましく吠ゆ (三) 關の木 (四) 秋天雨すれば土乾くことなし(君恩あまねくして民樂むに喩ふ) (五) 己ひとり君恩に浴せず浮雲を仰いで歎息するのみ(塊はひとり居る貌)

○

何ぞ時俗の工巧なる。(一)繩墨に背いて改め錯く。(二)騏驥を却けて乘らず。(三)駑駘に策つて路を取る。當世豈に騏驥なからんや。誠に之を能く善く御すること莫しと

容與而獨倚兮。蟋蟀鳴二此西堂一。心怵惕而震盪兮。何所レ憂之多方。仰二明月一而太息兮。歩二列星一而極レ明。

（一）そへうまの樹をとり徐に行く　（二）不運なる時に生れ、德薄き世に逢へるを悲しむ　（三）徐歩して獨り立てば　（四）心傷み動く　（五）列星の下に歩み、一夜を明かす

竊悲夫蕙華之曾敷兮。紛旖二旎乎都房一。何曾華之無レ實兮。從二風雨一而飛颺。以爲三君獨服二此蕙一兮。羌無三以異二於衆芳一。閔二奇思之不一レ通兮。將二去レ君而高翔。心閔

○

（一）竊に悲む夫の蕙華の曾敷し。紛として都房に旖旎たりしを。何ぞ曾華の實なくして。風雨に從つて飛颺せる。（二）以て君獨り此の蕙を服すと爲ししも。羌以て衆芳に異なることなかりき。

（一）悲しいかな、蕙花、室下に咲き滿ちしも、風雨のために散り失せたり（曾敷は重なり布く也、旖旎は盛なる貌）　（二）楚王は蕙花を愛し、之を佩用せんとせしも、之を輕んじ、衆芳と異なるなかりしを悲しむ（初め屈原を信任せしも後に疎んじたるをいふ）

（一）奇思の通ぜざるを閔んで。將に君を去つて高く翔らんとす。（二）心閔憐して慘悽し。（三）一たび見えて明あるを願ふ。（四）怨なくして生ながら離るゝことを重へば。中結軫

又申レ之以二嚴霜一。收二恢台之孟夏一兮。然欿傺而沈藏。葉菸邑而無レ色兮。枝煩挐而交横。顏淫溢而將レ罷兮。柯彷彿而萎黃。萷櫹椮之可レ哀兮。形銷鑠而瘀傷。惟二其紛糅而將一レ落兮。恨二其失一レ時而無レ當。

の孟夏を收めて。然して欿傺して沈藏。(三)葉菸邑して色なく。枝煩挐して交〻横はる。(四)顏淫溢して將に罷れんとし。(五)柯彷彿として萎黃し。(六)萷櫹椮として哀むべく。形銷鑠して(七)瘀傷す。其紛糅して將に落ちんとするを惟ひ。(八)其の時を失つて當ることなきを恨む。

(一) 秋すでに霜を置き、多夏に霜を降らす (二) 盛夏長養の氣を收む（恢台は廣大なるをいふ、欿傺は止むるなり） (三) 木の葉傷み破れ、枝亂れ横はる (四) 木の葉敗れ、淫溢の氣を帶ぶ (五) 小枝黃ばみ損ず (六) 梢葉已に落ちて枝莖のみ獨り立つ (七) 木々皆傷み枯る（瘀は血の凝るをいふ） (八) 木々紛糅して將に枯れんとし好季を失ひ、衰へに趣くを悲しむ

擥二騑轡一而下レ節兮。聊逍遙以相佯。歲忽忽而遒盡兮。恐二余壽之弗一レ將。悼三余生之不レ時兮。逢二此世之俇攘一。

(一)騑轡を擥りて節を下し。聊か逍遙して以て相佯す。歲忽忽として遒り盡き。余が壽の將からざらんことを恐れ。(二)余が生の時ならずして。此の世の俇攘に逢ふを悼む。(三)澹容與して獨り倚れば。蟋蟀此の西堂に鳴く。(四)心怵惕して震盪す。何ぞ憂ふる所の多方なる。(五)明月を仰いで太息し。列星に步みて明を極む。

倚ニ結軨一兮長太息。涕潺湲兮下霑レ軾。忼慨絕レ兮不レ得。中瞀亂兮迷惑。私自憐兮何極。心怦怦兮諒直。

皇天平ニ分四時一兮。竊獨悲ニ此凜秋一。白露既下ニ百草一兮。奄離ニ披此梧楸一。去ニ白日之昭昭一兮。襲ニ長夜之悠悠一。離ニ芳藹之方壯一兮。余萎約而悲愁。

秋既先戒レ之以ニ白露一兮。冬

結軨(一)に倚つて長太息し。涕潺湲と下つて軾(二)を霑す。忼慨して絕えて得ず。中(三)瞀亂して迷惑し。私に自ら憐むこと何ぞ極らん。(四)心怦怦として諒に直し。

(一) 軾の下に縦横に組める木 (二) 車の前方にある横木 (三) 中心亂れていかになすべきかを知らず (四) 心平正にして忠貞の道を守る

○

(一)皇天の四時を平分する。竊に獨り此の凜秋を悲む。(二)白露既に百草に下り。奄ち此の梧楸を離披す。(三)白日の昭昭たるを去つて。長夜の悠悠たるに襲ぐ。(四)芳藹の方に壯なるを離れて。余萎約して悲み愁ふ。

(一) 一年四季に分るゝ中にて、この寒き秋を悲しむ (二) 白露既に百草の上に降れば、忽ち靑桐、あづさの葉を散らす (三) 晝は短くして暮れ、夜は之につぎて長し (四) 芳草の茂る時を去り、萎み枯るゝ季節に入る

(一)秋既に先づ之を戒むるに白露を以てし。冬又之に申ぬるに嚴霜を以てす。(二)恢炱

寐兮。哀二蟋蟀之宵征一。時亹亹而過レ中兮。蹇淹留而無レ成。

て成ることなし。

(一)通夜寐らず、曉に達す (二)夜々鳴き行くを哀しむ (三)年早く半を過ぎ、他郷にありて成ることなし

○

悲憂窮感兮獨處レ廓。有二美一人一兮心不レ繹。去レ鄕離レ家兮徠遠客。超逍遙兮今焉薄。

悲憂窮感(一)して獨り廓に處り。(二)美なる一人あり心繹けず。鄕を去り家を離れて徠りて遠客たり。(三)超かに逍遙して今焉に薄る。

(一)心に憂哀をいだき、孤立して一方に居る (二)一人の美丈夫あり(屈原をいふ) (三)遷去移徙して今茲に來りとゞまる

專思レ君兮不レ可レ化。君不レ知兮可二奈何一。蓄怨兮積レ思。心煩憺兮忘二食事一。願一見兮道二余意一。君之心兮與レ余異。車既駕兮朅而歸。不レ得レ見兮心傷悲。

專ら君を思へども化(一)すべからず。君知らず、奈何すべき。怨を蓄へ思を積み、心煩憺(二)して食事を忘る。願くは一たび見て余が意を道はん。君が心余と異なり。(三)車既に駕して竭りて歸りしも。見ることを得ずして心傷み悲しむ。

(一)君に違き難し (二)亂れ動く (三)既に車に駕して故國に歸りしも、獨見し得ざりしを悲む

變衰。憭慄兮。若在遠行。登山臨水兮送將歸。泬寥兮天高而氣清。宲廫兮收潦而水清。憯悽增欷兮薄寒之中人。愴怳懭悢兮去故而就新。坎廩兮貧士失職而志不平。廓落兮羇旅而無友生。惆悵兮而私自憐。

(一)物淋しき貌 (二)草木落葉して衰ふ (三)憂へ懼るゝ貌 (四)遷客出て去りて他方に之き、(五)山に登りて遠望し、流水に臨みて逝くを嘆じ、時に郷に歸らんとする人を送る如く、別離悵惋の念禁じ難し

(一)泬寥として天高うして氣清み。(二)宲廫として(三)潦を收めて水清み。(四)憯悽として增〻薄寒の人に中るを欷き。(五)愴怳懭悢として(六)故きを去りて新しきに就き。(七)坎廩として貧士職を失つて志平かならず。(八)廓落として羇旅して友生なし。(九)惆悵として私かに自ら憐む。

(一)廣く澄み渡る貌 (二)寂寥に同じ (三)たまり水退きて、川水清む (四)悲しみ痛む貌 (五)意を失ふ貌 (六)盛りを過ぎて衰へに向ふ (七)行路意の如くならず (八)孤立する貌 (九)悲しみ悶えて

燕翩翩其辭歸兮。蟬宲漠而無聲。鴈廱廱而南遊兮。鶤鷄啁哳而悲鳴。獨申旦而不

燕翩翩として其れ辭し歸り。蟬宲漠として聲なし。(一)鴈廱廱として南に遊び。(二)鶤雞(三)啁哳として悲しみ鳴く。

(一)雁の聲 (二)鶴に似たる黄色の鳥 (三)聲繁く細き貌

(一)獨り旦を申ねて寐ねず。蟋蟀の宵征を哀む。(二)時亹亹として中を過ぎ、蹇淹留し

悲哉秋之爲
氣也。蕭瑟兮。
草木搖落而

卷之八

九辯第八

（王）九辯は楚の大夫宋玉の作りし所なり。辯とは變なり。道德を敶べ變を以て君に說くを謂ふなり。九は陽の數。道の綱紀なり。故に天に九星ありて以て機衡を正し、地に九州ありて以て萬邦を成し、人に九竅ありて以て精明を通ず。屈原忠貞の性を懷きて讒邪を被り、君闇蔽せられて國將に危亡せんとするを傷み、乃ち天地の數を援き、人形の要を列し、九歌九章の頌を作り、以て懷王を諷諫し、己の謂ふ所、天地と度を合し、履んで行ふべきを明にせり。宋玉は屈原の弟子なり。其師忠にして放逐せられしを閔惜し、故に九辯を作りて以て其志を述ぶ。漢興るに到り、劉向王褒の徒、咸其文を悲み、依つて詞を作る。故に號して楚詞となし、亦其九を承けて以て義を立つ。

悲いかな秋の氣たるや。（一）蕭瑟として。（二）草木搖落して變衰す。（三）憭慄として。（四）遠行に在つて山に登り水に臨み將に歸らんとするを送るが若し。

寧赴湘流。葬於江魚之腹中。又安能以皎皎之白。而蒙世俗之塵埃乎。

漁父莞爾而笑。鼓枻而去。歌曰。滄浪之水清兮。可以濯吾纓。滄浪之水濁兮。可以濯吾足。遂去不復與言。

(一)寧ろ湘流に赴き。江魚の腹中に葬らるゝとも。(二)又安んぞ能く皎皎の白を以て世俗の塵埃を蒙らんやと。

㊀ むしろ湘水に投じ、江魚の餌食となるとも ㊁ 潔白の身にて、世俗の塵に汚さるゝに堪へずと

(一)漁父莞爾として笑ひ。枻を鼓して去り。(二)歌ひて曰く。滄浪の水清まば。以て吾が纓を濯ふべし。滄浪の水濁らば。以て吾が足を濯ふべしと。(三)遂に去つて復與に言はず。

㊀ 漁父はほゝゑみ、船べりを叩きて去り ㊁ 歌ひていふ、滄浪の水澄まば冠のひもを洗ふべし、濁らば吾が足を洗ふべしと（物に滞らず、世と推し移るをいふ、滄浪は川の名、漢水の下流なり） ㊂ 漁父遂に去り、また相見て言ふことなかりき

皆濁。而我獨淸。衆人皆醉。而我獨醒。是以見放。

漁父曰。夫聖人者。不凝滯於物。而能與世推移。擧世皆濁。何不淈其泥而揚其波。衆人皆醉。何不餔其糟而歠其釃。何故懷瑾握瑜而自令見放爲。

屈原曰。吾聞之。新沐者必彈冠。新浴者必振衣。安能以身之察察。受物之汶汶者乎。

を以て放たれたりと。

(一)世人皆利を貪れるに我獨潔し (二)衆皆善惡の識別なきに我ひとり事理に明かなり

漁父曰く。(一)夫れ聖人は物に凝滯せずして。能く世と推し移る。擧世皆濁らば、(二)何ぞ其泥を淈して其波を揚げざる。衆人皆醉はば。(三)何ぞ其糟を餔ひて其釃を歠らざる。何が故に(四)瑾を懷き瑜を握り、自ら放たれしむることを爲しかと。

(一)聖人の心は一理一物にのみ滯らず、よく世俗に隨ひ、自在に變通するものなり (二)何故に俗に化し、共に溷濁せざるぞ (三)何故に衆人に隨ひ、共に醉ひ亂れざるぞ(糟は酒のかす、釃は薄き酒なり) (四)瑾も瑜も共に美玉以て立派なる才能に喩ふ

屈原曰く。吾之を聞く。(一)新に沐する者は必ず冠を彈き。新に浴する者は必ず衣を振ふと。(二)安んぞ能く身の察察たるを以て。物の汶汶たる者を受けんや。

(一)新に髮を洗へるものは冠をもはじき、衣を振ひてその塵垢を去り身の之に汚されん事を避く (二)潔き身にて物の汚れを受くるに堪へず

屈原既放遊二於江潭一。行吟二澤畔一。顏色憔悴。形容枯槁。
漁父見而問レ之曰。子非二三閭大夫一與何故至二於斯一。
屈原曰。擧レ世

卷之七

漁父第七

(王)漁父は屈原の作りし所なり。屈原放逐せられて江湘の間にあり。憂愁嘆吟し、儀容變易す。而して漁父世を避け身を隱し、魚を江濱に釣り、欣然として自ら樂むものあり。時に屈原に川澤の域に遇ひ、怪んで之を問ひ、遂に相應答せり。楚人屈原を思念し、因つて其の辭を叙し、以て相傳ふ。

(一)屈原既に放たれて江潭に遊び。行〻澤畔に吟ず。(二)顏色憔悴し、(三)形容枯槁せり。

(一)屈原は既に放たれて水邊に遊び、行く〳〵澤のはとりに吟ず　(二)顏色は勞れ衰へ　(三)形は枯木の如く痩す

漁父見て之に問うて曰く、子は(一)三閭大夫にあらずや、何が故に斯に至ると。

(一)官の名にて楚の王族、昭屈景の三姓を掌る(卷頭離騷の王註にあり)

屈原曰く。(一)世を擧げて皆濁り、我獨り清めり。(二)衆人皆醉ひ。我獨り醒めたり。是

不レ明。數有レ所レ不レ逮、神有レ所レ不レ通。用ニ君之心一、行ニ君之意一。龜策誠不レ能レ知ニ此事一。

を指していふ）も足らざる所あり、知も明知し難き所あり　（三）數（策を指していふ）も及ばざる所あり、神も通ぜざる所あり　（四）君はたゞ君の思ふまゝに事を行へ、卜筮にては決し難かるべしと

鶩爭食乎。此孰吉孰凶。何去何從。世溷濁而不清。蟬翼爲重。千鈞爲輕。黃鐘毀棄。瓦釜雷鳴。讒人高張。賢士無名。吁嗟默默兮。誰知吾之廉貞。

詹尹乃釋策而謝曰。夫尺有所短。寸有所長。物有所不足。智有所

（一）賢者と共に世を逃れ、禍を避くべきか（鵠は高く飛ぶ鳥なり）（二）小人に伍し爵位俸祿を爭ふべきか（鶩はあひるなり）

（一）此れ孰か吉孰か凶。何をか去り何にか從はんと。

（一）以上八條を結びて以て卜を請ふ也

（一）世溷濁して淸からず。（二）蟬翼を重しとし。千鈞を輕しとす。（三）黃鐘毀棄せられて、瓦釜雷鳴す。（四）讒人高張して。賢士名なし。（五）吁嗟默默たり。誰か吾の廉貞を知らん。

（一）世濁りて事理明かならず（二）蟬の羽の如く輕きものを重しといひ、千鈞の重さあるものを輕しといふ（三）黃鐘（器大きく、聲のひろき樂器）は破り棄てられ、瓦釜の如き賤器のみ雷の如く鳴る。「鐘」又「鍾」に作る（四）讒人は時を得、賢士は隱れて名を知られず（五）世に之を論ずるものなく、一人として我が廉貞なるを知るものなし

詹尹乃ち策を釋てて謝して曰く。（一）夫れ尺も短き所あり。寸も長き所あり。（二）物も足らざる所あり。智も明かならざる所あり。（三）數も逮ばざる所あり。神も通ぜざる所あり。君の心を用ひ。君の意を行へ。龜策は誠に此の事を知ること能はじと。

（一）尺は寸より長きも、河嶽の大を度るにはなはだ短く、寸は尺より短きも、毫釐を度るにはなはだ長し（二）物（

以保レ眞乎。將哫訾慄斯。喔咿儒兒以事二婦人一乎。寧廉潔正直以自淸乎。將突梯滑稽。如脂如レ韋以潔楹乎。寧昂昂若二千里之駒一乎。將氾氾若二水中之鳧一乎。與レ波上下偸以全二吾軀一乎。寧與二騏驥一亢レ軛乎。將隨二駑馬之迹一乎。寧與二黃鵠一比レ翼乎。將與雞

に事へんか。

(一) 世俗を超脱し、我が本然の眞を守るべきか (二) 强ひて媚び諂ひ、婦女の如きものに事ふべきか

寧ろ廉潔正直にして以て自ら淸くせんか。將た突梯滑稽脂の如く、韋の如く以て潔楹せんか。

(一) 俗に隨ひて逆はず圓轉自在なるべきか（脂と韋とは滑かに柔きをいふ、楹は圓柱なり、かどなきをいふ）

寧ろ昂昂として千里の駒の若く。將た氾氾として水中の鳧の若く。波と上下して偸くも以て吾が軀を全うせんか。

(一) 己の才能をあらはし、志行を高くすること、駿馬の如くなるべきか (二) 波と共に浮沈し、水中の鳧の如くなるべきか

寧ろ騏驥と軛を亢げんか。將た駑馬の迹に隨はんか。

(一) 才ある者と肩をならべ、重任に當るべきか（騏驥は駿馬なり、軛はくびき也） (二) 凡俗の後に隨ひ、何事をもなさざるべきか

寧ろ黃鵠と翼を比せんか。將た雞鶩と食を爭はんか。

鄭詹尹曰。余有レ所レ疑。願因ニ先生一決レ之。詹尹乃端レ策拂レ龜曰。君將ニ何以教一レ之。

屈原曰。吾寧悃悃款款朴以忠乎。將送レ往勞レ來斯無レ窮乎。

寧誅ニ鋤草茅一以力耕乎。將游ニ大人一以成レ名乎。

寧正言不レ諱以危レ身乎。將從レ俗富貴以媮レ生乎。

寧超然高擧

んと。詹尹(一)乃ち策を端し龜を拂ひて曰く(二)。君將に何を以て之に教へんとする(三)。

(一)卜筮を掌る者の長 (二)筮竹を正しく持ち、龜の甲の塵を拂ひていふ(古は龜の甲を燒きトに用ひしなり) (三)君のト筮に問はんとする所は何ぞ

屈原曰く。吾寧ろ悃悃款款として朴にして以て忠ならんか(一)。將た往くを送り來るを勞し斯に窮なからんか(二)。

(一)誠實質直を旨とし、忠を君國に盡すべきか (二)往くを送り、來るを迎へ、世俗に從ひて困窮を避くべきか

寧ろ草茅を誅鋤して以て力耕せんか(一)。將た大人に游びて以て名を成さんか(二)。

(一)農夫となり、雑草を刈りて荒地を開き、耕作に勉むべきか (二)官にとゞまり、貴人に親みて名を揚ぐべきか

寧ろ正言諱まずして以て身を危くせんか(一)。將た俗に從ひ富貴にして以て生を媮まんか(二)。

(一)身刑戮せらるゝ迄も君の非を諫めんか (二)身の安樂を事とせんか

寧ろ超然として高く擧り以て眞を保たんか(一)。將た哫訾慄斯喔咿儒兒して以て婦人

屈原既放三年。不レ得二復見一。竭レ知盡レ忠。而蔽二鄣於讒一。心煩慮亂。不レ知レ所レ從。乃往見二太卜

巻之六

卜居第六

（王）卜居は屈原の作りし所なり。屈原忠貞の性を履んで嫉妬せられ、讒佞の臣を念ふに、君に承け非に順ひて富貴を營り、己忠直を執りて身放弃せらる。心迷ひ意惑ひ、爲す所を知らず。乃ち往いて太卜の家に至り、神明に稽問し、之を蓍龜に決し、己世に居りて何か宜しく行ふべき所ならんかを卜し、異策を聞きて以て嫌疑を定めんことを冀へり。故に卜居といふ。

屈原既に放たれて三年。復見ゆることを得ず。知を竭し忠を盡して。而も讒に蔽鄣せらる。心煩はしく慮亂れて、從ふ所を知らず。

（一）讒邪の徒におほひさまたげられ　（二）いかにすべきかを知らず

乃ち往きて太卜鄭詹尹を見て曰く。余疑ふ所あり。願くは先生に由りて之を決せ

經ー兮。乘ニ間維ー以反顧。召ニ黔嬴ー而見レ之兮。爲レ余先ニ乎平路ー。
經ニ營四荒ー兮。周ニ流六漠ー。上至ニ列缺ー兮、降望ニ大壑ー。
下崢嶸而無レ地兮。上寥廓而無レ天。視儵忽而無レ見兮。聽惝怳而無レ聞。超ニ無爲ー以至清兮、與ニ泰初ー而爲レ隣。

余が爲に平路に先たしむ。

㊀ 暗き所墟を歴るに正路を得ず、維の間にて顧みて惑ひ ㊁ 北方の神を召して先導を爲さしむ

㊀四荒を經營し。六漠を周流し。㊁上りて列缺に至り。降りて大壑を望む。

㊀ 四方を歴遊し、六合をめぐり ㊁ 上は天の間隙まで登り下は大海に至る

㊀下は崢嶸として地なく。上は寥廓として天なし。㊁視れども儵忽として見ゆるなし。聽けども惝怳として聞ゆるなし。無爲を超えて以て至清にして。泰初と隣したり。

㊀ 俯すれば山の嶮しきのみにて大地を見ず、仰げば茫漠として天を見ず ㊁ 見るなく聽くなく無爲至清の境に至り、太古自然の道と合せり(惝怳は自失するをいふ)

九韶歌。使湘靈鼓瑟兮。令海若舞馮夷。玄螭蟲象並出進兮。形蟉虯而逶蛇。雌蜺便娟以增撓兮。鸞鳥軒翥而翔飛。音樂博衍無終極兮。焉乃逝以徘徊。舒并節以馳騖兮。逴絕垠乎寒門。軼迅風於淸源兮。從顓頊乎增冰。歷玄冥以邪

(一)祝融、余を戒め止め　(二)鸞鳥を使として洛水の神女宓妃を迎へ　(三)堯の音樂咸池を張り黃帝の音樂承雲を奏し　(四)娥皇女英の二女舜の音樂九韶を歌ふ　(五)湘水の神　(六)海の神　(七)川の神

(一)玄螭蟲象並び出でて進む。形蟉虯として逶迤たり。(二)雌蜺便娟として以て增く撓はり。(三)鸞鳥軒翥して翔飛す。(四)音樂博衍にして終極なし。焉に乃ち逝きて以て徘徊す。

(一)水中の靈物、玄螭虫象など並び出でて進み、その形曲りうねりたり　(二)虹美しくまつはり　(三)高く翔りて飛び翔けり　(四)樂を奏りて極りなし

(一)節を舒并せて以て馳騖し。(二)逴く垠を寒門に絕つ。(三)迅風を淸源に軼し。(四)顓頊に增冰に從ふ。

(一)轡を緩めて馳けり　(二)遠く北極の門を越えて更に北に進み　(三)疾風を追ひ拔きて淸源の地に至り　(四)北方の神顓頊に積氷の中に從ふ

(一)玄冥を歷るに邪經を以てし。間維に乘りて以て反顧し。(二)黔嬴を召して之を見て。

夫懷余心悲兮。邊馬顧而不レ行。思二舊故一以想像兮。長太息而掩レ涕。氾容與而遐舉兮。聊抑レ志而自弭。指二炎神一而直馳兮。吾將レ往二乎南疑一。覽二方外之荒忽一兮。沛罔象而自浮。祝融戒而蹕御兮。騰二告鸞鳥一迎二宓妃一。張二樂成池一奏二承雲一兮。二女御二

㊀大空をわたり思ふまゝに遊び　㊁忽ち舊都郢を見　㊂僕馬も悲み顧みて行かず

(一)舊故を思うて以て想像し。長太息して涕を掩ふ。(二)氾容與として遐擧し。(三)聊く志を抑へて自ら弭まる。

㊀郢都の故舊を思ひ、太息して涙を拭ひ　㊁また從容として高く登り去らんとし　㊂心を抑へて、暫くためらふ

(一)炎神を指して直に馳せ。(二)吾將に南疑に往かんとす。(三)方外の荒忽たるを覽れば。(四)沛罔し象として自ら浮ぶ。

㊀南方の炎神祝融の居を指して直ちに馳せ　㊁南方九疑山に行かんとし　㊂邊地の空漠たるを見れば　㊃水、滿ち溢れ萬物浮き漂ふ

(一)祝融戒めて蹕御し。(二)鸞鳥に騰告せしめて宓妃を迎ふ。(三)樂の咸池を張りて承雲を奏し。(四)二女九韶の歌を御す。(五)湘靈をして瑟を鼓せしめ。(六)海若をして(七)馮夷と舞はしむ。

而奔屬。後文昌使掌行兮。選署衆神以並轂。路曼曼其修遠兮。徐弭節而高厲。左雨師使徑侍兮。右雷公以爲衞。欲遠度世以忘歸兮。意恣睢以担撟。內欣欣而自美兮。聊媮娛以自樂。

㊀時すでに曛く眺れども明ならず。朱本「曖曃」　㊁武玄星(北方の七星)を待衞に加はらしむ　㊂文昌(北斗魁の前の六星)を從へて行列を掌らしめ　㊃諸神を部署して車を並べ行かしむ

(一)路曼曼として其れ悠遠なり。(二)徐に節を弭めて高く厲す。(三)雨師を左にして徑に侍せしめ。雷公を右にして以て衞となす。

㊀路長くして遠し　㊁徐に行き、また疾く走る(考には「弭節」は「抗節」の誤とす)　㊂雨の神。「徑侍」朱本「徑待」(考に、留りて徑に在りて待たしむと解す)

(一)遠く世を度して以て歸るを忘れんと欲す。(二)意恣睢にして以て担撟なり。(三)內欣欣として自ら美とし。聊く媮娛して以て自ら樂む。

㊀塵世を超脫し　㊁心をほしいまゝにし、行を高くす　㊂內心欣然自ら佳美とし、是を以て樂みと爲す

涉青雲以汎濫游兮。忽臨睨夫舊鄉。僕

(一)青雲を涉りて以て汎濫として遊び。(二)忽ち夫の舊鄉を臨睨す。僕夫懷ひ余が心悲む。(三)邊馬顧みて行かず。

歷二太皓一以右轉兮。前二飛廉一以啓レ路。陽杲杲其未レ光兮。凌二天地一以徑度。

風伯爲レ余先驅兮。辟二氛埃一而淸涼。鳳凰翼其承レ旂兮。遇二蓐收乎西皇一。

掔二彗星一以爲レ旍兮。擧二斗柄一以爲レ麾。叛陸離其上下兮。遊二驚霧之流波一。

旹晻曖其曭莽兮。召二玄武一

(一)太皓を歷て以て右に轉じ。飛廉を前にして以て路を啓く。(二)陽杲杲として其れ未だ光らず。天地を凌ぎて以て徑に度る。

(一) 東方の神太皞の居を歷て右し、風の神飛廉に先導せしめ (二) 天明を待たずして直に行く（陽杲々は日の輝くなり）

風伯余が爲に先驅すれば。氛埃を辟きて淸涼なり。(一)鳳凰翼して其れ旂を承く。(二)(三)蓐收に西皇に遇ふ。

(一) 風の神先驅して前にあれば霧滃と埃塵とを掃除して氣淸涼なり (二) 鳳凰威儀ヶ添へて旗の近くに飛び (三) 西方の神蓐收に西力の帝神少皞が在る處の海洋に遇ひて遊ぶ

彗星を掔りて以て旍となし。(一)斗柄を擧げて以て麾となす。(二)叛陸離として其れ上下し。(三)驚霧の流波に遊ぶ。

(一) 北斗星の柄を麾旗とし (二) 繽紛分散して上下し (三) 波立つ霧の中に遊ぶ

(一)旹晻曖として其れ曭莽たり。(二)玄武を召して奔屬せしめ。(三)文昌を後にして行を掌らしめ。(四)衆神を選署して以て轂を竝べしむ。

朝發二軔於太儀一兮。夕始臨二乎於微閭一。屯二余車一之萬乘兮。紛容與而並馳。駕二八龍一之蜿蜿兮。載二雲旗一之逶蛇。建二雄虹之采旄一兮。五色雜而炫燿。服偃蹇以低昂兮。驂連蜷以驕驁。騎膠葛以雜亂兮。斑漫衍而方行。撰二余轡一而正レ策兮。吾將レ過二乎句芒一。

に至り　(四)旬始星につきて天帝の居を觀る　(五)朝に車を天庭に發し　(六)夕に東北の玉山醫無閭に至る

(一)余が車を屯する萬乘。紛容與として竝び馳す。(二)八龍に駕して蜿蜿たり。雲旗を載てて逶蛇たり。(三)雄虹の采旄を建て。五色雜りて炫燿す。(四)服偃蹇として以て低昂し。驂連蜷として以て驕驁す。

(一)萬乘の車をとゞめて衆神を從へ、從容として並び馳せ（紛は盛なるをいふ）　(二)八龍の屈伸しつゝ進むに乘り雲の旗を長くたなびかす　(三)虹の彩旗を建て、五色入り雜りて眼をくらまし　(四)服馬は勇みて上下し、驂馬も相連りて驕る（服は轅を夾む二馬をいひ、驂はその兩邊の二馬をいふ）

(一)騎膠葛として以て雜亂し。斑漫衍として方に行く。余が轡を撰りて(二)策を正しくし。吾將に(三)鈎芒に過らんとす。

(一)從騎入り亂れ、長くつゞきて行く　(二)馬の策　(三)東方の神鈎芒を訪はんとす。朱本「句芒」

而始壯、質銷鑠以汋約兮。神要眇以淫放。

嘉南州之炎德兮。麗桂樹之冬榮。山蕭條而無獸兮。野寂寞乎無人。載營魄而登霞。掩浮雲而上征。

〔一〕修錬の功により、顔色美しくして光澤あり　〔二〕精神純粹にして壯に　〔三〕體瘦せて柔かに　〔四〕心深遠にして飄然として遠く行く

(一)南州の炎德を嘉みし。桂樹の冬榮を麗とす。(二)山蕭條として獸なく。野寂寞として人なし。(三)營魄を載せて登霞し。浮雲に掩はれて上征す。

〔一〕南土の暖きを喜び、桂樹の冬榮ゆるを愛す　〔二〕山野空濶にして獸なく人なし、誠に登仙に宜しき地なり　〔三〕いよいよ魂魄を錬り登仙して天に上りゆく（霞は朝霞の義とし、或は遐（ハルカ）とし、或は假（イタル）とす）

命天閽其開關兮。排閶闔而望予。召豐隆使先導兮。問太微之所居。集重陽入帝宮兮。造旬始而觀淸都。

(一)天閽に其れ關を開けと命じ。(二)閶闔を排して予を望む。(三)豐隆を召して先導せしめ。(四)太微の居る所を問ふ。重陽に集り帝宮に入り。(五)旬始に造りて淸都を觀る。(六)朝に軔を太儀に發し。(七)夕に始めて微閭に臨む。

〔一〕天門の開閉を司る神　〔二〕天門を開きて進まんとし暫く自ら顧る（望予は古說には我の來るを須つと解す。聞松考には俳徊顧望して敢て遽かに進まざる也といへり）　〔三〕雷師を先導とし、太微といふ神の居所を問ふ　〔四〕天

而魂兮。彼將自然。壹氣孔神兮。於中夜存。虛以待之兮。無爲之先。庶類以成兮。此德之門。聞至貴而遂徂兮。忽乎吾將行。仍羽人於丹丘兮。留不死之舊鄕。朝濯髮於湯谷兮。夕晞余身兮九陽。吸飛泉之微液兮。懷琬琰之華英。玉色頩以脕顏兮。精醇粹

(一) 王子喬いふ、道は心にて會得すべく、言葉もて傳ふべからず (二) その小なるに限なく、その大なるに限なし (三) まづ汝の魂を亂すなかれ、道は自然に悟らるゝならん (四) 中夜靜寂の時に、神氣はその身に存するものなり (五) 心を虛しうして神氣の充つるを待つべし、これ無爲の第一法なり (六) かくて諸法自ら成る、これ眞に德に進み仙に化するの始なり

至貴を聞きて遂に徂き。忽として吾將に行かんとす。(一)羽人に丹丘に仍り。不死の舊鄕に留る。

(一) 王子喬の至妙の言を聞き、遠く去りて仙界に行かんとし (二) 先づ丹丘に至りて仙人に就き、仙靈居る所の不死の鄕に留る（丹丘は晝夜常明の地なり）

朝に髮を湯谷に濯ひ。(一)夕に余が身を九陽に晞かす。(二)飛泉の微液を吸ひ。(三)琬琰の華英を懷く。

(一) 日の出づる處 (二) 天地の涯 (三) 仙界微妙の滋液 (四) 美玉華麗の花

(一)玉色頩として以て脕顏。(二)精醇粹にして以て始めて壯なり。(三)質銷鑠して以て汋約たり。(四)神要眇にして以て淫放なり。

重曰。春秋忽其不レ淹兮。奚久留二此故居一。軒轅不レ可二攀援一兮。吾將下從二王喬一而娛戲上。餐二六氣一而飲二沆瀣一兮。漱二正陽一而含二朝霞一。保二神明之清澄一兮。精氣入而麤穢除。

重ねて曰く。(一)春秋忽として其れ淹しからず。奚ぞ久しく此の故居に留らん。(二)軒轅は攀援ずべからず。吾將に王喬に從ひて娛戲せんとす。(三)六氣を餐して沆瀣を飲み。(四)正陽に漱いで朝霞を含み。(五)神明の清澄を保ち。精氣入つて麤穢除かる。

(一)春秋過ぎ易く、久しくこの舊地に留り難し (二)黃帝軒轅氏には伴ひ難きも、暫く王子喬(周の靈王の太子にして登仙せし人なり)に從ひ、ともに遊び樂まんとするなり (三)天地六合の清氣を吸ひ、北方夜半の氣を飲み (四)南方日中の氣に口すゝぎ、朝霞赤黃の氣を含めば (五)心は清く澄みて、天地の精氣胸に入り、汚穢の氣除かる

順二凱風一以從遊兮。至二南巢一而壹息。見二王子一而宿レ之兮。審二壹氣之和德一。

(一)凱風に順ひて以て從遊し。南巢に至りて壹たび息ひ。(二)王子を見て之を宿し。壹氣の和德を審にす。

(一)よりて南風に從ひ、南方鳳鳥の巢に至り (二)王子喬に見えて宿し、仙道の秘要を問ふ(宿は肅に通ず)

曰道可レ受兮。不レ可レ傳。其小無レ內兮。其大無レ垠。無三淈滑二

(一)曰く道受くべくして傳ふべからず。(二)其小內無く。其大垠無し。淈して(三)而の魂を滑すことなかれ。彼は將に自然ならんとす。(四)壹氣孔だ神に。中夜に於て存す。(五)虛以て之を待て。無爲の先なり。(六)庶類以て成る。此れ德の門なり。

奔而鬼怪。時髣髴以遙見兮。精皎皎以往來。絶二氛埃一而淑尤兮。終不レ反二其故都一。免二衆患一而不レ懼兮。世莫レ知二其所一レ如。恐天時之代レ序兮。耀靈曄而西征。微霜降而下淪兮。悼二芳草之先蘦一。聊仿佯而逍遙兮。永歷レ年而無レ成。誰可三與玩二斯遺芳一兮。長・鄉レ風而舒レ情。高陽邈以遠兮。余將二焉所一レ程。

(一)心氣の變ずるにつれ、吾が體輕く擧り、神の如くに速に奔り　(二)時に髣髴として遙かに天神を見る心地し、精神往來して止まず

(一)氛埃を絶ちて淑尤し。終に其故都に反らず。(二)衆患を免れて懼れず。(三)世其の如く所を知ることなし。

(一)俗塵を脱して道を行ひ善を修め以て身をよくし、遂に楚を去つて遠く遊く(淑尤は善の物に過ぐるある意)　(二)衆邪の患を免れ、心に恐るゝ所なし　(三)世また我が神遊の樂を知るなし

(一)恐る天時の序を代へ。耀靈曄いて西に征き。微霜降つて下に淪み。芳草の先づ蘦ちんことを悼む。(二)聊く仿佯して逍遙し。(三)永く年を歴て成ること無し。誰か與に斯の遺芳を玩ぶべき。(四)長く風に鄕つて情を舒ぶ。(五)高陽邈に以て遠し。余將に焉の所にか程らんとする。

(一)春秋迭に更り、日輝いて西に沈み(年の漸く老ゆるをいふ)　(二)暫く逍遙し、心を遊ばしむ　(三)身老いに及び、功名の成るなく、世に共に善行の芳を味ふに足る者なし　(四)「長」原本「畏」に作るは非　(五)顓頊高陽氏(屈原の祖)はすでに遠くして、法を取るべきの所なし

由。漠虛靜以恬愉兮。澹無爲而自得。聞二赤松之清塵一兮。願レ承二風乎遺則一。貴二眞人之休德一兮。羨二往世之登仙一。與化去而不レ見兮。名聲著日延。奇三傳說之託二辰星一兮。羨二韓衆之得レ一。形穆穆以浸遠兮。離二人羣一而遁逸。因二氣變一而遂曾擧兮。忽神

（一）漠として虛靜にして以て恬愉し。（二）澹として無爲にして自得す。（三）赤松の淸塵を聞き。風を遺則に承けんことを願ふ。

（一）心靜にしてたのしみ喜び（二）私慾雜念を去り、自然に心に得る所あり（三）古の仙人赤松子の淸き迹を慕ひ、その遺訓に從ひ、高風を承けんことを願ふ

（一）眞人の休德を貴び。往世の登仙を羨む。（二）與に化し去つて見えざれども。名聲著れて日に延ぶ。

（一）美德を具へ、登仙したる古人を羨む（眞人は仙人をいふ）（二）古人はすでに仙化したるも、その名は永く世に傳はれり

（一）傳說の辰星に託せるを奇とし。韓衆の一を得しを羨む。（二）形穆穆として以て浸く遠く。人羣を離れて遁逸す。

（一）武丁の相傳說は、天に昇りて星となりしを奇とし、また韓衆の純一の德を得て登仙せるを羨めり（韓衆の名は列仙傳に出づ、蓋し當時この說ありし也）（二）余の體また漸く擧り、遠く人界を離るゝ心地す（穆々は深遠の貌）

（一）氣變に因つて遂に曾く擧り。忽ち神犇して鬼怪す。（二）時に髣髴として以て遙に見。精皎皎として以て往來す。

結㆒兮。獨鬱結其誰語。夜炯炯而不㆑寐兮。魂營營而至㆑曙。惟㆓天地之無㆒㆑窮兮。哀㆓人生之長勤㆒。往者余弗㆑及兮。來者吾不㆑聞。

られず。魂營營として曙に至る。

㊀ 世の沈濁に遭ひて汚穢なるを見れず、心鬱々として複誰と共にか語らん ㊁ 夜も寐ねられず、不安の中に暁に至る

(一)天地の窮無きを惟ひ。人生の長く勤むるを哀む。(二)往者は余及ばず。(三)來者は吾聞かず。

㊀ 天地悠々として極りなく、人其間にありて徒らに永く勤勞するを悲む ㊁ 古の神仙に王子喬の如き者あれども、時異りて相及ぶを得ず ㊂ 後來またこの類の者あらんも、余未だその名を聞かず

步徙倚而遙思兮。怊惝怳而永懷。意荒忽而流蕩兮。心愁悽而增㆑悲。神倏忽而不㆑返兮。形枯槁而獨留。內惟省以端㆑操兮。求㆓正氣之所㆒㆑

(一)步徙倚として遙に思ひ。(二)怊惝怳として永く懷ふ。(三)意荒忽として流蕩し。(四)心愁悽して悲を增す。

㊀ 立ちさまよひて遙かに思ふ所あり ㊁ 失意するものゝ如く永く流懷す ㊂ 情思共に依りどころなく(恍惚ぼうつとりするをいふ) ㊃ 深く愁ひて悲みを增す

(一)神倏忽として返らず。(二)形枯槁して獨り留る。(三)內惟省て以て操を端し。正氣の由る所を求む。

㊀ 心は遠く遊びて歸らざるも、形骸は枯るゝ如くに舊地に留る ㊁ よりて自ら顧みて操を正し、天地正氣の出づる所を求む

悲時俗之迫レ阨兮。願輕擧而遠遊。質菲薄而無レ因兮。焉託乘而上浮。遭ニ沈濁而汙

卷之五

遠遊第五

（王）遠遊は屈原の作りし所なり。屈原方直の行を履みて世に容れられず。上は讒佞に譖毀せられ、下は俗人に困極せられ、山澤に章皇して告訴する所なく。乃ち深く元一を惟ひ、恬漠を修執し、世を濟はんと思欲す。則ち意中憤然として文采秀發し、遂に妙思を叙し、山人に託配して、與に俱に遊戲し、天地を周歷して到らざる所なし。然れども猶ほ楚國を懷念し、舊故を思慕す。忠信の篤き、仁義の厚き、是を以て君子其志を珍重し、その辭を瑋とす。

（一）悲しいかな時俗の阨に迫る。（二）願くは輕擧して遠遊せん。（三）質菲薄にして因るとなし。（四）焉ぞ託乘して上り浮ばん。

（一）時俗嫉妬して賢者を苦しめ日に困阨にせまるを悲み　（二）身を輕くして高く擧り、風雲に乘じて天界に遊ばんことを願ふ　（三）しかも資質鄙くして其のたよりなし　（四）身を何物に托して天に登らんか

（一）沈濁にして汙穢なるに遭ひ。獨り鬱結して其れ誰とか語らん。（二）夜炯炯として寐ね

海兮。從二子胥一而自適。望二大河之洲渚一兮。悲二申徒之抗迹一。驟諫レ君而不レ聽兮。任二重石一之何益。心絓結而不レ解兮。思蹇產而不レ釋。

申徒の抗迹を悲む。

(一)更に淮に浮びて海に入り、伍子胥沈尸の跡に從ひて自ら安んじ (二)また大河の渚を望み、申徒狄の高き事迹を悲む（申徒狄は紂を諫めて納れられず、石を負ひて河に沈みし人なり）

驟〻君を諫めて聽かれず。重石を任ふ何の益かあらん。(三)心結絓して解けず。思蹇產して釋けず。

(一)屢々君を諫めて納れられず、重き石を負ひ水に沈むも益なからん (三)心結ぼれ、思屈して解け難し（絓は屈也、蹇產は結屈の意）

觀二炎氣之相仍一兮。窺二煙液之所一レ積。悲二霜雪之俱下一兮。聽二潮水之相擊一。借二光景一以往來兮。施二黃棘之枉策一。求二介子之所一レ存兮。見二伯夷之放迹一。心二調度一而弗レ去兮。刻二著志一之無レ適。曰吾怨二往昔之所一レ冀兮。悼二來者之逖逖一。浮二江淮一而入レ

（一）炎氣の相仍るを觀。煙液の積む所を窺ひ。霜雪の俱に下るを悲み。潮水の相擊つを聽く。

（一）上には火氣の依り從ふを見、煙液の積み聚るを窺ひ、下には霜雪の降るを悲み、潮水の相打つを聽く

（二）光景を借つて以て往來し。黃棘の枉策を施し。介子の存する所を求め。伯夷の放迹を見る。

（二）神光電景を借りて往來し、曲れるいばらの鞭を馬にあて、馳せて介子推伯夷の迹を求めんとす

（三）調度を心して去らず。著志を刻んで適する無し。（四）曰く吾往昔の冀ふ所を怨み。來者の逖逖たるを悼む。

（三）二子の清行を慕ひ、深く心に刻まんとするも、なほ我が志に適するに足らず（調度は測定測度）（四）往時の願はすでに遂げ難く後來の事も豫測し難きを悲む（逖々は遠くして相及ばずとの意）

（五）江淮に浮んで海に入り。子胥に從つて自ら適んぜんとす。（六）大河の洲渚を望み。

浮涼兮。漱凝霜之雰雰。依風穴以自息兮。忽傾寤以嬋媛。

馮崑崙以瞰霧露兮。隱岷山以清江。憚涌湍之礚礚兮。聽波聲之洶洶。紛容容之無經兮。罔芒芒之無紀。軋洋洋之無從兮。馳委移之焉止。漂翻翻其上下兮。翼遙遙其左右。氾潏潏其前後兮。伴張弛之信期。

(一)崑崙に馮つて以て霧を激し。岷山に隱つて以て江を清うせんとするも。涌湍の礚礚たるを憚り。波聲の洶洶たるを聽く。

(一) 更に崑崙山に登りて濁れる霧を清ませ、岷山に據りて江水を澄ましめんとするも、礚々と鳴る涌湍に妨げられ、洶々と響く風波の音を聽くのみ。原本「瞰霧露」は非、朱本「激霧」に從ふ、

(一)紛容容として經無く。罔芒芒として紀なく。(二)軋洋洋として從ふ無し。馳せて委移すとも焉にか止らん。

(一) 余が心ために亂れ、罔然茫然として整ふることを得ず (二) 洋々として往來し、互に相傾け相似蹈して我と相從ふものなし、馳せて往く所に任せんとするも底止する所を知らず

(一)漂翻翻として其れ上下し。翼遙遙として其れ左右し、(二)氾潏潏として其れ前後し。張弛の信期に伴ふ。

(一) 身漂ひて或は上り或は下り、遠に行きて或は右し或は左し (二) 水に泛べるものゝ如く、且つ進み且つ退き、一張一弛、本は守る所ありて、潮汐の去來するに似たり（氾は泛に同じ）

垠兮。莽芒芒之無レ儀。聲有レ隱而相感兮。物有二純而不一レ可レ爲。貌蔓蔓之不レ可レ量兮。縹綿綿之不レ可レ紆。愁悄悄之常悲兮。翩冥冥之不レ可レ娛。凌二大波一而流風兮。託二彭咸之所一レ居。上二高巖之峭岸一兮。處二雌蜺之標顚一。據二青冥一而攄レ虹兮。遂儵忽而捫レ天。吸二湛露之

ども爲すべからざるあり。

㊀ 遠く都を去り路渺々として限なく、王の儀容を思ふも、また茫々として見ることを得ず ㊁ 聲かすかにして聞えざる如きも、物と物とは相感ずべきに、我が純忠の心はなほ王を動かすことを得ず

(一)邈蔓蔓として量るべからず。縹綿綿として紆ふべからず。愁悄悄として常に悲しみ。(二)翩冥冥として娛むべからず。(三)大波を凌いで流風し。彭咸の居る所に託かん。

㊀ 國事は邈然(遠き貌)として量るべからず、憂思は綿綿として盡き難し(縹は細微の思) ㊁ 身を幽昧の中に置きて娛を得ず ㊂ むしろ波を凌ぎ風に任せ、死して彭咸の跡を追はんとするなり

(一)高巖の峭岸に上り。雌蜺の標顚に處り。青冥に據つて虹を攄べ。遂に儵忽として天を捫で。湛露の浮涼を吸ひ。凝霜の雰雰たるに漱ぎ。風穴に依つて以て自ら息ひ。忽ち傾寤して以て嬋媛たり。

㊀ 因りて心を高きに遊ばせ、岩の嶮しきを攀ぢ、霓の頂に居り、青天に據りて虹の光を舒べ、遂に登りて天を撫て、涼しき露を吸ひ、凝るゝ霜に口すゝぎ、風穴に止りて暫く息へば、心忽ち覺めて故國を慕ふの情に堪へず (蜺はにぢの雌をいひ、虹はにぢの雄をいふなり。嬋媛は心故國に戀々たるをいふ)

孤子唫而抆レ涙兮。放子出而不レ還。孰能思而不レ隱兮。昭二彭咸之所一レ聞。

登二石巒一以遠望兮。路眇眇之默默。入二景響之無一レ應兮。聞二省想而不一レ可レ得。

愁鬱鬱之無レ快兮。居戚戚而不レ解。心鞿羈而不レ開兮。氣繚轉而自締。

穆眇眇之無レ

(一)孤子唫じて涙を抆ひ。放子出でて還らず。(二)孰か能く思うて隱まざらん。彭咸の聞く所を昭にす。

(一) 余が身は孤兒の哀吟して涙を拭ふ如く、又、父母を離れ放たれたる子の出でて家に歸らざるに似たり (二) 之を思ひてはいかで悲みに堪へん、古人彭咸の跡を追ひ、之に從ひて聞く所の教を闡明せんとするなり

(一)石巒に登つて以て遠く望めば。路眇眇として默默たり。(二)景響の應無きに入り。省想するも得べからざるを聞く。

(一) 山に登りて郢都を望めば、路遠くして物の聲を聞かず。(巒とは山の小さく鋭きをいふ) (二) 影響相應せず、又固より深く思ふも得る所なきを謂へり

(一)愁鬱鬱として快なく。居戚戚として解くべからず。(二)心鞿羈して開けず。氣繚轉して自ら締ばる。

(一) 中心うつ〳〵として心に快きことなく、居處戚々自ら思ひを解くを得ず、朱本「不レ可レ解」 (二) 心束縛せらるゝ如く、常に結ばれて開けず (鞿羈は馬をつなぐ具なり)

(一)穆眇眇として垠なく。莽芒芒として儀無し。(二)聲隱るゝあつて相感じ。物純なれ

木一以蔽レ光兮。隨二飄風之所一レ仍。存二髣髴一不レ見兮。心踊躍其若レ湯。撫二珮衽一以案レ志兮。超惘惘而遂行。歲曶曶其若レ頹兮。旹亦冉冉而將レ至。蘋・蘅槁而節離兮。芳以歇而不レ比。憐二思心之不一レ可レ懲兮。證二此言之不一レ可レ聊。寧逝・死而流亡兮。不レ忍二此心之常愁一。

㊀憂愁胸にありて帶の如く胸當の如し ㊁因りて若木を折りて日を蔽ひ、飄風のまゝに漂ふ如く、自らくらまじてしばらく俗に隨はんとするなり

(一)髣髴(はうふつ)を存(そん)して見(み)えず。心(こころ)踊躍(ようやく)して其れ湯(ゆ)の若(ごと)し。(二)珮衽(はいじん)を撫(な)でて以て志(こころざし)を案(おさ)へ。超(はるか)に惘惘(まうく)として遂(つひ)に行(さ)りぬ。

㊀王の形貌は目に浮ぶ如きも、而も髣髴として見ることを得ず、心中沸して湯の沸くが如し ㊁因りて衣裳を整へ佩衽を撫で志を抑へ一途に去るなり(惘々は意を失へるをいふ)

(一)歲(とし)曶曶(こつく)として其れ頹(く)るゝが如く。旹(とき)亦冉冉(たぜんぜん)として將(まさ)に至(いた)らんとす。(二)蘋蘅(ひんかう)槁(か)れて節(せつ)離(はな)れ。芳(はう)以て歇(や)んで比(あ)はず。

㊀歲月忽ち過ぎて我が齡老い、死期將に至らんとせり ㊁恰も蘋蘅(香草の名)枯れて節々離れ、芳香盡きて形を保たざるに似たり。原本「蘋蘅」は非

(一)思(おも)ふ心(こころ)の懲(こ)るべからざるを憐(あはれ)み。(二)此の言(げん)の聊(よ)るべからざるを證(しよう)す。(三)寧(むし)ろ溘死(かうし)して流亡(りうはう)せん。此の心(こころ)の常(つね)に愁(うれ)ふるに忍(しの)びず。

㊀禍に逢ふも心に懲りざるを憐み ㊁余が諫言の王に用ひられざるを明らかにせり ㊂溘然として死して流亡せんのみ愁心常に已むことなきに堪へず。原本「逝死」は非

惟佳人之獨懷兮。折二芳椒一以自處。曾歔欷之嗟嗟兮。獨隱伏而思慮。涕泣交而淒淒兮。思不レ眠以至レ曙。終二長夜之曼曼一兮。掩二此哀一而不レ去。

寤從容以周流兮。聊逍遙以自恃。傷二太息之愍憐一兮。氣於邑而不レ可レ止。

紉二思心一以爲レ纕兮。編二愁苦一以爲レ膺。折二若

惟佳人を之れ獨懷ひ。芳椒を折りて以て自ら處る。曾ねて歔欷して嗟嗟たり。(一)獨隱伏して思慮す。(二)涕泣交つて淒淒たり。思うて眠らず以て(三)曙に至る。(四)長夜の曼曼たるを終ふれども。此の哀を掩うて去らず。

(一)只國土を思ひ、放逐せらるゝも、香草を折りて自ら潔くし　(二)またすゝり泣きして歎き、世に隱れてひとり憂ふ　(三)涕泣交々流れ、思ひあまりて夜もすがら眠られず　(四)曼々たる長夜を明すも、この悲嘆中に在りて去り難し

(一)寤めて從容として以て周流し。聊らく逍遙して以て自ら恃む。太息して愍憐するを傷み。氣於邑して止むべからず。

(一)眠覺めて後、ゆるやかに行歩し、聊か心を慰めんとするも、太息していよ〳〵愍み、氣むすぼれて憂悶止み難し

思心を紉ひて以て纕と爲し。愁苦を編みて以て膺と爲し。(一)若木を折つて以て(二)光を蔽ひ。飄風の仍る所に隨はんとす。

介二而不レ忘。萬變其情豈可レ蓋兮。孰虛僞之可レ長。
鳥獸鳴以號レ羣兮。草苴比而不レ芳。魚葺レ鱗以自別兮。蛟龍隱二其文章一。故荼薺不レ同レ晦兮。蘭茝幽而獨芳。
惟佳人之永都兮。更統レ世而自貺。眇遠志之所レ及兮。憐二浮雲之相佯一。介二眇志之所レ惑兮。竊賦レ詩之所レ明。

べけんや。孰か虛僞の長かるべき。

㊀ 古人彭咸、忠を盡して死し、後世臣子の法となれり、余また志を同じうし、永く忘れざらんとせり（介は守也） ㊁ 小人いかに言葉を飾るも、邪佞の心は蔽ふべからず、虛僞は決して永く保たざるなり

（一）鳥獸鳴いて以て羣を號べば。草苴比して芳しからず。魚鱗を葺ねて以て自ら別てば。蛟龍其文章を隱す。（二）故に荼薺晦を同じくせず。（三）蘭茝幽にして獨芳し。

㊀ 鳥獸鳴いて羣を呼べば、草相次ぎて枯れて芳しからず、羣魚鱗をかさね隊を結べば、蛟龍潛みて出でざる如く、小人時を得れば、君子は跡を晦ますものなり ㊁ 故に荼（苦菜）と薺（甘菜）とは地を同じうして生ぜず、君子小人は並び立たず ㊂ 君子隱れて行を潔うすること、なほ蘭茝幽地に生じ、ひとり芳香を放つに似たり

（一）惟佳人の永く都する。更〻世を統べて以て自ら貺る。眇たる遠志の及ぶところ。浮雲の相徉たるを憐む。（二）眇志を介するの惑ふ所。（三）竊に詩を賦して明にする所なり。

㊀ 楚は永く郢に都し、代を更へ統を傳へて今に至れり ㊁ 余、その衰ふるを見、誠忠を盡して古人に倣ふも、恰も雲の依る所なきが如きを悲む。（「相徉」又「相羊」に作る、徜徉の義也） ㊂ 微眇の志を守りて、前途の知るべからざるを以て惑を爲し、因りて私かに一詩を賦して志を述べ之を明かにする所以なり

願歲幷謝與長友兮。淑離不淫梗其有理兮。

年歲雖少可師長兮。行比伯夷置以爲像兮。

悲回風之搖蕙兮。心冤結而內傷。物有微而隕性兮。聲有隱而先倡。

夫何彭咸之造思兮。暨志

（一）願くは歲と幷せ謝して、與に長く友たらん。（二）淑離淫せず、梗くして其れ理あり。

（一） 願くは余と心を同じうし、年老ゆるまで友とならん （二） よく放るも淫亂れず、強くして文理（あや）美しければなり

（一）年歲少しと雖も師長とすべし。（二）行伯夷に比し、置きて以て像とせん。

（一） その年長の年歲少なきも、以て師長となすべし （二） 潔白なること古の伯夷の如く、その行は以て模範となすに足れり

悲回風

（一）回風の蕙を搖かすを悲み。心冤結して內に傷む。（二）物微にして性を隕すあり。聲隱れて先づ倡ふるあり。

（一） 飄風の蕙草を動かすを悲み、心結ぼれ傷めり （二） 蕙草は其性微弱にして枯れおち易く、風は目に見えざるも、先づ鳴りて萬物を枯らせり

（一）夫れ何ぞ彭咸の思を造せる。志介を暨にして忘れず。（二）萬變するも其情豈に蓋ふ

雜糅文章爛兮。精色內白類可任兮。紛緼宜修姱而不醜兮。

嗟爾幼志有以異兮。獨立不遷豈不可喜兮。

深固難徙廓其無求兮。蘇世獨立橫而不流兮。

閉心自愼終不過失兮。秉德無私參天地兮。

㊀ 枝かさなり、とげ鋭く、圓き實を著け ㊁ 緑色と黄色と交り美しき彩をなせり（文武の才を兼ぬるに喩ふ）

〔一〕精色內白くして、任ずべきに類し。〔二〕紛緼として修むるに宜しく、姱にして醜ならず。

㊀ 精粹の色、內にありて純白をなし、道を以て任ずるに似たり。朱本「類レ任レ道兮」に從ふべし ㊁ 外皮またあやを交へ、美しくして醜からず

〔一〕嗟爾の幼志以て異なるあり。〔二〕獨立して遷らず、豈喜ぶべからざらんや。

㊀ 幼より他に異なる美質あり ㊁ 獨立してその性を改めず、眞に喜ぶべし

〔一〕深固にして徙し難く、廓として其れ求むる無し。〔二〕世に蘇して獨立し、〔三〕橫にして而も流れず。

㊀ 根深くして他に徙し難く、その生ぜし地に安んじ、他に求むる所なし ㊁ 實を採り、枝を折らるゝも、再び生じてよく獨立し（蘇世につき諸說紛々尤も難解となす、今姑く蘇生の義として解く） ㊂ 枝葉四方に展ぶるも、而も度を越えて蔓延せず

〔一〕心を閉ぢて自ら愼み、終に過失せず。〔二〕德を秉りて私無く、天地に參す。

㊀ その橘實は内に美液を貯へて外に漏さず、終まであやまつことなし ㊁ 少しの私もなく、天地陰陽の運に隨ひ、花を開き實を結べり。

此其無レ異。

寧溘死而流亡兮。恐二禍殃之有一レ再。不レ畢レ辭而赴レ淵兮。惜壅レ君之不レ識。

后皇嘉樹橘徠服兮。受レ命不レ遷生二南國一兮。

深固難レ徙更壹レ志。綠葉素榮紛其可レ喜兮。

曾枝剡棘圓果摶兮。青黃

操を循へず ㊁ 法度に背きて私意を以て政を行ふは、前きことと之に異なるなし

(一)寧ろ溘死して流亡せん。禍殃の再するあらんを恐る。(二)辭を畢へずして以て淵に赴かば。惜むらくは君を壅ぐの識されざらんことを。

㊀ 余はむしろ溘然として死し、水に隨つて流れ去らんとす、禍の再び至らんことを恐るればなり ㊁ しかも辭を畢し思を述べて死せざれば、讒人君を蔽せることを知るものなからん

橘頌

(一)后皇の嘉樹、橘徠り服す。(二)命を受けて遷らず、南國に生ず。

㊀ 后土皇天（天地）の美樹橘、楚王の德に懷き來り服せり ㊁ 故に天命を受けて南國楚に生じ、他の國に遷らず

（自屈原ら橘に喩へていふ）

(一)深固にして徙し難し、更に志を壹にす。(二)綠葉素榮、紛として其れ喜ぶべし。

㊀ 根深くして他に徙し難し（一心に忠信を守るに喩ふ） ㊁ 葉青く花白く、亂れ茂りて誠に愛すべし

(一)曾枝剡棘、圓果摶たり。(二)青黃雜糅して、文章爛たり。

賢兮。謂二蕙若一其不レ可レ佩。妬二佳冶之芬芳一兮。嫫母姣而自好。雖レ有二西施之美容一兮。讒妬入以自代。

母姣として自ら好とす。(三)西施の美容ありと雖も。讒妬入りて以て自ら代る。

(一) 香草の蕙と杜若とは佩ぶべからずといふ (二) 女子の美しきものを妬み、醜女嫫母(黄帝の妃)の如きもの、自ら顔よしとして誇る (三) 西施の如き美容ありとも、妒み譏せられ、醜女代りて宮に入る

願二陳レ情以白一行兮。得二罪過之不意一。情冤見レ之日明兮。如二列宿之錯置一。

(一)情を陳べて以て行を白にせんことを願へども。罪過の不意を得たり。(二)情と冤と之を見れば日のごとく明にして。列宿の錯置するが如し。

(一) 情實を述べ、我が行を明にせんとせしも、不意に咎を蒙りたり (二) 我が罪の實か不實かは、日の如く、又列星の如く、明かに判別し得らるべし

乘二騏驥一而馳騁兮。無二轡銜一而自載。乘二氾泭一以下レ流兮。無二舟楫一而自備。背二法度一而心治兮。辟與レ

(一)騏驥に乘りて馳騁し。轡銜無くして自ら載る。(二)氾泭に乘りて以て流を下り。舟楫の自ら備ふる然し。(三)法度に背きて心のままに治む。辟へば此と其れ異なる無けん。

(一) 駿馬に乘りて馳するも、轡(たづな)と銜(くつわ)とを用ひず (二) 筏(いかだ)に乘りて流を下り、安全なる舟

求。封二介山一而爲レ之禁兮。報二大德之優游一。思二久故親身一兮。因縞素而哭レ之。

或忠信而死レ節兮。或訑謾而不レ疑。弗二省察而按一レ實兮。聽二讒人之虛辭一。芳與レ澤其雜糅兮。孰申レ旦而別レ之。何芳草之早殀兮。微霜降而下レ戒。諒不二聰明一而蔽壅兮。使二讒諛一而日得。自二前世一之嫉レ

せず、子推、綿上の山中に隱る、に及び、傷いて之を追ひ、山を燒きて、搜索せしも、子推遂に出でずして燒死せり ㊂因りてその山を封じて介山といひ、民の樵採を禁じ、祭祀を修めてその德に報い、昔日の功勞を思ひ、喪服を著けて慟哭せり

(一)或は忠信にして節に死し。或は訑謾して疑はれず。省察して實を按ぜずして。(二)讒人の虛辭を聽く。(三)芳と澤と其れ雜糅するも。孰か旦を申ねて之を別たん。

㊀或は忠を盡して殺さるゝものあり、或は君を欺きて疑はれざるものあり ㊁君よく省察して其忠邪の實を案ぜずして、只讒人の虛辭に耳を傾く ㊂芳香光彩相雜る如く、才德中に隱れ居るも、一人として日々之を省察し辨知するものなし

(一)何ぞ芳草の早く殀する。微霜降りて戒を下す。(二)諒に聰明ならずして蔽壅せられ。讒諛をして日に得しむればなり。

㊀芳草は枯れ易く、微霜降れば直に萎む如く、忠臣は君に忌まれ、罪に陷りやすし ㊁是實君聰明ならず、小人に欺かれ、讒者日に志を得ればなり

前世よりして賢を嫉み。(一)蕙若は其れ佩ふべからずと謂ふ。(二)佳冶の芬芳を妒み。嫫

蕪兮。使芳草
爲藪幽。焉舒
情而抽信兮。
恬死亡而不
聊。獨鄣壅而
蔽隱兮。使貞
臣而無由。
聞百里之爲
虜兮。伊尹烹
於庖厨。呂望
屠於朝歌兮。
甯戚歌而飯
牛。不逢湯武
與桓繆兮。世
孰云而知之。
吳信讒而弗
味兮。子胥死
而後憂。介子
忠而立枯兮。
文君寤而追

ん。死亡に恬じて聊もせず。(三)獨り鄣壅して蔽隱し。貞臣をして由る無からしむ。

(一)君法度なくして臣下の賢否を察せず、芳草を藪の暗みに茂らしむる如く、賢臣を卑しみて僻地に居らしむ (二)小人、君の聰明を蔽ひ、中情を述べ、信實を斷ふべき處なく、安んじて死に就き、苟も生きんことを欲せず (三)忠臣をして依る處なからしむ

聞く百里は虜と爲り。(一)伊尹は庖厨に烹。(二)呂望は朝歌に屠り。(三)(四)甯戚は歌ひて牛に飯すと。(五)湯武と桓繆とに逢はずんば。世孰か云ひて之を知らん。

(一)百里奚は晉の獻公に囚へられ、後に秦の穆公に用ひられ (二)伊尹は湯王のために庖厨に煮、後にその相となり (三)大公望呂尚は朝歌の屠肆に隱れ、後に武王に用ひられ (四)甯戚は牛に飯ひ、遂に齊の桓公に知られたり (五)湯王・武王・桓公・穆公等の明君なかりしならば、これ等の賢人も世に知られざりしならん

(一)吳は讒を信じて味はず。子胥死して後に憂へ。(二)介子忠にして立に枯る。文君寤りて追求し。(三)介山を封じて之が爲めに禁じ。大德の優游に報い。久故の親身を思ひて。因りて縞素して之を哭せり。

(一)吳王夫差は讒を信じて伍子胥の諫めを思はず、子胥死して後に悔いたり (二)晉の文公は、介子推の忠功を賞

蔽二晦君之聰明一兮。虛惑誤又以欺。弗二參驗以考一レ實兮。遠遷レ臣而弗レ思。信二讒諛之溷濁一兮。盛二氣志一而過レ之。

君の聰明を蔽晦し。虛り惑ひ誤らしめて又以て欺けども。(一)參驗して以て實を考へず。遠く臣を遷して思はず。讒諛の溷濁を信じ、(二)氣志を盛にして之を過む。

(一) 理義を參酌して事實を考へず、我を放逐して肯て思はず、たゞ讒言を信じたり (二) 小人の讒言を信じ、氣を怒らして余を責めたり

何貞臣之無レ罪兮。被二離謗一而見レ尤。慙二光景之誠信一兮。身幽隱而備レ之。

(一)何ぞ貞臣の罪無きに。離謗せられて尤めらるゝや。(二)光景の誠信に慙ぢ。身幽隱して之を備ふ。

(一) 行誠實にして初より罪あらざるに、何ぞ斯く離謗を蒙りて尤めらるゝぞ。朱本「備罪」「謝罪」 (二) 斯く己の著述誠信にして而も罪を得たるを慙ぢ、身僻地に隱れ、正道を踏みて缺くるなからんとするなり

臨二沅湘之玄淵一兮。遂自忍而沈レ流。卒沈レ身而絕レ名兮。惜二壅レ君之不一レ昭。

(一)沅湘の玄淵に臨み。遂に自ら忍びて流に沈んとまするも。(二)卒に身を沈めて名を絕ち。君を壅ぐの昭かならざるを惜む。

(一) 沅湘の深淵に臨み、自ら沈みて死せんとするも (二) 身死すれば名も亦絕え、小人君を掩ひ蔽くの罪、實に明かならざるを惜しむ

君無レ度而弗レ

(一)君度無くして察せず。芳草をして藪幽と爲らしむ。(二)焉くに情を舒べて信を抽か

成之故也。
惜二往日之曾信一兮。受二命詔一以昭レ時。奉二先功一以照レ下兮。明二法度之嫌疑一。
國富強而法立兮。屬二貞臣一而日娭。祕密事之載レ心兮。雖二過失一猶弗レ治。
心純龐而不レ泄兮。遭二讒人一而嫉レ之。君含レ怒而待レ臣兮。不三清二澂其然否一。

惜往日

往日の曾信を惜む。(一)命詔を受けて以て時を昭かにし。先功を奉じて以て下を照し。法度の嫌疑を明にしき。

(一) 曩に王の信任を受けしも、終りを全うせざりしを惜しむ (二) 王に信任せられし時は、命を奉じて政を明かにし、祖先の功德を承けて民に臨み、法度の疑はしきをも論定せり

(三)國富強にして法立ち。貞臣に屬して日に娭む。(四)祕密の事をも心に載せ。過失ありと雖も猶ほ治めず。

(三) 時に楚の國富強にして法度よく行はれ、王は政を忠臣に委ね、己は日に娛樂せり (四) 余また國の祕事をも皆心に藏せ、過失ありとも咎められざりき

(五)心純龐にして泄さず。讒人の之を嫉むに遭ふ。(六)君怒を含みて臣を待ち。其然否を清澈せず。

(五) 心純一敦厚にして國の祕密を漏らさざりしも、却つて小人に嫉まれ、王に讒言せられたり。朱本「純庬」 (六) 王は怒を含みて余を待ち、讒言の信僞を明かにせざりき。朱本「清澈」

外揚情與質信可保兮。羌居蔽而聞章。令薜荔而爲理兮。憚擧趾而緣木。因芙蓉而爲媒兮。憚褰裳而濡足。登高吾不說兮。入下吾不能。固朕形之不服兮。然容與而狐疑。廣遂前畫兮。未改此度也。命則處幽吾將罷兮。願及白日之未暮也。獨煢煢而南行兮。思彭

㊀芳氣の遠く傳はる如く、才德中に充つれば、名聲外に顯るゝものなり。「章」朱本「彰」　㊁故に中情質實の美に永く保つことを得べく　隱れて山澤にあるも、名聞自ら明かなるべし

(一)薜荔をして理を爲さしめんも。趾を擧げて木に緣ることを憚る。芙蓉に因りて(二)媒をなさんも。裳を褰げて足を濡すことを憚る。高きに登るは吾說ばず。下きに入るは吾能はず。(三)固より朕が形の服せざる。然く容與して孤疑す。

㊀木に登りて薜荔に頼ることをも好まず。又、水に下りて芙蓉に頼ることをも好まず（自ら信ずること厚くして敢て人によりて媒介せんとせずと也）　㊁薜荔や芙蓉などは吾身に着け慣れざるものなれば猶は狐疑して敢てこれ等を頼みとせざるなり

(一)前畫を廣遂せんとし。未だ此の度を改めず。(二)命は則ち幽に處り吾將に罷れんとせり。願くは白日の未だ暮れざるに及びて。(三)獨り煢煢として南行せん。彭咸の故を思へばなり。

㊀前人の企畫せる道を行はんとし、その法度を改めず　㊁身を幽地に置き、運命時に與して身は將につかれはてんとするも、この生の存する限り自ら勉めて止まざるべし　㊂ひとり煢然として南遊せらるゝに甘んずるは、前人彭咸の行に倣はん事を思へばなり

茝兮。搴二長洲之宿莽一。惜吾不レ及二古人一兮。吾誰與玩二此芳草一。解二萹薄與二雜菜一兮。備以爲二交佩一。佩繽紛以繚轉兮。遂萎絕而離異。吾且儃佪以娛レ憂兮。觀二南人之變態一。竊快二中心一兮。揚二厥憑一而不レ竢。芳與レ澤其雜糅兮。羌芳華自レ中出。紛郁郁其遠承兮。滿レ內而

與に此の芳草を玩ばん。

(一)草木の雜生する處 (二)冬を經ても枯れぬ草（以上の二句は益々己の行を高潔にするをいふ）(三)古人と時を同じうするを得ず、誰と共に芳草を玩ばん、我と志を同じうする者一人もなし。朱本「古之人」に從ふべし

(一)萹薄と雜菜とを解き。備へて以て交佩と爲す。佩繽紛として以て繚轉し。遂に萎絕して離異す。(二)吾且く儃佪して以て憂を娛ましめ。南人の變態を觀ん。(三)竊に中心に快しとして。厥憑を揚げて竢たず。(四)芳と澤と其れ雜糅し。羌芳華中より出づ。

(一)萹薄雜菜の類を棄て、香草を合せて左右の佩となすも、その佩繽紛繚轉し、遂に萎みて用をなし難し（己の行を高潔にするも、遂に擯棄せられしをいふ。萹薄につき諸説紛々たり、姑く香草ならざる雜草の名と解す）(二)姑く優遊して憂を忘れ、楚俗の改まるを見んとするなり (三)因りて中心得る所の道を樂しみ、憤を舒べんことを思ひ、外に待つところなし (四)芳香と光澤と相交り、自然に中より出づる心地す

(一)紛郁郁として其れ遠く承り。內に滿ちて外に揚る。(二)情と質と信に保つべし。羌居蔽はれて而も聞章かなり。

遂兮。未改此度。車既覆而馬顚兮。蹇獨懷此異路。

勒騏驥而更駕兮。造父爲我操之。遷逡次而勿驅兮。聊假日以須旹。指嶓冢之西隈兮。與纁黃以爲期。

開春發歲兮。白日出之悠悠。吾將蕩志而愉樂兮。遵江夏以娛憂。

擥大薄之芳

蹇ほ獨此の異路を懷ふ。

㊀ 前賢比干子胥等の志、皆遂げざりしことを知るも、余はなほ忠誠を盡し、法度に背かず ㊁ 行路いかに困難なるも、ひとり正道を守らむと欲せり

(一)騏驥を勒して更めて駕し。造父我が爲に之を操り。遷りて逡次して驅ること勿らしめ。聊か日を假りて以て旹を須ち。(二)嶓冢の西隈を指し。纁黃と以て期と爲す。

㊀ 因りて駿馬に乗り、造父(古の名高き御者)をして轡を執らしめ、暫くためらひて驅せしめず、假に日月を延して以て時を待ち ㊁ たゞ西隅絶遠の地に至り 黃昏に及びて休息せんとするなり(俗人と競はず、遠く去りて時を待たんとするをいふ、嶓冢は西極の山なり)

(一)開春發歲。白日出でて悠悠たり。吾將に志を蕩して愉樂し。(二)江夏に遵ひて以て憂を娛しましめんとす。

㊀ 年改まりて日影長閑なり、我が愁懷を舒べて自ら愉樂し ㊁ 江夏の二水に循ひて遊び憂心を慰しましめんとす

(一)大薄の芳茝を擥り。長洲の(二)宿莽を搴る。(三)惜むらくは吾古の人に及ばず。吾誰と

願ㇾ寄二言於浮雲一兮。遇二豐隆一而不ㇾ將。因二歸鳥一而致辭兮。羌迅高而難ㇾ當。

高辛之靈盛兮。遭二玄鳥一而致ㇾ詒。欲二變ㇾ節以從一ㇾ俗兮。媿二易ㇾ初而屈一ㇾ志。

獨歷ㇾ年而離ㇾ愍兮。羌憑心猶未ㇾ化。寧隱閔而壽考兮。何變易之可ㇾ爲。

知二前轍之不一ㇾ

(一)言を浮雲に寄せんと願へば。豐隆に遇ひて將られず。(二)歸鳥に因りて辭を致さんとすれば。羌迅高にして當り難し。

㊀ 即ち神雲に託して言を寄せんとするも、雷師たゞちに逝き去りて聴かず ㊁ また鴻雁に託して情を述べんとするも、疾く高く飛びて値ひ難し

(一)高辛の靈盛なるも。玄鳥の詒を致すに遭ふ。(二)節を變じて以て俗に從はんと欲すれば。初を易へて志を屈するを媿づ。

㊀ 神聖威徳の盛なること、帝嚳高辛氏の如きも、その妃簡狄、燕の卵を呑て子契を生めり、故にたとひ盛徳ありとも、天時を得ざれば事を成し難きなり ㊁ されば已も節を變じて俗に從ひ、時を待たんと欲するも、初志を屈することを恥づ

(一)獨り年を歴て愍に離ふ。羌馮心猶ほ未だ化せず。(二)寧ろ隱閔して壽考なるも。何ぞ變易を之れ爲すべけんや。

㊀ 年久しくうれへにあひ憂念胸に滿つるも、忠誠の心は初に變らず ㊁ 心病みて老死するも、初心を變易すべきにあらず

(一)前轍の遂げざりしを知るも。未だ此の度を改めず。(二)車既に覆りて馬顚するも。

定心廣志。余何畏懼兮。曾傷爰哀。永歎喟兮。世溷不吾知。心不可謂。

しも謂る、所なし、原文「曾」以下十七字は前出「曾歔」云々の句と重複するに似たるを以て原文を删く、朱子は兩句を削りこの句を「曾傷爰哀、永歎喟兮、世溷濁莫吾知、人心不可謂兮」の二十字に作る

知死不可讓。願勿愛兮。明以告君子。吾將以爲類兮。

(一)死の讓くべからざるを知る。願くは愛しむ勿らん。(二)明に以て君子に告ぐ。吾將に以て類たらんとす。

(一) 死の避く可からざるを知る以上、生を捨てて義を取らん、何ぞこの身を愛しむべき (二) 明に後世の諸君子に告ぐ、余は忠誠を守りて死し、永く諸君の明類となるべし（知己を千載の後に求むるをいふ）

思美人

思美人兮。擥涕而竚眙。媒絶路阻兮。言不可結而詒。蹇蹇之煩冤兮。陷滯而不發。申旦以舒中情兮。志沈菀而莫達。

(一)美人を思ひ。(二)涕を擥りて竚眙す。(三)媒絶え路阻たり。言結びて詒るべからず。

(一) 懷王を思ふをいふ (二) 涙を拭ひつゝ佇みて見つむ (三) 進見の路絶え志を述べんとするも言を結びて王に達るに由なし

(一)蹇蹇して煩冤し。陷滯して發せず。(二)旦を申ねて以て中情を舒べんとするも。志沈菀して達する莫し。

(一) 忠誠の心胸に滿つるも、王の信任なきに因り、自ら阻みて敢て發せず。原本「陷滑」は非 (二) 日に日に思を述べんとするも、志沈積して通じ難し

日昧昧其將レ暮。舒レ憂娛レ哀兮。限レ之以二大故一。

亂曰。

浩浩沅湘兮分流汩兮。修路幽蔽兮道遠忽兮。曾唫恒悲兮永歎慨兮。世既莫二吾知一兮。人心不レ可レ謂兮。懷レ情抱レ質兮獨無レ匹兮。伯樂既歿兮。驥將二焉程一兮。人生有レ命兮各有レ所レ錯兮。

哀を娛ましめ。之を限るに大故を以てす。

㊀ 路を轉じ進めて北行すれば、日暗くして暮れんとせり ㊁ 憂を舒べ悲みを慰め、かくて一命を終へ、死して後已まんとするなり

亂に曰く。

(一)浩浩たる沅湘分流汨たり。(二)修路幽蔽して道遠忽たり。

㊀ 廣大なる沅湘の水、波濤きたちつゝ流る ㊁ 長路暗くして且つ久遠なり

(一)曾唫恒悲して永く歎慨す。世既に吾を知るなし。(二)人心謂ふべからず。

㊀ 曾は重也、かされてなげき悲しみ、永く歎じて止まず。朱本に以下の三句なし ㊁ 人心世と推移し、共に語るに足るものなし

(一)情を懷き質を抱きて獨匹なし。(二)伯樂既に沒す。驥將に焉にか程らんとする。

㊀ 孤貞の質、忠信の情を抱くも、孤獨にして伴侶を得ず ㊁ 伯樂（よく馬を相せし人の名）既に死し、千里の馬も、その力を試み難し

(一)人生命有りて各〻錯く所あり。(二)心を定め志を廣めば。余何ぞ畏懼せん。

㊀ 人々運命を天に受けて生れ、壽夭苦樂、各々定まる所あり。朱本「民生稟レ命」 ㊁ 心を安んじ志を廣くし、少

異采。材樸委積兮。莫ㇾ知二余之所一ㇾ有。
重ㇾ仁襲ㇾ義兮。謹厚以爲ㇾ豐。
重華不ㇾ可ㇾ遌兮。孰知二余之從容一。
古固有ㇾ不ㇾ竝兮。豈知二其故一也。湯禹久遠兮。邈不ㇾ可ㇾ慕也。
懲ㇾ違改ㇾ忿兮。抑ㇾ心而自强。
離ㇾ愍而不ㇾ遷兮。願二志之有一ㇾ像。
進ㇾ路北次兮。

（一）小人は文采實質共に備く、余の異彩あるを知らず　（二）なほ材木堆積し、中に良材あるを知らざるが如し

（一）仁を重ね義を襲ねて。謹厚以て豐と爲すも。（二）重華遌ふべからず。孰か余の從容たるを知らん

（一）衆人已に同ぜざるも、余は自ら仁德を重ね修養を積みて怠らず　（二）舜の如き聖人に遇ひ難く、余が從容道に適ふを知るものなし

（一）古固より竝ばざるあり。豈其故を知らんや。（二）湯禹久遠にして。邈として慕ふべからず。

（一）古聖賢も時を同じうして出づるを得ず、その何故なるかはいかで之を知り得べき　（二）湯王禹王は時代すでに遠く、之を慕ふも遇ふことを得ず

（一）違に懲り忿を改め。心を抑へて自ら强め。（二）愍に離ふも遷らず。志の像あらんことを願ふ

（一）或は道に違ふことあり、或は世をいきどほる心ありしも、今は懲り改め、斯の心を抑へて自ら勉めて道に從ふ。王本「懲違」に作るは非　（二）憂に遇ふも心を變へず、志に常法あらんことを期せり（像は法也）

（一）路を進めて北に次らんとすれば。日昧昧として其れ將に暮れんとす。（二）憂を舒べ

同糅玉石兮。一槩而相量。夫惟黨人鄙固兮。羌不知余之所臧。

任重載盛兮。陷滯而不濟。懷瑾握瑜兮。窮不得所示。

邑犬羣吠兮。吠所怪也。誹駿疑傑兮。固庸態也。

文質疏內兮。衆不知余之

㈠玉石を同糅して。一槩にして相量る。㈡夫れ惟黨人の鄙固なる。羌余の臧き所を知らず。

㈠玉と石とをまじへ、一つの槩にて量る如く、賢愚を混同し、忠佞を區別せず（槩はとかきなり）㈡小人の心固より鄙しく、余が誠忠を知るものなし（一說に、臧は藏に同じ、心に藏蓄する所の義といふ）

㈠重きに任じ盛を載せんも。陷滯して濟はず。㈡瑾を懷き瑜を握り。窮して示す所を得ず。

㈠自ら重任に就き、國事に盡さんとするも、身放れて志を得ず ㈡美德を修め備ふるも、窮して人に知られず（瑾と瑜とは美玉をいふ）

㈠邑犬の羣り吠ゆるは。怪む所に吠ゆるなり。㈡駿を誹り傑を疑ふは。固より庸態なり。

㈠犬の羣り吠ゆるは自ら怪む所に向ひて吠ゆる也 ㈡その如く俊傑の士を誹り疑ふは、俗人の常態なり。朱本「誹俊」

㈠文質疏內にして。衆余の異采を知らず。㈡材樸委積して。余の有する所を知る莫し。

內厚質正兮。大人所レ盛。巧倕不レ斲兮。孰察二其揆正一。

玄文處レ幽兮。矇瞍謂二之不一レ章。離婁微睇兮。瞽以爲レ無レ明。

變レ白而爲レ黑兮。倒レ上以爲レ下。鳳皇在レ笯兮。雞鶩翔舞。

內厚く質正しきは。大人の盛とする所なり。(一)巧倕も斲らざれば。孰か其揆の正しきを察せん。(二)

(一) 人の質性敦厚、心志正しきは、大人君子の盛美する所也 (二) 名工も作業せざれば、その技術を顯し難く、君子も爵位を得ざれば、その才能を示し難し（巧倕は堯の世の良工なり、揆は規矩をいふ）

玄文幽に處れば。矇瞍は之を章ならずと謂ひ。(一)離婁も微睇すれば。瞽は以て明無しと爲す。(二)

(一) 黑白のあやの美しきも暗中に置けば瞍は以て章著ならずと爲す（瞍は眸ありて見えざるものをいひ、矇は眸なきものをいふ） (二) 離婁の如き明ありとも、流し目に見れば盲人に侮らる（賢人も山野に居れば俗人に侮らるゝに喩ふ、離婁は古の目の明なる人なり）

白を變じて以て黑と爲し。上を倒にして以て下と爲す。(一)鳳皇は笯にあり。雞鶩は翔舞す。(二)

(一) 世は濁レ以て清と爲し、俗人は愚を以て賢と爲す (二) 鳳凰は籠の中に捕へられ、雞あひるの類は高く翔る如く、君子は窮し、小人は榮ゆ

心不レ遂斯言
誰告兮。
陶陶孟夏兮。
草木莽莽。傷
懐永哀兮。汨
徂二南土一。
眴兮杳杳。孔
靜幽默。鬱結
紆軫兮。離レ愍
而長鞠。撫レ情
效レ志兮。俛屈
以自抑。
刓レ方以爲レ圜
兮。常度未レ替。
易二初本迪一兮。
君子所レ鄙。章レ
畫志レ墨兮。前
圖未レ改。

懐沙

(一)陶陶たる孟夏。草木莽莽たり。(二)傷み懐うて永く哀み。汨として南土に徂く。

㊀ 陽気盛なる初夏に、草木茂り榮えたり。朱本「滔滔」 ㊁ 傷みつゝ南方に流され行く（汨は行く貌）

(一)眴杳杳たり。孔 靜にして幽默なり。(二)鬱結紆軫して。愍に離りて長く鞠る。(三)情を撫し志を效し。俛屈して以て自ら抑ふ。

㊀ 風土の異るに驚き遍に眺むれば、山澤幽靜にして物の聲をも聞かず（眴は目の屢々動くをいふ） ㊁ 心屈し痛み、永く困苦を窮む。「愍」朱本「閔」 ㊂ 深く己の心を顧み、身を屈して憚るゝことなし

(一)方を刓りて以て圜と爲すも。常度未だ替れず。(二)初本の迪を易ふるは。君子の鄙む所なり。(三)畫を章にし墨を志す。前圖未だ改らざればなり。

㊀ 方形の木を削りて、圓形となさんとする如く、忠臣を放ち苦しめ行を改めしめんとするも、余は正道を守り、少しも常態を變へざるべし ㊁ 本來の常道を改むるは君子の賤み恥づる所なり ㊂ 工人はその繩墨（すみなは）を明にし、分劃に隨ふ如く、常に前人の法度を守り、仁義の道に遵ふことをなし、先賢の遺法は今に改變せざればなり

余之從容。
亂曰。
長瀨湍流泝江潭兮。狂顧南行聊以娛心兮。
軫石崴嵬蹇吾願兮。超回忘度行行隱進兮。
低佪夷猶宿北姑兮。煩冤瞀容實沛徂兮。
愁歎苦神靈遙思兮。路遠處幽又無行媒兮。
道思作頌聊以自救兮。憂

ず　㊀故に余が從容として道に順ふことは、君なほ之を知らざるなり

亂に曰く。

(一)長瀨湍流江潭に泝り。狂顧南行して聊以て心を娛ましむ。

㊀江より湖に入り、湖より江に入り、郢を思ひて心狂へる如く北を顧み〳〵又思ひかへして南行し、聊か己の志をたのします（湍も亦瀨なり、共に急流をいふ、潭は淵なり）

(一)軫石崴嵬(二)蹇吾が願なり。(三)超回度を忘れ行行隱み進む。

㊀方石高く聳ゆ　㊁志方石の如く終に轉ずべからざるは余の願ふところなり　㊂心超越回轉し、悲み痛みつつ進む

(一)低佪夷猶して北姑に宿し。(二)煩冤瞀容して(三)實に沛徂す。

㊀たゆたひためらひつゝ北姑の地に止り　㊁心煩ひ、容貌亂れ　㊂また水に隨ひて沛然として南に流れ去る

(一)愁歎苦神して靈遙に思ふも。(二)路遠く幽に處りて又行媒なし。

㊀心勞して靈魂遙に郢都を思ふも　㊁身僻遠に居りて又己を進むるなかだちなし

(一)道すがら思ひ、頌を作りて聊か以て自ら救ふ。(二)憂心遂げず斯の言誰にか告げん。

㊀中道に思を述べて此頌を作り、以て自ら憂悶の念をのぶるも　㊁我が憂心君に通ぜず、告げ訴ふる所なし

不レ得。望二北山一而流レ涕兮。臨二流水一而太息。望二孟夏之短夜一兮。何晦明之若レ歳。惟郢路之遼遠兮。魂一夕而九逝。

曾不レ知二路之曲直一兮。南指二月與二列星一。願二徑逝一而不レ得兮。魂識二路之營營一。

何靈魂之信直兮。人之心不下與二吾心一同上。理弱而媒不レ通兮。尙不レ知二

あなく、益々惱み遠ざけらる (六)郢都の河遠く、而も王は日に余を忘れ、忠情を述べんとするも志を得ず (七)北方郢中の山を望んで涕を流し、逝く水に臨んで歎息す

(一)孟夏の短夜を望めども。何ぞ晦明の歳の若くなる。(二)惟郢路の遼遠なるも。魂一夕にして九たび逝く。

(一)初夏の短夜の明けんことを望めども、その長きこと一歳の如し (二)郢都の道遠きも、一夜の中に屢々夢に往來せり

(一)曾て路の曲直を知らず。南のかた月と列星とを指す。(二)徑に逝かんと願へども得ず。魂路の營營たるを識ればなり。

(一)始め南遷せられし時、路の曲直をも知らず、たゞ月と星とにより、方角を定めたりき (二)故に夢中の魂も、直に郢都に到るを得ず、その路困難にして急進し難きを知ればなり

(一)何ぞ靈魂の信直なる。人の心吾が心と同じからず。(二)理弱くして媒通ぜず。(三)尙ほ余の從容たるを知らず。

(一)余が心は誠直にして衆人に異り、夢にも君を忘れざるなり (二)たゞ余が理弱く、なかだちの言葉も君に通ぜ

而有報兮。孰不實而有穫。少歌曰。與美人抽怨兮。幷日夜而無正。憍吾以其美好兮。敖朕辭而不聽。

倡曰。

有鳥自南兮。來集漢北。好姱佳麗兮。胖獨處此異域。既惸獨而不羣兮。又無良媒在其側。道卓遠而日忘兮。願自申而

る、ことなし

(一)少歌に曰く、(二)美人の與に思を抽くも、日夜を幷せて正すこと無く。(三)吾に憍るに其美好を以てし。朕が辭を敖りて聽かず。

(一)樂章音節の名にして、短き歌をいふ　(二)君のために思ひを抽出して此賦を述ぶるも、君の心日夜に亂れ、容易に正道に導き難し　(三)君はその才能美質を誇り、余が言を侮りて聽かず

(一)倡に曰く、(二)鳥あり南よりし。來つて漢の北に集る。(三)好姱佳麗にして。胖れて獨此の異域に處り。(四)既に惸獨にして羣せず。(五)又良媒の其側に在る無し。(六)道卓遠にして而も日に忘る。自ら申べんと願へども得ず。(七)北山を望んで涕を流し。流水に臨んで太息す。

(一)また樂章音節の名にして、新曲の歌詞を唱へ出すをいふ　(二)自ら鳥に喩へていふ　(三)姱美を好んで佳麗なるも、今は斯く分れ離れて江南絶異の他郷に居る　(四)獨り正道を踏み世俗に化せられず　(五)君側に好きなかだ

人之不レ媚兮。衆果以レ我爲レ患。

初吾所レ陳之耿著兮。豈不レ至、今其庸亡。何毒・藥之謇謇一兮。願二蓀美之可レ完。

望二三五一以爲レ像兮。指二彭咸一以爲レ儀。夫何極而不レ至兮。故遠聞而難レ虧。

善不二由レ外來一兮。名不レ可二以虛作一。孰無レ施

㊀誠を盡して辭を述ぶるも、君偏りて聞えざるまねせり　㊁忠切の人（自ら云ふ）は媚び諂はざれば衆人果して余を惛めり（切人は或は自ら切破するの人の意とも解す、その自ら指す言たるに於ては固より異議なし）

㊀初吾が陳ぶる所の耿著なる。豈今に至らざらんや、其れ庸ぞ亡せる。㊁何ぞ獨之の蹇蹇たるを樂まん。蓀が美の完くすべきを願へばなり。

㊀初め余の述べしところは、理義極めて明白にして、今に至るもなほ覩るべし、何ぞ之を忘れはてたるや　㊁且つ余は苦諫することを好みしにあらず、君の美を完うせんと願へるのみ。王本「蹇蹇」に作り「忠信美せられざる毒藥の如し」と註す、今朱本に從ふ

㊀三五を望みて以て像と爲し。彭咸を指して以て儀と爲す。㊁夫れ何ぞ極めて至らざらん。故に遠く聞えて虧け難し。

㊀余は三皇五帝（或は三王五伯）を模範とし、彭咸の諫死に倣はんとするなり　㊁極力勉強せば、如何なる修業もなし得らるべし、故に古の聖賢は名譽永く傳りて朽ちず

㊀善は外より來らず。名は以て虛く作すべからず。㊁孰か施す無くして報あらんや。孰か實らずして穫ること有らんや。

㊀才德仁義は必ず己より出て、名譽は實行に伴ひて生ず　㊁施さざれば報いらるゝことなく、實らざれば刈ら

言兮。曰黃昏以爲期羌中道而回畔兮。反既有此他志。憍吾以其美好兮。覽余以其修姱。與余言而不信兮。蓋爲余而造怒。願承間而自察兮。心震悼而不敢。悲夷猶而冀進兮。心怛傷之憺憺。茲歷情以陳辭兮。蓀詳聾而不聞。固切

りて既に此の他志あり。

㈠君曾て余と約束して黃昏に會見せんことを期せしが（黃昏は靜閑の時をいふ）㈡中途にして約を背き、心を他に移せり ㈢王本「誠言」今朱本に從ふ

(一)吾に憍るに其美好を以てし。余に覽すに其修姱を以てす。(二)余と言ひて信ならず。(三)蓋し余の爲に怒を造せり。

㈠君その才能美質を誇り（修姱も亦美好の意）㈡余と言ひて誠實ならず ㈢故上に怒をなし、余を讒めるなり

(一)間を承けて自ら察にせんことを願ふも。心震悼して敢てせず。(二)悲み夷猶して進まんことを冀ふも。心怛傷して憺憺たり。

㈠王の間暇を伺ひ、明かに余が言を述べんとするも、心恐れて敢てよくせず ㈡たゆたひつゝ、なほ進まんとするも傷み悲みて心動けり

(一)茲に情を歴ねて以て辭を陳ぶるも。蓀佯り聾して聞かず。(二)固より切人は媚びざれば。衆果して我を以て患と爲す。

心鬱鬱之憂思兮。獨永歎乎增ㇾ傷。思蹇產之不ㇾ釋兮。曼遭ニ夜之方長一。悲ニ夫秋風之動ㇾ容兮。何回極之浮浮。數惟ニ蓀之多ㇾ怒兮。傷ニ余心一之懮懮。願ニ搖起而橫奔一兮。覽ニ民尤一以自鎭。結ニ微情一以陳ㇾ詞兮。矯以遺ニ夫美人一。昔君與ㇾ我誠ㇾ

（一）心鬱鬱として憂思し、獨り永歎して傷を增す。（二）思蹇產して釋けず。曼として夜の方に長きに遭ふ。

㊀思結ぼれて解けず、眠らずして永き夜を過ごす（曼は漫に同じ、夜の永きをいふ）

（一）夫の秋風の容を動すを悲む。（二）何ぞ回極の浮浮たる。（三）數〻蓀の怒多きを惟ひ。余が心を傷しめて懮懮たり。

㊀秋風に草木の色を變ずるを悲む ㊁風回旋して吹き、空中を往來す（回極、浮々、古來諸說あるも明かならず姑く岡松の考に從ふ） ㊂君の怒多きを思ひ、深く心を憂へしむ（蓀は香草なり、君に喩ふ）

（一）遙起して橫奔せんことを願ふも。民の尤を覽て以て自ら鎭まる。（二）微情を結びて以て詞を陳べ。矯げて以て夫の美人に遺る。

㊀君の怒りに觸れ、速に奔り去らんとするも、衆民罪なくして刑せらるゝ者多きを見、われのみ、然るにあらざるを知りて留りて自ら慰む（遙起は疾起也、朱本「遙赴」に作るは非） ㊁其意を述べて賦を作り、擧げて之を我が君に奉る

（一）昔君我と（二）言を成して。曰ふ黃昏以て期と爲さんと。（三）羌中道にして回畔し。反

之嫉妬兮。被以不慈之僞名。
憎愠惀之修美兮。好夫人之忼慨。
衆踥蹀而日進兮。美超遠而逾邁。
亂曰。
曼余目以流觀兮。冀壹反之何時。
鳥飛反故鄉兮。狐死必首丘。
信非吾罪而棄逐兮。何日夜而忘之。

(一)堯舜の高き行は、甚だ明にして、其高きこと天にせまるも。朱本「被堯舜」「杳杳其薄天」(二)小人はなほ之を妬みそしりて、不慈の人といふなり(帝位を有德の人に譲り、子に傳へざりしをそしりて、不慈の人といふ)

(一)愠惀の修美を憎み。夫の人の忼慨を好む。(二)衆踥蹀として日に進み。美は超遠して逾〻邁く。

(一)王は眞に國を憂ふる賢人を憎み、徒に慷慨する小人を喜ぶ(愠惀は深く心を設けて國家を憂ふるをいふ)(二)故に小人は日に進み、賢人は日に遠ざかる(踥蹀は細歩するをいふ、小人の足恭を狀する也)

亂に曰く。

(一)余が目を曼きて以て流觀し。壹たび反らんことを冀ふも何の時ぞ。鳥は飛びて故鄉に反り。(二)狐死すれば必ず丘に首す。信に吾が罪にあらずして棄逐せらる。何ぞ日夜にして之を忘れん。

(一)目を擧げて遠く望み、一たび郢都に歸らんことを願ふも果して何れの時にか得べき (二)狐死する時は丘に枕し、その舊居所を忘れず

抽思

久兮。憂與ㇾ愁其相接。惟郢路之遼遠兮。江與ㇾ夏之不ㇾ可ㇾ涉。

江と夏とは渉るべからず。

(一)心常に喜ばず、憂愁相つゞきて解くる事なし (二)楚都郢に至るの路遼遠、江夏の水を渡り、再び歸ることを得ず

忽若二去不一信兮。至ㇾ今九年而不ㇾ復。慘鬱鬱而不ㇾ開兮。蹇侘傺而含ㇾ慼。外承ㇾ歡之汋約兮。諶荏弱而難ㇾ持。忠湛湛而願ㇾ進兮。妬被離而鄣ㇾ之。堯舜之抗ㇾ行兮。瞭杳杳而薄ㇾ天。衆讒人

(一)忽として去りて信ならざるが若きも。今に至るまで九年にして復らず。(二)慘鬱鬱として開けず。蹇侘傺して慼を含む。

(一)忽として流され來り再宿もせざる程に思へど、すでに九年を經、今に歸ることを得ず(信は再宿) (二)中心うつ〳〵として開けず悵然としてたゝずみ立ちて心うれふ。「不開」朱子「不通」

(一)外は歡を承けて汋約たるも。諶に荏弱にして持し難し。(二)忠湛湛として進まんことを願へば。妬みて被離して之を鄣ぐ。

(一)小人は貌を柔げ君を歡ばしむるも、心弱くして國家を維持するに堪へず (二)忠誠の心深く、君に進言せんとするものあれば、讒人之を妬みて妨げふさぐ(被離は蓋しおほひふさぐ意ならん)

(一)堯舜の行を抗ぐる。瞭杳杳として天に薄るも、(二)衆讒人の嫉妬。被らしむるに不慈の僞名を以てせり。

羌靈魂之欲レ歸兮。何須臾而忘レ反。背二夏浦一而西思兮。哀二故都之日遠一。登二大墳一以遠望兮。聊以舒二吾憂心一。哀二州土之平樂一兮。悲二江介之遺風一。當二陵陽之焉至一兮。淼南渡之焉如。曾不レ知二夏之爲一レ丘兮。孰兩東門之可レ蕪。心不レ怡之長

(一)羌靈魂の歸らんと欲する。何ぞ須臾も返ることを忘れん。(二)夏浦に背きて西を思ひ。故都の日に遠きを哀む。

㊀吾が精神郢都に歸らんと欲するを以て、一刻も今の跡に反して西に嚮ふを忘れず　㊁すでに夏浦を後にして西の方郢都を思ひ、日に郢都に遠ざかれるを悲む

(一)大墳に登りて以て遠望し、聊か以て吾が憂心を舒ぶ。(二)州土の平樂を哀み。江介の遺風を悲む。

㊀水中の高地に登りて遠望し、いさゝか憂を慰めんとし　㊁楚の土地廣く民の富めることを思ひ、古の善政の行はれざるを悲む(江介は江界に同じ、楚の地をいふ)

(一)陵陽焉に至るべき。淼として南に渡りて焉に如かん。(二)曾ち夏の丘と爲ることを知らず。(三)孰ぞ兩東門の蕪すべきをや。

㊀陵陽に向ひて進まんとするも道極りなし、淼たる大河を南に渡るも際涯なくして行く所を知らず　㊁王は楚の國亡び、宮殿朽ちて丘陵となるべきを知らず(夏は廈に同じ、大屋なり)　㊂何ぞ郢都に來り、兩東門の荒るることを思はんや

(一)心怡ばざること長久にして。憂と愁と其れ相接す。(二)惟ふに郢路は遼遠にして。

顧龍門而不見。心嬋媛而傷懷兮。眇不知其所蹠。順風波以從流兮。焉洋洋而爲客。凌陽侯之氾濫兮。忽翺翔之焉薄。心絓結而不解兮。思蹇產而不釋。將運舟而下浮兮。上洞庭而下江。去終古之所居兮。今逍遙而來東。

郢南關の門)を顧みれども見えず

(一)心嬋媛して傷懷ふ。渺として其の蹠む所を知らず。(二)風波に順ひて以て從流し。焉に洋洋として客となる。

㊀ 心、後に引かれて悲み、遠く顧みつゝ、足の蹈む所を知らず ㊁ 風波のまゝに流され來り、是にたよりなき客となりたり。朱本「順二風波一而流從（ナガレノママニシ）兮」

(一)陽侯の氾濫たるを凌ぎ。忽として翺翔して焉に薄らん。(二)心絓結して解けず。思蹇產して釋けず。

㊀ 大波の湧き返る中を進み、忽然として止るべき所もなく（陽侯は大波の神をいふ） ㊁ 心結ぼれ、思屈托して解け難し

(一)將に舟を運して下り浮び。洞庭に上りて江を下らんとし。(二)終古の居る所を去り。今は逍遙して東に來れり。

㊀ 夏口より江を出で、流を溯りて已に遠く西せるが、今又舟を回して東に下り大江を下りて洞庭に上り入らんとす ㊁ 祖先以來の居所を去り、遠く東にさすらひ來れり

散而相失兮。
仲春而東遷。
去二故郷一而就レ
遠兮遵二江夏一
以流亡。出二國
門一而軫レ懷兮。
甲之鼂吾以
行。
發二郢都一而去レ
閭兮。怊荒忽
之焉極。楫齊
揚以容與兮。
哀三見レ君而不二
再得一。
望二長楸一而太
息兮、涕淫淫
其若レ霰。過二夏
首一而西浮兮。

㊀ 天命純一ならざれば萬物いたみ傷ふ如く、君德常からざれば百姓震動して以て刑に離れやすし ㊁ 仲春二月陽和の時、余また東遷の恐に遭ひ、一家ために離散するなり。朱本「方二仲春一」

故郷を去りて遠きに就き。（一）江夏に遵ひて以て流亡す。國門を出でて懷を軫ましめ。甲の鼂に吾以て行く。

㊀ 夏水に順ひて遠く流され、國門を出でて思を痛め、甲日の早旦に早朝に郢都を出發せり（夏水は大江より分るゝに因りて江夏といふ、甲は日鼂は旦也）

（一）郢都を發して閭を去れば。怊荒忽としてこれ焉ぞ極らん。（二）楫齊しく揚げて以て容與し。君を見んこと再び得ざるを哀む。

㊀ 郢都を發し、里門を出づれば心惑へて定まらず、際限りなし。「之焉極」朱子「其焉極」（怊は悵恨の貌、荒忽は定めなき貌） ㊁ すでに舟に乘り、舟夫齊しくかぢを執れども、皆ためらひて進まず。「哀」朱本「哀」（オナジク）

（一）長楸を望みて太息し。涕淫淫として其れ霰の若し。（二）夏首を過ぎて西に浮び。
龍門を顧みれども見えず。

㊀ 高きあづさ（故都にある喬木）を眺めて歎息し、涙流れ霰の如し ㊁ すでに夏水の口を過ぐれば、龍門（楚

余將ニ董レ道而不レ豫兮。固將ニ重昏而終レ身。

亂曰。

鸞鳥鳳皇日以遠兮。燕雀烏鵲巢ニ堂壇一兮。

露ニ申辛夷一死ニ林薄一兮。腥臊並御芳不レ得レ薄兮。陰陽易レ位時不レ當兮。懷レ信侘傺忽乎吾將レ行兮。

皇天之不レ純レ命兮。何百姓之震愆。民離

㊀ 忠直にして禍に遭ふことは前世より皆斯の如し ㊁ 余はなほ正道を踏みてためらふことなく、憂悶して一生を終へんとするなり（重昏は心の重ね〲亂るゝ意）

亂に曰く。

(一)鸞鳥鳳皇日に以に遠し。燕雀烏鵲堂壇に巣ふ。

㊀ 鸞鳥鳳皇日に遠かり、燕雀烏鵲の類日に近づくが如く、賢人遠く去り、小人のみ君に親まる

(一)辛夷を露申して林薄に死せしめ。腥臊並び御ひられて芳薄くことを得ず。(二)陰陽位を易へて時當らず。(三)信を懐きて侘傺し、忽として吾將に行らんとす。

㊀ 香草辛夷を重ねさらして林木雜草の中に枯死せしめ、腥きものを驚に充て、香しきものは近き難き如く、忠臣を遠けて窮死せしめ、小人のみ信任せられたり ㊁ 王の擧措よろしからず、陰陽亂れ、時氣調はざるに似たり ㊂ 吾は誠心を抱きて憂へ悲み、忽ち遠く去らんとするなり

哀郢

(一)皇天の命を純にせざる。何ぞ百姓の震き愆てる。民離散して相失ひ。(二)仲春にして東に遷る。

以多雨。霰雪紛其無垠兮。雲霏霏而承宇。哀吾生之無樂兮。幽獨處乎山中。吾不能變心而從俗兮。固將愁苦而終窮。接輿髡首兮。桑扈臝行。忠不必用兮。賢不必以。伍子逢殃兮。比干菹醢。與前世而皆然兮。吾又何怨乎今之人。

無し。雲霏霏として宇に承く。

(一) 山高くして日を隠し、その下は晝も暗くして雨多し (二) 多は霰雪など亂れ、雲垂り來て軒に入るなり

吾生の樂みなきを哀み。幽に獨山中に處る。(一) 吾心を變じて俗に從ふこと能はず。固より將に愁苦して終に窮せんとす。(二)

(一) 遠く親戚を離れ斥逐せられて山中に居る (二) 吾が志を枉げて俗に化するを得ず、愁苦の中に一生を終らんとするなり

(一) 接輿は髡首し桑扈は臝行す。忠は必ずしも用ひられず。賢は必ずしも以ひられず。(二) 伍子は殃に逢ひ。(三) 比干は菹醢にせらる。

(一) 楚人接輿は狂人の眞似をして頭髪を剃り、桑扈は裸體にて行きて異狀に倣ひ、共に世を避けたり (二) 伍子胥は呉王夫差を諫めて用ひられず、遂に屬鏤の劍を賜ひて死し (三) 殷の比干は紂王を諫めて怒に觸れ、遂に胸を割かれて殺されたり

(一) 前世よりして皆然り。吾又何ぞ今の人を怨みん。(二) 余將に道を董して豫せざらんとす。固より將に重昏して身を終へんとす。

乘二舲船一余上レ沅兮。齊二吳榜一以擊レ汰。船容與而不レ進兮。淹二回水一而凝滯。
朝發二枉陼一兮。夕宿二辰陽一。苟余心之端直兮。雖二僻遠一之何傷。
入二漵浦一余儃佪兮。迷不レ知二吾之所一レ如。深林杳以冥冥兮。乃猨狖之所レ居。
山峻高以蔽レ日兮。下幽晦

（一）舲船に乗りて余沅に上り。呉榜を齊しくして以て汰を撃つ。（二）船容與として進まず。回水に淹りて凝滯す。

（一）遂に舲に乗りて沅水に溯り、水夫榜（かい）をそろへ、水をうちつゝ進む。（呉榜は呉の制に倣へるかいなり）（二）船の進むこと緩かに、回流の中に止りとゞこほる

朝に枉陼を發し。夕に辰陽に宿す。（一）苟に余が心それ端直ならば。僻遠なりと雖も何ぞ傷まん。

（一）我が心正直ならば、遐地に行くも悲むに足らず

（二）漵浦に入りて余儃佪し。迷うて吾が如く所を知らず。（三）深林杳として以て冥冥たり。乃ち猨狖の居る所なり。

（二）やがて漵水の浦に徘徊し、我が行くべき途に迷ふ（三）こゝは深林の奥暗く、猿のみ棲める淋しき所なり（狖は尾長猿なり）

（一）山峻高にして以て日を蔽ひ。下幽晦にして以て雨多し。（二）霰雪紛として其れ垠

嵬。被二明月一兮珮二寶璐一。世溷濁而莫二余知一兮。吾方高馳而不レ顧。駕二青虬一兮驂二白螭一。

(一) 余幼より奇異なる服を好み、今に至るまで變ることなし（行を高潔にするに喩ふ）(二) 長き劍を帶び高き冠をかむり、背に明珠を懸け、腰に美玉を帶びたり (三) 世濁りて我を知るものなければ、高く馳せ逐れ、神獸青虬に乘り、白螭をそへうまにして行く

吾與二重華一遊二兮瑤之圃一。登二崑崙一兮食二玉英一。與二天地一兮同レ壽。與二日月一兮同レ光。哀三南夷之莫二吾知一兮、旦余濟二乎江湘一。

(一)吾重華と瑤の圃に遊び。崑崙に登りて玉英を食ひ。(二)天地と壽を同じくし。日月と光を同じくす。(三)南夷の吾を知る莫きを哀み。旦に余江湘を濟らん。

(一) 帝舜と玉圃に遊び（重華は舜の名）。朱本此一句を前節に附す、今私意を以て斷く段落す (二) 天地日月と共に朽ちざらんとし。朱本「吾與二天地一兮比レ壽」 (三) 楚人の余を知るものなきを悲み、江湘の水を渡り、遠く南に去らんとするなり（楚をいやしみて南夷といふ）。朱子「余」の下に「將」（マサニ）の字あり

乘二鄂渚一而反顧兮。欸二秋冬之緒風一。步二余馬兮山皋一。邸二余車兮方林一。

(一)鄂渚に乘りて反顧し。秋冬の緒風を欸く。(二)余が馬を山皋に歩ませ。余が車を方林に邸む。

(一) 鄂渚に登りて顧れば、秋冬の餘風吹き來り、鄂渚を顧ひて歎へしむ（緒風は餘風也、北風まづ鄂渚に入り、更に南方に及ぶをいふ。一說には春寒猶は冬の餘風あり） (二) 行く〱馬を山澤に進め、また車を方林の地にとゞむ

擣木蘭以矯蕙兮。鑿申椒以爲糧。播江離與滋菊兮。願春日以爲糗芳。

恐情質之不信兮。故重著以自明。矯茲媚以私處兮。願曾思而遠身。

余幼好此奇服兮。年既老而不衰。帶長鋏之陸離兮。冠切雲之崔

木蘭を擣きて以て蕙を矯へ。申椒を鑿げて以て糧となし。(二)江離を播うると菊を滋くとをして。願くは春日以て糗芳と爲さん。

(一)木蘭を擣きて蕙をまじへ、申椒をも臼げて糧食とし (二)江離と菊とを植ゑ、春の日の香しきほしいひとなさん(益々身を潔くするをいふ)。一説「滋菊」と連讀し、方に蕃滋する菊と解す

(一)情質の信ぜられざらんことを恐る。故に重ねて著して以て自ら明かにす。(二)茲の媚を矯げて以て私に處る。願くは思を曾ねて身を遠ざけん。

(一)余が心はなほ君に信ぜられず、故にこの篇を著して志を明にす (二)この媚意(君に從順なる精神)を述べて退きを憂へつゝ遠く去らんとするなり。「矯」朱本「撟」

涉江

(一)余幼にして此の奇服を好み。年既に老いて衰へず。長鋏の陸離たるを帶び。(二)切雲の崔嵬たるを冠し。明月を被て寶璐を珮ぶ。(三)世溷濁して余を知る莫し。吾方に高く馳せて顧みず。青虬に駕して白螭を驂にす。

吾今而知二其信然一。矰弋機而在レ上兮。罻羅張而在レ下。設二張辟一以娛レ君兮。願レ側レ身而無レ所。欲二儃佪以干レ傺兮。恐二重レ患而離レ尤。欲二高飛而遠集一兮。君罔レ謂二汝何之一。欲二橫奔而失レ路兮。堅志而不レ忍。背膺胖合以交痛兮。心鬱結而紆軫。

者、種々の藥を試みて後、遂に良醫となる如く、余また苦き經驗によりて、始めてこの語の信なるを知れり

（一）矰弋機して上に在り。罻羅張りて下に在り。（二）辟を設張して以て君を娛ましむ。身を側てんことを願へども而も所なし。

㊀ 人之を避けんとするも能はず上にいぐるみ（絲を矢に結び、鳥をからめ捕ふるもの）を設け、下に網を張れる如し ㊁ 小人更に苛法を設け張りて君を娛ましめ、之を避けんとすれども能はず

（一）儃佪して以て傺ることを干めんと欲すれば。患を重ねて尤に離はんことを恐る。（二）高く飛びて遠く集らんと欲すれば。君汝何に之くと謂ふ罔からんや。

㊀ 汝は君側に留らんとするも、重ねて罪を得んことを恐る ㊁ 遠く他國に去らんとするも、亦君に咎めらるゝ事なきを得んや

（一）横奔して路を失はんと欲すれば。堅志にして忍びず。（二）背膺胖台して以て交〻痛み。心鬱結して紆軫す。

㊀ 節操を變じ横道に入りて佞倫に從はんとするも、志堅くして之に忍びず ㊁ 背と胸と分れて合ひ相引いて痛む如く、とつおひつに思ひむすぼれて解け難し。朱本「台」字なし、胖を分れ〳〵の義に解す

欲二釋レ階而登一レ天兮。猶有二曩之態一也。
衆駭遽以離レ心兮。又何以爲二此伴一也。同レ極而異レ路兮。又何以爲二此援一也。
晉申生之孝子兮。父信レ讒而不レ好。行婞直而不レ豫兮。鮌功用而不レ就。
吾聞レ作レ忠以造レ怨兮。忽謂二之過言一。九折レ臂而成レ醫兮。

如くにすべし、何故に早く志を改めざるか。「於曩」朱本「態曩」 ㊁ 忠直にして君に知られんとするは、階なくして天に登らんとする如し、汝なほ舊態を棄てず、忠貞の道を守れるは何故ぞ

衆駭遽して以て心を離る。(一)又何を以てか此の伴と爲らん。(二)極を同じくして路を異にす。又何を以てか此の援を爲さん。

㊀ 小人は忠貞の行に驚きて心日に離る、何ぞ汝の伴侶となるべき ㊁ 共に君に事ふるも、忠と佞との道異ればいかで汝の援となならん(占詞終る)

晉の申生は孝子なるも。(一)父讒を信じて好せざりき。(二)行婞直にして豫せざりしも。鮌の功用て就らざりき。

㊀ 父獻公、驪姬の讒を信じ、憎みて之を殺せり ㊁ 鮌は直道を守り、事に臨みて猶豫することなかりしも、遂に堯に殛せられ、治水の功終に成らざりき

(一)吾忠を作して以て怨を造すと聞き。忽として之を過言と謂へり。(二)九たび臂を折りて醫となる。吾今にして乃ち其の信に然るを知る。

㊀ 初め、忠なれば却つて君に怨まると聞き、ゆるがせにして謬れる言葉なりと思ひしに ㊁ 九たび臂を折りし

悲兮中悶瞀之忳忳。

昔余夢登レ天兮。魂中道而無レ杭。吾使二厲神占一レ之兮。曰有二志極一而無レ旁。

終危獨以離異兮。曰君可レ思而不レ可レ恃。故衆口其鑠レ金兮。初若レ是而逢レ殆。

懲二於羹一者而吹レ韲兮。何不レ變二此之志一也。

(一)昔余夢に天に登る。魂中道にして杭るなし。(二)吾厲神をして之を占はしめしに。曰く、志の極まる有り旁なし。

㊀余曾て夢に天に登らんとし、中途より渡ることを得ざりき　㊁因りて厲神（惡鬼）に占はしめしに、厲神いふ、こは天使に疲れ極まる有り、君を輔佐するを得ざる象なり

(一)終に危獨にして以て離異せん。(二)曰く、君をば思ふべきも恃むべからずと。故に衆(三)口は其れ金を鑠す。(四)初め是の若くして殆に逢へり。

㊀汝終に危地に陷り、衆人に離れて斥けらるべし　㊁臣は君を思ひ、忠誠の道を守るべきも、君を恃にし、信任せられんことを期すべからず　㊂衆人の口は堅き金をも鎔す如く、讒言は遂に君を惑はし、忠臣をも傷くるものなり　㊃汝の性はもと金の如く、ためにこの禍に逢へるなり

(一)羹に懲りては韲を吹く。何ぞ此の志を變ぜざる。(二)階を釋てて天に登らんと欲す。猶ほ曩の態有り。

㊀汝忠直にして却つて禍に逢へり、宜しく衆俗に從ひ、熱きあつものに懲りたるものが、冷きあへものをも吹く

不ㇾ羣以顚越兮又衆兆之所ㇾ咍。紛逢ㇾ尤以離ㇾ謗兮。謇不ㇾ可ㇾ釋。情沈抑而不ㇾ達兮。又蔽而莫二之白一。心鬱邑余侘傺兮。又莫ㇾ察二余之中情。固煩言不ㇾ可二結而詒一兮。願ㇾ陳ㇾ志而無ㇾ路。退靜默而莫二余知一兮。進號呼又莫二吾聞一。申侘傺之煩

㊀朱本「心」の字なし、獨り忠直の道を守り、却つて窮地に陷れり、これ亦衆人の嘲り笑ふ所なり

(一)紛として尤に逢ひて以て謗に離る。謇釋くべからざるなり。(二)情沈抑して達せず。又蔽はれて之を白かにする莫きなり。

㊀しきりに尤に逢ひ謗を蒙り、その冤罪を解くことを得ず　㊁忠誠の情深きも、小人に妨げられ、明かに君に達するを得ず

(一)心鬱邑して余侘傺す。又余の中情を察する莫し。(二)固より煩言結びて詒るべからず。志を陳べんことを願へども路なし。

㊀心むすぼれ憂ふるも、余の眞情を知るものなし（侘傺は恨みたゝずむ貌）　㊁言葉を列ねて君に進むるを得ず、忠誠の志を述べんとするも、その道また絶えたり

(一)退きて靜默すれば余を知る莫く。進みて號呼すれども又吾を聞く莫し。(二)申ねて侘傺して煩惑し。中悶瞀して忳忳たり。

㊀退き默すれば人に知られず、進み叫ぶも聞くものなし　㊁重ねて心もだへ亂れ、憂に堪へず

後身兮。羌衆人之所仇。專惟君而無他兮。又衆兆之所讎。
壹心而不豫兮。羌不可保。疾親君而無他兮。有招禍之道。
思君其莫我忠兮。忽忘身之賤貧。事君而不貳兮。迷不知寵之門。
忠何罪以遇罰兮。亦非余心之所志。行

て他無きは。又衆兆の讎とする所なり。

㈠余は義として君命に務め、一身の利害を後にせり、故に衆人に忌み嫌はるゝなり ㈡君を思ふ外には一點の私心もなきも、これ亦衆人に憎まるゝ所以なり

㈠心を壹にして豫せざる。羌保つべからざるなり。㈡君に親むことを疾めて他無ければ。禍を招くの道有り。

㈠一心に忠を盡し、少しも猶豫することなく、ために一身を保つを得ず ㈡君に親まんとすれば、却つて小人に讒せられ、禍に遭ふことあり

君を思ふは其れ我より忠なるは莫し。忽として身の賤貧を忘る。㈠君に事へて貳せず。迷うて寵の門を知らず。

㈠君に仕へて二心を抱かざるも、なほ寵遇を得べき道なく、心に迷ふ所あり

忠何の罪にして以て罰に遇へる。亦余の心の㈡志す所に非ず。行 猝せずして以て顚越す。又衆兆の咍ふ所なり。

中兮。戒六神與嚮服。俾山川以備御兮。命咎繇使聽直。

竭忠誠以事君兮。反離羣而贅肬。忘儇媚以背衆兮。待明君其知之。

言與行其可迹兮。情與貌其不變。故相臣莫若君兮。所以證之而不遠。

吾誼先君而

備らしめ。咎繇に命じて直を聽かしめん。

○ 五方の神をしてその理を折衷せしめ、天地四方の神をして已に對聽して事の行ふべきや否やを言はしめ、山川の神をして待御の列に加はらしめ、皐陶をしてその曲直を孰斷せしめん（天に誓ふ詞なり、咎繇は皐陶に同じ、舜の臣にして五刑を明にせし人なり）

(一)忠誠を竭して以て君に事ふれば。反りて羣を離れて贅肬たり。(二)儇媚を忘れて以て衆に背き。明君の其れ之を知らんことを待つ。

○ 君に忠を盡さんとすれば、却つて忌み斥けられ、贅肬（こぶ、いぼ）の如き有樣となりぬ ○ 衆に媚び諂ふことを止め、衆人にそむきて正道を守り、君に知られんことを待てり

(一)言と行と其れ迹ぬべし。情と貌と其れ變らず。(二)故に臣を相るは君に若くは莫し。之を證する所以遠からざればなり。

○ 言行の是非はその迹に就いて考へ得べく、中情外貌また一致して變るものにあらず ○ 故に臣を知ることは君に如くはなし、日に相接近し、その良否を見易ければなり

(一)吾誼として君を先にして身を後にす。羌衆人の仇とする所なり。(二)專ら君を惟ひ

惜誦以致レ愍兮。發レ憤以抒レ情。所ニ作レ忠而言レ之兮。指ニ蒼天一以爲レ正。令ニ五帝以折

卷之四

九章第四

（王）九章は屈原の作りし所。屈原江南の野に放たれ、君を思ひ國を念ひ、憂心極なし。故にまた九章を作る。章とは著明なり。己の陳ぶる所の忠信の道甚だ著明なるを言ふ。卒に納れられず。命を委てて自ら沈む。楚人惜んで之を哀み、世に其の詞を論じて以て相傳ふ。

惜誦

（一）惜誦して以て愍を致し。憤を發して以て情を抒ぶ。（二）忠に非ずして之を言ふ所あらば。蒼天を指して以て正と爲さん。

（一）我が願の遂げざるを惜み、口誦して憂を極む　（二）我が言ふところ忠誠より出づるにあらずば、甘んじて天帝の罰を受くべし　原本「作」の字朱本により「非」に改む

（三）五帝をして以て折中せしめ。六神を戒めて與に嚮服せしめ。山川をして以て御に

何云。荊勳作レ師、夫何長先。

悟レ過改更、我又何言。吳光爭レ國、久余是勝。

何環穿自閭社丘陵、爰出子文。

吾告堵敖以不レ長。何試上自干忠名彌彰。

ん。

㊀余退いて巖穴の中に隠れ、敢へて言ふことなからんとす ㊁楚の羣臣、勳功を樹てんと欲し、屢々軍を起すも、長く威を張ることを得ざらん。朱本により「先」の字を補く

過を悟り改更せば、我又何をか言はん。(二)吳光國を争ふ、久しうして余に是れ勝てり。

㊀吳王闔廬國を争ひ、久しきに耐へよく楚に勝てり、我が王また過を悔い行を改めば、國を興すの事なきにあらず、これ余の言を待たざる所なり

(一)何ぞ閭社丘陵より環り穿ちて、爰に子文を出せる。

㊀淫佚の人鬭伯比は邨氏の女に淫し、子文(楚の令尹)の如き賢者を生めり、これ何故ぞ(閭社丘陵は淫行の場所なりといふ)

(一)吾堵敖に告ぐるに長からざるを以てせり。(二)何ぞ上に試みて、自ら忠名彌〻彰るゝに予せん。

㊀余すでに堵敖(楚の文王の子成王の兄)の廟に至り、楚國の長からざるを告げたり ㊁妄に君を諫め、忠直の名を後世に傳へんとせしにあらず、同姓の情已むを得ざるに出でしなり。「干」朱本により「予」に改む

何怒蠭蟻微命力何固。
驚女采薇鹿何祐。北至回水萃何喜。
兄有噬犬弟何欲。易之以百兩卒無祿。
薄暮雷電歸何憂。厥嚴不奉帝何求。
伏匿穴處爰

㊀中央の建國の諸侯は、共に民を養ひ威武を張れるに、我が君楚王何故に怒り戰へるぞ ㊁蜂蟻の如き小虫すら、なほ堅固なる力あるに、況んや中央の大國をや。「蟻」朱本「蛾」蓋し蟻の古字也

(一)驚女薇を采る、鹿何ぞ祐なる。(二)北のかた回水に至りて、萃に何ぞ喜べる。

㊀昔女子あり、わらびを採りて物に驚き、走りて鹿を得たり、その家因りて興りしといふ ㊁女子驚いて北に走り、回水の上に至り、この喜びを得しは何故ぞ。「萃」一説に「卒」の誤とす

(一)兄に噬犬有り、弟何ぞ欲せる。(二)之に易ふるに百兩を以てせしも、卒に祿無かりき。

㊀秦伯に噬犬あり、弟鍼之を得んと欲せり ㊁遂に車百輛を出し、犬と易へんことを乞ひしに、秦伯その者を憎み、鍼を逐ひしといふ、これ何故ぞ

(一)薄暮に雷電あり、歸る何をか憂へんと。(二)厥の嚴奉ぜず、帝何をか求めん。

㊀薄暮に恐るべき雷電あり、國王たま〳〵歸途にありて殆ど恐むなく、是れ何ぞ憂ふるに足らんと曰ふ ㊁天の威嚴に畏れ從はざれば如何にして幸福を求むるを得んや

伏し匿れて穴に處らん。爰に何ぞ云はん。(一)荊の勳師を作すとも、夫れ何ぞ長から

何戒レ之、受二禮天下一。又使三至レ代レ之。
初湯臣レ摯、後茲承レ輔。何卒官レ湯、尊二食宗緒一。
勳闔夢生、少離二散亡一。何壯武厲、能流二厥嚴一。
彭鏗斟レ雉、帝何饗。受レ壽永多、夫何久長。
中央共レ牧、后

しむ。

（一）天は禮命を集め、王者に賜ふ　（二）既に天の禮命を受くるも、王德衰ふればまた他姓をして之に代らしむ

（一）初め湯摯を臣とす、後茲れ輔を承く。（二）何ぞ卒に湯を官にし、宗緒に尊食せしむる。

（一）湯王初め伊尹を臣とし遂に輔翼に備へたり　（二）伊尹は湯王を輔けて天子とし、其の祖先を尊び、天子の禮を以て祭らしめたり、これ何故ぞ（宗緒は宗廟）

（一）勳闔は夢より生れしも、少にして散亡に離ふ。（二）何ぞ壯にして武厲、能く厥の嚴を流しし。

（一）勳功を立てし吳王闔閭は壽夢の孫なりしに、少き時離散して外にあり　（二）後、吳王となり、楚を伐ちて郢都に入り、武を勵まし威名を傳へしは何故ぞ

（一）彭鏗雉を斟にし、帝何ぞ饗けたる。（二）壽を受くる永多にして、夫れ何ぞ久長なる。

（一）彭祖よく滋味を和し、雉の羹を作りて奉りしに、堯帝喜びて之を受けたり、これ何故ぞ　（二）彭祖長壽を得、八百歲に至りしといふ、これまた何故ぞ。「受レ壽」朱子本「壽命」、「久長」朱子本「長」

（一）中央牧を共にす、后何ぞ怒れる。（二）蠭蛾の微命なるも、力何ぞ固き。

伯上告。何親就ニ上帝罰一殷之命以不レ救。

師望在レ肆昌何志。鼓レ刀揚レ聲后何喜。

武發殺レ殷何所レ悒。載レ尸集戰何所レ急。

伯林雉經維其何故。何感レ天抑レ墜夫誰畏懼。

皇天集レ命惟

の命以て救はれざりし。

㊀ 紂王、梅伯のししびしほを諸侯に賜ひ、西伯文王之を受けて上帝に祭告せり ㊁ 上帝親しく紂王を罰して、殷の運命、遂に救ふべからざるに至れり、これ何故ぞ

(一)師望肆に在り、昌何ぞ志せる。刀を鼓して聲を揚ぐ、后何ぞ喜べる。

㊀ 太公望呂尚、初め屠肆にあり、刀を鼓し聲を揚げて牛を屠れり、文王昌、何故にその賢を知り、喜び擧げて師となせるか。「志」朱本「識」

(一)武發殷を殺す、何の悒ふる所ぞ。(二)尸を載せて集り戰ふ、何の急にする所ぞ。

㊀ 武王發に至り、遂に兵を起して殷を伐てり、その憂へしところは何事ぞ ㊁ 武王殷を伐つ時、文王死して未だ葬らず、その尸を軍中に載せたり、武王は何故に斯く戰を急ぎしぞ

(一)伯林雉經、維れ其れ何故ぞ。(二)何ぞ天を感じ墜を抑ふるに、夫れ誰をか畏懼せる。

㊀ 晉の太子申生、繼母に讒せられ、自ら縊れて死せり ㊁ その誠は天地を感動せしむるに足るに、誰を畏れて自殺せるぞ

(一)皇天命を集す、惟れ何ぞ之を戒むる。(二)禮を天下に受けて、又之に代はるに至ら

于冰上一鳥何燠レ之。

何馮レ弓挾レ矢殊能將レ之。既驚レ帝切激何逢レ長レ之。

伯昌號レ衰秉レ鞭作レ牧。何令下徹二彼岐社一命中有殷之國上。

遷レ藏就レ岐何能依。殷有二惑婦一何所レ譏。

受レ賜二茲醢一西

れし時、之を氷上に捨てしに鳥ありて燠み煖めしといふ、これ何故ぞ

(一)何ぞ弓を馮き矢を挾み、殊能もて之を將るたる。(二)既に帝を驚かすこと切激にして、何ぞ之を長うするに逢へる。

㊀紂は武王に弓を引きしぼり矢を挾み、大才能を以て衆を率ゐぬ ㊁武王はその君殷の紂王を攻むること激しくして、却りて長き運を得たり、これ何故ぞ

(一)伯昌衰に號び、鞭を秉りて牧と作る。(二)何ぞ彼の岐の社を徹して、有殷の國に命ぜしめし。

㊀文王伯昌は殷の衰微に乘じ、六州の牧(長官)となりて諸侯を鞭撻し ㊁その子武王は岐周の社を徹去し、更に大社を作りて殷の民に號令せり、これ何故ぞ

(一)藏を遷して岐に就く、何ぞ能く依れる。(二)殷に惑婦あり、何の譏る所ぞ。

㊀太王初め藏寶を遷して岐山の下に來り、衆民之に懷きしは何故ぞ ㊁殷に妖婦妲己あり、紂王之に惑ひて暴政を行ひ、民ために離散して太王に歸せり、太王は讓りを受くべきにあらず

(一)茲の醢を賜へるを受けて、西伯上に告ぐ。(二)何ぞ親しく上帝の罰に就きて、殷

彼王紂之躬、孰使亂惑。何惡輔弼、讒諂是服。

比干何逆、而抑沈之。雷開阿順、而賜封之金。

何聖人之一德、卒其異方。梅伯受醢、箕子佯狂。

稷維元子、帝何篤之。投之

も、死せし後、諸子立つことを爭ひて葬をなさず、蟲その戸に生じ、弑せられしに異らざりき。「九會」朱本「九合」に作る、從ふべし

（一）彼の王紂の躬、孰か亂惑せしめし。（二）何ぞ輔弼を惡み、讒諂に是れ服せる。

㊀紂王の心は誰か之を惑亂せしめしぞ、妲己也　㊁何故に輔弼の良臣を惡み、讒佞の小人を近づけしぞ

（三）比干何ぞ逆ひて、而して之を抑沈し。（四）雷開何ぞ順ひて、而して之を賜封せる。

㊂比干は紂を諫めて殺され、雷開は紂に佞ひて封爵を得たり、是れ何故ぞ　㊃「阿」を「何」とし、「金」を省く、皆朱本に據る

（五）何ぞ聖人の德を一にして、卒に其れ方を異にせる。（六）梅伯は醢を受け、箕子は佯狂せり。

㊄聖人は德を同じうするも行を同じうせず　㊅故に梅伯は紂を諫めて怒に遇ひ、その尸をししびしほにせられ箕子は之を見、狂人の眞似して禍を避けたり

（七）稷は維れ元子なり、帝何ぞ之を篤せる。（八）之を冰上に投じ、鳥何ぞ之を燠めし。

㊆后稷はその長子なるに帝嚳は何故に憎みしぞ。「篤」朱本「竺」、蓋し「篤・竺」共に「毒」の通用なるべし　㊇その生

之。

昭后成レ遊。南土爰底。厥利惟何。逢二彼白雉一。

穆王巧梅。夫何爲二周流一。環二理天下一。夫何索求。

妖夫曳衒。何號二于市一。周幽誰誅。焉得二夫褒姒一。

天命反側。何罰何佑。齊桓九會。卒然身殺。

か

(一)昭后遊を成し、南土爰に底る。厥の利維れ何ぞ、彼の白雉に逢へり。

㊀ 周の昭王巡遊して楚に至り、何物を得しぞ、只白雉を得しのみ

(一)穆王巧梅、夫れ何ぞ周流せる。(二)天下を環理するに、夫れ何をか索求せる。

㊀ 周の穆王巧に利を貪りて四方厭せず、自ら天下を周遊し、之を懐けんとせしは何故ぞ ㊁ 天下を治むるには徳によりて民を懐くべきのみ、何すれぞ強ひて説き求むる事をなしし

(一)妖夫曳衒して、何ぞ市に號べる。(二)周幽誰をか誅して、焉に夫の褒姒を得たる。

㊀ 周の衰へんとする時、童謠ありていふ、檿弧箕服、周室を亡さんと、後に怪しき夫婦あり、この器を賣りつゝ市中に呼びしといふ ㊁ 周の幽王は、誰を討ちて妖姫褒姒を得、遂に犬戎に殺されしぞ

(一)天命反側す、何をか罰し何をか祐くる。(二)齊桓九會して、卒に然も身殺さる。

㊀ 天命は常なく、善を行へば祐けられ、不善を行へば罰せらる ㊁ 故に齊の桓公は諸侯を九合して霸となりし

會鼂爭盟。何踐吾期。蒼鳥羣飛。孰使萃之。

到擊紂躬。叔旦不嘉。何親揆發定周之命以咨嗟。授殷天下。其位安施。反成乃亡。其罪伊何。

爭遣伐器。何以行之。並驅擊翼。何以將之。

(一)會鼂爭盟、何ぞ吾が期を踐める。(二)蒼鳥羣飛、孰か之に萃らしめたる。

一 武王紂を伐ちし時、盟津を踐み、甲子の日殷の都に入りたり(鼂は朝也) 二 その兵よく鬪ひ戰ふ、鷹の羣れ飛ぶに似たりしといふ、勇士をして武王に從はしめしものは誰ぞ

(一)紂の躬を到擊するは、叔旦も嘉せず。(二)何ぞ親ら發に揆り、周の命を定めて以て咨嗟せる。(三)殷に天下を授く、其の位安んか施せる。(四)反つて乃ち亡するを成す、其の罪伊れ何ぞ。

一 武王、紂を伐ち、黄鉞を以てその首を斬せり、叔父周公旦、之を喜ばざりき。朱子本「到」を「列」に作る、未詳 二 後、周公武王に輔り、大誥が邊の諸篇を作り、王業の易からざるを嗟したり、これ何故ぞ(發は武王の名なり)王本に據れば「何親揆發足、周之命、以咨嗟」註に、周公孟津に於て天命を揆度し、發足し師を還して歸る、此時に歎り周の命令已に天下に行はれ、百姓咨嗟嘆美す 三 殷が天命を受けし時、如何に帝位を施用せしぞ 四 天が後に殷を亡ぼせるは、その罪誰にありしぞ

(一)爭ひて伐器を遣る、何を以てか之を行りし。(二)並驅擊翼、何を以てか之を將ゐし。

一 武王紂を伐つ時、先を爭ひて兵器を遣る、これ何故ぞ 二 武王の軍並び驅りて翼を擊つ、如何に率ゐし

害厥兄。何變化以作レ詐後嗣而逢レ長。

成湯東巡有莘爰極。何乞二彼小臣一而吉妃是得。

水濱之木得二彼小子一。夫何惡レ之媵二有莘之婦一。

湯出二重泉一夫何辠尤。不レ勝レ心伐レ帝夫誰使レ挑レ之。

て長きに逢へる。

（一）舜の父母、象に惑ひて淫虐し、共に舜を殺さんとせり　（二）象詐謀を設けて舜を殺さんとせしに、舜天子となるに及び、象を有鼻の君に封じ、長く子孫を榮えしめたり、これ何故ぞ。朱子本「而後嗣逢長」

（一）成湯東巡して、有莘に爰に極る。何ぞ彼の小臣を乞うて、吉妃是れ得たる。

（一）湯王東巡して有莘國に至り、その臣伊尹を乞ひ、又吉妃を得て内助としたり、これ何故ぞ

（一）水濱の木に、彼の小子を得たり。（二）夫れ何ぞ之を惡み、有莘の婦を媵らしめし。

（一）伊尹の母娠める時、水に溺れて死し、化して空桑の林となりしに、水乾く後、小兒ありてその林に啼けり、水涯の人、あはれみて之を拾ひ、子として養ひ育てたり、これ伊尹なりといふ　（二）有莘氏伊尹の林中より出でしを惡み、之にその女を送りしといふ、これ何事ぞ

（一）湯重泉を出づ、夫れ何の辠尤ぞ。（二）心に勝へずして帝を伐つ、夫れ誰か之を挑ましめたる。

（一）桀王、湯王を重泉の地に囚へ、後また之を出せりといふ、これ如何なる罪に由りしぞ　（二）湯王怒に堪へず、後遂に桀王を伐てり、桀王に敵を挑ましめしは誰ぞ

有扈牧豎云何而逢。擊レ牀先出、其命何從。

恆秉二季德一、焉得二夫朴牛一。何往營二班祿一、不二但還來一。

昏微循レ迹、有狄不レ寧。何繁鳥萃レ棘、負レ子肆レ情。

眩レ弟並淫、危二

(二二)有扈牧豎、云何にして逢へる。(二三)牀を擊ちて先づ出づ、其の命何に從る。

㊀ 有扈氏はもと賤しき牧豎なりしに、何如なる幸運に逢ひ、終に諸侯となりしぞ ㊁ 少康有扈氏を攻むる時、有扈氏牀を擊つて奮起せりといふ、かゝる天運は何處より得たるぞ

(二四)恆に季德を秉り、焉に夫の朴牛を得たり。(二五)何ぞ往きて班祿を營める。但還り來るのみにあらず。

㊀ 少康は先の遺德を修め、出獵して大なる牛を得たり ㊁ その出獵せしは、群臣の賢否を見、之に俸祿を分たんがためにして、徒に禽獸を追ひ、馳騁往來せんがためにはあらず

(二六)昏微迹に循ひ、有狄寧からず。(二七)何ぞ繁鳥棘に萃れるに、子を負ひて情を肆にせん。

㊀ 昏微の中に有狄の道に從ふものは、その身安かるべからず、「循」朱子本「遵」 ㊁ 晉の大夫解居父、吳に使せし時、陳の墓門を過ぎ子を負へる婦人を見て之に戲れんとせしに、婦人詩を引いて罵りていふ、墓門に棘あり、鴞あり萃り止る、解居父に等しき淫行は、見る人なきも默ちざるを得ず

(二八)弟に眩ひて並び淫し、厥の兄を危害す。(二九)何ぞ變化して以て詐を作し、後嗣而し

帝乃降觀下逢二伊摯一。何條放致レ罰而黎伏大說。

簡狄在レ臺嚳何宜。玄鳥致レ貽女何喜。

該秉二季德一厥父是臧。胡終弊二於有扈一牧二夫牛羊一。

干協時舞何以懷レ之。平脅曼膚何以肥レ之。

(一)帝乃ち降り觀て、下伊摯に逢ふ。(二)何ぞ條に放ち罰を致して、黎伏して大に說べる。

㊀湯土出でて民風を觀、伊尹に逢ひて之を擧げたり　㊁湯王桀を鳴條に放ち、萬民悅服せしは何故ぞ

(一)簡狄臺に在り嚳何ぞ宜しき。(二)玄鳥貽を致す女何ぞ喜べる。

㊀簡狄臺上に居り、よく帝嚳と和合せり　㊁かつて來りて卵を墮ししに、簡狄喜びて之を呑み、因りて契を生めりといふ、何故にこの吉祥を得たるぞ

(一)該に季德を秉り、厥の父是れ臧みす。(二)胡ぞ終に有扈に弊れ、夫の牛羊を牧せる。

㊀禹の子啓よく禹の德を繼ぎ、父王も之を喜べり　㊁その子孫に至り、何故に有扈氏に亡され、牛羊を牧するに至りしぞ

(一)干め協せて時れ舞む、何を以てか之を懷くる。(二)平脅曼膚、何を以てか之を肥せる。

㊀夏の君臣、力を協せて政に勤め、よくその民を懷けたり、これ如何なる道に由りしぞ。一說「干」を「于」に作り曰(ココニ)と訓ず　㊁桀に至り、美女妹嬉を愛し、益々肥澤ならしめしは何故ぞ

道尚之。女媧有體、孰制匠之。
舜服厥弟、終然爲害。何肆犬豕、而厥身不危敗。
吳獲迄古、南嶽是止。孰期去斯、得兩男子。
緣鵠飾玉、后帝是饗。何承謀夏桀、終以滅喪。

㊀伏羲氏徳を修め八卦を畫し、萬民立てて帝とせり、之を開導尊尚せしは何人ぞ。闕松の考には登は堯の誤なるべしと論ぜり　㊁女媧は蛇身人首にして、一日に七十變化せりといふ、これ後人の妄説なるに、誰の意匠に依り、更に之を圖畫にしたるぞ

（一）舜厥の弟を服す、終に然も害を爲す。（二）何ぞ犬豕を肆にして、厥の身危敗せざる。

㊀舜よく弟象を愛せしに、象は常に舜を殺さんとせり　㊁象、犬豕に等しき心を肆にし、舜は害を被らざりしは何故ぞ。「不危敗」朱子本「不ㇾ爲ㇾ敗」

（一）吳古に迄るを獲、南嶽に是れ止る。（二）孰か期せん斯れを去りて、兩男子を得んとは。

㊀周の太伯仲雍の二君、來りて南嶽の下に止り、吳人因りて賢君を得たるは、恰も上古の事に似たり　㊁吳にこの二君を得ることは、誰か初より期待したるぞ

（一）緣りて鵠をし玉を飾り、后帝是れ饗す。（二）何ぞ謀を承けて夏桀終に以て滅喪せる。

㊀伊尹因て鵠鳥の羹を作り、玉鼎を飾りて湯王に事へたり　㊁湯王後に伊尹を相とし、その謀を用ひて桀を滅せり、これ何故ぞ

之。

桀伐二蒙山一何所レ得焉。妹嬉何肆湯何殛焉。

舜閔在レ家父何以鰥。堯不二姚告二二女何親。

厥萌在レ初何所レ意焉。璜臺十成誰所レ極焉。

登立爲レ帝孰

㊀ 湯王衆民を治め、己に從へんとせり、民を重んじ厚うせしは何故ぞ。朱子は湯を康の誤とす ㊁ 少康は斟尋氏を亡してその國を取り恰も舟を覆せるに似たり、何の道によりて之を取りしぞ

（一）桀蒙山を伐ちて、何の得たる所ぞ。妹嬉何ぞ肆にして、（二）湯何ぞ殛せる。

㊀ 桀王蒙山國を伐ちて、妹嬉を得、妹嬉寵を肆にせり ㊁ 妹嬉のことは湯王に關することなきに、湯は何故に桀を殛罰せしぞ

（一）舜閔へて家に在り、父何を以てか鰥ならしめし。（二）堯姚に告げず、二女何ぞ親しめる。

㊀ 舜憂愁して家にありしに、父、ために娶らざりしは何故ぞ ㊁ 堯、舜の父母（姚姓）に告げず、その二女を舜に降ししは何故ぞ

（一）厥の萌初に在り、何の意る所ぞ。（二）璜臺十成、誰か極むる所ぞ。

㊀ 賢者は事の萌芽を見、早くその存亡を知るといふ、これ何故ぞ（箕子紂の奢りを憂へしをいふ） ㊁ 玉臺十層の奢を極め、遂に國を亡ぼせるは誰ぞ

（一）登立して帝となす、孰か之を道尙せる。（二）女媧體あり、孰か之を制匠せる。

以安レ之。釋レ舟陵行何以遷レ之。

惟澆在レ戶何求二于嫂一。何少康逐レ犬而顚二隕厥首一。

女岐縫レ裳而館同爰止。何顚二易厥首一而親以逢レ殆。

湯謀レ易レ旅何以厚レ之。覆二舟斟尋一何道取レ

か之を遷さん。

（一）大龜蓬萊山を負ひ、海中に抃ち戯るといふ、何故に山を負へるぞ　（二）若し水を離れて陸を行かば、よく山を遷すを得ざらん

（一）惟ふに澆戶に在り、何ぞ嫂に求むる。（二）何ぞ少康犬を逐ひて、厥の首を顚隕する。

（一）寒浞の子澆、嫂（あによめ）の戶に至り、借りて物を求むるまねし、淫亂せしは何故ぞ　（二）夏の后少康、犬を放ち獸を逐ふに因り、澆を襲ひてその首を墮せり、これ何故ぞ

（一）女岐裳を縫ひ、館を同じくして爰に止る。（二）何ぞ顚りて厥の首を易へて、親ら以て殆きに逢へる。

（一）澆の嫂女岐、澆のために裳を縫ひ、遂に館を同じうして宿せり　（二）少康夜襲ひて女岐の首を得、誤りて澆の首となせり、女岐、澆に代り、危害に逢ひしは何故ぞ。一説「顚」の字を衍とす

（一）湯旅を易めんことを謀り、何を以てか之を厚うせる。（三）舟を斟尋に覆へす、何に道りてか之を取れる。

白蜺嬰茀、胡爲二此堂一。安得二夫良藥一不レ能二固臧一。天式從横陽離爰死。大鳥何鳴夫焉喪厥體一。

蓱號起レ雨何以興レ之。撰二體協脅一鹿何膺レ之。

鼇戴レ山抃何

(一)白蜺嬰茀、胡ぞ此の堂に爲せる。(二)安んぞ夫の良藥を得て、固く臧する能はざる。(三)天の式從横、陽離るれば爰に死す。(四)大鳥何ぞ鳴く、夫れ焉んぞ厥の體を喪はん。

(一) 崔文子仙術を王子僑に學びし時、子喬白蜺に化し、嬰茀(ゐはいかゝる)し來りて藥を與へしに、文驚き怪しみ、戈を引いて之を擊ちしといふ、子喬は、何故に如何をその堂になせしぞ (二) 文子仙藥を得、後また之を失ひしといふ、何故に固く臧するを得ざりしぞ(臧は藏は同じ) (三) 天則に陰陽縱横の道あり、陽氣離るればその身死するなり (四) 子喬白蜺に化し、一たび文子に殺されしも、また大鳥に化して鳴けりといふ、然れば眞に殺されしにあらざるなり、これ何故ぞ

(一)蓱號んで雨を起す、何を以てか之を興す。(二)體の協ひ脅へるを撰ぶ、鹿何ぞ之に膺る。

(一) 雨師蓱叫べば雨忽ち起るといふ、これ何故ぞ (二) 天はその形體に協へるものを選み、十二神となすといふ、これ何故ぞ。朱子本「撰二體脅一鹿。何以膺レ之。」に作る、而して其註に、「一本體の下に協の字有り、而して鹿の字下句に屬し、又以の字無し」と、卽ち王本を指す也、岡松甕谷の考には王本の脅の字衍、「撰二體協一鹿」に作るべしといへり

(一)鼇山を戴きて抃つ、何を以てか之を安んずる。(二)舟を釋てて陵行せば、何を以て

豨是射。何獻二蒸肉之膏一而后帝不レ若。

浞娶二純狐一眩レ妻爰謀。何羿之射レ革而交吞二揆之一。

阻窮西征巖何越焉。化而爲二黃熊一巫何活焉。

咸播二秬黍一莆雚是營。何由幷投而鯀疾脩盈。

ざる。

(一)羿、射を善くして大なる豕を射(決は射鞲)(二)その蒸肉を獻じて天を祭りしも、天帝之を受けず、終に身を滅せしは何故ぞ

(一)浞、純狐を娶り、妻に眩ひて爰に謀る。(二)何ぞ羿の革を射て、交〻之を呑揆せる。

(一)羿の相寒浞、その妻純狐氏の女に惑ひ、共に羿を殺さんとせり (二)羿、射藝勇力ありしも、衆人之を亡ししは何故ぞ、(革を射るとは、よろひを射て其七札を貫けりといふ勇力を指す)

(一)阻窮西に征く、巖何ぞ越えし。(二)化して黃熊となる、巫何ぞ活かさん。

(一)鯀、羽に放たれ、因して西に走る時、路を平地に取らず、岩石の險を越ししは何故ぞ (二)後に死して黃熊となり、巫祝も之を活かすを得ざりき。朱子本「化」の下の「爲」の字無し

(一)咸く秬黍を播し、莆雚是れ營む。(二)何に由りてか幷せ投せられて、鯀の疾脩く盈つる。

(一)禹の功により民皆秬黍を蒔き、草地も化して美田となれり。「莆雚」朱子本「蒲雚」 (二)禹の功斯の如く大なるに、父鯀の罪、永く滅せざりしは何故ぞ

拘是達。皆歸ニ射鞫ニ而無レ害ニ厥躬一。何后益作革而禹播降。啓棘ニ賓商ニ九辯九歌。何勤ニ子屠レ母而死分竟レ墜。帝降ニ夷羿ニ革孼ニ夏民一。胡羿射ニ夫河伯ニ而妻ニ彼雒嬪一。馮レ珧利レ決封

(一)禹天下を益に讓りしに、萬民益を去りて啓(禹の子)に歸せり、啓因りて君となり、卒然災に遭ふ(有扈氏と甘に戰へるをいふ) (二)啓よく變ひて有扈氏を伐ち、その阻隔を開きしは何故ぞ

(一)皆射鞫に歸して、厥の躬に害なし。(二)何ぞ后益々作革して、禹播き降せる。

(一)啓、有扈氏の罪を糺し、その身に害を蒙ることなし (二)益々弊事を改め、禹の遺業を繼ぎしは何故ぞ

(一)啓賓商を棘ねて、九辯九歌あり。(二)何ぞ子母を屠りて、死分して墜を竟へしむるを勤むる。

(一)啓、宮商の音を陳ね九辯九歌の樂章を作る (二)生れし時、母をして死して地に歸せしめしといふは何故ぞ

(一)帝夷羿を降し、革めて夏の民を孼す。(二)胡ぞ羿夫の河伯を射て、彼の雒嬪を妻とせる。

(一)天帝羿を降して夏の道を更革して亂し、民に禍せしめたり (二)しかも初め河伯を射、洛水の神女宓妃を得たりといふ、何故にこの吉祥ありしか

(一)珧を馮し決を利し、封豨是れ射る。(二)何ぞ蒸肉の膏えたるを獻ずるに、后帝若は

鯪魚何所鬿堆焉處。羿焉彃レ日烏焉解レ羽。

禹之力獻レ功降省二下土四方一。焉得二彼嵞山之女一而通二之于台桑一。

閔レ妃匹合厥身是繼。胡爲嗜欲不レ同レ味而快二鼂飽一。

啓代レ益作レ后卒然離レ蠥。何啓惟憂而能

㈠鯪魚何の所ぞ、鬿堆焉にか處る。㈡羿焉ぞ日を彃たる、烏何ぞ羽を解せる。

㈠ 鯪魚（山椒魚、四足あるもの）と奇獸鬿堆とはいづこに棲めるぞ ㈡ 堯の時、十の日並び出て、草木枯れ焦れしかば、羿をして之を射しめしに、九日に中り、日中の九烏、皆死して羽を墮せりといふこれ何故ぞ

㈠禹の力めて功を獻ずる、降りて下土の四方を省す。㈡焉ぞ彼の嵞山の女を得て、而して之に台桑に通ぜる。

㈠ 禹すでに功を立てし後、舜之に天下を治めしめたり ㈡ 初め治水に忙しかりし時、又は塗山氏の女を娶り、台桑の地に通ぜしは何故ぞ

㈠妃を閔んで匹合せしは、厥の身を是れ繼がんがためなり。㈡胡爲れぞ嗜欲味を同じくせずして、而して鼂飽を快しとせし。

㈠ 禹のその妃を愛憐して之と匹合せしは繼嗣を得んがためなりしのみ ㈡ 衆人は人と嗜慾を同じうせざるに、何故に一朝の情を飽かしめしぞ

㈠啓、益に代りて后となる、卒然として蠥に離れり。㈡何ぞ啓惟れ憂へて、能く拘を是れ達する。

何所冬暖。何所夏寒。焉有二石林一。何獸能言。焉有二虬龍一負レ熊以遊。雄虺九首。儵忽焉在。何所不レ死。長人何守。靡蓱九衢。枲華安居。一蛇呑レ象。厥大何如。黑水玄趾。三危安在。延年不レ死。壽何所レ止。

何の所か冬暖かなる、何の所か夏寒き。

焉にか石林ある、何の獸か能く言ふ。

焉にか虬龍ありて、熊を負ひて以て遊べる。

(一)雄虺九首、儵忽として焉にか在る。(二)何の所にか死なざる、長人何をか守れる。

㊀雄虺(蛇の屬)には九つの首ありて、走ること疾しといふ、今何處にあるぞ ㊁人は死せざるものなきに長生の人は如何なる秘法を守れるぞ

(一)靡蓱九衢、枲華安にか居る。(二)一蛇象を呑む、厥の大さ何如。

㊀うきくさ有りて九交の道にはびこるに枲華(麻に似たる仙草の花)はいづこに開けるぞ ㊁南方に大蛇ありてよく象を呑み、三年にしてその骨を出すといふ、蛇の大さ幾何ぞ

(一)黑水玄趾、三危安にか在る。(二)延年死なず、壽何の止る所ぞ。

㊀黑水の流、玄趾三危の二山は何處ぞ ㊁仙人は藥を黑水に採り露を危山に飲み年壽窮りなしといふ、これ何故ぞ

不レ從孰知二其故一。東西南北其脩孰多。南北順墮其衍幾何。崑崙縣圃其尻安在。增城九重其高幾里。四方之門其誰從焉。西北闢啓何氣通焉。日安不レ到燭龍何照。羲和之未レ揚若華何光。

㊀九州すでに錯かれ川谷すでに洿く、百水東流して少しも溢るゝことなし　㊁誰かその故を知れるぞ

(一)東西南北、其の脩さ孰か多き。(二)南北順墮、其の衍幾何ぞ。

㊀地の東西と南北とは、いづれが長きぞ　㊁地形は楕圓をなし、南北に狹しといふ、東西との差幾何ぞ

(一)崑崙縣圃、其の尻安にか在る。(二)增城九重、其の高さ幾里ぞ。

㊀崑崙山(頂を縣圃といふ)は根を何處に託せるぞ　㊁其山重疊して九重に至り、高さ幾里なるぞ

(一)四方の門、其れ誰か從れる。(二)西北闢啓して、何の氣か通ぜる。

㊀天地の四方に門ありといふ、それに出入するものは誰ぞ　㊁西北の門は常に開くといふ、そこに通ずるは如何なる氣ぞ

(一)日安んか到らざる、燭龍何ぞ照せる。(二)羲和の未だ揚らざる、若華何ぞ光せる。

㊀日は照さざる處なきに、天の西北に暗き國あり、龍ありて燭を銜めりといふ、これ何故ぞ　㊁日の未だ出でざる時、若木の赤花地を照すといふは何ぞ(羲和は日の御者なり)

纂二就前緒一遂成二考功一。何續レ初繼レ業而厥謀不レ同。

洪泉極深何以寘レ之。地方九則何以墳レ之。

應龍何畫河海何歷。

鮌何所レ營禹何所レ成。康回馮怒墜何故以東南傾。

九州何錯川谷何洿。東流

㈠前緒を纂就して、遂に考の功を成す。㈡何ぞ初を續ぎ業を繼ぎて、厥の謀同じからざる。

㈠禹は鯀の遺業を繼ぎ、遂に治水の功を成したり　㈡遺業を繼ぎしも、謀慮同じからざりしは何故ぞ

㈠洪泉極めて深し、何を以てか之を寘めし。㈡地方九則、何を以てか之を墳てる。

㈠洪水極めて深かりしに、禹は如何にして之をうづめ塞ぎて平げしぞ　㈡地方の九等は如何にして分ちしぞ

㈠應龍何ぞ畫し、河海何ぞ歷たる。

㈠この時應龍（龍の翼あるもの）尾を掉ひて地を畫し、洪水ために疏通せしといふ、これ亦何故ぞ

㈠鮌は何の營む所ぞ、禹は何の成す所ぞ。㈡康回馮怒して、墜何の故にか以て東南に傾ける。

㈠洪水を治むるに、鮌は如何に經營し、禹はいかに成就せしぞ　㈡昔、共工氏帝顓頊と帝位を爭ひ、怒つて頭を不周山に觸れ、天柱ために摧け地維ために絶え、地遂に東南に傾きしといふ、是また何故ぞ（康回は共工の名）

㈠九州何んぞ錯き、川谷何ぞ洿き。東に流れて溢れず、㈡孰か其の故を知らん。

何闔而晦何開而明。角宿未レ旦曜靈安藏。不レ任レ汨レ鴻師何以尙レ之。僉答何憂何不三課而行二之。鴟龜曳銜鮌何聽焉。順欲レ成レ功帝何刑焉。永遏在二羽山一。夫何三年不レ施。伯禹腹レ鮌夫何以變化。

(一)何ぞ闔ぢて晦く、何ぞ開きて明かなる。(二)角宿未だ旦けず、曜靈安にか藏るゝ。

㊀天閉づれば晦く、開けば明かなるは何ぞ　㊁東方未だ明けざる時、日は何處に隱るゝぞ(角宿は東方の星なり)

(一)鴻を汨むるに任へざるに、師何を以て之を尙げたる。(二)僉荅ふ何ぞ憂へんと、何ぞ課みて之を行らざる。

㊀鮌の才は、洪水を治むるに堪へざるに、衆人何故に推擧せしぞ(汨は洪水)　㊁衆みな憂ふるに足らずといひしも、堯は何故に先づ試み、然る後に遣らざりしぞ、「僉荅」朱子本「僉曰」

(一)鴟龜曳銜、(二)鮌何ぞ聽きたる。(三)順へるは功を成さんとせしなり、帝何ぞ刑せし。

㊀鴟は木石を含み、龜は尾を泥中に曳き、共に鮌の業を助けしといふ　㊁鮌はその計を聽き、しかもその事を誤りしは何故ぞ　㊂鮌が鴟龜の爲す所に順ひしは、因て治水の功を成さんと欲せしなり、然るに堯何ぞ之を刑せし、王逸は衆人の欲に順はゞ必ずその功を成し、堯も之を刑せざりしならんの意とす

(一)永く遏められて羽山に在り。夫れ何ぞ三年まで施さざる。(二)伯禹鮌に腹す、夫れ何を以てか變化せる。

㊀堯、鮌を羽山に放ち、三年その罪を赦さざりしは何故ぞ　㊁禹は鮌の子、父に異なり、聖德ありしは何故ぞ

放安屬。隅隈多有。誰知二其數一。

天何所ㇾ沓。十二焉分。日月安屬。列星安陳。

出ㇾ自二湯谷一。次二于蒙汜一。自ㇾ明及ㇾ晦。所ㇾ行幾里。

夜光何德。死則又育。厥利維何。而顧菟在ㇾ腹。

女岐無ㇾ合ㇾ夫。焉取二九子一。伯强何處。惠氣安在。

(一)九天(東方皞天、東南方陽天、南方赤天、西南方朱天、西方成天、西北方幽天、北方玄天、東北方變天、中央鈞天)の盡くる處は何處に達し何處に附けるぞ (二)九天といへば隅角多き理なり、誰かその數を知るを得しぞ

(一)天何の沓ふ所ぞ、十二焉んか分てる。(二)日月安にか屬き、列星安かに陳なる。

(一)天地は何處に合會し、十二辰は誰に分たれしぞ (二)日月はいづこに係屬し、列星は何處に布陳するぞ。「陳」朱子本「陳」

湯谷より出で、蒙汜に次る。明より晦に及ぶまで、行く所幾里ぞ。

(一)日は湯谷より出で、蒙水のほとりに入るといふ (二)明くるより暮るゝまで、行くこと幾里ぞ

(一)夜光何の德かある、死して則ち又育す。(二)厥の利維れ何ぞ、而して顧菟腹に在り。

(一)何の德によりて、月は死(晦)して又生(明)るゝぞ (二)何の利ありて兎は月の腹中に居るぞ、顧菟は其狀顧みるがごとき意。一說顧は反(カヘツテ)也とす

(一)女岐夫に合ふなし、焉にか九子を取れる。(二)伯强何にか處り、(三)惠氣安にか在る。

(一)神女、女岐は、夫なかりしといふ、何に由りて九子を生みしぞ (二)大癘疫の鬼伯强は何處に居るぞ (三)陰陽調和の氣は何處より發するぞ

冥昭瞢闇誰能極之。馮翼惟像何以識之。
明明闇闇惟時何爲。陰陽三合何本何化。
圜則九重孰營度之。惟茲何功孰初作之。
斡維焉繫天極焉加。八柱何當東南何虧。
九天之際安

(一)冥昭瞢闇、誰か能く之を極めん。(二)馮翼惟れ像る、何を以てか之を識らん。

㊀日、晝夜、清濁晦明の理は誰か之を究め得ん　㊁天地浮遊してたゞ影像のみありしといふ、何に由りて之を知らん

(一)明明闇闇たる、惟れ時れ何爲し。(二)陰陽三合、何にか本づき何をか化する。

㊀誰か陰陽明晦を作りしぞ　㊁天地人三合は、何に本づきて化生せしぞ

(一)圜則九重、孰か之を營度せし。惟れ茲れ何の功ぞ、(二)孰か初めて之を作れる。

㊀誰か天(圓くして九重)を經營測度せしぞ　㊁誰の力にて之を作りしぞ

(一)斡維焉にか繫り、(二)天極焉にか加はる。(三)八柱何にか當れる、(四)東南何ぞ虧けたる。

㊀晝夜旋轉の綱は、何處にかゝれるぞ　㊁南北の兩極(天の兩軸)は何處に附けるぞ　㊂地下に八柱ありといふ、その柱は何處に當れるぞ　㊃何故に地形東南に缺けたるぞ。(支那の地勢、西北高く、東南低きをいふ)

(一)九天の際、安にか放り安にか屬ける。(二)隅隈多くあり、誰か其の數を知れる。

曰遂古之初
誰傳ニ道之一。上
下未レ形何由
考レ之。

卷之三

天問第三

（王）天問は屈原の作りし所なり。何ぞ天に問ふと言はざるや。天は尊うして問ふべからず。故に天問ふといふなり。屈原放逐せられ、憂心愁悴、山澤に彷徨し、陵陸を經歴し、旻昊に嗟號し、天を仰いで歎息す。楚に先王の廟及び公卿の祠堂ありて、天地山川神靈の琦瑋僪佹、及び古の賢聖怪物の行事を圖畫するを見、周流罷倦してその下に休息し、仰いで圖畫を見、因つて其の壁に書して、呵して之を問ひ、以て憤懣を渫らし愁思を舒瀉す。楚人屈原を哀惜し、因つて共に論述す。故に其の文義次叙あらずと云爾。

（一）曰く、遂古の初、誰か之を傳へ道へる。（二）上下未だ形あらず、何に由りてか之を考へん。

（一）屈原いふ、太古の初のことは、誰か之をいひ傳へしぞ　（二）その時、天地未だ開けず、人も亦なかりしに、何に由りて考へ得たりしぞ。

出不入兮往不反。平原忽兮路超遠。
帶長劍兮挾秦弓。首雖離兮心不懲。誠既勇兮又以武。終剛強兮不可凌。身既死兮神以靈。魂魄毅兮爲鬼雄。

盛禮兮會鼓。傳芭兮代舞。姱女倡兮容與。春蘭兮秋菊。長無絶兮終古。

(一)出でては入らず往きては反らず。平原忽として路超遠なり。

(一)勇士は出でてまた歸らず、身命を原野に棄て、家を去ること甚だ遠し

(二)長劍を帶びて秦弓を挾み。首離ると雖も心懲りず。誠に既に勇にして又以て武に。終に剛強にして凌ぐべからず。(三)身既に死するも神は以て靈なり。魂魄毅にして鬼雄となる。

(二)その態を見るになほ長劍を帶び秦弓を執り、首足離るゝも心に悔いず (三)身すでに死するも、精靈永く消えず毅然として百鬼の雄となる

禮魂

(一)禮を盛にして鼓を會ち。芭を傳へて代〻舞ふ。(二)姱女倡へて容與たり。(三)春蘭秋菊。長く終古に絶ゆる無からん。

(一)禮を盛し歌樂を奏し一人の巫舞ひ終れば、更に芭(巫の持つ香草)を他人に傳へ代りて舞はしむ、「集註」朱子本「成禮」 (二)美女先づ歌ひ、進退ゆるやかにして節度あり (三)春祀に蘭秋祀に菊を用ひ、祭祀長く絶えず

徒離憂。

操呉戈兮被犀甲。車錯轂兮短兵接。旌蔽日兮敵若雲。矢交墜兮士爭先。凌余陣兮躐余行。左驂殪兮右刃傷。霾兩輪兮縶四馬。援玉枹兮擊鳴鼓。天時墜兮威靈怒。嚴殺盡兮棄原壄。

國殤

(一)呉戈を操り犀甲を被り。車轂を錯へて短兵接す。(二)旌日を蔽ひて敵雲の若く、矢交〻墜ちて士先を爭ふ。

㊀ 國事に斃れし勇士、始め鋭き戈を執り、犀皮の甲を被り、兵車入り亂れ、刀劍を揮ひて接し戰へり ㊁ 旌旗日を蔽ひ、敵軍雲の如く、流矢雨の如きも、先を爭つて奮ひ進めり

(一)余が陣を凌ぎ余が行を躐み、左驂は殪れて右は刃傷す。

㊀ 敵我が陣を犯し行伍を亂し、左のそへうまは斃れ、右のそへうまは傷けり

(一)兩輪を霾し四馬を縶ぎ。玉枹を援きて鼓を擊ち鳴す。(二)天時に墜ちて威靈怒り。(三)嚴殺し盡して原壄に棄てらる。

㊀ 更に車の車輪をうづめ、四頭の馬をつなぎ、玉のばちを執りて鼓を打てり（車輛には馬四頭をつなぎ、中央の二頭轅を夾むものを服といひ、兩邊の二頭を驂といふ、鼓を打つは氣勢を添ふるなり）㊁ たま〳〵天の怒に觸れ全軍悉く殺され、屍を草野にさらせり、「墜」朱子本「懟」

兮神靈雨。留靈脩兮憺忘歸。歲既晏兮孰華予。
采三秀兮於山間。石磊磊兮葛蔓蔓。怨公子兮悵忘歸。君思我兮不得間。
山中人兮芳杜若。飲石泉兮蔭松柏。君思我兮然疑作。
靁塡塡兮雨冥冥。猨啾啾兮狖夜鳴。風颯颯兮木蕭蕭。思公子兮

(一)余後れて至り、獨り山上に立てば、雲飛んで脚下にあり　(二)晝なほ晦く、東風吹きめぐり、神靈雨を降らせたり。朱子本「東風飄兮」　(三)山神を留めんとし、心これに專にして竹林に歸るを忘れたり　(四)余が年すでに老い、山神の外には、共に遊ぶべきものなければなり

(一)三秀を山間に采れば。石磊磊として葛蔓蔓たり。(二)公子を怨み悵として歸るを忘る。君我を思ふも(三)間を得ず。

(一)芝草を山に採り、山神に歸らんとすれば、石亂れ積はり、葛草茂りはびこれり　(二)山神の侍者の我を阻して山神と相見るを得ざらしむるを怨み　(三)相見るの暇なし

(一)山中の人杜若を芳とす。石泉を飲みて松柏に蔭す。(二)君我を思ふも然疑作る。

(一)余は山中に居り、香草杜若を採り、石泉を飲み、松柏の蔭にいこひ、自ら身を潔くせり　(二)山神我を思ふも、侍者の妨げあるにより、信疑こもごも起れるなり

(一)靁塡塡として雨冥冥たり。猨啾啾として狖夜鳴く。風颯颯として木蕭蕭たり。(二)公子を思うて徒に憂に離る。

(一)山上にあれば雷鳴り雨暗く、猿猴鳴して夜に入れり　(二)侍者我を妨ぐるを思ひ、深く憂へ悲しむ

之阿。被薜荔兮帶女羅。既含睇兮又宜笑。子慕予兮善窈窕。
乘赤豹兮從文狸。辛夷車兮結桂旗。被石蘭兮帶杜衡。折芳馨兮遺所思。余處幽篁兮終不見天。路險難兮獨後來。
表獨立兮山之上。雲容容兮而在下。杳冥冥兮羌晝晦。東風飄飄

し。子予が善く窈窕たるを慕ふ。

㊀山鬼(山神)山の隅にあり、その形人の如く、薜荔女蘿を衣帶とせり　㊁眼美しく、口元に笑を含み、余が美行を愛し、來りて歡を結ばんとせり(睇は、ながしめに視る貌)

(一)赤豹に乘りて文狸を從へ。辛夷の車桂旗を結び。(二)石蘭を被て杜衡を帶にす。芳馨を折りて思ふ所に遺る。(三)余幽篁に處りて終に天を見ず。路險難にして獨後れて來る。

㊀山鬼、赤豹に乘り、彩紋ある狸を從へ、香草辛夷の車に乘り桂の旗を結び。朱子本「文貍」　㊁衣帶を改め、香草石蘭杜衡とを着けて山隈より來り、芳香ある枝を折り、慕へる人に贈らんとせるもの、(思ふ所、王注に、清潔の士、屈原のごとき者を謂ふとあり)朱子本「杜衡」　㊂余竹林中に居て天を見ず、且つ路險しきために甚に後れ、贈物を受くることを得ざりき

(一)表として獨り山の上に立てば。雲容容として下に在り。杳冥冥として(二)羌晝晦く。東風飄飄として神靈雨ふらず。(三)靈脩を留むるに憺として歸るを忘る。(四)歳既に晏し孰か予を華にせん。

極浦一兮寤懷。魚鱗屋兮龍堂。紫貝闕兮朱宮。靈何爲兮水中。

乘二白黿一兮逐二文魚一。與レ女遊二兮河之渚一。流澌紛兮將二來下一。子交レ手兮東行。送二美人兮南浦一。波滔滔兮來迎。魚鱗鱗兮媵レ予。

若レ有レ人二兮山

して歸るを忘れ、遠き河伯を惟念し、心中覺めて歸を懷ふるのみ

(一)魚鱗の屋、龍の堂。紫貝の闕、朱の宮。(二)靈何爲れぞ水中なる。

㊀ 河伯の居は魚鱗を以て屋を葺き、あかく蛟龍の文を畫き、紫貝を以て闕を作り、宮殿を丹朱にせり ㊁ 傷嘆す此の如くなるに、その水中にあるは何故ぞ

(一)白黿に乘り文魚を逐ふ。女と河の渚に遊ばんとすれば。流澌紛として將に來り下らんとす。(二)子手を交へて東に行く。(三)美人を南浦に送れば。波滔滔として來り迎へ。魚鱗鱗として予を媵る。

㊀ 大鼈に乘り、鯉魚を從へ、河伯と河渚に遊ばんとすれば、氷解けて下らんとせり（紛は亂る、也） ㊁ 漸くにして、河伯余と手を交じへしも、忽ち別を告げ、東に行かんとせり ㊂ 之を送りて南浦に至れば、波滔滔として來り迎へ、魚また羣れて余の歸るを送れり、「鱗鱗」朱子本「隣隣」に作る

山鬼

(一)山の阿に人あるが若し。薜荔を被て女蘿を帶とす。(二)既に睇を含み又笑ふに宜

余弧㆒兮反淪
降。援㆓北斗㆒兮
酌㆓桂漿㆒。撰㆓余
轡㆒兮高駝翔。
杳冥冥兮以
東行。

與㆑女遊㆓兮九
河㆒。衝風起兮
水横㆑波。乘㆓水
車㆒兮荷蓋。駕㆓
兩龍㆒兮驂㆑螭。

登㆓崑崙㆒兮四
望。心飛揚兮
浩蕩。日將㆑暮
兮悵忘㆑歸。惟㆓

東に行く。

㊀日神青雲（東の色）を衣とし、白霓（にじ、西の色）を裳とし、天狼星を射る ㊁余弓を執りて之に從はんとすれば、却りて西に沈み、太陰の中に入れり ㊂須臾にして北斗星現はれ、日神その柄を執り、桂香の酒を酌む、歡に勝ち、飲酒の儀を畢ぐるに似たり ㊃余轡を執りて、高く馳すれば、日神また地に入りて東に去る（冥々はくらき貌）

河伯

（一）女と九河に遊ばんとすれば。衝風起りて（二）水波を横ふ。（三）水車に乘りて荷蓋し。兩龍に駕して螭を驂にす。

㊀河伯（河神）と九河に遊ばんとすれば、旋風吹き、水波起りて之を妨ぐ（九河は黄河下流の分派なる九つの流）㊁朱子本「水」の字なし、從ふべし ㊂河伯水車に乘り、荷葉を車蓋とし兩龍に駕し螭をそへうまとせるを見るのみ

（一）崑崙に登りて四望すれば、心飛揚して浩蕩たり。（二）日將に暮れんとして悵として歸るを忘る。極浦を惟うて寤めて懷ふ。

㊀余、崑崙山に登りて四望し、河伯の居を求むるに、心動きて據る所なし ㊁日將に暮れんとするも、悵然と

駕龍輈兮乘雷。載雲旗兮委蛇。長太息兮將上。心低佪兮顧懷。羌色聲兮娛人。觀者憺兮忘歸。

緪瑟兮交鼓。簫鐘兮瑤簴。鳴篪兮吹竽。思靈保兮賢姱。翾飛兮翠曾。展詩兮會舞。應律兮合節。靈之來兮蔽日。

青雲衣兮白霓裳。舉長矢兮射天狼。操

(一)龍輈に駕して雷に乘り。雲旗を載てて委蛇たり。(二)長太息して將に上らんとし。心低佪して顧懷す。(三)羌色聲の人を娛しましむる。觀る者憺んじて歸るを忘る。

㊀東君(日神)龍車に駕し、雷に乘り、雲を旗とし、長く靡かせ來る ㊁長歎太息し、將に上りて、日神に娛しまんとするも、その威嚇を憚り、心にためらひて決せず ㊂日神の威容と天をきしる雷なる聲とは、共に人を樂しましめ、觀るものために歸るを忘る、「色聲」朱子本「聲色」

(一)緪瑟交〻鼓ち。(二)簫鐘瑤簴。篪を鳴らし竽を吹き。(三)靈保の賢姱なる。翾飛翠曾。(四)詩を展べて舞を會せ。律に應じ節に合す。靈の來るや日を蔽へり。

㊀強く絃を張りたる瑟、彼此交々瑟を鼓す ㊁簫鐘を玉にて飾れる簴に掛け、竽笛を吹き鳴らし ㊂賢く美しき靈(みこ)、巧に舞ひ、翠鳥の飛ぶに似たり。原文の「曾」は助字なるべし。或は「靈保の賢姱なるを思ふ」と訓ず ㊃歌舞を合せ節奏を和すれば、神悦び下り、從屬の衆神衆多にして日を蔽ひて至れり

(一)青雲の衣白霓の裳。長矢を擧けて天狼を射る。余が弧を操れば反りて淪降す。(二)北斗を援いて桂漿を酌み、(三)余が轡を撰りて高く駝翔すれば。杳冥冥として以て

女髪兮陽之阿。望美人兮未來。臨風怳兮浩歌。

㈢ 美人(神)を望めども未だ來らず、徒に風に臨み、浩歌(大聲に歌ふ)して深く悲しむ。「美人」朱子本「幾人」

孔蓋兮翠旌。登九天兮撫彗星。竦長劍兮擁幼艾。荃獨宜兮爲民正。

(一)孔蓋翠旌。九天に登りて彗星を撫し。(二)長劍を竦りて幼艾を擁す。(三)荃獨り民の正と爲るに宜し。

㈠ 神は孔雀の羽の車蓋、翡翠の羽の旌旗を列ね、天に登りて彗星を撫し邪穢を掃ふ、「翠旌」朱子本「翠旍」 ㈡ 又、長劍を執りて萬民を護り、長幼各々その處を得しむ、「竦」朱子本「擢」(ヌイテ) ㈢ 神に私なく、民の儀表となすべきなり。「荃」朱子本「蓀」

東君

暾將出兮東方。照吾檻兮扶桑。撫余馬兮安驅。夜皎皎兮既明。

(一)暾將に東方に出でんとす。吾が檻を扶桑より照す。(二)余が馬を撫して安驅すれば。夜皎皎として既に明かなり。

㈠ 日將に東方に出でんとし、光わが欄干に至れり(扶桑は仙木の名、高さ萬仞、日は下つて湯谷に浴し、上つて扶桑を拂ひ、始めて四方を照す) ㈡ 馬を驅りて日神を迎へんとす、「皎皎」朱子本「晈晈」

忽獨與レ余兮目成。

入不レ言兮出不レ辭。乘二回風一兮載二雲旗一。悲莫レ悲二兮生別離一。樂莫レ樂二兮新相知一。

荷衣兮蕙帶。儵而來兮忽而逝。夕宿二兮帝郊一。君誰須二兮雲之際一。

與レ女遊二兮九河一。衝風至兮水揚レ波。與レ女沐二兮咸池一。晞二

(一)入るにも言はず出づるにも辭せず。(二)回風に乘り雲旗を載つ。(三)悲しきは生別離より悲しきは莫く。樂しきは新相知より樂しきは莫し。

(一)神は出入ともに言葉なし (二)吹きめぐる風に乘り、雲旗を靡し、忽ち天に登り去りぬ (三)人生別離より悲しきことなく、始めて相知る時より樂しきことなし

(一)荷衣蕙帶。儵ちにして來り忽ちにして逝く。(二)夕に帝郊に宿し。君誰をか雲の際に須つ。

(一)神は荷衣をまとひ、蕙帶を垂れ、忽ち來りて忽ち去りぬ (二)神、夕に天帝の郊に宿し、雲のほとりに留れるは、思ふに誰を待つならんか、余を待てるにはあらざらんか

女と九河に遊ばんとすれば。衝風至つて水波を揚ぐ。(一)女と咸池に沐し。(二)女が髮を陽の阿に晞かさん。(三)美人を望みて未だ來らず。風に臨みて怳として浩歌す。

(一)この二句衍といふ (二)余は汝は神を迎へ、共に天池に沐し、髮を陽阿(日の行くところ)に乾かさんとせり

羌愈思兮愁人。愁人兮奈何。願若今兮無虧。固人命兮有當。孰離合兮可爲。

㊀ 轔車の鳴る聲 ㊁ 桂枝を結びてた、ずめば、愁いよ〳〵深く人をして愁へしむ

人を愁へしむるも奈何せん。㊀願くは今の若くにして虧くる無からん。固より人命㊁は當るあり、孰か離合を爲すべけん。㊂

㊀ 愁深きも如何ともすべからず ㊁ 善を爲すこと今の如く、德行缺くることなからん ㊂ 人みな命を天より受け各々當る所あり、衆人と遠ざかるも、亦自然の運命のみ

少司命

穐蘭兮麋蕪。羅生兮堂下。綠葉兮素枝。芳菲菲兮襲予。夫人兮自有美子。蓀何以兮愁苦。

穐蘭と麋蕪と。堂下に羅生す。綠葉にして素枝。芳菲菲として予を襲ふ。㊀夫の人自ら美子あり。㊁蓀何を以てか愁苦する。

㊀ 秋蘭麋蕪の香草つらなり生じ、綠葉素枝、芳香人を襲ふ（祭壇をいふ） ㊁ 天下の萬民皆美しき子孫あり、少司命の神何ぞ愁へ苦しむか（司命は年壽を司る神なり、夫の人以下は司命に告ぐる詞也）

穐蘭兮青青。綠葉兮紫莖。滿堂兮美人。

穐蘭青青たり。綠葉にして紫莖なり。滿堂の美人。㊀忽ち獨り余と目成す。

㊀ 美しき人々、神を祭りて堂に滿てるに、少司命の神は獨り余を見て親めり

乘二清氣一兮御二陰陽一。吾與レ君兮齊速、導レ帝之二兮九阬一。
靈衣兮被被。玉佩兮陸離。
壹陰兮壹陽。衆莫レ知二兮余所一レ爲。

に之く。

㊀ 神は徐に飛び高く翔り、清明の気に乗りて陰陽を御へ、人に病なからしむ ㊁ 身を神に托して天帝を導き、九州の野を行かんとす。「齋速」朱子本「齊速」に作り、整斉にして疾速と解す

靈衣被被たり。(一) 玉佩陸離たり。(二) 壹陰壹陽。(三) 衆余が爲す所を知る莫し。

㊀ 衣の長き貌、朱子本「被被」 ㊁ 光彩の美しき貌 ㊂ 神と周遊し、陰を出でて陽に入り、變化測りなし

折二疏麻兮瑤華一。將三以遺二兮離居一。老冉冉兮既極。不二寖近一兮愈疏。
乘レ龍兮轔轔。高駝沖レ天。結二桂枝一兮延佇。

(一)疏麻の瑤華を折り。將に以て離居に遺らんとす。(二)老冉冉として既に極る。寖近かずんば愈〻疏からん。

㊀ なは神麻の花を折り、吾と遠ざかれる衆人に贈らんとす ㊁ 吾すでに老いたり、今にして親むを得ずんば、更にいよ〳〵疎まるべし

龍に乘つて(一)轔轔、高く駝せて天に沖る。(三)桂枝を結びて延佇し。羌愈〻思うて人を愁へしむ。

浦。搴ニ汀洲ノ兮杜若。將ニ以遺ニ兮遠者。時不レ可ニ兮驟得。聊逍遙兮容與。

廣開ニ兮天門。紛吾乘ニ兮玄雲。令ニ飄風兮先驅。使ニ涷雨兮灑レ塵。

君回翔兮以下。踰ニ空桑ニ兮從レ女。紛總總兮九州。何壽夭兮在レ予。

高飛兮安翔。

遠者に遺らんとす。(三)時驟に得べからず。聊く逍遙して容與す。

(一)よりて身を飾るも益なきを知り、衣物を解きて江中に棄て (二)なほ汀上に杜若を採り、遠き女神に贈らんとせり (三)再會の期はにはかに得難し

○大司命

(一)廣く天門を開き。紛として吾玄雲に乘り。飄風をして先驅せしめ。(二)涷雨をして塵を灑がしむ。

(一)天門を開き、黑雲に乘り (二)暴雨に塵を洗はしめて路を清め、將に大司命の神を迎へんとす

(一)君回翔して以て下り。空桑を踰えて女に從ふ。(二)紛總總たる九州。何ぞ壽夭予に在らん。

(一)大司命の神、徐にめぐり下れり、因りて空桑山を越え、迎へて之に從ふ (二)神いふ、九州の民多きも、その壽と夭(早死)とは皆自ら招けるなり、我が關する所に非ずと

(一)高飛し安翔して。清氣に乘りて陰陽を御す。(二)吾君と齋遬して。帝を道きて九阬

匊二芳椒一兮成ㇾ堂。桂棟兮蘭橑。辛夷楣兮葯房。罔二薜荔一兮爲ㇾ帷。擗ㇾ蕙櫋兮既張。白玉兮爲ㇾ鎭。疏二石蘭一兮爲ㇾ芳。芷葺二兮荷屋一。繚ㇾ之兮杜衡。合二百草一兮實ㇾ庭。建二芳馨一兮廡ㇾ門。

茘を罔びて帷となし。蕙を擗き櫋ねて既に張る。(四)白玉を鎭となし。石蘭を疏きて芳と爲す。(五)芷もて荷屋を葺き。之に繚ふに杜衡もてし。(六)百草を合せて庭に實て。芳馨を建みて門に廡す。

(一) 室に香草蓀にて壁を飾り、紫貝を累ねて室壇とし (二) 香椒を室上に布き、桂を棟とし蘭をたるきとし、香草辛夷を戸楣とし、葯(白芷)以て房室を飾り (三) 薜荔を帷とし、蕙を折き聯ねて敷物とす (四) 白玉をおもしとし、香草石蘭を布きて芳潔ならしめ (五) 香草の屋に白芷を加へ、之に杜衡をまとひ (六) 百草の花を庭に滿て、芳馨を摘みて門廡とせり

九疑繽兮並迎。靈之來兮如ㇾ雲。

(一)九疑繽として竝び迎へ、靈の來ること雲の如し。

(一) 舜帝九疑山の諸神を遣し、雲の如くに群り來り、湘夫人を迎へ去りたり（湘夫人は堯帝の女にして舜帝の妃なり）

捐二余袂一兮江中。遺二余褋一

(二)余が袂を江中に捐て。余が褋を醴浦に遺つ。(三)汀洲に杜若を搴り。將に以て

沅有レ芷兮澧有蘭。思二公子一兮未二敢言一。慌惚兮遠望。觀二流水兮潺湲一。

(一)沅には芷あり澧には蘭あり。(二)公子を思へども敢て言はず。(三)慌惚として遠く望み、流水の潺湲たるを觀るのみ。

一 沅水に芷あり、澧水に蘭あり、蘭芷を見れば湘夫人を想ふ 二 余湘夫人を思ふも、その尊嚴を汚すを恐れ、敢て之を口にせず 三 慌惚として遠く望めば、たゞ水のさら〳〵と流るゝを見るのみ

麋何食兮庭中。蛟何爲兮水裔。朝馳二余馬兮江皐一。夕濟二兮西澨一。

(一)麋何食れぞ庭中。蛟何爲れぞ水裔。朝に余が馬を(二)江皐に馳せ。夕に(三)西澨を濟る。

一 山の麋は庭に困り、淵の蛟は水涯に棲む。「何食」朱子本「何爲」に作る、從ふべし 二 江邊 三 西の水涯

聞二佳人兮召レ予。將二騰レ駕兮偕逝一。築二室兮水中一。葺レ之兮荷蓋。

(一)佳人の予を召すと聞き。將に駕を騰げて偕に逝かんとす。(二)室を水中に築き。之を葺くに荷蓋もてす。

一 たま〳〵湘夫人余を召すと聞き、行きて共に遊ばんとし 二 因て室を水中に築き、葺くに荷葉を以てせり

蓀壁兮紫壇。

(一)蓀の壁紫の壇。(二)芳椒を匊きて堂に盈て。桂の棟蘭の橑。辛夷の楣、葯の房。(三)薜

中。遺二余佩一兮澧浦。采二芳洲一兮杜若。將三以遺二兮下女一。旹不レ可二兮再得一。聊逍遙兮容與。

㊀ 既に湘君に見ゆるを得ざれば、自ら結飾するも益なきを知り、玦と佩とを江浦に棄てたり（玦は環状をなし、一方缺けたる玉なり、腰に佩ぶ）㊁ なは洲中に芳草杜若を採り、神の侍女に贈らんとせり ㊂ 神には再び見えがたし、しばらく逍遙して自ら慰む

帝子降二兮北渚一。目眇眇兮愁レ余。嫋嫋兮秋風。洞庭波兮木葉下。

登二白薠一兮騁レ望。與レ佳期兮夕張。鳥何萃二兮蘋中一。罾何爲二兮木上一。

湘夫人

帝子北渚に降る。㊀目眇眇として予を愁へしむ。㊁嫋嫋たる秋風。洞庭波たちて木葉下つ。

㊀ 女神湘夫人北渚に下れり、之を望めば渺然として遠く、人をして愁へしむ（湘夫人は帝堯の次女、湘君の妹なり、故に帝子といふ）㊁ 時に秋風吹きつゞき、洞庭湖に波たち、木葉淋しく落ち下る

㊀白薠に登りて望を騁せ。佳と期して夕に張るも。㊁鳥何ぞ蘋中に萃る。罾何ぞ木上に爲せる。

㊀ 白薠（水草の名）に登りて遥に望み、湘夫人を迎へんとし、夕に幃帳を張りて待つも（「白薠」朱子本に白蘋に作る）㊁ 木上に集るべき鳥の蘋中（水草）に集る如く、魚網を木の上に掛くる如く、神の來るは覺束なし

思君一兮悱惻。桂櫂兮蘭枻。斲ㇾ冰兮積ㇾ雪。采二薜荔兮水中一。搴二芙蓉兮木末一。心不ㇾ同兮媒勞。恩不ㇾ甚兮輕絕。石瀨兮淺淺。飛龍兮翩翩。交不ㇾ忠兮怨長。期不ㇾ信兮告ㇾ余以ㇾ不ㇾ閒。鼂騁二騖兮江皋一。夕弭二節兮北渚一。鳥次二兮屋上一。水周二兮堂下一。捐二余玦兮江

(一)桂の櫂蘭の枻。冰を斲りて雪を積む。(二)薜荔を水中に采り。芙蓉を木末に搴る。(三)心同からざれば媒勞し。恩甚しからざれば輕く絕ゆ。

㊀更に桂の櫂木蘭の枻を擧げ、氷雪を碎き雪を積みて神を迎へんとせしも ㊁陸生の薜荔を水に採り、水生の芙蓉を木に求むる如く、事は徒勞に終るのみ ㊂神意余と異り、侍女の媒も勞して功なく、恩情厚からず、ために輕々しく棄てらるゝなり

(一)石瀨淺淺たり。飛龍翩翩たり。(二)交忠ならざれば怨長く。(三)期信ならざれば余に告ぐるに閒あらざるを以てす。

㊀石瀨急にして我が舟進まず、飛龍疾く翔り、湘君北に去りぬ ㊁神に交るに心淺ければ、見るを得ずして怨深く ㊂神と約するに堅からざれば、神は相見るの暇なしといへり

(一)鼂に江皋に騁騖し。夕に節を北渚に弭む。(二)鳥屋上に次し。水堂下に周る。

㊀なほ湘君に見えんとし、朝に江皋に馳せ、夕に北渚に止る ㊁日暮れて鳥は屋上に棲み、水は堂下をめぐり淋しさに堪へがたし

(一)余が玦を江中に捐て。余が佩を澧の浦に遺つ。(二)芳洲に杜若を采りて。將に以て下女に遺らんとす。(三)旹再び得べからざれば。聊く逍遙して容與す。

猶。蹇誰留兮中洲。美要眇兮宜脩。沛吾乘兮桂舟。令沅湘兮無波。使江水兮安流。望夫君兮未來。吹參差兮誰思。

駕飛龍兮北征。邅吾道兮洞庭。薜荔拍兮蕙綢。蓀橈兮蘭旌。望涔陽兮極浦。横大江兮揚靈。揚靈兮未極。女嬋媛兮爲余太息。横流涕兮潺湲。隱

として吾桂舟に乘る。（五）沅湘をして波無からしめ。江水をして安流せしめん。夫の君を望めども未だ來らず。（六）參差を吹くは誰をか思ふ。

（一）祭を設け、巫に女神湘君を迎へしむるも、湘君ためらひて來らず（二）湘君は中洲にとゞまり、誰を待てるにや（三）美しき貌（四）余は桂の舟に乘り、行きて迎へ來らんとす（沛は行く貌）（五）沅湘の水に波なからしめ給へと湘君に祈る也、一説には江水を安流せしめ、神の來るを妨げざらしめんの意と解す（六）神はなほ來らず、因りて洞簫を吹くは慕ふ心の深きがためなり

（一）飛龍に駕して北に征く。邅つて吾洞庭に道し。（二）薜荔もて拍し蕙もて綢ね。蓀の橈蘭の旌。（三）涔陽を極浦に望めば。大江に横りて靈を揚ぐ。

（一）神は飛龍に駕して北に行けり、余また路を洞庭湖に轉じ（二）房を水中に構へ、薜荔にて壁を飾り、蕙にて壁を結び、蓀の橈、蘭の旗を具へ（三）遠く涔陽を望めば、湘君はすでに大江に横はつて、その威靈を揚げつゝある

（一）靈を揚げて未だ極らず。女嬋媛として余が爲に太息す。（二）横流する涕潺湲たり。君を隱み思うて陫側す。

（一）神は威靈を揚げてなほ止まず、その侍女、余がために太息し（二）余また涙を流し、君を思ひて憂へいためり（陫側は悱惻の意にて、痛み憂ふるをいふ）

昭兮未央。

蹇將憺兮壽宮。與日月兮齊光。龍駕兮帝服。聊翺遊兮周章。

靈皇皇兮既降。猋遠擧兮雲中。覽冀州兮有餘。横四海兮焉窮。思夫君兮太息。極勞心兮忡忡。

瑛(タマ)の假字、若し英と訓ず　㈢雲中君(雲の神)來りて祭場に止り、光明窮りなし(爛昭は長出の貌)

(一)蹇將に壽宮に憺んぜんとし。日月と光を齊しくし。(二)龍駕帝服。聊く翺遊して周章す。

㈠神、安んじて祭場に留り、日月と光をひとしくし　㈡龍車に駕し、天帝の如き盛服を著け、翺翔し周流し(あちらこちらに廻る)遊ぶ

(一)靈皇皇として既に降り、猋として遠く雲中に擧る。(二)冀州を覽て餘あり。四海に横りて焉んぞ窮らん。(三)夫の君を思うて太息し、極めて心を勞して忡忡たり。

㈠降り留りしも、飲食漸く畢き、忽ちまた雲中に歸りぬ(皇々は美しき貌)　㈡神は高處に居り、冀州(兩河の間)を望み見て更に他方に及び、四海に横行して極りなし　㈢神を思ひて太息し、心憂ふること深し

君不行兮夷

湘君

(一)君行らずして夷猶す。(二)蹇誰をか中洲に留てる。(三)美要眇として脩むるに宜し。(四)沛

瑤席兮玉瑱。盍將把兮瓊芳。蕙肴蒸兮蘭藉。奠桂酒兮椒漿。揚枹兮拊鼓。疏緩節兮安歌。陳竽瑟兮浩倡。靈偃蹇兮姣服。芳菲菲兮滿堂。五音紛兮繁會。君欣欣兮樂康。

浴蘭湯兮沐芳。華采衣兮若英。靈連蜷兮既留。爛昭

(一)瑤席玉瑱盍ぞ將に瓊芳を把らざる。(二)蕙肴を蘭藉に蒸め、桂酒と椒漿とを奠く。

(一) 美しき席に玉のおもしを置き、巫は香しき枝を把りて舞ふ (二) 蕙草にて肴の肉をつゝみ、蘭の葉を敷物とし、桂を切りて混ぜし酒と椒の葉を浸せる漿とを置く

枹を揚げて鼓を拊ち。(一)節を疏緩にして安に歌ひ。竽瑟を陳ねて浩に倡ふ。(二)靈偃蹇として姣服し。芳菲菲として堂に滿ち。(三)五音紛として繁く會すれば。君欣欣として樂康す。

(一) 節緩かに歌ひ、竽(笙の類)と瑟とを列ねて大いに奏づ (二) 巫、美服して舞ひ、芬芳堂に滿ち (三) 宮商角徵羽の五音盛に響けば、東皇太一の神欣びたのしむ

雲中君

(一)蘭湯に浴して芳に沐し。華采の衣若の英。(二)靈連蜷として既に留り。爛昭昭として未だ央きず。

(一) 靈祭を修めて雲神に事へんとし、芳蘭の湯に沐浴し、五彩の衣を著け、香草杜若の英(はな)を飾とす。一説巫は

吉日兮辰良。穆將愉兮上皇。撫長劍兮玉珥。璆鏘鳴兮琳琅。

卷之二

九歌第二

（王）九歌は屈原の作りし所なり。昔楚國南郢の邑、沅湘の間、其俗鬼を信じて祀を好む。其祠る必ず歌樂鼓舞を作し、以て諸神を樂ましむ。屈原放逐せられて、其域に竄伏し、憂を懷き毒に苦み、愁思怫鬱、出でて俗人祭祀の禮、歌舞の樂を見るに、其詞鄙陋なり。因つて爲に九歌の曲を作り、上は神に事ふるの敬を陳べ、下は以て己の冤結を見はし、之に託して以て風諫す。故に其文意同じからず、章句雜錯し、異義を廣む。

東皇太一

（一）吉日辰良。穆みて將に上皇を愉ましめんとす。（二）長劍の玉珥を撫すれば。璆鏘として琳琅鳴る。

㊀よき日を擇み東皇太一の神を樂ましめんとし、祭を行ふ　㊁長劍を撫し、佩玉を鳴らして事に從ふ（珥は劍のつば、琳琅は美玉の名、璆鏘は玉の鳴る聲なり）

陟陞皇之赫戲兮。忽臨睨夫舊郷。僕夫悲余馬懷兮。蜷局顧而不行。

亂曰。已矣哉國無人莫我知兮。又何懷乎故都。既莫足與爲美政兮。吾將從彭咸之所居。

皇の赫戲たるに陟陞し。忽ち夫の舊郷を臨睨すれば。(一)僕夫は悲み余が馬は懷ひ。蜷局して顧みて行かず。

(一) 光明赫々たる天に上り、忽ち故郷の楚を俯瞰すれば (二) 僕は悲しみ馬は歸らんことを思ひ、皆身をかゞめ顧みて進まず

亂に曰く。(一)已んぬるかな國に人なし我を知る莫し。又何ぞ故都を懷はん。既に與に美政を爲すに足る莫し。(二)吾將に彭咸の居る所に從はんとす。(三)

(一) 一篇の結末に於て、その要を述べ意のある所を明にする詞（奏樂の終りに衆聲を變じ、亂調を奏して耳に快からしむるもの、之を亂と稱するに依る） (二) 楚國に人なく、我を知るものなし。朱子本「已矣哉國無人兮」とあり (三) 彭咸の跡を慕ひ、水に入りて死せんとす。岡本要谷・考には、居る所は猶は安ずる所と言ふがごとし、彭咸の道とする所以に循ひて自ら居らんとする意、必ずしも彭咸水に沈めるが故に、已亦之に從つて死し、水中に居らんとの意には非ずと論ぜり。

詔二西皇一使レ渉レ予。

路修遠以多レ艱兮。騰二衆車一使二徑待一。路二不周一以左轉兮。指二西海一以爲レ期。

屯二余車一其千乘兮。齊二玉軑一而並馳。駕二八龍之婉婉一兮。載二雲旗之委蛇一。

抑レ志而弭レ節兮。神高馳之邈邈。奏二九歌一而舞レ韶兮。聊暇レ日以媮樂。

（少皞）を招きて告げ、余を渡さしむ

(一)路修遠にして以て艱多ければ。衆車を騰げて徑に待たしめ。(二)不周に路して以て左に轉じ。西海を指して以て期となす。

(一)長途困難なる故に、衆車をして路にとゞまつて我を待たしめ。朱子本「騰二衆車一使二徑路待一不周以左轉兮」に作る (二)崑崙山の西北なる不周山より左に轉じ、西海の上にて會せんとす

(一)余が車を屯むる其れ千乘。玉軑を齊しくして並び馳す。(二)八龍の蜿蜿たるに駕し。雲旗の委蛇たるを載つ。

(一)余が車千乘をあつめ、玉の軑（くさび）を並べて馳す (二)八龍のうねり走るに乘り、雲霓の旗の長く垂れ動くを立つ

(一)志を抑へて節を弭むるも。神は高く馳せて邈邈たり。(二)九歌を奏して韶を舞ひ。(三)聊く日を暇りて以て媮樂す。

(一)心を抑へてしづかに行かんとするも精神高くはるかに西海に馳す (二)九德の歌（禹の樂章）を奏し、九韶（舜の樂）を舞ひ、假に日月を延して中心の愁を遣る。「暇」朱子本「假」に作るに從ふべし

之可レ同兮。吾將ニ遠逝以自疏。

(一)飛龍を余が車に駕し、美玉と象牙とを雜へ、車の飾りとす　(二)賢愚は心を同じうし難く上下我と同心なるなし　(三)遠く去りて禍を避けんとす

邅吾道ニ夫崑崙ー兮路修遠以周流。揚ニ雲霓之晻藹ー兮。鳴ニ玉鸞之啾啾。

邅りて吾夫の崑崙に道す。路修遠にして以て周流す。(二)雲霓の晻藹たるを揚げ。玉鸞の啾啾たるを鳴らす。

(一)轉じて崑崙山(高さ一萬一千里、上に瓊玉の樹ありと云)に登り、長途を周遊す　(二)雲霓のかげりたるを披き車の玉鈴を鳴らして進む(晻藹はかげる貌、「揚」を朱註には旂とする者といへり啾々は鈴の音なり)

朝發ニ軔於天津ー兮。夕余至ニ乎西極。鳳皇翼其承レ旂兮。高翺翔之翼翼。

(一)朝に軔を天津に發し。夕に余西極に至る。(二)鳳皇翼んで其れ旂に承ぎ。高く翺翔して翼翼たり。

(一)朝に車を天津(天の東津、萬物の生ずるところ)に發し、夕に地の西極(萬物の成るところ)に到る　(二)鳳凰、旗につぎ、高く翼を張りて翔ける。

忽吾行ニ此流沙ー兮。遵ニ赤水ー而容與。麾ニ蛟龍ー以梁レ津兮。

忽ち吾此の(一)流沙に行き。(二)赤水に遵ひて(三)容與し。(四)蛟龍を麾いて以て津に梁たらしめ。西皇に詔げて予を渉さしむ。

(一)水の如く沙の流るゝ地、西方の沙漠　(二)崑崙山より出づる川　(三)遊戲する貌　(四)蛟龍を橋とし、西帝

貴兮。委二厥美一而歷レ茲。芳菲菲而難レ虧兮。芬至レ今猶未レ沬。

和二調度一以自娛兮。聊浮游而求レ女。及二余飾之方壯一兮。周流觀二乎上下一。

靈氛既告レ余以二吉占一兮。歷二吉日一乎吾將レ行。折二瓊枝一以爲レ羞兮。精二瓊爢一以爲レ粻。

爲レ余駕二飛龍一兮。雜二瑤象一以爲レ車。何離心

く。芬は今に至るも猶ほ未だ沬まず。（三）

㊀余に貴ぶべき美質あり、君棄てて今この苦境に遇ふも ㊁その香は今に至るもなほ失はず ㊂已也。一說に昧に通じ、クラカラズと訓ず

（一）調度を和して以て自ら娯み。聊く浮游して女を求めん。（二）余が飾の方に壯なるに及びて。周流して上下を觀ん。

㊀法度を守りて自ら樂み、以て同志を求めんとす ㊁年のなほ老いざる中に、四方上下を周遊すべし

靈氛既に余に告ぐるに吉占を以てせり。吉日を歷びて吾將に行かんとす。（一）瓊枝を折りて以て（二）羞となし。（三）瓊爢を精げて以て粻となさん。

㊀以下二句飲食の芳潔なるをいふ ㊁食膳 ㊂玉の屑

（一）余が爲に飛龍を駕し。瑤象を雜へて以て車と爲す。何ぞ（二）離心の同じかるべけん。（三）吾將に遠く逝きて以て自ら疏くせんとす。

也。余以レ蘭爲レ可レ恃兮。羌無レ實而容長。委二厥美一以從レ俗兮。苟得レ列二乎衆芳一。椒專佞以慢慆兮。樧又欲レ充二夫佩幃一。既干レ進而務レ入兮。又何芳之能祗。固時俗之從流兮。又孰能無二變化一。覽二椒蘭其若レ玆兮。又況揭車與二江離一。惟玆佩其可レ

(一)余蘭を以て恃むべしと爲ししに、羌實なくして容のみ長し。(二)厥の美を委てて以て俗に從ひ、苟に衆芳に列することを得んとす。

㊀余は、蘭（懷王の少弟、司馬子蘭）を恃むべしと思ひしも、蘭は内に誠實なく、外貌のみ長大なり ㊁蘭はその美質を委てて俗に化し、徒に衆賢高位の列に加はらんとせり

(一)椒は專ら佞して以て慢慆なり。樧は又夫の佩幃に充てんと欲す。(二)既に進むを干めて入らんことを務むれば、又何ぞ芳をこれ能く祗まんや。

㊀芳しき椒は邪佞に化し、臭き樧は香嚢に盛られんとせり ㊁皆皆進んで容れられんことを求む、何ぞその芳ばしき節操をつゝしむものあらん

(一)固より時俗の從流する。又孰か能く變化することなからん。(二)椒蘭を覽るに其れ玆の若し。又況んや揭車と江離とをや。

㊀人々みな邪道に從ひ、俗を變じ行を改めざるものなし。朱子本「流從」に作る ㊁椒蘭（賢人に喩ふ）すらなほ此の如し、況んや之に次ぐ揭車江離（共に香草にして椒蘭より劣れるもの）の類は言ふに及ばず

(一)惟玆の佩の其れ貴ぶべき。(二)厥の美を委てて玆に歴ふも。(三)芳は菲菲として虧け難

其未央。恐鵜鴃之先鳴兮。使夫百草為之不芳。何瓊佩之偃蹇兮。衆薆然而蔽之。惟此黨人之不諒兮。恐嫉妬而折之。時繽紛以變易兮。又何可以淹留。蘭芷變而不芳兮。荃蕙化而為茅。何昔日之芳草兮。今直為此蕭艾也。豈其有他故兮。莫好修之害。

て。夫の百草をして之が為に芳しからざらしむるを恐る。

(一)年老いず、時も去らざる中に賢者を求めよ (二)鵜鴃(悲鳴の鳥)の鳴くべき時(春分)に先ちて鳴きて百草の枯るゝを恐れよと、(讒言先づ至り、忠直の士をして罪過を蒙らしむるに喩ふ。巫咸の言こゝに終る)

(一)何ぞ瓊佩の偃蹇たる。衆薆然として之を蔽ふ。(二)惟此の黨人の諒ならざる。恐らくは嫉妬して之を折かんことを。

(一)吾、瓊玉の美なるを佩ぶるも、衆人蔽ひて顯はれしめず (二)黨人忠信ならず、我正直を嫉妬して我を毀折せんことを恐る

(一)時繽紛として以て變易せり。又何ぞ以て淹留すべけんや。(二)蘭芷も變じて芳しからず。荃蕙も化して茅と為りぬ。

(一)世態人情日に亂れたり、久しく留まるを得ず (二)香草も茅(惡草)となりぬ、(正士と頼みし人も俗人となりたるに喩ふ)

何ぞ昔日の芳草。今は直に此の蕭艾(一)と為れるや。豈に其れ他の故あらんや。(二)好修を之れ害へるがためたる莫からんや。

(一)賤しき草の名(不肖に喩ふ) (二)其理由は他なし、好みて自ら修養する者、往々禍害にかゝり、節を變じ俗に徇へば禍なきにあるのみ

曰勉升降以上下兮。求二榘矱之所一レ同。湯禹儼而求レ合兮。摯咎繇而能調。

苟中情其好修兮。又何必用二夫行媒一。說操二築於傅巖一兮。武丁用而不レ疑。

呂望之鼓レ刀兮。遭二周文一而得レ舉。甯戚之謳歌兮。齊桓聞以該レ輔。

及二年歲之未一レ晏兮。時亦猶

(一)曰く勉めて升降して以て上下し。榘矱の同じき所を求めよ。(二)湯禹儼みて合はんことを求め。摯咎繇にして能く調へり。

一 巫咸の神占にいふ、天地に上下し、己と法度を同じうするものを求めよ　二 湯禹は儼みて己と合はん者を求め、摯(伊尹、湯の臣となる)咎繇(皐陶、禹の臣となる)の如き者を得て、君臣和合せり

(一)苟に中情其れ好修せば。又何ぞ必ずしも夫の行媒を用ひん。(二)說傅巖に操築せしも。武丁用ひて疑はざりき。

一 心に誠に善を好まば、往來して媒介する者(左右の推薦に喩ふ)を求むる要なし　二 傅說は版築を操り傅巖に築きしも、武丁用ひて信任したりき

(一)呂望の刀を鼓せる。周文に遭ひて舉げらるゝことを得たり。(二)甯戚の謳歌せる。齊桓聞きて以て輔に該へき。

一 太公望呂尙は刀を振りならして屠販を業とせしも、周の文王に用ひらる　二 甯戚は牛角を叩きて不遇を歎ぜしも、齊の桓公舉げて輔相とせり

(一)年歲の未だ晏れずして。時も亦猶は其れ未だ央きざるに及べ。(二)鵜鴃の先づ鳴き

服艾以盈要兮。謂幽蘭其不可佩。覽察草木其猶未得兮。豈珵美之能當。蘇糞壤以充幃兮。謂申椒其不芳。欲從靈氛之吉占兮。心猶豫而狐疑。巫咸將夕降兮。懷椒糈而要之。百神翳其備降兮。九疑繽其並迎。皇剡剡其揚靈兮。告余以吉故。

(一) 好惡は人によりて異るも、楚の黨人は殊に甚し (二) 楚國にては戸ごとに白蒿(香草に非ざるもの)を腰に充て香ばしき蘭をば却りて佩ぶべからずといふなり(佞人を親しみ、忠臣を遠くるに喩ふ)

(一)草木を覽察するに其れ猶ほ未だ得ず。豈珵の美なるも能く當らんや。(二)糞壤を蘇つて以て幃に充て。申椒を其れ芳しからずと謂へり。

(一) 草木を見るも其香臭を辨へず、いかでか玉の美惡を知らんや (二) 臭き糞土を取りて香囊に充て、申椒を香しからずといへり(小人を近づけ君子を遠くるに喩ふ)

(一)靈氛の吉占に從はんと欲するも。心猶豫して狐疑す。(二)巫咸將に夕に降らんとす。椒精を懷きて之を要せん。

(一) 靈氛の吉占に從ひ、楚を去らんとするも、心猶は疑ひて決せず (二) 神巫巫咸、將に夕に天上より來り下らんとす、因りて供薦の香物精米を備へて之を迎へ、更にそをして吉凶を占はしめん

(一)百神翳ひて其れ備に降り。九疑繽として其れ並び迎ふ。(二)皇剡剡として其れ靈を揚げ。余に告ぐるに吉なる故を以てす。

(一) 諸神日を蔽ひて降り、昇、九疑山の神々をして、翠り來りて余を迎へしむ。「九疑」朱子本「九疑」に作る (二) 百神その靈光を揚げ、余に吉占を告げ、當に去つて吉擇を就すべき所以を告ぐ

篿兮。命靈氛爲余占之。曰兩美其必合兮。孰信修而慕之。思九州之博大兮。豈惟是其有女。曰勉遠逝而無狐疑兮。孰求美而釋女。何所獨無芳草兮。爾何懷乎故宇。世幽昧以眩曜兮。孰云察余之善惡。民好惡其不同兮。惟此黨人其獨異。戸

ず合はんも。孰か修を信じて之を慕はん。

㊀ 瓊草と小折竹とを執り、古の卜者靈氛に占はしむ、（楚人は占に筳草と折竹とを用ひ、篿といふ、筳は小折竹） ㊁ 靈氛いふ、男女倶に美、君臣共に賢ならば、相合はざる理なきも、今は世俗亂れ、君の賢潔を慕ふものなし

(一)思ふに九州の博大なる。豈惟だ是にのみ其れ女あらんや。(二)曰く勉めて遠く逝きて狐疑する無れ。孰か美を求めて女を釋てんや。

㊀ 天下は廣大なり、たゞ楚にのみ美女あるにあらず ㊁ 靈氛辭端を改めて又いふ、遠く行き求めて疑ふことなかれ、美女、賢夫を求めつゝあれば、君をすておくべき道理なし

(一)何の所にか獨り芳草無からん。爾何ぞ故宇を懷へる。(二)世幽昧にして以て眩曜す。孰か云に余の善惡を察せん。

㊀ 芳草はいづこにもあり、故居をのみ思ふべきにあらずと（以上靈氛の語） ㊁ 因つて自ら思ふに、世道暗くして人心亂れ、余の善惡を知るものなし、何處に行くとも合ふ所なかるべしと

(一)民の好惡は其れ同じからず。惟だ此の黨人のみ其れ獨り異なり。(二)戸ごとに艾を服して以て要に盈つ。幽蘭をば其れ佩ぶべからずと謂へり。

既受レ詒兮。恐高辛之先レ我。欲二遠集一而無レ所レ止兮。聊浮遊以逍遙。及二少康之未一レ家兮。留有虞之二姚一。理弱而媒拙兮。恐二導言之不一レ固。世溷濁而嫉レ賢兮。好蔽レ善而稱レ惡。閨中既邃遠兮。哲王又不レ寤。懷二朕情一而不レ發兮。余焉能忍與レ此終古。索三藑茅以二筳

㈠ 媒とするに足るものなくして中心ためらひ疑ふ、自ら往かんとするも禮に於て又不可なり ㈡ 鳳凰既に高辛氏（帝嚳）の使となり、幣帛を受けて簡狄を求めんとす ㈢ 余は恐らくは高辛氏に先だたるべし

（一）遠く集らんと欲すれば止る所なし。聊く浮遊して以て逍遙す。（二）少康の未だ家せざるに及びて。有虞の二姚を留めん。

㈠ 遠く他方に往き、美女を求めんとするもなほ之く所を知らず、しばらく遊戯觀望して其憂を忘る ㈡ 夏の后少康の未だ娶らざる前に、姚姓の二女を求めんとす（寒浞が澆をして夏后相を殺さしめし時、相の子少康有虞に奔る、虞は妻すに二女を以てせり）

（一）理弱りて媒拙し。導言の固らざるを恐る。世溷濁にして賢を嫉み。好みて善を（二）蔽うて惡を稱ぐ。

㈠ 我が詞理少康に劣り、媒も拙ければ、わが言意を通ずることの堅からざるを恐る ㈡ 朱子本「美」に作る

（一）閨中既に邃遠なり。哲王又寤めず。（二）朕が情を懷きて發せしめず。（三）余焉んぞ能く忍びて此と終古せん。

㈠ 閨中深くして忠言を進め難く、明王は永く夢より覺めず。朱子本「既」の下に「以」の一字あり ㈡ われ忠信の情を抱くも、あらはすを得ざらしむ ㈢ かゝる心亂れし君に事へ、終りを共にするに忍びず

（一）藑茅と筳篿とを索り。靈氛に命じて余の爲めに之を占はしむ。（二）曰く兩美其れ必

敖兮。日康娛以淫遊。雖信美而無禮兮。來違棄而改求。

覽相觀於四極兮。周流乎天余乃下。望瑤臺之偃蹇兮。見有娀之佚女。

吾令鴆爲媒兮。鴆告余以不好。雄鳩之鳴逝兮。余猶惡其佻巧。

心猶豫而狐疑兮。欲自適而不可。鳳皇

し。(二)來れ違棄して改め求めん。

● 宓妃、其美貌を恃みて驕り、日に淫遊を事として禮なし ● 汝來らんとせば來れ、我は汝を棄てゝ他に美女を求めん

(一)四極を覽相觀し。天に周流して余乃ち下る。(二)瑤臺の偃蹇なるを望み。有娀の佚女を見る。

● 四方極遠の地に遊び天までもはりつくししも、己の心に適するものなし、因てまた地上に還り下る ● 即ち瑤臺の高きを望み、有娀國の美女（帝嚳の妃簡狄）を見たり

(一)吾鴆をして媒を爲さしむ。鴆余に告ぐるに好からざるを以てす。(二)雄鳩の鳴きて逝く。余猶ほ其の佻巧なるを惡む。

● 毒鳥鴆を媒とし、我が意を通ぜしめしに、鴆は詐りて余に好からずと告げたり ● 更に雄鳩に命じ、鳴き往かしめんとするに、かれ輕佻にして實意なく、われ猶ほ信じて往かしめ難し

(一)心猶豫して狐疑し。自ら適かんと欲するも不可なり。(二)鳳皇既に詒を受く。(三)恐らくは高辛の我に先たんことを。

無㆑女。

溘吾遊㆓此春宮㆒兮。折㆓瓊枝㆒以繼㆑佩。及㆓榮華之未㆑落兮。相㆓下女之可㆑詒。

吾令㆓豐隆乘㆑雲兮。求㆓宓妃之所㆑在。解㆓佩纕㆒以結㆑言兮。吾令㆓蹇修以爲㆑理。

紛總總其離合兮。忽緯繣其難㆑遷。夕歸次㆓於窮石㆒兮。朝濯㆓髮乎洧盤㆒。

保㆓厥美㆒以驕

反顧する也)

(一)溘として吾此の春宮に遊び。瓊枝を折りて以て佩に繼ぎ。(二)榮華の未だ落ちざるに及び。下女の詒るべきを相る。

(一)忽ち捨て去りて東方靑帝の宮に遊び、瓊枝を折り佩につなぎていよ〱益々長くして美ならしめ (二)顏色のまだ衰へざる中に慇懃を神女に通ぜんとし、媒となるべき侍女を求む(下女は神女の侍女、詒は遺也、瓊枝の佩をおくる意)

吾(一)豐隆をして雲に乘り。(二)宓妃の在す所を求めしむ。(三)佩纕を解きて以て言を結び。吾蹇修をして以て理と爲さしむ。

(一)雷神 (二)神女也。朱說には、伏羲氏の女にて洧水に溺れて死し、遂に河神となりしといふ。(「宓」朱子本「虙」に作る) (三)おびを解きて言を結び蹇修(伏羲氏の臣)をして媒をなさしむ(言を結ぶとは、媒介を賴むしるしとする意ならん)

(一)紛總總として其れ離合し。忽ち(二)緯繣して其れ遷し難し。夕に歸りて(三)窮石に次し。朝に髮を(四)洧盤に濯ふ。

(一)讒人集りて謗り、吾が言意徹せんとして徹せず、遂に乖戾して拒み斥けらる (二)そむきもとる意 (三)弱水の源をなす山 (四)崦嵫山より出づる川(歡を神女に求めんとして拒まれ、身汚れたるを悔ひ洗ひ濯むる也)

(一)厥の美を保ちて以て驕傲し。日に康娛して以て淫遊す。信に美なりと雖も禮無

日夜。飄風屯其相離兮。率雲霓而來御。紛總總其離合兮。斑陸離其上下。吾令帝閽開關兮。倚閶闔而望予。時曖曖其將罷兮。結幽蘭而延佇。世溷濁而不分兮。好蔽美而嫉妬。朝吾將濟於白水兮。登閬風而緤馬。忽反顧以流涕兮。哀高丘之

雲霓を率ゐて來り御ふ。

(一) 飄風を飛ばせ、日夜相繼ぎて進ましむ (二) 飄風の集り至るに遇ひ分散して去り、尋いで虹霓を率ゐて來りて、我を迎ふ

(一)紛總總として其れ離合し。斑陸離として其れ上下す。(二)吾帝閽をして關を開かしむ。閶闔に倚りて予を望めり。

(一) 盛に集り、入り亂れつゝ上下す。(上の二句、雲霓を率ゐて來迎する者の衆多大なるを形容す) (二) 天門を司る閽神をして門を開かしめ、入りて天帝に謁せんとするに、閽人天門に倚して我を睨み拒ぎて入らしめず (閶闔の著には、天門に倚り、自ら身を顧みて敢て速かに進み入らずの義とせり)

(一)時曖曖として其れ將に罷らんとす。(二)幽蘭を結びて以て延佇す。(三)世溷濁して分れず。好みて美を蔽うて嫉妬す。

(一) 時暗くして日暮れんとす (二) 幽蘭を結びて天帝に獻ぜんとし、又ためらひてたゝずむ (三) 世濁りて善惡分れず、人の美を蔽ひ嫉妬の心を懷く、天帝の左右にも、斯る邪神なしといひ喩し

朝に吾將に白水を濟り。(二)閬風に登りて馬を緤がんとし。(三)忽ち反顧して以て流涕し。高丘の女無きを哀む。

(一) 崑崙山より出で、之を飲めば死なずといふ水 (二) 崑崙山の上にありといふ神山 (三) 半途忽ち顧望流涕して閬風山にも女なからんを哀む (女は賢し臣一　君に喩ふ、既に賢女なし、世西の方閬風に至る　女あらんとて

吾令下羲和弭レ節兮。望二崦嵫一而未レ迫。路曼曼其脩遠兮。吾將二上下而求索一。

飲二余馬於咸池一兮。揔二余轡乎扶桑一。折二若木一以拂レ日兮。聊逍遙以相羊。

前二望舒一使二先驅一兮。後二飛廉一使二奔屬一。鸞皇爲レ余先戒兮。雷師告レ余以レ未レ具。

吾令二鳳凰飛騰一兮。繼レ之以二

(一)吾羲和をして節を弭め。崦嵫を望みて未だ迫らざらしむ。(二)路曼曼として其れ脩遠なり。吾將に上下して求索せんとす。

(一)羲和(日輪の御者)をして徐に行かしめ、崦嵫(日の入る所の山)に近づくことなからしむ (二)路は遠くして且長し。吾は將に上下に遊び、賢君を求めて遇はんとするなり

(一)余が馬に咸池に飲ひ。余が轡を扶桑に揔ぶ。(二)若木を折りて以て日を拂ち。聊く逍遙して以て相羊す。

(一)余が馬に咸池(日の浴する處)にみづかひ、轡を扶桑(靈木の名、日その下より出づ)に攬りて馬を駐む (二)若木(崑崙山の西極なる靈木、其花下土を照す)を折りて日をうち、速行するなからしめ、暫く遊歩して樂む(相羊は逍遙に同じ、重言する也)

(一)望舒を前にして先驅せしめ。飛廉を後にして奔屬せしむ。(二)鸞皇余が爲に先づ戒め。雷師余に告ぐるに未だ具らざるを以てす。

(一)月の御者を前驅として風の神を後從とし奔らす (二)鳳凰我が行をとゞめ、雷霆は隨從なほ備はらずと告ぐ

(一)吾鳳凰をして飛騰せしめ。之に繼ぐに日夜を以てす。(二)飄風屯りて其れ相離れ。

不量鑿而正枘兮。固前修以菹醢。曾歔欷余鬱邑兮。哀朕時之不當。攬茹蕙以掩涕兮。霑余襟之浪浪。跪敷衽以陳辭兮。耿吾既得此中正。駟玉虬以乘鷖兮。溘埃風余上征。朝發軔於蒼梧兮。夕余至乎縣圃。欲少留此靈瑣兮。日忽忽其將暮。

(一) 己れ言を正しうし行を危うし、身將に死せんとするも、初め心に尚す所以を觀、そのまゝに行ひて悔いず（「危死」を朱子本「阽死」に作り阽は死と註す、蘭谷の考に「死節」に作るべしといふ） (二) 鑿の圓なるを量らずして枘を方にする如く、臣として君の賢愚を量らず只一途に忠誠を竭さんとするは、これ前代の君子比干梅伯も、醢にしゝびしほにせられたる所以也

曾て歔欷して余鬱邑し。朕が時の當らざるを哀む。(一)茹蕙を攬りて以て涕を掩へば。余が襟を霑して浪浪たり。(二)

(一) 累りにすゝり泣きし、心鬱ひ結ぼれてよき時節に遇はざるを悲む (二) 茹蕙（柔き香草）を取りて涙を拭へど涙は襟を霑して止まず

跪きて衽を敷きて以て辭を陳ぶ。耿かに吾既に此の中正を得たり。(一)玉虬を駟にして以て鷖に乘り。埃風に溘として余上征す。(二)

(一) 跪きて衣裾を地に敷き、以上の辭を舜帝に述べ終れば、吾心あきらかに中正を得、天と通ずる心地す (二) 乃ち玉虬（龍の角なきもの）に乘り、鳳車に駕し、忽として埃風（塵を捲き上ぐる風）に御して天に昇る

朝に軔を蒼梧に發し。夕に余縣圃に至る。(一)少く此の靈瑣に留らんと欲すれば。日忽忽として其れ將に暮れんとす。(二)

(一) 朝に車を蒼梧の野（舜を葬れる地）に發し、夕に崑崙山・神山縣圃に至る (二) 暫く神靈の門に留らんとすれば日は早く暮れんとせり（暗に楚王の宮闕に留り以て政を輔けたき身は衰老に及べりとの意を寓す）

而莫レ差。擧二賢才一而授レ能兮。修二繩墨一而不レ頗。

皇天無二私阿一兮。覽二民德一焉錯レ輔。夫維聖哲以茂行兮。苟得レ用二此下土一。

瞻レ前而顧レ後兮。相二觀民之計一極。夫孰非レ義而可レ用兮。孰非レ善而可レ服。

阽二余身一而危死レ節兮。覽二余初一其猶未レ悔。

墨を修めて頗せず。

(一) 湯王禹王は天を畏れ賢を敬ひ、周の文王常に道德を講論して過ちなかりき（「嚴」の字朱子本「儼」に作る從ふべし） (二) よく賢能の士を用ひ、先王の法度に從ひて傾失することなかりき（「修」の字朱子本「循」に作る、從ふべし）

(一)皇天は私阿なし。民の德を覽て焉に輔を錯く。(二)夫れ維れ聖哲の以て茂行なる。苟に此の下土を用ふることを得。

(一) 天には私なく、萬民の中、盛德あるものを見て王とし、賢能の士に輔佐せしむ (二) 聖哲にして德行の盛なるもの、よく天下を有つことを得

(一)前を瞻て後を顧み。民の計を相觀して極むるに。(二)夫れ孰か義に非ずして用ふべき。孰か善に非ずして服すべき。

(一) 古今帝王の事跡を見、萬民忠佞の情を察し、つゞまる所を考ふるに (二) 孰れか不義の人にして用ふべきあらん、不善の人にして服事すべきものあらん（人、義に非ざれば德立たず、善に非ざれば行成らずと也）

(一)余が身を阽うして危ど節に死するも。余が初を覽て其れ猶ほ未だ悔いず。(二)鑿を量らずして枘を正しくす。固に前修以て葅醢せられぬ。

羿淫遊以佚田兮。又好射ニ夫封狐一。固亂流其鮮レ終兮。浞又貪ニ夫厥家一。
澆身被ニ服強圉一兮。縱レ欲殺而不レ忍。日康娛以自忘兮。厥首用夫顚隕。
夏桀之常違兮。乃遂焉而逢レ殃。后辛之菹醢兮。殷宗用之不レ長。
湯禹儼而祇敬兮。周論レ道

(一)羿淫遊して以て佚田し。又好みて夫の封狐を射る。(二)固に亂流にして其れ終ること鮮し。浞又夫の厥の家を貪れり。

㊀ 有窮の君夏の諸侯たる羿は田獵に耽り、大狐を射て天の戒を犯し以て其國を亡ぼせり ㊁ 行亂れて終を善くするものなし、羿の臣寒浞またその妻を奪へり、（羿、獵して歸る時、寒浞其臣逢蒙をして之を射殺せしめ、又その妻を奪へり、家は妻也）

(一)澆は身強圉を被服し。欲を縱にして殺して忍びず。日に康娛して以て自ら忘れ。(二)厥の首用つて夫れ顚隕せり。

㊀ 寒浞の子澆、多力にして慾を縱にし、其慾を忍ばずして夏后相を殺し安居して日々淫樂を作し其過惡を忘れたり（朱子本は「殺」の一字なくこれ有るは不可といへり）㊁ 卒に相の子少康に誅せられ、その首、地に墮ちたり

(一)夏桀の常に違へる。乃ち遂に焉にして殃に逢ふ。(二)后辛の菹醢にせる。殷の宗之を用つて長からず。

㊀ 夏の桀王は上、天道に背き、下、人理に逆ひ、乃ち遂に以て禍に逢へり ㊁ 殷の紂王（名は辛）は比干を殺し梅伯をしゝびしほにし、殷の王統、之が爲に長からず、武王に誅滅せられたり

(一)湯禹は儼れて祇み敬ひ。周は道を論じて差莫く。(二)賢才を擧げ能に授け。繩

兮。判獨離而不服。
衆不可戶說兮。孰云察余之中情。世並擧而好朋兮。夫何煢獨而不予聽。
依前聖以節中兮。喟憑心而歷茲。濟沅湘以南征兮。就重華而敶詞。
啓九辯與九歌兮。夏康娛以自縱。不顧難以圖後兮。五子用失乎家巷。

りそれとかけ離れて潔白を守るは何ぞ（薋菉葹は皆惡草、小人に喩ふ。人皆此惡草を佩ぶるに汝獨り服せざるは何ぞと也）

衆は戸ごとに說くべからず。孰か云に余の中情を察せん。世は並び擧つて朋を好む。夫れ何ぞ煢獨にして予に聽かんや。

㊀（屈原いふ）衆人には戸ごとに說き人每に告ぐべからず、故に余の中情を知るものなし ㊁ 世人皆好んで朋黨をなすにわれは卽ち孤獨なり何ぞ肯て余の言を聽き容れんや（不予聽の「不」字は衍といふ說に從ふ）

前聖に依りて以て節中せん。喟心に憑ちて茲を歷。沅湘を濟りて以て南に征き。重華に就きて詞を敶べん。

㊀ 余は歎きつゝこの苦境を歷たるに、今又姉に罵られ、從ふ所を知らず、故に先哲に依りて善惡の疑を正さんとす ㊁ 依て舜帝に見え、思ふ所を述べんとするなり（舜は沅湘の南九疑山に葬る、重華は舜の名なり）

啓に九辯と九歌とあり。夏康は娛みて以て自ら縱にし。難を顧み以て後を圖らず。五子用て家巷に失へり。

㊀（以下舜帝に見え、思を述ぶる詞）禹の子啓、よく父王禹の後を繼ぎ、九辯九歌の樂章を作り、治教を闡みたり ㊁ 啓の子夏王太康、情慾を縱にして以て自ら娛樂し、患難を思はず後圖をなさざりしかば、遂に國を亡し、兄弟五人尊位を失ひて閭巷に居るに至れり

乎四荒。佩繽紛其繁飾兮。芳菲菲其彌章。

民生各有所樂兮。余獨好修以爲常。雖體解吾猶未變兮。非余心之可懲。

女嬃之嬋媛兮。申申其詈予。曰鯀婞直以亡身兮。終然殀乎羽之野。

汝何博謇而好修兮。紛獨有此姱節。薋菉葹以盈室。

れ繁飾し、芳菲菲として其れ彌々章なり。

(一) 忽ちふりかへりて遠に眺め、將に四方絶遠の國に遊び一たび賢君を求めんとす (二) 因て佩服を盛にし、志意を修潔して德譽いよく明かなり（菲々は勃々といふに同じ）

(一)民生各々樂ふ所あり。余獨り好修以て常となす。(二)體解せらると雖も吾猶は未だ變ぜず。余が心の懲るべきにあらず。

(一) 人各々好む所あり、我獨り好みて正直を修めと常行とす (二) 罪戮さるゝも、變りて心を更ふることなし。（原文余心の「非」一に「豈」に作る）

(一)女嬃の嬋媛たる、申申として其れ予を詈る。(二)曰く鯀は婞直にして以て身を亡し。終然として羽の野に殀せり。

(一) 姉の女嬃はなつかしげに余を引き留め、丁寧反覆余を罵りていふ (二) 堯の臣、顓頊五世の孫、鯀は、洪水を治めて堯の命に順はず、羽山に殛せられて死せり（婞は狠に同じ、もとると訓ず、狷介自ら用ふる也）

(一)汝何ぞ博謇にして好修し。紛として獨り此の姱節ある。(二)薋と菉と葹と以て室に盈てるに。判として獨離れて服せざると。

(一) 汝何故に博く直くして修潔を好み、獨り衆と異なりて節操を正しくするぞ (二) 小人のみ朝に滿ちたるに、など

歩二余馬於蘭皐一兮。馳二椒丘一且焉止息。進不レ入以離レ尤兮。退將三復修二吾初服一。製二芰荷一以爲レ衣兮。集二芙蓉一以爲レ裳。不二吾知一其亦已兮。苟余情其信芳。高二余冠之岌岌一兮。長二余佩之陸離一。芳與レ澤其雜糅兮。唯昭質其猶未レ虧。忽反顧以遊レ目兮。將三往觀二

（一）余が馬を蘭皐に歩ませ。椒丘に馳せて且く止り息ふ。（二）進みて入らず以て尤に離ふ。退いて將に復た吾が初服を修めんとす。

㈠ 馬を蘭の茂る澤曲に歩ませ、椒ある丘に登りてしばらく休息す（退らんと欲して君命を須つ也、而も必ず故國に依るは、芳香を忘れずして自ら潔くする也）　㈡ 進みて忠誠を竭さんとするも君納れず、故に始めの清潔の服即ち初めの行を修めんとす

（一）芰荷を製ちて以て衣となし。芙蓉を集めて以て裳となす。（二）吾を知らざる其れ亦已みなん。苟に余が情其れ信に芳し。

㈠ 菱と蓮葉とを衣にし、蓮花を綴ひて裳とす（益々自ら潔くする意）　㈡ 世人は余を知らずともそれ迄のこと、余が心情は誠に芳し

（一）余が冠の岌岌たるを高うし。余が佩の陸離たるを長うす。（二）芳と澤と其れ雜糅す。（三）唯昭質のみ其れ獨ほ未だ虧けず。

㈠ 我が冠を高く戴き、我が玉佩を長くおぶ（威儀をつくらふ也）　㈡ 衣裳のかをりと冠と佩のつやと兼ね備はる　㈢ 棄てらるゝも、心の美質はそこなはれず（身の美徳善行に比す）

（一）忽ち反顧して以て目を遊ばしめ。將に往きて四荒を觀んとす。（二）佩繽紛として其

寧溘死而流亡兮。余不忍爲此態也。鷙鳥之不羣兮。自前世而固然。何方圜之能周兮。夫孰異道而相安。屈心而抑志兮。忍尤而攘詬。伏清白以死直兮。固前聖之所厚。悔相道之不察兮。延佇乎吾將反。回朕車以復路兮。及行迷之未遠。

㊀余憂へて心結ぼれ悒然として佇立し志を失ふは、世俗に從ふ能はざるを以て獨り時人の爲めに窮困せらるゝ也(侘傺は志を失ひて佇む意)　㊁寧ろ溘焉として死し、形體流亡すとも、時俗邪淫の態に效ふに忍びず。

(一)鷙鳥の羣せざるは。前世よりして固より然り。(二)何ぞ方圜の能く周はん。夫れ孰れか道を異にして相安んぜん。

㊀鷙鳥(たかの類)は他の小鳥と羣をなさず、忠正の士俗人に隨はざるは古へよりして固より然り　㊁圜鑿方枘相合ふ能はず、忠邪は道を異にす、安んぞ並び立ち難し(圜は圓に同じ、一に圓に作る)

(一)心を屈して志を抑へ。尤を忍んで詬を攘はん。(二)清白に伏して以て直に死するは。固より前聖の厚うせし所なり。

㊀心志をおさへ屈し、如何なる罪過をもしのびて詬辱を除去し讒佞の人を誅せんとす　㊁心を清白にして直道を以て死なん事は、固より前聖の重じたる所也

(一)道を相ることの察かならざりしを悔い。延佇して吾將に反らんとす。(二)朕が車を回して以て路に復り。行迷の未だ遠からざるに及ばんとす。

㊀行く道をよく見ずして踏みたがへたるを悔い、首をのべ佇立して故道に引きかへさんとす　㊁此迷路の未だ遠からぬ程に我が車をもとの路に引きかへさんとす

纕兮。又申之以攬茝。亦余心之所善兮。雖九死其猶未悔。

怨靈修之浩蕩兮。終不察夫民心。衆女嫉余之蛾眉兮。謠諑謂余以善淫。

固時俗之工巧兮。偭規矩而改錯。背繩墨以追曲兮。競周容以爲度。

忳鬱邑余侘傺兮吾獨窮困乎此時也。

心の善する所なり。九死すと雖も其れ猶ほ未だ悔いず。

㊀ 王の余を棄てしは、行の高潔なるを怒りしなり(蕙纕は香草の帯、茝も香草なり、高潔忠正の心に喩ふ) ㊁ 斯る香草即ち高潔忠正は固より我が心の安んずる所なれば、死すとも悔ゆることなし

(一)怨むらくは靈修の浩蕩として。終に夫の民心を察せざるを。(二)衆女余の蛾眉を嫉み。謠諑して余を謂ふに善淫を以てす。

㊀ 我が君懐王の思慮遠くして人心の正邪善悪を察せざるを怨む ㊁ 小人、余の美を嫉み、讒して淫邪任用すべからずとの悪名を負はしめたり(蛾眉は美人の眉なり、以て忠正の美徳に喩ふ。謠諑は讒訴の意)

(一)固に時俗の工巧なる。規矩に偭いて改錯し。繩墨に背いて以て曲を追ひ。(二)競ひて周容せらるゝを以て度となす。

㊀ 今世の俗人智巧にして規矩を背き去りて方圓を更め造り、正しき法度に背きて私曲の道を行ふ ㊁ 道を曲げて苟も世に合ひ容れられんことを競ひ、以て常法とす

(一)忳として鬱邑して余侘傺し。吾獨此の時に窮困す。(二)寧ろ溘死して流亡すとも。余此の態を爲すに忍びず。

茝兮。貫二薜荔之落蘂一。矯二菌桂一以紉レ蕙兮。索二胡繩之纚纚一。謇吾法二夫前修一兮。非二世俗之所一レ服。雖レ不レ周二於今之人一兮。願依二彭咸之遺則一。長太息以掩レ涕兮。哀二民生之多艱一。余雖レ好修姱以鞿二羈上兮。謇朝誶而夕替。既替レ余以二蕙

胡繩の纚纚たるを索にす。

㊀木の根を取り茝を身に結びつけ、又貫くに薜荔の落ちたる蘂を以てす ㊁桂の枝を擧げて、更に蕙を取り、胡繩を索(なは)にして、恰好よく長く垂す(前句は行ひ其根本に據據するをいひ、後句は更に善を以て身を約束するをいふ。或はいふ、全句の意、種々の香草を身に著け、其香氣によりて自ら修むるの意と)

(一)謇みて吾夫の前修に法らんとす。世俗の服する所にあらず。(二)今の人に周はずと雖も。願くは彭咸の遺則に依らん。

㊀我が忠信謇々たるは、乃ち前代有德の人に倣はんとす、これ固より今の人の喜び行ふ所にあらず(一説に謇を語辭とす、其説に依ればアアと訓ずべし) ㊁むしろ今の人と合はざるも、古人彭咸の遺法に依り、一命を棄てて諫めんとするなり(彭咸は殷の賢大夫にして、君を諫めて聽かれず、水に投じて死せし人なり)

(一)長太息して以て涕を掩ひ。民生の多艱を哀む。(二)余好く修姱して以て鞿羈すと雖も。謇として朝に誶めて夕に替てらる。

㊀深く歎息して悲み、生民の艱苦多きを哀む ㊁余はよく修潔美好にして、自ら心に愼み檢束せしも、朝に王を諫め、夕に放逐せられたり。(一説に「好」字を衍とし、謇を語辭(アア)とす)

(一)既に余を替つるに蕙纕を以てし。又之を申ぬるに茝を攬るを以てす。(二)亦余が

貪婪兮。憑不レ厭ニ乎求索一。羌内恕レ己以量レ人兮。各興レ心而嫉妬。

て人を量り。各〻心を興して嫉妬す。

㊀衆皆競ひて財利を貪り、欲望すでに満つるも、飽かずして更に索め求めて止まず　㊁自己の貪る心を以て他人を量り、己と同じからざるものあれば各々嫉妬の心を起して之を排斥す

忽馳騖以追逐兮。非ニ余心之所一レ急。老冉冉其將レ至兮。恐ニ脩名之不一レ立。

(一)忽として馳騖して以て追逐せんことは。余が心の急にする所にあらず。(二)老冉冉として其れ將に至らんとす。修名の立たざらんことを恐る。

㊀衆人の如く權貴を追逐し財利を求めてはせまはるが如きは、我が心の急務とする所に非ず　㊁次第に老衰將に至らんとするを以て、功成らず名立たざらん事を恐る（冉冉は漸々、修名は長名即ち不朽の名若しくは修潔の名の義）

朝飲ニ木蘭之墜露一兮。夕餐ニ秋菊之落英一。苟余情其信姱以練要兮。長顑頷亦何傷。

(一)朝に木蘭の墜露を飲み。夕に秋菊の落英を餐ふ。(二)苟に余が情其れ信姱にして以て練要ならば。長く顑頷すとも亦何をか傷まん。

㊀朝に香木木蘭より落つる露を飲み、夕には芳しき菊の落花を食ひ、香潔を以て自ら清潔にす　㊁誠に我が心、信にして美好、中心精練にして守る道の要に合はゞ、長く飢うとも傷むに足らず（姱は美、顑頷は食飽かざる也）

擥ニ木根一以結レ

(一)木根を擥りて以て茝を結び。薜荔の落蘂を貫き。(二)菌桂を矯げて以て蕙に紉ぎ。

改レ路。初既與レ余成レ言兮。後悔遁而有レ他。余既不レ難二夫離別一兮。傷二靈修之數化一。

余既滋二蘭之九畹一兮。又樹二蕙之百畝一。畦二留夷與二揭車一兮。雜杜衡與二芳芷一。

冀二枝葉之峻茂一兮。願竢レ時乎吾將レ刈。雖二萎絕一其亦何傷兮。哀二衆芳之蕪穢一。

衆皆競進而

〔一〕此二句に王註なし、或はいふ後人の増す所、當に刪去すべしと

〔一〕初め既に余と言を成ししに。後に悔遁して他あり。〔二〕余既に夫の離別を難まざるも。靈修の數〻化することを傷む。

〔一〕王初め余と約し國政を屬せんとせしも、後に讒言を用ひ中道悔恨して其情を匿し、心を他に移せり　〔二〕余は遠ざけられしを悲まず、君の心に定りたる守りなきを悲む

〔一〕余既に蘭の九畹を滋ゑ。又蕙の百畝を樹う。留夷と揭車とを畦にし。杜衡と芳芷とを雜ふ。

〔一〕多くの蘭と蕙とを植ゑ、留夷揭車杜衡芳芷等の芳しき草を雜へたり、(仁義を行ひ、自ら潔くし、而して德行いよ〱盛なるに喩ふ、畹は十二畝、畝は二百四十歩なり、畦は畝の古字)

〔一〕枝葉の峻茂せんことを冀ひ。願くは時を竢ちて吾將に刈らんとす。〔二〕萎絕すと雖も其れ亦何をか傷まん。衆芳の蕪穢せんことを哀む。

〔一〕余衆芳を植ゑて其枝葉の長茂せんことを冀ひ、其成熟を待ちて之を刈らんとす　〔二〕衆芳の萎み枯れん事は傷まざるも、枝葉蕪穢して成熟する事なからんを哀む(蓋し自己の身に遇ひて斥けられしは傷む所に非ず、己の才を施すに遇はずして棄てらるゝを哀むとの意ならん)

〔一〕衆皆競ひ進みて貪婪なり。憑つれども求め索むるに厭かず。〔二〕羌内己を恕して以

惟黨人之偸樂兮。路幽昧以險隘。豈余身之憚殃兮。恐皇輿之敗績。忽奔走以先後兮。及前王之踵武。荃不揆余之中情兮。反信讒而齎怒。余固知謇謇之爲患兮。忍而不能舍也。指九天以爲正兮。夫惟靈修之故也。曰黄昏以爲期。羌中道而

(一)惟ふに黨人の樂を偸む。路幽昧にして以て險隘なり。(二)豈余が身の殃を憚らんや。皇輿の敗績せんことを恐る。

(一)思ふに讒佞の徒相黨して己が身の安樂を苟且し、國家の利を顧みざる、其行ふ所甚だ光明正大ならず (二)余が諫諍せんと欲する者、身の禍に逢はんことを恐れず、只君國の傾きて以て先王の功を敗らんことを恐るゝ也

(一)忽として奔走して以て先後し。前王の踵武に及ばしめんとす。(二)荃は余の中情を揆らず。反て讒を信じて齎怒す。

(一)余が慌しく奔走先後して君を輔けんとするは、君をして先王の遺迹を踏み其德を繼がしめん爲なり(踵武は足あと也) (二)王は余の心を察せず、却つて讒言を信じて余を憎み怒りたり(荃は香草の名、王に喩ふ)

(一)余固より謇謇の患たるを知るも。(二)余忍んで舍む能はず。(三)九天を指して以て正をなすも。夫れ惟だ靈修の故なり。

(一)余は忠諫の必ず身に禍するを知るも、なほ默止することを得ず(謇々は忠貞の貌、易に王臣謇々匪躬之故) (二)朱註本「余」の字無し (三)天を指し神明に告げてその平明の裁斷に正すも、只々君を思ひて止み難ければ也 (靈修の靈は神、修は遠、神明遠見する者は君德たりとの義にて君に喩へいへる也)

(一)黄昏を曰ひて以て期と爲ししも。羌中道にして路を改めん。

恐美人之遲暮。不撫壯而棄穢兮。何不改乎此度也。乘騏驥以馳騁兮。來吾道夫先路。昔三后之純粹兮。固衆芳之所在。雜申椒與菌桂兮。豈維紉夫蕙茝。彼堯舜之耿介兮既遵道而得路。何桀紂之昌披兮。夫唯捷徑以窘步。

㊀日は晝夜常に行きて淹留として久しからず、春去り秋來り、季節次第に移り代る㊁草木の葉の落つるにつけ、王の齢の老いて功成らず業遂げざらん事を恐る（美人は懐王を謂ふ。遲暮は老衰の意）

㊀壯を撫して穢を棄てざる。何ぞ此の度を改めざる。㊁騏驥に乘つて以て馳騁せば。㊂來れ吾夫の先路を道かん。

㊀王は何ぞ此壯年の時に於て讒佞邪惡の害を去り、此の惡習の度を改め（先王の德法を修めざるか㊁駿馬に乘りて來りて我に隨ひ馳せば（賢者を用ひ正道に進むに喩ふ）、余は進みて先驅をなし聖王の道に入るべし

㊀昔三后の純粹なる。固に衆芳の在りし所なり。㊁申椒と菌桂とを雜ふ。豈維だ夫の蕙茝を紉ぐのみならんや。

㊀昔禹湯文王の德の純美なりしは、衆賢の輔佐ありしによる㊁蕙茝等の香草のみならず、申椒菌桂等の類をも併せ用ひしなり（各方面の賢者を雜へ用ひしに喩ふ）

㊀彼の堯舜の耿介なるは。既に道に遵ひて路を得たればなり。㊁何ぞ桀紂の昌披なる。夫れ唯だ捷徑にして以て窘步せり。

㊀堯舜、光明正大の德を備へしは、よく天地の正道に順ひて進みたればなり㊁桀紂の行放縱不檢束なる、正道によらず、わき道小路に循ひて進み急疾に治を致さんとす、故に行く所苦しみて遂に滅亡に至れり（昌披は衣を着て帶せざるをいふ）

初度一兮。肇錫レ余以二嘉名一。名レ余曰二正則一兮。字レ余曰二靈均一。紛吾既有二此内美一兮。又重レ之以二脩能一。扈三江離與二辟芷一兮。紉二秋蘭一以爲レ佩。

汩余若レ將レ弗レ及兮。恐三年歲之不二吾與一。朝搴二阰之木蘭一兮。夕攬二洲之宿莽一。

日月忽其不レ淹兮。春與レ秋其代レ序。惟二草木之零落一兮。

ひ。余に字して靈均と曰へり。

(一) 余が始めて生れし時、其年時を觀、其日月を度るに、皆天地の正中に合へるを以て、父、必ず他日善行あらんことを思ひ余によき名を賜へり (二) 屈原、名は平にして字は原、而るに今正則といひ靈均といへるは其字義を釋して以て美稱となしたる也（正は平、則は法、靈は神、均は調の義）

(一)紛として吾既に此の内美あり。又之に重ぬるに脩能を以てし。(二)江離と辟芷とを扈り。秋蘭を紉ぎて以て佩とせり。

(一) 内に既にこの美質あり、更に之に重ぬるに絶遠の才能を以てし（紛は盛なり。脩能は長才の義、即ち人に絶する才をいふ） (二) 江離辟芷を取りて衣被とし、秋蘭をつなぎ結びて衣佩とせり（江離辟芷秋蘭は共に香草の名。身を修むること高潔、博く衆善を采りて身の行を正すに喩ふ）

(一)汩として余將に及ばざらんとするが若し。(二)年歲の吾と與ならざらんことを恐る。(三)朝には阰の木蘭を搴り。夕には洲の宿莽を攬る。

(一) 年命汩然として流れ去り、誠に君を輔弼せんとするの念常に汲々として及ばざるが如し (二) 歲月我を待たず我身の空しく老耄せんとを恐る (三) 木蘭は皮を去りても枯れざる香木、宿莽は冬も枯れぬ草、之を采るとは、窮に遇ひても已に自己の天性に受くる所、志操節義を堅守して變ずべからざるをいふ（阰を王註に山の名となすも、閩松要谷の說に兩山の間と爲すもの最も從ふべきが如し）

(一)日月忽として其れ淹しからず。春と秋と其れ序を代ふ。(二)草木の零落を惟ひ。美人の遲暮を恐る。

帝高陽之苗裔兮。朕皇考曰二伯庸一。攝提貞二于孟陬一兮。惟庚寅吾以降。皇覽揆二余于

を誘はしめ、遂に脅して與に俱に歸り、拘留して遣らず。卒に秦に客死せしむ。その子襄王また讒言を用ひ、屈原を江南に遷せり。而して屈原放たれて山野に在り、また九章を作り、天を援き聖を引き、以て自ら證明す。終に省せられず。清白を以て久しく濁世に居るに忍びず。遂に汨淵に赴き、自ら沈んで死せり。離騷の文は、詩に依りて興を取り類を引いて譬喩す。故に善鳥香草は以て忠貞に配し、惡禽臭物は以て讒佞に比し、靈脩美人は以て君に媲へ、宓妃佚女は以て賢臣に譬へ、虬龍鸞鳳は以て君子に託し、飄風雲霓は以て小人となし、その詞溫にして雅に、その義皎にして朗なり。凡百の君子、その清高を慕ひ、その文采を嘉し、その不遇を哀み、而してその志を閔まざるはなし。

（一）帝高陽の苗裔。朕が皇考を伯庸と曰ふ。（二）攝提孟陬に貞し。惟れ庚寅に吾以て降れり。

㊀古帝王顓頊高陽氏（五帝の一人）の遠孫にして、我が父を伯庸といへり（皇は美稱、亡父を考といふ）㊁寅の年の寅の月、庚寅の日に生れたり（攝提は歳星寅の方を指す年にて即ち寅年なり、孟陬は正月をいふ、十二支にて寅にあたれり、貞は正なり、正しくそれに當りて動くなきをいふ）

（三）皇覽て余を初度に揆り。肇めて余に錫ふに嘉名を以てし。（四）余に名けて正則と曰

楚辭　卷之一

離騷經第一

（王）離騷經は屈原の作りし所なり。屈原名は平、楚と同姓なり。懷王に仕へて三閭大夫となる。三閭の職は王族の三姓を掌る。昭屈景といふ。屈原その譜屬を序し、その賢良を率ゐて以て國士を厲す。入つては則ち王と政事を圖議し、嫌疑を決定し、出でては則ち羣下を監察し、諸侯に應對し、謀行はれ職修まり、王甚だ之を珍とせり。同列大夫上官靳尚其能を妬害し、共に之を譖毀す。王乃ち屈原を疏んぜり。屈原忠貞を執履して讒衺せられ、憂心煩亂して愬ふる所を知らず。乃ち離騷經を作る。離とは別なり。騷とは愁なり。經とは徑なり。放逐離別せられしを以て、中心愁思するも、猶は直徑を陳べて、以て君を風諫するを言ふなり。故に、上は唐虞三后の制を述べ、下は桀紂羿澆の敗を序し、君覺悟して正道に反り、己を還さんことを冀ふ。この時秦の昭王張儀をして懷王を譎詐せしめ、齊の交を絕たしめ、又、楚を誘はしめて與に倶に武關に會せんこと

如レ恩。則其與二衆人一辨也有矣。駁雜之譏。前書盡レ之。吾子其復レ之。昔者。夫子猶有レ所レ戲。詩不レ云乎。善戲謔兮。不レ爲レ虐兮。記曰。張而不レ弛。文武不レ爲也。豈害二於道一哉。吾子其未二之思一乎。孟君將レ有レ適。思下與二吾子一別上。庶幾一來。愈再拜。

ることは、文王武王もなさず　〔一〕少しの戲言戲行ひ、强ち道に害あらず　〔二〕孟郊字は東野、將に他に行かんとし君と訣別せんとす

古文眞寶終

爲ㇾ書其化ㇾ今。其傳ㇾ後。必有ㇾ在矣。吾子其何遽戚二於吾所上ㇾ爲哉。前書謂吾與ㇾ人商論。不ㇾ自ㇾ下ㇾ氣。若中好二己勝一者上。然雖二誠有上ㇾ之。抑非ㇾ好二己勝一也。好二己之道勝一也。己之道乃夫子孟軻楊雄所ㇾ傳之道也。若不ㇾ勝則無ㇾ所ㇾ爲ㇾ道。吾豈敢避二是名一哉。夫子之言曰。吾與ㇾ回言。終日不ㇾ違

ずんば、則ち道と爲る所なけん。吾豈敢て是の名を避けんや。(八)夫子の言に曰く、吾、回と言ふに、(九)終日違はざること愚なるが如しと。則ち其れ衆人と辨ずることはあり。(一〇)駁雜の譏は前書に之を盡せり、吾子其れ之を復せよ。昔者夫子猶ほ戯るゝ所あり。詩に云はずや、(一一)善く戯謔すれども虐を爲さずと。(一二)記に曰く、張つて弛まざるは、文武も爲さざるなりと。(一三)豈道に害あらんや。吾子其れ未だ之を思はざるか。(一四)孟君將に適くあらんとせり。吾子と別れんことを思ふ。庶幾くは一たび來れ、愈再拜す。

(一) 天もし、世人に道を知らしめんと欲せずば、韓愈の壽命も、永きことを期し難し (二) もし、世人に道を知らしめんと欲するならば、韓愈外には誰かよく之を傳へんや (三) 韓愈、天意によりて長壽を得ば、必ず道を行ひ、書を作り、今を化し後に傳ふる事をなすべし (四) 何故にあわたゞしく、余が現在の無爲を變ふるか (五) 前に張籍より送れる書に云 (六) 韓愈人と爭ひ論ずる時に、氣をせき上げ、己勝たんことを好めりと (七) 己の道とは、乃ち孔子、孟子、揚子などの傳へたる聖人の道なり (八) 敢へて、勝つことを好むといふ、批評をも避けざるべし (九) 論語爲政篇に出づ、回は顏淵也 (一〇) 韓愈が行、雜駁なりといふ譏に就いては前日の返書に詳しく答へたり (一一) 詩經淇澳の篇に出づ、虐は人を害虐する也 (一二) 禮記にも、弓の張つて弛まざる如く、嚴密なる言行をのみつゞく

猶其勤若此。其困若此。而後能有所立。吾其可易而爲之哉。其爲也易。則其傳也不遠。故余所以不敢也。）

然觀古人得其時行其道。則無所爲書。爲書者皆所爲不得行乎今。而行乎後者也。今吾之得吾志失吾志。未可知。俟五六十爲之未失也。天不欲使玆人有知乎。則吾之命不可期。如使玆人有知乎。非我其誰哉。其行道其

然して古人を觀るに、其の時を得、其の道を行ふときは、則ち書を爲る所なし。書を爲ることとは、皆今に行ふことを得ずして、後に行ふことを爲す所の者なり。今、吾、吾が志を得んと吾が志を失はんとは、未だ知るべからず。五六十なるを俟つて之を爲すも未だ失せざるなり。(一)天、玆の人をして知るあらしめんと欲せざらんか、則ち吾の命期すべからず。(二)如し玆の人をして知るあらしめんか、我に非ずして其れ誰ぞや。(三)其の道を行ふこと、其の書を爲ること、其の今を化することと、其の後に傳ふること必ず在るあらん。(四)吾子其れ何ぞ遽しく吾が爲す所を戚ふるや。(五)前書に謂へり、吾、人と商論して氣を下す能はず。(六)己勝つことを好む者の若しと。然り誠にこれありと雖も、己勝つことを好むに非ず。己の道勝たんことを好んでなり。(七)己の道とは乃ち夫子孟軻揚雄の傳ふる所の道なり。若し勝た

書一。則見而怒レ之者必多矣。必且以レ我爲レ狂爲レ惑。其身之不レ能レ恤。書於レ吾何有。夫子聖人也。且曰。自三吾得二子路一。而惡聲不レ入二於耳一。其餘輔而相者周二天下一。猶且絕二粮於陳一。畏二於匡一毀二於叔孫一。奔二走於齊魯宋衞之邦一。其道雖レ尊。其窮也亦甚矣。賴其徒相與守レ之。卒有レ立二於天下一。向使二獨言レ之而獨書一レ之。其存也可レ冀乎。今夫二氏行二乎中土一也。蓋六百有餘年矣。其植レ根固。其流波漫。非レ所二以朝令而夕禁一也。自二文王沒一。武王周公成康相與守レ之。禮樂皆在。至二乎夫子一未レ久也。自二夫子一而至二乎孟子一未レ久也。然

て後に能く立つ所あり。(二五)吾其れ易く之を爲すべけんや。其の爲すこと易ければ、則ち其の傳(つた)ふること遠からず。故に余敢(あへ)てせざる所以なり。

(一) 門人等を親しみ呼ぶ語 (二) 不肖に同じ、愚昧無德の意 (三) 氣象の未だ高からざる所を補はんとす (四) 水の源を浚ひて、その歸入すべき河海に導き、木の根に灌漑し、枝葉を茂らし、果實を食はんとする如く、道德の根元を明らめ、修養の效を全うせんことは (五) その中に答ふべき所あり、默して止むべからず (六) 孔子 (七) 文意を奥深くす (八) 左氏穀梁の如く春秋の傳を書きたる書物 (九) 筆禍を憂ふる心、こまやかなり (一〇) 老佛、二氏を宗として信仰する者 (一一) 上は天子より、下は公卿輔相に至る (一二) 公言に同じ (一三) 語るも差支なき部分をえらび之を學者に敎ふるのみ (一四) なは時々我が說と相違し、爭ふ聲譊々たり (一五) 我が身を保護することも難からん (一六) 書を作るも、吾に何の益あらんや (一七) 子路よく余を輔導し、誹謗の聲耳に入らず (一八) 陳蔡の大夫の謀により、孔子その國の野に圍まれ糧食を絕つ (一九) 孔子匡を過ぐる時、匡人陽虎と見誤られ、大に苦しむ (二〇) 論語子張篇、叔孫武叔孔子を毀り云々の條參照 (二一) 孔子ひとり言ひ、ひとり書してその徒之を守らざりしならば、その教は後世に傳はらざりしならん (二二) 老佛二氏 (二三) 一朝一夕に禁じ得べきものにあらず (二四) ともに聖人の道を守りて (二五) 正道の立つところあり

有二宜レ復者一。故不レ可二遂已一。昔者。聖人之作二春秋一也。既深二其文辭一矣。然猶不三敢公傳二道之一。口授二弟子一。至二於後世一。然後其書出焉。其所二以慮一患之道微也。今夫二氏之所二宗而事一レ之者。下及二公卿輔相一。吾豈敢冒言排レ之哉。擇二其可レ語者一誨レ之。猶時與レ吾悖。其聲譊譊。若遂成二其

冒言(一二)して之を排せんや。其の語るべき者を擇(一三)んで之を誨ふるのみ。猶ほ時として吾と悖り、其の聲譊譊(一四)たり。若し遂に其の書を成さば、則ち見て之を怒る者必ず多からん。必ず且つ我を以て狂となし惑へりとなし、其の身を恤(一五)むこと能はざらん。書吾(一六)に於て何かあらん。夫子は聖人なり。且つ曰く、吾、子路(一七)を得てより惡聲耳に入らずと。其の餘輔けて相くる者天下に周し。猶ほ且つ糧を陳(一八)に絶ち、匡(一九)に畏れ、叔孫に毀れ、齊魯宋衛の邦に奔走す。其の道は尊しと雖も、其の窮するや亦甚し。賴(二〇)に其の徒相與に之を守つて卒に天下に立つあり。向に獨(二一)り之を言つて獨り之を書せしめば、其の存すること冀ふべけんや。今夫の二氏中土(二二)に行はるること蓋し六百餘年。其の根を植うること固く、其の流波漫れり、朝(二三)に令して夕に禁ずる所以に非ず。文王沒してより、武王周公成康相與(二四)に之を守り、禮樂皆在り。夫子に至るまで未だ久しからず。夫子より孟子に至るまで未だ久しからざるなり。然して猶ほ其の勤めたること此の若く、其の困めること此の若く、而し

身國土。倘急難有用。敢效微軀。且人非堯舜。誰能盡善。白謨猷籌畫。安能自矜。至於制作。積成卷軸。則欲塵穢視聽。恐雕蟲小伎。不合大人。若賜觀芻蕘。請給紙筆。兼之書人。然後退掃閑軒。繕寫呈上。庶青萍結綠。長價於薛卞之門。幸推下流。大開奬飾。惟君侯圖之。

張籍に答ふる書

韓退之

吾子不以愈無似。欲推而納諸聖賢之域。拂其邪心。增其所未高。謂愈之質有可至於道者。浚其源。導其所歸。漑其根。將食其實。此盛德者之所辭讓。況於愈者哉。抑其中

(一)吾子、愈を以て無似(二)なりとせず、推して諸聖賢の域に納れて、其の邪心を拂つて其の未だ高からざる所(三)を增さんと欲す。愈の質、道に至るべき者ありと謂へり。其の源を浚うし(四)、其の歸する所を導き、其の根を漑いで將に其の實を食はんとする。此れ盛德者の辭讓する所なり。況はんや愈たる者に於てをや。抑ゝ其の中宜しく復すべきもの(五)あり。故に遂に已むべからず。昔者聖人(六)の春秋を作るや、既に其の文辭を深く(七)す。然れども猶ほ敢て公に之を傳道せずして、口づから弟子に授く。後世に至つて、然して後に其の書出でたり(八)。其の患を慮る所以の道微(九)なり。今夫れ二氏(一〇)を宗として之に事ふる所の者、下公卿輔相(一一)に及ぶ。吾豈敢て

人物之權衡一。一經二品題一。便作二佳士一。而今君侯何惜二階前盈尺之地一。不レ使三白揚レ眉吐レ氣。激二昂青雲一耶。昔王子師爲二豫州一。未レ下レ車。卽辟二荀慈明一。旣下レ車。又辟二孔文擧一。山濤爲二冀州一。甄二拔三十餘人一。或爲二侍中尙書一。先代所レ美。而君侯亦一薦二嚴協律一。入爲二祕書郎一。中間崔宗之房習祖黎昕許瑩之徒。或以二才名一見レ知。或以二清白一見レ賞。白每觀二其銜レ恩撫レ躬。忠義奮發。白以レ此感激。知三君侯推二赤心於諸賢腹中一。所以不レ歸二他人一。而願レ委二

（一）唐の玄宗の時の人、名は朝宗、荊州の刺史となる（二）談論の士（三）史記魯の世家に「周公伯禽を戒めて曰く、我一たび沐するに三たび髮を握り、一たび飯ふに三たび哺を吐き起つて以て士を待つ、猶天下の賢人を失はんことを恐る云々」（四）一たび朝宗の知遇を得れば、名聲頓に十倍す、漢書李膺傳に「人その容接を被るものあれば、之を登龍門といふ」（五）才德、人にすぐれながら志を得ざる士（六）君(朝宗)に知られ、聲價を揚げんとす（七）多數の人の中には、古の趙の平原君の客、毛遂の如き俊傑もあるべし（八）錐の囊中より脫け出づる如く、才能をあらはすことを得ば(毛遂の語)（九）李白は卽ち當代の毛遂なるべし（一〇）諸公、皆李白の義氣を喜び容れらる（一一）前々よりのまごゝろを以て（一二）制作文章の類（一三）文章は造化の巧妙に並び、學問は天と人との道理を究む（一四）たゞ長揖せらるゝのみにて、合談を斥け給はざらんことを（一五）とりて卽時に萬言を述べ馬に倚りて待つ間に呈上すべし（一六）文章を主掌し、人物を評量とする人（一七）文を作り官を得しめざるやの意、晉書故事注に「揚眉吐氣は文を作るの際此の如し」又「青雲は官者たるを得るなり、之を登雲路といふ云々」（一八）後漢の王允字は子師、豫州の刺史に拜す（一九）晉の人、字は巨源冀州の刺史に拜す（二〇）明察して拔擢（二一）淸廉潔白（二二）誠意を以て人を懷く（二三）智謀計策（二四）作りたる詩文（二五）御覽に入れたし（二六）蟲の形を彫刻する如き詩文の小技（二七）草刈と木こり(己を卑下していふ)（二八）淸書をする人（二九）靑萍の劍を薛燭に見せ結綠の玉を卞和に見する如く、己の詩文を君(朝宗)に上り、名聲を博せんことを望む（三〇）我等如き下流のものを推し上げ、獎勵の道を開き給はんことを

卿相。雖長不滿七尺。而心雄萬夫。皆王公大人。許與氣義。此疇曩心跡。安敢不盡於君侯哉。君侯制作侔神明。德行動天地。筆參造化。學究天人。幸願開張心顏。不以長揖見拒。必若接之以高宴。縱之以淸談。請日試萬言。倚馬可待。今天下以君侯爲文章之司命。

を甄拔して或は侍中尙書となす。先代の美むる所なり。而して君侯亦一たび嚴協律（一〇）を薦めしかば、入つて祕書郞となる。中間、崔宗之、房習祖、黎昕、許瑩の徒、或は才名を以て知られ、或は（一一）淸白を以て賞せらる。白、每に其の恩を銜んで躬を撫し、忠義奮發することを觀る。白此を以て、感激して、君侯の赤心を諸賢の腹中に推することを知れり。所以に他人に歸せずして、身を國士（一二）に委ねんことを願ふ。倘し急難に用ふるあらば、敢て微軀を效さん。且つ人堯舜に非ず。誰か能く善を盡さん。白、（一三）謨猷籌畫安んぞ能く自ら矜らんや（一四）。制作に至つては積んで卷軸を成せり。則ち（一五）視聽を塵穢せんと欲す。恐くは（一六）雕蟲の小伎、大人に合はざらんことを。若し（一七）芻蕘を觀んことを賜はば、請ふ紙筆を給し、之に書人（一八）を兼ねしめよ。然して後に退いて閑軒を掃はん、繕寫して呈上せん。庶くは（一九）靑萍結綠、價を薛卞の門に長さんことを。幸くは下流（二〇）を推して大に奬飾を開かんことを。惟君侯之を圖れ。

風。射二吐握之事一。使中海內豪俊奔走而歸上之。一登二龍門一。則聲價十倍。所以龍蟠鳳逸之士。皆欲三收レ名定二價於君侯。君侯不下以二富貴一而驕レ之。寒賤而忽上之。則三千之中有二毛遂一。使三白得二穎脫而出一。即其人焉。白隴西布衣。流二落楚漢一。十五好二劍術一。徧干二諸侯一。三十成二文章一。歷二抵

もて之を忽にせずんば、則ち三千の中に毛遂(七)あらん。白をして穎脫して出づることを得しめば、即ち其の人(八)ならん。白は隴西の布衣にして、楚漢に流落す。十五にして劍術を好み、徧く諸侯を干し、三十にして文章を成し、卿相に歷抵(九)す。長七尺に滿たずと雖も、心は萬夫に雄なり。皆王公大人、氣義を許與せらる。(一〇)此れ疇曩(一一)の心跡、安んぞ敢て君侯に盡さざらんや。君侯の制作神明(一二)に侔しく、德行天地を動かし、筆造化(一三)に參り、學天人を究めたり。幸に願くは心顏を開張して、以て長揖(一四)して拒まれざらんことを。必ず若し之に接するに高宴を以てし、之に縱すに淸談を以てせば、請ふ(一五)日に萬言を試みらるゝとも、馬に倚つて待つべし。今天下君侯を以て文章の司命(一六)、人物の權衡となす。一たび品題を經ば便ち佳士と作る。而今君侯何ぞ階前盈尺の地を惜んで、白をして眉を揚げ氣を吐いて靑(一七)雲に激昂せしめざるや。昔、王子師(一八)豫州たるとき、未だ車より下らずして、即ち荀慈明を辟し、既に車を下り、又、孔文擧を辟す。山濤(一九)冀州たるとき、三十餘人

求レ齊也。今擧二進士於此世一。求二祿利一。行二道於此世一而爲レ文。必使下一世人不上レ好。得レ無下與二操レ瑟立二齊門一者比上歟。文誠工。不レ利二於求一。求不レ得。則怒且怨。不レ知君子必爾爲不也。故區區之心。毎レ有二來訪者一。皆有レ意二於不肖一者也。略不二辭讓一。遂盡言。惟吾子諒察。

賓、臾則、亡射）六呂（林鐘、南呂、應鐘、大呂、夾鐘、中呂）(九) 正しき道を行ひ、正しき文を作らば (一〇) 眞に道を知る君子は、一身の不遇を、かく怒り、且つ怨むべきものか (一一) 小さき心（余が心の意）(一二) 皆余を愛し、余の說を聽かんとするもの (一三) 遠慮せずに、思ふ所を云ひ盡す

白聞。天下談士相聚而言曰。生不レ用レ封二萬戸侯一。但願一識二韓荊州一。何令二人之景慕。一至二於此一。豈不下以二周公

韓荊州に與ふる書 (一)

李太白

白聞く、天下の談士(二)相聚つて言つて曰く、生れて萬戸侯に封ぜらるゝを用ひず、但願くは一たび韓荊州に識られんことをと。何ぞ人をして景慕せしむること一に此に至れる。豈周公の風を以て吐握(三)の事を躬らし、海內の豪俊をして奔走して之に歸せしむるにあらざらんや。一たび龍門(四)に登れば聲價十倍す。所以に龍蟠(五)鳳逸の士、皆名を收め價(六)を君侯に定めんことを欲す。君侯富貴を以て之に驕り、寒賤

嗌以レ所レ守。幸甚。愈敢不レ吐二露情實一。然自識三其不レ足レ補二吾子所一レ須也。齊王好レ竽。有下求二仕於齊一者上。操レ瑟而往。立二王之門一。三年不レ得レ入。叱曰。吾瑟鼓レ之。能使二鬼神上下一。吾鼓レ瑟合二軒轅氏之律呂一。客罵レ之曰。王好レ竽。而子鼓レ瑟。瑟雖レ工。如二王之不一レ好何。是所レ謂工二於瑟一。而不レ工二於

好む。仕を齊に求むる者あり。瑟を操つて往いて王の門に立つ。三年なれども入ることを得ず。叱して曰く、吾瑟、之を鼓すれば、能く鬼神をして上下せしむ。吾が瑟を鼓するは、軒轅氏の(八)律呂に合へりと。客之を罵つて曰く、王竽を好めり。而して子瑟を鼓す。瑟は工なりと雖も、王の好まざるを如何せんと。是れ所謂瑟に工にして、齊に求むるに工ならざるなり。今、進士に此世に擧げられて祿利を求むるに、(九)道を此の世に行つて、文を爲らば、必ず一世の人を好まざらしめん。瑟を操りて齊門に立つものを比するなきを得んや。文は誠に工なれども求むるに利ならず。求めて得ざるときは、則ち怒り且つ怨む。知らず(一〇)君子必ず爾せんや不や。故に(一一)區區の心、來つて訪ふ者ある每に、(一二)皆不肖に意ある者なり。略ぼ辭讓せずして遂に(一三)盡く言ふ。惟吾子諒察せよ。

(一) その文、高尚にして意味深く、三四回讀めども、會得するを得ず　(二) 慌てて赤面す　(三) 我が道術にして、人に勝れたる才能もなきに　(四) 守るべき道を教へらる　(五) 君を滿足せしめ難きを知る　(六) 樂器の名、女媧の臣隨の作なりと傳ふ　(七) また樂器の名、軒轅氏の作なりと傳ふ、瑟の類　(八) 樂の六律、（黃鐘、大簇、姑洗、蕤

足レ云耳。今幸賴下天子每歲詔二公卿大夫一貢ちし士。若二某等一比咸得二以薦聞一。是以冒二進其說一。以累二於執事一。亦不二自量一已。然執事其知レ某何如哉。昔人有下鬻レ馬不レ售二於市一者上。知二伯樂之善相一也。從而求レ之。伯樂一顧。價增三倍。其與二其事一頗相類。是故始終言レ之耳。

の馬を駑馬なりといふべからず　(三) 字は伯、よく木の良否を見たる人、莊子に出づ　(四) よく馬の良否を相たる人　(五) 家の棟梁たるべき良材又すぐれたる馬　(六) 門下に同じ、屋宇の下の意　(七) 親戚の末、爾雅に「婿の父を姻といひ、兩婿相謂ふを亞といふ」　(八) もし君の知遇を得ざれば、たとへ、他の千萬人に知らるゝとも、何の甲斐もなかるべし　(九) 某々等の意、他の人を指していふ　(一〇) 我が分限を量らざるなり　(一一) 伯樂の鑑定を求む

愈白。辱レ惠レ書。語高而旨深。三四讀。尙不レ能二通曉一。茫然增二愧赧一。又不レ以二其淺弊一無二過レ人智識一。且

陳商に答ふる書

韓退之

愈白す。書を惠まるゝを辱くす。(一)語高うして旨深し。三四讀んで尙は通曉すること能はず。茫然として(二)愧赧を增す。又其の(三)淺弊にして人に過ぎたる智識なきを以てせず、且つ喩すに(四)守る所を以てす、幸甚。愈、敢て情實を吐露せざらんや。然れども自ら其の吾子が須むる所を(五)補ふに足らざるを識るなり。齊王(六)竽を

肆。過之而不顧者。雖日累千萬人。未爲不材與下乘也。及至匠石過之而不睨。伯樂過之而不顧。然後知其非棟梁之材。超逸之足也。以某在公之宇下。非一日。而又辱居姻婭之後。是生於匠石之園。長於伯樂之廐者也。於是而不得知。假有見知者千萬人。亦何

雖も、未だ不材と下乘とにせざるなり。(三)匠石之に過りて睨す、(四)伯樂之に遇ひて顧みざるに至るに及んで、然して後に其の(五)棟梁の材、超逸の足に非ざるを知るなり。以れば、某、公の(六)宇下に在ること一日に非ず。又辱なく(七)姻婭の後に居れり。是れ匠石の園に生れ、伯樂の廐に長ずるものなり。(八)是に於て知らるゝを得ずんば、假ひ知らるゝ者千萬人ありとも、亦何ぞ云ふに足らん。今幸に天子每歲公卿大夫に詔して士を貢せしむるに頼る。(九)某等が若き、比歲以て薦聞せらるることを得たり。是を以て其の說を冒進して、以て執事を累す。亦自ら量(一〇)らざるのみ。然れども執事其れ某を知ること何如ぞや。昔人、馬を牽いで市に售られざるものあり。伯樂の善く相するを知り、從つて之を求む。(一一)伯樂一たび顧みて、價增すこと三倍せりと。其れ其の事と頗る相類せり。是の故に始終之を言ふのみ。

(一) 廐(うまや)に同じ　(二) 某人の之を顧みざるもの、日に千萬人に及ぶとも、未だその木を不材なりといひ、そ

有下好レ義而忘二其君一者上。今之王公大人。惟執事可三以聞二此言一。惟愈於二執事一也。可下以二此言一進上。愈蒙二幸於執事一。其所レ從舊矣。若寛二假之一。使レ不レ失二其性一。加二待之一。使レ足二以爲上レ名。寅而入。盡レ辰而退。申而入。終レ酉而退。率以爲レ常。亦不レ廢レ事。天下之人。聞二執事之於レ愈如上レ是也。必皆曰。執事之好レ士也。如レ此。執事之待レ士以レ禮如レ此。執事之使レ人。不レ枉二其性一。而能有レ容如レ此。執事之欲レ成二人之名一如レ此。執事之厚二於故舊一如レ此。又將曰。韓愈之識三其所二依歸一也如レ此。韓愈之不レ諂二屈於富貴之人一如レ此。韓愈之賢能使二其主待レ之以上レ禮。如レ此。則死二於執事之門一無レ悔也。若使下隨レ行而入。逐レ隊而趨。言不三敢盡二其誠一。道有レ所レ屈二於己一。天下之人。聞二執事之於レ愈如上レ此。皆曰。執事之用二韓愈一。哀二其窮一收レ之而已耳。韓愈之事二執事一。不レ以レ道。利レ之而已耳。苟如レ是。雖下日受二千金之賜一。一歲九遷中其官上。感レ恩則有レ之矣。將以稱二於天下一曰二知己一。則未也。伏惟哀二其所上レ不レ足。矜二其愚一。不レ錄二其罪一。察二其辭一。而垂レ仁採納焉。愈恐懼再拜。

の差異ますます甚し　〔一四〕由來久し　〔一五〕ゆるやかに取扱ひて　〔一六〕保護を加へて　〔一七〕寅の刻に入り、辰の刻を終へて退き、たま申の刻に入り、酉の刻を終へて退く　〔一八〕勤むべきことを缺かず　〔一九〕寛大にして希望を容る　〔二〇〕ふるき知己　〔二一〕他の人々とともに出入す（行は行列をいふ）　〔二二〕自身のためには踐むべき道を枉ぐ　〔二三〕利益のためにするのみ　〔二四〕一年に九たび昇進するとも　〔二五〕無禮の罰をゆるし　〔二六〕願を納れられよ

人の爲に薦を求むる書　韓退之

木在レ山。馬在レ

木、山に在り、馬、（一）肆に在り。之を過りて（二）顧みざるもの日に千萬人を累ぬと

於上。爲上者不得怨於下矣。孟子有云。今之諸侯無大相過者。以其皆好臣其所教。而不好臣其所受教。今之時與孟子之時。又加遠矣。皆好其聞命而奔走者。不好其直己而行道者。聞命而奔走者。好利者也。直己而行道者。好義者也。未有好利而愛其君者。未

こと此の如く、韓愈の富貴の人に諂屈せざること此の如く、韓愈の賢、能く其の主をして之を待つに禮を以てせしむること此の如しと。則ち執事の門に死すとも悔なけん。若し行に隨つて入り險(二一)を逐うて起り、言敢て其の誠を盡さず、道(二二)己に屈する所あらしめば、天下の人、執事の愈に於ける此の如きを聞いて皆曰はん。執事の韓愈を用ふるは、其の窮を哀んで之を收むるのみ。韓愈の執事に事ふるは、道を以てせずして之を利する(二三)のみと。苟も是の如くならば、日に千金の賜を受け、一歲(二四)に九たび其の官を遷さると雖も、恩に感ずるは則ち之れあらん、將以て天下に稱せられて、知己と曰はれんは則ち未だし。伏して惟れば、其の足らざる所を哀んで其の愚を矜み、其の罪を錄せずして其の辭を察し、而して仁を垂れて採納(二六)せられんことを。愈、恐懼(二五)再拜。

(一) 名は建封、字は本立、鄧州南陽の人　(二) 德宗の貞元十五年九月一日　(三) 推官の召狀　(四) 節度使の院中　(五) 故實法度十餘箇條　(六) 公儀に事ふることなく　(七) 本心を失ふべし　(八) 言はざるを得ず　(九) 兩度射を指す　(一〇) 能に取るべき所あらん　(一一) 人々、勤め方を同じくせず　(一二) 大に立ち勝りたるもののなきは　(一三) そ

立。喪其所以爲心。夫如是則安得而不言。凡執事之擇於愈者。非爲其能晨入夜歸也。必將有以取之。苟有以取之。雖不晨入夜歸。其所取者猶在也。下之事上。不一其事。上之使下。不一其事。量力而任之。度才而處之。其所不能。不強使爲。是故爲下者。不獲罪

りと。今の時孟子の時と、又加ゝ遠し(一三)。皆其の命を聞いて奔走する者を好んで、其の己を直うして道を行ふ者を好まず。命を聞いて奔走するものは利を好む者なり。己を直うして道を行ふ者は義を好む者なり。未だ利を好んで其の君を愛する者あらず。未だ義を好んで其の君を忘るゝ者あらず。今の王公大人、惟執事のみ以て此の言を聞すべく、惟愈のみ執事に於て此の言を以て進むべし。愈幸を執事に蒙り、其の從ふ所舊し(一四)、若し之を寬假して(一五)其の性を失せざらしめ、之を加待して以て名を爲すに足らしめんとならば、寅にして入り辰を盡して退き、申にして入り酉を終へて退かん(一六)。率ね以て常とするも、亦事を廢せず(一八)。天下の人、執事(一七)の愈に於けること是の如きを聞かば、必ず皆曰はん。執事の士を好むや此の如く、執事の士を待つに禮を以てする此の如く、執事の人を使ふに、其の性を枉げずして能く容るゝ(一九)あること此の如く、執事の人の名を成さんと欲する此の如く、執事(二〇)の故舊に厚きこと此の如しと。又將曰はん、韓愈の其の依歸する所を識る

院中故事節目十餘事一來示レ愈。其中不可者有。自二九月一至二明年二月之終一。皆晨入夜歸。非レ有二疾病事故一。輙不レ許レ出。當時以二初受一レ命。不二敢言一。古人有レ言曰。人各有レ能有二不能一。若レ此者非二愈之所一レ能也。抑而行レ之。必發二狂疾一。上無三以承二事于公一。忘二其將所三以報二德者上下無二以自

づるを許さずと。當時初めて命を受くるを以て敢て言はず。古人言へることあり。曰く、人各〻能あり、不能ありと。此の若きは、愈の能くする所に非ざるなり。抑へて之を行はば、必ず狂疾を發せん。上は以て公(六)に承事することなく、其の將に德に報ゆる所以の者を忘れん。下は以て自立することなくして、其の心(七)とする所以を喪失せん。夫れ是の如きは、則ち安んぞ(八)得て言はざらんや。凡そ(九)執事の愈を擇べるは、其の能く晨に入り夜歸らんと謂へるに非ず。必ず將に以(一〇)て之を取るあらんとす。苟も以て之を取るあらば、晨に入り夜歸らずと雖も、其の取る所の者猶ほ在らん。下の上に事ふる其の事を(一一)一にせず。上の下を使ふも、其の事を一にせず。力を量つて之に任じ、才を度つて之を處き、其の能はざる所は、彊ひて爲さしめず。是の故に下たる者は罪を上に獲ず、上たる者は怨を下に得ず。孟子云へることあり。今の諸侯、(一二)大に相過ぎたることなきは、其れ皆其の敎ふる所を臣とするを好みて、其の敎を受くる所を臣とするを好まざるを以てな

豪傑。遂竝起而亡㆓秦族㆒矣。且夫天下非㆓小弱㆒也。雍州之地。殽函之固。自若也。陳渉之位。不㆑尊㆓於齊楚燕趙魏韓宋衞中山之君㆒也。鉏櫌棘矜。不㆑銛㆓於鉤戟長鎩㆒也。謫戍之衆。非㆑抗㆓九國之師㆒也。深謀遠慮。行㆑軍用㆑兵之道。非㆑及㆓曩時之士㆒也。然而成敗異㆑變。功業相反。試使㆘山東之國與㆓陳渉㆒。度㆑長絜㆑大。比㆑權量㆖㆑力。則不㆑可㆓同㆑年而語㆒矣。然秦以㆓區區之地㆒。致㆓萬乘之權㆒。招㆓八州㆒而朝㆓同列㆒。百有餘年矣。然後以㆓六合㆒爲㆑家。殽函爲㆑宮。一夫作㆑難。而七廟隳。身死㆓人手㆒。爲㆓天下笑㆒者。何也。仁義不㆑施。而攻守之勢異也。

代帝王の廟破れ（禮記に天子は七廟）（二四）秦王子嬰項羽に殺さる（二五）戰つて敵を攻め敗るは得策なりしも、仁義を守り國を保つことは拙く、その環勢全く相反せしためなり

九月一日。愈再拜。受㆑牒之明日。在㆓使院中㆒。有㆓小吏㆒。持㆓

書類

（一）張僕射に上る書

韓退之

九月一日、愈再拜す。（二）牒を受くるの明日、使院中に在り。小吏あり、（四）院中の（五）故事節目（三）十餘事を持し、來りて愈に示す。其の中に不可なるものあり。九月より明年二月の終に至るまで、皆晨に入り夜歸る。疾病事故あるに非ざれば、輒ち出

業也。始皇既沒、餘威震二于殊俗一。然而陳涉甕牖繩樞之子、氓隸之人。而遷徙之徒也。材能不レ及二中庸一、非レ有二仲尼墨翟之賢。陶朱猗頓之富一。躡二足行伍之間一、俛二起阡陌之中一、率二疲敝之卒一、將二數百之衆一、轉而攻レ秦。斬レ木爲レ兵、揭レ竿爲レ旗、天下雲會而響應、贏レ糧而景從、山東

道、曩時の士(一七)に及ぶに非ず。然して(一八)成敗變を異にし、功業相反けり。試に(一九)山東の國をして陳涉と長を度り大を絜り、權を比べ力を量らしめば、則ち(二〇)年を同うして語るべからず。然れども、秦、(二一)區區の地を以て萬乘の權を致し、八州を招きて(二二)同列を朝せしむること百有餘年。然して後六合を以て家となし、殽函を宮となす。(二三)一夫難を作して七廟墮れ、(二四)身人手に死して天下の笑となる者は何ぞや。仁義施さずして、(二五)攻守の勢異なればなり。

(一) 先王聖人の道を廢し、諸子百家の書を焚き、人民を愚智寡識ならしむ　(二) 天下の兵器を咸陽に集め、鋒鏑箭鏃の類をとかし、金人(銅像の類)十二體を作る　(三) 城を華山の頂に構へ、清水を濠とし　(四) 强きいしゆみ　(五) 鋭利なる武器をつらね、行人を呼びとがむ　(六) 夷狄の地　(七) 甕(かめ)を窓にはめ、繩にて戸を繋げる貧家の子　(八) 奴隷の身分にして、移されて漁陽を戍りしもの　(九) 普通人に及ばず　(一〇) ともに、古の富豪　(一一) 戍卒の伍に交りて田舍より起り　(一二) 木を斬つて兵器とし、竿を作りて旗に充つ　(一三) 秦の天下　(一四) 戍卒の用ふるくわ又は鍬　(一五) ともに九國の時の兵器　(一六) 九國の軍に匹敵し得ず　(一七) 戰國時代の名將　(一八) 事業の成否相反す　(一九) 山東の國々をして陳涉と力の大小强弱を較べしめば　(二〇) 山東まさり陳涉劣り　その差の甚しきこと同日の談にあらず　(二一) 小さき地を以て遂に天子たる權を得　(二二) 同じ地位の諸侯　(二三) 一夫陳涉叛いて七

首。墮名城。殺豪後。收天下之兵。聚之咸陽。銷鋒鍉鑄以爲金人十二。以弱天下之民。然後踐華爲城。因河爲池。據億丈之城。臨不測之谿。以爲固。良將勁弩。守要害之處。信臣精卒。陣利兵而誰何。天下已定。始皇之心自以爲關中之固。金城千里。子孫帝王萬世之

となし以て、天下の民を弱む。然して後、華(三)に踐りて城となし、河に因つて池となし、億丈の城に據り、不測の谿に臨んで以て固となす。良將勁弩(四)要害の處を守り、信臣精卒(五)利兵を陣して誰何す。天下已に定る。始皇の心自ら以爲らく關中の固は金城千里、子孫帝王萬世の業なりと。始皇既に沒して、餘威殊俗(六)に震ふ。然れども、陳涉は甕牖繩樞(七)の子、氓隷(八)の人にして、遷徙の徒なり。材能中(九)庸に及ばず。仲尼・墨翟の賢、陶朱(一〇)・猗頓の富あるに非ず。足を行伍(一一)の間に躡して、阡陌の中に俛起し、疲散の卒を率ゐ、數百の衆を將ゐて、轉じて秦を攻む。木を斬(一二)つて兵となし、竿を揭げて旗となし、天下雲のごとく會して響のごとく應じ、糧を贏つて景のごとく從ふ。山東の豪傑、遂に並び起つて秦の族を亡せり。且つ夫れ天下小弱なるに非ず。雍州の地、殽函の固自若たり、陳涉の位、齊楚燕趙(一三)韓魏宋衛中山の君よりも尊きにあらず。鉏耰棘矜(一四)、鉤戟長鎩(一五)よりも銛きにあらず。謫戍の衆、九國(一六)の師に抗するに非ず。深謀遠慮、軍を行り兵を用ふるの

於是六國之士。有甯越徐尚蘇秦杜赫之屬爲之謀。齊明周最陳軫召滑樓緩翟景蘇厲樂毅之徒通其意。吳起孫臏帶佗兒良王廖田忌廉頗趙奢之朋制其兵。嘗以什倍之地。百萬之衆。仰關而攻秦。秦人開關而延敵。九國之師。逡巡而不敢進。秦無亡矢遺鏃之費。而天下諸侯已困矣。於是從散約解。爭割地而賂秦。秦有餘力。而制其弊。追亡逐北。伏尸百萬。流血漂櫓。因利乘便。宰制天下。分裂河山。强國請伏。弱國入朝。施及孝文王莊襄王。享國日淺。國家無事。及至始皇。奮六世之餘烈。振長策而御宇內。吞二周而亡諸侯。履至尊而制六合。執敲朴以鞭笞天下。威振四海。南取百粵之地。以爲桂林象郡。百粵之君。俛首係頸。委命下吏。乃使蒙恬北築長城。而守藩籬。却匈奴七百餘里。胡人不敢南下而牧馬。士不敢彎弓而報怨。

(一) 秦の過を論ずるなり (二) 崤山と函谷關 (三) 周の王室 (四) 天地四海を包有するの志あり (五) 內に守り外に戰ふ具 (六) 東方の國を同盟せしめし蘇秦の策 (七) 散ばらして (八) 惠王、文王、武王、襄王 (九) 先王の功業 (一〇) 肥沃の地 (一一) 秦以外の六國、南北に同盟し、秦に當りし蘇秦の策 (一二) 寄れ合せたり (一三) 意を通じ心を合す (一四) 六國、及び中山、宋、衞 (一五) 矢を失ひ、やじりを落す費(軍費) (一六) 大なる櫓 (一七) 孝公以後の六代 (一八) 長き鞭をあげ、馬を御する如く、天下を征服す (一九) 東周、西周 (二〇) 皇帝となりて天下を制す (二一) 長笞、短箠を執り、人民を鞭撻す (二二) 生命を獄官の下吏に委す(秦に服從す) (二三) まがき國境の塞

於是廢先王之道。燔百家之言。以愚黔

是に於て、先王の道を廢て、百家の言を燔いて以て黔首を愚にし、名城を墮ち、豪俊を殺し、天下の兵を收めて之を咸陽に聚め、鋒鏑を銷して鑄て以て金人十二

割二膏腴之地一。北收二要害之郡一。諸侯恐懼。會盟而謀レ弱レ秦。不レ愛二珍器重寶肥饒之地一。以致二天下之士一。合レ從締レ交。相與爲レ一。當二此之時一。齊有二孟嘗一。趙有二平原一。楚有二春申一。魏有二信陵一。此四君者皆明智而忠信。寬厚而愛レ人。尊レ賢而重レ士。約レ從離レ衡。幷二韓魏燕趙宋衞中山之衆一。

の兵を制す。嘗て什倍の地、百萬の衆を以て、關を仰いで秦を攻む。秦人關を開いて敵を延く、九國の師(一四)、逡逃して敢て進まず。秦、亡矢遺鏃(一五)の費なくして、天下の諸侯已に困めり、是に於て、從散じ約解け、爭つて地を割いて秦に賂ふ。秦に餘力あつて其の弊れたるを制し、亡ぐるを追ひ北ぐるを逐ふ。伏尸百萬、流血櫓(一六)を漂し、利に因り便に乘じて、天下を宰制し、河山を分裂す。彊國は伏せんと請ひ、弱國は入朝す。施いて孝文王莊襄王(一七)に及び、國を享くること日淺く、國家無事なり。始皇に至るに及んで、六世の餘烈を奮ひ、長策(一八)を振げて宇内を御し、二周(一九)を呑んで諸侯を亡し、至尊(二〇)を履んで六合を制し、敲朴(二一)を執つて以て天下を鞭笞し、威四海に振ひ、南、百粤の地を取つて以て桂林象郡となし、百粤の君、首を俛し頸を係けて命を下吏(二二)に委す。乃ち蒙恬をして北長城を築いて藩籬(二三)を守らしめ、匈奴を却くること七百餘里、胡人敢て南下して馬を牧はず。士は敢て弓を彎いて怨を報いず。

函之固。擁二雍州之地一。君臣固守。以窺二周室一。有下席二卷天下一。包二擧宇内一。囊二括四海一之意。幷二呑八荒一之心上。當二是時一也。商君佐レ之。内立二法度一。務二耕織一。脩二守戰之具一。外連レ衡而鬭二諸侯一。於レ是秦人拱レ手。而取二西河之外一。孝公既沒。惠文武昭襄蒙二故業一。因二遺策一。南取二漢中一。西擧二巴蜀一。東

天下を席卷し、宇内を包擧し、(四)四海を囊括するの意、八荒を幷呑するの心あり。此の時に當つて、商君之を佐く。內には法度を立て、耕織を務め、(五)守戰の具を脩め、外には衡を連ねて諸侯を鬭はしむ。是に於て、秦人手を(七)拱して西河の外を取る。孝公既に(六)沒して惠文武昭襄、(八)故業を蒙り、(九)遺策に因りて南漢中を取り、西巴蜀を擧げ、東(一〇)膏腴の地を割き、北要害の郡を收む。諸侯恐懼し、會盟して秦を弱めんことを謀り、珍器重寶肥饒の地を愛まずして、以て天下の士を致し、(一一)從を合せ交を締んで、相與に一と爲る。此の時に當つて、齊に孟嘗あり、趙に平原あり、楚に春申あり、魏に信陵あり。此の四君は、皆明智にして忠信に、寛厚にして人を愛し、賢を尊んで士を重んず。從を約し衡を離れ、韓魏燕趙宋衞中山の衆を兼ねたり。(一二)是に於て、六國の士、寗越、徐尙、蘇秦、杜赫、の屬ありて之が爲に謀り、齊明、周最、陳軫、召滑、樓緩、翟景、蘇厲、樂毅の徒、其の意を通じ、(一三)吳起、孫臏、帶佗、兒良、王廖、田忌、廉頗、趙奢の朋、其

遊二戯平林一。濯二清水一。追二涼風一。釣二遊鯉一。弋二高鴻一。風二乎舞雩之下一。詠二歸高堂之上一。安二神閨房一。思二老氏之玄虚一。呼二吸精和一。求二至人之彷彿一。與二達者數子一。論レ道講レ書。俯二仰二儀一。錯二綜人物一。彈二南風之雅操一。發二清商之妙曲一。逍遥一世之上一。睥二睨天地之間一。不レ受二當時之責一。永保二性命之期一。如レ是則可下以凌二霄漢一出中宇宙之外上矣。豈羨三夫入二帝王之門一哉。

の外に出づべし。豈夫の帝王の門に入るを羨まんや。(一九)

(一) 溝池竹木家をめぐり、前圃後園に花卉果木を栽り (二) 路を行き水を渡る (三) 召使の者 (四) 種々の珍味を饌ね備ふる膳 (五) 妻子 (六) 羊に同じ (七) 園圃に樂む (八) 高く飛ぶ鴻雁を捕ふ(弋はいぐるみ、鳥を捕る具) (九) 舞雩の壇下に納涼す(雩は雨乞の祭の名、壇を作りて、その上に舞ふ) (一〇) 心神を閨の中に休め、老子の説ける玄妙虚無の道を尋ぬ (一一) 道術吐納の法により、天の精和の氣を呼吸し (一二) 至人眞人(神仙)に似ることを求む (一三) 道理に達したるもの數人 (一四) 天地に俯仰し、萬人を觀察評論し (一五) 琴をかなで、清妙の音を發す(家語に、「舜五絃の琴を彈じ、南風の詩を作る」又三禮圖に、「琴はもと五絃、宮商角徵羽といふ、文王二を增し少宮少商といふ、絃最も清し」) (一六) 塵世を超越し (一七) 時世の責任束縛を受けず、天與の命數を保たん (一八) 心は高く天河を凌ぎ、宇宙の外に逸すべし (一九) 王宮に入りて、官を得るものを羨まんや

(一)過秦論　　賈誼

秦孝公據二崤

秦の孝公崤函の固(二)に據り、雍州の地を擁し、君臣固く守つて以て周室(三)を窺ふ。

使三居有二良田廣宅一。背レ山臨レ流。溝池環匝。竹木周布。場圃築レ前。果園樹レ後。舟車足三以代二步涉之難一。使令足三以息二四體之役一。養レ親有二兼珍之膳一。妻孥無三苦レ身之勞一。良朋萃止。則陳二酒肴一以娛レ之。嘉時吉日。則烹二羔豚一以奉レ之。躕躇畦苑。

樂志論

仲長統

居をして良田廣宅あらしめ、山を背にし流に臨み、溝池環匝し、竹木周布し、場圃前に築き、果園後に樹ゑ、舟車は以て步涉の難に代ふるに足り、使令は以て四體の役を息はすに足り、親を養ふに兼珍の膳あり。妻孥は身を苦しむるの勞なし。良朋萃り止れば、則ち酒肴を陳ねて以て之を娛ましめ、嘉時吉日には、則ち羔豚を烹て以て之を奉ず。畦苑に躕躇し、平林に遊戲し、清水に濯ひ、涼風を追ひ、遊鯉を釣り、高鴻を弋し、舞雩の下に風し、詠じて高堂の上に歸らん。神を閨房に安んじて、老氏の玄虛を思ひ、精和を呼吸して、至人の彷彿を求め、達者數子と道を論じ、書を講じ、二儀を俯仰し、人物を錯綜し、南風の雅操を彈じ、清商の妙曲を發し、一世の上に逍遙し、天地の間を睥睨し、當時の責を受けず。永く性命の期を保たん、是の如くならば、則ち以て霄漢を凌ぎ、宇宙

故生則得二其情一。死則盡二其常一。郊焉而天神假。廟焉而人鬼享。曰。是道也。何道也。曰。斯吾之所レ謂道也。非二向所レ謂老與レ佛之道一也。堯以レ是傳二之舜一。舜以レ是傳二之禹一。禹以レ是傳二之湯一。湯以レ是傳二之文武周公一。文武周公傳二之孔子一。孔子傳二孟軻一。軻之死不レ得二其傳一焉。荀與レ揚也。擇焉而不レ精。語焉而不レ詳。由二周公一而上。上而爲レ君。故其事行。由二周公一而下。下而爲レ臣。故其說長。然則如レ之何而可也。曰。不レ塞不レ流。不レ止不レ行。人二其人一。火二其書一。廬二其居一。明二先王之明一以道レ之。鰥寡孤獨廢疾者有レ養也。其亦庶二乎其可一也。

寡孤獨廢疾の者養ふあらば、其の亦其れ可なるに庶からん。(一二)

㊀ 何を爲しても、理に當らざるはなし ㊁ 生くる時はその情意滿足し、死する時はその常の道を盡し得るなり ㊂ 夏至冬至に、天神をまつる祭の名、假は至る ㊃ 宗廟にて祖先を祭れば、靈魂來り享く ㊄ 孟子(名は軻)死してより、その道を傳ふるものなし ㊅ 荀子(名は況、楚に仕へて蘭陵の令となり、荀子二十篇を著す)と揚雄(漢の人、揚子法言を著す、楊墨の楊とは別人也)とは ㊆ 道の善惡を擇び分てども、その義理密ならず、善道を論說すれども、その語粗くして詳ならず ㊇ 孔子も孟子も、皆下位に居て臣たり、その道時に行はれず、ただ長々しき說明をなし、之を後世に傳ふ ㊈ 佛老の道を塞ぎ止めざれば、聖人の道は流行せず ㊉ 佛老の道を唱ふるものを化し、聖人の徒とす (一一) 寺院などを廢して民舍とす (一二) 老いて妻なきを鰥とし、老いて夫なきを寡とし、幼にして父なきを孤とし、老いて子なきを獨といふ

論類

其文詩書易春秋。其法禮樂刑政。其民士農工賈。其位君臣父子。師友賓主昆弟夫婦。其服麻絲。其居宮室。其食粟米蔬果魚肉。其爲レ道易レ明其爲レ教易レ行也。是故以レ之爲レ己。則順而祥。以レ之爲レ之。則愛而公。以レ之爲レ心則和而平。以レ之爲二天下國家一無レ所二處而不一レ當。是

爲にすれば、則ち順にして祥なり。之を以て人の爲にすれば、則ち愛して公なり。之を以て心の爲にすれば、則ち和して平なり。之を以て天下國家の爲にすれば、(一)處として當らざる所なし。是の故に、生けるときは則ち其の情を得、(二)死するときは則ち其の常を盡す。(三)郊にしては天神假り、(四)廟にしては人鬼享く。曰く、是の道は何の道ぞ。曰く、斯れ吾が所謂道なり。向に謂ふ所の老と佛との道に非ざるなり。堯は是れを以て之を舜に傳へ、舜は之れを以て之を禹に傳へ、禹は是れを以て之を湯に傳へ、湯は是れを以て之を文武周公に傳へ、文武周公は之を孔子に傳へ、孔子は孟軻に傳ふ。(五)軻の死してより其の傳を得ず。(六)荀と揚とは、擇んで(七)精しからず。語つて詳ならず。周公より上は、上として君たり。故に其の事行はる。(八)周公より下は、下として臣たり。故に其の說長し。然らば則ち之を如何にして可ならんか。曰く、塞がずんば流れず。(九)止めずんば行はれず。(一〇)其の人を人にし、其の書を火き、(一一)其の居を廬にし、先王の道を明かにして以て之を道かん。鰥

爲レ聖一也。夏葛而冬裘。渴飮而飢食。其事雖レ殊。其所二以爲レ智一也。今其言曰。曷不レ爲二太古之無事一。是亦責二冬之裘者一。曰二曷不レ爲下葛レ之之易上也。責二飢之食者一。曰二曷不レ爲下飮レ之之易上也。傳曰。古之欲レ明二明德於天下一者。先治二其國一。欲レ治二其國一者。先齊二其家一。欲レ齊二其家一者。先脩二其身一。欲レ脩二其身一者。先正二其心一。欲レ正二其心一者。先誠二其意一。然則古之所レ謂正レ心誠レ意者。將二以有レ爲也。今也欲レ治二其心一。而外二天下國家一。滅二其天常一。子焉而不レ父二其父一。臣焉而不レ君二其君一。民焉而不レ事二其事一。孔子之作二春秋一也。諸侯用二夷禮一則夷レ之。夷而進二於中國一。則中二國之一。經曰。夷狄之有レ君。不レ如二諸夏之亡一。詩曰。戎狄是膺。荊舒是懲。今也擧二夷狄之法一。而加二之先王之敎之上一。幾何其不二胥而爲レ夷也。

る常久不變の道 〔一五〕魯の史官の記錄、孔子之を筆削して褒貶勸懲の意を寓す、五經の一 〔一六〕論語八佾篇に出づ、中國には君なきも禮義あり、夷狄の君あるも禮義なきに勝るとの意 〔一七〕詩經魯頌閟宮の篇に出づ、荊は楚、舒は楚に從ふ國、ともに蠻夷に近し 〔一八〕いかでとも〴〵に夷狄とならざらんや

夫所レ謂先王之敎者。何也。博愛之謂レ仁。行而宜レ之之謂レ義。由レ是而之焉之謂レ道。足二乎己一無レ待二於外一之謂レ德。

夫れ所謂先王の敎とは何ぞや。博く愛する之を仁と謂ひ、行ひて之を宜しくする之を義と謂ひ、是に由りて之く、之を道と謂ひ、己に足りて外に待つなき之を德と謂ふ。其の文は詩書易春秋、其の法は禮樂刑政、其の民は士農工賈、其の位は君臣父子、師友賓主、昆弟夫婦、其の服は麻絲、其の居は宮室、其の食は粟米蔬果魚肉、其の道たる明め易く、其の敎たる行ひ易し。是の故に之を以て己が

以事其上則誅。今其法曰。必棄而君臣。去而父子。禁而相生相養之道。以求其所謂清靜寂滅者。嗚呼。其亦幸而出於三代之後。而不見黜於禹湯文武周公孔子也。其亦不幸而不出於三代之前。而不見正於禹湯文武周公孔子也。帝之與王。其號各殊。其所以

を齊ふ。其の家を齊へんと欲する者は、先づ其の身を脩む。其の身を脩めんと欲する者は、先づ其の心を正うす。其の心を正うせんと欲するものは、先づ其の意を誠にすと。然らば則ち古の所謂心を正うし意を誠にする者は、將に以て爲すあらんとするなり。今や其の心を治めんと欲して、天下國家(一三)を外にし、其の天常(一四)を滅す。子として其の父を父とせず、臣として其の君を君とせず。民として其の事を事とせず。孔子の春秋(一五)を作るや、諸侯夷の禮を用ふるときは則ち之を夷にし、夷にして中國に進むときは則ち之を中國にす。經(一六)に曰く、夷狄の君あるは、諸夏の亡きに如かずと。詩に曰く、戎狄是れ膺ち、荊舒(一七)是れ懲らすと。今や夷狄の法を擧げて之を先王の敎の上に加ふ。幾何(一八)ぞ其れ胥ゐて夷たらざらんや。

(一) 異端の人の言 (二) 莊子胠篋篇に出づ (三) 人には羽毛鱗介爪牙など寒暑を防ぎ食を爭ふべき具なく、この器に於て他の動物に及び難し (四) 農のこと (五) 民に通じ達す (六) 工のこと (七) 商のこと（通ずは有無相通ず） (八) 粟を食ふ (九) 清靜は老を指し、寂滅は佛を指す (一〇) 夏殷周三代 (一一) 夏は涼しきかたびらを用ひ、冬は暖きかはごろもを着る (一二) 四書の一なる大學中の語 (一三) 天下國家のことを思はず (一四) 天より受けた

矣何也。無三羽毛鱗介以居二寒熱一也。無二爪牙以爭レ食也。是故君者出レ令者也。臣者行二君之令一而致二之民一者也。民者出二粟米麻絲一作二器皿一通二貨財一以事二其上一者也。君不レ出レ令。則失三其所二以爲レ君。臣不下行二君之令一而致中之民上。則失三其所二以爲レ臣。民不下出二粟米麻絲一作二器皿一通二貨財一

さざれば、則ち其の君たる所以を失はん。臣君の令を行ひて之を民に致さざれば、則ち其の臣たる所以を失はん。民粟米麻絲を出し、器皿を作り、貨財を通じ、以て其の上に事へざれば、則ち誅(八)せられん。今其の法に曰く、必ず而の君臣を棄て而の父子を去り、而の相生じ相養ふの道を禁じ、以て其の所謂清靜寂滅(九)なるものを求めよと。嗚呼其れ亦幸(一〇)にして三代の後に出で、禹湯文武周公孔子に黜けられず。其れ亦不幸にして三代の前に出でずして、禹湯文武周公孔子に正されず。帝と王とは其の號各〻殊なるも、其の聖たる所以は一なり。(一一)夏は葛して冬は裘し、渴しては飲み飢ゑては食ふ。其の事殊なりと雖も、其の智たる所以は一なり。今其の言に曰く、曷ぞ太古の無事を爲さざると。是れ亦冬の裘せる者を責めて、曷ぞ之を葛にするの易きを爲さざると曰ひ、飢ゑて食する者を責めて、曷ぞ之を飲むの易きを爲さざると曰ふなり。傳に曰く、古(一二)の明德を天下に明かにせんと欲するものは、先づ其の國を治む。其の國を治めんと欲する者は、先づ其の家

求之甚矣人之好怪也。不求其端。不訊其末。惟怪之欲聞。古之爲民者四。今之爲民者六。古之教者處其一。今之教者處其三。農之家一。而食粟之家六。工之家一。而用器之家六。賈之家一。而資焉之家六。奈之何。民不窮且盜也。古之時。人之害多矣。有聖人者出。然後教之。以相生養之道。爲之君。爲之師。驅其蟲蛇禽獸而處其中土。寒然後爲之衣。飢然後爲之食。木處而顚。土處而病也。然後爲之宮室。爲之工以贍其器用。爲之賈以通其有無。爲之醫藥以濟其夭死。爲之葬埋祭祀以長其恩愛。爲之禮以次其先後。爲之樂以宣其湮鬱。爲之政以率其怠勧。爲之刑以鋤其強梗。相欺也。爲之符璽斗斛權衡以信之。相奪也。爲之城郭甲兵以守之。害至而爲之備。患生而爲之防。

今其言曰。聖人不死。大盜不止。剖斗折衡。而民不爭。嗚呼。其亦不思而已矣。如古之無聖人。人之類滅久

す　(二八) 次第秩序を立つ　(二九) 鬱して樂まざる氣分を暢ばす　(三〇) 怠り倦む者を勵く　(三一) 頑强にして命に從はざる　(三二) 割符と印　(三三) 斛(斗は一斗、斛は一石)　(三四) はかり(權ははかりのおもり、衡はさを)

今其の言に曰く、(一)聖人死せざれば大盜止まず。斗を剖り衡を折いて民爭はずと。(二)嗚呼其れ亦思はざるのみ。古の聖人なきが如くんば、人の類滅ぶる久しからん、何ぞや。(三)羽毛鱗介の以て寒熱に居るなく、爪牙の以て食を爭ふなければなり。是の故に君は令を出す者なり。臣は君の令を行つて之を(四)民に(五)致す者なり。民は粟米麻絲を出し、(六)器皿を作り、(七)貨財を通じ、以て其の上に事ふるものなり。君令を出

附レ之。出者汙レ之。噫。後之人。其欲レ聞二仁義道德之說一。孰從而聽レ之。老者曰。孔子吾師之弟子也。佛者曰。孔子吾師之弟子也。爲二孔子一者。習二聞其說一。樂二其誕一而自小也。亦曰。吾師亦嘗師レ之云レ爾。不三惟擧二之於口一。而又筆二之於書一。噫。後之人雖レ欲レ聞二仁義道德之說一。其孰從而

恩愛を長うし、之が禮を爲して以て其の先後(二八)を次し、之が樂を爲して以て其の湮鬱(二九)を宣べ、之が政を爲して以て其の怠勌(三〇)を率る、之が刑を爲して以て其の强梗(三一)を鋤く。相欺くや、之が符璽(三二)斗斛(三三)權衡(三四)を爲して以て之を信にし、相奪ふや、之が城郭甲兵を爲して以て之を守る。害至つて之が備を爲し、患生じて之が防をなす。

（一）聖道の根元を明にし、老佛二道を攻擊するなり　（二）何によらず由り從つて行ふを道といふ　（三）各自の心に具へて、己に滿ち足り、外に假り求むることなきを德といふ　（四）仁義といへるものは、その內容定りて實なれど、道と德とは善もあり、惡もあり、むなしき位に過ぎざるなり　（五）名は耼、春秋時代の人、道德經五千言を著し、虛無自然を道德の本體とす　（六）小惠の貌　（七）特立の貌、片意地の强さをいふ　（八）仁と義とを認めず、たゞ虛無自然を道なりといふ　（九）秦始皇三十四年、李斯の議に依り、詩書百家の書を焚き、翌年儒者を坑にす　（一〇）漢代に至り、黃帝老子の道重んぜらる　（一一）後漢明帝の時佛敎傳來し、六朝時代に至りて漸く盛なり　（一二）楊子名は朱、戰國の人、極端なる利己主義を唱ふ　（一三）墨子名は翟、楊子と同時代の人、薄葬兼愛の說を力む　（一四）楊朱老佛等の道に入るものは、聖人の道より離れ去る　（一五）孔子家語に「孔子禮を老子に問ふ」とあるに由る　（一六）佛家に光淨菩薩、支那に入りて孔子と化すとの記あるに由る　（一七）徒に虛僞妄誕の說を喜び、自ら聖道を卑んずる也　（一八）事物の本末を考へたゞさず、たゞ怪しげなる說に從はんとす　（一九）士、農、工、商　（二〇）士、農、工、商、老、佛　（二一）聖人の道卽ち儒道　（二二）儒、老、佛　（二三）人々爭ひ傷ふ害　（二四）仁義により相愛し、相養ふ道　（二五）人を住良の地に置く　（二六）樹上に棲んで墜落し、又土中に住んで病む　（二七）年若くして死

之也。天下之公言也。老子所謂道德云者。去仁與義言之也。一人之私言也。周道衰。孔子沒。火于秦。黃老于漢。佛于晉宋齊梁魏隋之間。其言道德仁義者。不入于楊。則入于墨。不入于墨。則入于老。不入于老。則入于佛。入于彼。必出于此。入者主之。出者奴之。入者

爾いふ。惟之を口に擧ぐるのみならず。又之を書に筆す。噫後の人、仁義道德の說を聞かんと欲すと雖も、其れ孰に從つてか之を求めん。甚しいかな人の怪を好めるや。其の端(一八)を求めず、其の末を訊はず、惟怪のみ之れ聞かんと欲す。古の民たるものは四。(一九)今の民たる者は六。(二〇)古の敎ふるものは其の一(二一)に處り、今の敎ふるものは其の三(二二)に處る。農の家は一にして、粟を食むの家は六つ。工の家は一にして、器を用ふるの家は六。賈の家は一にして、焉を資るの家は六なり。之を奈何ぞ民窮し且つ盜まざらんや。古の時、人の害多(二三)し。聖人なる者ありて出て、然して後に、之に敎ふるに相生養(二四)するの道を以てす。之が君となり、之が師となり、其の蟲蛇禽獸を驅りて其の中土(二五)に處り、寒うして然して後に之が衣を爲し、飢ゑて然して後に之が食を爲し、木處(二六)しては顚し、土處しては病み、然して後に之が宮室を爲し、之が工を爲して以て其の器用を贍す。之が賈を爲して以て其の有無を通じ、之が醫藥を爲して以て其の夭死(二七)を濟ひ、之が葬埋祭祀を爲して以て其の

虚位。故道有二君子一有二小人一。而德有レ凶有レ吉。老子之小二仁義一。非レ毀レ之也。其見者小也。坐レ井觀レ天。曰二天小一者。非二天小一也。彼以二煦煦一爲レ仁。孑孑爲レ義。其小レ之也則宜。其所レ謂道。道二其所レ道。非二吾所レ謂道一也。其所レ謂德。德二其所レ德。非二吾所レ謂德一也。凡吾所レ謂道德云者。合二仁與一レ義言レ

と爲し、孑孑(七)を義となす。其の之を小なりとするや則ち宜なり。其の所謂道は、其の道とする所を道とす。吾所謂道には非ざるなり。其の所謂德は、其の德とする所を德とす。吾が所謂德には非ざるなり。凡そ吾所謂道德と云ふ者は仁と義とを合せて之を言ふなり。天下の公言なり。老子の所謂道德と云ふは、仁と義とを去つて(八)之を言ふなり。一人の私言なり。周道衰へ、孔子沒し、秦に火(九)あり。漢に黄老(一〇)あり、晉宋齊梁魏隋の間に佛(一一)あり　其の道德仁義を言ふもの、楊(一二)に入らざれば則ち墨(一三)に入り、墨に入らざれば則ち老に入り、老に入らざれば則ち佛に入る。彼に入れば必ず此に出づ。入る者は之を主とし、(一四)出づる者は之を奴とす。入る者には之に附き、出づる者は之を汙とす。噫後の人、其れ仁義道德の說を聞かんと欲するも、孰れに從つてか之を聽かん。老者曰く、孔子(一五)は吾が師の弟子なりと。佛者曰く、孔子は(一六)吾が師の弟子なりと。孔子を學ぶ者も、其の說を習ひ聞き、其の誕(一七)を樂んで自ら小なりとす。亦曰く、吾が師も亦嘗て之を師とせりと

山乎。曰レ山則不可。故天道亂。而日月星辰。不レ得二其行一。地道亂。而艸木山川。不レ得二其平一。人道亂。而夷狄禽獸不レ得二其情一。天者日月星辰之主也。地者艸木山川之主也。人者夷狄禽獸之主也。主而暴レ之。不レ得二其爲レ主之道一矣。是故聖人一視而同仁。篤レ近而擧レ遠。

愛を全うするを得ず　（七）主たるものにして、その下を虐待するやうにては　（八）天下の物を一樣に視て、偏頗なく仁惠を施す　（九）まづ父子兄弟の道を修め、近親の愛を篤くして、順次に疎遠なるものに推し及ぼすなり

博愛之謂レ仁。行而宜レ之之謂レ義。由レ是而之焉之謂レ道。足二乎己一無レ待二於外一之謂レ德。仁與レ義爲二定名一。道與レ德爲二

原道（一）　韓退之

博く愛する之を仁と謂ひ、行ひて之を宜しくする之を義と謂ひ、（二）是れに由りて之く、之を道と謂ひ、（三）己に足りて外に待つなき、之を德と謂ふ。（四）仁と義とは定名たり、道と德とは虛位たり。故に道に君子あり小人あり。德に凶あり吉あり。（五）老子の仁義を小なりとして之を非毀するは、其の見るもの小なればなり。井に坐し、天を觀て天を小なりと曰ふものは、天の小なるに非ざるなり。彼れ煦煦を以て仁

形於上者謂之天。形於下者謂之地。命於其兩間者謂之人。形於上、日月星辰皆天也。形於下、艸木山川皆地也。命於其兩間、夷狄禽獸皆人也。曰然則吾謂禽獸曰人可乎。曰非也。指山而問焉。曰山乎。曰山可也。山有艸木禽獸。皆擧之矣。指山之一艸而問焉曰。

上に形るゝもの之を天と謂ひ、下に形るゝもの之を地と謂ひ、其の兩間に命ぜらるゝもの(二)之を人と謂ふ。上に形るゝ日月星辰は皆天なり。下に形るゝ艸木山川は皆地なり。其の兩間に命ぜらるゝ夷狄禽獸は皆人なり。曰く、然らば則ち吾禽獸を謂ひて人と曰ふも可ならんか。曰く、非なり。山を指して問ふ。曰く、山かと。山と曰へば可なり。山に(三)艸木禽獸あり。皆之を擧ぐ。山の一艸を指して問ふ。曰く、山かと。山と曰はば則ち不可なり。故に天道亂れて日月星辰其の(四)行を得ず。地道亂れて(五)艸木山川其の平を得ず。人道亂れて(六)夷狄禽獸其の情を得ず。天は日月星辰の主なり。地は艸木山川の主なり。人は夷狄禽獸の主なり。主として之を暴するは、其の主爲るの道を得ず。是の故に聖人は(八)一に視て同じく仁(七)あり。近き(九)を篤うして遠きを擧ぐ。

(一) 人の根元を論じ、夷狄禽獸の主たることをいふ (二) 天の命を受け、天地の間に生るゝものを人といふ (三) 草木禽獸に至るまで、山の中にある物を悉く擧げて山といふなり (四) 順序よく運行するを得ず (五) 草木枯れ、山崩れ、川溢れなどして、すべて平和なるを得ず (六) 夷狄も禽獸も皆荒れ狂ひ、弱肉強食の世となりて、その情

盤桓。有ㇾ所㆓希冀㆒。但以劉日薄㆓西山㆒。氣息奄奄。人命危淺。朝不ㇾ慮ㇾ夕。臣無㆓祖母㆒。無㆔以至㆓今日㆒。祖母無ㇾ臣。無㆔以終㆓餘年㆒。母孫二人。更相爲ㇾ命。是以區區不ㇾ能㆓廢遠㆒。臣密今年四十有四。祖母劉今年九十有六。是臣盡㆓節於陛下㆒之日長。報ㇾ劉之日短也。烏鳥私情。願乞ㇾ終ㇾ孝。臣之辛苦。非㆓獨蜀之人士。及二州牧伯所㆑見㆓明知㆒。皇天后土。實所㆓共鑒㆒。願陛下矜㆓愍愚誠㆒。聽㆓臣微志㆒。庶劉僥倖。保㆓卒餘年㆒。臣生當ㇾ隕ㇾ首。死當ㇾ結ㇾ草。臣不ㇾ勝㆓怖懼之情㆒。謹拜表以聞。

（二五）互に助け合ひて生命を保てり（二六）つとめ〳〵て（二七）奉養を廢し、祖母に違ざかるを得ず（二八）烏（鳥）の情をして、孝養を終へんことを望む（烏鳥は、からすの哺を反すこと）（二九）天も地もともに之を見る（三〇）臣がまごゝろを憐みて（三一）一命をさゝげて忠を盡し（三二）冥土にありても國に報ゆべし（左傳に「魏顆、秦の師を輔氏に敗り、杜回を獲たり、秦の力人なり、初め魏武子に嬖妾あり、子なし、武子疾む、顆に命じて曰く、必ずこの妾を嫁せよと、疾病なるときは則ち曰く、必ず以て殉となせと、卒するに及び、顆之を嫁す、曰く、疾病なれば則ち亂る、吾その治に從ふなりと、輔氏の役に及び、顆、老人の草を結びて、杜回に抗するを見る、回つまづきて顚す、故に之を獲たり、夜老人を夢む、曰く、余は爾が嫁せしめたる所の婦人の父なり、爾先人の治命を用ふ、吾これを以て報ゆ」）。

原類

（一）原人（げんじん）

韓退之

臣上道。州司臨レ門。急二於星火一。臣欲二奉レ詔奔馳一。則以劉病日篤。欲三苟順二私情一。則告訴不レ許。臣之進退。實爲二狼狽一。伏惟聖朝以レ孝治二天下一。凡在二故老一。猶蒙二矜育一。況臣孤苦。特爲二尤甚一。且臣少事二僞朝一。歷二職郎署一。本圖二宦達一。不レ矜二名節一。今臣亡國賤俘。至微至陋。過蒙二拔擢一。豈敢

なり。願くは陛下愚誠を(三〇)矜憐し、臣が微志を聽さば、庶くは劉僥倖にして餘年を保ち卒へん、臣生きては當に首を隕すべく、死して當は(三二)草を結ぶべし。臣怖懼の情に勝へず。謹んで拜表して(三一)以聞す。

(一) 蜀志に「李密字は令伯、父早く亡し、母何氏更に人に適く、密祖母に養はれ、孝を以て聞ゆ、疾に侍して未だ嘗て帶を解かず、蜀平ぐ、晉帝徵して太子洗馬となさんとす、密、表を上る、帝その誠款を嘉し、奴婢二人を賜ひ、郡縣をして祖母に供し、膳服を奉ぜしむ、終に漢中の太守に遷さる」 (二) 辛苦艱難し、早く凶事に逢ふ (三) 生後六月にして父を失ひ (四) 四歲の時 (五) 舅氏、母を再嫁せしむ(志を奪ふとは、貞操を守るを得ざらしめし意)九歲まで足立たず (六) 零落孤獨の苦を嘗め (七) 家衰へ祚薄く、晩年に至りて子を設く (八) 外には大功(九ケ月)小功(五ケ月)の喪に服すべき童僕もなし、(五尺は十二歲以上、十五歲は六尺) (九) 淋しく獨立ち、たゞ影と形を相伴ふのみ (一〇) 聖朝(晉)に仕ふるに及び、淸き政治の恩澤に浴し (一一) 前の蜀の太守賈達、臣を孝廉の科に擧げ、後の刺史顧榮、臣を秀才の科に進む(事物紀元卷三に、漢氏、士を取るに、又孝廉秀才の二等あり云々) (一二) 祖母を養ふもののなきに依り (一三) 太子洗馬に任ぜらる (一四) 表文を以て申上げ (一五) 詔書嚴に下り、臣が逃れ怠れるを責め (一六) 郡縣よりも迫り來り臣が出發を促す (一七) 州官も臣が家に臨み、督促すること流星の如く急なり (一八) 進退度を失ふ (一九) 老年の者は皆憐みを蒙る (二〇) 少年の時、僞朝の蜀に仕へ、尚書郎の官職に就けり (二一) もとより、仕官顯達を思ひ、隱遁して名聞節操を誇らんとせず (二二) 亡國蜀の賤しきとりこなり (二三) 他に望みありて、躊躇するにあらず(盤桓は進まざる貌) (二四) 日の西山にせまれる如く、僅かに息の絶えぬまでなり

牀蓐。臣侍湯藥、未嘗廢離。逮奉聖朝、沐浴清化。前太守臣逵、察臣孝廉。後刺史臣榮、擧臣秀才。臣以供養無主、辭不赴。會詔書特下。拜臣郎中。尋蒙國恩、除臣洗馬。猥以微賤、當侍東宮。非臣隕首所能上報。臣具以表聞、辭不就職。詔書切峻、責臣逋慢。郡縣逼迫、催

則ち以て劉が病日に篤し。苟も私情に順はんと欲すれば、則ち告訴許されず。臣が進退實に狼狽をなせり。伏して惟れば、聖朝孝を以て天下を治む。凡そ故老に在りては、猶ほ矜育を蒙る。況んや臣が孤苦なる、特に尤も甚しとなす。且つ臣少うして僞朝に事へ、職を郎署に歴たり。本官達を圖りて名節に矜らず。今、臣は亡國の賤俘にして、至微至陋なり。過つて拔擢を蒙る。豈敢て盤桓として希冀する所あらんや。但以れば、劉、日の西山に薄るごとく、氣息奄奄たり。人命危淺にして、朝に夕を慮らず。臣祖母なくんば、以て今日に至る無く、祖母も臣なくんば、以て餘年を終ふるなけん。母孫二人、更〻命を相爲せり。是を以て、區區として廢して遠かること能はざるなり。臣密は今年四十有四、祖母劉は今年九十有六。是れ臣、節を陛下に盡さん日は長く、劉に報ゆるの日は短し。烏鳥の私情、願くは養を終へんことを乞ふ。臣の辛苦は、獨り蜀の人士、及び二州の牧伯の明かに知らるゝ所のみにあらず。皇天后土も、實に共に鑒る所

臣以二險釁一夙遭二愍凶一。生孩六月。慈父見レ背。行年四歲。舅奪二母志一。祖母劉閔二臣孤弱一。躬親撫養。臣少多二疾病一。九歲不レ行。零丁孤苦。至二於成立一。既無二叔伯一。終鮮二兄弟一。門衰祚薄。晩有二兒息一。外無二朞功强近之親一。內無二應門五尺之童一。煢煢子立。形影相弔。而劉夙嬰二疾病一。常在二

臣險釁(一)を以て夙に愍凶に遭へり。生孩六月にして慈父に背かれ、行年四歲にして舅(二)母の志を奪へり(三)。祖母劉、臣が孤弱なるを閔み、躬ら撫養す(四)。臣少うして疾病多く、九歲まで行かず。零丁孤苦(五)、成立するに至りて、既に叔伯なく、終に兄弟鮮し。門衰へ祚薄うして(六)、晩に兒息あり。外に朞功(七)强近の親なし、內に應門五尺の童なし(八)。煢煢(九)として孑立し、形影相弔ふ。而して劉夙く疾病に嬰りて常に牀蓐に在り。臣湯藥に侍して未だ嘗て廢離せず。聖朝に奉ずるに逮(一〇)んで、淸化に沐浴す。前の太守臣逵、臣を孝廉に察し(一一)、後の刺史臣榮、臣を秀才に擧ぐ。臣、供養(一二)主なきを以て辭して赴かず。會〻詔書特に下りて、臣を郎中に拜し。尋いで國恩を蒙り、臣を洗馬(一三)に除せらる。猥に微賤を以て東宮に侍するに當る。臣首を隕すとも、能く上報する所に非ず。臣具に表を以て聞し(一四)、辭して職に就かず。詔書切峻にして臣の逋慢(一五)を責め、郡縣逼迫して臣が上道(一六)を催す。州司門に臨むこと(一七)、星火よりも急なり。臣、詔を奉じて奔馳せんと欲すれば、

十年之内所糾合四方之精鋭、非一州之所有。若復數年、則損三分之二也。當何以圖敵。此臣之未解五也。今民窮兵疲。而事不可息。事不可息、則往與行、勞費正等。而不及圖之、欲以一州之地與賊持久。此臣之未解六也。夫難平者事也。昔先帝敗軍於楚。當此時、曹操拊手、謂天下已定。然後先帝東連呉越、西取巴蜀、舉兵北征。夏侯授首。此操之失計、而漢事將成也。然後呉更違盟、關羽毀敗、秭歸蹉跌、曹丕稱帝。凡事如是、難可逆見。臣鞠躬盡瘁、死而後已。至於成敗利鈍、非臣之明所能逆覩也。

敗し、秭歸(一三)蹉跌し、曹丕(一四)帝を稱す。凡そ事是の如くなれば、逆め見るべきこと難し。臣鞠躬(一五)して盡瘁し、死して後已まん。成敗利鈍(一六)に至つては、臣の明に能く逆め觀る所に非ざるなり。

(一) 東呉昌霸郡縣多く叛く　(二) 南巣湖を越え、呉を破らんとして成らず　(三) 才智の遲鈍なる　(四) 建興五年の出師　(五) 一周年のみ　(六) 部曲の長　(七) 蜀將營頭の長　(八) 西南の夷　(九) 賊を討つこと　(一〇) 蜀の先主十二年、劉琮降る、先主乃ちその軍を率ゐて襄陽を過ぐ、荊州の人多く之に歸し、襄陽に到る、衆十餘萬人なり、曹操、その江陵に據らんことを恐れて之を追ふ、先主、妻子を棄て、諸葛亮張飛等、數十騎と逃れ去る　(一一) 夏侯淵　(一二) 先主二十四年、孫權盟に背き、關羽を襲殺し、荊州を取る　(一三) 秭歸(後の歸州)の地も奪はれ　(一四) 曹操の子　(一五) 身をかゞめ生命を擲つ(誠忠を盡す意)　(一六) 事の成否と兵の強弱

陳情表(一)

李令伯

用李服。而李服圖之。委ニ任夏侯一。而夏侯敗亡。先帝每稱ㇾ操爲ㇾ能。猶有ニ此失一。況臣駑下。何能必勝。此臣之未ㇾ解四也。自ニ臣到ニ漢中一。中間朞年耳。然喪ニ趙雲陽羣馬玉閻芝丁立白壽劉郃鄧銅等。及曲長屯將七十餘人。突將無ㇾ前。賨叟青羌散騎武騎一千餘人一。此皆數

しも、猶ほ此の失あり。況んや臣が駑下(三)なる、何ぞ能く必ず勝たん。此れ臣の未だ解らざるの四なり。臣漢中(四)に到りしより、中間朞年なるのみ。然も趙雲・陽羣(五)・馬玉・閻芝・丁立・白壽・劉郃・鄧銅等、及び曲長屯將(六)七十餘人、突將前無き賨叟(七)青羌(八)散騎武騎一千餘人を喪ふ。此れ皆數十年の內、糾合する所の四方の精鋭にして、一州の有する所に非ず。若し復數年ならば、則ち三分の二を損せん。當に何を以てか敵を圖るべき。此れ臣が未だ解らざるの五なり。今民窮り兵疲る。而して事息む(九)べからず。事息むべからざれば、則ち往ると行くと、勞費正に等うして、蚤く之を圖るに及ばず。一州の地を以て賊と久しきを持せんことを欲す。此れ臣の未だ解らざるの六なり。夫れ平げ難きものは事なり。(一〇)昔先帝楚に敗軍す。此の時に當つて、曹操手を拊つて謂へらく、天下已に定まると。然して後、先帝東吳越を連ね、西巴蜀を取り、兵を擧げて北征し、夏侯(一一)首を授けぬ。此れ操の失計にして、漢事將に成らんとせしなり。然して後、吳更に盟に違き、關羽(一二)毀

其事如レ左。高帝明並二日月一。謀臣淵深。然涉レ險被レ創。危然後安。今陛下未レ及二高帝一。謀臣不レ如二良平一。而欲下以二長策一取レ勝。坐定中天下上。此臣之未レ解一也。劉繇王朗各據二州郡一。論レ安言レ計。動引二聖人一。羣疑滿レ腹。衆難塞レ胸。今歲不レ戰。明年不レ征。使二孫策坐大一。遂幷中江東上。此臣之未レ解二也。曹操智計殊二絕於人一。其用レ兵也。髣二髴孫吳一。然困二於南陽一。險二於烏巢一。危二於祁連一。偪二於黎陽一。幾敗二北山一。殆死二潼關一。然後僞定二一時一耳。況臣才弱。而欲下以二不レ危而定上レ之。此臣之未レ解三也。

(一)建興六年再び師を出す時の表、前出師表に對していふ　(二)蜀と魏とは兩立せず　(三)一地方にかたより安んぜざらんことを　(四)二日三日の中に漸く一食す　(五)自愛せざるにあらず　(六)誤りたる計　(七)孔明、祁山を攻め、南安天水安定の三郡皆魏に叛く　(八)魏吳と石亭に戰ひ、大に敗る　(九)敵の疲るゝにつけこむ　(一〇)智の明かなること日月の如く　(一一)數多くして惡黨倂し　(一二)漢の高祖劉邦　(一三)高祖の臣張良陳平　(一四)長く對峙する策　(一五)安全長久の計を講じ　(一六)吳の孫權の兄　(一七)すぐれて秀づ　(一八)古の名將孫子吳子に似たり　(一九)張繡と南陽の宛に戰ひ流矢に中る　(二〇)袁紹曹操を官渡に拒ぎ、烏巢に多くの糧食あり、曹操之を避けんとす　(二一)曹操、兵を吳蜀に用ふる時、祁連の袁譚の兵、その背後よりせまる　(二二)袁譚袁尚と戰ひ、大に敗らる　(二三)曹操、馬超韓遂を潼關に討ち、却て大に敗れ殆んど生命を失ふ　(二四)一時僭僞して王と稱し、漸くその地を平定せしのみ　(二五)危きに近よらざる策

曹操五攻二昌霸一不レ下。四越二巢湖一不レ成。任二

曹操五たび昌霸を攻めて下らず、四たび巢湖を越えて成らず、李服を任用して李服に圖られ、夏侯に委任して夏侯敗亡せり。先帝毎に操を稱して能なりとせ

之。是故託臣而弗レ疑也。臣受レ命之日寢不レ安レ席。食不レ甘レ味。思惟北征一。宜二先入一レ南。故五月渡レ瀘。深入二不毛一。幷レ日而食。臣非レ不二自惜一也。顧二王業不レ可レ得三偏二安於蜀都一。故冒二危難一。以奉二先帝之遺意一。而議者謂爲二非計一。今賊適疲二於西一。又務二於東一。兵法乘レ勞。此進趨之時也。謹陳二

を顧ふなり。故に危難を冒して以て先帝の遺意を奉ず。而れども議者謂つて非計(六)となせり。今賊適々西に疲れ(七)、又東に務む(八)。兵法は勞に乘ず(九)。此れ進み趍るの時なり。謹んで其の事を陳ぶること左の如し。高帝明日月に竝ぶ(一〇)。謀臣淵深なり(一一)。然れども險を渉り創を被り、危うして然して後に安し。今陛下は未だ高帝に及(一二)ばず。謀臣は良平に如かず(一三)。而して長策を以て勝を取り、坐ら天下を定めんと欲す。此れ臣の未だ解らざるの一なり(一四)。劉繇王朗各々州郡に據る(一五)。安を論じ計を言ひ、動もすれば聖人を引く(一六)。羣疑腹に滿ち、衆難胸に塞がる。今歳戰はず、明年征せず。孫策をして坐ら大に、遂に江東を幷せしむ。此れ臣の未だ解らざるの二なり。曹操が智計、人に殊絶す(一七)。其の兵を用ふるや、孫吳に髣髴たり(一八)。然れども南陽に困められ(一九)、烏巣に險しく、祁連に危く(二〇)、黎陽に偪られ(二一)、幾んど北山に(二二)敗れ、殆んど潼關に死せんとし(二三)、然して後に一時に僞定せるのみ(二四)。況んや臣の才弱く(二五)、危からざるを以て之を定めんと欲す。此れ臣の未だ解らざるの三なり。

庶竭二駑鈍一。攘二除姦凶一。以復二興漢室一。還二于舊都一。此臣所下以報二先帝一而忠中陛下上之職分也。至下於斟二酌損益一。進盡中忠言上。則攸之禕允之任也。願陛下託レ臣以二討賊興復之效一。不レ效則治二臣之罪一。以告二先帝之靈一。責二攸之禕允等之咎一。以彰二其慢一。陛下亦宜下自謀。以諮二諏善道一。察二納雅言一。深追中先帝遺詔上。臣不レ勝二受レ恩感激一。今當二遠離一。臨レ表涕泣。不レ知レ所レ云。

後出師の表（一）

諸葛孔明

先帝慮下漢賊不二兩立一。王業不中偏安上。故託レ臣以レ討レ賊也。以二先帝之明一。量二臣之才一。故知二臣伐レ賊才弱敵彊一也。然不レ伐レ賊。王業亦亡。惟坐而待レ亡。孰二與伐一レ

先帝漢と（二）賊と兩立せず、（三）王業偏安ならざらんことを慮る。故に臣に託するに賊を討ずるを以てせり。先帝の明を以て臣の才を量る。故に臣が賊を伐たんことを知れども、才弱く敵彊し。然れども賊を伐たずんば、王業も亦亡びん。惟坐して亡を待たよりんは、之を伐たんに孰與ぞ。是の故に臣に託して疑はざるなり。臣命を受くるの日、寢ぬるに席を安んぜず。食ふに味を甘んぜず。北征を思惟するに、宜しく先づ南に入るべし。故に五月瀘を渡つて深く不毛に入れり。（四）日を并せて食ふ。臣自ら（五）惜まざるに非ず。王業の蜀都に偏安なるを得べからざる

世之事。由是感激。許先帝以驅馳。後値傾覆。受任於敗軍之際。奉命於危難之間。爾來二十有一年矣。先帝知臣謹愼。故臨崩寄臣以大事也。受命以來。夙夜憂慮。恐付託不效。以傷先帝之明。故五月渡瀘。深入不毛。今南方已定。兵甲已足。當奬率三軍。北定中原。

以の職分なり。損益(一九)を斟酌し、進んで忠言を盡すに至つては、則ち攸之禕允の任なり。願くは陛下臣に託するに討賊興復の效を以てせよ。效ならずんば、則ち臣が罪(二〇)を治して以て先帝の靈に告げ、攸之禕允等の咎を責めて以て其の慢を彰はせ。陛下も亦宜しく自ら謀り、以て善道(二一)を諮諏し雅言を察納し、深く先帝の遺詔を追ふべし。臣、恩を受け感激するに勝へず。今當に遠く離る。表(二二)に臨んで涕泣して云ふ所を知らず。

(一) 後漢の桓帝と靈帝とが、德薄くして國を亡ぼせしことを歎く (二) 節義のために死す (三) 無々無位の庶人 (四) 襄陽城の西二十里の都 (五) 亂世に居りて聊か生命を全うし (六) 名譽顯達を求むるために諸侯に仕へず (七) 身分賤しきに拘らず (八) 身を枉げ (九) 如何にして世亂をしづめ、天下を一統すべきかを問ひ給ふ (一〇) 驅せ廻りて御用をつとむることを許せり (一一) 建安十三年の敗軍 (一二) 敗軍の後、命を受けて呉に往き、孫權の援兵を借り、共に魏の軍を赤壁に敗る (一三) 幼主を輔け漢室を興す事 (一四) 功績なくして顧託に背き、先帝の明鑑(めがね)を傷けんことを恐る (一五) 川の名井洞部句町縣より出で、東南海に入る (一六) 草木を生ぜざる處(南方未開の地) (一七) 進めひきゐて (一八) 力を盡す(駑鈍は馬の遲鈍なるもの、自ら卑めていふ) (一九) 政事の損と益とを考へ (二〇) 罪をたゞし (二一) 善道を問ひはかり、正言を受け納め (二二) 表を上るに際して

先帝在時。每與臣論此事。未嘗不歎息痛恨於桓靈也。侍中尙書長史參軍。此悉貞亮死節之臣也。陛下親之信之。則漢室之隆。可計日而待也。臣本布衣。躬耕南陽。苟全性命於亂世。不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙。猥自枉屈。三顧臣於草廬之中。諮臣以當

先帝在しゝ時、每に臣と此の事を論じ、未だ嘗て桓靈に歎息痛恨せずんばあらず。侍中尙書長史參軍は、此れ悉く貞亮にして節に死するの臣なり。陛下之を親み之を信ぜば、則ち漢室の隆ならんこと、日を計つて待つべし。臣本布衣、躬ら南陽に耕す。性命を亂世に苟全し、聞達を諸侯に求めず。先帝臣が卑鄙なるを以てせず。猥に自ら枉屈して、三たび臣を草廬の中に顧み、臣に諮ふに當世の事を以てす。是に由つて感激して、先帝に許すに驅馳を以てす。後、傾覆に値ひて任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉ぜり。爾來二十有一年、先帝臣の謹愼なるを知れり。故に崩ずるに臨んで臣に寄するに大事を以てす。命を受けてより以來、夙夜憂慮し、付託の效あらずして、以て先帝の明を傷らんことを恐る。故に五月瀘を渡つて深く不毛に入る。今南方已に定り、兵甲已に足れり。當に三軍を奬率して、北中原を定むべし。庶くは駑鈍を竭し、姦凶を攘除し、以て漢室を復興して舊都に還らんことを。此れ臣が先帝に報いて陛下に忠なる所

奸犯ㇾ科。及爲二忠善一者。宜下付二有司一。論二其刑賞一。以昭中陛下平明之治上。不ㇾ宜三偏私使二内外異一ㇾ法也。侍中侍郎郭攸之費褘董允等此皆良實。志慮忠純。是以先帝簡拔。以遺二陛下一。愚以爲宮中之事。事無二大小一。悉以咨ㇾ之。然後施行。必能裨二補闕漏一。有ㇾ所二廣益一。將軍向寵。性行淑均。曉二暢軍事一。試二用於昔日一。先帝稱ㇾ之曰ㇾ能。是以衆議擧ㇾ寵爲ㇾ督。愚以爲營中之事。事無二大小一。悉以咨ㇾ之。必能使二行陣和睦。優劣得一ㇾ所。親二賢臣一。遠二小人一。此先漢所二以興隆一也。親二小人一。遠二賢臣一。此後漢所二以傾頹一也。

以て之に咨らば、必ず能く行陣をして和睦し、優劣所を得しめん。（一八）賢臣を親み小人を遠くるは、此れ先漢の興隆せし所以なり。小人を親み賢臣を遠くるは、此れ後漢の傾頽せし所以なり。

（一）蜀の後帝（劉禪）建興五年三月、孔明、北方關中に入り、魏を平定し、長安の舊都を還さんとし、軍を率ゐて成都を發するに臨み、この表を上る （二）照烈皇帝（姓は劉、名は備、字は元德） （三）半途にして崩去す （四）蜀と魏と呉とに （五）我が蜀の地益州尤も疲れ敗る （六）手厚き待遇 （七）陛下の聽き給ふ所を光大にし （八）志士の氣概を大いに沮くせしむべし （九）自ら德を薄くし （一〇）他の喩を引きて非を飾り （一一）宮中は宦官婦女の勤むる處、府中は大臣宰相の居る處 （一二）善き者を登せ、惡しきものを罰し （一三）法を犯し （一四）私に偏りて公平を欠き （一五）擇び拔きて （一六）政道の闕目を補ひ （一七）淑良公平にして軍事に通ず （一八）優者にも劣者にも、適當の地位を得しむるならん

分。益州罷敝。此誠危急存亡之秋也。然侍衞之臣。不レ懈二於内一。忠志之士。忘二身於外一者。蓋追二先帝之殊遇一。欲レ報二之於陛下一也。誠宜下開二張聖聽一。以光二先帝遺德一。恢中弘志士之氣上。不レ宜三妄自菲薄。引レ喩失レ義。以塞二忠諫之路一也。宮中府中。倶爲二一體一。陟二罰臧否一。不レ宜二異同一。若有下作レ

志の士身を外に忘るゝは、蓋し先帝の殊遇を追うて、之を陛下に報ぜんと欲すればなり。誠に宜しく聖聽を開張して、以て先帝の遺德を光し、志士の氣を恢弘にすべし。宜しく妄に自ら菲薄にして、喩を引き義を失ひ、以て忠諫の路を塞ぐべからず。宮中府中は倶に一體たり。臧否を陟罰して宜しく異同あるべからず。若し、奸を作し科を犯し、及び忠善を爲す者あらば、宜しく有司に付して其の刑賞を論じ、以て陛下平明の治を昭にすべし。宜しく偏私して内外をして法を異にせしむべからざるなり。侍中侍郎、郭攸之、費褘、董允等は、此れ皆良實にして、志慮忠純なり。是を以て先帝簡拔して以て陛下に遺せり。愚以爲らく、宮中の事は、事大小となく、悉く以て之に咨り。然して後に施行せば、必ず能く闕漏を裨補して、廣益する所あらん。將軍向寵は、性行淑均にして軍事に曉暢し、昔日に試用せられたり。先帝之を稱して能ありと曰へり。是を以て衆議して寵を擧げて督と爲す。愚以爲らく、營中の事は、事大小となく、悉く

又諱二車轍之轍一爲中某字上也。諱二呂后名一。雉爲二野雞一。不レ聞丙又諱下治二天下一之治上爲乙某字甲也。今上章及詔。不レ聞レ諱二滸勢秉饑一也。惟宦官宮妾。乃不三敢言二諭及機一。以爲觸犯。士君子立レ言行レ事。宜三何所二法守一也。今考二之於經一。質二之於律一。稽レ之以二國家之典一。爲レ可爲二不可一耶。凡事二父母一。得レ如二曾參一。可二以無一レ譏也。作レ人得レ如二周公孔子一。亦可二以止一也。今世之士。不レ務レ行二周公孔子之行一。而諱二親之名一。則務レ勝二於周公孔子曾參一。亦見二其惑一也。夫周公孔子曾參卒不レ可レ勝。勝二周公孔子曾參一。乃比二於宦官宮妾一。則是宦官宮妾之孝二於其親一。賢二於周公孔子曾參一者耶。

(一五) 漢高祖の夫人 (一六) 唐代 (一七) 滸は太祖の諱の虎、勢は太祖の諱(世民)の世、秉は世祖の諱の昞、饑は玄宗の諱(隆基)の基に近し (一八) 諭は代宗の諱の豫、機は玄宗の諱の基に近し (一九) 詩經春秋等 (二〇) 當代國家の典法 (二一) 宦官宮妾はよく諱むにより、古の聖賢より勝れるかとの意(揶揄の語)

表類

出師(一)の表

諸葛孔明

先帝創レ業未レ半。而中道崩殂。今天下三

先帝(二)業を創むること未だ半ならず。而して中道(三)にして崩殂す。今天下(四)三分して益州(五)罷敝せり。此れ誠に危急存亡の秋なり。然して侍衛の臣内に懈らず、忠

時一。作二法制一以教二天下一者。非二周公孔子一歟。周公作レ詩不レ諱。孔子不三偏諱二二名一。春秋不レ譏レ不レ諱二嫌名一。康王釗之孫實爲二昭王一。曾參之父名皙。曾子不レ諱レ昔。周之時有二騏期一。漢之時有二杜度一。此其子宜二如何諱一。將諱二其嫌一。遂諱二其姓一乎。將不レ諱二其嫌一乎。漢諱二武帝名徹一爲レ通。不レ聞下

を律(りつ)に質(しつ)し、之を稽(かんが)ふるに國家(こつか)(二二)の典(てん)を以てす。可となさんか、不可となさんか。凡そ父母に事(つか)ふること、曾參(そうしん)の如きを得ば、以て譏(そしり)なかるべし。人と作(な)り、周公(しうこう)孔子(こうし)の如きを得ば、亦以て止(や)むべし。今世(こんせい)の士、周公孔子の行(おこなひ)を行ふことを務(つと)めず。親(おや)の名を諱むことは、則ち周公孔子より勝(まさ)らんことを務む。亦其の惑(まど)へるを見るなり。夫れ周公孔子曾參には卒(つひ)に勝(まさ)るべからず。周公孔子曾參に勝つて、乃ち宦官宮妾(くわんくわんきうせふ)に比(ひ)せば、則ち是れ宦官宮妾の其の親(おや)に(二三)孝(かう)なること、周公孔子曾參より賢(まさ)れる者か。

(一) 字は長吉、七歳辭章を善くし、二十歳詩に重名を騰す (二) 父の名の晉と進士の進と同音なる故、忌み避けて進士に擧げられざるをよしとす (三) 韓退之の門人 (四) 人の名二字なる時は、一字だけいふことを忌まずとの意（禮記曲禮に出づ） (五) 後漢の鄭玄 (六) 孔子の母の名徵在なる故、徵をいへば在を諱み、在をいへば徵を忌めども、一字別々にいふことは差支なきなり (七) 音聲相近き名は諱むに及ばず (八) 仁と人と同音なる故 (九) 周公の詩に「克く厥の後を昌にす」又、「駿に爾の私を發す」とあり、昌は父文王の名、發は兄武王と名なり (一〇) 論語に「杞は徵するに足らず」「其こゝに在り」などあり、徵と在とに觸る (一一) 齊の桓公、名は完の類 (一二) 孔子の門人、孝を以て名ありし人 (一三) 「昔吾が友」「衣を裼(せき)して弔ふの類」 (一四) 徹侯を通侯、蒯徹を蒯通といふ類 (一五)

賀且ㇾ得ㇾ罪。愈曰然。律曰。二名不二偏諱一。釋ㇾ之者曰。謂下若二言ㇾ徵不ㇾ稱ㇾ在。言ㇾ在不ㇾ稱ㇾ徵。是也。律曰。不ㇾ諱二嫌名一。釋ㇾ之者曰。謂下若二禹與ㇾ雨。丘與ㇾ蓲之類一。是也。今賀父名晉肅。賀擧二進士一。爲ㇾ犯二二名律一乎。爲ㇾ犯二嫌名律一乎。父名晉。子不ㇾ得ㇾ擧二進士一。若父名仁。子不ㇾ得ㇾ爲ㇾ人乎。夫諱始二於何

賀の父の名晉肅にして、賀進士に擧げらる。二名の律を犯すとなすか。嫌名の律を犯すとなすか。父の名晉にして、子進士に擧げらるゝを得ずんば、若し父の名仁(八)ならば、子は人たるを得ざらんか。夫れ、諱は何の時より始れる。法制を作つて以て天下に敎ふる者は周公孔子に非ずや。周公詩(九)を作つて諱まず。孔子(一〇)二名を偏諱せず。春秋(一一)に嫌名を諱まざるを譏らず。康王釗の孫實に昭王たり。曾參(一二)の父名は晳(一三)にして、曾子昔を諱まず。周の時に騏期あり。漢の時に杜度あり。此れ其の子宜しく如何して諱むべき。將た其の嫌を諱んで遂に其の姓を諱まんか。將た其の嫌を諱まざらんか。漢、武帝の名徹(一四)を諱んで通となす。又車轍の轍を諱んで某の字を爲せしを聞かず。呂后(一五)の名を諱んで雉を野雞となす。又天下を治むるの治を諱んで某の字と爲すを聞かず。今、上章(一六)及び詔に、(一七)滸勢秉饑を諱むを聞かず。惟宦官宮妾、乃ち敢て諭(一八)及び機を言はず。以爲らく、觸れ犯すと。士君子の言を立て事を行ふ、宜しく何の法り守る所なるべき。今之を經(一九)に考へ、之

周公教主遂過也。吾意周公輔成王。宜以道從容優樂。要歸之大中而已。必不逢其失而爲之辭。又不當束縛之。馳驟之。使若牛馬然。急則敗矣。且家人父子。尚不能以此自克。況號爲君臣者耶。是特小丈夫缺缺者之事。非周公所宜用。故不可信。或曰。封唐叔。史佚成之。

諱の辯

韓退之

愈與李賀書。勸賀擧進士。賀擧進士有名。與賀爭名者毀之曰。賀父名晉肅。賀不擧進士爲是。勸之擧者爲非。聽者不察。和而倡之。同然一辭。皇甫湜曰。子與

愈李賀に書を與へ、賀を勸めて進士に擧ぐ。賀、進士に擧げられて名あり。賀と名を爭ふ者、之を毀りて曰く、賀の父の名は晉肅なり。賀進士に擧げられざるを是となす。之を勸めて擧ぐる者も非となすと。聽く者察せず。和して之を倡へ、同然として辭を一にす。皇甫湜曰く、子と賀と且に罪を得んとすと。愈曰く、然り。律に曰く、二名は偏諱せずと。之を釋くもの曰く、徵を言つて在を稱せず、在を言つて徵を稱せざるが若きを謂ふ、是なりと。律に曰く、嫌名を諱まずと。之を釋くもの曰く、禹と雨と、丘と蓲との若きの類を謂ふ、是なりと。今、

中之戲一。以レ地以レ人。與二小弱者一爲二之主一。其得レ爲レ聖乎。且周公以二王之言一不レ可レ苟爲而已。必從而成レ之耶。設有下不幸王以二桐葉一戲中婦寺上。亦將二擧而從一レ之乎。凡王者之德。在二行レ之何若一。設未レ得二其當一。雖二十易一レ之不レ爲レ病。要於二其當一。不レ可レ使レ易也。而況以二其戲一乎。若戲而必行レ之。是

其の戲を以てせんや。、若し戲にして必ず之を行はば、是れ周公、王をして過を遂げしむるなり。吾意ふに、周公成王を輔くること、宜しく道を以て從容優樂して(一一)、之を大中に歸せんを要すべきのみ。必ず其の失を逢へて(一二)、之が辭を爲らず。又當に之を束縛し(一三)之を馳驟し、牛馬の若く然らしむべからず。急なるときは則ち敗る(一四)。且つ家人父子すら、尙ほ此を以て自ら克つ能はず(一五)。況んや號して君臣たるをや。是れ特に小丈夫缺缺たる者(一六)の事にして、周公の宜しく用ふべき所に非ず。故に信ずべからざるなり。或は曰く、唐叔を封ぜしことは、史佚(一七)之を成せりと。

(一) 言行の是非眞僞を論じ、大義により判別するなり (二) 呂氏春秋說苑等を指す (三) 桐葉を圭(諸侯を封ずるしるしとするもの)の形に剪り小弟に與ふ (四) 名は旦、武王の弟、成王の叔父 (五) 春秋の晉、戰國の趙、魏の太原郡の地 (六) よき時機を見て (七) 道理にはづれたる戲を事實にし (八) 婦女宦官 (九) 善惡如何により、或は行ひ或は行はず (一〇) 惡しとせず (一一) 强ひて過を成し遂ぐることを敎ふるなり (一二) ゆるく、やはらかに樂ましめ、大公私正の道に歸するを要す (一三) 行ふを得ざらしめ、又は無理に行はしむる類 (一四) 掣肘すること急激なれば君臣の道やぶれ損ふ (一五) 束縛馳驟に堪ふる能はず (一六) こざかしき貌 (一七) 武王の大史尹佚

古之傳者有レ言。成王以二桐葉一與二小弱弟一。戲曰。以封レ汝。公入賀。王曰。戲也。周公曰。天子不レ可レ戲。乃封二小弱弟於唐一。吾意不レ然。王之弟當レ封耶。周公宜三以レ時言二於王一。不下待二其戲一而賀以成上レ之也。不レ當レ封耶。周公乃成二其不レ

桐葉弟を封ずる辯（一）

柳子厚

古の傳ふる者言へるあり。成王（二）桐葉を以て小弱弟に與へ、戲れて曰く、以て汝を封ずと。（三）周公入りて賀す。王の曰く、戲なりと。周公曰く、天子は戲るべからずと。乃ち小弱弟を（五）唐に封ぜりと。吾意ふに然らず。王の弟當に封ずべくんば、周公宜しく（六）時を以て王に言すべし。其の戲るゝを待つて賀して以て之を成さざるなり。當に封ずべからずんば、周公乃ち其の（七）中らざるの戲を成し、地を以て人を以て、小弱の者に與へて之が主となさば、其れ聖たるを得んや。且つ周公、王の言苟もすべからざるのみを以て、必ず從つて之を成さば、設し不幸にして、王桐葉を以て（八）婦寺に戲るゝことあるも、亦將に擧げて之に從はんとするか。凡そ王者の德は、之を行ふこと（九）何若に在り。設し未だ其の當を得ずんば、十たび之を易ふと雖も（一〇）病となさず。要は、其の當に於て易へしむべからざるなり。而るを況んや

四游ニ咸池一略、扶桑一。艸木衣
被昭回光。追ニ逐李杜一參翶
翔。汗流籍湜走且僵。滅ニ沒
倒景一不レ得レ望。作レ書詆レ佛譏ニ
君王一。要下觀ニ南海一窺ニ衡湘一歷ニ
舜九疑一弔中英皇上。祝融先驅
海若藏。約ニ束鮫鱷一如レ驅レ羊。
鈞天無レ人帝悲傷。謳吟下
招遣ニ巫陽一爆牲雞卜羞ニ我觴一。於餐荔丹與ニ蕉黃一。公不ニ少留一我涕滂。翩然被レ髮下ニ大荒一。

詆り君王を譏り。南海を觀て衡湘(一二)を窺ひ。舜の九疑(一三)を歷て英皇(一四)を弔はんと要す。祝融先驅(一五)して海若(一六)藏れ。鮫鱷を約束して羊を驅るが如し。(一七)鈞天(一八)人なくして帝(一九)悲傷す。謳吟下し招いて巫陽(二〇)を遣す。爆牲雞卜(二一)我が觴を羞め。於に荔丹と蕉黃(二二)とを餐せしむ。公少くも留らず我が涕滂(二三)たり。翩然として髮を被つて大荒(二四)より下る。

(一) 白雲の帝郷、即ち天 (二) 天河を攪り、天の文章(天文)を分つ (三) 織女星 (四) 朝廷 (五) 人世のにごり、けがれを掃ふ（粃糠ぬかかす） (六) 日の入る所 (七) 日の出づる所 (八) 文公が文章道德の光、草木にまで及ぶ (九) 李白、杜甫 (一〇) 張籍、皇甫湜 (一一) 日月よりも上にある天上至高の所 (一二) 衡山湘水 (一三) 舜を葬りし山 (一四) 舜の妃、娥皇、女英 (一五) 火の神、南方炎帝の佐 (一六) 海神 (一七) 束縛して害をなさしめず (一八) 天の中央 (一九) 天帝 (二〇) 巫祝をして謳吟しり、下り招かしむ (二一) 牛羊を牲として、雞骨を以てトひ祭る (二二) 赤き荔枝と黃なる芭蕉を供ふ (二三) 強き雨の如し (二四) 大空より下り來れ

壽焉。而廟在刺史公堂之後。民以出入爲艱。前太守欲請諸朝作新廟。不果。元祐五年。朝散郎王君滌來守是邦。凡所以養士治民者。一以公爲師。民既悅服。則出令曰。願新公廟者聽。民讙趨之。卜地於州城之南七里。期年而廟成。或曰。公去國萬里。而謫于潮。不能一歲而歸。沒而有知。其不眷戀于潮也審矣。軾曰。不然。公之神在天下者。如水之在地中。無所往而不在也。而潮人獨信之深。思之至。焄蒿悽愴。若或見之。譬如鑿井得泉。而曰水專在是。豈理也哉。元豐元年。詔封公昌黎伯。故榜曰昌黎伯韓文公之廟。潮人請書其事于石。因爲作詩以遺之。使歌以祀公。其辭曰。

公昔騎龍白雲鄕。手抉雲漢分天章。天孫爲織雲錦裳。飄然乘風來帝旁。下與濁世掃粃糠。

山の廟に詣て神靈を感動し、雲雨を興さしむ　(五)　文公潮州に至り、文を作りて惡溪の中に投じ、鰐魚を退けて、その害を防ぐ　(六)　文公の直を忌みし二人の者　(七)　神として祀られ百世に存す　(八)　文公の能くするは天意に合する正道なり、人意に合する智巧にあらず　(九)　文集行狀にあつし　(一〇)　一般の人民に及ぶ　(一一)　宋の哲宗の年號　(一二)　一年を歴ずして袁州に移さる　(一三)　潮州を慕ひ顧みず　(一四)　神靈の現はれ動く處と、身の毛もよだつ如く悽然たり（禮記、祭儀篇參照）　(一五)　神宗の年號

公昔龍に騎る白雲の鄕。(二) 手は雲漢を抉けて天章を分つ。(三) 天孫爲に織る雲錦の裳。飄然風に乘じて(四)帝の旁に來る。下濁世のために(五)粃糠を掃ひ、西咸池に(六)游んで扶桑を(七)略す。(八)艸木衣被す昭回の光。(九)李杜を追逐して參つて翶翔す。汗流れて(一〇)籍湜走つて且つ僵る。(一一)倒景に滅沒して望むことを得ず。書を作つて佛を

身一日安㆗於朝廷之上㆖。蓋公之所レ能者天也。其所レ不レ能者人也。始潮人未レ知レ學。公命ニ進士趙德一爲ニ之師一。自レ是潮之士。皆篤ニ於文行一。延及ニ齊民一。至ニ于今一。號稱レ易レ治。信乎孔子之言。君子學レ道則愛レ人。而小人學レ道則易レ使也。潮人之事レ公也。飲食必祭。水旱疾疫。凡有レ求必

郎王君滌、來つて是の邦に守たり。凡そ士を養ひ民を治むる所以の者、一に公を以て師となす。民既に悅服す。則ち令を出して曰く、公の廟を新にせんと願はん者は聽さんと。民懽びて之に赴る。地を州城の南七里に卜し、期年にして廟成る。或ひと曰く、公國を去ること萬里にして潮に謫せられ、一歲(一二)なること能はずして歸れり。沒して知ることありとも、其れ潮を眷戀(一三)せざるや審なりと。軾が曰く、然らず。公の神、天下に在ること、水の地中に在つて往く所として在らざるなきが如し。而して潮人獨り之を信ずること深く、之を思ふこと至れり。焄蒿(一四)悽愴、之を見るあるが若し。譬へば井を鑿つて泉を得るが如し。而して水專ら是に在りと曰はば、豈理ならんや。(一五)元豐元年、詔して公を昌黎の伯に封ず。故に榜して昌黎の伯韓文公の廟と曰ふ。潮人其の事を石に書せよと請ふ。因つて爲に詩を作つて以て之を遺り、歌つて以て公を祀らしむ。其の辭に曰く、

㊀ 天と人との別　㊁ 人のたくみは至らぬ所なし　㊂ 頑冥な心のもの、易に「中孚にして豚魚吉」　㊃ 文公、衛

蓋嘗論ニ天人之辨一。以謂人無レ所レ不レ至。惟天不レ容レ僞。智可三以欺二王公一。不レ可三以欺二豚魚一。力可三以得二天下一。不レ可以得二匹夫匹婦之心一。故公之精誠。能開二衡山之雲一。而不レ能レ回二憲宗之惑一。能馴二鱷魚之暴一。而不レ能レ弭二皇甫鎛李逢吉之謗一。能信二於南海之民一。廟二食百世一。而不レ能レ使下其

蓋し嘗て天人の辨を論じ(一)、以謂らく人至らざる所なし(二)、惟天は僞を容れず。智は以て王公を欺くべきも、以て豚魚(三)を欺くべからず。力は以て天下を得べきも、以て匹夫匹婦の心を得べからず。故に公の精誠、能く衡山(四)の雲を開けども、而も憲宗の惑を回す能はず。能く鱷魚(五)の暴を馴れしむれども、而も皇(六)甫鎛李逢吉の謗を弭むる能はず。能く南海の民を信ぜられて、百世に廟食(七)すれども、而も其の身をして一日も朝廷の上に安んぜしむる能はず。(八)蓋し公の能くする所のものは天なり。其の能くせざる所のものは人なり。始め潮人未だ學を知らず、公進士趙德に命じて之が師となす。是より潮の士皆文行(九)に篤く、延いて齊民(一〇)に及び、今に至るまで號して治め易しと稱す。信なるかな孔子の言。君子道を學べば則ち人を愛し、小人道を學べば則ち使ひ易しと。潮人の公に事ふるや、飲食にも必ず祭り、水旱疾疫、凡そ求むるとあれば必ず禱る。廟は刺史の公堂の後に在り。民出入を以て艱しとなす。前太守諸を朝に請うて新廟を作らんと欲して果さず。元祐(一一)五年、朝散

良平失其智。賁育失其勇。儀秦失其辯。是孰使其然哉。其必有不依形而立。不恃力而行。不待生而存。不隨死而亡者矣。故在天爲星辰。在地爲河嶽。幽則爲鬼神。而明則復爲人。此理之常。無足怪者。自東漢以來。道喪文弊。異端並起。歷唐貞觀開元之盛。輔以房杜姚宋。而不能救。獨韓文公起布衣。談笑而麾之。天下靡然從公。復歸于正。蓋三百年于此矣。文起八代之衰。道濟天下之溺。忠犯人主之怒。而勇奪三軍之帥。此豈非參天地關盛衰。浩然而獨存者乎。

公に從ひ、正に復歸すること、蓋し此に三百年。文は八代の衰を起し、道は天下の溺を濟ひ、忠は人主の怒を犯し、勇は三軍の帥を奪ふ。此れ豈天地に參り、盛衰に關り、浩然として獨り存する者に非ずや。

(一) 微賤の身にて後世の師となり、一言の教も天下の法式となるものは (二) 天地の化育にも參し、盛衰の運命にも關することあり (三) 自ら由來あり (四) 朽ちずして神靈となる (五) 古の申伯呂侯は嵩山の神靈降りて人間に生れたりと傳へらる (六) 殷の高宗の相傅說は死して列星となると傳へらる (七) 天地の正氣（孟子公孫丑上篇參照） (八) 人身の中（尋は八尺、常はその倍） (九) 漢の高祖の謀臣、張良・陳平 (一〇) 古の勇士、孟賁、夏育 (一一) 戰國の策士蘇秦張儀 (一二) 人の形に假寓するも、その形に依りて立たず、永久不滅なり (一三) 人力によりて行はるるにあらず (一四) 太宗と玄宗との年號 (一五) 房玄齡杜如晦ともに太宗を輔け姚崇宋璟ともに玄宗を輔く (一六) 卑賤の身 (一七) 東漢、魏、晉、宋齊、梁、陳、隋 (一八) 佛老に溺れしを救ふ (一九) 憲宗、佛骨を迎へて禁中に入れし時文公表を上りて極諫す、憲宗大に怒り、文公を潮州に貶す (二〇) 鎭州の亂にその將王廷湊を諭し、畏服せしむ

匹夫而爲二百世師一。一言而爲二天下法一。是皆有下以參二天地之化一。關中盛衰之運上。其生也有レ自來。其逝也有レ所レ爲。故申呂自レ嶽降。傅說爲二列星一。古今所レ傳。不レ可レ誣也。孟子曰。我善養二吾浩然之氣一。是氣也寓二於尋常之中一。而塞二乎天地之間一。卒然遇レ之。王公失二其貴一。晉楚失二其富一。

匹夫にして百世の師となり、一言にして天下の法となる。是皆以て天地の化に參り、盛衰の運に關るあり。其の生るゝや自つて來るあり、其の逝くや爲る所あり。故に申呂は嶽より降り、傅說は列星となる。古今の傳ふる所、誣ふべからざるなり。孟子曰く、我能く吾が浩然の氣を養ふと。是の氣や尋常の中に寓して天地の間に塞がる。卒然として之に遇へば、王公も其の貴を失ひ、晉楚も其の富を失ひ、良平も其の智を失ひ、賁育も其の勇を失ひ、儀秦も其の辯を失ふ。是れ孰か其れをして然らしむるや。其れ必ず形に依つて立たず、力を恃んで行はれず、生を待つて存せず、死に隨つて亡びざるものあらん。故に天に在つては星辰となり、地に在つては河嶽となり、幽には則ち鬼神となり、明には則ち復人となる。此れ理の常にして、怪むに足る者なし。東漢より以來、道喪び文弊れ、異端並び起る。唐の貞觀開元の盛を歷て、輔くるに房杜姚宋を以てせしも、而も救ふこと能はず。獨り韓文公布衣より起り、談笑して之を麾けば、天下靡然として

脫ニ於虎豹之秦一。嗟乎。孟嘗君特雞鳴狗吠之雄耳。豈足ニ以言レ得レ士。不レ然擅ニ齊之強一得ニ一士一焉。宜ニ可以南面一而制レ秦。尚取ニ雞鳴狗吠之力一哉。雞鳴狗吠之出ニ其門一。此士之所ニ以不レ至也。

も、宜しく以て南面(なんめん)して秦を制(せい)すべし。(五)尚(な)ほ雞鳴狗吠(けいめいくはい)の力を取らんや。雞鳴狗吠の其の門に出づるは、此れ士(し)(六)の至らざる所以なり。

㈠ 名は文、姓は田氏、齊の威王の少子靖郭君田嬰の子、其の傳は史記列傳にあり ㈡ 史記列傳に、「孟嘗君の薛にあるや、諸侯の賓客及び亡人罪ある者を招致し、皆孟嘗君に歸す、孟嘗君、業を舍てて厚く之を遇す、故を以て天下の士を傾け、食客數千人」とあり ㈢ 同、孟嘗君、秦に至りて囚へられし條に「孟嘗君人をして幸姬に抵り、解かんことを求めしむ、幸姬曰く、妾願くは君の狐白裘を得んと、この時孟嘗君に一狐白裘あり、直千金、天下無雙なり、秦に入りて之を昭王に獻じ更に他の裘なし、孟嘗君之を患へ、徧に客に問ふに能く對ふるものなし、最下座に能く狗盜をなすものあり、曰く、臣よく狐白裘を得んと、乃ち、夜、狗をまね、以て秦の宮藏中に入り、獻ずる所の狐白裘を取り、以て秦王の幸姬に獻ず、幸姬ために昭王に言ひ、昭王孟嘗君を釋す、孟嘗君出づるを得、卽ち馳せ去つて封傳を更め名姓を變じ、以て關を出づ、夜半函谷關に至る、（中略）關の法、雞鳴いて客を出す、孟嘗君（秦人の）追ひ至らんことを恐る、客の下坐に居る者、能く雞鳴をなすものあり、而して雞盡く鳴く、遂に傳を發して出でしむ」とあり、虎豹は強く恐ろしきに喩ふ ㈣ 雞鳴をなし又は狗の眞似をする盜賊の長たるに過ぎず ㈤ 天下の君となり、秦を征服すべきなり ㈥ 眞に賢くすぐれたる士

碑類

潮州韓文公(てうしうかんぶんこう)の廟(べう)の碑(ひ)

蘇子瞻

本。以觀二其疎密一。而木之性日以離矣。雖レ曰レ愛レ之。其實害レ之。雖レ曰レ憂レ之。其實讎レ之。故不二我若一也。吾又何能爲哉。問者曰。以二子之道一移二之官理一可乎。駝曰。我知レ種レ樹而已。理非二吾業一也。然吾居レ鄕見二長レ人者一。好煩二其令一。若二甚憐一焉。而卒以禍。旦暮吏來而呼曰。官命促二爾耕一。勗二爾植一。督二爾穫一。蚤繰而緒。蚤織而縷。字二而幼孩一。遂二而雞豚一。鳴レ鼓而聚レ之。擊レ木而召レ之。吾小人具二食饔一以勞二吏者一。且不レ得レ暇。又何以蕃二吾生一安二吾性一耶。故病且怠。若レ是則與二吾業者一。其亦有レ類乎。問者嘻曰。不二亦善一夫。吾問レ養レ樹得二養レ人術一。傳二其事一以爲二官戒一也。

しむ　（九）根　（一〇）根土を築きかたむ　（一一）案じ煩ふなかれ　（一二）植えたる後は、立ち去つて、捨て置くべし　（一三）子の如く、大切に取扱ひ　（一四）棄てたる如くに、少しも構ふな（揺り動かしなどするなとの意）　（一五）なさへ、へらず　（一六）愛護する者　（一七）木の膚に爪を立て、生きたるか枯れたるかを驗す　（一八）土としつくり附きゐるや否やを見る　（一九）木の性、日々に自然に遠かる　（二〇）何ぞ他の良き方法をなさんや　（二一）官治に同じ　（二二）收穫　（二三）絲すぢ　（二四）幼兒を養ふ　（二五）繁殖せしめよ　（二六）朝夕の食膳　（二七）民を養ひ治むる術

孟嘗君の傳を讀む（一）

王荊公

世皆稱。孟嘗君能得レ士。士以レ故歸レ之。而卒賴二其力一。以

世皆稱す。孟嘗君（二）は能く士を得たり。士故を以て之に歸し、卒に其の力に賴つて（三）、以て虎豹の秦より脱れたりと。嗟乎、孟嘗君は特に雞鳴狗吠（四）の雄のみ。豈以て士を得たりと言ふに足らんや。然らざれば、齊の強を擅にして、一士を得と

者全。而其性得矣。故吾不害其長而已。非有能碩而茂之也。不抑耗其實而已。非有能蚤而蕃之也。他植者則不然。根拳而土易。其培之也。若不過焉。則不及焉。苟有能反是者。則又愛之太恩。憂之太勤。旦視而暮撫。已去而復顧。甚者爪其膚以驗其生枯。搖其

樹を種うることを知るのみ。理は我が業に非ざるなり。然れども、吾郷に居て人に長たるものを見るに、好んで其令を煩しうし、甚だ憐むが若くなれども、而も卒に以て禍す。旦暮に吏來つて呼んで曰く、官、命あり。爾が耕を促にし、爾が植を勗め、爾が穫を督し、(二二)蚤く而が緒を繰り、(二三)蚤く而が縷を織り、而が幼孩を字ひ、(二四)而が雞豚を遂げよと。(二五)鼓を鳴して之を聚め、木を擊つて之を召す。吾小人、飧饔(二六)を具へて以て吏者を勞ふ。且つ暇あるを得ず。又何を以てか吾が生を蕃くして吾が性を安んぜんや。故に病んで且つ怠る。是の若くならば、則ち吾業とする者と、其れ亦類するあるかと。問ふ者喜んで曰く、亦善からずや。吾樹を養ふことを問うて、人を養ふ術(二七)を得たり。其の事を傳へて、以て官の戒と爲さんと。

㊀ せしむ ㊁ 背部隆起し、かゞまりて歩行す ㊂ 駱駝に類す ㊃ 眺め樂むために庭木を植う ㊄ 樹木の世話をなさしむ ㊅ 移し植う ㊆ その方法をうゞひて眞似をなす ㊇ 木の自然に順ひ、生育する本性を遂げ

所種樹或遷徙無不活且碩茂蚤實以蕃。他植者雖窺伺傚慕莫能如也。有問之。對曰。橐駝非能使木壽且孳也。以能順木之天。以致其性焉爾。凡植木之性。其本欲舒。其培欲平。其土欲故。其築欲密。既然已。勿動勿慮去不復顧。其蒔也若子。其置也若棄。則其天

の築くは密ならんことを欲す。既に然くし已つて、動かす勿れ、慮る勿れ、去てて復顧みざれ、其の蒔うるや子の若く、其の置くや棄つるが若くせよ。則ち其の天なる者全うして、其の性得ん。故に、吾れ其の長ずることを害げざるのみ、能く碩にして之を茂らしむるあるに非ざるなり。其の實ることを抑耗せざるのみ、能く蚤くして之を蕃からしむるに非ざるなり。他の植うる者は則ち然らず、根を拳げて土を易ふ。其の之を培ふや、若しくは過ぎざれば、則ち及ばず。苟も能く是に反する者は、則ち又之を愛して太だ恩み、之を憂へて太だ勤む、旦に視て、暮に撫で、已に去つて復顧る。而して甚しきものは、其の膚に爪して以て其の生枯を驗し、其の本を搖して以て其の疎密を觀る。而して木の性日〻に以て離る。之を愛すと曰ふと雖も、其の實は之を害し、之を憂ふと曰ふと雖も、其の實は之に讎す。故に我に若かざるなり。吾又何ご能く爲さんやと。問ふ者も曰く、子の道を以て、之を官理に移さば可ならんかと。駝曰く、我は

郭橐駝不レ知ニ始何名一。病レ僂隆然伏行。有下類ニ橐駝一者上。故鄉人號曰レ駝。駝聞レ之曰。甚善。名我固當。因捨ニ其名一。亦自謂ニ橐駝一云。其鄉曰ニ豐樂一。鄉在ニ長安西一。駝業レ種レ樹。凡長安豪家富人爲ニ觀游及賣レ果者一。皆爭迎取養視。駝

樹を種うる郭橐駝の傳　　柳子厚

郭橐駝は始め何の名たるを知らず。(一)僂を病み(二)隆然として伏して行く。(三)橐駝に類たるものあり。故に鄉人號して駝と曰ふ。駝之を聞いて曰く、甚だ善し、我に名くるに固に當れりと。因つて其の名を捨て、亦自ら橐駝と云ふ。其の鄉を豐樂と曰ふ。鄉は長安の西に在り。駝、樹を種うることを業とす。凡そ長安の豪家富人、(四)觀游を爲し及び果を賣るもの、皆爭ひ迎へ、取つて(五)養視せしむ。駝が種うる所の樹は、或は(六)遷徙すれども、活き且つ碩に茂り、蚤く實りて以て蕃からざるなし。他の植うる者、(七)窺伺して傚慕すと雖も、能く如くもの莫し。之を問ふあれば、對へて曰く、橐駝は能く木をして壽にして且つ孳からしむるに非らず。能(八)く木の天に順ふを以てし、以て其の性を致すのみ。凡そ植木の性、其の(九)本は舒びんことを欲し、其の培ふは平ならんことを欲し、其の土は故きことを欲し、其

有意會、便欣然忘食。性嗜酒。家貧不能常得。親舊知其如此、或置酒而招之。造飲輒盡、期在必醉。既醉而退。曾不吝情去留。環堵蕭然、不蔽風日。短褐穿結、簞瓢屢空。晏如也。常著文章自娯。頗示己志。忘懷得失。以此自終。贊曰、黔婁有言。不戚戚於貧賤、不汲汲於富貴。極其言、茲若人之儔乎。酣觴賦詩、以樂其志。無懷氏之民歟。葛天氏之民歟。

て退き、曾て情を去留に吝にせず。(七)環堵蕭然として(八)風日を蔽はず。(九)短褐穿結(一〇)し、簞瓢屢〻空しけれども晏如たり。(一一)常に文章を著して自ら娯み、頗る己が志を示し、(一二)懷を得失に忘る。(一三)此を以て自ら終ふ。

贊に曰く、黔婁言へることあり。(一四)貧賤に戚戚たらず、(一五)富貴に汲汲たらずと。(一六)其の言を極むるに、茲れ若くのごとき人の儔か。(一七)酣觴して詩を賦し、(一八)以て其の志を樂しましむ。無懷氏の民か。(一九)葛天氏の民か。

(一)陶淵明の門邊に五株の柳あり、よつて自ら五柳先生といふ　(二)實は潯陽柴桑里の人　(三)靜靖して　(四)意に適する毎に　(五)飲み盡す　(六)必ず醉ふことを期す　(七)強いて去らんともせず、又留らんともせず　(八)垣の内僅かに　(九)風をも日をも防がず　(一〇)短き褐衣(毛織の粗布)を着れ、(簞は飯を容るゝ器)　(一一)屢々飲食に窮すれども、(瓢は食を容れ)　(一二)心安らかなり　(一三)心を利害得失に煩しめず　(一四)古の賢なる高士、姓名は陳　名は黔婁、字は貞　(一五)憂ふる貌　(一六)急めて止まざる貌　(一七)その言を推し考ふるに、黔婁もまた五柳先生の如き人か　(一八)酒を飲み詩を作り　(一九)自由にして慾なること、太古の王、葛天氏、無懷氏などの民の如か

慮。其樂陶陶。兀然而醉。恍爾而醒。靜聽不レ聞二雷霆之聲一。熟視不レ見二泰山之形一。不レ覺二寒暑之切レ肌。嗜慾之感レ情。俯觀二萬物擾擾焉一。如二江漢之浮萍一。二豪侍レ側焉。如三蜾蠃之與二螟蛉一。

たる貌　(一二)はげしき雷霆も聞えず高き泰山も見えず　(一三)萬物の亂るゝを見ること、大江山の浮萍の如く　(一四)側なる公子處士の二人はぢかばち、あをむしなどの如く見る

傳類

五柳先生の傳(一)

陶淵明

先生不レ知二何許人一。亦不レ詳二其姓字一。宅邊有二五柳樹一。因以爲レ號焉。閒靖少レ言。不レ慕二榮利一。好レ讀レ書。不レ求二甚解一。每レ

先生は何許(二)の人なるを知らず。亦其の姓字を詳にせず。宅邊に五柳樹あり。因つて以て號と爲す。(三)閒靖にして言少し。榮利を慕はず。書を讀むことを好めども、甚だ解せんことを求めず。(四)意に會ふことある每に、便ち欣然として食を忘る。性酒を嗜めども、家貧うして常に得ること能はず。親舊其の此の如くなるを知り、或は置酒して之を招けば、造り飲んで輒ち盡す。(五)期必ず醉ふに在り。既に醉う

瞬。八荒爲二庭衢一。行無二轍跡一。居無二室廬一。幕レ天席レ地縱二意所一レ如。止則操レ卮執レ觚。動則挈レ榼提レ壺。唯酒是務。焉知二其餘一。有二貴介公子。搢紳處士一。聞二吾風聲一。議二其所一レ以。乃奮レ袂攘レ衿。怒レ目切レ齒。陳二說禮法一。是非鋒起。先生於レ是方捧レ甖承レ槽。銜レ盃漱レ醪。奮レ髯踑踞。枕レ麴藉レ糟。無レ思無レ

榼を挈り壺を提げ、唯酒をのみ是れ務む。焉んぞ其の餘を知らんや（七）、貴介公子（八）搢紳處士（九）あつて、吾が風聲を聞き（一〇）、其の所以を議すれば、乃ち袂を奮ひ衿を攘げて、目を怒らせ齒を切し、禮法を陳說して（一一）、是非鋒起す（一二）。先生是に於て、方に甖（一三）を捧げ槽（一四）を承け、盃を銜み醪（一五）を漱ひ、髯を奮して踑踞し（一六）、麴を枕とし糟を藉く（一七）、思ふなく、慮るなく、其樂陶陶たり（一八）。兀然（一九）として醉ひ、恍爾（二〇）として醒む。靜に聽けども雷霆の聲を聞かず、熟〻（二一）視れども泰山の形を見ず。寒暑の肌に切に、嗜慾の情に感ずるを覺えず。俯して萬物の擾擾焉たる（二二）を觀ること、江漢の浮萍の如く、二豪（二三）側に侍べるは、蜾蠃と螟蛉との如し。

（一）劉伯倫自ら云ふ　（二）天地開闢以來を一日と考へ、萬年を少時と考ふ（志の廣大なるをいふ）　（三）日月をあかりとりのかどとし、宇宙を庭とす　（四）行くには車馬を用ひず、居るには家を要せず（轍跡は車のわだちのあと）　（五）心の思ふまゝにす　（六）居る時は杯を執り、行く時に樽を携ふ　（七）その外の事を思はず　（八）貴人（介は文は大に同じ）　（九）在野の士　（一〇）我が評判を聞き、彼是と議論す　（一一）禮法を說きて飲酒の害を述べ　（一二）或は是とし、或は非とし議論四方に起る　（一三）酒壺　（一四）酒槽　（一五）濁酒　（一六）兩足を伸べて坐る　（一七）酒間に臥す（麴はかうぢ、糟は酒かす、轉じてともに酒の意）　（一八）心[illegible]ぎ樂しむ　（一九）動かざる貌　（二〇）うつとりとし

蠲二除妖災一。瑞慶大來。兇徒逆儔。涵二濡天休一。死生堪レ羞。功勞位尊。忠烈名存。澤流二子孫一。盛德之興。山高日昇。萬福是膺。能令二大君聲容沄沄一。不レ在二斯文一。湘江東西。中直二浯溪一。石崖天齊。可レ磨可レ鐫。刊二此頌一焉。何千萬年。

（四）天子の車駕南方蜀に幸す（五）天、唐の世を盛にせんとし、我肅宗皇帝を祐く（六）肅宗、北方靈武の地に即位し、官兵を催して出て來る（七）獨立して一たび招けば、萬騎立どころに集る（麾は指揮のはた、飛鳥を畫きたるはた）（八）肅宗の太子廣平郡王（後の代宗）兵を愛撫し、衆賊を討ちはらふ（九）兩京を復するに、時を約せし如く少しも遲滯せず（一〇）昔より、國をたもつに、かくの如く早かりしものなし（一一）玄宗、肅宗（一二）わざはひ（一三）逆賊の黨類も、赦されも天恩に浴し、死者生者、ともに前非を悔ゆ（一四）餘澤、子孫に及ぶ（一五）肅宗の功名を永く後世に傳へんことは（沄々は水の流轉する貌）（一六）この頌文の力なるべし（一七）廣西興安縣に出で、湘口に至り、瀟水と合す（一八）たゞ千萬年のみならず、何時までも傳はるべし

有二大人先生一。以二天地一爲二一朝一。萬期爲二須臾一。日月爲二扃

酒徳の頌

劉伯倫

（一）大人先生といふものあり。（二）天地を以て一朝となし、萬期を須臾となし、（三）日月を扃牖となし、八荒を庭衢となす。（四）行くに轍跡なく、居るに室廬なし。天を幕とし地を席とし、（五）意の如く所を縱にす。（六）止れば則ち卮を操り觚を執り、動けば則ち

噫嘻前朝。孽臣姦驕。爲レ昏爲レ妖。邊將騁レ兵。毒二亂國經一。群生失レ寧。大駕南巡。百僚竄レ身。奉レ賊稱レ臣。天將レ昌レ唐。繄睨二我皇一。匹馬北方。獨立一呼。千麾萬旟。戎卒前驅。我師其東。儲皇撫レ戎。蕩二攘群兇一。復復指レ期。曾不レ踰レ時。有レ國無レ之。事有二至難一。宗廟再安。二聖重歡。地闢天開。

噫嘻前朝、(一)孽臣姦驕にして、昏をなし妖をなす。(三)邊將兵を馳せて、國經を毒亂し、群生寧きを失ふ。(四)大駕南巡して、百僚身を竄し、賊を奉じて臣と稱す。天將に唐を昌にせんとし、繄に我が皇を睨る。(六)匹馬北方よりし、(七)獨り立ち一たび呼びて、(五)千麾萬旟、戎卒前驅す。我が師其れ東し、(八)儲皇戎を撫で、群兇を蕩攘す。復た復すること期を指して、(九)曾て時を踰えず。(一〇)國を有つにかくのごときなし。事に至難あり、宗廟再び安く、(一一)二聖重ねて歡ぶ。地闢け天開け、(一二)妖災を錮け除き、瑞慶大に來る。(一三)兇徒逆濤、天休に涵濡し、死生も羞づるに堪へたり。功勞あるは位尊く、忠烈なるは名存し、(一四)澤子孫に流る。盛德の興る、山の高きごとく、日の昇るごとく、萬福是れ膺く、能く大君をして、(一五)聲容沄沄たらしむること、斯の文に在らざらんや。(一六)湘江の東西、(一七)中涪溪に直つて、石崖天と齊し。磨すべく鐫るべし。此の頌を刋む。(一八)何ぞ千萬年のみならん。

(一) 文宗の世　(二) 禍をなせし臣李林甫（祿山をす、めて反せしむ）　(三) 邊土の將安祿山、兵を馳せて國政を亂す

無爲之場。休徵自至。壽考無疆。雍容垂拱。永永萬年。何必偃仰屈信若彭祖。煦噓呼吸如喬松。眇然絕俗離世哉。詩曰。濟濟多士。文王以寧。蓋信乎其以寧也。

天寶十四年。安祿山陷洛陽。明年陷長安。天子幸蜀。太子卽位於靈武。明年皇帝移軍鳳翔。其年復兩京。上皇還京師。於戲。前代帝王。有盛德大業者。必見於歌頌。若今歌頌大業。刻之金石。非老於文學。其誰宜爲。頌曰。

大唐中興の頌

元次山

天寶十四年(一)、安祿山(二)洛陽を陷れ、明年長安を陷る。天子(三)蜀に幸し、太子(四)位に靈武に卽く。明年皇帝鳳翔に移軍し、其の年兩京を復す、上皇京師に還る。於戲前代の帝王、盛德大業あるものは必ず歌頌に見る。若し今大業を歌頌し、之を金石に刻まんことは、文學に老けたる(五)に非ずんば、其れ誰か宜しく爲すべけん。頌に曰く、

(一) 唐の玄宗の年號 (二) もと胡人、玄宗に仕へ寵を得、平盧節度使、柳城大守より驃騎大將軍に進み、范陽節度河北採訪使となり、後、范陽に反す (三) 玄宗皇帝 (四) 肅宗皇帝 (五) 文學に老練なる者にあらざれば

若堯舜禹湯文武之君、獲稷契皐陶伊尹呂望之臣。明明在朝。穆穆布列。聚精會神。相得益章。雖伯牙操遞鍾、逢門子彎烏號、猶未足以喩其意也。故聖主必待賢臣而弘功業。俊士亦俟明主以顯其德。上下俱欲、歡然交欣。千載一會。論說無疑。翼乎如鴻毛遇順風、沛乎若巨魚縱大壑。其得意如此。則胡禁不止。曷令不行。化溢四表、橫被無窮。遐夷貢獻。萬祥必臻。是以聖主不徧窺望、而視已明。不殫傾耳而聽已聰。恩從祥風翺。德與和氣游。太平之責塞。優游之望得。遵遊自然之勢、恬淡

して俗を絶ち世を離れんや。詩に曰く、(二六)濟濟たる多士、文王以て寧しと。蓋し信なるかな、其の以て寧きこと。

(一) まごゝろを陳ぶるなり (二) 進み任ずるも功を成すを得ず、退き逐はるゝも道あるにあらず (三) 庶人となり (四) 屠牛者となり (五) 自身を業に賣り (六) 牛飼となる (七) 賤しく汚れし境遇を去りて朝廷にのぼり (八) 蔬食を止め、草履を捨て、美味を食して朝衣を着る (九) 符印を剖いて地を賜ひ、諸侯としてその祖先をあらはし (一〇) 遊說の士をたすく (一一) きりぎりすは秋を待つて鳴き、かげろふに、天曇り雨氣ある時に出でて飛ぶ (一二) 聖賢(大人、即ち天子)を見るには、その飛んで天に在る時をよしとす (一三) 大に才德ある人々のこの國に生る、ことを頌ふ (一四) すぐれたる多數の人(千人を俊といひ、百人を乂といふ) (一五) 美しき貌 (一六) 伯牙遞鍾の琴を操り、逢門子烏號の弓をひく如く、君臣和合し、弓矢必ずあたる (一七) 千載に一度の稀なる會合にて、君臣の論ずる處眞實にして、少しも疑ふ所なし (一八) 早くして滯らざる貌 (一九) 勢の旺なる貌 (二〇) 遠き邊狄 (二一) 太平の求め塞り、安樂の望得らる (二二) 天然自然の理勢に從ひて行ひ、無爲の境界に安んじ樂む (二三) 瑞祥自ら至り、年壽限なし (二四) 心、閑和にして衣を垂れ手をこまぬき (二五) 彭祖、王喬、赤松子などが、仙法を學びし如く、或は俯仰屈伸し、或は噓の(氣を吐く)呼吸し (二六) 威儀盛なる多くの賢人を得、周の文王安寧なりき

衡。去卑辱奥渫而升本朝。離蔬釋蹻而享膏粱。剖符錫壤而光祖考。傳之子孫。以資説士。故世必有聖知之君。而後有賢明之臣。故虎嘯而風冽。龍興而致雲。蟋蟀俟秋吟。蜉蝣出以陰。易曰。飛龍在天。利見大人。詩曰。思皇多士。生此王國。故世平主聖。俊乂將自至。

臣を獲たるが若し。明明として朝に在り、穆穆として布き列り、精を聚め神を會し、相得て益〻章なり。(一六)伯牙遞鍾を操り、(一五)逢門子烏號を彎くと雖も、猶ほ未だ以て其の意を喩ふるに足らず。故に聖主は必ず賢臣を待つて功業を弘め、俊士も亦明主を俟つて以て其の德を顯はす。上下欲を倶にし、歡然として欣を交ふ。(一七)千載の一會、(一八)論説疑なし。翼乎として鴻毛の順風に遇ふが如く、(一九)沛乎として巨魚の大壑に縱なるが若し。其の意を得る此の如くならば、則ち胡を禁じてか止まざらん。曷を令してか行はれざらん。化四表に溢れて横に無窮に被ひ、(二〇)遐夷貢獻して萬祥必ず臻らん。是を以て、聖主は徧く窺ひ望まざれども視ること已に明に、殫く耳を傾けざれども聽くこと已に聰し。恩、祥風に從つて翺り、德、和氣と游す。(二一)太平の責塞り、優游の望得。(二二)自然の勢に遵遊して無爲の場に恬淡たり。(二三)休徵自ら至りて壽考疆なく、(二四)雍容垂拱して永永萬年なり。何ぞ必しも偃仰屈信すること(二五)彭祖の若く、煦嘘呼吸すること喬松の如くにして、眇然と

人臣亦然。昔賢者之未レ遭遇一也。圖レ事揆レ策。則君不レ用二其謀一。陳二見悃誠一。則上不レ然二其信一。進仕不レ得レ施レ效。斥逐又非二其愆一。是故伊尹勤二於鼎俎一。太公困二於鼓刀一。百里自鬻。甯子飯レ牛。離二此患一也。及レ至下遇二明君一遭中聖主上也。進レ謀合二上意一。諫諍則見レ聽。進退得レ關二其忠一。任レ職得レ行二其

人臣も亦然り。昔賢者の未だ遭遇せざるや、事を圖り策を揆れば、則ち君其の謀を用ひず。(一)悃誠を陳見すれば、則ち上其の信を然りとせず。進仕すれども效を施すを得ず。(二)斥逐せらるゝも又其の愆に非ず。是故に伊尹は(三)鼎俎に勤め、太公は(四)鼓刀に困み、百里は(五)自ら鬻ぎ、甯子は(六)牛を飯へり。此の患に離へばなり。明君に遇ひ聖主に遭ふに至るに及んでは、謀を運らせば上意に合ひ、諫諍すれば則ち聽かる。進退其の忠を關ふるを得、職に任じて其の術を行ふを得、(七)卑辱奥渫を去つて本朝に升り、(八)蔬を離れ蹻を釋いて膏粱を享く。(九)符を剖き壤を錫うて祖考を光し、之を子孫に傳へて以て(一〇)説士を賁く。故に世に必ず聖知の君あつて、而して後に賢明の臣あり。故に虎嘯いて風冽しく、龍興つて雲を致す。(一一)蟋蟀は秋を俟つて吟じ、蜉蝣は出づるに陰を以てす。易に曰く、(一二)飛龍天に在り、大人を見るに利ありと。詩に曰く、(一三)皇たる多士、此の王國に生るゝを思ふと。故に世平かに主聖なれば、(一四)俊乂將に自ら至らんとす。堯舜禹湯文武の君、稷契皐陶伊尹呂望の

延袤百丈。而不溷者工用相得也。庸人之御駑馬。亦傷吻敝策。而不進於行。胸喘膚汗人極馬倦。及至駕齧膝參乘旦。王良執靶。韓哀附輿。縱馳騁騖忽如景靡。過都越國。蹶如歷塊。追奔電。逐遺風。周流八埏。萬里一息。何其遼哉。人馬相得也。故服絺綌之涼者。不苦盛暑之鬱燠。襲狐貉之暖者。不憂至寒之淒愴。何則有其具者易其備。賢人君子亦聖主之所以易海內。是以嘔喩受之。開寬裕之路。以延天下之英俊也。夫竭智附賢者。必建仁策。索遠求士者。必樹伯迹。昔周公躬吐握之勞。故有圄空之隆。齊桓設庭燎之禮。故有匡合之功。由此觀之。君人者勤於求賢。而逸於得人。

(一) 威儀を脩めたゝふる色 (二) 粗衣を着るものはの意、旃、氈に同じ、毳とともに夷狄獸毛の衣 (三) 絹帛 (四) あかざ（野菜）をあつものにし、麥飯を食ふ (五) 牛羊豕の料理 (六) 草葺の屋根の下（賤しき民家）(七) 文章につき、天子の御意に叶ひ、詔に應ずるに足らず (八) 飾りなき情 (九) 春秋の法を思ひみれば、元年（氣の始）春（四時の始）王（受命の始）正月（正令の始）公卽位（一國の始）の五始の要は己を審にして行ひ、王統を正し治むるにあり (一〇) 才の進め、不才を捨つる法 (一一) 勤勞の貌 (一二) 巧妙なる鍛冶が、干將の名劍を鑄る時には (一三) 燒刄を淸水にひたし、越に産せる良き砥にて刄を磨く (一四) 物を斬るに早きこと、篲にて路塵を淸むる如し (一五) 黃帝の時に出て、目の明かなりし人 (一六) 古の名匠 (一七) 工と器とともに良き故なり (一八) 馬の口を傷ひ、鞭を折れども (一九) 良馬に乘り、巧妙なる御者之に附く時には（齧膝、乘旦はとも古の名馬、王良韓哀はともにすぐれたる古の御者、靶はくつわ）(二〇) 走り／＼て、忽に沒する日影の如く (二一) 都國を過ぐるも、小塊の間を行く如し (二二) 疾風 (二三) 八方のはて (二四) 葛衣（かたびら）(二五) きつねむじなの衣 (二六) 和ぎ悅びて賢臣を用ひ (二七) ひろくゆたかなる路を開き、天下の俊傑を引く (二八) 覇王の事業 (二九) 周公は賢人を引見するために、一沐の中に三たび髮を握り一飯の間に三たび哺を吐き、遂に天下を太平にして牢獄空虛になり (三〇) 齊の桓公は賢人を得る每に必ず早起して庭燎を焚き、門を設けて之を見、遂によく周室をたゞしたすけ、諸侯を會合す

統而已。夫賢者國家之器用也。所任賢則趨舍省而功施普。器用利則用力少而就效衆。故工人之用鈍器也。勞筋苦骨。終日矻矻。及至巧冶鑄干將之樸。清水淬其鋒。越砥斂其鍔。水斷蛟龍。陸剸犀革。忽若彗泛畫塗。如此則使離婁督繩。公輸削墨。雖崇臺五層。

る、亦吻を傷り策を敝りて行に進まず。胸喘ぎ膚汗して、人極り馬倦る。齧膝に駕し乘旦(一八)を參にし、王良靶を執り韓哀輿に附するに至るに及んでは、縱騁馳騖(一九)して忽たること景の靡るが如く。都(二一)を過ぎ國を越えて蹶たること塊を歷るが如し(二〇)。奔電(二二)を追ひ遺風を逐ひ、八極(二三)に周流して萬里に一たび息ふ。何ぞ其れ遼なるや。人馬相得ればなり。故に絺綌(二四)の涼しきを服たるものは盛暑の鬱燠に苦しまず。狐(二五)貉の暖きを襲たるものは、至寒の悽愴を憂へず。何となれば則ち其の具あるものは其の備に易し。賢人君子も亦聖主の海内を易うする所以なり。是を以て嘔喩(二六)して之を受け、寛裕(二七)の路を開いて以て天下の英俊を延くなり。夫れ智を竭し賢に附くものは必ず仁策を建て、遠を索め士を求むるものは必ず伯迹(二八)を樹つ。昔周公(二九)は吐握の勞を躬らす。故に圄空の隆あり。齊桓(三〇)は庭燎の禮を設く。故に匡合の功あり。此に由つて之を觀れば、人に君たる者は賢を求むるを勤めて人を得るに逸せしむ。

夫荷旃被毳者。難與道純綿之麗密。羹藜含糗者。不足與論太牢之滋味。今臣僻在西蜀。生於窮巷之中。長於蓬茨之下。無有游觀廣覽之知。顧有至愚極陋之累。不足以塞原望應明旨。雖然。敢不略陳其愚心。而抒情素。記曰。恭惟春秋法。五始之要。在乎審己正

夫れ旃（一）を荷ひ毳を被る者は、與に純綿（三）の麗密なるを道ひ難し。藜（四）を羹にし糗を含む者は、與に太牢（五）の滋味を論ずるに足らず。今臣僻して西蜀に在り。窮巷の中に生れ、蓬茨（六）の下に長ず。游觀廣覽の知あるなく、顧つて至愚極陋の累あり。以て原望を塞ぎ、明旨（七）に應ずるに足らず。然りと雖も敢て略ゝ其の愚心を陳べて情素を抒べざらんや。記して曰ふ。恭しく惟れば、春秋（九）の法、五始の要、己を（八）審にし統を正すに在るのみ。夫れ賢者は國家の器用なり、任ずる所賢なれば、則ち超舍（一〇）省きて功施普し。器用利なれば則ち力を用ふること少うして效を就すこと衆し。故に工人の鈍器を用ふるや、筋を勞し骨を苦しめて終日（一一）矻矻たり。巧冶（一二）の干將の樸を鑄るに至るに及んで、清水に其の鋒（一三）を淬ぎ、越砥に其の鍔を斂む。水には蛟龍を斷ち、陸には犀革を剸る。忽たること（一四）篲の塵塗を氾するが若し。此の如くんば、則ち離婁（一五）をして繩を督し公輸（一六）をして墨を削らしめ、崇臺五層、延袤百丈なりと雖も、溷れざる者は工用（一七）相得ればなり。庸人の駑馬を御す

勤。和樂且閒。穆穆棣棣。君臣之間。秦起長城。竟海爲關。荼毒生靈。萬里朱殷。漢擊匈奴。雖得陰山。枕骸遍野。功不補患。蒼蒼烝民。誰無父母。提攜捧負。畏其不壽。誰無兄弟。如足如手。誰無夫婦。如賓如友。生也何恩。殺之何咎。其存其沒。家莫聞知。人或有言。將信將疑。悁悁心目。寢寐見之。布奠傾觴。哭望天涯。天地爲愁。草木悽悲。弔祭不至。精魂無依。必有凶年。人其流離。嗚呼噫嘻。時耶命耶。從古如斯。爲之奈何。守在四夷。

(一)弓づる　(二)両軍相迫り、生死を決す　(三)風の聲　(四)遠く遥かなり　(五)眠り紛ふ　(六)趙の良將李牧　(七)匈奴に勝つには、良將賢臣を擇び、之に一任するにあり　(八)仕樣の多きをよしとせず　(九)匈奴の古名　(一〇)北方　(一一)飲至の禮を行ひ、その勳功をしるす　(一二)深遠にして迫らざる貌　(一三)威儀に富み、重々しき貌　(一四)北海の際まで至り　(一五)人民を痛め苦め、萬里血に染みて赤し（荼は毒強き苦菜、殷は赤黒色）　(一六)死屍野に滿ち、築城の利益は民の患を補ふに足らず　(一七)多くの人民　(一八)賓客の如く、朋友の如し　(一九)生くる時、如何ほど君主の恩惠を蒙りしぞ　(二〇)戰死せしと云ふものあれば　(二一)憂ひ思ふ貌　(二二)祭壇を設けて酒を供へ　(二三)弔祭不十分ならば、靈魂も依り所なく　(二四)之を救濟する道如何　(二五)王道仁義を行ひて四夷を馴け、自然に中國を守らしむるにあり

頌類

聖主得賢臣頌（聖主賢臣を得る頌）

王子淵

聲兮山寂寂。夜正長兮風淅淅。魂魄結兮天沈沈。鬼神聚兮雲羃羃。日光寒兮艸短。月色苦兮霜白。傷心慘目。有如是耶。吾聞之。牧用趙卒。大破林胡開地千里。遁逃匈奴。漢傾天下財殫力痛。任人而已。其在多乎。周逐玁狁。北至太原。既城朔方。全師而還。飲至策

匈奴を遁逃せしむ。漢天下を傾けて、財殫き力痛みぬ、(七)人に任ずみのみ。(八)其れ多きに在らんや。周、(九)玁狁を逐うて、北のかた太原に至る。既に朔方に(一〇)城きて、師を全うして還り、(一一)飲至して勳を策し、和樂して且つ間なり。穆穆(一二)棣棣(一三)たり、君臣の間、秦長城を起し、(一四)海を竟へて關となし、(一五)生靈を荼毒して萬里朱殷なり。漢匈奴を擊つて陰山を得と雖も、(一六)枕骸野に遍くして功は患を補はず。蒼蒼たる烝民、(一七)誰か父母なからん、提攜捧負して其の壽ならざらんことを畏る。誰か兄弟なからん、足の如く手の如し。誰か夫婦なからん、賓(一八)の如く友の如し。(一九)生くるとき何の恩かある。之を殺す何の咎かある。其の存するも其の沒するも、家聞知する莫し。(二〇)人或は言ふあれば將に信じ將た疑ふ。心目に悁悁(二一)として寢寐に之を見る。(二二)奠を布き觴を傾け、哭して天涯を望む。天地も爲に愁へ、草木も淒悲す。(二三)弔祭至らずんば、精魂依るなけん。必ず凶年あつて、人其れ流離せん。嗚呼噫嘻、時か命か。古より斯の如し。(二四)之を爲す奈何。(二五)守り四夷に在り。

嗚呼噫嘻。吾想夫北風振漠。胡兵伺便。主將驕敵。期門受戰。野豎旌旗。川回組練。法重心駭。威尊命賤。利鏃穿骨。驚沙入面。主客相搏。山川震眩。聲析江河。勢崩雷電。至若窮陰凝閉。凜冽海隅。積雪沒脛。堅冰在鬚。鷙鳥休巢。征馬踟蹰。繒纊無溫。墮指裂膚。當此苦寒。天假強胡。憑陵殺氣。以相剪屠。徑截輜重。橫攻士卒。都尉新降。將軍復沒。屍塡巨港之岸。血滿長城之窟。無貴無賤。同爲枯骨。可勝言哉。

鼓衰兮力盡。矢竭兮弦絕。白刃交兮寶刀折。兩軍蹙兮生死決。降矣哉。終身夷狄。戰矣哉。骨暴沙礫。鳥無

鼓衰へて力盡き、矢竭きて弦絕ゆ。白刃交つて寶刀折れ、兩軍蹙つて生死決す。降らんか、身を夷狄に終へん。戰はんか、骨を砂礫に暴さん。鳥聲なくして山寂寂たり。夜正に長うして風淅淅たり。(三)魂魄結んで天沈沈、(四)鬼神聚つて雲冪冪。(五)日光寒うして艸短く、月色苦えて霜白し。心を傷ましめ目を慘ましむること、是の如きありや。吾之を聞く、牧、趙の卒を用ひて大に林胡を破り、(六)地を開くこと千里、

軍には敵せず　(一二)奇變權謀の術　(一三)仁義の□を行はず　(一四)敵上に便宜の時を伺ふ　(一五)軍門に同じ　(一六)甲兵を廻らす、組は漆甲のあみ糸、練は練絹の袍　(一七)鋭き矢じり　(一八)吹き飛ばさる、沙　(一九)聲は江河の析くるが如き、勢雷電の崩るゝに似たり　(二〇)冬の陰氣、天地を閉ぢ込む　(二一)寒氣はげし　(二二)わし　(二三)ためらひて進まず　(二四)繒はきぬの粗きもの、纊はわたの細きもの、綿入の衣　(二五)天は、苦寒に堪ふる力を胡兵に假し、來つて殺戮を逞うせしむ　(二六)軍の官名

傷レ心哉、秦歟漢歟。將近代歟。吾聞夫齊魏徭戍。荊韓召募。萬里奔走。連年暴露。沙艸晨牧。河冰夜渡。地闊天長。不レ知ニ歸路一。寄ニ身鋒刃一。腷臆誰訴。秦漢而還。多ニ事四夷一。中州耗斁。無ニ世無一レ之。古稱戎夏。不レ抗ニ王師一。文敎失レ宣。武臣用レ奇。奇兵有レ異ニ於仁義一。王道迂闊而莫レ爲。

武臣奇を用ふ。(一一)奇兵は仁義に異るあり、王道を迂闊なりとして爲る莫し。(一二)嗚呼噫嘻。吾想ふに、夫れ北風漠に振ひ、胡兵便を伺ひ、(一三)主將敵に驕り、(一四)期門戰を受く、(一五)野には旌旗を竪て、川には組練を廻らす。法重くして心駭き、威尊うして命賤し。(一六)利鏃骨を穿ち、(一七)驚沙面に入る。(一八)主客相搏つて山川震眩す。(一九)聲江河を拆き、勢雷電を崩す。至若のみならず、窮陰凝閉して(二〇)海隅に凜冽たり。(二一)積雪脛を沒し、堅冰鬚に在り。鷙鳥も巣に休ひ、(二二)征馬も踟躕す。(二三)繒纊溫なることなくして、(二四)指を墮し膚を裂く。此の苦寒に當つて、天强胡に假して、(二五)殺氣を憑陵して以て相剪屠せしむ。徑に輜重を截り、橫に士卒を攻む。都尉新に降り、(二六)將軍復沒す。屍は巨港の岸に塡ち、血は長城の窟に滿つ。貴となく賤となく、同じく枯骨となる。勝げて言ふべけんや。

(一) 廣大の貌　(二) 河水廻りまとひ、羣山亂れまじはる　(三) 暗くして物悲しく　(四) 廻り離れて　(五) 兵卒三萬七千五百人なり、こゝにては大軍の意　(六) 徭使屯戍の兵　(七) 風雨にさらさる　(八) 身を刃に委ね、胸の鬱悶を誰に語らん　(九) 四方の夷狄に軍事多く　(一〇) 中國衰耗し代々戰のなきことなし　(一一) 戎狄も華夏も、王道を行ふ

杜厚顏、薛荔無恥。碧嶺再辱、丹崖重滓。塵遊躅於蕙路、汚淥池以洗耳。宜扃岫幌、掩雲關、斂輕霧、藏鳴湍、截來轅於谷口、杜妄轡於郊端。於是叢條瞋膽、疊穎怒魄。或飛柯以折輪、乍低枝而掃跡。請廻俗士駕、爲君謝逋客。

浩浩乎平沙無垠、夐不見人。河水縈帶、羣山糾紛。黯兮慘悴、風悲日曛。蓬斷草枯、凜若霜晨。鳥飛不下、獸挺亡羣。亭長告余曰、此古戰場也。常覆三軍。往往鬼哭、天陰則聞。

古戰場を弔ふ文

李　華

浩浩乎(一)として平沙垠なく、夐に人を見ず。(二)河水縈帶し、羣山糾紛す。(三)黯として慘悴し、風悲しく日曛く、蓬斷え艸枯れ、凜として霜晨の若し。鳥飛んで下らず。獸挺(四)して羣を亡ふ。亭長余に告げて曰く、此れは古戰場なり。常て(五)三軍を覆へせり。往往にして鬼哭し、天陰るときは則ち聞ゆ。心を傷しむるかな。秦か漢か將た近代かと。吾聞く、夫れ齊魏の徭戍(六)、荊韓の召募、萬里に奔走して、連年暴露す。沙艸晨に牧ひ、河冰夜渡る。地闊く天長うして歸路を知らず。身を鋒刃(七)に寄す、腷臆誰にか訴へん。秦漢より還、四夷(九)に多事なり。中州耗斁(八)し、世(一〇)として之れなきはなし。古に稱す。戎夏(一一)王師に抗らずと。文教宣るを失ひて

昔聞投簪逸海岸。今見解蘭縛塵纓。於是南嶽獻嘲。北隴騰笑。列壑爭譏。攢峯竦誚。慨遊子之我欺。悲無人以赴弔。故其林慙無盡。澗愧不歇。秋桂遣風。春蘿擺月。騁西山之逸議。馳東皐之素謁。今乃促裝下邑。浪栧上京。雖情投於魏闕。或假步於山扃。豈可使芳

客(かく)を謝(しゃ)せよ。

(一) 銅印を懸け墨ひもを綰ふ、漢書に、「秩六百石以上は、皆銅印墨綬なり」 (二) 縣城の雄壯なるに據り、百里一縣の宰官の主となり、俊英の風を海甸に示し、美名を浙西地方に馳す (三) 道教の書も長く棄てられ、佛の法筵も久しくすたる (四) 罪人を杖打つにも騒しくして思慮を亂し、文書訴訟繁くして風流の情をそこなふ (五) 琴歌酒賦などの樂みは斷え (六) 吏務に束縛せられ、訟獄に煩はさる (七) 漢の張敞趙廣の治蹟を古き典籍の中に包み、後漢の卓茂魯恭の名を前代の記錄に跡らんとし (八) 漢の三輔(京兆尹、左馮翊、右扶風)の如き功蹟を望み、聲譽を天下に傳へんとす (九) 周彥倫去りてより、山の霞も淋しく照り映え明月も獨りのぼる (一〇) 谷の戸摧くるも歸り來らず (一一) 石の徑荒るゝ中に彥倫を望みてたゝずむ (一二) 吹きめぐる風幕に入り、吐きそゝぐ如き霧、柱より出づ (一三) 香草蕙のとばり (一四) 昔は漢の疏廣は、官を罷め、簪を抛ち、東海に歸りて樂み、今は彥倫は、蘭佩を解いて山を出で、官途に就きて束縛せらる (一五) 鍾山の神靈、彥倫に欺かれてより、南山嘲り、北岳笑ひ (一六) あつまれる峰も誚り (一七) 來り慰むる人なきを歎く (一八) 西山に遁隱し、東皐に優遊せる隱者を思ふ (一九) 今彥倫、山陰の役務を終へ、下邑に旅裝し船に乘る (二〇) 帝都に赴く途次、或はこの山に來らんとす (二一) 再び偶隱者をこゝに入れ、芳草を汚して厚顏無恥ならしめ (二二) 靑き樹、赤きがけをも汚し (二三) 薜蘭を路に踏みしだき、淸し池に耳を洗はしむるに忍びず (二四) 洞の口をとざし、蘭の門を掩ひ (二五) 霧を收 て見せしめず、瀨の聲を隱て聞えしめず (二六) 來らんとする轅(ながえ)を谷の口に遮り、妄なる轡(くつわ)を里の外にてとゞむべし (二七) 多くの木、多くの草も心を怒らし (二八) 枝を飛して車輪を打ち、また枝を垂れて足跡を掃ひ (二九) 俗士の車を追ひ歸し、來遊を謝せんとす

其懐。琴歌既斷。酒賦無續。常綢繆於結課、每紛綸於折獄。籠張趙於往圖。架卓魯於前籙。希蹤三輔豪。馳聲九州牧。使其高霞孤映。明月獨擧。青松落陰。白雲誰侶。磵戸摧絶無與歸。石逕荒涼徒延竚。至於還飈入幕。寫霧出楹。蕙帳空兮夜鵠怨。山人去兮曉猿驚。

て輿に歸ることなく、石逕荒涼(一一)として徒に延竚す。還飈(一二)幕に入り、寫霧楹を出づるに至りては、蕙帳(一三)空うして夜鵠怨み、山人去つて曉猿驚く、昔(一四)は聞く、簪を投じて海岸に逸せしを、今は見る、蘭を解いて塵纓に縛せらるゝを。是(一五)に於て南嶽嘲を獻じ、北隴笑を騰し、列壑爭ひ譏り、攢峰(一六)誚を竦ぐ、遊子の我を欺くを慨み、人の以て赴き弔することなきを悲む。故に其の林慙盡くる無く、澗の愧歇まず。秋桂(一七)風を遣り、春蘿月を擺ふ。西山(一八)の逸議を馳せ、東皐の素謁を馳す。今乃ち下邑(一九)に促裝し、上京(二〇)に浪栧す。情を魏闕に投ずと雖も、或は歩を山扃に假らん。豈芳杜(二一)をして顏を厚うし、薜茘をして恥づる無く、碧嶺(二二)再び辱められ、丹崖重ねて滓れ、遊躅を蕙路に塵し、淥地を汚して以て耳を洗はしむべけんや。宜しく岫幌(二三)を扃ぢ雲關を掩ひ、輕霧(二五)を斂め鳴湍を藏し、來轅(二六)を谷口に截り、妄轡を郊端(二四)に杜ぐべし。是に於て叢條(二七)膽を瞋らせ、疊潁魄を怒らす、或は柯(二八)を飛ばして以て輪を折り、乍ら枝を低れて迹を掃ふ。請ふ俗士(二九)の駕を廻らして、君が爲めに逋

霜氣橫レ秋。成
歎幽人長往。
或怨王孫不レ
游。談空空於
釋部。覈玄玄

(一六) 或は隱者の死して歸らざるを歎き、風騷の人の來り遊ばざるを怨む (一七) 佛法の空理を談じ、道敎の玄義を明かにす (一八) 夏の時の人、湯王天下を得し後、石を負ひて河に沈む (一九) 齊の人、朮を食とし宕山に隱る (二〇) 勅使來り、詔靑を拜するに及びては (二一) 芰荷にて作れる隱者の服を焚き (二二) 山中に林巒草木みな失望の色あり

於道流。務光何足レ比。涓子不レ能レ儔。及其鳴騶入レ谷。鶴書赴レ隴。形馳魄散。志變神動。爾乃眉
軒席次。袂聳筵上。焚芰製而裂荷衣。抗塵容而走俗狀。風雲悽其帶レ憤。石泉咽而下愴。望
林巒而有レ失。顧艸木而如レ喪。

至其紐金章。
綰黒綬。跨屬
城之雄。冠百
里之首。張英
風於海甸。馳
妙譽於浙右。
道帙長擯。法
筵久埋。敲扑
諠囂犯其慮。
牒訴倥偬裝

其の金章を紐け黒綬を綰ひ、屬城(二)の雄を跨え、百里の首に冠たらしめ、英風を海甸(一)に張り、妙譽を浙右に馳するに至つては、(三)道帙長く擯けられ、法筵久しく埋む。敲扑諠囂にして其の慮を犯し、牒訴倥偬として其の懷を裝ふ。(五)琴歌既に斷えて酒賦(四)續ぐなし。常に結課(六)に綢繆し、毎に折獄に紛綸たり。(七)張趙を往圖に籠め、卓魯を前籙に架す。蹤を三輔(八)の豪に希ひ、聲を九州の牧に馳す。其の高霞(九)をして孤映じ、明月をして獨擧せしむ。青松陰を落して白雲誰か侶はん。(一〇)磵戶摧け絶え

後躡。何其謬哉。嗚呼。尙生不存。仲氏既往。山阿寂寥。千載誰賞。世有周子。儁俗之士。既文既博。亦玄亦史。然而學遁東魯。習隱南郭。竊吹艸堂。濫巾北岳。誘我松桂。欺我雲壑。雖假容於江皐。乃纓情於好爵。其始至也。將欲排巣父。拉許由。傲百世。蔑王侯。風情張日

しき能はず。其の鳴騶谷に入り、(三〇)鶴書隴に赴くに及んでは、形馳せ魄散じ、志變じ神動く、爾して乃ち眉席の次に軒り、袂筵の上に聳へ、(三一)芰製を焚いて荷衣を裂き、塵容を抗げて俗狀を走らしむ。風雲悽として其れ憤を帶び、石泉咽びて下に愴めり。(三二)林巒を望みて失するあり、艸木を顧るに喪へるが如し。

(一) 會稽郡の北なる鍾山をいふ、周顒字は彦倫、この山を出でゝ海鹽縣の令となり、後また來り遊ばんとするに當り、孔德璋、山靈の意を假り、この文を作りて拒み退く (二) 鍾山草堂の神靈 (三) 驛傳を使として驛路に馳せしめ (四) 移文を山の庭中に刻む (五) 節義高く凡俗を拔け出でたる思、瀟灑無欲にして塵埃を離れたる思 (六) 志は雲を度れる如くに淸く (七) 氣象は、雲を凌いで上る如く高し (八) 余は始め、隱者をかくの如きものと思へり (九) その志、物外に高く立ちて遠く、塵表に拔け出でて汚なし (一〇) 千金の富をも芥の如く思ひ、萬乘の貴きをも屣の如く卑しむ (一一) 古の隱者、周の靈王の太子晉が、鳳鳴を聞いて洛水の浦に遊び (一二) 延瀨の樵夫が、蘇門先生に逢いて、歌二章を作りし如く (一三) 隱者の中には堅固にして變へ易きものあり (一四) 始と終りと志を異にし、物の色の靑となり黃となる如く、反覆して定りなし (一五) 墨子が白絲を見て泣き、楊朱が岐路に立ちて哭せし如き悲に逢ふ (一六) 暫く山中に隱れしも、心は塵俗に染み汚れ (一七) 古の漢の隱者尙長字は子平 (一八) 同じく仲長統 (一九) 周彦倫 (二〇) 凡俗を超えて俊英の士なり (二一) 古へ東魯の顏闔、南郭子綦などの隱遁に習ひ (二二) 淸き名を草室にぬすみ、隱者の巾を着て北山に棲む (二三) 外容は江海を愛する如く、內心は高位高爵を慕ふ (二四) 始めは、古隱士、巢父を推し退け、許由をとりひしぎ (二五) 風流の心日に高く、志の深きこと、霜の秋空に傾ふごとし

庭。夫以耿介拔俗之標。蕭洒出塵之想。度白雪以方潔。干青雲而直上。吾方知之矣。若其亭亭物表。皓皓霞外。芥千金而不眄。屣萬乘其如脫。聞鳳吹於洛浦。値薪歌於延瀨固亦有焉。豈期始終參差。蒼黃反覆。淚翟子之悲。慟朱公之哭。乍廻跡以心染。或先貞而

青雲を干して直に上る。吾(八)方に之を知りぬ、若し其れ物表に亭亭として霞(九)外に皓皓(七)たり。千金(一〇)を芥にして眄みず、萬乘を屣にして其れ脫ぐが如し。鳳吹(一一)を洛浦に聞き、薪歌(一二)に延瀨に値へり。固(一三)に亦有り。豈期せんや、始終參差(一四)として、蒼黃反覆し。翟子(一五)の悲に淚し、朱公の哭に慟せんとは、乍(一六)ら迹を廻らして以て心染み、或は先には貞にして後には黷る。何ぞ其れ謬れるや。嗚呼、尙生(一七)存せず、仲氏(一八)既に往きぬ。山阿寂寥として、千載誰か賞せん。世に周子(一九)といふものあり、雋俗(二〇)の士なり。既に文に既に博く、亦玄に亦史なり。然れども、遁(二一)を東魯に學び、隱を南郭に習へり。艸堂(二二)に竊吹し、北丘に濫巾す。我が松桂を誘ひ、我が雲壑を欺き、容を江皐(二三)に假ると雖も、乃ち情を好爵に纓はす、其の始めて至るや、將に巢父(二四)を排し、許由を拉ぎ、百世に傲り、王侯を蔑にせんと欲し、風情日に張り、霜氣(二五)秋に横はる、或は幽人(二六)の長く往くを歎じ、或は王孫の遊ばざるを怨む。空空(二七)を釋部に談じ、玄玄を道流に覆ふ。務光(二八)も何ぞ比するに足らん。涓子(二九)も儔

也。筆最動、墨次レ之。硯靜者也。豈非三靜者壽、而動者夭一乎。吾於レ是而得レ養レ生焉。以レ鈍爲レ體、以レ靜爲レ用。或曰、壽夭數也。非二鈍銳動靜所一レ制。借令筆不レ銳不レ動。吾知三其不レ能二與レ硯久遠一也。雖レ然。寧爲レ此勿レ爲レ彼也。銘曰、不レ能レ銳。因以レ鈍爲レ體。不レ能レ動。因以レ靜爲レ用。惟其然。是以能永年。

となす。動くこと能はず、因つて靜を以て用となす。惟れ其れ然り。是れを以て能く永年なり。(八)

(一)同氣同類の文房具なり　(二)用ひ盡せらるゝことも似たり　(三)早死　(四)壽を持するには鈍く、事に處するには靜ならん　(五)天命たり　(六)鈍銳動靜などによりて、天命を左右することを得ず　(七)硯の如く鈍く靜にし、筆の如くに銳く動かざらん　(八)長命なり

鍾山之英、艸堂之靈、馳レ煙驛路、勒二移山

文　類

北山の移文（一）　　孔德璋

（二）鍾山の英、艸堂の靈、煙を驛路に馳せ、（三）移を山庭に勒す。夫れ以れば、耿介（四）として俗を拔くの標、蕭灑（五）として塵を出づるの想、（六）白雪を度つて以て潔を方べ、

爲二已 誡一。不レ知レ戒二其 出レ汝 者一。反 歸二咎 其 不レ出レ汝 者一。長レ傲 且 遂レ非。不レ知 孰 甚レ焉。

古硯の銘

唐子西

硯與二筆墨一。蓋氣類也。出處相近。任用寵遇相近也。獨壽夭不二相近一也。筆之壽以レ日計。墨之壽以レ月計。硯之壽以レ世計。其故何也。其爲レ體也。筆最銳。墨次レ之。硯鈍者也。豈非二鈍者壽。而銳者夭一乎。其爲レ用

硯と筆墨とは蓋し氣類なり。出處も相近く、任用寵遇(二)も相近し。獨り壽夭(三)相近からざるのみ。筆の壽(一)は日を以て計へ、墨の壽は月を以て計へ、硯の壽は世を以て計ふ。其の故何ぞや。其の體たるや、筆は最も銳く、墨は之に次ぎ、硯は鈍きものなり。豈鈍き者は壽にして銳きも者は夭するに非ずや。其の用たるや、筆は最も動き、墨は之に次ぎ、硯は靜なる者なり。豈靜なる者は壽にして動く者は夭するに非ずや。吾是に於て生を養ふを得たり。鈍を以て體となし、靜(四)を以て用と爲さん。或ひと曰く、壽夭(五)は數なり。鈍銳動靜(六)の制する所に非ず。借令ひ筆銳からず。動かざるも、吾其の硯と久遠なること能はざるを知ると。然りと雖(七)寧ろ此れを爲よ、彼とする勿れ。銘に曰く、銳きこと能はず、因つて鈍を以て體

戲言出於思也。戲動作於謀也。發於聲、見乎四支。謂非己心、不明也。欲人無己疑、不能也。過言非心也。過動非誠也。失於聲、繆迷其四體。謂己當然。自誣也。欲他人己從、誣人也。或者謂出於心者、歸咎爲己戲。失於思者。自誣

東銘　　張子厚

(一)戲言なれども思より出で、戲動なれども謀より作り、聲に發し、四支に見はる。(二)己が心に非ずと謂ふは不明なり。(三)人己を疑ふなきを欲するは不能なり。(四)過言は心に非ず。過動は誠に非ず。聲に失し、(五)其の四體に繆迷して、己が當然と謂ふは、自ら誣ふるなり。他人の己に從はんと欲するは、人を誣ふるなり。或は(七)心より出づる者を謂ひて、(六)咎を歸して己が戲となし、(八)思に失へる者を、自ら誣ひて己が誠となす。其の汝より出づる者を戒むるを知らずして、反つて咎を其の汝より出でざる者に歸す。傲を長じて且つ非を遂ぐ、知らず孰か(九)焉より甚しからん。

(一) 戲言と雖も、思より出でて聲に現はれ、戲動と雖も、心に謀りて四肢に現はる　(二) これを本心にあらずといふは愚なり　(三) 人に己を疑はしめざるを得ず　(四) 言動の過失は心の本然にあらず　(五) 一旦の過失を改むるに迷ひ、之を飾りて當然なりとするは、自ら誣ふるものなり　(六) 更に他人をして己を信ぜしめんとするは、人を誣ふるものなり　(七) 心より出でたる言動なるに責を免れて一時の戲なりといひ　(八) 心ならずして失言したることを强いて誠なりといふ　(九) 無智なること之より甚しきはなし

惡者不才。其踐ㇾ形者惟肖也。知ㇾ化則善述二其事一。窮ㇾ神則善繼二其志一。不ㇾ愧二屋漏一爲ㇾ無ㇾ忝。存ㇾ心養ㇾ性爲ㇾ匪ㇾ懈。惡二旨酒一。崇伯子顧ㇾ養。育二英才一。穎封人錫ㇾ類。不ㇾ弛ㇾ勞而底ㇾ豫。舜其功也。無ㇾ所ㇾ逃而待ㇾ烹者。申生其恭也。體二其受一而歸ㇾ全者參乎。勇二於從一而順ㇾ令者伯奇也。富貴福澤。將ㇾ厚二吾之生一。貧賤憂戚。庸玉二女於成一也。存吾順事。沒吾寧也。

一 天（乾）は陽にして上に在り、父の道なり、地（坤）は陰にして下にあり、母の道なり 二 眇然として小さき我が身は、その中間に生れ、萬物と雜居せり 三 天地に塞がる陰陽の氣は、卽ち我が體なり 四 天地の帥となり健順五常の道を具ふるものは吾が性なり 五 友 六 大君は我が父母卽ち乾坤の長兄なり 七 その大臣は、長兄の家令家扶なり 八 聖人は天地と德を合致させ、賢人は才德、常人にまさる。九 疲れて背疾を生ぜるもの、又、身體不完全なるもの 一〇 孤獨のもの、老いて妻なきもの、老いて夫なきもの 一一 不幸極り、哀訴すべき所なきもの 一二 天を畏れ、身を保つは、子として親を敬ふ至極なり 一三 天を樂みて憂へざるは、親を愛するに純にして、雜念なきものなり 一四 人の性を蔑し、人の形を充すものは、よく天地と似たるものなり 一五 天地變化の道を知るは、子として親のなす所を述ぶるものなり 一六 天地神明の德を窮むるは子として親の志を繼ぐものなり 一七 人の見ざる所にありても、恥づることなきものは、天地神明に對しても辱めなし（屋漏は室の西北隅にして人の伺ひ難き處なり） 一八 鯀の子禹王 一九 封人潁考叔（孝行を鄭の莊公に及ぼしたる人）の同類 二〇 務を厭はずしてよく事へ、遂に父母を悅ばしめしは、舜が大孝の力なり 二一 申生驪姬が讒に依り殺されんとする時、少しも逃るゝ事なく、從順に烹殺さるゝを待ちたるは、恭敬の至なり 二二 天より受けたる性態形態を全うし、之を天に返さんとしたるものは曾參なり 二三 父に憎まれ、霜を踐み車を挽くも、よくその命に順ひしものは伯奇なり 一四 艱難、汝を玉にするなり 二五 父母存すれば從順に事へ、沒すればよく祭り、その神靈を安んず

帥吾其性。民吾同胞、物吾與也。大君者吾父母宗子。其大臣宗子之家相也。尊高年。所以長其長。慈孤弱。所以幼吾幼。聖其合德、賢其秀也。凡天下疲癃殘疾。惸獨鰥寡、皆吾兄弟顚連而無告也。于時保之、子之翼也。樂且不憂、純乎孝者也。違曰悖德。害仁曰賊。濟

其の長を長とする所以にして、孤弱を慈むは吾が幼を幼とする所以なり。(八)聖は其れ德を合す。賢は其の秀なり。凡そ天下の(九)疲癃殘疾、(一〇)惸獨鰥寡は、皆吾が兄弟の(一一)顚連として告ぐるなきなり。(一二)時に之を保つは、子の翼める者なり。(一三)樂み且つ憂へざるは、孝に純なる者なり。違を悖德と曰ひ、仁を害ふを賊と曰ふ。惡を濟す者は不才なり。其の(一四)形を踐む者は惟れ肖たり。(一五)化を知れば則ち善く其の事を述べ、(一六)神を窮むれば則ち善く其の志を繼ぐ。(一七)屋漏に愧ぢざるを忝なしとなし、心を存し性を養ふを懈るにあらずとなす。旨酒を惡むは、(一八)崇伯が子の養を顧るなり。英才を育するは、(一九)潁の封人の類を錫ふなり。勞を弛べずして豫を底すは、舜の其の功なり。(二一)逃るゝ所なくして烹らるゝを待つ者は、(二〇)申生が其の恭なり。其の(二二)受くるに體して全きを歸すは參か、(二三)從うに勇みて令に順ふは伯奇か。富貴福澤は將に吾が生を厚うせんとし、(二四)貧賤憂戚は庸つて女を成るに玉にす。存すれば吾順つて事へ、(二五)沒すれば吾寧んず。

窒レ慾。昔爲二寇讐一。今則臣僕。方二其未レ克。窘二吾室廬一。婦姑勃磎。安取二厥餘一。亦既克レ之。皇皇四達。洞然八荒。皆在二我闥一。孰曰。天下不レ歸二吾仁一。癢痾疾痛。擧切二吾身一。一日至焉。莫レ非二吾事一。顏何人哉。晞レ之則是。

（一）凡そ生物は、天地を父母とし、皆一氣同體なり（二）その間に不仁の生ずるは何故ぞ（三）我に私心あるに因るなり（四）物と我と別々に立ち、私心その隔となる（五）人に勝たんとする心、ほしいまゝに生じ、亂れて齊一ならず（六）心に天の則を知り（七）吝嗇驕泰のために、心を賊ふことなし（蟊は根を食む虫、賊は節を食む虫）（八）孟子に「それ志は氣の帥なり」（九）天の命を奉じて行はゞ（一〇）私慾我が胸を苦しめ、嫁と姑と相鬩ぐ如し（一一）小賊ありとも、よく防ぐ所なし（一二）廣大にして四方に通達し（一三）達人儼いて我にあり、天下我が仁に服せざるなし（一四）人は一氣同體なれば、他人の病苦も痛切に我が身に感ず（一五）一旦この境に至れば、百事當を得ざるものなし（一六）顏回何人ぞや、希ひて之に傚はゞ、何人も顏回たるを得ん

西銘

張子厚

乾稱レ父。坤稱レ母。予茲藐焉。乃混然中處。故天地之塞吾其體。天地之

（一）乾を父と稱し、坤を母と稱す。予茲に藐焉たり。（二）乃ち混然として中に處り、故に（三）天地の塞は吾其の體なり。（四）天地の帥は吾其の性なり、民は吾が同胞、物は吾が與（五）なり。（六）大君は吾が父母の宗子にして、其の大臣は（七）宗子の家相なり。高年を尊ぶは

陽諸葛廬。西蜀子雲亭。孔子云何陋之有。

凡厥有生。均レ氣同レ體。胡爲不仁。我則有レ己。物我既立。私爲二町畦一。勝心横發。擾擾不レ齊。大人存レ誠。心見二帝則一。初無三吝驕作二我蟊賊一。志以爲レ帥。氣爲二卒徒一。奉二辭于天一。誰敢侮レ予。且戰且來。勝レ私

克己の銘

呂與叔

凡そ厥の有生、氣を均うし體を同うす。(一)胡爲れぞ不仁なる。(二)我則ち己を有すればなり。(三)(四)物我既に立ち、私を町畦となす。(五)勝心横發し、擾擾として齊しからず。大人誠を存して、心に帝の則を見る。(六)初より吝驕の我が蟊賊と作るなし。(七)志以て帥となり、(八)氣を卒徒と爲し。辭を天に奉げば、誰か敢て予を侮らん。且つ戰ひ且つ來し。私に勝ち慾を窒ぐ。昔は寇讎たり、(九)今は則ち臣僕たり。其の未だ克たざるに方つて、吾が室廬を窘め。(一〇)婦姑勃磎は、安ぞ厥の餘を取らん。(一一)亦既に之に克たば、皇皇として四達す。(一二)洞然たる八荒、(一三)皆我が闥に在り。孰か曰はん、天下吾が仁に歸せずと。(一四)痌瘝疾痛、擧吾が身に切なり。一日も至れば、吾が事に(一五)非ざる莫し。(一六)顏何人ぞや、之を晞はば則ち是なり。

成。聖賢同レ歸。

山不レ在レ高。有レ僊則名。水不レ在レ深。有レ龍則靈。斯是陋室。惟吾德馨。苔痕上レ階綠。艸色入レ簾青。談笑有二鴻儒一。往來無二白丁一。可下以調二素琴一閱中金經上。無二絲竹之亂一レ耳。無二案牘之勞一レ形。南

り　㈣、急遽の時にもよく念ひ　㈤、恐懼して己を持すべし　㈥、聖賢と異ならざるに至らん

銘類

（一）陋室の銘　劉禹錫

山は高きに在らざれども、僊あれば則ち名あり。水は深きに在らざれども、龍あれば則ち靈なり。斯れ是れ陋室、惟吾が德の馨しきなり。（二）苔痕階に上つて綠に、艸色簾に入つて靑し。談笑するに（三）鴻儒あり、往來するに（四）白丁なし。以て（五）素琴を調べ、（六）金經を閲るべし。（七）絲竹の耳を亂るなく、案牘の形を勞するなし。（八）南陽諸葛が廬か、西蜀子雲が亭か。孔子云ふ、（九）何の陋か之れあらんと。

㈠ 見苦しき室　㈡ 苔は階に生じて綠に、草色は簾を透して靑し　㈢ 大學者　㈣ 無益の雜人　㈤ 白木の琴　㈥ 尊き經文　㈦ 絃歌俗曲にて耳を汚すことなく、公案文書にて身體を勞すことなし　㈧ この陋室は、南陽の諸葛孔明の廬にたとへんか、又西蜀の揚雄子雲の亭に比せんか　㈨ 論語に「子、九夷に居らんと欲す、或ひと曰く、陋なる之を如何せんと、子曰く、君子之に居る、何の陋かこれあらんと。」

躁妄。内斯靜專。矧是樞機。興戎出好。吉凶榮辱。惟其所召。傷易則誕。傷煩則支。己肆物忤。出悖來違。非法不道。欽哉訓辭。

專なり。矧んや是れ樞機なるをや、(三)戎を興し好を出す。(四)吉凶榮辱、惟其の召く所なり。(五)易に傷るれば則ち誕なり。煩に傷るれば則ち支なり。己(六)肆なれば物忤ふ。出づるに悖れば(七)來ること違ふ。法に非ざれば道はざれ。(八)欽めや訓辭。

(一) せくとみなりなると (二) 心靜にして躁妄なし (三) 樞(くるゝ)の開閉を司り、機(弩牙)の中不中を分つ如く、言語は善惡吉凶の分るゝ所なるをや (四) 戎を起し、又親和をなす (五) 軽々しければ誕言に陷り、煩しければ亂れて通ぜず (六) 肆なれば他に忤ひ (七) 理に悖れば、答ふるものも道に背く (八) この訓言を愼むべし

動の箴

哲人知幾。誠之於思。志士勵行守之於爲。順理則裕。從欲惟危。造次克念。戰兢自持。習與性

哲人は幾を知り、(一)之を思ふに誠にす。志士は行を勵まし、(二)之を爲るに守る。理に順へば則ち裕(三)なり。欲に從へば惟れ危し。造次にも克(四)く念ひ、戰(五)兢として自ら持せよ。習性と成り、(六)聖賢歸を同うせん。

(一) 哲人は善惡吉凶の分るゝ所を知り、常に誠なり (二) 志士は行を勵まし、爲す所正理を守る (三) 心ゆたかな

其中則遷。制ニ之於外ー。以安ニ其內ー。克レ己復レ禮。久而誠矣。

(一)虛靈　(二)動けども形迹なし　(三)之を操り存するに要道あり　(四)目の視るところ、その準則となる　(五)もし物慾に蔽はるれば心之に遷る　(六)外に非禮を視ざるやうにし、己に克つて禮に復る(論語の語)べし　(七)かくて久しければ、本心の誠見はる

聽の箴

人有レ秉レ彝。本ニ乎天性ー。知誘物化。遂亡ニ其正ー。卓彼先覺。知レ止有レ定。閑レ邪存レ誠。非レ禮勿レ聽。

人の彝を秉るあるは、(一)天性に本づく。知に誘かれ物に化すれば、(二)遂に其の正を亡ふ。(三)卓たる彼の先覺は、止るを知つて定るあり。邪を閑ぎ誠を存す。(四)禮に非ずんば聽く勿れ。

(一)天與の常性を保ち、善を好み惡をにくむ　(二)物欲に誘ひ化せられ　(三)卓然特立せる先覺者は、至善に止るを知り、心自ら安定す　(四)非禮を聽かざるやうにすべし

言の箴

人心之動。因レ言以宣。發禁ニ

人心の動くや、言に因つて以て宣ぶ。(一)發するに躁妄を禁ずるときは、内斯れ靜(二)

帝力而天下和平。吾王撥レ亂。戢以二智力一。民懼二其威一。未レ懷二其德一。我皇撫レ運。扇以二淳風一。民懷二其始一。未レ保二其終一。爰述二金鏡一。窮レ神盡レ聖。使レ人以レ心。應レ言以レ行。包二括治體一。抑二揚詔令一。天下爲レ公。一人有レ慶。開レ羅起レ祝。援レ琴命レ詩。一日二日。念レ茲在レ茲。惟人所レ召。自レ天祐レ之。諍臣司レ直。敢告二前疑一。

るも四時更代し、萬物自然に生育す (一七) 唐の太宗 (一八) 天運により、淳朴の風を以て民を招く (一九) 太宗かつて金鏡録を作り、神聖を窮め盡せり (二〇) 人を使ふに同情を以てし、常に言行を一致せしめ (二一) 國家を治むる法を總持し、詔命を宣揚す (二二) 殷の湯王は、羅(とりあみ)を開いて祈をなし、仁心物に及び (二三) 舜帝は琴を弾じ、南風の詩を歌ひ、以て民の慍(いかり)を解けり (二四) 一日二日の中にも多くの勤めあり、禹が皐陶を思ひて忘れざりし如く、常に之を念頭に置かれよ (二五) 老子の言へる如く禍福は人の招く所にして、天より之を授くるなり (二六) 余、中書省に官して諍臣たり (二七) この箴を作り、皇帝の侍臣に告ぐ、名文珠璣注に「王に左輔右弼前疑後丞あり」。

視の箴

程正叔

心兮本虛、應レ物無レ迹。操レ之有レ要。視爲二之則一。蔽二交於前一。

心は本虛(一)、物に應じて(二)迹なし。之を操る(三)こと要あり。(四)視ること之が則たり。前に蔽ひ交る(五)ときは、其の中則ち遷る。之を外に制して、(六)以て其の内を安んじ。己に克つて禮に復る。(七)久うして誠あり。

生。勿渾渾而濁。勿皎皎而清。勿汶汶而闇。勿察察而明。雖冕旒蔽目。而視於未形。雖黈纊塞耳。而聽於無聲。縱心乎湛然之域。遊神於至道之精。扣之者應洪纖而效響。酌之者隨淺深而皆盈。故曰。天之經。地之寧。王之貞。四時不言而代序。萬物無言而化成。豈知

力にして天下和平なるを知らんや、吾が王亂(一七)を撥うて戡つに智力を以てし、民其の威を懼れて未だ其の德に懷かず。我が皇運を撫して扇ぐに淳風(一八)を以てす。民其の始に懷いて未だ其の終を保たず、爰に(一九)金鏡を述べて神を窮め聖を盡す、(二〇)人を使ふに心を以てし、言に應ずるに行を以てす、(二一)治體を包括し詞令を抑揚す。天下公を爲れば一人慶あり。(二二)羅を開いて祝を起し、(二三)琴を援いて詩を命ず、(二四)一日二日、茲れを念ふ茲れに在り、(二五)惟人の召く所なり。天より之を祐く、(二六)諍臣直を司つて、敢て前疑に告ぐ。(二七)

(一) 詩經、大雅皇矣篇に、「知らず識らず帝の則に順ふ」 (二) 書經洪範に「偏なく黨なく王道蕩々たり、黨なく、偏なく、王道平々たり」 (三) 一視同仁、心に私の好惡を設けず (四) 衆人皆憎み棄てて後 (五) 屈して伸びざる者を助け、無實の罪を雪ぐ (六) はかりの木の如く、はかりの錘の如く、自ら物を定限せざれば (七) 物に對し、私情を挾まざれば (八) 妍醜自ら生ず (九) あまり淸きに過ぎ、人と相容れざること勿れ (一〇) 冕に珠を垂れて目を蔽へるも、治亂の兆を未然に察せよ (一一) 又は黃綿の玉を垂れて耳を塞ぐも、天下の大事を無聲無言の中に聞け (一二) 無念無想の境に置き (一三) 至要精妙の道に遊ばせ (一四) 扣くものに應じて大小の響を致し、酌むものによりて淺深の量を盈たせ (一五) 天は常にして變らず、地は靜にして安く、帝王は貞正にして泰し (一六) 天道言はざ

聽亡國音。內荒伐人性。外荒蕩人心。難得之貨侈。亡國之音淫。勿謂我尊而傲賢侮士。勿謂我智而拒諫矜己。聞之。夏后據饋頻起。亦有魏帝牽裾不止。安彼反側。如春陽秋露。巍巍蕩蕩。恢漢高大度。撫茲庶事。如履薄臨深。戰戰慄慄。用周文小心。

詩之不識不知。書之無偏無黨。一彼此於胸臆。損好惡於心想。衆棄而後加刑。衆悅而後行賞。弱其強而治其亂。伸其屈而直其枉。故曰。如衡如石。不定物以限。物之懸者輕重自見。如水如鏡。不示物以情。物之鑒者妍蚩自

（一）詩の識らず知らず。（二）書の偏なく黨なき、（三）彼此を胸臆に一にして奸惡を心想に損せよ。（四）衆棄てて後に刑を加へよ。衆悅んで後に賞を行へ、其の强を弱うして其の亂を治め、（五）其の屈を伸べて其の枉を直うせよ。故に曰く、（六）衡の如く石の如く、物を定むるに限を以てせざれば、物の懸れる者、輕重自ら見はる。水の如く鏡の如く、（七）物を示すに情を以てせざれば、物の鑒る者（八）妍蚩自ら生ず。渾渾として濁る勿れ、（九）皎皎として淸きこと勿れ、汶汶として闇きことなかれ、察察として明なる勿れ、（一〇）冕旒目を蔽ふと雖も、而れども未形に視よ、（一一）黈纊耳を塞ぐと雖も、而れども無聲に聽け、（一二）心を湛然の域に縱にし、（一三）神を至道の精に遊はしめよ。（一四）之を扣く者は洪纖に應じて響を效し、之を酌む者は淺深に隨つて皆盈つ。故に曰く、（一五）天の經、地の寧、王の貞、（一六）四時言はずして代々序し、萬物言ふなくして化成す。豈帝

爲之度。而孱
爲之律。勿謂
無知。居高聽
卑。勿謂何害。
積小就大。樂
不可極。樂極
生哀。欲不可
縱。縱欲成災。
壯九重於內。
所居不過容
膝。彼昏不知。
瑤其臺而瓊
其室。羅八珍
於前。所食不
過適口。唯狂
罔念。丘其糟
而池其酒。勿
內荒於色。勿
外荒於禽。勿
貴難得貨。勿

智ありと謂ひて諫を拒み己に矜る勿れ。之を聞く、夏后(二六)は饋に據りて頻に起つと。亦魏帝(二七)は裾を牽けども止らざることありと。彼の反側(二八)を安んずる春陽秋露の如し。巍巍蕩蕩(二九)として漢高の大度を恢にせよ、茲の庶事を撫すること、薄き(三〇)を履み深きに臨むが如し。戰戰慄慄として周文(三一)の小心を用ひよ。

(一) 天子の位を守る政め (二) 天地を俯仰して考ふるに (三) 君は天下の福をなす、書經洪範に「これ辟福をなしこれ辟威をなす」 (四) 天下 (五) 土地の狀況に應じ、貢物を納めしめ、百官を具へ、政道を行はしむ (六) 油斷怠慢 (七) 天命 (八) 民の溺れ苦むを救ひ、情の塞れるを通ず (九) 心を民の好惡する所に用ふ (一〇) 天日の照す所に偏頗なく、至公の道に依估の沙汰なし (一一) 嚴を重んじて奢らず、樂を樂んで放逸ならず (一二) 左史官は王の言を記し、右史官は王の事を記す (一三) 出入には警蹕(さきはらひ)ありて行人を止む (一四) 君の德修りて四時の陰陽調ひ (一五) 政の得失により、日月星も正を示し、又變を生ず (一六) 人君は言行ともに天下の模範たるべし、史記夏紀に「禹、聲は律となり、身は度となる」 (一七) 天道知るなしと (一八) 帝居を壯大にすとも (一九) 昏愚無智の君は (二〇) 淳熬、淳母、炮豚、炮牂、擣珍、漬熬、肝膋八種の珍味 (二一) 狂亂遠慮の君 (二二) 多くの酒を貯へて奢る(糟は粹を去らざる酒) (二三) 女色 (二四) 田獵 (二五) 悲哀淫靡の音樂 (二六) 禹王は、食事中にも屢々起りて賢士を迎ふ (二七) 魏の文帝は、忠臣辛毗の諫を聽かず、毗がその裾を引くを拂ひ、怒りて內に入る (二八) 反側(不安の貌)する民を安ずること、春日の物を生じ、秋露の物を潤す如くせよ (二九) 高大廣遠漢の高祖の如き德を廣めよ (三〇) 政をなすに愼み、薄氷を踏みて深淵に臨む如く (三一) 懼れ〳〵て、周の文王の如く小心なれ

恐懼之心日弛。邪僻之情轉放。豈知事起乎所忽。禍生乎無妄。固以聖人受命。拯溺亨屯。歸罪於己。因心於民。大明無私照。至公無私親。故以一人治天下。不以天下奉一人。禮以禁其奢。樂以防其佚。左言而右事。出警而入蹕。四時調其慘舒。三光同其得失。故身

に私照なく、至公に私親なし。故に一人を以て天下を治め、天下を以て一人を奉ぜず。禮は以て其の奢を禁じ、樂は以て其の佚を防ぐ、左は言にして右は事なり。出づるに警し入るに蹕す。四時その慘舒を調へ、三光其の得失を同うす。故に身は之が度となり、聲は之が律となる。知ることなしと謂ふ勿れ。高きに居れども卑きに聽く。何の害あらんやと謂ふ勿れ。小を積んで大を就す。樂は極むべからず。樂極まれば哀を生ず。欲は縱にすべからず。欲を縱にすれば災を成す。九重を内に壯にすとも、居る所は膝を容るゝに過ぎず。彼の昏うして知らざるは、其の臺を瑤にして其の室を瓊にす。八珍を前に羅ぬとも、食ふ所は口に適ふに過ぎず。唯狂にして念ふ罔きは、其の糟を丘にして其の酒を池にす。内色に荒むなかれ、外禽に荒む勿れ、得難き貨を貴ぶ勿れ、亡國の音を聽く勿れ、内荒めば人の性を伐り、外荒めば人の心を蕩かす。得難きの貨は侈り、亡國の音は淫し、我を尊しといひて賢に傲り士を慢る勿れ。我を

之親一。而至二于忘一レ之者導故也。此亭之所二以作一也。凡君之子孫。登二斯亭一者。其有レ忘乎。因二其親一以廣二其思一。其有レ不レ興乎。君曰。博哉子之言也。吾其庶乎。曰未也。賢不肖異レ思。後豈不レ有下望二其木一。思二以爲一レ材。觀二其榛棘一。思二以爲一レ薪。登二其丘墓一。思レ發二其所一レ藏者上乎。於レ是遽然流レ涕以泣。曰。未也。吾爲レ子記レ之。使下君之子孫。誦二斯文一者。觀二其美一以爲レ勸。觀二其惡一以爲レ戒。其可レ免乎。君攬レ涕而謝曰。免矣。遂爲レ之記。

今來古往。俯察仰觀。惟辟作レ福。爲レ君實難。主二普天之下一。處二王公之上一。任レ土貢二其所一レ求。具寮陳二其所一レ倡。是故

箴類

(一)大寶の箴

張蘊古

今來古往、俯して察し(二)仰いで觀れば、(三)惟れ辟福を作す。君たること實に難し。(四)普天の下に主として、王公の上に處り、(五)上に任じてその求むる所を貢し、寮を具へて其の倡ふる所を陳ぶ。是の故に恐懼の心日に弛び、邪僻の情轉〻放なり。豈知らんや、事は忽にする所に起り、禍は(六)無妄より生ずるを。固に以れば聖人の(七)命を受くるは(八)溺を拯ひ屯を亨すなり。罪を己に歸し、心を(九)民に因む。(一〇)太明

墟墓之間荊棘莽然。狐兎之迹交道。其有不思其親者乎。請名之曰思亭。親者人之所不忘也。而君子愼之。故爲墓於郊。而封溝之。爲祠於家。而皆祭之。爲哀爲忌而悲哀之。所以存其思也。其可忘乎。雖然。自親而下。至于服盡。服盡則情盡。情盡則忘之矣。夫自吾

からんや。曰く、未だし。賢不肖思を異にす。後豈其の木を望んで以て材と爲さんことを思ひ、其の丘墓に登つては其の藏むる所(一九)を發かんことを思ふ者あらざらんやと。是に於て遽然(二〇)として涕を流して以て泣く。曰く、未だし。吾れ子が爲に之を記し、君の子孫の斯の文を誦する者をして、其の美を視ては以て勸むることを爲し、其の惡を視ては以て戒むることを爲さしめん。其れ免る(二一)べきかと。君涕を攬めて謝して曰く、免れんと。遂に之が記を作る。

(一) 徐州 (二) 數十年を經るも、親族を葬るを得ず (三) 借財し (四) 兄弟 (五) 余に舍名を與ふことを乞ふ (六) 刑罰の具 (七) 好むと憎むと (八) 事物あれば思念生ず (九) 墓に植えたる木 (一〇) をか (一一) いばら茂り、狐兎の通路となる (一二) 祭を愼み、忘れざるやうにす (一三) かこひや溝を作り (一四) 四時の祭をし (一五) 喪服を着、年忌の祭をし (一六) 親より以下、玄孫に至り、忌服の關係もなくなれば (一七) 父を思ふに因り、その情を推し廣め先祖を思ふ情を起す (一八) よく之を爲さんか (一九) 墓を發り、遺物を得んとす (二〇) 急に驚く貌 (二一) その禍を免れんと

貸邑里。葬二其父母昆弟一。凡幾喪、邑人憐レ之。多二助レ之者一。既葬。益樹以レ木。作二室其旁一。而問二名於余一。全以爲目之所レ視。而思從レ之。視二干戈一則思レ鬭。視二刀鋸一則思レ懼。視二廟社一則思レ敬。視二第家一則思レ安。夫人存二好惡喜懼之心一。物至而思。固其理也。今夫升レ高以望二松梓一。下二丘壠一而行二

の視る所にして思ひ之に從ふ、干戈を視ては則ち鬭を思ひ、刀鋸(六)を視ては則ち懼を思ひ、廟社を視ては則ち敬を思ひ、第家を視ては則ち安を思ふ。夫れ人の(七)好惡喜懼の心を存するときは、(八)物至つて思ふこと、固より其の理なり。今夫れ高きに升つて以て松梓(九)を望み。(一〇)丘壠を下つて墟墓の間を行けば、(一一)荊棘莽然として狐兎の迹道に交はる。其れ其の親を思はざる者あらんや、請ふ之を名けて思亭と曰はん。親は人の忘れざる所なり。而して君子之を愼む(一二)。故に墓を郊に爲りて之を封溝(一三)し、廟を家に爲りて之を嘗禘(一四)し、衰(一五)を爲り忌を爲りて之を悲哀す。其の思を存する所以なり。其れ忘るべけんや。然りと雖も、親よりして而下、(一六)服盡くるに至る。服盡くるときは則ち情盡く。情盡くるときは則ち之を忘る。夫れ吾の親よりして之を忘るゝに至るものは遠きが故なり。此の亭の作らるゝ所以なり。凡そ君の子孫斯の亭に登る者、其れ忘るゝことあらんや。其の親に因つて以て其の思を廣め(一七)ば、其れ興さざることあらんや。君の曰く、博いかな子の言や、吾其れ庶(一八)

何邪。詩書之道廢。人惟見利。而不聞義焉耳。孝武乘豐富。世祖出戎行。皆攀學術。俗化之厚。延于靈獻。草茅危言者。折首而不悔。功烈震主者。聞命而釋兵。群雄相視。不敢去臣位。尙數十年。教道之結人心如此。今代遭聖神。爾宜得聖君俾爾由庠序。踐古人之迹。天下治則譚禮樂以陶吾民。一有不幸。尤當仗大節。爲臣死忠。爲子死孝。使人有所賴。且有所法。是惟朝家教學之意。若其弄筆以徼利達而已。豈徒二三子之羞。抑亦爲國者之憂。

褻に累ね寵位をうかゞひつゝ、なほ臣位にあること數十年　(一八) 聖代に遭ひ　(一九) 學校、孟子に「夏に校といひ、殷に序といひ、周に庠といふ」　(二〇) 教育せん　(二一) 散亂　(二二) 教を頒み、道に法らしめん　(二三) 文章を弄し虛名を求むるのみならば　(二四) 學生の

思亭の記

陳師道

甄故徐富家。至甄君。始以明經教授。鄉稱善人。而家益貧。更數十歲不克葬。乞

甄は故徐(一)の富家なり。甄君に至り、始めて明經教授を以て鄉に善人と稱せらる。而して家益〻貧し、(二)數十歲を更へて葬ること克はず、邑里に(三)乞貸して其の父母(四)昆弟を葬ること凡そ幾ばく喪ぞ。邑人之を憐んで之を助くる者多し。既に葬つて益し樹うるに木を以てし、室を其の傍に作り、名を余に問ふ。(五)余以爲らく曰

厥位面㆑陽。厥材孔良。殿堂門廡黝堊丹漆。擧以㆓法故㆒。生師有㆑舍。庖廩有㆑次。百爾器備。竝㆑手偕作。工善吏勤。晨夜展㆑力。越明年成。舍采且㆑有㆑日。盱江李覯諗㆓于衆㆒曰。惟四代之學。考㆓諸經㆒可㆑見已。秦以㆓山西㆒鏖㆓六國㆒。欲㆑帝㆓萬世㆒。劉氏一呼。而關門不㆑守。武夫健將。賓降恐㆑后。

と此の如し。今代聖神に遭へり、(二八)爾袁聖君を得たり。爾をして庠序に由つて(二九)古人の迹を踐ましむ。天下治まるときは則ち禮樂を譚じて以て吾が民を陶せん。(三〇)一も不幸あらば(三一)、尤も當に大節に仗り、臣と爲りては忠に死し、子と爲りては孝に死すべし。人をして賴る所あつて(三二)且つ法る所あらしむるは、是れ惟れ朝家敎學の意なり。若し其れ筆を弄して以て利達を徼むる(三三)のみならば、豈徒に二三子の羞(三四)のみならんや。抑〻亦國を爲むる者の憂なり。

(一) 仁宗皇帝即位の二十三年 (二) 學校 (三) 賢人 (四) 道教の官職を借り、學德なきもの師となし、文書を具へて責を塞ぐ (五) 郡縣數城の間に絃誦の聲なき處あり (六) 溯りて (七) 袁州の事を知行せり (八) 學生を見、黌中の宮殿の缺けたる狀を知る (九) 儒道の效、疎濶となり (一〇) 官の名 (一一) 善とす (一二) 孔子の舊廟を見るに形狭く、改め造るに足らず (一三) 州城の東 (一四) 土地高燥にして陽に向ひ (一五) 建築材料は甚だ好く (一六) 兩廡の廊 (一七) 黑く塗り、赤く彩り、すべて古法に則る (一八) 生徒と師との居舍あり、臺所米倉等も順序よくつゞき、萬の道具皆備る (一九) 不日、釋奠(孔子の祭)を行はんとす (二〇) 虞、夏、商、周 (二一) 山西の地を以て六國を亡し (二二) 劉邦(漢の高祖) (二三) 漢の孝武皇帝は天下の豐富に乘じ、世祖(光武皇帝)は軍旅に起り、皆學術に勉めたり (二四) 風化厚く、永く靈帝獻帝の世に及び (二五) 草莽の臣、國を憂へ忠諫を納るゝもの、身を殺さるゝも悔ゆることなく (二六) 又、大臣大將にしてその勢威、君を動し恐れしむる者も勅命を聞きて兵を釋き (二七) 姦雄、世の

有假宮借師。苟具文書。或連數城。亡誦絃聲。倡而不和。教尼不行。三十有二年。范陽祖君無擇知袁州。始至進諸生。知學宮闕狀。大懼人材放失。儒效闊疏。亡以稱上意旨。通判潁川陳君侁聞而是之。議以克合。相舊夫子廟。陿隘不足改爲。乃營治之東。厥土燥剛。

闕狀を知り、大に人材放失し、(九)儒效闊疏にして、以て上の意旨に稱ふ亡きを懼る。(一〇)通判潁川の陳君侁聞いて之を是とす。(一一)議して以て克く合へり。舊夫子の廟を相るに、(一二)陿隘にして改め爲るに足らず。乃ち治の東に營す。(一三)厥の土燥剛にして、(一四)厥の位陽に面し、厥の材孔だ良し。(一五)殿堂門廡、(一六)黝堊丹漆、(一七)擧法故を以てし、生師(一八)の舍あり。庖廩次あり。百爾の器備れり。手を竝せて偕に作り、工善く吏勤めて晨夜に力を展べ、越えて明年成る。(一九)舍采且に日あらんとす。盱江の李覯來に諗げて曰く、惟みるに四代の學、(二〇)諸を經に考へて見るべきのみ。(二一)秦山西を以て六國を鏖にし、萬世に帝たらんと欲す。(二二)劉氏一たび呼んで關門守らず。武夫健將、賣降して后れんことを恐るるは、何ぞや。詩書の道廢れ、人惟利を見て義を聞かざるのみ、(二三)孝武豐富に乘じ、世祖戎行より出づ、皆學術に孳孳たり。俗化の厚き、(二四)靈獻に延く、(二五)艸茅危言の者、首を折るとも悔いず。功烈主を震す者、(二六)命を聞いて兵を釋く。(二七)群雄相視て敢て臣位を去らざること、尙ほ數十年。敎道の人心を結ぶこ

其急一。後二其緩一專利二國家一。而不中爲レ身謀上。彼汲二汲於名一者。猶三汲二汲於利一也。其間相去何遠哉。天禧初。眞宗詔置二諫官六員一。責二其職事一。慶曆中。錢君始書二其名於版一。光而久恐二漫滅一。嘉祐八年。刻二著于石一。後之人。將下歷指二其名一而議上之曰中某也忠。某也詐。某也直。某也曲上。嗚呼。可レ不レ懼哉。

り、某は詐なり、某は直し、某は曲れりと曰はんとす。嗚呼懼れざるべけんや。

(一) 特に諫官といふものなし (二) 諫官を置く (三) 利害 (四) 天下の大事に志して小事を措き (五) 一身の利害を考へず (六) 名譽に汲々たるものは、利益に汲々たるに同じ (七) 職責を盡さしめ給ふ (八) 錢昆字は裕之 (九) 諫官の名を木版に記し、諫院に置く

皇帝二十有三年。制二詔州縣一。立レ學。惟時守令。有レ哲有レ愚。有三屈レ力殫レ慮。祗順二德意一。

袁州州學の記

李泰白

皇帝(一)二十有三年、州縣に制詔(二)して學を立つ。惟れ時の守令、哲(三)あり、愚あり、力を屈し慮を殫して祇德意に順ふあり。宮を假り師を借して(四)苟も文書に具るあり、或は數城を連ねて誦絃の聲なく、(五)倡ふれども和せず。教尼して行はれず。(六)三十有二年、范陽の祖君無擇袁州に知たり。(七)始めて至り、諸生を進めて、(八)學官の

帝位以レ之而危矣。若然則死ニ下獄一、投ニ遠方一。非ニ不幸一也。亦宜也。是知一國之政。萬人之命。懸ニ于宰相一。可レ不レ愼歟。復有ニ無レ毀無レ譽。旅進旅退。竊レ位而苟祿。備レ員而全レ身者上。亦無レ所レ取焉。棘寺小吏王禹偁爲レ文。請レ誌ニ院壁一。用規ニ于執政者一。

古者諫無レ官。自ニ公卿大夫一。至ニ于工商一無レ不レ得レ諫者上。漢興以來。始置レ官。夫以ニ天下之政。四海之衆。得失利病。萃ニ于一官一。使レ言レ之。其爲レ任亦重矣。居ニ是官一者。當下志ニ其大一。捨ニ其細一。先ニ

諫院題名の記

司馬君實

古者諫むるに官なし。(一)公卿大夫より工商に至るまで、諫むるを得ざるものなし。漢興つて以來、始めて(二)官を置く、夫れ天下の政、四海の衆を以て、得失利病、(三)一官に萃めて之を言はしむ。其の任たること亦重し。是の官に居る者は、當に其の(四)大を志し、其の細を捨て、其の急を先にし、其の緩を後にし、專ら國家を利して(五)身のために謀らざるべし。彼の名に(六)汲汲たる者は、猶ほ利に汲汲たるがごとし。其間相去る何ぞ遠からんや。(七)天禧の初、眞宗詔して諫官六員を置き、其の職事を責む。慶曆中、(八)錢君始めて其の名を(九)版に書す。光久うして漫滅せんことを恐る。嘉祐八年刻して石に著す。後の人將に歷く其の名を指し、之を議して某は忠な

生以之而富庶。若然則總百官、食萬錢。非幸也、宜也。其或私讎未復。思所逐之。舊恩未報。思所榮之。子女玉帛。何以致之。車馬器玩。何以取之。姦人附勢。我將陟之。直士抗言。我將黜之。三時告災。上有憂色。構巧詞以悅之。羣吏弄法。君聞怨言。進諂容以媚之。私心慆慆。假寐而坐。九門既開。重瞳屢回。相君言焉。時君惑焉。政柄于是乎隳哉。

に開け、重瞳屢〻回る。(一五)相君言し、時君惑ふ。政柄是に于てか隳れ、帝位之を以て危し。若し然らば則ち下獄に死し(一六)、遠方に投ぜらるゝも不幸には非ず、亦宜なり。是に知る、一國の政、萬人の命は、宰相に懸ることを。愼まざるべけんや。復た毀もなく譽もなく、旅に進み旅に退き、位を竊んで苟も祿し(一七)、員に備つて身を全うする者あり。亦取る所なし。棘寺(一八)の小吏王禹偁(一九)、文を爲り、請うて院の壁に誌し、用つて執政の者を規す。

(一) 陰陽風雨晦明 (二) 災害 (三) なは五刑(墨、劓、剕、宮辟、大辟)を縦むるを得ず (四) 憂深き貌 (五) 禁城の諸門開け、天子出御し給ふ、書經舜典に「四門を闢き、四目を明にし、四聰を達す」 (六) 皇風清く平かに、萬民富みて庶なり (七) 百官の上位に居り、日々萬錢の俸を受くとも僥倖などいふ類にはあらず (八) あた (九) 珍器の類 (一〇) 正直の士、反抗していふ (一一) 春夏秋の三時、水旱蝗の災 (一二) 言葉巧に天子を悦ばせ (一三) 民の怨言 (一四) 私心久積し、衣冠のまゝ眠り (一五) 天子出御し給ふ、史記に「虞舜は名を重華といふ」と、正義に「目、重瞳子なり、故に重華といふ」と (一六) 獄に下されて死し、遠國に流さるとも、不幸なりといふべきにあらず (一七) 空しく祿を食み (一八) 司法衙門の一なる大理寺 (一九) 王元之

四夷未附。思所來之。兵革未息。何以弭之。田疇多蕪。何以闢之。賢人在野。我將進之。佞臣立朝。我將斥之。六氣不和。災眚荐至。願避位以禳之。五刑未措。欺詐日生。請修德以釐之。憂心忡忡。待旦而入。九門既啓。四聰甚邇。相君言焉。時君納焉。皇風于是乎清夷。蒼

之を來さん所を思ふ。兵革未だ息まずんば、何を以てか之を弭めん。田疇多く蕪すれば、何を以てか之を闢かん。賢人野に在らば、我將に之を進めんとし、佞臣朝に立たば我將に之を斥けんとす。(一)六氣和せず、(二)災眚荐に至らば、願くは位を避けて以て之を禳はん。(三)五刑未だ措かず、欺詐日に生ぜば、請ふ德を修めて以て之を釐めん。(四)憂心忡忡たり。旦を待つて入る。(五)九門既に啓け、四聰甚だ邇し。相君言し、時君納る。(六)皇風是に于てか淸夷に、蒼生之を以て富庶なり。若し然らば則ち(七)百官を總べて萬錢を食まんこと、幸に非ず、宜なり。其れ或は(八)私讎未だ復せず、之を逐はん所を思ひ、舊恩未だ報ぜず、之を榮えしめん所を思ふ。子女玉帛、何を以てか之を致さん。(九)車馬翫玩、何を以てか之を取らん。姦人勢に附かば、我將に之を陟けんとし、(一〇)直士抗言すれば、我將に之を黜けんとす。(一一)三時災を告げ、上憂色あらば、(一二)巧詞を構へて以て之を悅ばしめ、羣吏法を弄し、(一三)君怨言を聞かば、諂容を進めて以て之に媚びん。(一四)私心慆慆として假寐して坐す。九門既

道。六卿分職。張其敎矣。是知君逸於上。臣勞於下。法乎天也。古之善相天下者。自咎夔至房魏可數也。是不獨有其德。亦皆務於勤耳。況夙興夜寐以事一人。卿大夫猶然。況宰相乎。朝廷自國初因舊制。設宰臣待漏院于丹鳳門之右。示勤政也。至若北闕向曙。東方未明。相君啓行。煌煌火城。相君至止。噦噦鑾聲。金門未闢。玉漏猶滴。撤蓋下車。于焉以息。待漏之際。相君其有思乎。

より、舊制に因つて、宰臣の待漏院(一〇)を丹鳳門の右に設く、勤政を示すなり。至若のみならず、北闕(一一)曙に向はんとして東方未だ明けず。相君行を啓く(一二)、煌煌たる(一三)火城、相君至り止り、噦噦たる鑾聲(一四)あり。金門未だ闢けず。玉漏猶ほ滴る(一五)。蓋を撤て車より下り、焉に以て息ふ。漏を待つの際、相君其れ思ふあるか。

㊀ 萬物生々の理法通じ、一年功成就す ㊁ 四時五行が天の使となり、氣化を宣べ行へばなり ㊂ 敎化を張大すればなり ㊃ 天道の自然に法る ㊄ 舜の臣皐陶夔 ㊅ 唐の名相、房玄齡、魏徵 ㊆ 數少からず ㊇ 天子 ㊈ 宋の朝廷 ㊉ 夜の漏刻盡くるに及び早く晨に出仕するため、先づ來りて時刻を待つ處 (一一) 禁闕 (一二) 宰相、その邸を出づ (一三) 炬火(たいまつ)を照り輝かし、焰の揚ること城の如く (一四) 車の鈴の音、鸞の鳴くが如く (一五) 夜の漏刻

其或兆民未安。思所泰之。

其れ或は兆民未だ安んぜずんば、之を泰んぜん所を思ひ、四夷未だ附かずんば、

迎素月。亦謫居之勝槩也。彼齊雲落星。高則高矣。井幹麗譙。華則華矣。止於貯妓女。藏歌舞。非騷人之事。吾所不取。吾聞竹工云。竹之爲瓦。僅十稔。若重覆之。得二十稔。噫吾以至道乙未歲。自翰林出滁上。丙申移廣陵。丁酉又入西掖。戊戌歲除日。有齊安之命。己亥閏三月到郡。四年之間。奔走不暇。未知明年又在何處。豈懼竹樓之易朽乎。後之人與我同志。嗣而葺之。庶斯樓之不朽也。咸平二年。八月十五日記。

待漏院の記

王元之

天道不言。而品物亨。歳功成者。何謂也。四時之吏。五行之佐。宣其氣矣。聖人不言。而百姓親。萬邦寧者。何謂也。三公論

天道言はずして品物亨り(一)、歳功成るとは何の謂ぞや。(二)四時の吏、五行の佐、其の氣を宣ればなり。聖人言はずして百姓親み、萬邦寧しとは何の謂ぞや。三公道を論じ、六卿職を分ちて其の教を張ればなり(三)。是に知る、君上に逸く、臣下に勞するは(四)天に法ればなり。古の善く天下に相たる者、(五)咎夔より(六)房魏に至るまで(七)數ふべし。是れ獨り其の德あるのみならず。亦皆勤に務るのみ、況んや夙に興き夜に寐ね、以て(八)一人に事ふるをや。卿大夫すら猶ほ然り、況や宰相をや。(九)朝廷國初

布聲。冬宜密雪。有碎玉聲。宜鼓琴。琴調和暢。宜詠詩。詩韻清絕。宜圍棊。子聲丁丁然。宜投壺。矢聲錚錚然。皆竹樓之所助也。公退之暇。披鶴氅衣。戴華陽巾。手執周易一卷。焚香默坐。消遣世慮。江山之外。第見風帆沙鳥煙雲竹樹而已。待其酒力醒。茶煙歇。送夕陽。

なり。彼の齊雲落星(一六)、高きは則ち高し、井幹麗譙(一七)、華なるは則ち華なり。妓女を貯へ、歌舞を藏むるに止れり。騷人(一八)の事に非ず。吾が取らざる所なり。吾竹工に聞く、云ふ竹の瓦たる僅に十稔なり(一九)。若し重ねて之を覆かば二十稔を得んと。噫、吾至道乙未の歳を以て、翰林より滁上に出で(二〇)、丙申に廣陵に移り、丁酉又西掖に入る(二一)。戊戌の歳除日(二二)、齊安の命あり(二三)。己亥閏三月郡に到る。四年の間、奔走して暇あらず。明年又何れの處に在らんを知らず。豈竹樓の朽ち易きを懼れんや。後の人我と志を同うして、嗣いで之を葺かば、庶くは斯の樓の朽ちざらんことを。咸平二年八月十五日記す。

(一) 土瓦 (二) 家々 (三) 價低く、製作容易なるによる (四) 黄州城内西北隅の地 (五) 城の雉堞破れ草いばらの類茂る (六) 遠山の影も見え、江水も近く平かに見ゆ (七) その景、幽かに靜かに、遠くつゞき面白きこと喩ふる物なし (八) 玉を砕く如き聲 (九) 遊戯の名 (一〇) 役所より退けたる後 (一一) 鶴の羽毛を織りたる衣 (一二) 隱者の冠りもの、陶隱强に始まるといふ (一三) 浮世の思慮を消し去る (一四) 風を孕む帆、沙地を飛ぶ鳥 (一五) 左遷の間に於ける勝れたる樂なり (一六) 呉都の樓臺の名 (一七) 隋都の樓臺の名 (一八) 風雅の人 (一九) 僅に十年を保つ (二〇) 翰林院より出でて滁上に赴任し (二一) 中書省に入る (二二) 大晦日 (二三) 黄州に左遷の命あり（齊安は黄州の郡名なり）

黃岡之地多レ
竹。大者如レ椽。
竹工破レ之。刳
去二其節一。用代二
陶瓦一。比屋皆
然。以二其價廉一。
而工省一也。子
城西北隅。雉
堞圮毀。蓁莽
荒穢。因作二小
樓二間一。與二月
波樓一通。遠呑二
山光一。平挹二江
瀨一。幽閴遼敻。
不レ可二具狀一。夏
宜二急雨一。有二瀑

黃州竹樓の記

王元之

黃岡の地に竹多し。大なる者は椽の如く、竹工之を破り、刳つて其の節を去り、用ひて(一)陶瓦に代ふ。(二)比屋皆然り。(三)其の價の廉にして工の省くを以てなり。(四)子城の西北の隅、雉堞圮毀し、(五)蓁莽荒穢せり。因つて小樓二間を作つて月波樓を通ず。(六)遠く山光を呑み、平かに江瀨を挹す。(七)幽閴遼敻として具に狀すべからず。夏は急雨に宜し、瀑布の聲あり、冬は密雪に宜し、(八)碎玉の聲あり、琴を鼓するに宜しくして、琴調和暢せり。詩を詠ずるに宜しくして、詩韻淸絕なり。棊を圍むに宜しくして、子聲丁丁然たり。(九)投壺に宜しくして矢聲錚錚然たり。皆竹樓の助くる所なり。公より(一〇)退くの暇、(一一)鶴氅衣を披、(一二)華陽巾を戴き、手に周易一卷を執り、香を焚いて默坐し、世慮を消遣す。江山の外、第風帆沙鳥、煙雲竹樹を見るのみ、其の酒力醒め、(一三)茶煙歇むを待ちて、夕陽を送り、(一四)素月を迎ふ。亦(一五)謫居の勝槩

武以ㇾ禮下ㇾ之。在二蠱之上九一。衆方有ㇾ爲。而獨不ㇾ事二王侯一。高二尙其事一。先生以ㇾ之。在二屯之初九一。陽德方亨。而能以ㇾ貴下ㇾ賤。大得ㇾ民也。光武以ㇾ之。蓋先生之心。出二乎日月之上一。光武之量。包二乎天地之外一。微二先生一。不ㇾ能ㇾ成二光武之大一。微二光武一。豈能遂二先生之高一哉。而使二貪夫廉。懦夫立一。是大有ㇾ功二於名敎一也。仲淹來守二是邦一。始構ㇾ堂而奠焉。乃復下爲二其後一者四家上。以奉二祠事一。又從而歌曰。雲山蒼蒼。江水泱泱。先生之風。山高水長。

げんや。而して貪夫をして廉に、懦夫(一六)をして立たしむ。是れ大に名敎(一七)に功あるなり。仲淹(一八)來つて是の邦(一九)に守たり。始めて堂を構へて奠す。乃ち其の後たる者四家(二〇)を復して以て祠事を奉ぜしめ、又從つて歌うて曰く、雲山蒼蒼(二一)たり。江水泱泱(二二)たり。先生の風、山高く(二三)水長し。

(一) 名は光、字は子陵、會稽餘姚の人、少き時光武皇帝と同じく學ぶ、光武位に即くに及び、諫議大夫に拜すれども受けず、富春山に隱れ、釣耕して終る (二) 舊友 (三) 帝位に即き漢室中興す、綱鑑大全光武紀に「儒生彊華、關中より赤伏符を奉じ、來つて天に詣る」とあり、漢の德は火を尙ぶ、赤はその色なり、又易乾の卦に、時に六龍に乘じ天に御す」とあり (四) 之に如くものなし (五) 節義を以て高ぶる (六) 本傳に「帝、光を引き入つて舊故を論道す、因て共に偃臥す、光、足を以て帝の腹に加ふ、明日、太史奏す、客星帝座を犯すこと甚だ急なり」と、帝笑つて曰く「朕、故人嚴子陵と共に臥せしのみ」と (七) 衣冠車馬の富貴を泥土の如く輕んず (八) 易の卦の名 (九) 天下方に治まり、諸人出て事ふる時 (一〇) 己、ひとり王侯に事へず、行を高尙にす (一一) また易の卦の名 (一二) 帝德方に明に (一三) 民心を得 (一四) 高尙なること (一五) 廣大なること (一六) 貪慾のもの、心をも清め、怯懦の心をも奮はしむ (一七) 人倫の敎 (一八) 范文正公の名 (一九) 子陵の本國嚴州 (二〇) 後裔四家の調租を免じて祭祀を奉ぜしむ (二一) 雲のたなびける山 (二二) 深廣にして濶り盛し (二三) 山の高き如く、江の長き如し

江湖之遠。則憂二其君一。是進亦憂。退亦憂。然則何時而樂耶。其必曰下先二天下之憂一而憂。後二天下之樂一而樂上歟。噫微二斯人一。吾誰與歸。

先生光武之故人也。相尚以レ道。及下帝握二赤符一乘中六龍上。得二聖人之時一。臣妾億兆。天下孰加レ焉。惟先生以レ節高レ之。既而動二星象一。歸二江湖一。得二聖人之淸一。泥二塗軒冕一。天下孰加レ焉。惟光

嚴先生祠堂の記

范希文

先生は光武の故人なり。相尚ぶに道を以てす。帝の赤符を握り六龍に乘ずるに及び、聖人の時を得て臣妾億兆なり。天下孰か焉に加へん。惟先生節を以て之に高ぶる。既にして星象を動して江湖に歸り、聖人の淸を得て軒冕を泥塗にす。天下孰か焉に加へん。惟光武禮を以て之に下れり。蠱の上九に在り、衆方に爲ることあり。獨り王侯に事へず。其の事を高尚にすと。先生之を以ひたり。屯の初九に在り。陽德方に亨る。能く貴を以て賤に下れば、大に民を得と。光武之を以ひたり。蓋し先生の心は日月の上に出で、光武の量は天地の外を包ねたり。先生微かりせば、光武の大を成す能はず。光武微かりせば、豈能く先生の高きを遂

乎。若夫霪雨霏霏連月不レ開。陰風怒號。濁浪排レ空。日星隱レ曜。山岳潛レ形。商旅不レ行。檣傾楫摧。薄暮冥冥。虎嘯猿啼。登二斯樓一也。則有二去レ國懷レ郷。憂レ讒畏レ譏。滿目蕭然。感極而悲者一矣。至レ若二春和景明。波瀾不レ驚。上下天光。一碧萬頃。沙鷗翔集。錦鱗游泳。岸芷汀蘭。郁郁青青。而或長煙一空。皓月千里。浮光躍レ金。靜影沈レ璧。漁歌互答。此樂何極。登二斯樓一也。則有二心曠神怡。寵辱皆忘。把レ酒臨レ風。其喜洋洋者一矣。嗟夫予嘗求二古仁人之心一。或異二二者之爲一。何哉。不二以レ物喜一。不二以レ己悲一。居二廟堂之高一。則憂二其民一。處二

ず。己を以て悲まず、廟堂の高きに居ては、則ち其の民を憂へ、江湖の遠きに處りては則ち其の君を憂へ、是れ進んでも亦憂へ、退いても亦憂ふ。然らば則ち何れの時にか樂まんか。其れ必ず(二一)天下の憂に先ちて憂へ、天下の樂に後れて樂まんと曰はんか。噫(二二)斯の人微かりせば、吾誰と與にか歸せん。

(一) 岳州府城西南の樓 (二) 名は宗諒、字は子京 (三) 廢れたる諸事皆興る (四) 從來よりも廣く大にし (五) 巴陵の勝景は洞庭湖によりて成る (六) 遠山影をうつし、長江を入れ、ひろ〳〵として限なし (七) 朝夕の氣象、千變萬化す (八) 洞庭湖の水、北は巫峽に通じ、南は瀟湘につゞき (九) 遷謫せられて愁ふる人 (一〇) 濁れる浪は天を打ち (一一) 日の星も光なく、山岳も影を匿し (一二) 見る限り物悲しく (一三) 景色明かた (一四) 空も水も晴れ輝き (一五) 沙地のかもめも翔り集り、美しき魚も游泳す (一六) 岸の芷蘭(香草)は薫りて青く (一七) 長く曳きたる雲煙も消え (一八) 水は黄色に輝き躍り、月影は玉を沈めたる如く (一九) 古の仁人の心如何と考ふるに (二〇) 外物のために喜ばず、己の境遇のために悲まず (二一) 樂ふべきことは、天下の人より先に憂へ、樂むべき事は、天下の人より後に樂む (二二) 此の如き仁人なくば、余は誰をたよりとすべきぞ

重修岳陽樓、増其舊制、刻唐賢今人詩賦于其上、屬予作文以記之。予觀夫巴陵勝狀、在洞庭一湖。銜遠山、呑長江、浩浩湯湯。横無際涯、朝暉夕陰。氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。前人之述備矣。然則北通巫峽、南極瀟湘。遷客騒人多會于此。覽物之情、得無異

を觀るに、洞庭の一湖に在り。遠山を銜み、長江を呑み、浩浩湯湯として、横に際涯なし。朝暉夕陰、氣象萬千なり。此れ則ち岳陽樓の大觀なり。前人の述備れり。然れば則ち北巫峽に通じ、南瀟湘を極む。遷客騒人、多く此に會す。物を覽るの情、異なるなきを得んや。若し夫れ霪雨霏霏として連月開けず、陰風怒號して濁浪空を排し、日星曜を隱し、山岳形を潛む。商旅行かず、檣傾き檝摧け、薄暮冥冥として、虎嘯き猿啼く。斯の樓に登れば、則ち國を去つて鄕を懷ひ、讒を憂へ譏を畏れ、滿目蕭然として、感極つて悲む者あらん。春和し景明にして、波瀾驚かず、上下天光、一碧萬頃、沙鷗翔り集り、錦鱗游泳し、岸芷汀蘭、郁郁青青として、或は長煙一空、皓月千里。浮光金を躍らし、靜影璧を沈め、漁歌互に答ふるが若きに至つては、此の樂何ぞ極らん。斯の樓に登れば、則ち心曠く神怡んで、寵辱皆忘れ、酒を把つて風に臨み、其の喜び洋洋たる者あらん。嗟夫れ予嘗て古の仁人の心を求めれば、或は二者の爲に異なるは何ぞや。物を以て喜ば

之。曰。五日不ㇾ雨可乎。曰五日不ㇾ雨則無ㇾ麥。十日不ㇾ雨可乎。曰十日不ㇾ雨則無ㇾ禾。無ㇾ麥無ㇾ禾。歲且荐飢。獄訟繁興。而盜賊滋熾。則吾與二二三子一。雖ㇾ欲三優游以樂二於此亭一。其可ㇾ得耶。今天不ㇾ遺二斯民一。始旱而賜ㇾ之以ㇾ雨。使丁吾與二二三子一。得丙相與，優游而樂乙於此亭甲者。皆雨之賜也。其又可ㇾ忘耶。既以名ㇾ亭。又從而歌ㇾ之曰。使二天而雨ㇾ珠。寒者不ㇾ得二以爲ㇾ襦。使二天而雨ㇾ玉。飢者不ㇾ得二以爲ㇾ粟。一雨三日。伊誰之力。民曰太守。太守不ㇾ有。歸二之天子一。天子曰不ㇾ然。歸二之造物一。造物不二自以爲ㇾ功。歸二之太空一。太空冥冥。不ㇾ可二得而名一。吾以名二吾亭一。

(一) 禾(あは)を得て嘉禾篇(書經逸書)を作り (二) 鼎を得て鼎元と改元し (三) 長狄僑如に勝ち、その子を僑如と名く (四) 長安の左、即ち郿墟 (五) 岐山の南に麥の雨降る (六) 豐年 (七) 官庭 (八) 諸君と共の意 (九) 短衣 (一〇) 米 (一一) 陳公弼 (一二) 太守は己の力とせず (一三) 造化の神 (一四) 虛空は高大にしてはかり難く

慶曆四年春。滕子京謫守二巴陵郡一。越明年。政通人和。百廢俱興。乃

岳陽樓の記 (一)

范希文

慶曆四年の春、滕子京(二)謫せられて巴陵郡に守たり。越えて明年、政通じ人和し、(三)百廢俱に興る。乃ち重ねて岳陽樓を修め、其の舊制(四)を增し、唐賢今人の詩賦を其の上に刻み、予に屬して文を作つて以て之を記せしむ。予夫の巴陵の勝狀(五)

息之所。是歲之春。雨二麥於岐山之陽。其占爲二有年。既而彌レ月不レ雨。民方以爲レ憂。越三月乙卯乃雨。甲子又雨。民以爲レ未レ足。丁卯大雨。三日乃止。官吏相與慶二於庭。商賈相與歌二於市。農夫相與抃二於野。憂者以喜。病者以愈。而吾亭適成。於是擧二酒於亭上。以屬レ客而告レ

し、而して之に告げて曰く、五日雨ふらずんば可ならんや。曰く、五日雨ふらずんば則ち麥なけん。十日雨ふらずんば可ならんや。曰く、十日雨らずんば則ち禾なけん。麥なく禾なくんば、歲且つ荐に饑ゑ、獄訟繁く興つて、盜賊茲々熾ならん。則ち吾と二三子（八）と、優游して以て此の亭に樂まんと欲すと雖も、其れ得べけんや。今天斯の民を遺てず、始め旱して之に賜ふに雨を以てす。吾と二三子とをして、相與に優游して此の亭に樂むことを得るものは、皆雨の賜なり。其れ又忘るべけんや。既にして以て亭に名く。又從つて之を歌うて曰く、天をして珠を雨ふらさしむとも、寒えたる者以て襦（九）となすを得ず。天をして玉を雨ふらさしむるとも、飢ゑたる者以て粟（一〇）と爲すを得ず。一雨三日、伊れ誰の力ぞや、民の曰く、太守（一一）なりと。太守（一二）有とせず。之を天子に歸す。天子の曰く、然らずと。之を造物（一三）に歸す。造物自ら以て功と爲さず。之を太空に歸す。太空（一四）は冥冥たり。得て名くべからず。吾以て吾が亭に名く。

亭以雨名。志喜也。古者有喜。則以名物。示不忘也。周公得禾以名其書。漢武得鼎以名其年。叔孫勝敵。以名其子。其喜之大小不齊。其示不忘一也。予至扶風之明年。始治官舍。爲亭於堂之北。而鑿池其南。引流種樹。以爲休

喜雨亭の記

蘇子瞻

亭、雨を以て名く。喜を志すなり。古者喜あれば則ち以て物に名く。忘れざるを示すなり。周公は禾を得て以て(一)其の書に名け、漢武は鼎を得て以て(二)其の年に名け、叔孫は敵に勝って以て(三)其の子に名く、其の喜の大小は齊しからざれども、其の忘れざるを示すは一なり。予扶風(四)に至るの明年、始めて官舍を治す。亭を堂の北に爲り、池を其の南に鑿ち、流を引き樹を種ゑて、以て休息の所となす。是の歳の春、麥(五)を岐山の陽に雨す。其の占(六)有年たり。既にして月に彌って雨ふらず。民方に以て憂と爲す。越えて三月乙卯に乃ち雨ふる。甲子に又雨ふる。民以て未だ足らずとなす。丁卯に大に雨ふり、三日にして乃ち止む。官吏は相與に庭(七)に慶し、商賈は相與に市に歌ひ、農夫は相與に野に抃ち、憂ふる者は以て喜ぶ。病める者は以て愈ゆ、吾が亭適〻成れり。是に於て酒を亭上に擧げて以て客に屬

愚婦之不意。以驚駭而夸耀之也。然則高牙大纛。不足爲公榮。桓圭袞裳不足爲公貴。惟德被生民。而功施社稷。勒之金石。播之聲詩。以耀後世。而垂無窮。此公之志。而士以此望於公也。豈止夸一時榮一鄕哉。公在至和中。嘗以武康之節。來治於相。乃作晝錦之堂于後圃。既又刻詩於石。以遺相人。其言以快恩讎矜名譽爲可薄。蓋不以昔人所夸者爲榮。而以爲戒。於此見公之視富貴爲何如。而其志豈易量哉。故能出入將相。勤勞王家。而夷險一節。至於臨大事決大議。垂紳正笏。不動聲色。而措天下於泰山之安。可謂社稷之臣矣。其豐功盛烈。所以銘彝鼎而被絃歌者。乃邦家之光。非閭里之榮也。余雖不獲登公之堂。幸嘗竊誦公之詩。樂公之志有成。而喜爲天下道也。於是乎書。

富貴なるを待て、汝の功に報いんと、妻恚怒して曰く、公等の如きは終に溝中に餓死せんのみと、買臣留ることを能はず、即ち去ることを聽すと云々」 (五) 車に四頭の馬をつなぎ (六) 旗を立て、前に導き、騎馬の從卒後につゞく (七) 肩をならべ、踵を次ぎ (八) 仰見し嘆息し羨む (九) おどろき汗ばみ、恥ぢ入りて伏し (一〇) 前日の無禮を車馬の間に謝す (一一) 一個の男子 (一二) 錦を衣て鄕に歸る (一三) 韓魏公、名は琦、初め魏國公に封ぜらる (一四) 代々美德あり、當時名譽の公卿たり (一五) 試驗に及第し、高官に登る (一六) 本來あるべきこと (一七) 高牙(軍前の牙旗)大纛(羽葆幢、即ち將軍旗)も特に榮華とするに足らず (一八) 桓圭(公爵の執る玉)袞裳(公爵の著る衣)も、富ち貴しとするに足らず (一九) 勳功を國家に施し (二〇) 之を文にし金石に鐫り、又、詩に作りて音樂にひろめ (二一) 武功節度使となり、來りて相州を治む (二二) 思ひのまゝに報恩復讐をなし、名譽にほこる (二三) 出でて名將となり、入りて良相となり (二四) 治亂共に心を變へず (二五) 紳(大帶)を垂れ笏(しやく)を持ち、聲色自若として (二六) 豐なる勳功、盛なる威光 (二七) 宗廟の器に刻み、聲樂に合せて

得志當時。而意氣之盛。昔人比之衣錦之榮者也。惟大丞相衛國公則不然。公相之人也。世有令德。爲時名卿。自公少時。已擢高科。登顯仕。海內之士。聞下風。而望餘光者。蓋亦有年矣。所謂將相而富貴。皆公所宜素有。非如窮阨之人。僥倖得志於一時。出於庸夫

在りて、嘗て武康(二一)の節を以て來りて相に治む。乃ち晝錦の堂を後圃に作る、既に又詩を石に刻して、以て相の人に遺る。其の言は恩讎(二二)を快くし、名譽に矜るを以て薄んずべしとなす。蓋し昔人の夸る所の者を以て榮となさずして、以て戒と爲す。此に於て公の富貴を視て何如となすかを見るに、其の志豈量り易からんや。故に能く將相(二三)に出入し、王家に勤勞して、夷險(二四)節を一にし、大事に臨み大議を決するに至つては、紳(二五)を垂れ笏を正うして、聲色を動さず、天下を泰山の安きに措く、社稷の臣と謂ふべし。其の豐功盛烈(二六)、彝鼎(二七)に銘して絃歌に被はる所以のものは、乃ち邦家の光にして、閭里の榮のみに非ざるなり。余公の堂に登るを獲ずと雖も、幸に嘗て竊に公の詩を誦し、公の志成るあるを樂んで、天下の爲に道ふことを喜ぶ。是に於てか書す。

(一) 困窮して郷里にある時　(二) 常人童子も　(三) 史記に「蘇秦、鬼谷先生に從つて遊び、憔悴して歸る、妻、機を下らず、嫂ために炊がず云々」と、季子とは蘇秦の字なりと或は云ふ末子の謂ひなりと　(四) 前漢書に「朱買臣家貧し、常に薪樵を艾り、賣つて以て自ら給す、妻之を羞ぢて去らんことを求む、買臣笑つて曰く、汝苦むこと日久し、我が

昔之所同也。蓋士方窮時、困阨閭里。庸人孺子。皆得易而侮之。若季子不禮於其嫂。買臣見棄於其妻。一旦高車駟馬。旗旄導前。而騎卒擁後。夾道之人。相與駢肩累迹。瞻望咨嗟。而所謂庸夫愚婦者奔走駭汗。羞愧俯伏。以自悔罪於車塵馬足之間。此一介之士。

若き、一旦高車駟馬(五)にして、旗旄前に導き、騎卒(六)後を擁すれば、道を夾むの人、相與に肩を駢べ迹を累ねて(七)、瞻望咨嗟(八)す。而して所謂庸夫愚婦の者、奔走駭汗、羞愧俯伏(九)し、以て自ら罪を車塵馬足(一〇)の間に悔ゆ。此れ一介(一一)の士、志を當時に得て意氣の盛なる。昔人之を錦を衣るの榮(一二)に比する者なり。惟大丞相衞國公(一三)は則ち然らず。公は相の人なり、世々令德あつて時の名卿(一四)たり。公の少時より、已に高科に擢でられ、顯仕(一五)に登る。海内の士、下風を聞いて餘光を望む者、蓋し亦年あり。所謂將相にして富貴なることは、皆公の素(一六)より有るべき所にして、窮阨の人の僥倖にして志を一時に得。庸夫愚婦の不意に出で、以て驚駭して之を夸耀するが如くなるに非ず。然れば則ち高牙(一七)大纛も公の榮とするに足らず。桓圭袞裳(一八)も公の貴とするに足らず。惟德生民に被らしめて、功社稷(一九)に施し、之を金石に勒し、之を聲詩(二〇)に播し、以て後世に耀して無窮に垂る。此れ公の志にして、士も此れを以て公に望む。豈止一時に夸り一鄕に榮なるのみならんや。公至和中に

山間之四時也。朝而往。暮而歸。四時之景不同。而樂亦無窮也。至於負者歌于塗。行者休于樹。前者呼。後者應。傴僂提攜。往來而不絕者。滁人遊也。臨溪而漁。溪深而魚肥。釀泉爲酒。泉香而酒洌。山肴野蔌。雜然而前陳者。太守宴也。宴酣之樂。非絲非竹。射者中。奕者勝。觥籌交錯。起坐而諠譁者。衆賓歡也。蒼顏白髮。頽乎其中間者。太守醉也。已而夕陽在山。人影散亂。太守歸而賓客從也。樹林陰翳。鳴聲上下。遊人去而禽鳥樂也。然而禽鳥知山林之樂。而不知人之樂。人知從太守遊而樂。而不知太守之樂其樂也。醉能同其樂。醒能述以文者太守也。太守謂誰。廬陵歐陽脩也。

に帶ぶ (七)林の霧消え (八)或は暗く或は明く (九)山野自生の花 (一〇)春夏秋冬 (一一)身を屈め物を負ふものの手を引きあひて助け行く (一二)山中の肴、野菜の料理 (一三)罰杯を飲ませて歡を重ね (一四)起ちつ坐りつかまびすしきは (一五)容を崩す (一六)樹木かげり、鳥の鳴聲上下に聞ゆ (一七)人々の樂むを (一八)字は永叔、六一居士と號す

仕宦而至將相。富貴而歸故鄉。此人情之所榮。而今

晝錦堂の記

歐陽永叔

仕宦して將相に至り、富貴にして故鄉に歸る。此れ人情の榮とする所にして今昔の同じき所なり。蓋し士窮時閭里に困阨するに方つて(二)庸人孺子も皆易じて之を侮ることを得。(三)季子の其の嫂に禮せられず。(四)買臣の其の妻に棄てらるゝが

守自謂也、太守與レ客來飮二于此一。飮少輒醉。而年又最高、故自號曰二醉翁一也。醉翁之意。不レ在レ酒。在二乎山水間一也。山水之樂。得二之心一而寓二之酒一也。若夫日出而林霏開。雲歸而巖穴暝。晦明變化者。山間之朝暮也、野芳發而幽香。佳木秀而繁陰。風霜高潔、水落而石出者

に歌ひ、行く者は樹に休ひ、前なる者は呼び、後なる者は應ふ。傴僂(一一)提携し。往來して絶えざるものに至りては滁人の遊べるなり。溪に臨んで漁すれば、溪深くして魚肥えたり。泉を釀して酒を爲れば、泉香うして酒洌し。山肴野蔌(一二)、雜然として前に陳なるは太守の宴なり。宴酣なるの樂は絲に非ず、竹に非ず、射る者は中り、奕する者は勝つ。觥籌(一三)交錯し。起坐(一四)して諠譁するものは衆賓の歡べるなり。蒼顏白髮、其の中間に頽乎(一五)たるものは太守の醉へるなり。已にして夕陽山に在り。人影散亂し、太守歸り賓客從ふ。樹林(一六)陰翳し、鳴聲上下するは、遊人去つて禽鳥樂むなり。然も禽鳥は山林の樂を知つて人の樂を知らず。人は太守の遊に從つて樂むを知つて太守の其の樂(一七)を樂むを知らず。醉うては能く其の樂を同うし、醒めては能く述ぶるに文を以てする者は太守なり。太守とは誰をか謂ふ、廬陵の(一八)歐陽脩なり。

㊀ 滁州　㊁ 謂に同じ、謂る　㊂ 山名　㊃ 鳥の翼を張りたる如く　㊄ 年齢最も長ず　㊅ 山水の樂を醉中

環滁皆山也。其西南諸峰。林壑尤美。望之蔚然而深秀者瑯琊也。山行六七里。漸聞水聲。潺潺而瀉出于兩峰之間者釀泉也。峰回路轉。有亭翼然。臨于泉上者醉翁亭也。作亭者誰。山之僧智僊也。名之者誰。大

醉翁亭の記

歐陽永叔

滁を環つて皆山なり。其の西南の諸峰林壑尤も美なり。之を望めば蔚然として深く秀でたるものは瑯琊なり。山行六七里、漸く水聲を聞く、潺潺として瀉いで兩峰の間より出づる者は釀泉なり。峰回り路轉じて、亭あり、翼然として泉上に臨めるものは、醉翁亭なり、亭を作れるものは誰ぞ。山の僧智僊なり。之に名くる者は誰ぞ、太守自ら謂ふなり。太守客と來つて此に飲む。飲むこと少けれども輒ち醉ふ。而して年又最も高し。故に自ら號して醉翁と曰ふ。醉翁の意、酒に在らずして山水の間に在り。山水の樂、之を心に得て之を酒に寓す。若し夫れ日出でて林霏開け、雲歸つて巖穴暝く、晦明變化するものは山間の朝暮なり。野芳發いて幽香あり。佳木秀でて繁陰あり。風霜高潔、水落ちて石出づるものは山間の四時なり。朝にして往き暮にして歸る。四時の景同じからずして、樂も亦窮なし。負へる者は塗

仁義之原。採二禮樂之緒。自下未二始有一形之前上。曁二四達無窮之外一事物之理。擧集二目前一。可者學レ之。未レ至二夫可一。何求二於人一。何待二於外一哉。志倦體疲則投レ竿取レ魚。執レ衽采レ藥。決レ渠灌レ花。操レ斧剖レ竹。濯レ熱盥レ水。臨レ高縱レ目。逍遙徜徉。惟意所レ適。明月時至。清風自來。行無レ所レ牽。止無レ所レ梶。耳目肺腸。卷爲二己有一。踽踽焉。洋洋焉。不レ知天壤之間。復有二何樂一。可二以代一レ此也。因合而命レ之曰二獨樂一。

學目前に集る。可なる者は之を學ぶ。(四)未だ夫の可に至らざるも、何をか人に求め、何をか外に待たんや。志倦み體疲るゝときは、則ち竿を投じて魚を取り、(五)衽を執つて藥を采り、(六)渠を決して花に灌ぎ、(七)斧を操つて竹を剖き、(八)熱を濯つて水に盥ひ、(九)高きに臨んで目を縱にす。逍遙徜徉、惟意の適する所のまゝなり。明月時に至り、清風自ら來る。(一〇)行くも牽かるゝ所なく、止るも梶めらるゝ所なし。(一一)耳目肺腸、(一二)卷きて己が有となす。踽踽たり。(一三)洋洋たり。(一四)知らず天壤の間、復た何の樂あつてか以て此れに代ふべけんや。因つて合せて(一五)之を命けて獨樂と曰ふ。

(一)溫公の自號 (二)根本 (三)萬物未生の前より四方無窮の外まで (四)不可なるものあるも、樂を他に求めず (五)釣し (六)裾をかゝげて藥草を採り (七)渠(みぞ)を決へて花にそゝぎ (八)斧を揮りて竹をすかし (九)暑き日は、流れにて體を洗ひ、手をすゝぎ (一〇)心のまゝに行き、强ひて物に引かれず (一一)心のまゝに止り、强ひて物にとゞめられず (一二)一身全體を己が有とし、他物に患はされず (一三)獨行の貌 (一四)廣大の貌 (一五)讀書の樂に、魚を釣り、藥を採り、花にそゝぎ、竹を植え、水を弄び樂を合せ

其欣二於所一レ遇。暫得中於己上快然自足。曾不レ知二老之將一レ至。及二其所レ之既倦一。情隨レ事遷。感慨係レ之矣。向之所レ欣俛仰之間。以爲二陳迹一。尤不レ能レ不二以レ之興一レ懷。況脩短隨レ化。終期二於盡一。古人云。死生亦大矣。豈不レ痛哉。每覽二昔人興レ感之由一。若レ合二一契一。未三嘗不二臨レ文嗟悼一。不レ能レ喩二之於懷一。固知一二死生一爲二虛誕一。齊二彭殤一爲二妄作一。後之視レ今。亦猶二今之視一レ昔。悲夫。故列二敍時人一。錄二其所一レ述。雖二世殊事異一。所二以興一レ懷。其致一也。後之覽者。亦將レ有レ感二於斯文一。

、春風長閑なり (九) 生類の多きを見る (一〇) 目を喜ばせ、思を馳せしむるための樣にて (一一) 心に抱く所に り、一室の内に對話し (一二) 好む所に執着して心を身外に忘る (一三) 就くとも去るも、靜なるも躁がしきも、人々皆異れども (一四) 情と物と相合ひ、その樂を自得する時は (一五) 心倦む時は、事によつて情動き、感慨從つて起る (一六) 先に喜びし事も、暫時の中に昔となり、感慨を起さざるを得ず(俛はふし、仰はあふぐ) (一七) 老少不定にして命數に從つて死す (一八) 死生ほど大なるはなし (一九) 一札に兩書をしたゝめ、切り分ちて互に證とするもの (二〇) 死生不二といひ、短長不異といふは、皆虛妄なる事なり、(彭は長壽、殤は夭死を云ふ) (二一) この宴に集れる人名を記し、述ぶる所の詩を錄す

迂叟平日讀レ書。上師二聖人一。下友二羣賢一。窺二

獨樂園の記

司馬溫公

(一)迂叟平日書を讀む。上聖人を師とし、下羣賢を友とす。仁義の原を窺ひ、(二)禮樂の緒を探る。(三)未だ始め形あらざるの前より、四達無窮の外に曁ぶまで、事物の理、

雖レ無二絲竹管絃之盛一、一觴一詠亦足三以暢二敍幽情一。是日也。天朗氣清惠風和暢。仰觀二宇宙之大一。俯察二品類之盛一、所三以遊レ目騁レ懷。足三以極二視聽之娛一。信可レ樂也。夫人之相與俯二仰一世一。或取二諸懷抱一。悟二言一室之內一。或因寄所レ託。放二浪形骸之外一。雖二趣舍萬殊。靜躁不レ同一。當下

同じからずと雖も、其の(一四)遇ふ所を欣びて、暫く己(一五)に得る所に當つては、快然として自ら足り、曾て老の將に至らんとするを知らず。其の之く所既(一六)に倦むに及んでは、情事に隨つて遷り、感慨之に係れり、向の欣ぶ所は、俛仰の間に、以に陳迹となれり。尤も之を以て懷を興さざる能はず。況や(一七)脩短化に隨ひ、終に盡くるに期するをや。古人云ふ、死生も亦(一八)大なりと。豈痛まざらんや。毎に昔人感を興すの由を覽るに、(一九)一契を合するが若し。未だ嘗て文に臨んで嗟悼せずんばあらず、之を懷に喩る能はず。固に知る。(二〇)死生を一にするは虛誕たり。彭殤に齊うするは妄作たり。後の今を視るも、亦猶ほ今の昔を視るがごとくならん。悲いかな、故に(二一)時人を列敍して、其の述ぶる所を錄す。世殊に事異なりと雖も、懷を興す所以は其の致一なり。後に覽る者、亦將に斯の文に感ずるあらんとす。

(一) 王羲之、字は逸少(右軍)當時會稽の太守たり　(二) 三月上巳の日、水上にて行ふみそぎ　(三) 高き山嶺　(四) 長き竹　(五) 晉書に「武帝三月曲水の義を問ふ、東晳對へて曰く、昔周公洛邑に城き、流水に因って酒を泛ぶ、逸詩に云、羽觴波に隨ふと」とあり、水を引き杯を流すを云ふ　(六) 倫次を正して坐す　(七) 一詠を作り、一觴を飲む　(八)

潭影日悠悠。物換星移度㆓幾秋㆒。閣中帝子今何在。檻外長江空自流。

永和九年。歲在㆓癸丑㆒。暮春之初。會㆓于會稽山陰之蘭亭㆒。脩㆓禊事㆒也。羣賢畢至。少長咸集。此地有㆓崇山峻嶺㆒。茂林脩竹。又有㆓清流激湍㆒。映㆓帶左右㆒。引以爲㆓流觴曲水㆒。列㆓坐其次㆒。

記類

蘭亭の記

王逸少

永和九年、歲癸丑に在り。暮春の初、會稽山陰の蘭亭(一)に會す。禊事(二)を脩するなり。羣賢畢く至り、少長咸集る。此の地崇山(三)峻嶺茂林脩竹(四)あり、又清流激湍あり、左右に映帶し、引いて以て流觴(五)の曲水となす。其の次に列坐(六)し、絲竹管絃の盛なしと雖も、一觴(七)一詠、亦以て幽情を暢敍するに足れり。是の日や天朗かに氣清み、惠風(八)和暢せり。仰いで宇宙の大なるを觀、俯して品類(九)の盛なるを察す。(一〇)目を遊ばしめ懷を騁する所以。以て視聽の娛を極むるに足れり。信に樂むべし。夫れ人の相與に一世を俯仰する。或は諸を懷抱(一一)に取つて、一室の內に悟言し、或は寄つて(一二)託する所に因り、形骸の外に放浪す。(一三)趣舍萬殊てして靜躁

接孟氏之芳鄰。他日趨庭。叨陪鯉對。今晨捧袂。喜託龍門。楊意不逢。撫凌雲而自惜。鍾期既遇。奏流水以何慙。嗚呼。勝地不常。盛筵難再。蘭亭已矣。梓澤丘墟。臨別贈言。幸承恩於偉餞。登高作賦。是所望於羣公。敢竭鄙誠。恭疏短引。一言均賦。四韻俱成。

南越漢と和する時、終軍年二十餘自ら長纓を受けていふ、必ず南越王をつなぎ、之を闕下に致さんと 一一 宗愨の器に「願くは長風に乘じ、萬里の巨浪を破らん」 一二 百歳仕官の路を棄て、父に萬里の外に從ひ、朝夕の晨昏を奉ず 一三 謝玄、叔父安に重んぜらる、玄曰く「たとへば芝蘭玉樹の如し、それをして庭階に生ぜしむるのみ」 一四 孟母三たび徙り、子のために鄰を擇ぶ 一五 常に父の庭に趨り、孔子に對せし伯魚の如くならん 一六 この宴に列し、龍門の會に加はりしを喜ぶ、漢書に「李膺聲名を以て自ら高うす、士、容接を被るものあれば、名けて登龍門となす」 一七 己をすゝむる人に逢はず、相如が凌雲の賦を誦し自ら不遇を惜む（楊得意、司馬相如をすゝめ相知遂に顯る） 一八 もし知己に遇はゞ心胸を盡して恥ぢざるべし、列子に「伯牙琴を鼓し、志流水にあれば、子期いふ洋々乎として江河のごとしと」 一九 王羲之が蘭亭もすでに古跡となり、石崇が梓澤（金谷園）もすでに廢して丘墟となれり 二〇 短き序引を述ぶ 二一 八句四韻の詩成る

滕王高閣臨江渚。佩玉鳴鸞罷歌舞。畫棟朝飛南浦雲。朱簾暮捲西山雨。閑雲

滕王の高閣江渚に臨めり、佩玉鳴鑾歌舞を罷む。畫棟(一)朝に飛ぶ南浦の雲。朱(二)簾暮に捲く西山の雨。閑雲潭影日に悠悠。物換り星移つて幾秋をか度る。閣中の帝子今何にか在る。檻外の長江空しく自ら流る。

一 彩色したる棟 二 朱の簾

墜二青雲之志一。酌二貪泉一而覺レ爽。處二涸轍一以猶懽。北海雖レ賖、扶桑可レ接。東隅已逝、桑楡非レ晩。孟嘗高潔、空懷二報國之心一。阮籍猖狂、豈效二窮途之哭一。勃三尺微命、一介書生。無レ路レ請レ纓。等二終軍之弱冠一。有レ懷レ投レ筆。慕二宗愨之長風一。舍二簪笏於百齡一。奉二晨昏於萬里一。非二謝家之寶樹一。

風を慕ふ。簪笏を百齡に舍て、(一二)晨昏を萬里に奉ず。(一三)謝家の寶樹に非ずんば、孟氏(一四)の芳鄰に接はらん。(一五)他日庭に趨つて叨に鯉對に陪せん。今晨袂を捧げて龍門に(一六)託するを喜ぶ。(一七)楊意に逢はず。凌雲を撫して自ら惜み。鍾期既に遇へり、(一八)流水を奏して以て何ぞ慙ぢん。嗚呼勝地常ならず。盛筵再びし難し、(一九)蘭亭は已みぬ、梓澤は丘墟なり。別に臨んで言を贈る。幸に恩を偉餞に承く。高きに登つて賦を作る、是れ羣公に望む所なり。敢て鄙誠を竭して、恭しく短引(二〇)を疏す。一言均して賦して、(二一)四韻倶に成る。

(一) 王宮を思へども見えず、何の年にか再び奉仕することを得ん(閽は門番なり、宣室は漢の未央宮の前の正室、賈誼の召されし所なり) (二) 馮唐の如き人物も、三代不遇にして空しく老ゆ (三) 梁鴻八分書を善くし、魏の武帝之を重んぜしも、後北海にしりぞけらる (四) 後に白髪になりての心如何なるべきかを知らず (五) 貪泉を飲めば貪心生ずといふも、我心淸ければ、却つて爽さを覺え (六) 余は涸轍の鮒魚なれども、なほ懽びを感ず、(王勃、父と共に交趾に貶せらる、故に云ふ) (七) 遐地にも至るを得べく、少年にして罪せらるゝも、後日再び志を得べし、莊子に「北溟に魚あり、その名を鯤となす、化して鵬となり、扶搖を搏つて上る者九萬里」又、漢馮異に「之を東隅に失ふも、之を桑楡に收むと謂ふべし」 (八) 孟嘗君が高潔なる (九) 窮途に泣ける阮籍が狂に倣ふを要せず (一〇)

浦。遙吟俯暢。逸興遄飛。爽籟發而清風生。纖歌凝而白雲過。睢園綠竹。氣凌彭澤之樽。鄴水朱華。光照臨川之筆。四美具。二難幷。窮睇眄於中天。極娛遊於暇日。天高地迥。覺宇宙之無窮。興盡悲來。識盈虛之有數。望長安於日下。指吳會於雲間。地勢極而南溟深。天柱高而北辰遠。關山難越。誰悲失路之人。萍水相逢。盡是他鄉之客。

懷帝閽而不見。奉宣室以何年。嗚呼時運不齊。命途多舛。馮唐易老。李廣難封。屈賈誼於長沙。非無聖主。竄梁鴻於海曲。豈乏明時。所賴君子安貧。達人知命。老當益壯。寧知白首之心。窮且益堅。不

帝閽(一)を懷へども見えず、宣室に奉ぜんことの何の年を以てかせん。嗚呼時運齊しからず。命途舛ふこと多し、馮唐(二)は老ひ易く。李廣は封ぜられ難し。賈誼を長沙に屈す。聖主なきに非ず。梁鴻(三)を海曲に竄す、豈明時に乏しからんや。頼む所は君子貧に安んじ。達人命を知れり。老いては當に益〻壯なるべし。寧ろ白首の心を知らんや。窮しては且に益〻堅からんとす。青雲の志を墜さず。貪泉(五)を酌んで爽を覺え、涸轍(六)に處して以て猶ほ懽ぶ。北海(七)賖なりと雖も、扶桑接すべし。東隅已に逝けども桑楡晩きに非ず。孟嘗(八)の高潔なる、空しく報國の心を懷けり。阮籍(九)が猖狂たる、豈窮途の哭を效はんや。勃は三尺の微命、一介の書生なり。終軍(一〇)の弱冠に等し。纓を請ふに路なく、筆を投ぜんことを懷ふあり。宗愨(一一)の長

崇阿。臨二帝子之長洲一。得二仙人之舊館一。層巒聳レ翠。上出二重霄一。飛閣流レ丹。下臨二無地一。鶴汀鳧渚。窮二島嶼之縈迴一。桂殿蘭宮。列二岡巒之體勢一。披二繡闥一俯二雕甍一。山原曠其盈レ視。川澤盱其駭レ矚。閭閻撲レ地。鐘鳴鼎食之家。舸艦迷レ津。青雀黄龍之軸。虹銷雨霽。彩徹二雲衢一。落霞與二孤鶩一齊飛。秋水共二長天一一色。漁舟唱レ晩。響窮二彭蠡之濱一。雁陣驚レ寒。聲斷二衡陽之

府 〔三〕星の分野より觀れば、南方翼軫の宿にあたり、衡山廬山に接す 〔四〕三江(荊江松江浙江)五湖(太湖鄱陽湖青草湖丹陽湖洞庭湖)襟の如く帶の如くに繞る 〔五〕南蠻荊楚の地に迫り、甌越の地に接す 〔六〕物に光華ありて、天の瑞寶を出し 〔七〕龍泉の劍の光、斗牛二星の居を射る 〔八〕洪州の人徐穉字は孺子、才德あり、陳蕃豫章の太守たる時、榻を下して之を待つ 〔九〕すぐれたる人物、星宿の走る如くに活躍す 〔一〇〕亭臺城隍(ほり)は南夷中夏の間に據り、相會せし賓客も主人も皆東南州の佳士なり 〔一一〕洪州の都督閻公伯嶼は威儀正しき人にして棨戟(前驅の持つ器械)を列ねて來臨し 〔一二〕澄州の新太守宇文鈞は威儀をつくろひ、赴任の途次、車をとゞめて參會せり 〔一三〕蛟躍り、鳳舞ふが如きは孟浩然が詩文なり 〔一四〕紫電の如き才、淸霜の如き戟を列ねたるは將軍王濬の武裝なり 〔一五〕我が父交趾の宰となり、赴任の途次、こゝを過ぎて宴に會し 〔一六〕余の如き少年も、結構なる餞別に逢へり 〔一七〕淫雨のために溜りし水 〔一八〕驂馬勇ましく、路上に威儀を儼にし 〔一九〕高き岡を尋ぬ 〔二〇〕閣は滕王の長洲に臨みて仙人の遺跡に當ッ 〔二一〕空に聳え 〔二二〕高閣の影、水にうつりて丹を流す如く、下千尋に臨んで地を見ず 〔二三〕山の地なりに隨ひ列り立つ 〔二四〕彩りたる門扉を開き、彫りたる甍の上に俯して望む 〔二五〕里門の中民家多くして餘地なく 〔二六〕靑雀黄龍を畫く軸あり 〔二七〕光彩雲間に徹し 〔二八〕夕燒の雲、孤鶩(一つのあひる)と共に飛びひらめく 〔二九〕ひゞき渡り 〔三〇〕苦しき聲起りて淸風生じ 〔三一〕美人やさしき歌を唱ふれば、天上の雲もために留る 〔三二〕楚の睢園の綠竹、その氣淸く、宴の盛なること、彭澤の令陶淵明の酒興を凌ぎ 〔三三〕鄴水の蓮花の光彩王羲之の筆墨と照映す 〔三四〕良辰、佳景、賞心、樂事の四者備り、得難き賢主と佳賓と會す 〔三五〕目を窮めて中天を望み、歡樂を休暇の日に極む 〔三六〕盛衰に定數あり相剋轉することを知る

望。棨戟遙臨。
宇文新州之
懿範。襜帷暫
駐。十旬休暇。
勝友如雲。千
里逢迎。高朋
滿座。騰蛟起
鳳。孟學士之
詞宗。紫電清
霜。王將軍之
武庫。家君作
宰。路出名區。
童子何知。躬
逢勝餞。時維
九月。序屬三
秋。潦水盡而
寒潭清。煙光
凝而暮山紫。
儼驂騑於上
路。訪風景於

桂殿蘭宮を廻つて、岡巒（二三）の體勢を列す。繡闥を披き、雕甍（二四）に俯す。山原曠として其れ視に盈ち。川澤盱として其れ矚を駭かす。閭閻（二五）地を撲つ。鐘を鳴らして鼎の食ふの家あり。舸艦津に迷ふ。青雀黃龍（二六）の軸あり。虹銷え雨霽れて、彩雲衢に徹し（二七）。落霞と孤鶩（二八）と齊しく飛び、秋水長天と一色なり。漁舟晩に唱へて、響（二九）彭蠡の濱を窮め、雁陣寒に驚いて、聲衡陽の浦に斷ゆ。遙吟俯して暢べ、逸興遄に飛ぶ。爽籟（三〇）發して清風生じ、纖歌（三一）凝つて白雲遏る。睢園の綠竹、氣（三二）彭澤の樽を凌ぎ、鄴水（三〇）の朱華、光（三三）臨川の筆を照す。四美（三四）具り。二難拜す。睇眄（三五）を中天に窮め、娛遊を暇日に極め、天高く地迥にして、宇宙の窮なきを覺え、興盡き悲來つて、盈虛の數あることを識る。長安を日下に望み、吳會を雲間に指す。地勢極つて南溟深く、天柱高うして北辰遠し。關山越え難し。誰か失路の人を悲まん。萍水相逢ふ。盡く是れ他鄕の客なり。

㈠ 唐高祖の子元嬰、洪州刺史となり、此の閣を置く、後に滕王に封ぜらる、故に名づく　㈡ 昔の豫章郡、今の洪都

南昌故郡。洪都新府。星分二翼軫一。地接二衡廬一。襟二三江一而帶二五湖一。控二蠻荊一而引二甌越一。物華天寶。龍光射二斗牛之墟一。人傑地靈。徐孺下二陳蕃之榻一。雄州霧列。俊彩星馳。臺隍枕二夷夏之交一。賓主盡二東南之美一。都督閻公之雅

滕王閣の序（一）

王勃

南昌の故郡、洪都の新府、星翼軫を分ち、地衡廬に接す。三江を襟として五湖を帶とし。蠻荊を控へて甌越を引く。物華天寶、龍光牛斗の墟を射。人傑に地靈に、徐孺陳蕃の榻を下す。雄州霧のごとくに列り。俊彩星のごとくに馳す。臺隍夷夏の交に枕み、賓主東南の美を盡す。都督閻公の雅望、棨戟遙に臨み。宇文新州の懿範、襜帷暫く駐る、十旬の休暇、勝友雲の如く、千里の逢迎、高朋座に滿つ、騰蛟起鳳は、孟學士の詞宗なり。紫電淸霜は王將軍の武庫なり。家君を宰と作り。路名區に出づ、童子何をか知らん、躬勝餞に逢ふ、時に維れ九月、序三秋に屬す。潦水盡きて寒潭淸み、煙光凝つて暮山紫なり。驂騑を上路に儼にし、風景を崇阿に訪ふ、帝子の長洲に臨み、仙人の舊館を得たり。層巒翠を聳かして上重霄に出で、飛閣丹を流して、下無地に臨めり。鶴汀鳧渚、島嶼の縈を窮め、

怠之。又從而盜之。向使傭一夫於家。受若直。怠若事。又盜若貨器。則必甚怒而黜罰之矣。以今天下多類此。而民莫敢肆其怒與黜罰。何哉。勢不同也。勢不同而理同。如吾民何。有達于理者。得不恐而畏乎。存義假令零陵二年矣。蚤作而夜思。勤力而勞心。訟者平。賦者均。老弱無懐詐暴憎。其爲不虛取直也的矣。其知恐而畏也審矣。吾賤且辱。不得與考績幽明之說。於其往也。故賞以酒肉。重之以辭。

きて夜に思ひ、力を勤めて心を勞す。訟ふる者は平にし、賦する者は均うし、老弱詐を懐いて暴憎することと無し。其れ虛しく直を取らざるをすること的かなり、其れ恐れて畏るゝを知ること審なり。吾賤うして且つ辱められ、考績(一〇)幽明の說に與るを得ず。其の往くに於て、故に賞するに酒肉を以てし、之に重(一一)ぬるに辭を以てす。

(一) 永州零陵の令となり任期滿ちて將に行かんとす (二) 官吏は民に使はるゝ職にありて民を使ふ[illegible]官にあらず (三) 收入の十分の一を年貢とし官吏を傭ひて政事を司らしむ (四) 俸給 (五) 不當に財貨を貪り盜賊にひとしき行をなす (六) 退け罰するならん (七) 民怒りて官吏を黜せざるは何故ぞ (八) 上下尊卑の勢異れるなり (九) 能く理に達し恐れ畏れて事を行へるを (一〇) 朝廷にて善を賞し惡を罰する議 (一一) 贈遺の上にこの辭を贈りて餞別とす

河東薛存義將レ行。柳子載ニ肉于俎一。崇ニ酒于觴一。追而送ニ之江之滸一。飲ニ食之一。且告曰。凡吏ニ于土一者。若知ニ其職一乎。蓋民之役。非ニ以役レ民而已一也。凡民之食ニ於土一者。出ニ其十一一傭ニ乎吏一。使レ司ニ平於我一也。今受ニ其直一。怠ニ其事一者。天下皆然。豈惟

薛存義を送る序

柳子厚

河東の薛存義將(一)に行かんとす、柳子肉を俎に載せ、酒を觴に崇て、追うて之を江の滸に送り。之を飲食せしめ、且つ告げて曰く、凡そ土の吏たる者、若其の職を知れりや。蓋し民の役にして以て民を役するのみにあらざるなり。凡そ民の土に食む者、(三)其の十が一を出し、吏を傭(二)うて平を我に司らしむるなり。今其の直(四)を受けて其の事に怠る者、天下皆然り。豈惟之を怠るのみならんや、又從つて之を盜めり。向使ば一夫を家に傭はんに、若の直を受けて若の事を怠り。(五)又若の貨器を盜まば、則ち必ず甚だ怒つて之を(六)黜罰せん。以ふに今の天下多く此に類す。而(七)も民敢て其の怒と黜罰とを肆にすること莫きは何ぞや、(八)勢同じからざればなり。勢同じからざれども而も理は同じ、吾が民を如何せん、理に達する有る者は、恐れて畏れざるを得んや。存義假に零陵に令たる二年、蚤に作

大丈夫不レ遇ニ於時一者之所レ爲也。我則行レ之。伺ニ候於公卿之門一。奔ニ走於形勢之途一。足將レ進而趦趄。口將レ言而囁嚅。處ニ汚穢一而不レ羞。觸ニ刑辟一而誅戮。僥ニ倖於萬一一。老死而後止者。其於レ爲レ人。賢不肖何如也。昌黎韓愈聞ニ其言一而壯レ之。與ニ之酒一。而爲レ之歌曰。

盤之中。維子之宮。盤之土。維子之稼。盤之泉。可レ濯可レ沿。盤之阻。誰爭ニ子所一。窈而深。廓其有レ容。繚而曲。如ニ往而復一。嗟盤之樂兮。樂且無レ央。虎豹遠レ跡兮。蛟龍遁藏。鬼神守護兮。呵ニ禁不祥一。飲且食兮。壽而康。無レ不レ足兮。奚所レ望。膏ニ吾車一兮。秣ニ吾馬一。從ニ子于盤一兮。終ニ吾生一以徜徉。

盤の中、維れ子の宮なり。(一)盤の土、維れ子が稼なり。(二)盤の泉、濯ふべく沿るべし。盤の阻、誰か子が所を爭はん。(三)窈として深く。廓として其れ容るゝあり。繚として曲り、往いて復るが如し。(四)嗟盤の樂、樂んで且つ央なし。虎豹跡を遠け、蛟龍遁れ藏れ。(五)鬼神守護して不祥を呵禁す。飲んで且つ食ひ、壽うして康し、足らざるなし。奚ぞ望む所あらん。吾が車に膏し、吾が馬に秣ひ。子に盤に從ひて、(六)吾が生を終へて以て徜徉せん。

(一) 住宅　(二) 田畑　(三) 盤谷險しく、來りて居を爭ふものなし　(四) 奧深く狹く見ゆるも、中開けて廣く、人を容れて安居せしむ　(五) 天地の神もこの人を守り、不祥のものは近づくを得ず　(六) 生涯徘徊して遊ばん

曲眉豐頰、清聲而便體。秀外而惠中。飄輕裾。翳長袖。粉白黛綠者。列屋而閒居。妬寵而負恃。爭妍而取憐。大丈夫之遇知於天子。用力於當世者之所爲也。吾非惡此而逃之。是有命焉。不可幸而致也。窮居而野處。升高而遠望。坐茂樹以終日。濯清泉以自潔。採於山美可茹。釣於水鮮可食。起居無時。惟適所安。與其譽於前。孰若無毀於其後。與其樂於身。孰若無憂於其心。車服不維。刀鋸不加。理亂不知。黜陟不聞。

に奔走し。足將に進まんとして趦趄、（二〇）口將に言はんとして囁嚅す。汚穢に處して羞ぢず、刑辟に觸れて誅戮せらる。萬一を僥倖して老死して後に止む者、其の人と爲りに於ける。（二一）賢不肖何如ぞや。昌黎の韓愈其の言を聞きて之を壯なりとし。之に酒を與へて之が爲に歌うて曰く、

（一）太行山の南 （二）少し （三）奥深き谷に人家あり、地勢嶮しく、隱者の徘徊する處なり （四）その有樣を知れり （五）人に利益恩澤を施し （六）都の外に出て武人となりては （七）軍兵前に立ちて人を拂ひ、後に從ふもの、路に塞り塞り、刀槍旗幟等を採りて行く （八）古今の事を言ひ、大將の盛德を譽む （九）隨從の美女、眉淸く體輕く、外貌秀でゝ內心敏く （一〇）互に美貌を恃み、寵遇を得んことを競ふ （一一）人世の榮華は、みな天命にして願りて致し得べきにあらず （一二）困窮して山野に居り （一三）木の實、蔬等の美味なるもの （一四）時を定めず （一五）生前に譽あらんより死後に譏なきに如かず （一六）身に榮華の樂あらんより、心に不安憂悶なきに如かず （一七）官吏となりて束縛せられず、又、刑罰を受くる恐なく （一八）天下の治亂を知らず、官位の昇り降りに關係せず （一九）權威あるものの家に奔走し （二〇）足を進めんとして又ためらひ、口を開かんとして分明に言はず（權勢に恐れ氣象する樣） （二一）是等の人と隱者とを較ぶれば、いづれが賢く、いづれが愚かなるか

盤旋。友人李愿居之。愿之言曰。人之稱大丈夫者我知之矣。利澤施于人。名聲昭于時。坐于廟堂。進退百官。而佐天子出令。其在外則樹旗旄。羅弓矢。武夫前呵。從者塞途。供給之人各執其物。夾道而疾馳。喜有賞。怒有刑。才俊滿前。道古今而譽盛德。入耳而不煩。

各々其の物を執り、道を夾んで疾馳す。喜ぶときには賞あり。怒るときには刑あり。才俊前に滿ち。（八）古今を道つて盛徳を譽め。耳に入つて煩しからず。（九）曲眉豐頰、清聲にして便體、外に秀で、中に恵あり。輕裾を飄し長袖を翳し、粉白く黛綠なる者、屋を列ねて閒居す、（一〇）寵を妬んで負恃し、妍を爭つて憐を取る。大丈夫の天子に遇知せられて、力を當世に用ふる者の爲なる所なり。吾此れを惡んで之を逃るゝには非ず。（一一）是れ命あり、幸うて致すべからざるなり。（一二）窮居して野處し、高きに升りて遠く望み、茂樹に坐して以て日を終へ、清泉に濯つて以て自ら潔くす。（一三）山に採つて美なるは茹ふべく、水に釣つて鮮なるは食ふべし。（一四）起居時なくして惟々安んずる所に適す。其の前に（一五）譽あらんよりは、其の後に毀なからんに孰若ぞ。其の身に（一六）樂あらんよりは、其の心に憂なからんに孰若ぞ。（一七）車服維れず、刀鋸加へられず。（一八）理亂も知らず、黜陟も聞かず。大丈夫時に遇はざる者の爲す所なり。我は則ち之を行はん。公卿の門に伺候し、（一九）形勢の途

者一也。唐之有二天下一。陳子昂。蘇源明。元結。李白。杜甫。李觀。皆以二其所一レ能鳴。其存而在レ下者。孟郊東野始以二其詩一鳴。其高出二魏晉一。不レ懈而及二於古一。其他浸二淫乎漢氏一矣。從レ吾遊者。李翺張籍其尤也。三子者之鳴。信善鳴矣。抑不レ知。天將和二其聲一。而使レ鳴二國家之盛一邪。抑將窮二餓其身一。思二愁其心腸一。而使三自鳴二其不幸一邪。三子者之命。則懸二乎天一矣。其在レ上也。奚以喜。其在レ下也奚以悲。東野之役二於江南一也。有下若レ不二釋然一者上。故吾道下其命二於天一者上以解レ之。

李愿が盤谷に歸るを送る序

韓退之

太行之陽有二盤谷一。盤谷之間。泉甘而土肥。草木叢茂。居民鮮少。或曰。謂三其環二兩山之間一。故曰レ盤。或曰。是谷也宅幽而勢阻。隱者之所二

(一)太行の陽に盤谷あり。盤谷の間、泉甘くして土肥えたり。草木叢茂し、居民(二)鮮少なり、或は曰く。其の兩山の間を環るを謂つて、故に盤と曰ふと。或は曰く、是の谷や宅幽にして(三)勢阻なり。隱者の盤旋する所なりと。友人李愿之に居る。愿の言に曰く、人の大丈夫と稱せらるゝ(四)者は我之を知れり。(五)利澤人に施し。名聲時に昭かに、廟堂に坐して百官を進退し、天子を佐けて令を出す。其の外に(六)在りては則ち旗旄を樹て弓矢を羅ね。(七)武夫前に呵し、從者塗に塞り。供給の人、

蘇秦之屬。皆以其術鳴。秦之興。李斯鳴之。漢之時。司馬遷相如揚雄最其善鳴者也。其下魏晉氏。鳴者不及於古。然亦未嘗絕也。就其善鳴者。其聲清以浮。其節數以急。其辭淫以哀。其志弛以肆。其爲言也、亂雜而無章。將天醜其德莫之顧邪。何爲乎不鳴其善鳴

其の善く鳴るものを鳴らしめざるや。唐の天下を有つや、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀皆其の能くする所を以て鳴る。其の存して下に在る者は、孟郊東野始めて、其の詩を以て鳴る。其の高き晉魏に出でたり(九)。懈らずして古に及ばんとす。其の他は漢氏に浸淫す(一〇)。吾に從つて遊ぶ者は、李翺・張籍其の尤なり。三子者の鳴るや信に善く鳴る。抑々知らず。天將に其の聲を和けて國家の盛を鳴らしむるか。抑々將た其の身を窮餓し其の心腸を思愁せしめて(一一)自ら其の不幸を鳴らしむるか。三子者の命は則ち天に懸れり(一二)。其の上に在りとも奚ぞ以て喜ばん。其の下に在りとも奚ぞ以て悲まん。東野の江南に役せらるゝや、懌然たらざるが若きものあり(一三)。故に吾其の天に命ぜらるゝものを道うて以て之を解く。

(一) 廣大にして治らず、確なき言(莊子の哲學を云ふ) (二) 功利、邪說、清淨寂滅、刑名、兵法、縱橫 (三) 清くして浮華にして眞實ならず (四) その曲節忙しく急に (五) みだりがはしくて哀み、情の正和を傷り (六) 恣にして放埓なり (七) 文章の風韻なし (八) 晉魏六朝の君は、その德汚れたる故に、天憎みて顧みざりしか (九) 其詩は魏晉のものに勝れり (一〇) 魏の時に高からざるも亦已に前漢の名家に追れり(浸淫は水に浸されうるほふなり) (一一) 其聲を和正ならしめ、國家の盛運を鳴らさしむるか (一二) 三子の運命は窮達ともに天命によれり (一三) 喜ばざる樣子

時之相推奪。其必有不得其平者乎。其於人也亦然。人聲之精者爲言。文辭之於言。又其精者也。尤擇其善鳴者。而假之鳴。其在於唐虞。皐陶禹其善鳴者也。而假之以鳴。夔弗能以文辭鳴。又自假於韶以鳴。夏之時。五子以其歌鳴。伊尹鳴殷。周公鳴周。凡載於詩書六藝。皆鳴之善者也。周之衰。孔子之徒鳴之。其聲大而遠。傳曰。天將以夫子爲木鐸。其弗信乎。

其末也。莊周以其荒唐之辭鳴於楚。楚大國也。其亡也以屈原鳴。臧孫辰。孟軻荀卿以道鳴者也。楊朱。墨翟。管夷吾。晏嬰。老聃。申不害。韓非。愼到。田駢。鄒衍。尸佼。孫武。張儀。

其の末に莊周其の荒唐(一)の辭を以て楚に鳴る。楚は大國なり。其の亡ぶるや屈原を以て鳴る。臧孫辰・孟軻・荀卿は道を以て鳴るものなり。楊朱・墨翟・管夷吾・晏嬰・老聃・申不害・韓非・愼到・田駢・鄒衍・尸佼・孫武・張儀・蘇秦屬(二)は皆其の術を以て鳴る。秦の興るや、李斯之に鳴る。漢の時司馬遷・相如・揚雄は最も其の善く鳴るものなり。其れ魏晉氏に下つては、鳴るもの古に及ばず。然れども亦未だ嘗て絕えざるなり。就ひ其の善く鳴る者も其の聲淸(三)にして以て浮なり。其の節(四)數にして以て急なり。其の辭(五)淫にして以て哀み、其の志(六)弛にして以て肆なり。其の言たるや亂雜(七)にして章なし、將た天其の德を(八)醜んで之を顧る莫きか。何爲れぞ

後言。其謌也有思。其哭也有懷。凡出乎口而爲聲者。其皆有弗平者乎。樂也者鬱於中而泄於外者也。擇其善鳴者而假之鳴。金石絲竹匏土革木八者。物之善鳴者也。維天之於時也亦然。擇其善鳴者而假之鳴。是故以鳥鳴春。以雷鳴夏。以蟲鳴秋。以風鳴冬。四

て鳴る。是の故に鳥を以ては春に鳴り、雷を以ては夏に鳴り、蟲を以ては秋に鳴り、風を以ては冬に鳴る。四時の相推し奪ふこと(四)、其れ必ず其の平を得ざるある者か。其の人に於けるも亦然り。(五)人聲の精しき者を言となす。文辭の言に於ける、其れ又其の精しきものなり。尤も其の善く鳴る者を擇んで之を假りて鳴る。其れ唐虞に在りては、(六)皐陶禹其の善く鳴る者なり。而して之を假りて以て鳴る。(七)夔は文辭を以て鳴る能はず。又自ら韶を假りて以て鳴る。夏の時に(八)五子其の歌を以て鳴る。伊尹は殷に鳴り、周公は周に鳴る。凡そ詩書六藝に載せたるは、皆鳴るの善きものなり。周の衰ふるや孔子の徒之に鳴る。其の聲大にして遠し。傳に曰く、(九)天將に夫子を以て木鐸を爲さんとすと。其れ信ならざらんや。

(一) 不平あれば鳴る (二) 横に走るは、下流を塞ぐものあればなり (三) 情、中に充ち、聲、外に發る (四) 相奪ふ如くに、春夏秋冬の推し遷るは (五) 文章詩賦は、言語の精粋なるものなり (六) 堯舜の時、皐陶、禹、みな言辭を以て鳴れり (七) 又、夔は韶樂を假りて鳴れり (八) 太康の弟 (九) 天は孔子を大道の唱道者とせんとせりとの意（木鐸は金口木舌の鈴、振り鳴らして衆を警むるもの）

鏘然而韶鈞鳴。日光玉潔。周情孔思。千態萬貌。卒澤二道德仁義一。炳如也。洞二視萬古一。愍二惻當世一。遂大拯二頽風一。教二人自爲一。時人始而驚。中而笑且排。先生益堅。終而翕然隨以定。嗚呼。先生於レ文。摧陷廓清之功。比二於武事一。可レ謂二雄偉不レ常者一矣。

孟東野を送る序

韓退之

大凡物不レ得二其平一則鳴。草木之無レ聲。風撓レ之鳴。水之無レ聲。風蕩レ之鳴。其躍也或激レ之。其趨也或梗レ之。其沸也或炙レ之。金石之無レ聲。或撃レ之鳴。人之於レ言也亦然。有レ不レ得レ已而

大凡物其の平(一)を得ざれば則ち鳴る。草木の聲なきも風之を撓せば鳴り。水の聲なきも風之を蕩せば鳴る。其の躍るや之を激するあればなり。其の趨るや之(二)を梗ぐあればなり。其の沸くや之を炙るあればなり。金石の聲なきも之を撃つあれば鳴る。人の言に於けるも亦然り。已むことを得ざるありて後に言ふ。其の謌ふや思ひあればなり。其の哭するや懐ふあればなり。凡そ口より出でて聲を爲すものは其れ皆平ならざるある者か、樂なる者は中(三)に鬱つて外に泄るゝものなり。其の善く鳴るものを擇んで之を假りて鳴る。金石絲竹匏土革木の八者は物の善く鳴る者なり。維れ天の時に於けるも亦然り。其の善く鳴るものを擇んで之を假り

謂易以下為古文。剽掠潛竊為工耳。文與道蓁塞。固然莫知也。先生生大曆戊申。幼孤。隨兄播遷韶嶺。兄卒鞠於嫂氏。辛勤來歸。自知讀書為文日記數千言。比壯。經書通念曉析。酷排釋氏諸史百子。搜抉無隱。汗瀾卓踔。奫泫澄深。詭然而蛟龍翔。蔚然而虎鳳躍。

仁義に澤して炳如たり。萬古を洞視して當世を愍測す。(二四)遂に大に頽風を拯ひて人をして自爲せしむ。(二五)時人始は驚き、中は笑うて且つ排す。先生益〻堅し。終には翕然として隨つて以て定まる。(二六)嗚呼先生の文に於けるや、摧陷廓清の功は、(二七)武事に比すれば、雄偉にして常ならざる者と謂ふべし。(二八)

(一) 有形の文章は、無形の道德を貫く道具なり (二) 深く文章に達せずして、聖道に至るものはあらざるなり (三) 易の文は爻と彖とによりて記され（爻辭は周公の作、彖辭は孔子の作なり） (四) 春秋は魯の歷史を記し (五) 詩經は詠歌あつめ (六) 書經禮記は誠を著し僞を去り (七) 秦漢以前の文章は、その氣こもりて中に充ちたり (八) 六朝の弊（晉宋なるによりて云） (九) なえ衰ふ (一〇) 晉朝（司馬姓）より以來、文の規模全く隱れたり (一一) 前代のものを古文といひ、その字句を綴り合せて工妙なりとせしのみ (一二) 文の道とが隔り塞り、誰も惡しと知るものなし (一三) 韓退之 (一四) 大曆三年に當る (一五) あによめ (一六) 一心に經書を讀みて奧義を曉り (一七) 強く佛法を排斥し (一八) 搜り求めて讀み、一節も殘すところなし (一九) その文、水の清く波だち、面白く跳び躍り、深くたゝへ流るゝに似 (二〇) 又、奇怪にして蛟龍の翔ける如く、盛にして虎鳳の躍る如く (二一) 又九韶鈞天の樂の鳴りひゞく如く (二二) 美しく潤ふこと玉の澤さが如く、明なること日の光り輝くが如し (二三) 周公の訓、孔子の思など、種々樣々の形に表はれ、仁義の道を益すること明なり (二四) 萬古の事を觀透し、當世の惡俗を憫み (二五) 文章の頽れたる風を救ひ、文を作る人をして、自ら道に合へる樣になさしめたり (二六) 相率ゐて先王の說に從ひ、文の論皆一定せり、(二七) 從來の惡弊を抑へ改めし功 (二八) 稀にあるもの

文者貫ㇾ道之器也。不ㇾ深ニ於斯道。有ㇾ至焉者不也。易繇ニ爻象。春秋書ㇾ事。詩詠歌。書禮剔ニ其僞。皆深矣乎。秦漢已前、其氣渾然。迨ニ乎司馬遷相如揚雄劉向之徒。尤所謂傑然者也。至ニ後漢曹魏、氣象萎苶。司馬氏以來。規模蕩盡。悉

昌黎が文を集むる序　李漢

文は道を貫くの器なり。斯の道に深からずして至ることありといふ者はあらじ。(一)易の爻象に繇り。(二)春秋の事を書し、(三)詩の詠歌し、(四)書禮の其の僞を剔る。(五)皆深いかな。(六)秦漢より已前は其の氣渾然たり。(七)司馬遷相如揚雄劉向の徒に迨んでは、尤も所謂傑然たるものなり。後漢曹魏に至つては、(八)氣象萎苶し、(九)司馬氏より以來、(一〇)規模蕩盡ず。悉く易より以下を謂つて古文となし。(一一)剽掠潛竊して工とするのみ。(一二)文と道と秦塞すること固より然り、知るもの莫きなり。(一三)先生は大曆戊申に生れ、(一四)幼にして孤なり。兄に隨つて韶嶺に播遷す。兄卒して嫂氏に鞠はれ、(一五)辛勤して來り歸る。書を讀んで文を僞るを知りてより、日に數千言を記す。壯なるに經書念を通じて曉析す。(一六)酷だ釋氏を排す。(一七)諸史百子、搜抉せられ(一八)隱るゝなし、汗瀾卓踔として(一九)奫泫澄深なり、詭然として蛟龍翔り。(二〇)蔚然として虎鳳躍り。鏘然として韶鈞鳴る。(二一)日光玉潔、(二二)周情孔思、(二三)千態萬貌、卒に道德

物之逆旅。光陰者百代之過客。而浮生若夢。爲歡幾何。古人秉燭夜遊。良有以也。況陽春召我以煙景。大塊假我以文章。會桃李之芳園。序天倫之樂事。羣季俊秀。皆爲惠連。吾人詠歌。獨慚康樂。幽賞未已。高談轉清。開瓊筵以坐花。飛羽觴而醉月。不有佳作。何伸雅懷。如詩不成。罰依金谷酒數。

し、歡を爲すこと幾何ぞ、(三)古人燭を秉つて夜遊ぶ、良に以あるなり。況んや陽春我を召すに(四)煙景を以てし、大塊我に假すに文章を以てするをや。桃李の(五)芳園に會して、天倫の樂事を序づ。羣季の俊秀なるは皆(六)惠連たり。吾人の(七)詠歌は、獨り康樂に慚づ。幽賞未だ已まず。高談轉〻淸し、(八)瓊筵を開いて以て花に坐し。羽觴を飛ばして月に醉ふ。(九)佳作あるにあらずんば、何ぞ雅懷を伸べん、如し詩成らずんば、罰は(一〇)金谷の酒數に依らん。

(一) 悠久なる天地は、生滅息まざる萬物の旅舍なり (二) 流れて返らざる光陰は、永久に旅する旅人の如し (三) 古詩に「晝短うして夜の長きを苦む、何ぞ燭を秉つて遊ばざる」とあり (四) 春は美しき景を以て、我を招き、天地は我に文章を才を假せり (五) 桃李の園に會し、兄弟親族集りて歡樂を盡す、(天倫は兄弟をいふ) (六) この中、弟年の人々は、皆惠連の如き秀才なれども (七) 余の詩才は謝靈運に及ばざるを慚づ (八) 美しき筵に坐して花を見、羽觴の盃を飛して月下に醉へり (九) 佳き詩文を作らざれば、風雅の思を伸ぶるを得ず (一〇) 石崇、二十四人の客と金谷園に會し、詩の成らざるものには三斗の罰杯を飲ませし事あり、今夜の罰杯も亦之に倣ふべし

聖域。其遇二於世一何如也。今先生學雖レ勤。而不レ繇二其統一。言雖レ多。而不レ要二其中一。文雖レ奇。而不レ濟二於用一。行雖レ修。而不レ顯二於衆一。猶且月費二俸錢一。歲費二廩粟一。子不レ知レ耕。婦不レ知レ織。乘レ馬從レ徒。安坐而食。踵二常途一之役役。窺二陳編一以盜竊。然而聖主不レ加レ誅。宰臣不レ見レ斥。茲非レ幸歟。動而得レ謗。名亦隨レ之。投レ閑置レ散。乃分之宜。若夫商二財賄之有亡一。計二班資之崇庳一。忘二己量之所一レ稱。指二前人之瑕疵一。是所謂詰三匠氏之不二以レ杙爲一レ楹。而訾下醫師以二昌陽一引上レ年。欲レ進二其豨苓一也。

草の赤箭青芝等の薬 (七) 牛の尿と馬屁菌等の賤薬 (八) 破れ太鼓の皮 (九) 餘裕ありて迫らざるものを好人物とし (一〇) 磊落剛直なる者を豪傑とし (一一) 人物相當に任用す (一二) 孔子の道 (一三) 天下を周遊し、旅に老いたり (一四) 正道を守り (一五) 言行共に世の模範となり (一六) 無類絶倫、殆ど聖人の域に達せる人なり (一七) 世に不遇なること斯の如し (一八) 何等の道統を繼ぎたるにあらず (一九) 官倉の米を費し (二〇) 妻子に耕織の煩なく (二一) 人並の經路をふみて勤め、古書を窺ひてその長所を取る (二二) 惡名之に從ふ (二三) 閑散の官に置かれたるは余が才分相當なり (二四) 財産の有無をのみ計り、官位の高下をのみ考へ (二五) 大工が材を柱とせざる (二六) 、醫師が菖蒲を延年の藥とせるを (二七) 豨苓(藥の名)を進めんとするに似たり

夫天地者。萬

序　類

春夜桃李園に宴する序

李　太　白

夫(そ)れ天地は萬物の逆旅(げきりよ)(一)にして、光陰(くわういん)(二)は百代の過客(くわかく)なり。而して浮生(ふせい)は夢の若

敗鼓之皮。俱收並蓄。待レ用無レ遺者。醫師之良也。登明選公。雜二進巧拙一。紆餘爲レ妍。卓犖爲レ傑。校レ短量レ長。惟器是適者。宰相之方也。昔者孟軻好レ辯。孔道以明。轍環二天下一。卒老二于行一。荀卿守レ正。大論以興。逃二讒于楚一。廢死蘭陵。是二儒者。吐レ辭爲レ經。擧レ足爲レ法。絕レ類離レ倫。優入二

老いたり。荀卿(一四)正を守りて大論以て興り、讒を楚に逃れて蘭陵に廢死せり。是の二儒(一五)は辭を吐けば經と爲り、足を擧ぐれば法となる。(一六)類を絕ち倫を離れ、優に聖域に入る。其の世(一七)に遇へる何如ぞや。今先生學は勤めたりと雖も其の統に繇ら(一八)ず、言は多しと雖も其の中を要せず、文は奇なりと雖も用を濟さず、行は修ると雖も、衆に顯れず。猶ほ且つ月に俸錢(一九)を費し歲に廩粟を費す。(二〇)子は耕を知らず、婦は織るを知らず。馬に乘り徒を從へ、安坐して食ふ。(二一)常途を踵むこと役役たり。陳編を窺うて以て盜竊す。然れども聖主誅を加へず。宰臣にも斥けられず。玆れ幸にあらずや。動もすれば謗を得、(二二)名も亦之に隨ふ。(二三)閑に投じ散に置く。乃ち分の宜しきなり。若し夫れ財賄の有亡を商り。班資の崇庳を計り。己が量の稱ふ所を忘れて前人の瑕疵を指さば、(二四)是れ所謂匠氏の杙を以て(二五)楹となさざるを詰り、(二六)醫師の昌陽を以て年を引うするを訾つて、其の(二七)豨苓を進めんと欲するなり。

(一) 柱の頭木　(二) 短きたるき　(三) 戸の扉と門の閾　(四) 門の柱と杭　(五) 大工の功なり　(六) 玉の屑、朱砂、山

奇而法。詩正而葩。下逮二荘騒一。太史所レ錄。子雲相如。同レ工異レ曲。先生之於レ文。可レ謂下閎二其中一而肆中其外上矣。小始知レ學。勇二於敢爲一。長通二於方一。左右具宜。先生之於レ爲レ人。可レ謂レ成矣。然而公不レ見レ信二於人一。私不レ見レ助二於友一。跋前疐後。動輒得レ咎。暫爲二御史一。遂竄二南夷一。三爲二博士一。冗不レ見レ治。命與レ仇謀。取レ敗幾時。冬暖而兒號レ寒。年登而妻啼レ飢。頭童齒豁。竟死何裨。不レ知レ慮レ此。反教レ人爲。

はち、その尾につまづく」とあり。老いたる狼の、進まんとすれば頸の毛をふみ、退かんとすれば尾につまづくをいふ　(一七)暫く御史監察となりしが、遂に南夷の連州に貶せられ　(一八)無爲にして治理せらるゝことなく　(一九)運命と仇敵とに苦められ、身の禍を招くこと幾時ぞ　(二〇)頭は禿げ齒は抜け

先生曰。吁子來前。夫大木爲レ宗。細木爲レ桷。欂櫨侏儒。椳闑居楔。各得二其宜一。以成二室屋一者。匠氏之功也。玉札丹砂。赤箭青芝。牛溲馬勃。

先生曰く、吁、子來り前め。夫れ大木は宗と爲し。細木は桷と爲す。欂櫨(一)侏儒、(三)椳闑居楔、(四)各〻其の宜しきを得て以て室屋を成す者は匠氏の功なり。(五)玉札丹砂、(六)赤箭青芝、(七)牛溲馬勃、(八)敗鼓の皮、倶に收め並べ蓄へ、用を待つて遺すなきものは醫師の良なり。登すこと明かに選ぶこと公にして、巧拙を雜進し紆餘を(九)妍と爲し、卓犖を傑となし。(一〇)短きを校べ長きを量つて、惟器に是れ(一一)適へるものは宰相の方なり。昔者孟軻辯を好んで(一二)孔道以て明かに、轍(一三)天下を環りて卒に行に

窮年。先生之業可謂勤矣。觝排異端、攘斥佛老、補苴罅漏、張皇幽眇。尋墜緒之茫茫、獨旁探而遠紹。障百川而東之、廻狂瀾於既倒。先生之於儒可謂勞矣。沈浸醲郁、含英咀華、作爲文章、其書滿家。上規姚姒渾渾無涯、周誥殷盤佶屈聱牙、春秋謹嚴。左氏浮誇、易

冗として治を見ず。命と仇と謀つて敗を取ること幾時ぞ。冬暖なれども兒は寒に號び、(二八)年登れども妻は(二九)飢に啼く、(三〇)頭童に齒豁に、竟に死すとも何の裨あらん。此れを慮ることを知らずして、反つて人を敎ふることを爲さんや。

(一) 大學の教官にして、國子博士なる韓退之 (二) 思慮工夫によりて成り、隨意きまゝなるに依りて敗る (三) 聖君賢相 (四) 政道よく行はる (五) 一藝一能あるものは登用せられずといふことなし (六) 爪にて物をかき出し、鳥獸に一鳥を捕ふる如く、人材を登用し (七) 物をはり、くじる如くに不良の徒を除き (八) 垢を磨り落し、光澤を出す如くす (九) 無能にして樂に用ひらるゝものはあらんも、多能にして擧げられざるものはなし (一〇) 成就せざるを患へ (一一) 公平ならざるを (一二) 事を記すにその要を得、物を述ぶるにその深義を取る (一三) 燈火を點じ朝に至り、一心不亂に年を送る (一四) 儒道に害ある諸子の教を排斥し、佛教道教をはらひ除き (一五) 儒教の缺點を補ひ、隱れたる眞理を取り開き (一六) 道統の絶えんとするを尋ね出し、廣くさぐり、遠くつぎ (一七) 氾濫す。百川を治めて東に注がしめ、すでに倒れし大浪を起したる如し (一八) 道理を極め學說を蓄へ、義を含み花ある風ふ如く美しき文才あり (一九) 上は虞夏(姚は舜の姓、姒は禹の姓)の文の渾雅なるに則り (二〇) 周誥殷盤の文の屈古にして難解難讀なるもの (二一) 褒貶について一字苟くもせざる春秋、浮誇誇大なる左氏傳、奇拔にして正理なる周易、正しくして花やかなる詩經をも學び (二二) 下は莊子の文、屈原の離騷の文に及び (二三) 太史公の史記、子雲、司馬相如の文と、巧を同うし、構成を異にす (二四) 內容豐富にして形式自在なり (二五) 長じて道に通じ、左右に行ふところ、適宜ならざるなし (二六) 進退意の如くならず、動もすれば罪を得んとす(詩に、「狼その胡をふみ、すな

業患不能精。無患有司之不明、行患不能成。無患有司之不公。言未既。有笑于列者曰。先生欺予哉。弟子事先生。于茲有年矣。先生口不絶吟於六藝之文。手不停披於百家之編。記事者必提其要。纂言者必鉤其玄。貪多務得。細大不捐。焚膏油以繼晷。恆兀兀以

細大捐てず。(一三)膏油を焚いて以て晷に繼ぎ、恆に兀兀として以て年を窮む。先生の業勤めたりと謂ふべし。(一四)異端を觝排し、佛老を攘斥す。(一五)罅漏を補苴し、幽眇を張皇し、(一六)墜緒の茫茫たるを尋ね、獨り旁く搜つて遠く紹ぐ。(一七)百川を障へて之を東せしめ、狂瀾を既に倒るゝに廻す。先生の儒に於ける、勞せりと謂ふべし。(一八)沈浸醲郁して英を含み華を咀ひ、文章を作爲して其書家に滿つ。(一九)上、姚姒に規り、渾渾として涯なし。(二〇)周誥殷盤の佶屈聱牙なる、春秋の謹嚴なる、(二一)左氏の浮誇なる、易の奇にして法なる、詩の正にして葩なる、(二二)下、莊騷に逮び、(二三)太史の錄する所、子雲相如、工を同うし曲を異にす。先生の文に於ける、(二四)其の中を閎うして其の外を肆にすと謂ふべし。少うして始めて學を知り、敢て爲すに勇む。(二五)長じて方に通じ、左右其れ宜し。先生の人と爲りに於ける成れりと謂ふべし。然れども公には人に信ぜられず、私には友に助けられず。前を跋み後に(二六)疐いて、動もすれば輒ち咎を得、(二七)暫く御史と爲つて遂に南夷に竄せられ、三たび博士と爲り。

國子先生。晨入二大學一。招二諸生一立二館下一。誨レ之曰。業精二于勤一。荒二于嬉一。行成二于思一。毀二于隨一。方今聖賢相逢。治具必張。拔二去兇邪一。登二崇俊良一。占二小善一者率以錄。名二一藝一者無レ不レ庸。爬羅剔抉。刮レ垢磨レ光。蓋有二幸而獲レ選。孰云多而不レ揚。諸生

進學の解　　韓退之

國子先生、晨に大學に入り、諸生を招きて館下に立たしめ、之に誨へて曰く、業は勤むるに精しくして嬉むに荒み、行は思ふに成りて隨ふに毀る。方今聖賢相逢ひ、治具必ず張り。兇邪を拔去し俊良を登崇し。小善を占むるものも率ね以て錄せられ、一藝に名ある者も庸ひられざるなし。爬羅剔抉、垢を刮り光を磨く。蓋し幸にして選を獲るありとも、孰か云はん多にして揚げられずと。諸生の業は精なる能はざるを患へて、有司の明かならざるを患ふるなかれ、行は成る能はざるを患へて、有司の公ならざるを患ふるなかれと。言未だ既らざるに、列に笑ふ者あり。曰く、先生予を欺くかな。弟子先生に事ふる茲に年あり。先生口に六藝の文を吟ずることを絕たず。手に百家の編を披くことを停めず。事を記すには必ず其の要を提げ、言を纂むるには必ず其の玄を鉤す。多きを貪り得るを務め、

其爲ㇾ祥也。然麟之爲ㇾ物。不ㇾ畜ニ於家一。不三恒有ニ於天下一。其爲ㇾ形也不ㇾ類。非下若ニ馬牛犬豕豺狼麋鹿一然。然則雖ㇾ有ㇾ麟。不ㇾ可ㇾ知ニ其爲ㇾ麟也。角者吾知ニ其爲ㇾ牛。鬣者吾知ニ其爲ㇾ馬。犬豕豺狼麋鹿。吾知三其爲ニ犬豕豺狼麋鹿一。唯麟也不ㇾ可ㇾ知。不ㇾ可ㇾ知則其謂ニ之不祥一也亦宜。雖ㇾ然。麟之出。必有三聖人在ニ乎位一。麟爲ニ聖人一出也。聖人者必知ㇾ麟。麟之果不ㇾ爲ニ不祥一也。又曰。麟之所ニ以爲ㇾ麟者。以ㇾ德不ㇾ以ㇾ形。若麟之出。不ㇾ待ニ聖人一。則其謂ニ之不祥一也。亦宜。

り、鬣(たてがみ)(八)ある者は吾其の馬たるを知り、犬豕豺狼麋鹿は吾其の犬豕豺狼麋鹿たるを知る。唯麟や知るべからず。知るべからざれば則ち其れ之を不祥(ふしやう)(九)と謂はんも亦宜(むべ)なり。然りと雖も、麟の出づる、必ず聖人(せいじん)位に在るあり、麟は聖人のために出づるなり。聖人は必ず麟を知る。麟は之れ果(はた)して不祥たらざるなり。又曰く、麟の麟たる所以は德(一〇)を以てして形を以てせず。若し麟の出づる。聖人を待たずんば、則ち其れ之を不祥と謂はんも亦宜(またむべ)なり。

(一) 春秋哀公十四年に「西狩して麟を獲」とあり、麟は仁獸にして麕身牛尾、一角あり、角上に肉あり、生物を食はず、生草を踐まず、王者道あれば則ち出づといふ、毛虫三百六十の長なり (二) 聖物たるは明かなり (三) 詩經周南に、麟之趾の篇あり (四) 即ち哀公十四年の條 (五) めでたき者 (六) 普通の獸に類せず (七) たとへ麒麟の出づることあるも、その麒麟たるを知るに由なし (八) たてがみ (九) めでたからぬ物、左傳哀公十四の條に「西、大野に狩す、叔孫氏の車子鉏商麟を獲、おもへらく不祥なりと、以て虞人に賜ふ。仲尼之を觀て曰く、麟なりと、然る後に之を取れり」とあり (一〇) その德あるを以ていふなり、形の怪異なるは問ふ所にあらず

植可二遠觀一而不レ可二褻翫一焉。予謂菊花之隱逸者也。牡丹花之富貴者也。蓮花之君子者也。噫菊之愛。陶後鮮レ有レ聞。蓮之愛同レ予者何人。牡丹之愛宜乎衆矣。

なし　(三) 茎は中空にして直立し　(四) 蔓延せず、枝を出さず　(五) 遠く傳はり　(六) 高き貌　(七) 遠く見るべきも、近づき押るゝを得ず　(八) 世に隠れて高潔なるもの（ひとり晩秋に開き霜に傲る故に）　(一〇) 富貴の相を具へ、艶美なるもの（春の好季に咲き、花輪大きくして人に尊ばるゝ故に）　(一一) 清く気高く、節操あるもの　(一二) 陶淵明去りて後、よく隠逸の趣を解し、菊を愛するもののあるを聞かず　(一三) 世に牡丹を愛するものゝ多きは宜なり、富貴は俗人

解類

(一) 獲麟の解　　韓退之

麟之爲レ靈昭昭也。詠二於詩一。書二於春秋一。雜二出於傳記百家之書一。雖二婦人小子一皆知二

麟の靈たる昭昭たり。(二)詩に詠じ、(三)春秋に書し、(四)傳記百家の書に雜出し、婦人小子と雖も、皆其の(五)祥たるを知れり。然れども麟の物たる、家に畜はれず。恒に天下にあらず。其の形たるや(六)類せず。馬牛犬豕豺狼麋鹿の若く然るに非ず。然らば則ち(七)麟ありと雖も、其の麟たるを知るべからざるなり。角ある者は吾其の牛たるを知

久屈之中。而用於既足之後。流於既溢之餘而發。於持滿之末。此之古之君子所以大過人。而今之君子所以不及也。吾少也。有志於學。不幸而早得。與吾子同年。吾子之得。亦不可謂不早也。吾今雖欲自以爲不足。而衆且妄推之矣。嗚呼。吾子其去此而務學也哉。博學而約取。厚積而薄發。吾告吾子。止於此矣。子歸過京師而問焉。有曰轍子由者。吾弟也。其亦以是語之。

水陸草木之花。可愛者甚蕃。晉陶淵明獨愛菊。自李唐來。世人甚愛牡丹。予獨愛蓮之出於泥而不染。濯清漣而不妖。中通外直。不蔓不枝。香遠益清。亭亭淨

愛蓮の説

周茂叔

水陸草木の花、愛すべきもの甚だ蕃し。晉の陶淵明は獨り菊を愛す。李唐(一)より來、世人甚だ牡丹を愛す。予獨り蓮の淤泥(二)より出でて染まず。清漣(三)に濯つて妖ならず。中通じ(四)外直くして。蔓せず(五)枝せず。香遠くして(六)益ゝ清く、亭亭(七)として淨く植ち。遠く觀るべくして褻翫(八)すべからざるを愛す。予謂へらく、菊は花の隱逸(九)なるものなり。牡丹は花の富貴(一〇)なるものなり。蓮は花の君子(一一)なるものなりと。噫菊の愛は陶の後聞く(一二)ことある鮮し。蓮の愛は予に同じきもの何人ぞや。牡丹(一三)の愛は宜なるかな衆きこと。

(一) 唐代をいふ、唐の王室は李姓なり (二) 泥より出でて、汚に染まず (三) 清きさゞなみに洗はれて、媚ぶる色

於上者如魚鱗。而地力竭矣。種之常不及時。而斂之常不待其熟。此豈能復有美稼哉。古之人。其才非有大過今之人也。其平居所以自養。而不敢輕用以待其成閔閔焉如嬰兒之望長也。弱者養之以至於剛。虛者養之以至於充。三十而後仕。五十而後爵信於

大に人を過ぎたる所以にして、今の君子の及ばざる所以なり。吾少より學に志あり。(一六)不幸にして早く得ること吾子と同年なり。吾子の得ることも、亦早からずと謂ふべからず。(一七)吾今自ら以て足らずと爲さんと欲すと雖も、衆且つ妄に之を推す。

嗚呼、吾子、其れ此を去つて學を修めよや。(一八)博く學んで約に取り。厚く積んで薄く(一九)發せよ。吾、吾子に告ぐること此れに止る。子歸つて京師に過りて問へ、轍子由(二〇)と曰ふ者あり。吾が弟なり。其れ亦是れを以て之に語げよ。

(一) 穀物を育て收むる法 (二) 地を更へて代る〲作り、十分に地力を養ふことを得 (三) 完熟するを待ちて收穫す (四) しひな (五) 十人家内の家にて百畝の田を作る (六) 一寸の餘地もなく植付け、日夜成熟を待つ (七) 耕耘の其、相次ぎて魚鱗の如く、寸時も土地を休めず、地力ために盡く (八) 植うるにも適當の時を得ず、收穫するにも急ぎて完熟を待たず (九) 平生自ら修養し、輕々しく出でて事へず、學問德器の成就を待つ (一〇) 憂ふる貌 (一一) 小兒の成長を待つに似たり (一二) 五十歳にして始めて爵位を得 (一三) 久しく隱る、中に、德業を修め蓄へ (一四) 十分に足りし後に出して用ふ (一五) 有り餘りて溢る、水を流し弓を引きしぼりて後、矢を放つ如し (一六) 不幸にして早く進士に及第し、君(張琥)と同年なりき(この一篇は張琥のために作りしなり) (一七) 余、學才の足らざるを以て、自ら辭退せんとするも、衆人妄に推してやまず (一八) 博く學んでその要を取り (一九) 厚く修養して才を蓄ふることを薄くせよ (二〇) 名は轍、字は子由

盍三嘗觀二於富人之稼一乎。其田美而多。其食足而有レ餘。其田美而多則可二以更休。而地力得レ完。其食足而有レ餘。則種レ之常不レ後レ時。而斂レ之常及二其熟一。故富人之稼常美。少レ秕而多レ實。久藏而不レ腐。今吾十口之家。而共二百畝之田一。寸寸而取レ之。日夜以望レ之。鋤耰銍艾相二尋

盍ぞ嘗に富人の稼を觀ざるや。其の田美にして多く、其の食足つて餘あり。其の田美にして多きときは、則ち以て更休(二)して地力完きを得べし。其の食足つて餘あるときは、則ち之を種うること常に時に後れずして、之を斂むること常に其の(三)熟に及ぶ。故に富人の稼は常に美なり。(四)秕少くして實多し、久しく藏して腐ちず。今吾十口の家百畝の田を共にす。(六)寸寸にして之を取り、日夜に以て之を望む。(七)鋤(五)優銍艾上に相尋ぐもの魚鱗の如し。而して地力竭く。之を種うる常に時に及ばず、之を斂むること常に其の熟を待たず、此れ豈能く復(八)美稼あらんや。古の人其の才大に今の人に過ぐる有るに非ず。其の(九)平居以て自ら養うて敢て輕々しく用ひず、以て其の成るを待つ所以なり。(一〇)閔閔焉として(一一)嬰兒の長ずるを望むが如し。弱き者は之を養うて以て剛きに至らしめ、虛しき者は之を養うて以て充つるに至らしむ。三十にして後に仕へ、(一二)五十にし後に爵す。(一三)久しく屈する中より信びて、既に(一四)足るの後に用ふ、(一五)既に溢るゝの餘を流して滿を持するの末に發す。此れ古の君子の

輪輻蓋軫。皆有ㇾ職二乎車一。而軾獨若ㇾ無ㇾ所ㇾ爲者。雖ㇾ然。去ㇾ軾則吾未ㇾ見三其爲二完車一也。軾乎吾懼三汝之不二外飾一也。天下之車。莫ㇾ不ㇾ由ㇾ轍。而言二車之功一。轍不ㇾ與焉。雖二然車仆馬斃一。而患不ㇾ及ㇾ轍。是轍者禍福之間。轍乎吾知ㇾ免矣。

二子(一)に名づくる說

蘇　老　泉

輪輻蓋軫(二)は、皆車に職ることあり。而して軾(三)は獨り爲す所なき者の若し。然りと雖も、軾を去るときは則ち吾未だ其の完車(四)たるを見ざるなり。軾や、吾汝の外飾(五)せざるを懼る。天下の車轍に由らざる莫し。車の功を言へば轍(七)は與らず。然かも、車仆れ馬斃ると雖も、患(六)轍に及ばず。是れ轍は禍福の間なり。轍や、吾免れん(八)ことを知る。

(一) 老泉の二子、長を軾といひ、字は子瞻、卽ち東坡なり、次を轍といひ、字は子由、卽ち潁濱なり　(二) 輪(わ)輻(輪より中心に集るや)蓋(かさ)軫(車後の横木)は皆それ〴〵の役目あり　(三) 車前の木、禮をする時に手を掛くるもの　(四) 完全なる車　(五) 外邊を飾らず、時俗に合はざるが故に世に忌み憚はれんことを恐る　(六) わだち　(七) 車の功用よりいへば、轍は少しも關係なし　(八) 禍を免れ、一生無事なるを知る

(一)稼の說

蘇　子　瞻

後有二千里馬一。千里馬常有。而伯樂不二常有一。故雖レ有二名馬一。祇辱二於奴隸人之手一。駢二死於槽櫪之間一。不下以二千里一稱上也。馬之千里者。一食或盡二粟一石一。食レ馬者。不下知二其能千里一而食上也。是馬雖レ有二千里之能一。食不レ飽。力不足。才美不二外見一。且欲下與二常馬一等上不レ可レ得。安求二其能千里一也。策レ之不レ以二其道一。食レ之不レ能レ盡二其材一。鳴レ之不レ能レ通二其意一。執レ策而臨レ之曰。天下無二良馬一。嗚呼。其眞無レ馬邪。其眞不レ識レ馬耶。

は常にあらず。故に名馬ありと雖も、祇奴隷人の手に辱められ、槽櫪の間に駢(三)死す。千里を以て稱せられざるなり。馬の千里なる者は一食に或は粟一石(四)を盡す。馬を食ふ者は其の能く千里なるを知つて食はざるなり。是の馬千里の能ありと雖も、食飽かざれば力足らず、才の美外に見れず。且つ常馬と等しきを欲すとも得べからず。安んぞ其の能く千里なるを求めんや。之を策つに其の道(五)を以てせず。之を食ふこと其の材(六)を盡す能はず。鳴けども其の意を通ずる能はず。策を執つて之に臨んで曰く、(七)天下に良馬なしと。嗚呼其れ眞に馬なきか。其れ眞に馬を識らざるか。

(一) この篇名馬のことを說き、賢士空しく、他人と同視せらるゝことをいふ (二) 馬を相る名人 (三) 頭を並べて厩の中に死し、凡馬と同視せらる、槽は秣を入るゝ桶、櫪はしたいた (四) 多量の食を要する意、石は重さ百二十斤なり (五) 方法 (六) 材能相當の食を與へず (七) 馬を見ていふ

訣。嗚呼。師道之不レ復可レ知矣。巫醫百工之人。君子鄙レ之。今其智乃反不レ能レ及。可レ怪也歟。聖人無二常師一。萇弘師襄老聃郯子之徒。其賢不レ及二孔子一。孔子曰。三人行則必有二我師一。故弟子不二必不一レ如レ師。師不三必賢二於弟子一。聞レ道有二先後一。術業有二專攻一。如レ斯而已。李氏子蟠年十七。好二古文一。六藝經傳皆通二習之一。不レ拘二於時一。請レ學二於余一。余嘉三其能行二古道一。作二師說一。以貽レ之。

(一) 師に就くことを耻づ (二) 讀書句讀の小を學び、傳道解惑の大を忘るゝは賢明なりといひ難し (三) 巫祝、醫者、音樂師、その他種々の工人 (四) 道を行ふこと相似たり (五) 顯位のものを師とするは、不見識なりとして耻ぢ (六) 高位のものを師とするは、諛ふに近しとして耻る (七) 復審せざること (八) 士分の人 (九) 怪むに足らず、師あるに由るなり (一〇) 定りたる師 (一一) 孔子に樂を敎へし人 (一二) 孔子に琴を敎へし人 (一三) 孔子に禮を敎へし人 (一四) 春秋左氏傳、昭公十七年に「郯子來朝し、公之と宴す、孔子問うて曰く、少皥氏は鳥を官とせり、何故ぞやと、郯子曰く、吾祖なり、我之を知れりと、仲尼之を聞き、郯子に見えて之を學ぶ」とあり (一五) 我と三人道を行ふに、一人は善、一人は惡なる時、我はその善に習ひ、その惡を以て戒とす、故に皆我が師なりとの意 (一六) 道を聞くに先後あり、業務に專門と門外なるとあるのみ、年齡尊卑は論ずるに足らず (一七) 貞元十九年の進士 (一八) 禮樂射御書數 (一九) 經書史傳 (二〇) 時の風習に囚はれずして

(一)雜說　　韓退之

世有二伯樂一。然

世に伯樂(はくらく)(二)ありて然して後に千里の馬あり。千里の馬は常にあれども、而(しか)も伯樂

書。而習二其句讀一者也。非下吾所レ謂傳二其道一解二其惑一者上也。句讀之不レ知。惑之不レ解。或師焉。或不焉。小學而大遺。吾未レ見二其明一也。巫醫樂師百工之人。不レ恥二相師一。士大夫之族。曰師曰弟子云者。則羣聚而笑レ之。問レ之則曰。彼與レ彼年相若也。道相似也。位卑則足レ羞官盛則近レ

は師あり、或は不ず。(二)小しく學んで大に遺る。吾未だ其の明かなるを見ざるなり。(三)巫醫樂師百工の人は相師とするを恥ぢず。士大夫の族、曰く師曰く弟子と云ふ者をば、則ち羣り聚つて之を笑ふ。之を問へば則ち曰く、彼と彼とは年相若けり、(四)道相似ると。(五)位卑しければ則ち羞づるに足り。(六)官盛なるときは則ち諛ふに近し。嗚呼師道の(七)復せざること知るべし。巫醫百工の人は、(八)君子之を鄙む。今其の智は乃ち反つて及ぶ能はず。(九)怪むべけんや。聖人は(一〇)常の師なし。(一一)萇弘、(一二)師襄、(一三)老聃、(一四)郯子の徒、其の賢なること孔子に及ばず。孔子曰く、(一五)三人行へば則ち必ず我が師ありと。故に弟子は必ずしも師に如かざるにあらず。師は必ずしも弟子より賢らず。(一六)道を聞くこと先後あり。術業專攻あり。斯の如きのみ。李氏が子(一七)蟠、年十七なり。古文を好み。(一八)六藝(一九)經傳皆之に通習せり。時に(二〇)拘らずして余に學ばんことを請ふ。余其の能く古の道を行ふことを嘉し、師の說を作つて之に貽る。

從而師レ之。生二乎吾後一。其聞レ道也亦先二乎吾一。吾從而師レ之。吾師レ道也。夫庸知三其年之先二後生於吾一乎。是故無レ貴無レ賤。無レ長無レ少。道之所レ存。師之所レ存也。嗟乎。師道之不レ傳也久矣。欲二人之無一レ惑也難矣。古之聖人。其出レ人也遠矣。猶且從レ師而問焉。今之衆人。其去二聖人一也。亦遠矣。而恥レ學二於師一。是故聖益聖。愚益愚。聖人之所二以爲一レ聖。愚人之所二以爲一レ愚。其皆出二於此一乎。

んことを欲するも難し。古の聖人は、其の人に出づるや遠し(五)、猶ほ且つ師に從つて問ひき。今の衆人は其の聖人を去るや亦遠し、而も師に學ぶことを恥づ。是の故に聖は益々聖にして、愚は益々愚なり。聖人の聖たる所以、愚人の愚たる所以は其れ(六)皆此れより出づるか。

(一)學問するもの　(二)人生の正道　(三)齢の多少を論ずる要なし　(四)道を知りて行ふもの、卽ち吾が良師なり　(五)はるかに人に勝れたり　(六)これに原因す

愛二其子一擇レ師而敎レ之。於二其身一也。則恥レ師焉。惑矣。彼童子之師。授二之

其の子を愛しては師を擇んで之を敎ふ。其の身に於ては則ち師を恥づ(一)。惑へるかな。彼の童子の師、之に書を授けて其の句讀を習はしむる者なり。吾が所謂其の道を傳へ其の惑を解く者に非ざるなり。句讀の知らざると惑の解かざると、或

卒至宗儒以無歡。臧獲懷憂。因之而得罪。此其爲害者三也。是皆大者。餘悉難名。嗚呼。止棘之詩。垂之六經。於此見詩人之博物。比興之爲精。宜乎以諷刺讒人之亂。誠可嫉而可惜。

說類

師說

韓退之

古之學者必有師。師者所以傳道受業解惑也。人非生而知之者。孰能無惑。惑而不從師。其爲惑也。終不解矣。生乎吾前。其聞道也固先乎吾。吾

古の學者は必ず師ありき。(一)師は道を傳へ業を受け惑を解く所以なり。(二)人生れながらにして之を知る者に非ず。孰か能く惑なからんや。惑うて師に從はずんば其の惑たるや終に解けず。吾より前に生れて、其の道を聞くこと固に吾より先ならば、吾從つて之を師とせん。吾より後に生れて、其の道を聞くこと亦吾より先ならば、吾從つて之を師とせん。吾は道を師とするなり。(三)夫れ庸ぞ其の年の吾より先後して生るゝを知らんや。是の故に貴となく賤となく、長となく少となく、(四)道の存する所は師の存する所なり。嗟乎師道の傳はらざるや久し。人の惑なから

絡繹。方其賓主獻酬。衣冠儼飾。使吾揮手頓足。或容失色於此之時。王衍何暇於清談。賈誼堪爲之太息。此其爲害者二也。又如醯醢之品醬䤄之制。及時月而收藏。謹緘罌之固濟。乃衆力而攻鑽。極百端窺覷。至於大胾肥牲。嘉殽美味。蓋藏稍露於罅隙。守者或時而假寐。稍少息於防戢。已輒遺其種類。莫不孳息蕃滋。淋漓敗壞。使親朋

滋ならざるは莫し。淋漓(一四)として敗壊し、親朋をして卒に索爾として以て歡ぶなきに至らしめ、臧獲(一五)憂を懷き、之に因つて罪を得。此れ其の害をなす者の三なり。是れ皆大なる者にして、餘は悉く名づけ難し。嗚呼棘(一六)に止るの詩、之を六經に垂れたり。此に於て詩人の博物、比興(一七)の精たるを見る。宜なるかな爾を以て讒人(一八)の亂を刺れること、誠に嫉むべくして悪むべし。

(一) 肉 (二) 食卓 (三) 醲き酒に醉ひて杯中に溺れ (四) 熱きあつものに入りて煮死す (五) 赤蛇の類 (六) 衣服を汚すことあれば (七) 主客にて杯をさし、また返す (八) 何人も困却せざるものなしとの意、晉書に「王衍、たゞ老莊を談ずるを事とし、常に玉柄の麈尾(はのすの如きもの)を執る」とあり、又通鑑大全に「賈誼則ち上疏して曰く、臣竊に惟ふに、今事の勢、ために痛哭すべきもの一、ために長太息すべきもの六」となり (九) しほから、又は骨を交ふる醬の製法 (一〇) かめ、つぼを堅く閉づ (一一) あらゆる方法に器内をうかゞふ (一二) 大切れの獸肉、味よき者 (一三) 入りて子を産み、蕃殖せざるなし (一四) 美味を敗壞せしめ、友と酒宴を開くの歡びを空からしむ (一五) 奴僕 (一六) 詩經に「々蠅棘に止る」といふ詩あり(六經は、易、書、禮、樂、詩、春秋をいふ) (一七) 吟咏の上にて比喩を作ること (一八) 讒人の亂を鼠に比して刺る

又如二峻宇高堂一。嘉賓上客。沽レ酒市レ脯。鋪レ筵設レ席。聊娛二一日之餘閒一。奈二爾衆多之莫一レ敵。或集二器皿一。或屯二几格一。或醉二醇酎一。因レ之投溺或投二熱羹一。遂喪二其魄一。諒雖レ死而不レ悔。亦可レ戒二夫貪一レ得。尤忌二赤頭一。號爲二景迹一。一有二霑汚一。人皆不レ食。奈何引レ類呼レ朋。搖レ頭鼓レ翼。聚散倏忽。往來

又峻宇高堂に嘉賓上客あり、酒を沽ひ脯を沽ひ、筵を鋪き席を設くる如き、聊か(一)一日の餘閒を娛めば、爾が衆多にして敵莫きことを奈せん。或は器皿に集り、或は(二)几格に屯り。或は(三)醇酎に醉うて之に因つて投溺し、或は(四)熱羹に投じて遂に其の魄を喪ふ。諒に死すと雖も悔いず。亦夫の得るを貪ることを戒むべし。尤も(五)赤頭を忌む。號して景迹と爲す。一たび(六)霑汚するあれば人皆食はず。奈何ぞ類を引き朋を呼び、頭を搖し翼を鼓し、聚散倏忽として往來絡繹たる。其の(七)賓主獻酬し、衣冠儼かに飾るに方りて、吾をして手を揮かし足を頓て、容を改め色を失はしむ。此の時に於て、(八)王衍も何ぞ淸談に暇あらん。賈誼も之がために太息するに堪へたり。此れ其の害をなす者の一なり。又(九)醯醢の品醬醴の制の如き、時月に及んで收藏し、(一〇)缾罌の固濟を謹む、乃ち衆力もて攻鑽し、(一一)百端を極めて窺覦す。(一二)大截肥牲、嘉殽美味に至つては、蓋藏すれども稍〻罅隙より露る。守る者或は時にして假寐し、纔に小しく防嚴に怠れば、已に(一三)輒ち其の種類を遺して、養息蕃

頃刻而集。誰相告報。其在物也。雖欲其爲害也至要。若乃華榱廣厦珍簟方牀。炎風之燠。夏日之長。神昏氣蹙。流汗成漿。委四肢而莫擧。眊兩目其茫洋。惟高枕之一覺。寧煩敵之暫忘。念於爾而何負。乃於吾之見殃。尋頭撲面入袖穿裳。或集眉端。或沿眼眶。目欲瞑而復警。臂已痺而猶攘。於此之時。孔子何由見周公於髣髴。莊生安得與蝴蝶而飛揚。徒使蒼頭丁髻。巨扇揮颺。或垂頭而腕脫。或立寐而顚僵。此其爲害一也。

ひ、目瞑せんと欲して復警め、臂已に痺れて猶は攘ぐ。此の時に於て、孔子(一六)も何に由つてか周公を髣髴に見ん。莊生も安んぞ蝴蝶と飛揚するを得んや。徒に蒼頭丁髻をして、巨扇もて揮颺せしむれば、(一七)或は頭を垂れて腕脫し、或は立ろに寐ねて顚僵す。此れを其の害を爲すの一なり。

(一) あをばへ　(二) 汝の生涯を悲む　(三) はち、さそり　(四) かゝもぶの如き餓き嘴　(五) 至つて少く　(六) 腥の物にて食慾を滿し易し　(七) 汗に穢れる齒、飯に附着せる肉の香　(八) 抄は秒に作るべしといふ、穂の先（秒）腐敗の速（急）　(九) 蠅多ければ體に堪へがたし　(一〇) 食物の氣　(一一) 美しきたるきの廣き家に竹簟を布き、床を延べ　(一二) 四肢を動かすものうく、兩眼茫然としてくらむ時　(一三) 枕を高うして一睡し、暑熱を忘れんことを願ふ　(一四) 余は汝(はへ)に對し、如何なる惡しき行ありしぞ　(一五) まぶた　(一六) 何人も熟睡するを得ずとの意、論語に「吾また夢に周公を見ず」とあり、又莊子に「莊周夢に胡蝶となる、栩々然として胡蝶なり」　(一七) 僮僕に命じ、大扇にてあふがしむれば、疲れて居眠り、遂に寐入りて倒る

蒼蠅蒼蠅。吾嗟ニ爾之爲レ生。既無ニ蜂蠆之毒尾一。又無ニ蚊虻之利觜一。幸不ニ爲レ人之畏一。胡不ニ爲レ人之喜一。爾形至眇。爾欲易レ盈。盃盂殘瀝。砧几餘腥。所レ希抄忽。過則難レ勝。苦ニ何求而不レ足一。乃終日而營營。逐レ氣尋レ香。無ニ處不レ到。

蒼蠅を憎む賦（一）

歐陽永叔

蒼蠅蒼蠅、吾爾の生たること（二）を嗟く。既に蜂蠆（三）の毒尾なく、又蚊虻（四）の利觜なし。幸に人のために畏れられず。胡ぞ人のために善ばれざる。爾が形は至眇（五）にして、爾が欲は盈ち易し（六）。盃盂（七）の殘瀝、砧几の餘腥、希ふ所は抄忽（八）にして、過ぐれば則ち勝へ（九）難し。何を求めてか足らざるを苦み。乃ち終日營營たるや、氣（一〇）を逐ひ香を尋ねて、處として到らざるなく、頃刻にして集る。誰か相告報する。其の物に在るや微なりと雖も、其の害をなすや至要なり。若し乃ち華榱（一一）廣廈、珍簟方牀、炎風の爍く、夏日の長きに、神昏く氣鬱り、流汗漿を成し、四肢（一二）を委して擧ぐること莫く、兩目を眊まして其れ茫洋たり。惟枕（一三）を高うして一たび覺め、冀くは煩敲の暫くも忘れんことを。念ふ（一四）に爾に於て何をか負き、乃ち吾に於て殃せらる。頭を尋ね、面を撲ち、袖に入り裳を穿つ。或は眉端に集り、或は眼眶（一五）に沿

岸千尺。山高月小。水落石出。曾日月之幾何。而江山不可復識矣。予乃攝衣而上。履巉岩。披蒙茸。踞虎豹。登虬龍。攀棲鶻之危巢。俯馮夷之幽宮。蓋二客之不能從焉。劃然長嘯。草木震動。山鳴谷應。風起水涌。予亦悄然而悲。肅然而恐。凜乎其不可留也。反而登舟。放乎中流。聽其所止而休焉。時夜將半。四顧寂寥。適有孤鶴。橫江東來。翅如車輪。玄裳縞衣。戛然長鳴。掠予舟而西也。須臾客去。予亦就睡。夢一道士。羽衣翩躚。過臨皐之下。揖予而言曰。赤壁之遊樂乎。問其姓名。俛而不答。嗚呼噫嘻。我知之矣。疇昔之夜。飛鳴而過我者。非子也耶。道士顧笑。予亦驚悟。開戸視之。不見其處。

過り、予に揖して(二六)言うて曰く、赤壁の遊樂しきかと。其の姓名を問ふに俛して答へず。嗚呼噫嘻。我之を知れり。疇昔(二七)の夜、飛鳴して我に過りし者(二八)は子にあらずや。道士顧みて笑ひ、予も亦驚き悟む。戸を開いて之を視れば、其の處を見ず。

(一) 前に赤壁に遊びたると同じ年 (二) 十五日 (三) 蘇子瞻の営みたる堂、雪景を四壁に描りと云ふ (四) 亭の名、黄州府城の東南にあり、蘇子瞻の寓居せしところ (五) 人の影地にうつる (六) この良夜をいかにすべきかあたに過すは惜むべきなり (七) 口大きく鱗こまかに (八) 一名、呉淞江、すゝきの名所なり (九) 婆 (一〇) 不虞の求め (一一) 水量減じ、石に激して鳴りひゞき (一二) 岸高く峙つ (一三) 曾てこゝに遊びし時と、幾何の月日隔つるぞ僅なる時日の中に、その變化驚くべし (一四) 江山長へに在りといふことも、また容易に知るべからず (一五) 亂れ生ふる草を分る (一六) 石に腰掛け枯木の根に登り (一七) みさご(鷹の類)の巣に攀ぢ、水神の居所を窺ふ (一八) 物を劃くが如く、嘯に長く嘯りに (一九) 凄くして久しく留るを得ず (二〇) 四邊靜にして、物淋し (二一) 黒きもすそ、白きころも(鶴の羽色をいふ) (二二) 物を撃つが如き聲 (二三) 舟近く過ぎて西に行く (二四) 寓居に歸りて眠る (二五) ひらひらとして (二六) 一禮して (二七) 昨夜 (二八) 鶴

地。仰見二明月一。顧而樂レ之。行歌相答。已而歎曰。有レ客無レ酒。有レ酒無レ肴。月白風清。如二此良夜一何。客曰。今者。薄暮擧レ網得レ魚。巨口細鱗。狀如二松江之鱸一。顧安所レ得レ酒乎。歸而謀二諸婦一。婦曰。我有二斗酒一。藏レ之久矣。以待二子不時之需一。於レ是携二酒與一レ魚。復遊二於赤壁之下一。江流有レ聲。斷

を擧げて魚を得たり。巨口細鱗、狀松江の鱸の如し。顧ふに安にか酒を得る所あらんかと。歸つて諸を婦に謀る。婦曰く、我に斗酒あり。之を藏すること久し。以て子が不時の需を待てりと。是に於て酒と魚とを携へて、復た赤壁の下に遊ぶ。江流聲あり、斷岸千尺、山高く月小に、水落ちて石出づ。曾て日月の幾何ぞや。而して江山も復た識るべからざるなり。予乃ち衣を攝げて上り、巉岩を履み蒙茸を披き、虎豹に踞し虬龍に登り、棲鶻の危巣に攀ち、馮夷の幽宮に俯す。蓋し二客は従ふこと能はず。劃然として長嘯すれば、艸木震動し、山鳴り谷應へ、風起り水涌く。予も亦悄然として悲み、肅然として恐れ、凜乎として其れ留るべからず。反つて舟に登り、中流に放にして其の止る所に聽せて休す。時に夜將に半ならんとす。四顧寂寥たり。適〻孤鶴あり。江を横ぎつて東より來る。翅車輪の如く、玄裳縞衣せり。戛然として長鳴し。予が舟を掠めて西す。須臾にして客去り、予も亦睡に就く。一道士を夢む。羽衣翩躚として臨皐の下に

逝者如斯。而未嘗往也。盈虛者如彼。而卒莫消長也。蓋將自其變者而觀之。則天地曾不能以一瞬。自其不變者而觀之。則物與我皆無盡也。而又何羨乎。且夫天地之間。物各有主。苟非吾之所有。雖一毫而莫取。惟江上之清風。與山間之明月。耳得之而爲聲。目遇之而成色。取之無禁。用之不竭。是造物者之無盡藏也。而吾與子之所共適。客喜而笑。洗盞更酌。肴核既盡。杯盤狼藉。相與枕藉乎舟中。不知東方之既白。

(一) 萬物と我と終始變らず、萬世盡くることなし (二) 一毛の微も取るを得ず (三) 造化の無盡藏にして、吾と君と共に心に適する所なり (四) 酒のさかな(核は桃梅の類) (五) 雜り亂れ (六) よりかゝりて寐ぬ

是歲十月之望。步自雪堂。將歸于臨皐。二客從予。過黃泥之坂。霜露既降。木葉盡脫。人影在

後赤壁の賦

蘇子瞻

(一)是歲十月の望、(二)雪堂より歩して將に臨皐に歸らんとす。(三)二客予に從つて黃泥の坂に過ぎる。霜露既に降り、木葉盡く脫し、(四)人影地に在り。仰いで明月を見、顧みて之を樂み、行く〃歌ひて相答ふ。已にして歎じて(五)曰く、客あれども酒なし、酒あれども肴なし。月白く風淸し。(六)此の良夜を如何せんと。客曰く、今者薄暮に網

固一世之雄也。而今安在哉。況吾與レ子。漁二樵於江渚之上一。侶二魚鰕一而友二麋鹿一。駕二一葉之輕舟一。擧二匏樽一以相屬。寄二蜉蝣於天地一。渺滄海之一粟。哀二吾生也須臾一。羨二長江之無レ窮。挾二飛仙一以遨遊。抱二明月一而長終。知レ不レ可二乎驟得一。託二遺響於悲風一。蘇子曰。客亦知二夫水與レ月乎。

何ぞ羨まんや。且つ夫れ天地の間には、物各々主あり。苟も吾の有する所に非ざれば、一毫と雖も取る莫し。(二一)惟江上の清風と山間の明月とのみ。耳之を得て聲を爲し。月之に遇うて色を成す。之を取れども禁ずる無く、之を用ふれども竭きず。是れ造物者の無盡藏にして、(二二)而も吾と子との共に適する所なりと。客喜んで笑ひ、盞を洗うて更に酌む。肴核既に盡きて、(二三)杯盤狼藉たり。(二四)相與に舟中に枕藉して、(二五)東方の既に白くるを知らず。

(一) 尺八に似たる笛の一種 (二) むせぶ貌 (三) 長く曳きて (四) 深谷に潛れたるみづち(角なき龍)をも舞はしめ、孤舟に住むよるべなき寡婦をも泣かしむ (五) 色を變じ、端坐して (六) 魏の曹操字は孟德 (七) 靑々としたり (八) 吳の孫權の臣、周瑜 (九) 曹操、劉表を伐つて荊州を取り、進んで江陵に劉備を追ひ、赤壁を流に從つて東する時 (一〇) 水軍の舟、千里につゞき、はたの影天を蔽ふ程なりき (一一) はこ (一二) 月明に星稀にの詩 (一三) 酒器(匏はふくべ) (一四) 人生のはかなきこと、蜉蝣(朝に生し暮に死する小蟲)の天地に飛ぶが如く、又粟粒に大海に浮ぶ如し (一五) しばらく (一六) 神仙と共に樂み遊び、明月を守つて長生せんことは、人力の能くし得べきにあらず (一七) 曹操の詩の遺響を傳へ、悲みを笛に吹き込みたるなり (一八) 水は晝夜流るゝも、終に流れ盡すことなく、月は常に盈虛(或はみち或はかけ)するも終に本體を變ふることなし (一九) 宇宙間一瞬も變化せざるものなし

之潛蛟｡泣二孤之嫠婦一｡蘇子愀然正レ襟｡危坐而問レ客曰｡何爲其然也｡客曰｡月明星稀｡烏鵲南飛｡此非二曹孟德之詩一乎｡西望二夏口一｡東望二武昌一｡山川相繆｡鬱乎蒼蒼｡此非下曹孟德之困二於周郎一者上乎｡方下其破二荊州一｡下二江陵一｡順レ流而東上也｡舳艫千里｡旌旗蔽レ空｡釃レ酒臨レ江｡橫レ槊賦レ詩｡

南に飛ぶと。此れ曹孟德(六)の詩に非ずや。西夏口を望み東武昌を望めば、山川相繆うて鬱乎として蒼蒼(七)たり。此れ曹孟德の周郎(八)に困められしところに非ずや。其の荊州を破りて江陵(九)より下り、流に順うて東するに方つては、舳艫(一〇)千里、旌旗空を蔽ふ。酒を釃んで江に臨み、槊(一一)を橫へて詩を賦す(一二)。固に一世の雄なり。而して今安にか在るや。況や吾と子と江渚の上に漁樵し、魚鰕を侶とし麋鹿を友とし、一葉の輕舟に駕して、匏樽(一三)を舉げて以て相屬す。蜉蝣(一四)を天地に寄す。渺たる滄海の一粟。吾が生の須臾(一五)なるを哀み、長江の窮なきを羨む。飛仙(一六)を挾んで以て遨遊し、明月を抱いて長へに終へんことは、驟に得べからざるを知り、遺響(一七)を悲風に託すと。蘇子曰く、客も亦夫の水と月とを知るか。逝く(一八)者は斯の如くなれども未だ嘗て往かず。盈虛する者は彼が如くなれども、卒に消長することも莫し、蓋し將に其の變ずる者よりして之を觀れば、則ち天地も曾て以て一瞬(一九)なる能はず。其の變ぜざる者よりして之を觀れば、則ち物(二〇)と我と皆盡る無きなり。而して又

上二。徘二徊於斗牛之間一。白露橫レ江。水光接レ天。縱二一葦之所一レ如。凌二萬頃之茫然一。浩浩乎如下馮レ虛御レ風而不上レ知二其所一レ止。飄飄乎如二遺レ世獨立羽化而登仙一。

於レ是飲レ酒樂甚。扣レ舷而歌レ之。歌曰。桂櫂兮蘭槳。擊二空明一兮泝二流光一。渺渺兮予懷。望二美人兮天一方一。

桂の櫂蘭の槳、空明に擊して(一一)流光を泝る(一二)。渺渺として(一三)予が懷ひ、美人を天の(一四)一方に望むと。

(一)宋の元豐四年に當たる　(二)十六日　(三)宋の蘇軾、字は子瞻。東坡居士と號す、蘇洵字は明允の子なり　(四)揚子江岸、黃州府城の西、漢川門外に屹立する山、斷崖壁の如く、赤色を帶ぶ　(五)酒杯をあげて友にさし　(六)古の詩の陳風月出を吟じ、窈窕美人の歌をうたふ　(七)東南の空なる斗星牛星の間に上らんとす　(八)一小舟の流れ行くに任せ、限りなく廣き波上を進む　(九)ひろ〲として、空に浮び風に乘り、何處ともなく去るが如く　(一〇)飛んで世を離れ、獨り萬物の外に立ち、羽生じて仙人に化するが如し　(一一)底澄みて、月水中にある所　(一二)月光の碎くる所　(一三)はるかに　(一四)天の一方なる都にまします天子を思ふ

客有下吹二洞簫一者上。倚レ歌而和レ之。其聲嗚嗚然。如レ怨如レ慕。如レ泣如レ訴。餘音嫋嫋。不レ絕如レ縷。舞二幽壑

客に洞簫を吹く者あり。歌に倚つて之に和す。其の聲嗚嗚然として(一)、怨むが如く慕ふが如く(二)、泣くが如く訴ふるが如く、餘音嫋嫋として(三)、絕えざること縷の如し。幽壑(四)の潛蛟を舞はし、孤舟の嫠婦を泣かしむ。蘇子愀然として(五)襟を正し、危坐して客に問うて曰く、何爲れぞ其れ然るやと。客曰く、月明かに星稀にして、烏鵲

爲レ心。夫之於レ物。春生秋實。故其在レ樂也。商聲主二西方之音一。夷則爲二七月之律一。商傷也。物既老而悲傷。夷戮也。物過レ盛而當レ殺。嗟夫艸木無レ情。有レ時飄零。人爲二動物一。惟物之靈。百憂感二其心一。萬事勞二其形一。有レ動二乎中一。必搖二其精一。而況思二其力之所レ不レ及。憂二其智之所レ不レ能。宜其渥然丹者爲二槁木一。黟然黑者爲二星星一。奈何非二金石之質一。欲下與二艸木一而爭上レ榮。念誰爲二之戕賊一。亦何恨二乎秋聲一。童子莫レ對。垂レ頭而睡。但聞下四壁蟲聲唧唧。如中助二予之歎息上。

壬戌之秋。七月既望。蘇子與レ客泛レ舟。遊二於赤壁之下一。清風徐來。水波不レ興。擧レ酒屬レ客誦二明月之詩一。歌二窈窕之章一。少焉。月出二於東山之

前赤壁の賦（一）　蘇子瞻

（一）壬戌の秋、七月（二）既望、（三）蘇子客と舟を泛べて、（四）赤壁の下に遊ぶ。清風徐に来り、水波興らず。（五）酒を擧げて客に屬し、明月の詩を誦し、（六）窈窕の章を歌ふ。少焉にして月は東山の上に出で、（七）斗牛の間に徘徊す。白露江に横はり、水光天に接す。（八）一葦の如く所に縱にして、（九）萬頃の茫然たるを凌ぎ、浩浩乎として虛に馮り風に御して其の止る所を知らざるが如く、（一〇）飄飄乎として世を遺れて獨立し、羽化して登仙するが如し。是に於て酒を飲んで樂むこと甚し。舷を扣いて之を歌ふ。歌に曰く、

日晶。其氣慄冽。砭二人肌骨一。其意蕭條。山川寂寥。故其爲レ聲也。淒淒切切。呼號奮發。豐艸綠縟而爭レ茂。佳木葱蘢而可レ悅。艸拂レ之而色變。木遭レ之而葉脫。其所三以摧敗零落一者。乃一氣之餘烈。夫秋刑官也。於レ時爲レ陰。又兵象也。於レ行爲レ金。是謂二天地之義氣一。當以二肅殺一而

す。(二一)中に動くあれば、必ず其の情を搖す。而も況んや其の力の及ばざる所を思ひ、其の智の能はざる所を憂ふるをや。宜なり其の渥然として丹きものは槁木となり。(二二)黟然として黑きものは星星となる。(二三)奈何ぞ金石の質に非ずして、艸木と榮を爭はんと欲せんや。念ふに誰か之を戕賊することをする。(二四)亦何ぞ秋の聲を恨みんやと。童子對ふる莫くして、頭を垂れて睡れり。但四壁の蟲聲唧唧として(二五)予が歎息を助くるが如きを聞くのみ。

(一)永叔自らいふ (二)驚き懼れ (三)風の聲の淋しき貌 (四)忽にして躍り上る如く、又、水の石に激する如く (五)金玉の聲 (六)口にふくみて聲を禁ずる板 (七)天の川 (八)いたましく (九)煙散り、雲斂れ、空澄みわたる (一〇)その氣鋭く、人の骨肉に徹す (一一)すごく身に泌みて鳴り呼ぶ (一二)綠に茂る (一三)秋風 (一四)はげしき秋風の餘勢 (一五)周禮に春夏秋冬の四官あり、秋官の長は司寇にして刑罰を司る (一六)生物を害ふ故に (一七)春は柔にして仁にあたり、秋は堅くして義にあたる (一八)五音の一 (一九)十二律の一 (二〇)ころす (二一)內に刺激あれば精神必ず動く (二二)紅顏の少年もいつしか老いて枯木の如く (二三)漆黑なりし髮もいつしか化して白髮となる (二四)人の生を損ふものは誰ぞ皆これ天命なり (二五)蟲の繁き貌

觸二於物一也。鏦鏦錚錚。金鐵皆鳴。又如下赴レ敵之兵。銜レ枚疾走。不レ聞二號令。但聞中人馬之行聲上。予謂二童子一。此何聲也。汝出視レ之。童子曰。星月皓潔。明河在レ天。四無二人聲一。聲在二樹間一。予曰。噫嘻悲哉。此秋聲也。胡爲乎來哉。蓋夫秋之爲レ狀也。其色慘淡。煙霏雲斂。其容淸明。天高

と。童子曰く、星月皓潔として、明河(七)天に在り、四に人聲なし。聲は樹間に在りと。予曰く、噫嘻悲いかな、此れ秋の聲なり。胡爲れぞ來れるや。蓋し夫れ秋の狀たる。其の色慘淡(八)として煙霏(九)び雲斂まる。其の容淸明にして、天高く日晶かなり。其の氣慄冽(一〇)、人の肌骨に砭す。其の意蕭條として、山川寂寥たり。故に其の聲たるや。凄凄切切(一一)として、呼號奮發す。豐艸綠縟(一二)として茂を爭ひ、佳木蔥籠として悅ぶべきも、艸(一三)之に拂はれて色變り、木之に遭うて葉脫す。其の摧敗零落する所以のものは、乃ち一氣(一四)の餘烈なり。夫れ秋は刑官(一五)なり、時に於ては陰たり。又兵の象(一六)なり。行に於ては金たり。是れを天地の義氣(一七)と謂ひ、常に肅殺を以て心と爲す。天の物に於けるや春は生じ、秋は實らしめ、故に其の樂に在るや、商聲(一八)は西方の音を司り、夷則(一九)は七月の律たり。商は傷なり。物既に老いて悲傷す。夷(二〇)は戮なり。物盛を過ぎては當に殺すべし。嗟夫れ艸木の情なきも、時あつて飄零す。人は動物たり。惟れ物の靈なり。百憂其の心を感ぜしめ、萬事其の形を勞

卒叫。函谷擧。楚人一炬。可憐焦土。嗚呼。滅六國者六國也。非秦也。族秦者秦也。非天下也。嗟夫使六國各愛其人。則足以拒秦。秦復愛六國之人。則遞三世。可至萬世而爲君。誰得而族滅也。秦人不暇自哀。而後人哀之。後人哀之。而不鑑之。亦使後人而復哀後人也。

めく (五)穀倉 (六)瓦の葺合せの交叉するは着たる衣服の縫目より多し (七)天下九州 (八)聲の盛なる貌 (九)獨夫に同じ、始皇帝を卑みていふ (一〇)戍卒陳勝、まづ軍を起し、漢王の義兵を擧げて函谷關を拔く (一一)楚人項羽の一炬火のために、秦宮忽ち焦土と化せり (一二)秦王の一族を亡ぼせしもの (一三)臣民 (一四)後人之に鑑みて愼まざれば (一五)また忽ち亡び、後人のために悼まるべし

秋聲の賦

歐陽永叔

歐陽子方夜讀書。聞有聲自西南來者。悚然而聽之。曰異哉。初淅瀝以蕭颯。忽奔騰而砰湃。如波濤夜驚。風雨驟至。其

歐陽子(一)夜に方つて書を讀む。聞くに聲の西南より來れる者あり。(二)悚然として之を聽いて曰く、異いかな。初め淅瀝として以て(三)蕭颯たり。忽ち(四)奔騰して砰湃たり。波濤の夜、驚き、風雨の驟に至るが如し。其の物に觸るゝや、(五)鏦鏦錚錚として、金鐵皆鳴る。又敵に赴くの兵の(六)枚を銜んで疾く走り、號令を聞かずして但人馬の行く聲のみを聞くが如し。予童子に謂へらく、此れ何の聲ぞや。汝出でて之を視よ

家。奈何取之盡錙銖、用之如泥沙。使負棟之柱。多於南畝之農夫。架梁之椽。多於機上之工女。釘頭磷磷。多於在庾之粟粒。瓦縫參差。多於周身之帛縷。直欄橫檻。多於九土之城郭。管絃嘔啞。多於市人之言語。使天下之人。不敢言而敢怒。獨夫之心。日益驕固。戍

は南畝の農夫より多く、梁に架するの椽は、(三)機上の工女より多く、釘頭の磷磷たるは、(五)庾に在るの粟粒より多く、(六)瓦縫の參差たるは周身の帛縷より多く、直欄橫檻は、(七)九土の城郭より多く、(八)管絃の嘔啞たるは、市人の言語より多からしめ、天下の人をして、敢て言はずして敢て怒らしむ。(九)獨夫の心、日に益々驕固なりしも、(一〇)戍卒叫んで函谷擧き、(一一)楚人の一炬に、憐むべし焦土となりぬ。嗚呼、六國を滅せし者は六國なり。秦に非ざるなり。(一二)秦を族せし者は秦なり。天下に非ざるなり。嗟いかな六國をして各々其の人を愛せしめば、則ち以て秦を拒ぐに足りしならん。秦も復た六國の人を愛せば、(一三)則ち遞に三世より萬世に至るまで君たるべかりしならん。誰か得て族滅せんや。秦人自ら哀むに暇あらず。而して後の人之を哀む。後の人之を哀んで之を鑑みずんば、(一四)亦後の人をして復た後の人を(一五)哀ましめん。

(一)皇帝一人の心は民衆千萬人を感化す　(二)民に税を課すること、毫毛も遺さず　(三)たるき　(四)點々とさら

于秦。朝歌夜絃。為秦宮人。明星熒熒。開粧鏡也。綠雲擾擾。梳曉鬟也。渭流漲膩。棄脂水也。煙斜霧橫。焚椒蘭也。雷霆乍驚。宮車過也。轆轆遠聽。杳不知其所之也。一肌一容。盡態極妍。縵立遠視而望幸焉。有不得見者。三十六年。燕趙之收藏。韓魏之經營。齊楚之精英。幾世幾年。取掠其人。倚疊如山。一旦有不能輸來其間。鼎鐺玉石。金塊珠礫。棄擲邐迤。秦人視之。亦不甚惜。

萬人を坐せしむべく、下には五丈の旗を建つべかりしと云ふ（二）韓魏燕趙斉楚の六國亡び、天下秦に統一せらる（三）蜀山の樹木伐り盡されて禿山となり、阿房宮建築せらる（四）地域三百餘里に亘り、宮殿高くして日を遮る（五）宮は驪山の北より起りて西に折れ、直に咸陽に到り（六）渭水涇水、緩流して宮に入り、その外濠となる（七）のきの角、鳥の啄む如く、高く尖り曲る（八）屋根の中心、湊りて鈎の如く見ゆる所（九）のきの角、湊りて闘ふ如く見ゆる所（一〇）めぐり〳〵、曲り曲る（一一）雨垂受に歛きたる瓦は、蜂の巣の如く、雨溜桶に落ちて渦卷く水は直下幾千萬萬條なるを知らず（一二）阿房より咸陽に通ずる長橋（一三）阿房より南山に至る高架廊下（一四）宮中廣く、高低一ならず、東西をも辨じ難し（一五）春ののどかなるに似たり（一六）風雨のすさまじきに似たり、（一七）妃より以下、多くの宮女（一八）きら〳〵と輝く（一九）化粧のかゞみ（二〇）亂るゝ貌（二一）脂粉を洗ひし水（二二）椒蘭の香（二三）車の轔る聲（二四）始皇在位の年數（二五）六國の蓄へたる美女の粹（二六）多數集りたる意（二七）到底一時に收容するを得ざりしならん（二八）音通のなべ（二九）多くつゞく貌

嗟乎。一人之心。千萬人之心也。秦愛紛奢。人亦念其

嗟乎、一人の心は、千萬人の心なり、秦紛奢を愛すれば、人亦其の家を念ふ。奈何ぞ之を取ること錙銖を盡して、之を用ふること泥沙の如くなる。棟を負ふの柱

腰縵廻。簷牙高啄。各抱地勢、鉤心鬪角。盤盤焉。囷囷焉。蜂房水渦。矗不知其幾千萬落。長橋臥波。未雲何龍。複道行空。不霽何虹。高低冥迷。不知西東。歌臺暖響。春光融融。舞殿冷袖。風雨淒淒。一日之內。一宮之間。而氣候不齊。妃嬪媵嬙。王子皇孫。辭樓下殿。輦來

光融融たり。舞殿の冷袖は、風雨淒淒たり。一日の内、一宮の間にして、氣候齊しからず。妃嬪媵嬙、王子皇孫、樓を辭し殿を下り、輦して秦に來り。朝歌夜絃して秦の宮人と爲る。明星の熒熒たるは、粧鏡を開けるなり。綠雲の擾擾したるは曉鬟を梳るなり。渭流の膩を漲らすは、脂水を棄つるなり。煙斜に霧橫はるは、椒蘭を焚くなり。雷霆の乍ち驚くは宮車の過ぐるなり。轆轆として遠く聽え、杳にして其の之く所を知らず。一肌一容、態を盡し妍を極め、縵く立ち遠く視て幸を望めども、見ゆることを得ざるあるもの三十六年。燕趙の收藏、韓魏の經營、齊楚の精英。幾世幾年にして、其の人を取掠して、倚疊して山の如し、一旦には其の間に輸來する能はざるあらん。鼎は鐺のごとく、玉は石のごとく、金は塊のごとく、珠は礫のごとく、棄擲して邐迤たるも、秦人之を見て亦甚だ惜まず。

(一) 秦の始皇帝、即位の三十五年、渭南の上林苑中に造りし朝宮の前殿にして、東西五百歩、南北五十丈、上には

貴聖之神德兮。遠二濁世一而自藏。使三騏驥可二係而羈一兮。豈云レ異二夫犬羊一。般紛紛其離二此郵一兮。亦夫子之故也。歷二九州一而相二其君一兮。何必懷二此都一也。鳳凰翔二于千仞一兮。覽二德輝一而下レ之。見二細德之險徵一兮。遙增擊而去レ之。彼尋常之汙瀆兮。豈容二吞舟之魚一。橫二江湖一之鱣鯨兮。固將レ制二於螻蟻一。

險の氣あるを見れば去る　（二〇）尋常の溝水は、呑舟の大魚を入るゝを得ず　（二一）ふかくぢらの類も、所を失へばありけら等に殺さるとなり

六王畢。四海一。蜀山兀。阿房出。覆二壓三百餘里一。隔二離天日一。驪山北構而西折。直走二咸陽一。二川溶溶。流入二宮墻一。五步一樓。十步一閣。廊

阿房宮の賦（一）

杜牧之

（二）六王畢つて四海一なり。（三）蜀山兀として阿房出づ。（四）三百餘里を覆壓して、天日を隔離す。（五）驪山北に構へて西に折れ、直に咸陽に走く。（六）二川溶溶として流れて宮墻に入る。五步に一樓、十步に一閣。廊腰縵く廻つて、（七）簷牙高く啄めり。各〻地勢を抱く。（八）鉤心（九）鬪角、盤盤焉たり。（一〇）囷囷焉たり。（一一）蜂房水渦、矗として其幾千萬落なるを知らず。（一二）長橋の波に臥せるは、未だ雲あらざるに何の龍ぞ。（一三）複道の空を行けるは、霽れざるに何の虹ぞ。（一四）高低冥迷として、西東を知らず。歌臺の暖響は、春

棄周鼎。寶康瓠兮。騰駕罷牛。驂蹇驢兮。驥垂兩耳。服鹽車兮。章甫薦屨。漸不可久兮。嗟苦先生。獨離此咎兮。誶曰。已矣。國其莫吾知兮。子獨壹鬱其誰語。鳳縹縹其高逝兮。夫固自引而遠去。襲九淵之神龍兮。沕淵潛以自珍。偭蟂獺以隱處兮。夫豈從蝦與蛭螾。所

しめば、豈夫の犬羊に異なりと云はんや。般つて紛紛（二三）として其れ此の郵に離へり。亦夫子の故なり。九州（二四）を歴て其の君を相けば、何ぞ必ずしも此の都を懐はんや。鳳凰は千仭に翔り、徳輝（二五）を覧て之に下る。細徳の險徴を見ては、撃を遥増して之を去る。彼の尋常（二六）の汙瀆、豈呑舟の魚を容れんや。江湖に横はるの鱣鯨（二七）、固に將に螻蟻に制せられんとせり。

（一）賈誼、漢の文帝に信任せられしも、後讒を得、謫せられて長沙王の太傅となりしをいふ、嘉惠は勅命の意　（二）楚辭に詳し　（三）弔文を湘水に寄せ流し　（四）屈原、不正の世に遭ひ　（五）賢人退けられ小人時を得る意、鸞鳳は靈鳥、鴟（とび）梟（ふくろふ）は惡鳥也　（六）不才不肖の人　（七）聖賢、順境に立つを得ず、方正の士も、危きこと倒に立つが如し　（八）卞隨伯夷の如き清士　（九）盜跖莊蹻の如き大盜　（一〇）名劍の名　（一一）鉛刀を銳しとなす　（一二）自得せざる貌　（一三）屈原は意を得ずして故なく禍に逢へり　（一四）周代の寶鼎を棄て、土器のふくべを貴む如く　（一五）疲れたる牛に駕し、あしなへの驢をそへうまにする如く　（一六）駿馬耳を垂れ、鹽を積める車を引き、章甫（冠の名）履となりて穿かるゝ如く、條理すべて顚倒せり　（一七）久しく續くべからざる世に、先生ひとりこの咎に逢へり　（一八）歌ひ終りて更に告ぐる辭、楚辭の亂に同じ　（一九）屈原の語　（二〇）遠く飛び去り　（二一）もぐり　かわうその類と雜居せず、又、ひる、みゝずの類に從はず　（二二）尊重す　（二三）屈原の心、濁れる楚國を慕ひの意、紛々は思亂るゝ貌　（二四）楚を棄て、廣き九州を歴遊し、明君を得て之を輔けば　（二五）聖德の光ある地に下り、險

恭承二嘉惠一兮。竢二罪長沙一。仄聞屈原兮自湛二汨羅一。造托二湘流一兮。敬弔二先生一。遭二世罔レ極兮迺隕二其身一。烏虖哀哉兮。逢二時不祥一。鸞鳳伏竄兮。鴟鴞翺翔。闒茸尊顯兮。讒諛得レ志。賢聖逆曳兮。方正倒植。謂二隨夷溷一兮。謂二跖蹻廉一。莫邪爲レ鈍兮。鉛刀爲レ銛。于嗟。默默生之亡レ故兮。斡二

恭しく嘉惠(一)を承けて、罪を長沙に竢つ(二)。仄に聞く屈原は、自ら汨羅に湛めりと。造つて(三)湘流に托して、敬んで先生を弔ふ。世の極罔きに遭ひて、廼ち其の身を隕せり。烏虖哀いかな。時の(四)不祥なるに逢へり。(五)鸞鳳伏し竄れて、鴟鴞翺翔し、(六)闒茸尊顯せられて、讒諛志を得たり。(七)賢聖逆に曳かれて、方正倒に植てり。(八)隨夷を溷れりと謂ひ、(九)跖蹻を廉なりと謂ひ、(一〇)莫邪を鈍なりと爲し、鉛刀(一一)を銛なりと爲す。于嗟默默(一二)たり生の故(一三)亡きこと。(一四)周の鼎を斡棄し、康瓠を寶とし、(一五)罷牛に驂駕して、蹇驢を驂にし、驥(一六)は兩耳を垂れて鹽車に服き、章甫を履に薦く。(一七)漸く久しかるべからず。嗟苦先生獨り此の咎に離へり。(一八)誶に曰く、已ぬるかな。(一九)國其れ吾を知る莫し。子獨り壹鬱として其れ誰にか語らん。鳳縹縹として其れ高く逝く。夫れ固に自ら引いて遠く去る、九淵を襲ぬるの神龍、沕として淵く(二〇)潛れて以て自ら珍とし、(二一)蟂獺に偭いて以の隱處す。夫れ豈蝦と蛭螾とに從はんや。貴ぶ所は聖の神德なり。濁世に遠かりて自ら臧る。麒麟をして係いで(二二)羈すべから

游。世與ㇾ我而相遺。復駕言兮焉求。悅ニ親戚之情話一、樂ニ琴書一以消ㇾ憂。農人告ㇾ余以ニ春及一。將ㇾ有ㇾ事ニ于西疇一。或命ニ巾車一或棹ニ孤舟一。既窈窕以尋ㇾ壑。亦崎嶇而經ㇾ丘。木欣欣以向ㇾ榮。泉涓涓而始流。善ニ萬物之得一ㇾ時。感ニ吾生之行休一。已矣乎。寓ニ形宇内一、復幾時。曷不ニ委ㇾ心任ニ去留一。胡爲乎遑遑欲ニ何之一。富貴非ニ吾願一。帝鄕不ㇾ可ㇾ期。懷ニ良辰一以孤往。或植ㇾ杖而耘耔。登ニ東皐一以舒嘯。臨ニ清流一而賦ㇾ詩。聊乘ㇾ化以歸ㇾ盡。樂ニ夫天命一復奚疑。

巳往の事は如何ともしがたきも、將來の事には注意し得らる　(十)方向を誤りしも、なほ深く迷ひしにはあらず　(十一)故郷柴桑里に歸る舟　(十二)旅人に前途の里程を問ひ、日の將に暮れんとするを恨む　(十三)我が家を見ての意、(十四)衡はかぶき門　(十五)幼兒　(十六)庭園内の小道　(十七)つぼさかづき　(十八)庭木　(十九)南窓によりて樂み　(二〇)膝を容るゝだけの狹き家も田舍住の心安さを知るとの意　(二一)休憩し　(二二)首を擧げて眺む　(二三)山頂の谷　(二四)飛び疲れ、時に歸ることを知る　(二五)日のかげる貌　(二六)立ち去り難き貌　(二七)人との交際を絶つべし　(二八)樂官を得、車駕を驅することは　(二九)余に春の來れるを告げ　(三〇)共に西田を耕さんとす　(三一)或は深くして長き谷に沿ひ、或は險岨なる丘を越ゆ　(三二)流れの漸く滿ちたる貌　(三三)昔は行き、今は止る（我生涯の今昔を感ずの意）　(三四)この世にあるも幾何時ぞ　(三五)思ふまゝに遊び、心に任せて去留せん　(三六)忙しき貌　(三七)天帝の傍に行くこと、或は帝都に住み榮華を得んとの意にても遂げざるが如し　(三八)よき日を樂み　(三九)草を除き、本をす　(四〇)東のつゝみ　(四一)天運に任せ命數の盡くるまゝにせん

賦類

屈原（くつげん）を弔（とむら）ふ賦（ふ）

賈誼

子候門。三徑就荒。松菊猶存。携幼入室。有酒盈樽。引壺觴以自酌。眄庭柯以怡顏。倚南牕以寄傲。審容膝之易安。園日涉以成趣。門雖設而常關。策扶老以流憩。時矯首而游觀。雲無心以出岫。鳥倦飛而知還。景翳翳以將入。撫孤松而盤桓。歸去來兮。請息交以絕

で還るを知る。景翳翳として以て將に入らんとし、孤松を撫して盤桓(一九)す。歸りなんいざ。請ふ交を息めて以て游を絕たん(二〇)。世と我と相遺る。復た駕するは言(二一)焉ぞ求めん。親戚の情話を悅び、琴書を樂んで以て憂を消す。農人余に告ぐる(二二)に春の及べるを以てし、將に西疇(二三)に事あらんとす。或は巾車に命じて、或は孤舟に棹す。既に窈窕(二四)として以て壑を尋ね、亦崎嶇として丘を經。木欣欣として以て榮に向ひ、泉涓涓(二五)として始めて流る。萬物の時を得たるを善とし、吾が生の行休(二六)を感ず。已ぬるかな。形を宇内に寓する。復た幾時ぞ(二七)。曷ぞ心を委して去留に任(二八)ぜざる。胡爲れぞ遑遑(二九)として何之を欲する。富貴は吾が願に非ず、帝鄕は期(三〇)すべからず。良辰を懷うて以て孤往き、或は杖を植てて耘耔(三一)す。東皐(三二)に登つて以て舒に嘯き(三三)、淸流に臨んで詩を賦す。聊か化に乘じて以て盡くる(三四)に歸せん。夫の天命を樂んで復た奚をか疑はん。

(一) 陶淵明、彭澤縣の令を辭し、歸鄕する時の作　(二) 心を形の奴隸とす（官吏となり身のために心を苦む）　(三)

歸去來兮。田園將ㇾ蕪。胡不ㇾ歸。既自以ㇾ心爲ニ形役一。奚惆悵而獨悲。悟ニ已往之不一ㇾ諫。知ニ來者之可一ㇾ追。實迷ㇾ塗其未ㇾ遠。覺ニ今是而昨非一。舟搖搖以輕颺。風飄飄而吹ㇾ衣。問ニ征夫一以ニ前路一。恨ニ晨光之熹微一。乃瞻ニ衡宇一。載欣載奔。僮僕歡迎。稚

歸去來の辭（一）

陶淵明

歸りなんいざ。田園將に蕪れんとせり。胡ぞ歸らざる。既に自ら心を以て形（二）の役となす。奚ぞ惆悵して獨う悲まん。（三）已往の諫むまじきを悟り、來者の追ふべきを知る。實に塗に迷うて其れ未だ遠からず。（四）今の是にして昨の非なるを覺る。（五）船搖搖として以て輕く颺り、風飄飄として衣を吹く。（六）征夫に問ふに前路を以てし、晨光の熹微なるを恨む。（七）乃ち衡宇を瞻て、載ち欣び載ち奔る。僮僕歡び迎へ、（八）稚子門に候つ。（九）三徑荒に就き、松菊猶ほ存す。幼を攜へて室に入れば、酒あり樽に盈てり。（一〇）壺觴を引いて以て自ら酌み、（一一）庭柯を眄みて以て顏を怡ばしむ。（一二）南牕に倚つて以て寄傲し、（一三）膝を容るゝの安んじ易きを審にす。園日に渉つて以て趣を成し、門設けたりと雖も、常に關せり。策老を扶けて以て流（一四）憩し、時に首を矯げて游觀す。（一五）雲は無心にして以て岫を出で、（一六）鳥は飛ぶに倦ん（一七）

原曰。舉世皆濁。我獨清。衆人皆醉。我獨醒。是以見放。漁父曰。聖人不凝滯於物。而能與世推移。世人皆濁。何不淈其泥。而揚其波。衆人皆醉。何不餔其糟而歠其醨。何故深思高舉。自令放爲。屈原曰。吾聞之。新沐者必彈冠。新浴者必振衣。安能以身之察察受物之汶汶者乎。寧赴湘流。葬於江魚之腹中。安能以皓皓之白。而蒙世俗之塵埃乎。漁父莞爾而笑。鼓枻而去。乃歌曰。滄浪之水清兮。可以濯吾纓。滄浪之水濁兮。可以濯吾足。遂去不復與言。

を飾うて其の醨を歠らざる。何が故に深く思ひ高く舉りて、自ら放たるゝことを爲せること。屈原曰く、吾之を聞く新に沐する者は必ず冠を彈き、新に浴する者は必ず衣を振ふと。安んぞ能く身の察察たるを以て、物の汶汶たる者を受けんや。寧ろ湘流に赴いて江魚の腹中に葬らるゝとも、安んぞ能く皓皓の白きを以て世俗の塵埃を蒙らんやと。漁父莞爾として笑ひ、枻を鼓して去る。乃ち歌うて曰く、滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯ふべし。滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふべしと。遂に去つて復た與に言はず。

(一) 楚辭に出でたるを以て註を略す

兮不レ能レ忘。泛二樓[illegible]一兮濟二汾河一。橫二中流一兮揚二素波一。簫鼓鳴兮發二棹歌一。歡樂極兮哀情多。少壯幾時兮奈レ老何。

時ぞ老を奈何せん。(七)

(一) 淮南子に「薺は秋分にして北し麥は秋分にして甫す」 (二) 本草綱目芳草類に「春芳しきものを春蘭となし、色深し、秋芳しきものを秋蘭となし、色淡し」 (三) 良臣なり (四) 三層の樓を設け、網綾旗幟を立て列ねたる船 (五) 白波 (六) 船歌をうたふ (七) 草木の凋み衰ふる如く、人の老ゆるを如何にせんか

屈原既放。游二於江潭一。行吟二澤畔一。顏色憔悴。形容枯槁。漁父見而問レ之曰。子非二三閭大夫一與。何故至二於斯一。屈

漁父の辭　屈平

屈原既に放たれて江潭に游ぶ。行〻澤畔に吟ふ。顏色憔悴して形容枯槁せり。漁父見て之に問うて曰く、子は三閭大夫に非ずや。何が故に斯に至れるかと。屈原曰く、世を擧げて皆濁り、我獨り清めり。衆人皆醉ひ、我獨り醒めたり。是れを以て放たれたりと。漁父曰く、聖人は物に凝滯せず。能く世と推し移る。世人皆濁らば、何ぞ其の泥を淈して其の波を揚げざる。衆人皆醉はば、何ぞ其の糟

辭類

秋風の辭

漢武帝

上行㆓幸河東㆒。祠㆓后土㆒。顧㆓視帝京㆒欣然。中流與㆓羣臣㆒飲燕。上歡甚。乃自作㆓秋風辭㆒曰。

秋風起兮白雲飛。艸木黃落兮雁南歸。蘭有㆑秀兮菊有㆑芳。懷㆓佳人㆒

(一)上(二)河東に行幸して(三)后土を祠る。(四)帝京を顧視して欣然たり。(五)中流にして羣臣と(六)飲燕す。上歡ぶこと甚し。乃ち自ら秋風の辭を作つて曰く。(七)

(一)天子の尊稱、こゝにては武帝をいふ　(二)黃河の東、河東郡汾陰　(三)地神　(四)長安　(五)汾水の　(六)宴に同じ　(七)時に元朔四年十月なり

秋風起つて白雲飛び、艸木黃ばみ落ちて(一)雁南に歸く。(二)蘭に秀でたるあり、菊に芳しきあり。(三)佳人を思うて忘るゝ能はず。(四)樓船を泛べて汾河を濟り。中流に橫へて(五)素波を揚げ、簫鼓鳴つて(六)棹歌を發す。歡樂極つて哀情多し。小壯なるは幾

姑蘇臺上烏棲時、吳王宮裏醉二西施一。吳歌楚舞歡未レ畢。青山猶衘半邊日。銀箭金壺漏水多。起看三秋月墜二江波一。東方漸高奈レ爾何。

姑蘇臺上烏棲む時、吳王宮裏西施を醉はしむ。吳歌楚舞歡未だ畢らず、青山猶ほ衘む、半邊の日、銀箭金壺漏水多し、起つて秋月の江波に墮つるを看る。東方漸く高けぬ爾を奈何せん。

(一)吳王夫差が建てし高臺　(二)越王の獻ぜし美女　(三)時刻を報ずる器なり、其製作によりて此の名あり　(四)歡樂極つて哀傷多き意を述ぶ、高一に皐に作る

不レ識黄雲出塞路。豈知此聲能斷レ腸。

十月北風燕草黄。燕人馬肥弓力強。虎皮裁レ鞍鵰羽箭。射二殺山陰雙白狼一。青氈帳高雪不レ濕。擊レ鼓傳レ觴令行急。戎王半酔擁二貂裘一。昭君猶抱二琵琶一泣。

塞上の曲　　黄魯直

十月北風燕草(一)黄なり、燕人馬肥えて弓力強し。虎皮(二)は鞍を裁し鵰羽は箭とし、(三)山陰の雙白狼を射殺す。青氈帳高うして雪濕はず、鼓を擊ち觴を傳へて令行急なり。(四)戎王半ば酔うて貂裘を擁し、昭君は猶ほ琵琶を抱いて泣く。

(一)胡地の草を指す、燕は支那の東北隅なり　(二)鞍は虎皮にて作り、箭は鵰鷲の羽にて矧ぐ　(三)山かげの二疋の白狼　(四)匈奴の單于はてんの皮衣を着て眠らんとす

烏棲の曲　　李太白

胡人以ニ鞍馬一。爲レ家。射獵爲レ俗。泉甘草美無ニ常處一。鳥驚獸駭爭馳逐。誰將ニ漢女一嫁ニ胡兒一。風沙無情面如レ玉。身行不レ過ニ中國人一。馬上自作ニ思歸曲一。推レ手爲レ琵卻レ手琶。胡人共聽亦咨嗟。玉顏流落死ニ天涯一。琵琶卻傳ニ來漢家一。漢宮爭按ニ新聲譜一。遺恨已深聲更苦。纖纖女手生ニ洞房一。學ニ得琵琶一不レ下レ堂。

明妃の曲　王介甫に和す

胡人は鞍馬を以て家と爲し、射獵を俗と爲す。泉甘くして草美に常處無し、鳥驚き獸駭いて爭うて馳逐す。誰か漢女を將ゐて胡兒に嫁せしむるぞ。風沙無情面玉の如く、身行くに中國の人に遇はず。馬上自ら思歸の曲を作り手(一)を推せば琵と爲り手を卻くれば琶、胡人共に聽いて亦咨嗟す。玉顏(二)流落して天涯に死し、琵琶卻つて漢家に傳へ來る。漢宮爭うて新聲の譜を按ず、遺恨已に深うして聲更に苦しむ。纖纖たる女手洞房に生れ、琵琶を學び得て堂より下らず。識らず、黃雲出塞(三)の路、豈知らんや此聲能く腸を斷つことを。

(一) 風俗並に手を以て批把す故に名となすとあり　(二) 落ちぶれ果つるなり　(三) 女子は玉手もて琵琶を學べども胡地の景色を見し事もなければ眞情を現はし難しとの意

上行人御回レ首。漢恩自淺胡自深。人生樂在レ相ニ知心一。可レ憐青冢已蕪沒。尚有ニ哀絃一留至レ今。

明妃曲　　歐陽永叔

漢宮有ニ佳人一。天子初未レ識。一朝隨ニ漢使一。遠嫁ニ單于國一。絕色天下無。一失難ニ再得一。雖ニ能殺ニ畫工一。於レ事竟何益。耳目所レ及尙如レ此。萬里安能制ニ夷狄一。漢計成巳拙。女色難ニ自誇一。明妃去時淚。洒向ニ枝上花一。狂風日暮起。飄泊落ニ誰家一。紅顏勝レ人多ニ薄命一。莫レ怨ニ春風一當自嗟。

漢宮に佳人有り、天子初め未だ識らず。一朝漢使に隨つて、遠く單于の國に嫁す。(一)絕色天下に無し、一失再び得難し、能く(二)畫工を殺せりと雖も、事に於て竟に何の益あらん。(三)耳目の及ぶ所尙ほ此の如し。萬里安ぞ能く夷狄を制せん。漢計成ること已に拙し、女色自ら誇り難し。明妃去る時の淚、洒いで枝上の花に向ふ。狂風日暮に起る、飄泊して誰が家にか落つ。(四)紅顏人に勝るものは薄命多し、春風を怨む莫くして當に自ら嗟くべし。

(一)すぐれたる美色　(二)毛延壽なり　(三)視聽の間すらかくの如しとせば何ぞ夷狄を馴致せしむるを得んや　(四)佳人多く薄命の意

著畫漢宮衣。寄聲欲問塞南事。只有年年鴻雁飛。佳人萬里傳消息。好在氈城莫相憶。君不見咫尺長門閉阿嬌。人生失意無南北。

(三) 從來の畫には斯の如きもの無かりしとなり　(四) 明妃を醜惡に描きし畫工を殺せしも何の甲斐なし　(五) 破るるまで著るなり　(六) 幕帳なり、天幕の類　(七) 漢武の陳皇后寵を失うて長門宮に幽閉せられたるを指す

明妃曲

明妃出嫁與胡兒。氈車百兩皆胡姬。含情欲語獨無處。傳與琵琶心自娛。黃金捍撥春風手。彈看飛鴻勸胡酒。漢宮侍女暗垂淚。沙

明妃出されて胡兒に嫁與す。(一)氈車百兩皆胡姬なり。情を含んで語らんと欲すれども獨り處無く、琵琶に傳與して心自ら娛む。黃金捍撥す(二)春風の手、彈じて飛鴻を看て胡酒を勸む、(三)漢宮の侍女暗に淚を垂れ、沙上の行人卻つて首を回らす。漢恩は自ら淺く、胡は自ら深し、人生の樂は心を相知るに在り。憐むべし、(四)靑冢已に蕪沒す、尙ほ哀絃有り、留つて今に至る。

(一) 附設せる毛氈づゝみの車　(二) ばちもて彈ず　(三) 附添來りし女官　(四) 昭君の墓

明妃初出漢宮時。淚濕春風鬢脚垂。低回顧影無顏色。尙得君王不自持。歸來卻怪丹靑手。入眼平生未曾有。意態由來畫不成。當時枉殺毛延壽。一去心知更不歸。可憐

曲類

明妃曲(一)　王介甫

明妃の初めて漢宮を出でし時、淚春風に濕うて鬢脚垂れたり。低回影を顧るに顏色無し、尙ほ君王自ら持せざるを得たり。歸り來つて卻つて怪しむ、丹靑(三)の手、(四)眼に入る(二)平生未だ曾て有らず。意態由來畫けども成らず、當時枉げて殺す毛延壽。一去心に知る更に歸らざらんことを、憐むべし、漢宮の衣を著盡すを。(五)聲を寄せて塞南の事を問はんと欲するに、只年年鴻鴈の飛ぶ有るのみ。佳人萬里(六)消息を傳ふ、好在なり(七)氈城相憶ふこと莫れ。君見ずや、(八)咫尺長門阿嬌を閉づるを。人生意を失すれば南北無し。

(一) 漢の王昭君が胡地に妻となるを咏ず　(二) 漢元帝をして手離すを惜ましめしたりとの意　(三) 畫工に同じ

障生㆓光輝㆒。昔日太宗拳毛騧。近時郭家師子花。今之新圖有㆓二馬㆒。復令㆘識者久歎嗟㆖。此皆騎戰一敵㆑萬。縞素漠漠開㆓風沙㆒。其餘七匹亦殊絕逈若㆔寒空動㆓煙雪㆒。霜蹄蹴踏長楸間。馬官廝養森成㆑列。可㆑憐九馬爭㆓神駿㆒。顧視清高氣深穩。借問苦心愛者誰。後有㆓韋諷㆒前支遁。憶昔巡㆓幸新豐宮㆒。翠華拂㆑天來向㆑東。騰驤磊落三萬匹。皆與㆓此圖㆒筋骨同。自從㆔獻㆑寶朝㆓河宗㆒。無㆔復射㆓蛟江水中㆒。君不㆑見金粟堆前松柏裏。龍媒去盡鳥呼㆑風。

騰驤磊落たる三萬匹、皆此圖と筋骨同じかりき。寶を獻じて河宗を朝せしめてより、(一八)復た蛟を江水の中に射る無し。(一九)君見ずや、(二〇)金粟堆前松栢の裏、(二一)龍媒去り盡して鳥風に呼ぶ。

(一) 韋州の録事たりし人、名は諷　(二) 才藝多くよく馬を描けり　(三) 神馬なり　(四) 玄宗の愛馬なり、曹之を畫きて十日にして成る　(五) 內府所藏の眞紅なる瑪瑙の盤を賜はる　(六) 才人と共に女官　(七) 輕絹細綾などの贈物を以て畫を求むるなり　(八) 太宗戎國を征せし時乘りし愛馬　(九) 郭子儀が代宗より賜りし名馬　(一〇) 畫絹の上即ち漠々たる沙場を幻出す　(一一) この圖に九馬あれば言ふ　(一二) 道の並木　(一三) 馭者馬丁等が列を成せるなり　(一四) 畫工苦心の迹をよく鑑賞する者　(一五) 晉の名僧なり、世說に見ゆ　(一六) 華淸宮なり　(一七) 跳り騰せて意氣軒昂たるなり　(一八) 周の穆王は寶を河伯に獻じて幾干くなく崩じたり、こゝには玄宗を暗指す　(一九) 漢の武帝大宛の天馬を得て後江に浮んで蛟を江中に射殺せりこゝには玄宗再度行幸なきを言ふ　(二〇) 玄宗の山陵　(二一) 駿馬昇天の媒介者たるべき駿馬

國初已來畫ニ鞍馬一。神妙獨數江都王。將軍得レ名三十載。人間又見眞乘黄。曾貌ニ先帝照夜白一。龍池十日飛ニ霹靂一。内府殷紅馬腦盤。婕妤傳レ詔才人索。盤賜ニ將軍一拜舞歸。輕紈細綺相追飛。貴戚權門得ニ筆跡一。始覺ニ屏

觀る引

國初已來鞍馬を畫くもの、神妙獨り數ふ、(一)江都王。將軍名を得ると三十載、人間(二)又見る、眞の乘(三)黄。曾て先帝の照夜白(四)を貌くに、龍池十日霹靂を飛ばせり。(五)內府の殷紅馬腦の盤、婕妤(六)詔を傳へて才人を索む。盤を將軍に賜うに拜舞して歸り、(七)輕紈細綺相追飛す。貴戚權門筆跡を得れば、始めて屏障に光輝を生ずるを覺ゆ。昔日太宗の拳毛騧(八)、近時郭家の師子花(九)。今の新圖に二馬有り、復た識者をして久しく歎嗟せしむ。此れ皆騎して戰へば一もて萬に敵し、(一〇)縞素漠漠として風沙を開く。其餘の七匹も亦殊絶、逈に寒空の煙雪を動かすが若し。霜蹄蹴踏す、(一二)長楸の間、馬官(一一)斷養は森として列を成す。憐むべし九馬の神駿を爭ふを。顧視すれば清高(一三)にして氣深穩なり。借問す、(一四)苦心愛する者は誰ぞ、後に韋諷有り、前には支遁(一五)。憶ふ、昔新豐宮(一六)を巡幸せしとき、翠華天を拂つて東に向ふに、騰(一七)

根削皮如紫玉。江妃水仙惜不得。梓潼使君開一束。滿堂賓客皆歎息。憐我老病贈兩莖。出入爪甲鏗有聲。老夫復欲東南征。乘濤鼓樴白帝城。路幽必爲鬼神奪。杖劍或與蛟龍爭。重爲告曰。杖兮杖兮。爾之生也甚正直。愼勿見水踴躍。學變化爲龍。使我不得爾之扶持。滅跡於君山湖上之青峰。噫風塵澒洞兮豺虎咬人。忽失雙杖兮吾將曷從。

我が老病を憐んで兩莖を贈る、出入爪甲鏗として聲有り。(四)老夫復た東南に征かんと欲す、濤に乘つて樴を鼓せん白帝城。路幽にして必ず鬼神の爲に奪はれん、(五)劍に杖つて或は蛟龍と爭はん。重ねて爲に告げて曰く、杖や杖や、爾の生や甚だ正直なり、愼んで水を見て踴躍して、變化して龍と爲るを學ぶこと勿れ。我をして爾の扶持を得ざらしめ、跡を君山湖上(六)の青峰に滅せん。噫風塵(七)澒洞として豺虎は人を咬む、忽ち雙杖を失はば吾將曷んぞ從はん。

(一) この詩は章彝に贈りしものなり、桃竹は一種の竹なり (二) 共に水中の神仙なり (三) 章彝時に梓州刺史たり (四) 出入する毎に爪甲の如き音響あり (五) 江路險阻の處にて鬼神この杖を奪はんとするならん (六) 洞庭湖上に在り、昔湘君の遊びし所 (七) 世間の状態擾亂たるを謂ふ

韋諷錄事が宅にして曹將軍畫馬の圖を

亦墀下。適立二閶闔一生二長風一。詔謂將軍拂二絹素一。意匠慘澹經營中。斯須九重眞龍出。一洗二萬古凡馬一空。玉花卻在二御榻上一。榻上庭前屹相向。至尊含レ笑催二賜金一。圉人太僕皆惆悵。弟子韓幹早入レ室。亦能畫レ馬窮二殊相一。幹惟畫レ肉不レ畫レ骨。忍使下驊騮氣凋喪上。將軍畫善蓋有レ神。必逢二佳士一亦寫レ眞。即今漂泊干戈際。屢貌尋常行路人。途窮返遭二俗眼白一。世上未レ有二如レ公貧一。但看古來盛名下。坎壈終日纏二其身一。

妻なり、尤も隷書に巧なり (四) 王羲之なり王に及ばざるを恨むなり (五) 論語の字面による (六) 南内興慶宮の正殿 (七) 唐太宗閻立本をして功臣を凌煙閣に畫かしめしが年古りて顏色次第に薄くなりしなり以下その修補を稱す (八) 段志玄と遲敬德と皆百戰大功の人 (九) 玄宗の愛馬なり (一〇) 赤塗の階下 (一一) 皇居の門を謂ふ (一二) 須臾に同じ (一三) 玉花驄が陛下机上に現出せる義 (一四) 養馬の官人等皆感歎す (一五) 殊絕特異の姿形 (一六) 名馬をして却つて元氣なからしむ (一七) 肖像畫を作る (一八) 俗人より白眼もて睨み遠ざけらる (一九) 車行利あらず不調の貌、盛名の人大概は貧窮なりとの義

江心蟠石生二桃竹一。蒼波噴浸尺度足。斬レ

(一)桃竹杖の引

江心の蟠石に桃竹を生ず、蒼波噴浸して尺度足れり。根を斬り皮を削つて紫玉の如くす、(二)江妃水仙惜めども得ず。(三)梓潼の使君一束を開けり、滿堂の賓容皆歎息す。

初學衞夫人。但恨無過王右軍。丹青不知老將至。富貴於我如浮雲。開元之中常引見。承恩數上南薰殿。凌煙功臣少顏色。將軍下筆開生面。良相頭上進賢冠。猛將腰間大羽箭。褒公鄂公毛髮動。英姿颯爽來酣戰。先帝天馬玉花驄。畫工如山貌不同。是日牽來

將軍筆を下して生面を開く、良相頭上の進賢冠、猛將腰間の大羽箭、(八)褒公鄂公毛髮動き、英姿颯爽酣戰より來る。(九)先帝の天馬玉花驄、畫工山の如くにして貌は同じからず。是の日牽き來る(一〇)赤墀の下、迥に(一一)閶闔に立てて長風を生ず。詔して謂ふ將軍絹素を拂へと、意匠慘澹たり經營の中、(一二)斯須に九重に眞龍出で、萬古の凡馬を一洗して空し、(一三)玉花卻つて御榻の上に在り、榻上庭前屹として相向ふ。至尊笑を含んで賜金を催し、(一四)圉人大僕皆惆悵す。弟子韓幹早く室に入る、亦能く馬を畫くに(一五)殊相を窮む。幹は惟肉を畫いて骨を畫かず、忍んで(一六)驊騮をして氣凋喪せしむ。將軍は畫善にして蓋し神有り、必ず佳士に逢へば亦(一七)眞を寫す。即今漂泊、干戈の際、屢々貌す尋常行路の人。途窮して返つて(一八)俗眼の白に遭ひ、世上未だ公の如く貧しきは有らず。但看よ古來盛名の下、終日(一九)坎壈其身に纏ふを。

(一) 將軍曹霸は魏の曹髦の後なり、畫名あり　(二) 玄宗の末年罪を得て庶人となりぬ　(三) 名は鑠汝陰太守李矩の

田疆古冶氏。
力能排二南山一。
文能絕二地理一。
一朝被二讒言一。
二桃殺二三士一。
誰能爲二此謀一。
相國齊晏子。

齊の晏子。

(一) 題意不詳、或は曰く泰山下の一小山名なりと (二) 山東臨淄縣界にあり (三) 晏子春秋に出でたる公孫接田開疆古冶子の三勇者が晏嬰の爲に謀られ二桃を奪うて命を殞しゝ話による

引　類

丹青引　　杜子美

將軍魏武之子孫。於レ今爲レ庶爲二清門一。英雄割據雖レ已矣。文彩風流今尙存。學レ書

將軍は魏武の子孫、今に於て(一)庶たれども淸門たり。英雄の割據已めりと雖も、(二)文彩風流は今尙ほ存す。書を學んで初めに(三)衞夫人を學び、(四)但王右軍に過ぐる無きを恨みき。丹青知らず老の將に至らんとするを。富貴は我に於て浮雲の如し。開元の中常に引見せられ、恩を承けて數〻(五)南薫殿に上りき。(六)凌煙の功臣顏色少し、

又飛去。何許相逢綠楊路。綿蠻宛轉似娛人。一心百舌何紛紜。能顔俠少停歟聽。墮珥妖姫和睡聞。可憐光景何時盡。誰能低回避二鷹隼一。廷尉張羅自不レ逼。潘郎挾レ彈無レ情損。天生二羽族一爾何微。舌端萬變乘二春暉一。南方朱鳥一朝見。索寞無レ言蒿下飛。

情無し。天羽族を生ずるに爾何ぞ微なる、舌端萬變して春暉に乘ず。南方の朱鳥一朝に見ゆれば、索寞言無く蒿下に飛ぶ。

(八)

㊀ 聲少なく寂しき貌　㊁ 數多き花　㊂ 鳥の聲を形容　㊃ 酒に醉ひて顔を赤くせる　㊄ 耳飾の落ちかゝれる怪しの女　㊅ 漢書翟方進廷尉となるや賓客多く門を塡せらるゝや門前雀羅を設くべかりしことを指す　㊆ 岳が射雉賦に彈弓の挾彈の語あり　㊇ 禮記月令に仲夏の月鵙始めて鳴けば反舌聲無しと見ゆ

歩出二齊城門一。遙望二蕩陰里一。里中有二三墳一。纍纍正相似。問是誰家塚。

梁甫の吟(一)

諸葛孔明

歩して齊の城門を出で、遙に蕩陰里(二)を望む。里中三墳有り、纍纍として正に相似たり。問ふ是れ誰が家の塚ぞ。(三)田疆古冶氏。力能く南山を排し、文能く地理を絕つ。一朝讒言を被り、二桃三士を殺す。誰か能く此の謀を爲せる、相國

哭啾啾聲沸レ天。無レ罪見レ誅功不レ賞。孤魂流落此城邊。當ニ昔秦王按レ劍起一。諸侯膝行不ニ敢視一。富レ國強レ兵二十年。築レ怨興レ徭九千里。秦王築レ城何太愚。天實亡レ秦非ニ北胡一。一朝禍起ニ蕭墻内一。渭水咸陽不ニ復都一。

百舌の吟

劉禹錫

曉星寥落春雲低。初聞百舌間關啼。花枝滿レ空迷ニ處所一。搖ニ動繁英一墜ニ紅雨一。笙簧百囀音韻多。黃鸝呑レ聲燕無レ語。東方朝日遲遲升。迎レ風弄レ影如ニ自驚一。數聲不レ盡

(一)曉星寥落として春雲低し、初めて聞く百舌間關として啼くを。花枝空に滿ちて處所に迷ひ、(二)繁英を搖動して紅雨を墜す。笙簧百囀音韻多く、黃鸝聲を呑んで燕は語無し。東方の朝日遲遲として升り、風を迎へ影を弄して自ら驚くが如し。數聲盡さず又飛び去る、何の許にか相逢はん綠楊の路。(三)綿蠻宛轉人を娛しましむるに似たり。一心百舌何ぞ紛紜たる。(四)酡顏の俠少は歌を停めて聽き、(五)墮珥の妖姬は睡に和して聞く。憐むべし光景何の時か盡きん、誰か能く低回して鷹隼を避けん。(六)廷尉の羅を張るも自ら鬭らず、(七)潘郎が彈を挾めるも損するに

子。走馬爲君西擊胡。胡沙獵獵吹人面。漢虜相逢不相見。遙聞鼙鼓動地來。傳道單于夜猶戰。此時顧恩寧顧身。爲君一行摧萬人。壯士揮戈回白日。單于濺血汗輪。回來飲馬長城窟。長城道傍多白骨。問之耆老何代人。云是秦王築城卒。黃昏塞北無人煙。鬼

の時恩を顧うて寧ろ身を顧はんや、君が爲に一行萬人を摧く。壯士戈を揮うて白日(四)を回し、單于血を濺いで朱輪(五)を汗す。回り來つて馬に飮ふ長城(六)の窟、長城の道傍に白骨多し。之を耆老(七)に問ふ何の代の人ぞ、云ふ是れ秦王が城を築ける卒と。黃昏塞北人煙無く、鬼哭啾啾聲天に沸く。罪無きも誅せられ功あるも賞せられず、孤魂流落す此の城邊。昔(八)秦王が劍を按じて起りしに當つては、諸侯膝行して敢て視ざりき。國を富まし兵を強うすること二十年、怨を築き(九)禍を興すこと九千里。秦王城を築ける何ぞ太だ愚なる、天實(一〇)に秦を亡せり北胡には非ず。一朝禍蕭墻(一一)の内より起つて、渭水咸陽(一二)復都たらず。

(一) 宮前の警夜を掌る官名なり　(二) 兩軍相對峙するも互に見えず　(三) 匈奴の王なり、鼓は夜襲を爲すと也　(四) 落日を中天に引きかへすの功を立つ　(五) 日光を指す　(六) 文選註に長城の下に泉窟あり馬を飲ふべしとあり　(七) 耆人なり、禮記には六十を曰へり　(八) 秦始皇を指す　(九) 役夫を使用する仕事　(一〇) 始皇が得たる讖書に秦を亡す者は胡ならんとあり即ち長城を築けり　(一一) 君臣の境をなす屏風の如きものなり、手許に起る義　(一二) 渭水のほとりなる咸陽

爲₂歡娛₁。馮陵大叫呼₂五白₁。袒跣不₃肯成₂梟盧₁。英雄有レ時亦如レ此。邂逅豈卽非₂良圖₁。君莫レ笑劉毅從來布衣願。家無₂儋石₁輸₂百萬₁。

ざらんや。君笑ふこと莫れ劉毅(七)が從來布衣の願、家に儋石だも無くして百萬を輸すを。

(一)閑居する際にも往かず　(二)すご六の類　(三)氣を負うて壯んなる貌　(四)すご六の賽子なり　(五)肌ぬぎはだしとなりしも勝つこと能はず　(六)偶然に幸福に出合ふ意　(七)劉毅は家に儋石の儲無きも双六には一回に百萬をかけし人なり

長安少年無₂遠圖₁。一生惟羨執金吾。麒麟殿前拜₂天

吟類

古長城の吟　　王翰

長安の少年は遠圖無し。一生惟羨む執金吾、麒麟殿前に天子を拜し、馬を走らして君の爲に西のかた胡を撃つ。胡沙獵獵(一)として人面を吹き、漢虜(二)相逢へども相見ず。遙に聞く鐘鼓の地を動して來るを、傳へ道ふ單于(三)は夜も猶ほ戰ふと。此

采ㇾ花食ㇾ實枝爲ㇾ薪。兒孫生長與ㇾ世隔。知有ニ父子一無ニ君臣一。漁郎放ㇾ舟迷ニ遠近一。花間忽見驚相問。世上空知古有ㇾ秦。山中豈料今爲ㇾ晉。聞道長安吹ニ戰塵一。東風回ㇾ首亦沾ㇾ巾。重華一去寧復得。天下紛紛經ニ幾秦一。

る古へに秦有るを、山中豈料らんや今は晉爲るを。聞道らく長安戰塵を吹くと、(四)東風に首を回らして亦巾を沾す。(五)重華一たび去つて寧ろ復得んや、天下紛紛幾秦をか經たる。

(一) 秦二世皇帝の宮名なり、趙高權威確立を欲して鹿を馬と爲せり　(二) 商山の四皓　(三) 陶淵明の桃花源記を參照すべし　(四) 度々戰亂あること　(五) 舜帝の字

今夕行　杜子美

今夕何夕歲云徂。更長燭明不ㇾ可ㇾ孤。咸陽客舍一事無。相與博塞

今夕は何の夕ぞ歲云に徂く、(一)更長く燭明にして孤くべからず。(二)咸陽の客舍一事無く、相與に博塞して歡娛を爲す。(三)馮陵として大いに叫んで五白を呼び、(四)(五)袒跣するも肯て盧梟と成らず。英雄時有りてか亦此の如し、(六)邂逅豈即ち良圖に非

除ㇾ想當磐礴
欲ㇾ畫時。皆二睨
衆史一如二庸奴一。
神閑意定始
一掃。功與二造
化一論二錙銖一。悲
風颯颯吹二黄蘆一。上有二寒雀驚相呼一。槎牙死樹鳴二老烏一。向ㇾ之俛啄如ㇾ哺ㇾ雛。山墻野壁黄昏後。
馮婦遙看亦下ㇾ車。

看ば亦車を下らん。

(一) 狸に似たる獸なり (二) 眼光鏡の如き義 (三) 畫虎なればなり (四) 熟視し畫虎なるを知つて始めて其鬚を撫づるなり (五) 庭前に同じ (六) 莊子に見ゆ、箕踞するなり (七) 多くの畫工 (八) 輕微なること造化と僅少の差のみとなり (九) 俯し啄ばむ (一〇) 孟子に出づ、虎を見て臂を攘げて車より下りし人

望夷宮中鹿
爲ㇾ馬。秦人半
死長城下。避ㇾ
世不二獨商山
翁一。亦有二桃源
種ㇾ桃者一。一來
種ㇾ桃不ㇾ記ㇾ春。

桃源行

(一)望夷宮中鹿を馬と爲す、秦人半は死す長城の下。世に避るは獨り(二)商山の翁のみならず、亦桃源に桃を種ゑし者有り、一たび來つて桃を種ゑてより春を記せず、花を采り實を食うて枝は薪と爲す、兒孫生長世と隔る、知る父子有るも君臣無きを。(三)漁郎舟を放つて遠近に迷ひ、花間忽ち見て驚いて相問ふ。世上空しく知

筆中書堂。往時文彩動二人主一。此日飢寒趍二路傍一。晩將二末契一託二年少一。當面輸レ心背面笑。寄謝悠悠世上兒。不レ爭二好惡一莫二相疑一。

(一)天寶十年玄宗大いに天地を祀る、杜甫三大禮賦を上つりぬ　(二)集賢院學士などの學者たち堵牆の如く予を取卷きたり　(三)僅の縁故を便とす　(四)正面よりは親切なるも蔭にては馬鹿にせり

虎圖行　王介甫

壯哉非レ熊亦非レ貙。目光夾レ鏡當二坐隅一。横行妥レ尾不レ畏レ逐。顧盼欲レ去仍躊躇。卒然一見心爲動。熟視稍稍摩二其鬚一。固知畫者巧爲レ此。此物安肯來二庭

壯なるかな熊に非ず亦(一)貙に非ず、(二)目光鏡を夾んで坐隅に當る。(三)横行尾を妥れて逐ふを畏れず、顧盼去らんと欲して仍ほ躊躇す。卒然として一見すれば心爲に動く、(四)熟視すれば稍稍として其鬚を摩す。固に知る畫者巧に此を爲るを、此の物安ぞ肯て(五)庭除に來らんや。想ふに當に(六)盤礴して畫かんと欲するの時、(七)衆史を睥睨して肅奴の如くなるべし。神閑に意定つて始めて一掃すれば、功は造化と(八)錙銖を論ず。悲風颯颯として黄蘆を吹き、上に寒雀の驚いて相呼ぶ有り。槎牙たる死樹老烏鳴き、之に向つて(九)俛啁して雛に哺するが如し。山墻野壁黄昏の後、(一〇)馮婦遙に

城下蔡俱風靡。杜陵飢客眼長寒。蹇驢破帽隨二金鞍一。隔レ花臨レ水時一見。只許腰肢背後看。心醉歸來茅屋裏。方信人間有二西子一。君不レ見孟光擧レ案與レ眉齊。何曾背面傷レ春啼。

んで啼かんや。

㈠ 玄宗が牡丹を賞したる殿名なり、此の詩牡丹を楊貴妃に譬ふ ㈡ 楚の地名なり、宋玉が好色賦に見ゆ ㈢ 杜甫を指す ㈣ 貴人の金鞍に從ひ行く ㈤ 正面より見るを許されざる意 ㈥ 越王勾踐が呉に献じたる美人西施 ㈦ 後漢梁鴻の妻醜なれども賢なり夫を敬して食案を捧ぐるに眉と齊しうせりとぞ

男兒生無レ所レ成頭皓白。牙齒欲レ落眞可レ惜。憶獻二三賦蓬萊宮一。自怪一日聲輝赫。集賢學士如二堵墻一。觀三我落二

莫相疑行　　杜子美

男兒生れて成す所無く、頭は皓白、牙齒は落ちんと欲す、眞に惜むべし。憶ふ㈠三賦を蓬萊宮に獻ぜしを、自ら怪しむ一日にして聲の輝赫たるを。㈡集賢の學士は堵墻の如く、我が筆を中書堂に落すを觀き。往時文彩人主を動かし、此の日飢寒路傍に趍る。晩に末契㈢を將て年少に託するに、㈣當面には心を輸し背面には笑ふ。寄謝す悠悠たる世上の兒、好惡を爭はざること相疑ふ莫れ。

昨夜光照ㇾ臨。是夕鋒芒如ニ禿筆一。明朝化作ニ甘雨一來。宦家喜ㇾ得ニ調元手一。周公禮樂未ニ制作一。致ニ身姚宋一亦不ㇾ惡。我聞ニ二公拜ㇾ相年一。民間斗米三四錢。

なりきと。

(一) 皇城前に同じ (二) 天子政を聽く殿名なり、與天登右僕射たる辭令を得たるなり、宣麻は辭令書 (三) 甘霖なり (四) 元氣を調へ陰陽を燮理する賢相 (五) 唐の姚崇宋璟共に名相なりき

深宮無ㇾ人春日長。沉香亭北百花香。美人睡起薄梳洗。燕舞鶯啼空斷ㇾ腸。畫工欲ㇾ畫ニ無ㇾ窮意一。背ニ立春風一初破ㇾ睡。若敎ニ回ㇾ首卻嫣然一。陽

續麗人行

蘇子瞻

深宮人無く春日長し、(一)沉香亭北百花香し。美人睡起薄く梳洗す、燕舞鶯啼空しく腸を斷つ。畫工は窮り無き意を畫かんと欲し、春風に背き立つて初めて睡を破る。若し首を回らして卻つて嫣然たらしめば、(二)陽城下蔡共に風靡せん。(三)杜陵の飢客は眼長に寒く、蹇驢破帽(四)金鞍に隨ふ。花を隔て水に臨んで時に一たび見る、只許す腰肢(五)背後に看ることを。心醉歸り來る茅屋の裏、方に信ず人間に(六)西子有るを。君見ずや孟光(七)案を擧げて眉と齊しうせるを、何ぞ曾て背面に春を傷

擊レ節碎。血色羅裙翻レ酒汚。今年歡笑復明年。秋月春風等閑度。弟走從レ軍阿姨死。暮去朝來顏色故。門前冷落鞍馬稀。老大嫁作二商人婦一。商人重レ利輕二別離一。前月浮梁買レ茶去。去來江口一守二空船一。遶レ船明月江水寒。夜深忽夢少年事。夢啼粧涙紅闌干。我聞二琵琶一已歎息。又聞二此語一重唧唧。同是天涯淪落人。相逢何必曾相識。我從三去年辭二帝京一。謫居臥レ病潯陽城。潯陽地僻無二音樂一。終レ歲不レ聞二絲竹聲一。住近二湓江一地低濕。黃蘆苦竹遶レ宅生。其間旦暮聞二何物一。杜鵑啼レ血猿哀鳴。豈無三山歌與二村笛一。嘔啞嘲哳難レ爲レ聽。今夜聞二君琵琶語一。如レ聽二仙樂一耳暫明。莫レ辭更坐彈二一曲一。爲レ君翻作二琵琶行一。感二我此言一良久立。却坐促レ絃絃轉急。淒淒不レ似二向前聲一。滿座聞レ之皆掩レ泣。就レ中泣下誰最多。江州司馬青衫濕。

內前車馬撥不レ開。文德殿下宣麻回。紫微舍人拜二右相一。中使押赴文昌臺。旄頭

內前行 (一)

唐　子西

內前の車馬撥へども開けず、(二)文德殿下に宣麻回る。紫微の舍人右相を拜し、中使押赴す文昌臺。(三)旄頭昨夜光芒を照す、是の夕鋒芒禿箒の如し。明朝化して甘雨と作り來る、官家は(四)調元の手を得るを喜ばん。周公の禮樂未だ制作せず、身を(五)姚宋に致すも亦惡しからず。我二公相を拜せしの年を聞くに、民間の斗米三四錢

抽レ撥當レ心畫。四絃一聲如レ裂レ帛。東船西舫悄無レ言。唯見江心秋月白。沈吟放レ撥挿二絃中一。整二頓衣裳一起斂レ容。自言本是京城女。家在二蝦蟆陵下一住。十三學二得琵琶一成。名屬二敎坊第一部一。曲罷常敎二善才服一。妝成每被二秋娘妬一。五陵年少爭纒頭。一曲紅綃不レ知レ數。鈿頭銀篦

爲し難し。今夜君が琵琶の語を聞くは、仙樂を聽くが如くにして耳暫く明なり。辭する莫れ更に坐して一曲を彈ぜよ、君が爲に翻つて琵琶の行を作らんと。我が此言に感じて良久しく立ち、却り坐して絃を促すに絃轉〻急なり。淒淒として向前の聲に似ず、滿座之を聞いて皆泣を掩ふ。就中泣下ること誰か最も多き、江州の司馬青衫濕ふ。(二六)

(一) 揚子江の下流九江の邊なり (二) 興を盡せざる義 (三) 絃を引きしめて撥もて彈きならす、調子をあはする聲 (四) 絃抑へられて聲に思情添し (五) 輕くしづかに抑へ或は緩にひねりかき拂つては復輕かに撥く (六) 六么と共に琵琶の曲名 (七) 聲の諧和するなり (八) 早瀬を流る (九) 水冷かにして澁るが如く絃絶えしかと思はる (一〇) 復哀あるを謂ふ (一一) 東西の舟は皆寂として聲無し (一二) 京兆萬年縣南に在り (一三) 內宮の樂部なり、玄宗の開元二年より左右敎坊を置けり (一四) 先輩の曲師をも感賞せしむ (一五) 杜秋娘は當時有名の美人なりき (一六) 長陵安陵陽陵茂陵平陵の富豪の子弟が與ふる祝儀 (一七) 奴の頭の銀篦碎け去り紅色の薄物は酒に汚されども甚だ惜まずとなり (一八) 倡家の主婦を稱する語ならん (一九) 日月移り易る義 (二〇) 饒州の縣名、茶の産地なり (二一) 潯陽江口を往來す (二二) 以下作者自ら言ふ (二三) 感じ傷む義 (二四) 江の一小支流なり又湓水と名づく (二五) 粗俗下劣にして聽くに堪へず (二六) 樂天時に江州司馬の職に在りき

輕攏慢撚抹復挑。初爲二霓裳一後六么。大絃嘈嘈如二急雨一。小絃切切如二私語一。嘈嘈切切錯雜彈。大珠小珠落二玉盤一。間關鶯語花底滑。幽咽泉流水下レ灘。水泉冷澁絃凝絶。凝絶不レ通聲暫歇。別有二幽愁暗恨生一。此時無レ聲勝レ有レ聲。銀瓶乍破水漿迸。鐵騎突出刀鎗鳴。曲終

や、名は教坊(一三)の第一部に屬しぬ。曲罷めて常に善才(一四)をして服せしめ、粧成つて毎に秋娘(一五)に妬まる。五陵(一六)の年少爭つて纏頭し、一曲に紅綃數を知らず。鈿頭銀(一七)篦節を撃つて碎け、血色の羅裙酒を翻して汚す。今年歡笑復明年、秋月春風等閑に度る。弟は走つて軍に從ひ阿姨(一八)は死し、暮去り朝來つて顏色故びたり。門前冷落して鞍馬稀に、老大にして嫁して商人(一九)の婦と作りき。商人利を重しとして別離を輕しとし、前月浮梁(二〇)に茶を買つて去りぬ。江口(二一)に去來して空船を守るに、船を遶るの明月江水寒し。夜深けて忽ち夢む少年の事、夢に啼けば粧涙紅闌干たりと。我(二二)琵琶を聞いて已に歎息し、又此語を聞いて重ねて喞喞たり。同じく是天涯淪落の人、相逢ふ何ぞ必ずしも曾て相識らんや。我去年帝京(二三)を辭してより、謫居病に臥す潯陽城、潯陽は地僻にして音樂無し、歳を終ふるまで絲竹の聲を聞かず。住は湓江(二四)に近うして地は低濕、黃蘆苦竹宅を遶つて生ず。其間日暮に何物をか聞く、杜鵑は血に啼き猿は哀鳴す。豈山歌と村笛と無からんや、嘔啞(二五)嘲哳聽を

浸レ月。忽聞水上琵琶聲。主人忘レ歸客不レ發。尋レ聲暗問彈者誰。琵琶聲停欲レ語遲。移レ船相近邀相見。添レ酒回レ燈重開レ宴。千呼萬喚始出來。猶抱二琵琶一半遮レ面。轉レ軸撥レ絃三兩聲。未レ成二曲調一先有レ情。絃絃掩抑聲聲思。似レ訴二平生不一レ得レ志。低レ眉信レ手續續彈。說盡心中無限事。

を開く。千呼萬喚して始めて出で來るも、猶は琵琶を抱いて半は面を遮す。(三)軸を轉じ絃を撥くこと三兩聲、未だ曲調を成さざるに先づ情有り。(四)絃絃掩抑して聲聲思あり、平生の志を得ざるを訴ふるに似たり。眉を低れ手に信せて續續として彈じ、說き盡す心中無限の事。(五)輕く攏へ慢に撚つて撥つて復挑け、初に(六)霓裳を爲し後に六幺。大絃は嘈嘈として急雨の如く、小絃は切切として私語の如し、嘈嘈切切錯雜して彈じ、大珠小珠玉盤に落つ。(七)間關たる鶯語は花底に滑に、幽咽の泉流は(八)水灘を下る。(九)水泉冷澁にして絃は凝絕し、凝絕して通ぜず聲暫く歇む。別に幽愁暗恨の生ずる有り、此時聲無きも聲有るに勝れり。(一〇)銀瓶乍ち破れて水漿迸しり、鐵騎突出して刀鎗鳴る。曲終つて撥を抽いて心に當てて畫く、四絃一聲帛を裂くが如し。(一一)東船西舫悄として言無し、唯見る江心秋月の白きを、沈吟撥を收めて絃中に挿み、衣裳を整頓して起つて容を斂む。自ら言ふ本是れ京城の女なり、家は(一二)蝦蟇陵下に在つて住めり。十三琵琶を學び得て成る

輪當レ千凝不レ去。萬國如レ在二紅爐中一。五嶽翠乾雲彩滅。陽侯海底愁二波竭一。何當三一夕金風發。爲レ我掃二除天下熱一。

侯海底に波竭くるを愁ふ。何か當に一夕金風發して、我が爲に天下の熱を掃除すべき。

（一）夏の神　（二）眞紅なる爐火　（三）泰華衡恒嵩の五名山　（四）五行の金は秋を意味す、故に秋風を金風とす

琵琶行

白居易

潯陽江頭夜送レ客。楓葉荻花秋瑟瑟。主人下レ馬客在レ船。擧レ酒欲レ飲無二管絃一。醉不レ成レ歡慘將レ別。別時茫茫江

（一）潯陽江頭夜客を送る、楓葉荻花秋瑟瑟。主人は馬より下り客は船に在り、酒を擧げて飲まんと欲するに管絃無し。醉へども（二）歡を成さず慘として將に別れんとす、別るゝ時茫茫として江月を浸す。忽ち聞く水上琵琶の聲、主人は歸るを忘れ客は發せず。聲を尋ねて暗に問ふらく彈く者は誰ぞやと、琵琶の聲停つて語らんと欲することを遲し。船を移して相近づき邀へて相見、酒を添へ燈を回して重ねて宴

君不レ見鞲上鷹。一飽則飛掣。焉能作二堂上燕一。銜レ泥附二炎熱一。野人曠蕩無二靦顏一。豈可三久在二王侯間一。未レ試二囊中餐レ玉法一。明朝且入藍田山。

去矣行

君見ずや鞲上の鷹、一飽すれば則ち飛掣す。焉ぞ能く堂上の燕と作つて、泥を銜んで炎熱に附かん。野人(一)曠蕩として靦づる顏無し、(二)豈久しく王侯の間に在るべけんや。未だ(四)囊中玉を餐するの法を試みず、明朝且つ入らん(五)藍田の山。

(一) 左右の手を離して驅使ずるなり (二) 權門富貴の鼻息を覗ふなり (三) 閑曠なる懷抱 (四) 李頎長安に居て玉を食ふの法を試みたりその法を得て未だ試みずとなり (五) 長安の東南方に在り、古來玉の名產地

祝融南來鞭二火龍一。火旗焰焰燒レ天紅。日

苦熱行

王轂

(一)祝融南より來つて火龍に鞭うつ、火旗焰焰として天を燒いて紅なり。日輪午に當つて凝つて去らず、萬國(二)紅爐の中に在るが如し。(三)五嶽翠乾いて雲彩滅し、陽

安西都護胡青驄聲價歘然來向レ東。此馬臨レ陣久無レ敵與レ人一レ心成二大功一。功成惠養隨レ所レ致。飄飄遠自二流沙一至。雄姿未レ受伏櫪恩。猛氣猶思戰場利。腕促蹄高如レ踣レ鐵。交河幾蹴二層氷一裂。五花散作雲滿身。萬里方看汗流レ血。長安壯兒不二敢騎一。走過掣電傾レ城知。青絲絡レ頭爲レ君老。何由卻出二橫門道一。

安西の都護(一)が胡青驄(二)、聲價歘然として來つて東に向ふ。此馬陣に臨んで久しく敵無く、人と心を一にして大功を成す。功成つて惠養致す所に隨ひ、飄飄として遠く流沙(四)より至る。雄姿未だ受けず伏櫪(五)の恩、猛氣猶ほ思ふ戰場の利。腕促り蹄高うして鐵を踣むが如く、交河(六)幾びか層氷を蹴て裂けり。五花(七)散じて作す雲滿身、萬里方に看る汗血を流すを。長安の壯兒(八)も敢て騎らず、走過すること掣電のごとくにして城(九)を傾けて知る。青絲(一〇)頭に絡んで君が爲に老いたり、何に由つてか卻つて橫門(一一)の道を出でん。

(一) 安西都護高仙芝が青白色の馬を詠ず (二) 胡地産なれば云ふ (三) 評判忽然と現はれ來る (四) 沙州の西八十里にあり (五) 廐屋の中に老いこむ事を屑とせざるなり (六) 西城の川名 (七) 五色の毛色 (八) 壯士に同じ (九) 城中全部の人 (一〇) 手綱をかけられて漸く老いんとす (一一) 西域に向ふ長安城北の第一門名

典則。戚聯豪貴耽文儒。兵革未息人未蘇。天子亦念西南隅。吐蕃憑陵氣頗麁。竇氏檢察應時須。運糧繩橋壯士喜。斬木火井窮猿呼。八州刺史思一戰。三城守邊卻可圖。此行入奏計未小。密奉聖旨恩宜殊。繡衣春當霄漢立。綵服日向庭闈趨。省郎京尹必俯拾。江花未落還成都。肯訪浣花老翁無。爲君酤酒滿眼酤。與奴白飯馬青芻。

密に聖旨を奉じて恩殊なるべし。（一二）繡衣春霄漢に當りて立ち、綵服日に庭闈に向つて趨る、（一四）省郎京尹必ず俯して拾はん。江花未だ落ちずして成都に還る、肯て浣（一五）花の老翁を訪はんや無や。君が爲に酒を酤はん（一六）滿眼に酤はん、奴には白飯を與へん馬には青芻。

㊀ 西川の檢察使竇侍御に贈る詩なり ㊁ 魚の骨の喉にあるが如き硬骨漢 ㊂ 共に漢宮の名 ㊃ 甘蔗の汁を廚に貯へ一金の鉢も凍る ㊄ 君王なり ㊅ 偏り壅塞する所無きなり ㊆ 錢つきは皆權貴なるも文武備術を嗜む ㊇ 蹂躙し侵し凌ぐ ㊈ 蓬州に在る古蹟 （一〇） 火井は蓬州に在り水涸るゝとき火を投入すれば燃ゆといふ （一一） 松維蓬恭雅黎姚悉 （一二） 七盤安遠蕃漢の三城か未詳 （一三） 刺史の職なり （一四） 臺省、長官となり、京兆の尹となることは難もなからん （一五） 杜甫自らを言ふ、その草堂浣花溪上に在ればなり （一六） 深山の酒を買ひ入れて接待ふべし

（一）高都護が驄馬行

海客。身長九尺鬚眉蒼。徵起適遇風雲會。扶顚始知籌策良。靑袍白馬更何有。後漢今周喜再昌。寸地尺天皆入貢。奇祥異瑞爭來送。不知何國致白環。復道諸山得銀甕。隱士休歌紫芝曲。詩人解撰河淸頌。田家望望惜雨乾。布穀處處催春種。淇上健兒歸莫懶。城南思婦愁多夢。安得壯士挽天河。淨洗甲兵長不用。

(一)入奏行

竇侍御驥之子鳳之雛。年未三十忠義俱。骨鯁絕代無。烱如一段淸水出萬壑。置在迎風寒露之玉壺。蔗漿歸廚金盌凍。洗滌煩熱足以寧君軀。政用疏通合

竇侍御は驥の子鳳の雛なり、年未だ三十ならざるに忠義倶にす。(二)骨鯁絶代に無く、烱として一段の清水萬壑より出でて、置いて(三)迎風寒露の玉壺に在るが如し。(四)蔗漿廚に歸して金盌凍り、煩熱を洗滌して以て(五)君が軀を寧んずるに足れり。政は(六)疏通を用て典則に合ひ、(七)戚は豪貴に聯つて文儒に耽る。兵革未だ息まず人未だ蘇せず、天子亦念ふ西南隅。(八)吐蕃憑陵して氣頗る麤に、竇氏檢察時の須に應ず。(九)粮を繩橋に運んで壯士喜び、(一〇)水を火井に斬つて(一一)窮猿呼ぶ。八州の刺史一戰を思ひ、(一二)三城の邊を守るもの卻つて圖るべし。此の行の入奏は計未だ小ならず、

後爲ㇾ時出。整ニ頓乾坤一濟ㇾ時了。東走無ニ復憶ニ鱸魚一。南飛各有ニ安ㇾ巣鳥一。青春復隨ニ冠冕一入。紫禁正耐ニ煙花繞一。鶴駕通宵鳳輦備。雞鳴問ㇾ寢龍樓曉。攀ㇾ龍附ㇾ鳳勢莫ㇾ當。天下盡化爲ニ侯王一。汝等豈知蒙ニ帝力一。時來不ㇾ得ㇾ誇ニ身强一。關中既留ニ蕭丞相一。幕下復用ニ張子房一。張公一生江

來り送る。知らず何の國ぞ白環(二四)を致すは、復た道ふ諸山に銀甕(二五)を得たりと。隱士歌ふを休めよ紫芝(二六)の曲、詩人撰ぶを解す河清の頌(二七)。田家(二八)望望雨の乾くを惜み、布穀處處春種を催す。淇上(二九)の健兒歸つて懶きこと莫れ、城南の思婦愁へて夢多し。安んぞ壯士の天下を挽くものを得て、淨く甲兵を洗つて長に用ひしめざらん。

(一) 兵器車馬を洗つて復用ひざる意なり (二) 安祿山の亂を平定せるを謂ふ (三) 詩經に一葦之を航るとあり (四) 安慶緒が根據地 (五) 郭子儀時に朔方節度使たり (六) 良馬なり部伍精整なるを稱す (七) 義兵の困窮人に食を宥宮に與ふ (八) 東海と泰山 (九) 玄宗が西蜀に幸せし事 (一〇) 廣平王收功を以て成王となる後の代宗是なり (一一) 郭子儀 (一二) 李光弼 (一三) 王思禮 (一四) 晉の張翰が故事による。亂のために東走して鄉に歸るにも及ばずとなり (一五) 魏武帝の短歌行による (一六) 天子は太子の時の如く夜を徹して車駕を整へ夜明には上皇の安否を問ふとなり (一七) 揚子法言に見ゆ、強者に依附して事業をなすこと (一八) 漢の相國蕭何なり杜鴻漸に比す (一九) 漢の謀臣張良なり、張鎬に比す (二〇) 張鎬は江淮の名士なり (二一) 西京顚覆せんとする時 (二二) 侯景が梁に叛ひしものなり景は兵を用ひて叛せり (二三) 海の如く雨の如く (二四) 舜の九年西王母之を獻ず (二五) 王者刑罰中れば銀甕出づといふ (二六) 四皓が商山に在りし時作りし歌 (二七) 宋の元嘉中河濟皆清む鮑照卽ち頌を作る (二八) 本年は早魃なりしが布穀鳥は田植えつけよと鳴けり (二九) 鄴城を圍む兵を指す

腐傳聞一葦過。胡危命在二破竹中一。祇殘二鄴城一不日得。獨任二朔方一無レ限功。京師皆騎二汗血馬一。回紇餧レ肉蒲萄宮。已喜皇威清二海岱一。常思仙仗過二崆峒一。三年笛裏關山月。萬國兵前草木風。成王功大心轉小。郭相謀深古來少。司徒清鑒懸二明鏡一。尙書氣與二秋天一杳。二三豪

す、獨り(五)朔方に任ず限り無きの功。京師は皆(六)汗血の馬に騎る、(七)回紇は肉を餧す蒲萄宮。已に喜ぶ皇威の(八)海岱を清むるを、常に思ふ(九)仙仗の崆峒を通ぎしを。三年笛裏關山の月。萬國兵前草木の風。(一〇)成王功大なるも心轉ゝ小に、(一二)郭相謀深きこと古來少なり。(一一)司徒の清鑒は明鏡を懸け、(一三)尙書の氣は秋天と杳なり。二三の豪俊時の爲に出で、乾坤を整頓して時を濟ひ了りぬ。(一四)東走復た鱸魚を憶ふもの無く、(一五)南飛各ゝ巢に安んずるの鳥有り。靑春復た冠冕に隨つ入りて、紫禁正に煙花の繞るに耐ふ。(一六)鶴駕通宵鳳輦備り、鷄鳴寢を問ふ、龍樓の曉。(一七)龍を攀ぢ鳳に附して勢當る莫く、天下盡く化して侯王と爲る。汝等豈知らんや帝力を蒙るを、時來れば身の强を誇ることを得ず。關中既に(一八)蕭丞相を留め、幕下復た(一九)張子房を用ふ。(二〇)張公一生江海の客、身長九尺鬚眉蒼たり。徵すれば起つて適ゝ風雲の會に遇ひ、(二一)顚を扶けて始めて知る籌策の良きことを。(二二)靑袍白馬更に何か有らん。(二三)後漢今周再び昌なるを喜ぶ。寸地尺天皆入貢し、奇祥異瑞爭うて

漢家山東二百州。千村萬落生荊杞。縱有健婦把鋤犂。禾生隴畝無東西。況復秦兵耐苦戰。被驅不異犬與雞。長者雖有問。役夫敢伸恨。且如今年冬。未休關西卒。縣官急索租。租稅從何出。信知生男惡。反是生女好。生女猶得嫁比鄰。生男埋沒隨百草。君不見青海頭。古來白骨無人收。新鬼煩冤舊鬼哭。天陰雨濕聲啾啾。

(一四)新鬼は煩冤し舊鬼は哭す、天陰雨濕に聲啾啾たり。

㊀ 塵のために咸陽橋も見えざる位なり ㊁ 大空にとゞく ㊂ 兵士を徴集して交代せしむるなり ㊃ 屯田兵に同じ ㊄ 其初は村長より頭巾をかぶせられたるが今日は既に白頭となれり ㊅ 漢武帝なり、玄宗を暗指す ㊆ 荊棘雜草 ㊇ 縱横の區別も無くなる ㊈ 有德の上長官 ㊉ 關西より召募する戍卒 (一一) 天子なり、こゝには地方官を謂ふ (一二) 雜草茫々の間に埋沒す (一三) 吐蕃に近き邊境 (一四) 新に戰死せる者は其寃を訴へ、古く死せる者は泣き哭す

洗兵馬行

中興諸將收山東。捷書夜報清晝同。河

中興の諸將山東を收む、(二)捷書夜報ずること清晝に同じ。河廣きも傳へ聞く一葦もて過るを、(三)胡の危きこと命は破竹の中に在り。祇鄴城を殘して(四)不日に得んと

車轔轔馬蕭蕭。行人弓箭各在腰。爺孃妻子走相送。塵埃不見咸陽橋。牽衣頓足攔道哭。哭聲直上干雲霄。道旁過者問行人。行人但云點行頻。或從十五北防河。便至四十西營田。去時里正與裹頭。歸來頭白還戍邊。邊庭流血成海水。武皇開邊意未已。君不聞

車轔轔、馬蕭蕭、行人の弓箭各々腰に在り、爺孃妻子走つて相送る、(一)塵埃見えず、咸陽橋。衣を牽き足を頓てて道を攔つて哭す、哭聲直に上つて、(二)雲霄を干す。道旁過ぐる者行人に問へば、行人但云ふ、(三)點行頻なりと。或は十五より北のかた河を防ぎ、便ち四十に至つて西のかた(四)田を營す。(五)去る時理正與に裹頭す、歸來すれば頭白還邊を戍る。邊庭の流血海水を成すも、(六)武皇の邊を開くや、意未だ已まず。君聞かずや漢家山東の二百州、千村萬落(七)荊杞を生ずるを。縱ひ健婦の鋤犂を把る有りとも、禾は隴畝に生じて(八)東西無けん。況んや復た秦兵の苦戰に耐ふるをや。驅らるゝこと犬と鷄とに異ならず。(九)長者の問ふ者有りと雖も、役夫敢て恨を伸べんや。且つ今年の冬の如きは、未だ(一〇)關西の卒をも休めず。(一一)縣官急に租を索むとも、租稅何によりてか出でん。信に知る男を生むは惡しうして、反つて是れ女を生むことを好きを。女を生めば猶ほ比鄰に嫁するを得るも、男を生めば埋沒して(一二)百草に隨ふのみ。君見ずや、(一三)青海の頭、古來白骨人の收る無し。

已與時際會。樹木猶爲人愛惜。雲來氣接巫峽長。月出寒通雪山白。憶昨路繞錦亭東。先主武侯同閟宮。崔嵬枝幹郊原古。窈窕丹青戸牖空。落落盤踞雖得地。冥冥孤高多烈風。扶持自是神明力。正直元因造化功。大厦如傾要梁棟。萬牛回首丘山重。不露文章世已驚。未辭剪伐誰能送。苦心未免容螻蟻。香葉終經宿鸞鳳。志士幽人莫怨嗟。古來材大難爲用。

青戸牖空し、落落として盤踞地を得たりと雖も、冥冥として孤高烈風多し。扶持自ら是れ神明の力、(七)正直は元因る造化の功。大厦如し傾かば梁棟を要せんに、(八)萬牛首を回らして丘山重からん。(一〇)文章を露はさざるも世已に驚く、未だ剪伐を(九)辭せず、誰か能く送らん。心を苦しむるも未だ螻蟻を容るゝを免れず、香葉終に鸞鳳を宿せしむるを經たり。志士幽人怨嗟すること莫れ、(一一)古來材大は用を爲し難し。

(一)夔州に在り、成都にも在り　(二)枝幹の精　(三)潔白にして潤ひあり　(四)孔明の賢主劉備と會へるを指す　(五)杜甫草堂の所在地　(六)閉されたる宮廟　(七)柏の大なるを云ふ　(八)正直剛健造化の靈功を頌む　(九)この柏樹の偉大なるを謂ふ　(一〇)以下柏樹誰も伐る者なく中心腐朽し枝葉鸞鳳を棲ましむるを謂ふ　(一一)大人物大材木は兎角用ひられざるものなり

兵車行

翠釜。水精之盤行二素鱗一。犀筋厭飫久未レ下。鑾刀縷切空紛綸。黄門飛レ鞚不レ動レ塵。御厨絡繹送二八珍一。簫鼓哀吟感二鬼神一。賓従雑遝實要津一。後來鞍馬何逡巡。當レ軒下レ馬入二錦茵一。楊花雪落覆二白蘋一。青鳥飛去銜二紅巾一。炙レ手可レ熱勢絶倫。愼莫二近前一丞相嗔。

（一）古來上巳の節には士女多く水邊に遊ぶ　（二）骨肉相宜しき義　（三）俸へ金銀の花飾　（四）鬢邊の花は翠羽を以て飾れり　（五）裾帶に珠を結びて下垂せり　（六）後宮、こゝは楊貴妃を指す　（七）共に楊貴妃の姉なり　（八）駱駝の脂肉を煮又は珍魚を水精盤中に盛る　（九）犀角製の箸にて食へども直に食飽く　（一〇）鈴つきの小刀にて糸の如く刻む　（一一）給仕の少年馬を急がし來る　（一二）八種の美味、周禮に見ゆ　（一三）要路の大官にて一杯となる　（一四）鶺鴒の類よく人に馴るとぞ　（一五）勢威の赫赫たるを喩ふ　（一六）楊國忠を指す

孔明廟前在二老栢一。柯如二青銅一根如レ石。霜皮溜レ雨四十圍。黛色參レ天二千尺。君臣

古柏行

孔明廟前（一）に老栢有り、柯（二）は青銅の如く根は石の如し、霜皮（三）雨を溜らす四十圍、黛色天に參る、二千尺。君臣（四）已に時と際會し、樹木猶ほ人の爲に愛惜せらる。雲來つて氣は接す巫峽の長きに、月出でて寒は通ず、雪山の白きに。憶ふ、昨は路錦亭（五）の東を繞るに、先主、武侯と閟宮（六）を同じうす。崔嵬たる枝幹郊原に古り、窈窕たる丹

三月三日天氣新。長安水邊多麗人。態濃意遠淑且眞。肌理細膩骨肉勻。繡羅衣裳照暮春。蹙金孔雀銀麒麟。頭上何所有。翠微㔩葉垂鬢脣。背後何所見。珠壓腰衱穩稱身。就中雲幕椒房親。賜名大國虢與秦。紫駝之峯出

麗人行

(一)三月三日天氣新なり、長安の水邊麗人多し。態は濃に意は遠うして淑且つ眞、肌理細膩にして(二)骨肉勻し、繡羅の衣裳は暮春を照し、(三)蹙金の孔雀銀麒麟。頭上何の有る所ぞ、(四)翠微㔩葉鬢脣に垂る。背後何の見る所ぞ、珠は(五)腰衱を壓して穩にして身に稱ふ。就中雲幕(六)椒房の親、名を賜ふ、大國の(七)虢と秦と。(八)紫駝の峯は翠釜より出で、水精の盤は素鱗を行す、(九)犀筋厭飫して久しうして未だ下さず、(一〇)鑾刀縷のごとく切つて空しく紛綸たり。(一一)黄門鞚を飛ばして塵を動かさず、御廚絡繹として(一二)八珍を送る。簫鼓哀吟して鬼神を感ぜしめ、賓從雜遝して(一三)要津實つ。後來鞍馬何ぞ逡巡たる、軒に當り馬より下つて錦茵に入る。楊花雪のごとく落ちて白蘋を覆ひ、(一四)青鳥飛び去つて紅巾を銜む。(一五)手を炙らば熱すべし勢絶倫、愼んで近前すること莫れ、(一六)丞相嗔らん。

驚鳥擧ㇾ翮連二青雲一。洞源倒流二三峽水一。筆陣獨掃二千人軍一。只今年纔十六七。射二策君門一期二第一一。舊穿二楊葉一眞自知。暫蹶二霜蹄一未ㇾ爲ㇾ失。偶然擢ㇾ秀非ㇾ難ㇾ取。會是排ㇾ風在二毛質一。汝身已見唾成ㇾ珠。汝伯何由髮如ㇾ漆。春光淡淹秦東亭。渚蒲芽白水荇青。風吹二客衣一日杲杲。樹攬二離思一花冥冥。酒盡沙頭雙玉瓶。衆賓皆醉我獨醒。乃知貧賤別更苦。呑ㇾ聲躑躅涕涙零。

る、暫く霜蹄に蹶く、未だ失せりと爲ず。偶然秀を擢んで取り難きに非ず、會々是れ風を排せんこと毛質に在り。(八)汝が身已に見る唾の珠を成すを、汝が伯(九)何に由つてか髮漆の如き。春光淡く淹く秦の東亭、渚蒲芽白うして水荇青し。風は客衣を吹いて日は杲杲。樹は離思を攬して花は冥冥。酒は盡く沙頭(一〇)の雙玉瓶、衆賓皆醉へり、我獨り醒めたり。乃ち知りぬ、貧賤にして別の更に苦しきを、聲を呑んで躑躅(一一)して涕涙零つ。

㈠ 晉の名士二十歳にして舊里に退隱し又賦を作れり ㈡ 幼童の時髮を二處に束ぬ、故に曰ふ ㈢ 王穆八駿の如き名馬二歳に達すれば既に名馬たる性を見はすとなり、汗血は名馬汗無く、其のある時は血の如きを言ふ ㈣ 鷲鷹の如き强悍の鳥 ㈤ 思想の豐富なる意 ㈥ 試驗に應ずるなり ㈦ 養由基が如く百發百中を期せるに不幸名馬が蹶きしが如く失敗せり ㈧ 前試鳥に喩へたるによる ㈨ 伯父なり (一〇) 浮草靑々たり (一一) 行けども進み得ざる貌

翻手作雲覆手雨。紛紛輕薄何須數。君不見管鮑貧時交。此道今人棄如土。

陸機二十作文賦。汝更小年能綴文。總角草書又神速。世上兒子徒紛紛。驊騮作駒已汗血。

貧交行(一)

杜子美

手を翻せば雲と爲り、手を覆せば雨、(二)紛紛たる輕薄何ぞ數ふるを須ひん。君見ずや、(三)管鮑貧時の交、此の道今人棄てて土の如し。

(一)貧時、交際なり　(二)人情反覆のさだまりなきを喩ふ　(三)世間浮薄の輕薄なる人々の交情　(四)管仲鮑叔が交情の事史記韓非子等諸書に見えたり

醉歌行

(一)陸機は二十にして文の賦を作れり。汝は更に小年なるに能く文を綴る。(二)總角にして草書又神速、世上の兒子は徒に紛紛。(三)驊騮駒と作つて已に汗血、(四)鷙鳥翮を擧げて青雲に連る。(五)詞源倒に三峽の水を流し、筆陣獨り千人の軍を掃ふ。只今年纔に十六七なるに、(六)策を君門に射て第一を關せり。(七)舊楊葉を穿つ、眞に自ら知

行類

弟子白髮新。椒房阿監青娥老。夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未レ成レ眠。遲遲鐘鼓初長夜。耿耿星河欲レ曙天。鴛鴦瓦冷霜華重。翡翠衾寒誰與共。悠悠生死別經レ年。魂魄不二曾來入一レ夢。臨卭道士鴻都客。能以二精神一致二魂魄一。爲レ感二君王展轉思一。遂教二方士殷勤覓一。排レ風馭レ氣奔如レ電。升レ天入レ地求レ之徧。上窮二碧落一下黃泉。兩處茫茫皆不レ見。忽聞海上有二仙山一。山在二虛無縹緲間一。樓殿玲瓏五雲起。其中綽約多二仙子一。中有二一人一字玉眞。雪膚花貌參差是。金闕西廂叩二玉扃一。轉教下小玉報中雙成上。聞道漢家天子使。九華帳裏夢魂驚。攬レ衣推レ枕起徘徊。珠箔銀屛邐迤開。雲鬢半偏新睡覺。花冠不レ整下レ堂來。風吹二仙袂一飄颻擧。猶似二霓裳羽衣舞一。玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春帶レ雨。含レ情凝レ睇謝二君王一。一別音容兩渺茫。昭陽殿裏恩愛絕。蓬萊宮中日月長。回レ頭下望二人寰處一。不レ見二長安一見二塵霧一。唯將二舊物一表二深情一。鈿合金釵寄將去。釵留二一股一合一扇。釵擘二黃金一合分レ鈿。但令下心似中金鈿堅上。天上人間會相見。臨レ別殷勤重寄レ詞。詞中有レ誓兩心知。七月七日長生殿。夜半無レ人私語時。在レ天願作二比翼鳥一。在レ地願爲二連理枝一。天長地久有レ時盡。此恨緜緜無二絕期一。

門を入り西の廂を過ぎ玉の戶を叩く （三四）小玉雙成ともに仙女の名なり、こゝには取次の侍婢を指す （三五）殿名なり （三六）玉の顏はさびしくして淚流れて絕えず （三七）方士に傳言するなり （三八）かんざしの函とかんざしと （三九）二股のかんざしの片々と螺づかひ函の片々と （四〇）君王と妾の心と （四一）宮中の殿名 （四二）爾雅に南方比翼鳥あり比せざれば飛ばずとあり （四三）枝々相向つて脉理連接するもの

天旋地轉回二龍馭一。到レ此躊
躇不レ能レ去。馬
嵬坡下泥土
中。不レ見二玉顏一
空死處。君臣
相顧盡沾レ衣。
東望二都門一信レ
馬歸。歸來池
苑皆依レ舊。太
液芙蓉未央
柳。芙蓉如レ面
柳如レ眉。對レ此
如何不二淚垂一。
春風桃李花
開夜。秋雨梧
桐葉落時。西
宮南苑多二秋
草一。宮葉滿レ階
紅不レ掃。梨園

上と人間と會ゝ相見んと。別に臨んで殷勤に重ねて詞を寄す。詞中誓有り(四〇)兩心のみ知る。七月七日長生殿、(四一)夜半人無く私語の時。天に在りては願くは比翼(四二)の鳥と作り、地に在りとは願くは連理(四三)の枝と爲らんと。天長地久時有りてか盡くとも、此の恨緜緜絶ゆる期無けん。

(一) 玄宗皇帝なり、たゞ是を直指せざるなり (二) 楊貴妃は楊玄琰の女なり (三) 正殿一と其餘五との義、貴人の宮なり (四) 驪山の華清宮なる温泉 (五) 雲の如き髪花の如き顔黄金の首飾 (六) 政に怠つて早くは朝に出でず (七) 金屋中に化粧を終る (八) 兄楊國忠以下叔父昆弟皆清貴に列しその姉三夫人皆國夫人となる (九) 天寶十四年安祿山兵を起し漁陽より進む (一〇) 舞曲の名 (一一) 西蜀の行幸を言ふ (一二) 天子の翠羽の旗が風に搖らるゝなり (一三) 馬嵬坡に至るや軍士皆貴妃を殺せんことを請うて進まざりき (一四) 額につけたる金花飾 (一五) かはせみの羽金の首飾玉のかんざし (一六) 所謂蜀の棧道を登つて劍閣山に上る (一七) 成都府の山の名 (一八) 玄宗棧道中にて雨中の鈴聲を聞き雨淋鈴曲を作る (一九) 大亂平らぎて兩京回復し天子の車都に回るなり (二〇) 太液池畔の芙蓉未央宮前の柳 (二一) 玄宗蜀より還りはじめ西内の甘露殿に居り後に南内に遷りぬ (二二) 宮中の佳人皆老人となり、梨園の宮女頭の若き眉も老いたり (二三) 鴛鴦形の瓦なるべし (二四) かはせみの色なせる錦衾の類 (二五) 鴻都に滿宮門の名、蜀中より客留せる道士楊通幽なり (二六) 道士に同じ (二七) 天上の限り地下までも捜す (二八) 蓬萊山を指す (二九) 邈くはるかなる貌 (三〇) 五色の雲 (三一) あでやかなる仙女 (三二) 多分是女なるべしとの義 (三三) 黄金の

餘里。六軍不ㇾ發無ニ奈何一。宛轉蛾眉馬前死。花鈿委ㇾ地無ニ人收一。翠翹金雀玉搔頭。君王掩ㇾ面救不ㇾ得。回ㇾ首血涙相和流。黄埃散漫風蕭索。雲棧縈紆登ニ劍閣一。峨眉山下少ニ人行一。旌旗無ㇾ光日色薄。蜀江水碧蜀山青。聖主朝朝暮暮情。行宮見ㇾ月傷ㇾ心色。夜雨聞ㇾ鈴腸斷聲。

升り地に入つて之を求むること偏し。(二七)上は碧落を窮め下は黄泉、兩處とも茫茫として皆見えず。忽ち聞く海上に(二八)仙山有りと。山は(二九)虛無縹緲の間に在り、樓殿玲瓏として(三〇)五雲起り、其中(三一)綽約として仙子多し。中に一人の玉眞と字する者有り、雪膚(三二)花貌參差として是なり。(三三)金闕の西廂に玉扃を叩き、轉じて(三四)小玉をして雙成に報ぜしむ。聞道く漢家天子の使なりと。(三五)九華帳裏に夢魂驚く。衣を攬り枕を推して起つて徘徊す、珠箔銀屏邐迤として開く。雲鬢半は偏して新に睡覺め、花冠整はらざるに堂を下り來る。風は仙袂を吹いて飄颻として擧り、猶ほ霓裳羽衣の舞に似たり。(三六)玉容寂寞として涙闌干、梨花一枝春雨を帶ぶ。情を含み睇を凝して君王に謝す、一別音容兩つながら渺茫。昭陽殿裏恩愛絶え、蓬萊宮中日月長し。(三七)頭を回らして下つかた人寰を望むの處、長安を見ずして塵霧を見る。唯舊物を將て深情を表す、(三八)鈿合金釵寄せ將ち去らしむ。釵は(三九)一股を留め合は一扇、釵は黄金を擘き合は鈿を分つ。但心をして金鈿の堅に似しめて、天

罷醉和レ春。姉妹弟兄皆列士。可レ憐光彩生二門戸一。遂令二天下父母心。不レ重レ生レ男重レ生レ女。驪宮高處入二青雲一。仙樂風飄處處聞。緩歌慢舞凝二絲竹一盡日君王看不レ足。漁陽鼙鼓動レ地來。驚破霓裳羽衣曲。九重城闕煙塵生。千乘萬騎西南行。翠華搖搖行復止。西出二都門一百

れば心を傷ましむるの色あり、夜雨に鈴を聞けば腸斷ずるの聲。天旋り地轉じて龍馭を回らすに、此に到つて(一八)躊躇して去ること能はず。馬嵬坡下(一九)泥土の中、玉顔を見ず空しく死せし處。君臣相顧みて盡く衣を沾し、東のかた都門を望んで馬に信せて歸る。歸り來れば池苑は皆舊に依る。(二〇)太液の芙蓉未央の柳、芙蓉は面の如く柳は眉の如し。此に對して如何ぞ涙垂れざらん。春風桃李花開くの夜、秋雨梧桐葉落つるの時。(二一)西宮南苑秋草多く、宮葉階に滿つるも紅掃はず。(二二)梨園の弟子白髮新に、椒房の阿監青娥老いたり。夕殿螢飛んで思悄然、孤燈挑げ盡して未だ眠を成さず。遲遲たる鐘鼓初めて長きの夜、耿耿たる星河曙けならんと欲するの天。(二三)鴛鴦瓦冷にして霜華重く、(二四)翡翠衾寒うして誰と與にか共にせん。悠悠たる生死別れて年を經、魂魄曾て來つて夢にだに入らず。臨卭の道(二五)士鴻都の客、能く精神を以て魂魄を致す。君王展轉の思ひを感ぜしめんが爲に、遂に方士(二六)をして殷勤に覓めしむ。風を排し氣に馭して奔ること電の如く、天に

宮粉黛無顔色。春寒賜浴華清池。温泉水滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力。始是新承恩澤時。雲鬢花顔金歩搖。芙蓉帳暖度春宵。春宵苦短日高起。從此君王不早朝。承歡侍宴無閑暇。春從春遊夜專夜。後宮佳麗三千人。三千寵愛在一身。金屋粧成嬌侍夜。玉樓宴

朝せず。歡を承け宴に侍して閑暇無く、春は春遊に從ひ、夜は夜を專にす。後宮の佳麗三千人、三千の寵愛一身に在り。(七)金屋粧成つて嬌びて夜に侍し、玉樓宴罷んで醉うて春に和す。(八)姉妹弟兄皆列土、憐むべし光彩の門戶に生ずるを。遂に天下父母の心をして、男を生むを重んぜずして、女を生むを重んぜしむ。驪宮高き處青雲に入り、仙樂風飄つて處處に聞ゆ。緩に歌ひ慢に舞うて絲竹を凝し、盡日君王看れども足らずとす。(九)漁陽の鼙鼓地を動して來り、驚破す(一〇)霓裳羽衣の曲。九重の城闕煙塵生じ、(一一)千乘萬騎西南に行く。(一二)翠華搖搖として行つて復た止る。西のかた都門を去る百餘里、(一三)六軍發せず奈何ともする無し。宛轉たる蛾眉馬前に死す。(一四)花鈿地に委して人の收むる無く、(一五)翠翹金雀玉搔頭、君王面を掩うて救ふことを得ず。首を回らせば血涙相和して流れ、黃埃散漫として風蕭索。(一六)雲棧縈り紆つて劍閣に登れば、(一七)峨嵋の山下人の行くもの少なり。旌旗光無く日色薄し、蜀江水碧うして蜀山青し。聖主朝朝暮暮の情、行宮に月を見

更二七國一。竟使下秦人有中九有上。掃二除詩書一。誣二法律一。投二棄俎豆一。陳二鞭杻一。當年何人佐二祖龍一。上蔡公子牽二黄狗一。登レ山刻レ石頌二功烈一。後者無レ繼前無レ偶。皆云皇帝巡二四國一。烹二滅彊暴一。救二黔首一。六經既已委二灰塵一。此鼓亦當レ隨二擊掊一。傳聞九鼎淪二泗上一。欲レ使下萬夫沈レ水取上。暴君縱レ欲窮二人力一。神物義不レ汙二秦垢一。是時石鼓何處避。無三乃天工令二鬼守一。興亡百變物自閑。富貴一朝名不朽。細思二物理一坐歎息。人生安得レ如二汝壽一。

漢皇重レ色思二傾國一。御宇多年求不レ得。楊家有レ女初長成。養在二深閨一人未レ識。天生麗質難二自棄一。一朝選在二君王側一。回レ頭一笑百媚生。六

長恨歌　　白居易

（一）漢皇色を重んじて傾國を思ふ、御宇多年求むれども得ず。（二）楊家に女有り初めて長成す、養はれて深閨に有り人未だ識らず。天の生せる麗質自ら棄て難し、一朝選ばれて君王の側に有り。頭を回らして一笑すれば百媚生ず、（三）六宮の粉黛顏色無し。春寒に浴を賜ふ（四）華清の池、温泉水滑にして凝脂を洗ふ。侍兒扶け起すに嬌として力無し、始めて是れ新に恩澤を受くるの時。（五）雲鬢花顏金歩搖、芙蓉帳暖にして春宵を度る。春宵苦だ短く日高うして起く、此より君王早（六）

人方思二聖賢一。中興天爲生二耆耉一。東征二徐虜一闞二虓虎一。北伐二犬戎一隨二指嗾一。象胥雜還貢二狼鹿一。方召聯翩賜二圭卣一。遂因二鼛鼓一思二將帥一。豈爲二考擊一煩二矇瞍一。何人作レ頌比二嵩高一。萬古斯文齊二岣嶁一。勳勞至大不二矜伐一。文武未レ遠猶忠厚。欲レ尋二年代一無二甲乙一。豈有三文字記二誰某一。自三從周衰

沉んで取らしめんと欲せりと。暴君欲を縱にして人力を窮む、神物(三一)義にして秦の垢に汙されず。是の時石鼓は何の處にか避けし、乃ち天工の鬼をして守らしめし無からんや。(三二)興亡百變物自ら閑に、富貴は一朝名は不朽なり。細に物理を思うて坐に歎息す、人生安ぞ汝が壽なるが如きを得んと。

(一) 嘉祐六年なり東坡時に年二十六 (二) 魯の孔子廟に詣る (三) 前篇參照 (四) 文に我が車既に攻し我が馬亦同じとあり又其魚は維何維鱮維鯉何を以て之を貫く、維楊と柳とあり是等を概括して言へり (五) 衆山の古中にて僅に鼎のみを知るとなり (六) 劍璞と胼胝 (七) 形體全からずして足跟臂肘をあますが如し (八) 稻を害する雜草 (九) 黃帝蒼頡共に文字の祖たり (一〇) 李陽氷と李斯となり、斯は小篆を作り氷はその筆意を得たりこの二人等を小兒視す (一一) 詩經小雅參照 (一二) 宣王の時史籀大篆を作る (一三) 史籀尹吉甫等の人 (一四) 怒れる虎の如く猛し (一五) 通譯官雜沓する程多く至る義 (一六) 方叔召虎は共に宣公の良臣なり圭卣は賞功の物 (一七) 詩經に出づ考も叩くなり矇瞍は盲人 (一八) 詩經小雅に見ゆ (一九) 衡山の一高峰なり (二〇) 秦楚韓趙燕齊魏 (二一) 天下に同じ (二二) 秦の始皇の書を焚きしを指す (二三) 祭の禮器を棄てゝ刑罰の具を備ふ (二四) 秦の始皇 (二五) 李斯は上蔡の人、黃犬の事は襄陽歌に出づ (二六) 始皇鄒嶧山上に石を刻せり (二七) 鄒嶧瑯琊之罘に碑を建て皆其功を頌する語句を刻せり (二八) 人民に同じ (二九) 擊ち碎かる (三〇) 周室の國寶 (三一) 九鼎洛に揚らざりしを言ふ (三二) 人世の興亡變化多きも物は自ら永存す

我車既攻馬亦同。其魚維鱮貫之柳。古器縱橫猶識鼎。衆星錯落僅名斗。模糊半已似瘢胝。詰曲猶能辨跟肘。娟娟缺月隱雲霧。濯濯嘉禾秀稂莠。漂流百戰偶然存。獨立千載誰與友。上追軒頡相唯諾。下挹冰斯同鷇鷇。憶昔周宣歌鴻雁。當時籀史變蝌蚪。厭亂

相唯諾し、下は冰斯を挹じて鷇鷇に同じうす。憶ふ昔周宣が鴻雁を歌ひしとき、當時籀史は蝌蚪を變じぬ。亂を厭うて人々方に聖賢を思ひ、中興大に耆耇を生ず。東のかた徐虜を征して虓虎に鬬たり、北のかた犬戎を伐つて指嗾に隨はしむ。象胥雜還して狼鹿を貢し、方召聯翩として圭卣を賜ふ。遂に鼙鼓に因つて將帥を思ふ、豈考槃の爲に嘆嗄を煩はさんや。何人か頌を作つて崧高に比する。萬古斯の文岣嶁に齊し。勳勞至大なるも矜伐せず。文武未だ遠からず猶ほ忠厚。年代を尋ねんと欲するも甲乙無し、豈文字の誰某と記する有らんや。周衰へて七國を更へてより、竟に秦人をして九有を有たしむ。詩書を掃除して法律を誦し、俎豆を投棄して鞭杻を陳ぬ。當年何人か祖龍を佐けし、上蔡の公子黃狗を牽けり。山に登り石に刻して功烈を頌す、後の者繼ぐこと無く前にも偶無し。皆云ふ皇帝四國を巡りて、彊梁を烹滅して黔首を救ふと。六經既に已に灰塵に委す。此の鼓も亦當に擊搖に隨ふべし。傳へ聞く九鼎の泗上に淪むや、萬夫をして水に

拾レ理則那、方今太平日無事。柄二用儒術一崇二丘軻一。安能以レ此上論列。願借二辯口如一レ懸河。石鼓之歌止二於此一。嗚呼吾意其蹉跎。

冬十二月歳辛丑。我初從レ政見二魯叟一。舊聞二石鼓一今見レ之。文字鬱律蛟蛇走。細觀初以レ指畫レ肚。欲レ讀嗟如二箝在一レ口。韓公好レ古生已遲。我今況又百年後。強尋二偏旁一推二點畫一。時得二一二一遺二八九一。

後の石鼓歌

蘇子瞻

冬十二月歳の辛丑、我初め政に從つて魯叟に見ゆ。舊石鼓を聞いて今之を見るに(一)文字鬱律として蛟蛇走る。細に觀て初(二)は指を以て肚に畫き、讀まんと欲すれども嗟す箝の口に在るが如きを。(三)韓公古を好むも生るゝ已に遲しといへり、我今況んや又百年の後なるをや。強ひて偏旁を尋ねて點畫を推すに、時に一二を得て八九を遺す。(四)我車既に攻し馬も亦同じ、其魚は維鱮之を柳に貫くと。(五)古器縱横猶ほ鼎を識り、衆星錯落僅に斗と名づく。模糊として半は已に瘢胝に似、詰曲(六)猶ほ能く跟肘を辨ず。娟娟たる缺月雲霧に隱れ、濯濯たる嘉禾稂莠に秀づ、(七)百戰に漂流して偶然に存し、千載に獨立して誰と與にか友たらん。上は軒頡を追うて(九)

不到秦。掎摭星宿遺羲娥。嗟余好古生苦晚。對此涕淚雙滂沱。憶昔初蒙博士徵。其年始改稱元和。故人從軍在右輔。爲我量度掘臼科。濯冠沐浴告祭酒。如此至寶存豈多。氈包席裹可立致。十鼓只載數駱駝。薦諸太廟比郜鼎。光價豈止百倍過。聖恩若許留太學。諸生講解得切磋。觀經洪都尚填咽。坐見舉國來奔波。剜苔剔蘚露節角。安置妥帖平不頗。大廈深簷與蓋覆。經歷久遠期無他。中朝大官老於事。詎肯感激徒媕婀。牧童敲火牛礪角。誰復著手爲摩挲。日銷月鑠就埋沒。六年西顧空吟哦。羲之俗書趁姿媚。數紙尚可博白鵝。繼周八代爭戰罷。無人收

して丘軻を崇む、安んぞ能く此を以て上りて論列せん、願くは辯口の懸河の如くなるものを借らん。石鼓の歌は此に止る、嗚呼(三二)吾が意は其れ蹉跎たり。

(一) 周宣王が狩せし事を詩に作り鼓形の石十個に勒せしもの (二) 死歿なり (三) 杜甫李白死し去りて大手筆の人無き意 (四) 周の綱紀漸く衰ふ (五) 政教を明にする政堂 (六) 岐陽の狩獵なり (七) おさへ網せらる (八) 雄峻たる山を斬り崩す (九) 十分にえらみ上げて彫刻す (一〇) 指斥の意 (一一) まちがひなまりの意 (一二) 雅頌にもあらず蝌斗にもあらず (一三) 以下その字體を形容するなり (一四) 陶侃魚梁に漁し梭を得たり之を壁間に挂くるに化して龍となりぬ (一五) 詩の大雅と小雅と (一六) 星辰を拾集して日月を忘れしが如し (一七) 文公元和元年徵されて國子博士と爲れり (一八) 鳳翔府なり (一九) 石鼓を安置せる處 (二〇) 文公時に國子祭酒たり (二一) 時の間に京師に送致すべし (二二) 左傳桓公二年の條參看 (二三) 漢の靈帝の時五經の文字を洪都門外に石刻せるに看る者堵の如くなりき (二四) 奔波の如く殺到せん (二五) 朝廷の貴官 (二六) 躊躇決せざる貌 (二七) 手を着け撫して古を懷ふ者無からん (二八) 晉の王羲之 (二九) 老子經を書いて白鵝に換へし故事による (三〇) 漢魏晉宋齊梁陳隋 (三一) 政は儒術に本づき孔丘孟軻を尊崇す (三二) わが宿志の遂げられざるを傷む義

口炙野火燎。鬼物守護煩撝訶。公從ニ何處一得ニ紙本。毫髮盡備無ニ差訛。辭嚴義密讀難曉。字體不ㇾ類ㇾ隸與ㇾ蝌。年深豈免ㇾ有ニ缺畫。快劍斫斷生蛟鼉。鸞翔鳳翥衆仙下。珊瑚碧樹交ニ枝柯。金繩鐵索鎖紐壯。古鼎躍ㇾ水龍騰ㇾ梭。陋儒編ㇾ詩不ニ收入。二雅褊迫無ニ委蛇。孔子西行

蒙るや、其の年始めて改めて元和を稱せり。故人軍に從つて右輔(一八)に在り、我が爲に量り度つて臼科(一九)を掘り、冠を濯いで沐浴して祭酒(二〇)に告ぐ。此の如き至寶存する豈多からんや、氈に包み蓆に裹んで立ろ(二二)に致すべし。十鼓只數駱駝に載すべし、諸を太廟に薦めて郜の鼎(二一)に比せば、光價豈止に百倍過のみならんや。聖恩若し大學に留るを許されば、諸生と講解して切磋するを得ん。經(二三)を洪都に觀るすら尚ほ塡咽せり、坐に見ん國を擧つて來つて奔波(二四)せんことを。苔を剜り蘚を剔つて節角を露はし、妥帖平にして頗かざるところに安置せん。大厦深簷與に蓋覆して、久遠まで經歷して他無きを期せん。中朝(二五)の大官は事に老けたり、詎ぞ肯て感激徒に媕婀(二六)たるのみならんや。牧童火を敲いて牛は角を礪ぐ、誰か復た手を著けて爲に摩挲(二七)せん。日に銷し月に鑠えて埋沒に就き、六年西顧して空しく吟哦す。羲之(二八)が俗書の姿媚を趁ふすら、數紙(二九)尙ほ白鵝に博ふべし。周に繼ぐこと八代(三〇)爭戰罷むも、人の收拾する無きは理則ち那ぞ。方今太平日に無事なり、儒術を柄用(三一)

張生手持石鼓文。勸我試作石鼓歌。少陵無人謫仙死。才薄將奈石鼓何。周綱陵遲四海沸。宣王憤起揮天戈。大開明堂受朝賀。諸侯劍珮鳴相磨。蒐于岐陽騁雄俊。萬里禽獸皆遮羅。鐫功勒成告萬世。鑿石作鼓隳嵯峨。從臣才藝咸第一。簡選撰刻留山阿。雨淋

張生手に石鼓の文を持し、我に勸めて試に石鼓の歌を作らしむ。(三)少陵人無く(二)謫仙死し、才薄し將に石鼓を奈何せん。(四)周綱陵遲して四海沸き、宣王憤起して天戈を揮ふ。大いに(五)明堂を開いて朝賀を受け、諸侯の劍珮鳴つて相磨す。(六)岐陽に蒐して雄俊を騁すれば、萬里禽獸皆遮羅せらる。(七)功を鐫り成を勒して萬世に告げ、石を鑿り鼓と作して(八)嵯峨を隳る。從臣の才藝咸第一、(九)簡選撰刻して山阿に留む。雨淋ぎ日炙つて野火燒く、鬼物守護して煩しく(一〇)撝訶す。公は何の處よりか紙本を得たる、毫髮盡く備つて差訛無し。辭嚴義密讀めども曉り難く、字體類せず隸と蝌とに。年深うして豈缺畫(一一)有るを免れんや、快劍斫り斷つ生ける蛟鼉。(一二)鸞翔り鳳翥つて衆仙下り、珊瑚碧樹枝柯を交ふ。金繩鐵索鎖紐壯に、(一三)古鼎水に躍つて龍は梭より騰る。陋儒詩を編するとき收め入れず、(一五)二雅褊迫にして委蛇無し。孔子西行秦に到らず、(一四)星宿を掎摭するに羲娥を遺れぬ。嗟余古を好むも生るること苦だ晩く、此に對して涕淚雙んで滂沱たり。(一六)憶ふ昔初めて博士の徵を(一七)

鶴形勁如五
百義士從田
横。英氣凜凜
磨青冥。清如
三千弟子立
孔庭。回琴點
瑟天機鳴。堂
前不入紅粉
意。席上管聽
詩書屛。恠石
篠簜皆充貢。
此物舜廊當
共登。神農知己入本草。靈均竄賢遺騷經。幽人耽翫發仙興。方士服餌延修齡。綵鸞紫鳳
琪花苑。赤虬玉麟芙蓉城。上界眞人好清淨。見此靈苗當大驚。我欲携之朝太清。瑤草不
敢專芳馨。玉皇一笑留香案。錫與有道者長生。人間千花萬草儘榮艷。未必敢與此草爭
高名。

玉皇（ぎょくくわう）(一六)一笑香案（せうかうあん）に留（とゞ）めて、有道（いうだう）の者（もの）に錫與（せきよ）して長生（ちやうせい）せしめん。人間（にんげん）の千花萬草（くわばんさう）
儘榮艶（ましえいえん）なるも、未だ必（かなら）ずしも敢（あへ）て此草（このくさ）と高名（かうめい）を爭（あらそ）はざらん。

❶ 石菖なり ❷ 少好の貌 ❸ 神仙傳に漢武仙に遭ひ一寸九節の石菖あるをきけりとあり ❹ 秦の徐福不老不死の藥を求むるとき童男女各五百人を率ゐて發しぬ ❺ 浙江に在り ❻ 漢初に齊の田横海島より招かれ途に自殺するや島中の五百人亦自殺せり ❼ 顔回が琴を彈じ曾點が瑟を鼓せし事皆論語に出づ ❽ 書經禹貢に見ゆ 篠は矢竹簜は大竹なり ❾ 帝舜の廷上 ❿ 神農氏は石菖を知つて本草中に加へたり (一一) 靈均は離騷に見えたる屈原の假名、屈原の離騷賦中に石菖を載せず (一二) 道士服食して長き齡を延ぶ (一三) 吳綵鳳は紫鳳凰に騎して琪花苑に遊び王子高は赤虬玉麟に乘じて芙蓉城に入れり (一四) 宮名なり、天上に在り (一五) 天上諸種の名草 (一六) 天帝笑を含んでこの草を手許に留めらるべし

石鼓歌（せきこか）(一)

韓退之

有レ石奇峭天琢成。有レ草夭夭冬夏青。人言菖蒲非二一種一。上品九節通二仙靈一。異レ根不レ帶二塵埃氣一。孤操愛結泉石盟。明窓淨几有二宿契一。花林草砌無二交情一。夜深不レ嫌二清露重一。晨光凝有二白雲生一。嫩如下秦時童女登二蓬瀛一。手携二綠玉杖一徐行上。瘦如二天台山上賢聖僧。休レ糧絶レ粒孤

石有り奇峭天琢き成し、草有り夭夭冬夏も青し。人は言ふ菖蒲は一種に非ず、上品は九節ありて仙靈に通ずと。(二)根を異にして塵埃の氣を帶びず、孤操愛結す泉石の盟。(三)明窓淨几宿契有り、花林草砌交情無し。夜深うして淸露の重きを嫌はず、晨光凝つて白雲の生ずる有り。(四)嫩は秦時の童女が蓬瀛に登りて、手づから綠玉の杖を携へて徐ろに行くが如く、(五)瘦は天台山上の賢聖僧が、糧を休め粒を絶つて孤鶴の形あるが如く、(六)勁は五百の義士が田横に從つて、英氣凛凛として靑冥を磨するが如く、淸は三千の弟子が孔庭に立ちて、(七)回の琴點の瑟天機鳴るが如し。堂前入らず紅粉の意、席上嘗て聽く詩書の聲、怪石修篁皆貢に充て、此物は舜(九)郞に當に共に登るべし。(一〇)神農は知己本草に入れ、(一一)靈均は賢を做うて騷經に遺る。幽人耽翫して仙興を發し、(一二)方士服餌して修齡を延ぶ。(一三)綵鸞紫鳳琪花の苑、赤虬玉麟芙蓉の城。上界の眞人淸淨を好む、此の靈苗を見ば當に大いに驚くべし。我之れを携へて(一四)太淸に朝せんと欲す、(一五)瑤草は敢て芳馨を專にせず。

之餘合二王公一。何事便到二山人家一。柴門反關無二俗客一。紗帽籠レ頭自煎喫。碧雲引レ風吹不レ斷。白花浮レ光凝二碗面一。一碗喉吻潤。二碗破二孤悶一。三碗搜二枯腸一。惟有二文字五千卷一。四碗發二輕汗一。平生不平事。盡向二毛孔一散。五碗肌骨清。六碗通二仙靈一。七碗喫不レ得也。唯覺兩腋習習清風生。蓬萊山在二何處一。玉川子乘二此清風一欲二歸去一。山上羣仙司二下土一。地位清高隔二風雨一。安得レ知下百萬億蒼生命。墮二顛崖一受中辛苦上。便從二諫議一問二蒼生一。到頭合レ得二蘇息一否。

位清高にして風雨を隔つ。安ぞ百萬億蒼生の命、(一三)顛崖に墮ちて辛苦を受くることを知るを得ん、便ち諫議(一四)に從つて蒼生を問はん、到頭合に蘇息を得べきや否やと。

(一) 一丈五尺の高さに在り (二) 諫議孟簡の徒卒予を驚かすとなり、周公は論語によりて夢の義に取れり (三) 三個所の捺印あり (四) 良茶の銘なり、その茶三百斤を徴發せんが爲に山家方面に入る (五) 地名常州に在り (六) 珠の如き華 (七) 天子に上つりし餘を諸貴人に頒與するに諫議は更に之を予に分與せられたり (八) さびしく物憫き思 (九) 瘦せ枯れし心胸を搜つて何か吟じたしとなり (一〇) 神仙に通ず (一一) 東海中に在りといふ仙山の名 (一二) 盧仝自ら玉川子と號す (一三) 天下の人民が崖谷に陷りし如き苦痛に坐するを知らざるべし (一四) 諫議君に問はん人民は予がこの茶を受けしが如くなるを得べきかと

菖蒲歌 (一)

日高丈五睡正濃。軍將扣レ門驚二周公一。口傳諫議送二書信一。白絹斜封三道印。開緘宛見二諫議面一。首閲月團三百片。聞道新年入二山裏一。蟄蟲驚動春秋起。天子須レ嘗二陽羨茶一。百草不二敢先開一レ花。仁風暗結珠蓓蕾。先春抽出黄金芽。摘レ鮮焙レ芳旋封裹。至精至好且不レ奢。至尊

日高うして丈五睡正に濃なり、軍將門を扣いて周公を驚かす。口傳す諫議(一)書信を送ると、白絹斜に封ず(二)三道の印、緘を開けば宛ら諫議の面を見るがごとし、首に閲る(三)月團の三百片、聞道く新年山裏に入るに、蟄蟲驚動して春秋に起ると。天子須らく(四)陽羨の茶を嘗むべし、百草敢て先づ花を開かず。仁風暗に結ぶ(五)珠蓓蕾、春に先つて抽出す黄金芽。鮮を摘み芳を焙て旋封裹し、至精至好且奢らず、(六)至尊の餘は王公に合へり、何事ぞ便ち山人の家に到る。柴門反つて關して俗客無く、紗帽頭を籠めて自ら煎喫す。碧雲風を引いて吹いて斷たず、白花光を浮べて碗面に凝る。一碗にして喉吻潤ひ、二碗にして孤悶を破る。三碗にして枯腸を捜るに、(七)推文字五千巻有るのみ。四碗にして輕汗を發し、平生不平の事(八)盡く毛孔に向つて散ず。五碗にして肌骨清く、六碗にして(九)仙靈通ず、七碗なれば喫ふこと得ず、唯覺ゆ兩腋習習として清風生ずるを。(一〇)蓬萊山は何の處に在りや、(一一)玉川子此の清風に乘じて歸り去らんと欲す。山上の羣仙下土を司り、地

霧縠綃衣。辛苦無レ歡容不レ理。帝憐三獨居無二與娛一。河西嫁二與牽牛夫一。自二從嫁一後廢二織紝一。綠鬢雲鬟朝暮梳。貪レ歡不レ歸天帝怒。責歸卻踏二來時路一。但令二一歲一相見一。七月七日橋邊渡。別多會少知奈何。卻憶從前歡愛多。匆匆萬事說不レ盡。玉龍已駕隨二羲和一。河邊靈官催レ曉發。令嚴不三肯輕二離別一。便將レ淚作二雨滂沱一。淚痕有レ盡愁無レ歇。我言二織女一君莫レ歎。天地無レ窮會相見。猶勝三嫦娥不レ嫁レ人。夜夜孤二眠廣寒殿一。

會は少し知る奈何ぞ、卻つて憶ふ從前歡愛の多きを、匆匆として萬事說き盡さず。(六)玉龍已に駕して羲和に隨ひ、河邊の靈官(七)曉を催して發す。令嚴にして肯て離別を輕うせず、便ち淚を將て雨の滂沱たるを作す。淚痕は盡くる有るも愁は歇む無し。我は織女に言ふらく君歎くこと莫れ、天地は窮り無し會〻相見ゆるは、猶ほ嫦娥の人に嫁せずして、夜夜廣寒殿(八)に孤眠するに勝れりと。

㊀秋の神の名なり、斗杓は北斗星の位置 ㊁鵲を集めて銀河の橋を作らしむ ㊂織女星 ㊃紫色の薄絹 ㊄命に從つて嫁し去りて後は怠惰となりぬ ㊅羲和羲仲は日を掌る、太陽西に落つるなり ㊆仙人の官司ある者 ㊇龍出廣寒宮は月宮殿の名なり

茶歌　盧仝

自業豈有レ他。蒼生如二命窮一。吾道成二蹉跎一。直須三爲弔二天下人一。何必嫁恨傷二丘軻一。浩浩歌。天地萬物如レ吾何。玉堂金馬在二何處一。雲山石室高嵯峨。低レ頭欲レ耕地雖レ少。仰レ面長嘯天何多。請君醉レ我一斗酒。紅光入レ面春風和。

（一）孔丘孟軻　（二）玉の樓殿と飾り多き車と馬　（三）隱遁の地を指す　（四）醉うて顏色紅を呈するなり

七夕歌　張文潛

人間一葉梧桐飄。蓐收行レ秋回二斗杓一。神官召集役二靈鵲一。直渡二銀河一橫作レ橋。河東美人天帝子。機杼年年勞二玉指一。織成雲

人間一葉梧桐飄る、（一）蓐收秋を行りて斗杓を回す。神官（二）召集して靈鵲を役し、直に銀河を渡つて橫に橋を作す。（三）河東の美人は天帝の子なり、機杼年年玉指を勞す。織り成す雲霧（四）紫綃衣、辛苦して歡無く容も理めず。帝は獨居して與に娛む無きを憐み、河西の牽牛夫に嫁與す。（五）從嫁してより後は織紝を廢し、綠鬢雲鬟朝暮に梳り、歡を貪つて歸らず天帝怒る。責め歸して卻つて來時の路を踏ましめ、但一歲に一たび相見えしむ。七月七日橋邊の渡、別は多く

野耕叟數畝禾。喜來起作ニ商家霖一。怒後便把ニ周王戈一。又不レ見子陵橫レ足加ニ帝腹一。帝不ニ敢動一。豈敢訶。皇天爲忙逼。星宿相擊摩。可レ憐相府癡。邀請先經過。浩浩歌。天地萬物如レ吾何。屈原枉死汨羅水。夷齊空餓西山坡。丈夫犖犖不レ可レ羈。有レ身何用自滅磨。吾觀ニ聖賢心一。

んや。皇天爲に忙逼し、（八）星宿相擊摩す。憐むべし相府癡なるを、（九）邀へ請うて先づ經過す。浩浩として歌ふ、天地萬物吾を如何せん。屈原（一〇）は枉死す汨羅の水、（一一）夷齊は空しく餓う西山の坡。丈夫犖犖羈ぐべからず、身有り何ぞ用ひん自ら滅磨するを。吾聖賢の心を觀るに、自ら樂むのみ豈他有らんや。蒼生は命窮するが如し、吾道蹉跎を成す。直に須く爲に天下の人を弔すべし、何ぞ必ずしも嫌恨して丘軻（一二）を傷ましめん。浩浩として歌ふ、天地萬物我を如何せん。玉堂金馬（一三）何の處にか在る、雲山石室（一四）高うして嵯峨たり。頭を低れて耕さんと欲す地少しと雖も、面を仰いで長嘯すれば天何ぞ多き。請ふ君我に醉はしめよ一斗の酒、紅（一五）光面に入つて春風和せん。

（一）孟子浩然の氣の義　（二）衣を棄てゝ出て仕へ俸祿を受くとなり　（三）呂尙渭濱に釣し周文王に用ひらる　（四）伊尹莘野に耕し湯王に聘せらる　（五）殷室の良臣として大旱の雨の如くなりぬ　（六）呂尙が武王を佐けて殷紂を滅せしを指す　（七）嚴子陵光武帝と臥て足を帝の腹に加ふ　（八）うろたへさわいで天文に變異を現はす　（九）侯霸が子陵を迎ふるや子陵屈せざりき　（一〇）楚王の族なり讒に遭うて汨羅に投死せり　（一一）伯夷叔齊首陽山に餓死せり

近レ床。大學儒生東魯客。二十辭レ家來射レ策。夜書二細字一綴二語言一。兩目眵昏頭雪白。此時提挈當二案前一。看レ書到レ曉那能眠。一朝富貴還自恣。長檠高張照二珠翠一。吁嗟世事無レ不レ然。墻角君看短檠棄。

恣にすれば、長檠高く張つて珠翠を照す。吁嗟世事然らざるは無し、墻角君看よ短檠棄てらるゝを。

(一)長き燈臺　(二)空しく閨を守る婦女なり　(三)燈心をかき立つ　(四)作者自ら言ふ　(五)短檠を机前に持ち來す　(六)一朝富貴となれば短檠を棄てゝ顧みざる意なり

浩浩歌　馬子才

浩浩歌。天地萬物如レ吾何。用レ之解レ帶食二大倉一。不レ用拂レ枕歸二山阿一。君不レ見渭川漁父一竿竹。莘

浩浩として歌ふ、天地萬物吾を如何せん。之を用ふるときは帶(一)を解いて大倉に食み、用ひられざれば枕を拂うて山阿に歸る。君見ずや渭川(二)の漁父一竿の竹、莘野(三)の耕叟鋤畝の禾。喜び來れば起つて商家の霖(四)と作り、怒つて後には便ち周王の戈を把る。又見ずや子陵(五)足を横へて帝腹に加ふるを、帝敢て動かず豈敢て訶ら

峯巒裏。日不レ落兮月長生。雲片片兮水冷冷。經レ年胡蝶飛不レ去。巣レ歳桃花結不レ成。一片石數株松。遠又淡近又濃。不レ出二門庭三五歩一。觀盡江山千萬重。

の松、遠くして又淡く、近うして又濃なり。門庭の三五歩を出でずして、觀盡す江山千萬重。

(一)彩色を著くべき理法 (二)草小屋 (三)雲中の桃花咲けども實ることなしとなり、以上皆之に倣ふ

長檠八尺空自長。短檠二尺便且光。黃簾綠幕朱戶閉。風露氣入二秋堂一涼。裁レ衣寄レ遠淚眼暗。搔レ頭頻挑移

短檠の歌　　韓退之

長檠は八尺空しく自ら長く、短檠は二尺便にして且つ光あり。黃簾綠幕(一)朱戶閉ぢ、風露の氣は秋堂に入つて涼し。衣を裁つて遠に寄せ淚眼暗く、頭を搔いて頻に挑げ移して床に近づく。大學の儒生(二)東魯の客、二十家を辭して來つて策を射る。夜細字(三)を書して語言を綴り、兩目眵み(四)昏んで頭は雪白なり。此時提挈(五)して案前に當り、書を看て曉に到るまで那ぞ能く眠らん。(六)一朝富貴還つて自ら

香飛入千人硯。麻衣皎皎光如レ雪。一一重瞳親鑒別。孤寒得レ路荷ニ君恩ー。聚レ首皆言盡ニ臣節ー。小臣蹤迹本塵泥。登科曾賦ニ御前題ー。屈レ指方經ニ五六載ー。如今已上ニ青雲梯ー。位列ニ諫官ー無ニ一語ー。自愧將レ何報ニ明主ー。應レ制非才但涙垂。強作ニ狂歌ー歌ニ舜禹ー。

官に列するも一語だも無く、自ら愧づ何を將てか明主に報いん。制に應じて(八)非才但涙垂る。強ひて狂歌を作つて舜禹を歌ふ。(九)

(一) 御位を稱す (二) 文衡を司る意 (三) 試驗によりて俊才を拔かんとするなり (四) 貧士曾白麻の衣を着く (五) 天子の眼を言ふ、舜項羽共に重瞳なりき (六) さびしき一人身の貧乏者 (七) 作者自ら言ふ (八) 詔に因て詩を賦せよとの詔なり (九) 舜禹にも比すべき君の盛德を歌ふ

畫山水の歌　　吳融

良工善得ニ丹青理ー。輒向ニ茅茨ー畫ニ山水ー。地角移來方寸間。天涯寫在ニ

良工善く丹青の理を得たり、輒ち茅茨に向つて山水を畫く。地角移し來る方寸の間、天涯寫して筆鋒の裏に在り。(一)日落ちず月長へに生じ、雲片片水冷冷。(二)年を經るの蝴蝶飛んで去らず、年を累ぬるの桃花結べども成らず。(三)一片の石數株

牀牀屋漏無二乾處一。雨脚如レ麻未二斷絶一。自レ經二喪亂一少二睡眠一。長夜沾濕何由徹。安得二廣廈千萬間一。大庇二天下寒士一倶歡レ顏。風雨不レ動安如レ山。嗚呼何時眼前突兀見二此屋一。吾廬獨破受二凍死一亦足。

中に隱れ入る　(六) 家内の小兒たちを指す　(七) 夜を明す　(八) 廣大の家屋　(九) 若しこの大廈を建つるを得ばとの意

聖上が親ら貢士を試するを觀る歌　王元之

天王出レ震寰宇清。奎星燦燦昭二文明一。詔令三郡國貢二多士一。大張二一網一羅二群英一。聖情孜孜終不レ倦。日斜猶御二金鑾殿一。宮柳低垂三月煙。爐

天王震(一)より出でて寰宇(二)清く、奎星燦燦として文明昭かなり。詔して郡國をして多士を貢せしめ、大いに一網(三)を張つて群英を羅す。聖情孜孜として終に倦まず。日斜にして猶ほ金鑾殿に御す。宮柳低く垂る三月の煙、爐香飛び入る千人の硯、(四)麻衣皎皎として光は雪の如く、一一重瞳(五)もて親く鑒別す。(六)孤寒路を得て君恩を荷ひ、首を聚めて皆言ふ臣節を盡さんと。(七)小臣の蹤迹本塵泥、登科曾て御前の題を賦す。指を屈すれば方に五六載を經たり。如今已に青雲の梯を上り、位諫

八月秋高風
怒號。卷我屋
上三重茅。茅
飛度江洒江
郊。高者挂罥
長林梢。下者
飄轉沈塘坳。
南村羣童欺
我老無力。忍
能對面爲盜
賊。公然抱茅
入竹去。脣燋
口燥呼不得。
歸來倚杖自
歎息。俄頃風
定雲黑色。秋
天漠漠向昏
黑。布衾多年
冷似鐵。嬌兒
惡臥踏裏裂。

八月秋高うして風怒號し、我が屋上の三重茅(一)を卷く。茅飛びて江を度り江郊に洒ぎ、高き者は長林の梢に挂罥し(二)、下き者は飄轉して塘坳(三)に沈む。南村の羣童我が老いて力無きを欺き、忍んで能く面に對して盜賊を爲す。公然として茅を抱いて竹(四)に入り去り、脣燋し口燥いて呼べども得ず、歸り來つて杖に倚り自ら歎息す。俄頃(五)に風定つて雲黑色、秋天漠漠として昏黑に向へば、布衾多年冷なること鐵に似、嬌兒(六)惡しく臥して裏を踏んで裂く。床 床屋漏れて乾ける處無く、雨脚麻の如くして未だ斷絶せず。喪亂を經てより睡眠すること少く、長夜に沾濕す何に由りてか徹せん(七)。安んぞ廣廈(八)の千萬間なるを得て、大いに天下の寒士を庇うて倶に顏を歡ばしめ、風雨にも動かされずして安きこと山の如くならしめん。嗚呼何の時か眼前突兀として此屋(九)を見ん。吾廬獨り破れて凍死を受くとも亦足らん。

(一) 三重に葺ける屋根茅を吹き飛ばす　(二) 引きかゝる　(三) 小高き土手の邊　[illegible] 壓倒し馬鹿にす　(四) 竹藪の

十日畫二一水一。五日畫二一石一。能事不レ受相促迫。王宰始肯留二眞跡一。壯哉崑崙方壺圖。挂二君高堂之素壁一。巴陵洞庭日本東。赤岸水與二銀河一通。中有三雲氣隨二飛龍一。舟人漁子入二浦溆一。山木盡亞二洪濤風一。尤工二遠勢一古莫レ比。咫尺應三須論二萬里一。焉得二幷州快剪刀一。剪取吳松半江水。

十日に一水を畫き、五日に一石を畫く。能事は受けず相促迫するを。(二)王宰始めて肯て眞跡を留む。壯なる哉崑崙方壺(三)の圖、君が高堂の素壁に挂く。巴陵洞庭日本の東、(四)赤岸の水は銀河と通ず。中に雲氣の飛龍に隨ふ有り、舟人漁子浦溆に(五)入り、山木盡く洪濤の風に亞す。(六)尤も遠勢に工なること古にも比莫く、咫尺應に須らく萬里を論すべし。焉んぞ幷州(七)の快剪刀を得て、剪取せん吳松半江の水。

(一) 蜀中の名畫工 (二) 催促するも出來る事に非ず (三) 西蕃の名山と東海中の仙山と (四) 南兗州に赤岸山あり江中に臨めり (五) 浦邊に泊す (六) 風に吹きかためられしなり (七) 幷州出來の善き鋏を得てこの圖の一部を剪取したしとなり宋靖が顧愷之の馬を賞したる語なり

茅屋秋風の爲に破らるゝ歌

君不レ見徐卿二子生絶奇。感二應吉夢一相追隨。孔子釋氏親抱送。並是天上麒麟兒。大兒九齡色清徹。秋水爲レ神玉爲レ骨。小兒五歲氣食レ牛滿堂賓客皆回レ頭。吾知徐公百不レ憂。積善袞袞生二公侯一。丈夫生レ兒有下如二此二雛一者上。名位豈肯卑微休。

徐卿二子が歌（一）

君見ずや、徐卿が二子は生れて絶だ奇なり、吉夢（二）に感應して相追隨す。孔子（三）釋氏親ら抱送す、並に是れ天上の麒麟兒なり。大兒は九齡にして色清徹、秋水を神と爲し玉を骨と爲す。小兒は五歲にして氣（四）牛を食ふ、滿堂の賓客皆頭を回らす。吾は知りぬ、徐公が百て憂へざらんことを。積善袞袞（五）として公侯を生めり。丈夫兒を生むこと此の二雛の如くなる者有らば、名位豈肯て卑微（六）にして休せんや。

（一）西川兵馬使徐知道なるべしといふ（二）詩經に吉夢は維何維熊維羆とあるによる（三）夢中の事なり（四）尸子に虎豹の子未だ文を成さゞるに旣に牛を食ふの氣あり云々（五）多く盛なる貌（六）卑賤微少に終る筈なし

戲に王宰が畫山水に題する歌（一）

先生有才過屈宋。德尊一代常坎軻。名垂萬古知何用。杜陵野客人更嗤。被褐短窄鬢如絲。日糴太倉五升米。時赴鄭老同襟期。得錢即相覓。沽酒不復疑。忘形到爾汝。痛飲眞吾師。清夜沈沈動春酌。燈前細雨簷花落。但覺高歌有鬼神。焉知餓死塡溝壑。相如逸才親滌器。子雲識字終投閣。先生早賦歸去來。石田茅屋荒蒼苔。儒術於我何有哉。孔丘盜跖俱塵埃。不須聞此意慘愴。生前相遇且銜盃。

米を糴て、(八)時に鄭老が同襟期に赴く。錢を得ては即ち相覓め、酒を沽うて復た疑はず。形(一〇)を忘れて爾汝に到り、(九)痛飲眞に吾師なり。清夜沈沈として春酌を動かし、燈前の細雨に簷花(一一)落つ。但覺ゆ高歌鬼神有るを、焉ぞ知らん餓死して溝壑(一二)に塡つるを。(一三)相如が逸才すら親ら器を滌ひ、子雲(一四)が字を識れるも終に閣より投ぜり。先生早く歸去來を賦せよ、石田茅屋蒼苔に荒れたり。儒術は我に於て何か有らんや。(一五)孔丘盜跖俱に塵埃。此を聞いて意に慘愴するを須ひず、生前相遇ふとき且く盃を銜まん。

(一) 混同區別なき貌 (二) 廣文館博士鄭虔 (三) 甲乙丙丁の次序を指す (四) 伏義氏也 (五) 屈原宋玉 (六) 車行利あらざる貌 (七) 杜甫自ら言ふ (八) 教助米・[illegible]ること (九) 襟懷を同じうする義 (一〇) 形骸を土木にして交情日に密なり (一一) 軒に近き所の花 (一二) 溝や谷の中にのたれ死するなり (一三) 司馬相如貧なるとき器を市に洗へり (一四) 揚雄は王莽の時天祿閣上より投死せり (一五) 聖人孔子も大盜盜跖も死したれば同じく塵埃のみ

風前。蘇晉長齋繡佛前。醉中往往愛逃禪。李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙。張旭三盃草聖傳。脫帽露頂王公前。揮毫落紙如雲煙。焦遂五斗方卓然。高談雄辯驚四筵。

(一) 賀知章なり、醉うて馬に騎す時人笑うて船に乘るが如しとす (二) 王肆が故事なり、眼かすんで井に落ちば水底に眠るならんとなり (三) 汝陽王璡なり、天に朝すは天子に謁見すること (四) 麴は酒の素なり、故に曰ふ (五) 隴右に酒泉郡あり (六) 李適之左丞相たり、毎日の酒興に多くの金を費せり (七) 李の詩に賢を避けて初めて相を罷め聖を樂んで且つ盃を銜む云々 (八) 崔宗之なり (九) 昔の阮籍が俗客に對せし時の眼のふりなり (一〇) 蘇晉長齋繡佛を好み惠澄の畫せし彌勒佛を酷愛せり (一一) 席を逃れ去つて坐禪す (一二) 玄宗白蓮池に遊ぶとき白を召すに醉うて船に上る能はず高力士扶けて上せしことあり (一三) 張旭の草書 (一四) 平常は吃なるも酒後は雄辯注射するが如くなりし人

醉時歌

諸公袞袞登臺省。廣文先生官獨冷。甲第紛紛厭梁肉。廣文先生飯不足。先生有道出羲皇。

醉時の歌

諸公は袞袞として臺省に登るに、(一)廣文先生は官獨り冷なり。(二)甲第紛紛として梁肉に厭くに、廣文先生は飯足らず。先生の有道は羲皇より出で、(三)先生の有才は屈宋にも過ぎたり。(四)徳は一代に尊きも常に坎軻、(五)名は萬古に垂るゝも知りぬ何の用ぞ。(六)杜陵の野客は人更に嗤ふ、(七)被褐短窄にして鬢絲の如し。日に太倉五升の

猿夜聲。

知章騎レ馬似レ乘レ船。眼花落レ井水底眠。汝陽三斗始朝レ天。道逢二麴車一口流レ涎。恨不三移レ封向二酒泉一。左相日興費二萬錢一。飲如三長鯨吸二百川一。銜レ盃樂レ聖稱レ避レ賢。宗之瀟洒美少年。擧レ觴白眼望二青天一。皎如三玉樹臨二

飲中八僊の歌

杜子美

(一)知章が馬に騎るは船に乘るに似たり、(二)眼花井に落ちて水底に眠る。(三)汝陽は三斗にて始めて天に朝す、道に(四)麴車に逢うて口に涎を流し、恨むらくは封を移して(五)酒泉に向はざることを。(六)左相は日興萬錢を費し、飲むこと長鯨の百川を吸ふが如く。(七)盃を銜んで聖を樂み賢を避くと稱す。(八)宗之は瀟洒たる美少年なり、觴を擧げて(九)白眼に青天を望むとき、皎として玉樹の風前に臨むが如し。(一〇)蘇晉は長齋す繍佛の前、醉中往往(一一)逃禪を愛す。李白は一斗詩百篇、長安市上酒家に眠る。(一二)天子呼來れども船に上らず、自ら稱すらく臣は是れ酒中の仙と。(一三)張旭は三盃草聖傳ふ、帽を脱ぎ頂を露はす、王公の前、毫を揮うて紙に落せば雲煙の如し。(一四)焦遂は五斗方に卓然、高談雄辯四筵を驚かす。

鸚鵡杯。百年三萬六千日。一日須レ傾三百杯。遥看漢水鴨頭綠。恰似二蒲萄初醱一レ醅。此江若變作二春酒一。壘麴便築糟丘臺。千金駿馬換二小妾一。笑坐二金鞍一歌二落梅一。車傍側掛一壺酒。鳳笙龍管行相催。咸陽市上嘆二黄犬一。何如三月下傾二金罍一。君不レ見晉朝羊公一片石。龜龍剝落。生二莓苔一。淚亦不レ能二爲レ之墮一。心亦不レ能二爲レ之哀一。淸風明月不レ用二一錢買一。玉山自倒非二人推一。舒州杓。力士鐺。李白與レ爾同二死生一。襄王雲雨今安在。江水東流

へ、笑つて金鞍に坐して落梅を歌ふ。(一〇)車傍側に掛く一壺の酒、鳳笙龍管(一一)行〻相催す。咸陽市上に黄犬を嘆ぜんよりは、(一二)何ぞ月下に金罍(一三)を傾くるに如かんや。君見ずや、晉朝の羊公一片の石、(一四)龜龍(一五)剝落して莓苔を生ぜり。淚亦之が爲に墮つること能はず。心亦之が爲に哀しむこと能はず。淸風明月一錢の買ふことを用ひず、玉山(一六)自ら倒る人の推すに非ず。舒州の杓、力士の鐺、(一七)李白爾と死生を同じうす。襄王(一八)の雲雨今安んか在る。江水東流猿夜聲く。

(一) 晉の羊祜が峴に建てたる墮淚碑の在る所　(二) 白帽なり　(三) 白色の馬蹄なり梁の武帝が襄陽に在りし時の童謠による　(四) 山簡は濤の子、荊州の時、時に出でゝ酣醉す　(五) 鵜の形したる杓と鸚鵡貝にて造れる酒杯と　(六) 鴨頭の鴨の如き綠色　(七) 葡萄酒始めて醱酵す　(八) 糟を積んで高臺をなす程に飲まん　(九) もと金鞍に作る今本集により改む小妾は妓女なり後魏曹彰の故事による　(一〇) 笛曲の名　(一一) 笙は鳳身に象る管は前に出づ　(一二) 秦の李斯が刑せられし時の語なり　(一三) 銅製の酒器　(一四) 前出の墮淚碑　(一五) 碑下の龜形なり一に龜頭に作る　(一六) 稽叔夜の故事による世說に見ゆ　(一七) 舒州は酒杓を出す力士は鐺匠の銘なるべし　(一八) 前出楚襄王が故事

大風起兮雲
飛揚。威加海
內兮歸故鄕。
安得猛士兮
守四方。

落日欲沒峴
山西。倒著接
䍦花下迷。襄
陽小兒齊拍
手。攔街爭唱
白銅鞮。傍人
借問笑何事。
笑殺山翁醉
似泥。鸕鷀杓。

大風歌(一)　漢高祖

大風起つて雲飛揚す、威海内に加つて故郷に歸る。安んぞ猛士(二)を得て四方を守らしめん。

(一) 史記高祖本紀參照　(二) 實役の人物

襄陽歌　李太白

落日没せんと欲す、峴山(一)の西、倒に接䍦を著けて花下に迷ふ。襄陽の小兒齊しく手を拍ち、街を攔つて爭ひ唱ふ、白銅鞮(二)。傍人借問す、何事をか笑ふ。笑殺す、山翁(三)醉うて泥に似たるを。鸕鷀(五)の杓、鸚鵡の杯。百年三萬六千日、一日傾くべし三百杯。遙に看る漢水鴨頭(六)の綠、恰も蒲萄(七)の初めて醅を醱するに似たり。此の江若し變じて春酒と作らば、壘麴(八)便ち築かん糟丘臺。千金(九)の駿馬もて小妾に換

翁釋子。亦往往而逢兮。吾嘗惡二其學幻而言哤一。但見丹霞翠壁。遠近映二樓閣一。晨鐘暮鼓。杳靄羅二旛幢一。幽花野草不レ知二其名一兮。風吹霧濕香二澗谷一。時有二白鷗飛來雙一。幽尋遠去不レ可レ極。便欲三絕レ世遺二紛厖一。羨君買レ田築レ室老二其下一。插レ秧盈レ疇兮釀レ酒盈レ缸。欲レ令下浮嵐暖翠千萬狀。坐臥常對中乎軒窓上。君懷磊砢有二至寶一。世俗不レ辨珉與レ玒。策レ名爲レ吏二十載。靑衫白首困二一邦一。寵榮聲利不レ可三以苟屈一兮。自レ非三靑雲白石有二深趣一。其氣兀硉何由降。丈夫壯節似レ君少。嗟我欲レ說。安得三巨筆如二長杠一。

の壯節君に似ること少し。嗟我說かんと欲するも、安んぞ巨筆の長杠(一八)の如くなるものを得ん。

(一) 諸說あれども江中二個島の洲の名なるべし (二) 峯を合ひ擁み合ふ (三) 大空の曇んで暗き狀 (四) 大地の廣く高き有樣 (五) 山谷を空谷 (六) 雪の如く石磯に飛注す (七) 佛儒二家の學究幻にして言語雜なるを惡む (八) 寺院のぼりなど (九) 山深く谷深く遠く分け入るも其窮を知らず (一〇) 紛亂せる俗間 (一一) 劉渙字は凝之官を去つてこの山に隱る歐公この詩を贈る (一二) 浮嵐暖翠の變化窮りなき狀 (一三) 胸中に至上の寶を貯ふるなり (一四) 玉と石との見分つかず (一五) 進士及第吏籍に就けるを言ふ (一六) 一縣令に終りし不遇を稱す (一七) 拔俗絕群なる君の心は決して滿足せじ (一八) 筆竿の類

歌類

屹二立乎長江一。長江西來走二其下一。是爲二楊瀾左里一兮。洪濤巨浪日夕相舂撞。雲消風止水鏡淨。泊レ舟登レ岸而遠望兮。上摩二青蒼以晻靄一。下壓二后土之鴻龐一。試往造二乎其間一兮。攀二緣石磴一窺二空谾一。千巖萬壑響二松檜一。懸崖巨石飛流淙。水聲聒聒亂二人耳一。六月飛雪灑二石谼一。仙

え風止んで水鏡淨し、舟を泊し岸に登つて遠く望む。上は青蒼の以だ晻靄たるを摩し、下は(四)后土の鴻龐たるを壓す。試に往いて其間に(三)造り、石磴を攀緣して(五)空谾を窺へば、千巖萬壑松檜響き、懸崖巨石飛流淙たり。水聲聒聒として人耳を亂り、六月(六)飛雪石谼に灑ぐ。仙翁釋子、亦往往にして逢ふ。吾嘗て其學の幻にして言の哤なるを惡めり。但見る丹霞翠壁、遠近樓閣に映じ、晨鐘暮鼓、杳(七)靄として(八)旛幢を羅ぬるを。幽花野草其名を知らず、風吹き霧濕つて澗谷に香し。時に白鶴の飛來して雙ぶ有り、(九)幽尋遠去極むべからず。便ち世を絕つて(一〇)紛厖を遺れんと欲す。(一一)羨む君が田を買ひ室を築いて其下に老ゆるを。秧を插みて疇に盈て、酒を釀して缸に盈つ。(一二)浮嵐暖翠の千萬狀をして、坐臥常に軒窓に對せしめんと欲す。君が懷は磊砢として(一三)至寶有り、世俗辨ぜず、(一四)珉と玒とを。(一五)名を棄して吏と爲ること(一六)二十載、青衫白首一邦に困しむ。寵榮聲利は以て苟も屈すべからず。青雲白石の深趣有るに非ざるよりは、其意(一七)兀硉何に由りてか降せん。丈夫

還。是途巇岩不レ可レ攀。但見悲鳥號二古木一。雄飛呼レ雌遶二林間一。又聞子規啼二夜月一愁二空山一。蜀道之難難三於上二青天一。使レ人聽レ此凋二朱顏一。連峯去レ天不レ盈レ尺。枯松倒掛倚二絕壁一。飛湍瀑流爭喧豗、砯レ崖轉レ石萬壑雷。其險也如レ此。嗟爾遠道之人。胡爲乎來哉。劍閣崢嶸而崔嵬。一夫當關、萬夫莫レ開。所レ守或匪レ親。化爲二狼與一レ豺。朝避二猛虎一、夕避二長蛇一。磨レ牙吮レ血、殺レ人如レ麻。錦城雖レ云レ樂。不レ如二早還一レ家。蜀道之難難三於上二青天一。側レ身西望長咨嗟。

(一) 蜀人が驚呼する語なり (二) 共に古蜀の君王の名なり、揚雄の蜀王本紀に委し (三) 關中の地とだに交通せざる義 (四) 長安の西方太伯山の側に一條の小路あり (五) 秦の惠王金牛の計を以て蜀の壯士を殺す (六) 棧道を形容す (七) 銀河にとゞく程の高山 (八) 一に鶴につくる (九) 猿の一種なり (一〇) 青泥山のめぐれる坂路 (一一) 參井は天の星名 (一二) 蜀に幸せる玄宗の還御を望みる意 (一三) 蜀に幸するの話を聞いて函關を閉したり (一四) 遠方疎斥の臣は忠志ありとも往くによしなし (一五) 張載が劍閣銘左思が蜀都賦などに見ゆ (一六) 以下蜀と帝京と離隔するがために何時不軌の變あらんも知れずとなり (一七) 成都一に錦官城と呼ぶ

盧山高

歐陽永叔

盧山高哉幾千仞兮根盤幾百里。巖然

盧山高いかな、幾千仞ぞ、根は盤る幾百里、巖然として長江に屹立す。長江西より來つて其下に走る。是れを楊瀾左里と爲す。洪濤巨浪、日夕に相舂撞す。雲消

秦塞ニ通中人煙上。
西當ニ太白ニ有ニ
鳥道ニ可三以橫ニ
絕峨嵋巓ニ。地
崩山摧壯士
死。然後天梯
石棧相勾連。
上有ニ橫ニ河斷レ
海之浮雲ニ。下
有ニ衝レ波逆折
之回川ニ。黃鶴
之飛尙不レ能レ
過。猿猱欲レ度
愁ニ攀緣ニ。靑泥
何盤盤。百步
九折縈ニ岩巒ニ。
捫レ參歷レ井仰
脅息。以レ手撫レ
膺坐長歎。問レ
君西遊何當レ

いて逆折するの回川有り。(八)黃鶴の飛尙ほ過る能はず、(九)猿猱度らんと欲するも攀緣を愁ふ。(一〇)靑泥何ぞ盤盤たる百步に九折岩巒を縈り。(一一)參を捫し、井を歷て仰いで脅息し、手を以つて膺を撫つて坐に長歎す。君に問ふ、(一二)西遊何か當に還るべき。畏途巉岩攀づべからず。但見る悲鳥の古木に號ぶを、雄飛んで雌を呼び、林間を遶る。又聞く子規夜月に啼いて空山に愁ふるを。蜀道の難は靑天に上るよりも難し、人をして此れを聽いて(一三)朱顏を凋ましむ。連峰天を去ること尺に盈たず。枯松倒に掛つて絕壁に倚る。飛湍瀑流爭うて喧豗し、崖を砯ち石を轉じて萬壑雷なる。其險なるや此の如し。(一四)嗟爾遠道の人、胡爲れぞ來らんや。劍閣崢嶸として崔嵬たり、(一五)一夫關に當れば萬夫も開く莫し。(一六)守る所、或は親に匪ず、化して狼と豺と爲る。朝には猛虎を避け夕には長蛇を避く。牙を磨き、血を吮うて、人を殺すこと麻の如し。(一七)錦城樂しと云ふと雖も、早く家に還らんには如かじ。蜀道の難は靑天に上るよりも難し。身を側てて西望長く咨嗟す。

朝力士脫レ靴後。玉上青蠅生二一箇一。紫皇案前五色麟。忽然擊斷黃金鎖。五湖大浪如二銀山一。諾船載レ酒提レ鼓過。賀老成二異物一。顚狂誰敢和。寧知江邊墳。不二是猶醉臥一。

提つて過ぐ。(四)賀老異物と成りてより、顚狂誰か敢て和せん。寧ぞ知らんや、(五)江邊の墳、是れ猶ほ醉臥するならずや。

(一) 天寶中玄宗詔を下して李白を召び迎ふるに七寶牀を以てす　(二) 李白醉うて高力士をして靴を脫せしむ力士恨み竄す、即ち白玉上に一百の蠅を生じたるが如し　(三) 天帝机邊の麒麟が黃金の鎖を引きさりて人間に生れたるなり　(四) 賀知章既に死す　(五) 采石江邊に醉死せしを指す

噫吁嚱危乎高哉。蜀道之難。難三於上二青天一。蠶叢及魚鳧。開レ國何茫然。爾來四萬八千歲。不下與二

蜀道難　　李太白

(一)噫吁嚱危いかな、高いかな、蜀道の難、青天に上るより難し、(二)蠶叢と、魚鳧と、國を開くこと何ぞ茫然たる。爾來四萬八千歲、(三)秦塞と人煙を通ぜず。西のかた(四)太白に當つて鳥道有り、以つて峨嵋の巓を横絕すべし。(五)地崩れ、山摧けて壯士死し、然して後に(六)天梯石棧相勾連す。上には(七)河に横つて海を斷つの浮雲有り、下には波を衝

舞二長劍一。劍歌苦悲人苦厭。我欲三爲レ君彈二瑤琴一。淳風死去無二回心一。不レ如レ轉レ海爲レ飲花爲レ幄。贏二取青春一片時樂。明朝四馬斷二春風一。洛陽花發臙脂紅。車馳馬走狂似レ沸。家家帳幕臨二晴空一。天子聖明君正少。勿レ恨功名苦不レ早。富貴有レ時來。偸レ閑强歡笑。莫下與二離憂一買中生老上。

て沸くに似、家家の帳幕晴空に臨まん。天子は聖明君は正に少し、恨む勿れ、功名の苦だ早からざるを。富貴は時有りてか來る、閑を偸んで强ひて歡笑せん。(六)離憂の與に生老を買ふこと莫れ。

(一)うら〳〵と青空をさしり行く (二)劍舞の歌甚だ悲壯なり (三)初唐の才人李淳風音樂に通ず (四)取りこむるなり (五)眞紅の色となり、花見の客狂奔するならんとなり (六)離別の愁苦のために早く老衰すること勿れ

常思李太白。仙筆驅二造化一。玄宗致二之七寶牀一。虎殿龍樓無レ不レ可。一

古意　　釋貫休

常に思ふ李太白、仙筆造化を驅るを。玄宗之を(一)七寶の牀に致し、虎殿龍樓可ならざる無し。一朝力士靴を脫するの後、玉上の青蠅一箇を生ず。(三)紫皇の案前、五色の麟、忽然として(二)掣斷す、黃金の鎖。五湖の大浪銀山の如く、滿船酒を載せて鼓を

遣₂二子傳₁將
來。高山十丈
磨₂蒼崖₁。誰能此碑入₂我室₁。使₃我一見昏眸開₁。百年廢興增₂歎慨₁。當時數子今安在。君不ᴸ見
荒涼浯水棄不ᴸ收。時有₂遊人打ᴸ碑賣₁。

に棄てられたるこの碑も時に遊人の石摺を作つて世に賣り弘むるものあり

春日遲遲輾₂
空碧₁。綠楊紅
杏描₂春色₁。人
生年少不₂再
來₁。莫ᴸ把₂青春₁
枉拋擲。思ᴸ之
不ᴸ可ᴸ令₂人驚₁。
中有₂萬恨千
愁并₁。今日就ᴸ
花始暢ᴸ飲。坐
中行客酸₂雙
情₁。我欲ᴸ爲ᴸ君

酒を勸めて別を惜む　　張乖崖

春日遲遲(一)として空碧を輾り、綠楊紅杏春色を描く。人生の年少は再び來らず、青春を把つて枉げて拋擲すること莫れ。之を思うて人をして驚かしむべからず。中に萬恨千愁の并す有り。今日花に就いて始めて飲を暢ぶ。坐中の行客雙情酸なり。我れ君の爲に長劍を舞はしめんと欲すれば、劍歌苦だ悲しんで人苦だ厭ふ。我れ君が爲に瑤琴を彈ぜんと欲すれば、淳風は死し去つて回る心無し。如かず、海を轉じて飲と爲し、花を幄と爲し、青春を贏取して片時も樂しまんには、明朝匹馬春風に嘶かば、洛陽花發いて臙脂紅ならん。車馳せ馬走つて狂う

磨崖碑の後　　張文潛

玉環妖血無二人掃一。漁陽馬厭長安草。潼關戰骨高二於山一。萬里君王蜀中老。金戈鐵馬從レ西來。郭公凛凛英雄才。擧レ旗爲レ風偃爲レ雨。洒二掃九廟一無二塵埃一。元功高名誰與紀。風雅不レ繼騷人死。水部胷中星斗文。太師筆下龍蛇字。天

(一)玉環が妖血人の掃ふ無く、(二)漁陽の馬は厭く長安草、(三)潼關の戰骨山よりも高く萬里の君王蜀中に老ゆ。(四)金戈鐵馬西より來り、(五)郭公凛凛たり、英雄の才。旗を擧ぐれば風と爲り偃すれば雨と爲る。(六)九廟を洒掃して塵埃無し。(七)元功高名誰と與にか紀せん。(八)風雅繼がず、騷人死す。(九)水部の胷中星斗の文、(一〇)太師の筆下龍蛇の字。天は二子をして將來に傳へしめ、高山十丈蒼崖を磨す。誰か能く(一一)此碑をして我室に入れ、我をして一見して(一二)昏眸開かしむる。百年の廢興歎慨を増す、當時の數子今安くに在りや。君見ずや、(一三)荒涼たる浯水棄てて收めざれども、時に遊人の碑を打つて賣るもの有り。

(一)楊貴妃の小字　(二)安祿山が兵を起せし地　(三)哥舒翰祿山に敗る　(四)嚴重に整頓したる隊伍　(五)郭子儀　(六)祖宗の廟なり　(七)第一の大功を誰と共に記錄せん　(八)詩賦のこの功を美せるものなし　(九)水部郎元結中興頌を作る　(一〇)太師顏眞卿中興頌を書す　(一一)碑文の石摺　(一二)くらき眼　(一三)浯水荒涼の邊

平。功成理定
何神速。速在三
推レ心置二人腹一。
亡卒遺骸散
帛收。飢人賣レ
子分レ金贖。魏
徵夢見天子
泣。張謹哀聞
辰日哭。怨女
三千放出レ宮。
死囚四百來
歸レ獄。剪レ鬚燒レ
藥賜二功臣一。李
勣嗚咽思レ殺レ
身。含レ血吮レ瘡
撫二戰士一。思摩
奮呼乞レ效レ死。
則知不二獨善戰善乘一レ時。以レ心感レ人人心歸。爾來一百九十載。天下至レ今歌二舞之一。歌二七德一。舞二七德一。聖人有レ作垂二無極一。豈徒耀二神武一。豈徒誇二聖文一。太宗意在レ陳二王業一。王業艱難示二子孫一。

く戰ひ善く時に乘ずるのみならず、心を以て人を感ぜしめて人心歸するなり。爾來一百九十載、天下今に至るまで之を歌舞す。七德(一四)を歌ひ、七德を舞ふ。聖人(一五)作ること有り無極に垂る。豈徒に神武を耀かさんや。豈徒に聖文に誇るならんや。太宗の意は王業を陳ぶるに在り。王業の艱難を子孫に示す。

(一)唐高祖の年號なり、元和は憲宗　(二)李世民年十八父に從つて兵を擧ぐ白旄黃鉞は周武王の故事による旗鉞の貌　(三)王世充竇建德　(四)政治なり　(五)光武皇帝赤心を推して人の腹中に置く　(六)太平御覽に見えたる殷湯の故事による　(七)魏徵病甚し太宗親臨す、是夜帝夢に徵を見る翌朝薨ず　(八)張公謹卒するや帝哀を發す、有司辰日は哭を忌むと奏するに帝は君臣は猶父子のごときを以て詔示せり　(九)武德八年宮女三千餘人を放つて家に歸らしむ　(一〇)六年死罪囚三百九十人を縱して家に歸らしめ翌年來つて死に赴かしむ、期に及んで違ふる者なし　(一一)李世勣疾あり鬚灰をもとむ、帝自ら鬚をきりて之に與ふ　(一二)高麗遼征中の事を敍す　(一三)蕃將の李思摩すら爲放したり　(一四)暴を禁じ、兵を戢め、大を保ち、功を定め、民を安んじ、衆を和げ、財を豐にするの義に取る　(一五)聖人之を作つて後世を誡むるなり

左納言右納史。朝承レ恩暮賜レ死。行路難不レ在レ水不レ在レ山。秖在二人情反覆間一。

七德の舞　　白樂天

七德舞七德歌。傳自二武德一。至二元和一。元和小臣白居易。觀レ舞聽レ歌知二樂意一。曲終稽首陳二其事一。太宗十八擧二義兵一。白旄黃鉞定二兩京一。擒レ充戮レ竇四海淸。二十有四功業成。二十有九卽二帝位一。三十有五致二太

七德の舞、七德の歌、傳へて武德より元和に至る。(一)元和の小臣白居易、舞を觀、歌を聽いて樂意を知る。曲終つて稽首して其事を陳ぶ。(二)太宗十八にして義兵を擧げ、白旄黃鉞もて兩京を定む。(三)充を擒し、竇を戮して四海淸み、二十有四にして功業成る。二十有九に帝位に卽き、三十有五にして太平を致す。功成り、理定むること(四)何ぞ神速なる、速なるは心を推して人腹に置くに在り。(五)亡卒の遺骸は帛を散じて收め、(六)飢人の子を賣るは金を分つて贖ふ。(七)魏徵夢に見えて天子泣き、(八)張謹哀聞して辰日にも哭す。(九)怨女三千放つて宮を出し、(一〇)死囚四百來つて獄に歸す。(一一)鬚を剪り、藥を燒いて功臣に賜ひ、季勣は嗚咽して身を殺さんことを思ふ。(一二)血を含み瘡を吮うて戰士を撫し、(一三)思摩は奮ひ呼んで死を效さんを乞ふ。則ち知りぬ、獨り善

是安流。君心好惡苦不レ常。好生二毛髮一惡生レ瘡。與レ君結髮未二五載一。豈期牛女爲二參商一。古稱色衰相棄背。當時美人猶怨悔。何況如今鸞鏡中。妾顏未レ改君心改。爲レ君薰二衣裳一。君聞二蘭麝一不二馨香一。爲レ君盛二容飾一。君看二珠翠一無二顏色一。行路難難二重陳一。人生莫レ作二婦人身一。百年苦樂由二他人一。行路難難二於山一險二於水一。不二獨人間夫與一レ妻。近代君臣亦如レ此。君不レ見

女の參商と爲らんとは。古へ稱す、色衰ふれば相棄背すと 當時美人猶ほ怨悔せり。何ぞ況んや如今鸞鏡の中、妾が顏未だ改らざるに、君が心改るをや。君が爲に衣裳に薰すれども、君は蘭麝を聞いて馨香とせず。君が爲に容飾を盛にすれども、君は珠翠を看て顏色無しとす。行路難し、重ねて陳べ難し。人生婦人の身と作る莫れ、百年の苦樂他人に由る。行路の難は山よりも難く、水よりも險し。獨り人間の夫と妻とのみならず、近代君臣も亦此の如し。君見ずや、左は納言右は納史、朝には恩を承くるも暮には死を賜ふ。行路の難は水に在らず、山に在らず、秖人情反覆の間に在り。

(一) 太行は山名、その險を引いて人情反覆の甚しきを歎ず (二) 平坦安易の道路たるに過ぎず (三) 愛憎の念 (四) 愛すれば毛髮もて寒を防がしめんと欲し、憎めば傷害尚あかざる趣ありとの義 (五) 結婚に同じ (六) 牽牛織女一朝にして參と商との如く隔絶す (七) 聞き馴れて平氣なる義 (八) 醜態見るに堪へずとするなり (九) 書經舜典による、納言は官名、納史は秦漢の内史の類か

豎。問ㇾ翁何所ㇾ樂。三年不ㇾ去煩ニ推擠一。翁言此間亦有ㇾ樂。非ㇾ絲非ㇾ竹非ニ蛾眉一。山人醉後鐵冠落。溪女笑時銀櫛低。我來觀ㇾ政問ニ風謠一。皆云吠犬足生ㇾ氂。但恐此翁一旦捨ㇾ此去。長使ニ山人索寞溪女啼一。

後に鐵冠落ち、溪女笑ふ時銀櫛低る。我來つて政を觀て風謠を問ふに、皆云ふ吠犬足に氂を生ずと。(五)但恐る此の翁一旦此を捨て去らば、長く山人をして索寞(六)溪女をして啼かしめん。

(一) 刁璘は東坡と同年の進士にして於潛縣の令となり、野翁亭を構へたり (二) 璘以前の二縣令、一は山翁と號し、一は溪翁と號せり (三) 引きずり出す義 (四) 美女 (五) 唐道士常に鐵冠を冠し於潛の婦女常に大銀櫛を挿む (六) 政平に賊無く犬走らず臥したる足の下に毛を生ずる程なり

太行之路能摧ㇾ車。若比ニ君心一是坦途。巫峽之水能覆ㇾ舟。若比ニ君心一

太行の路(一)

白樂天

太行の路能く車を摧くも、若し君が心に比すれば是坦途のみ。(二)巫峽の水は能く船を覆すも、若し君が心に比すれば是れ安流。君が心の好惡(三)苦だ常ならず。好(四)すれば毛髮を生じ、惡めば瘡を生ず。君と結髮(五)して未だ五載ならず、豈期せんや、牛(六)

妾勝二空房一。五更待レ漏靴滿レ霜。不レ如三三伏日高睡足二北窓涼一。珠簷玉匣。萬人祖送歸二北邙一。不レ如三懸鶉百結。獨坐負二朝陽一。生前富貴。死後文章。百年瞬息萬世忙。夷齊盜跖俱亡羊。不レ如眼前一醉。是非憂樂都兩忘。

玉匣、萬人祖送して北邙に歸せんは、(四)懸鶉百結、獨り坐して朝陽を負はんに如かず。生前の富貴、死後の文章、百年瞬息萬世忙しく、(五)夷齊盜跖俱に亡羊。如かず、眼前に一醉して、是非憂樂都て兩つながら忘れんには。

(一) 薄き酒も茶より勝るとなり趙明叔が語による　(二) 早朝待漏院に出で、靴に霜を踏む　(三) 棺の飾なり、萬人に見送らるゝを謂ふ　(四) 孔門の子夏は衣懸鶉の如しといへり、貧窮にして喜び多きなり　(五) 伯夷叔齊は名のために首陽に死し、大盜盜跖は私のために東陵に死したり、共に道を悟れるものに非ず

山翁不レ出レ山。溪翁長在レ溪。不レ如野翁來二往溪山間一。上友二麋鹿一下鳧

(一)於潛の令刁同年が野翁亭

(二)山翁は山を出でず、溪翁は長へに溪に在り。如かず野翁の溪山の間を來往するに、上は麋鹿を友とし、下は鳧鷖。翁に問ふ何の樂しむ所か、三年去らず、(三)推擠を煩はすぞ。翁は言ふ、此の間亦樂有り、祿に非ず竹に非ず、(四)蛾眉に非ずと。山人醉

撚髭。又不見雪中騎驢孟浩然。皺眉吟詩肩聳山。饑寒富貴兩安在。空有遺像留人間。此身常擬同外物。浮雲變化無蹤跡。問君何苦寫我眞。君言好之聊自適。黄冠野服山家容。意欲置我山岩中。勳名將相今何限。往寫褒公與鄂公。

ら安にか在る。空しく遺像の人間に留る有り。此の身常に外物に同じきことを擬す。(六)浮雲變化して蹤跡無し。君に問ふ、何ぞ苦に我が眞を寫せる。君は言ふ、之を好んで聊か自適すと。(七)黄冠野服山家の容、意ふに我を山岩の中に置かんと欲するか。(八)勳名の將相、今何ぞ限らん。往いて褒公と鄂公とを寫せ。

(一)肖像畫家何充なり (二)唐の玄宗はじめ此の宮にありき (三)玄宗は一日斜視なりき、故に其狀を形容するなり (四)孟浩然が途中雪に遇ふの詩による (五)饑寒の孟と富貴の玄宗と (六)自己を忘れて外物と同化し浮雲の變化窮り無きが如くなるなり (七)予が肖像を隱者の如く寫し出すとなり (八)世には勳功赫譽の人多し、段志玄尉遲敬德の如きは卽ち是の人なり

薄薄酒

薄薄酒勝茶湯。粗粗布勝無裳。醜妻惡

薄薄の酒も茶湯に勝り、粗粗の布も裳無きに勝り、醜妻惡妾も空房に勝る。五(二)更漏を待つて靴霜を滿すは、三伏日高うして睡北窓の涼に足るに如かず。(三)珠襦

江豈無水。魚腹忠魂埋。但見愁雲結雨猿聲哀。浙江豈無水。鴟革漂骸。但見潮頭怒氣如山來。孤臣詞客到江上。何以寬心懷。長淮之水遶楚流。先生家住淮上頭。黃金萬斛浴明月。碧玉一片含清秋。酒花入面歌一聲。淮上百物無閑愁。

が骸を漂す。但見る潮頭の怒氣山の如くして來るを、孤臣詞客江上に到り、何を以てか心懐を寛うせん。長淮の水楚を遶つて流る、(五)先生の家は淮上の頭に住めり。黄金萬斛明月を浴し、碧玉一片清秋を含む。(六)酒花面に入つて歌ふこと一聲、淮上の百物閑愁無し。

(一)淮水の歌なり　(二)目も心も共に寛濶たり　(三)屈原忠志を抱いて汨羅に投ずるを指す　(四)呉王夫差伍子胥の屍を鴟革の嚢に盛りて江に投ず　(五)作者自ら言ふ　(六)醉うて顔赤きを謂ふ

君不見潞州別駕眼如電。左手挂弓橫

寫眞の何秀才に贈る　蘇子瞻

(一)君見ずや、(二)潞州の別駕は眼電の如し、左手弓を挂けて(三)横に箭を撚る。又見ずや、(四)雪中驢に騎る孟浩然、眉に皺し詩を吟じて肩は山を聳かす、(五)饑寒富貴兩つなが

酒掃浮雲沒。千岩萬壑瓊瑤窟。桂花飛影入盞來。傾下胸中照清骨。玉兔擣藥與誰餐。且與豪客留朱顏。朱顏如可留。恩重如丘山。爲君殺卻蝦蟇精。腰間老劍光芒寒。擧酒勸明月。聽我歌聲發。照見古人多少愁。更與今人照離別。我曹自是高陽徒。肯學羣兒嘆圓缺。

の如くならん。君の爲に蝦蟇(六)の精を殺却せん、腰間の老劍光芒寒し。酒を擧げて明月に勸む、我が歌聲の發るを聽け。古人多少の愁を照し見て、更に今人の與に離別を照す。我が曹は自ら是れ高陽(七)の徒たり、肯て羣兒の圓缺(八)を歎くを學ばんや。

(一) 美酒なるべし (二) 黄色の鵠なり (三) 月中桂樹の花 (四) 月中の傳說前出 (五) 豪傑俊異の人物に與へていつ迄も若々しからしめん (六) 月蝕は蝦蟇の仕業なりとあるによる (七) 史記酈食其傳參照、漢の酈食其の自ら高陽の酒徒と稱せしをいふ (八) 月の盈虧なり

長淮の謠(一)

長淮之水青如苔。行人但覺心眼開。湘

長淮の水青うして苔の如し。行人但覺ゆ、心眼(二)の開くるを、湘江豈水無らんや。魚腹(三)忠魂埋む、但見る愁雲雨を結んで猿聲哀しきを。浙江豈水無らんや、鴟革(四)胥

湘東行人長歎息。十年離レ家歸未レ得。敝裘羸馬苦難レ行。僮僕盡飢少二筋力一。君不レ見牀頭黃金盡。壯士無二顏色一。龍蟠二泥中一未レ有レ雲。不レ能レ生二彼昇レ天翼一。

亭上十分綠醑酒。盤中一筋黃金雞。滄溟東角邀二姮娥一。氷輪碾上青琉璃。天風

(一)湘東の行人長へに歎息す、十年家を離れて歸ると未だ得ず。(二)敝裘羸馬苦だ行き難く、僮僕盡く飢ゑて筋力少しと。君見ずや、(三)牀頭黃金盡きて、壯士に顏色無きを。龍は泥中に蟠して未だ雲有らず、(四)彼の天に昇るの翼を生ずること能はず。

(一) 湘水の東なる旅人なり、作者自ら謂ふ。作者[illegible]は或は[illegible]の[illegible]といふ (二) 敗れたる毛衣に疲れたる馬 (三) 戰國の蘇秦は黃金を用ひ盡して時顏色無かりき (四) 時勢の利あらざるを喩ふ

邀月亭　馬子才

亭上十分の(一)綠醑酒、盤中一筋の(二)黃金雞。滄溟の東角より姮娥を邀ふるに、氷輪は碾り上る青琉璃。天風洒掃して浮雲沒し、千岩萬壑瓊瑤の窟。(三)桂花影を飛ばして盞に入り來り、胸中に傾け下して淸骨を照す。(四)玉兎藥を擣く誰と與にか餐はん、且く(五)豪客に與へて朱顏を留めしむ。朱顏如し留むべくんば、恩重うして丘山

當時我醉美人家。美人顏色嬌如レ花。今日美人棄レ我去。青樓珠箔天之涯。娟娟姮娥月。三五二八盈又缺。翠眉蟬鬢生別離。一望不レ見心斷絕。心斷絕幾千里。夢中醉臥巫山雲。覺來淚滴湘江水。湘江兩岸花木深。美人不レ見愁二人心一。含レ愁更奏綠綺琴。調高絃絕無二知音一。美人兮美人。不レ知爲二暮雨一兮爲二行雲一。相思一夜梅花發。忽到二窗前一疑是君。

(一)當時我醉ふ美人の家、美人の顏色嬌として花の如し。今日美人我を棄てて去る、(二)青樓珠箔天の涯。娟娟たる姮娥の月、(三)三五二八盈ち又缺く。翠眉蟬鬢生別離、一望見えず、心斷絕す。心斷絕す幾千里ぞ、夢中醉臥す、巫山の雲、覺め來つて淚は滴る湘江の水。湘江の兩岸花木深し、美人見えず、人の心を愁へしむ。愁を含んで更に奏す、(四)綠綺の琴、調高く絃絕えて(五)知音無し。美人美人、知らず(六)暮雨と爲り、行雲となることを。相思うて一夜梅花發く、忽ち窗前に到る疑ふらくは是れ君かと。

(一)昔日の義 (二)酒樓の珠を飾れる簾 (三)十五夜十六夜 (四)司馬相如が琴の名 (五)高き調を聞き分くる人 (六)楚王に見えし陽臺の神女が事なり―呂氏春秋參照

行路難　張轂

華裾織レ翠青如レ葱。金環壓レ轡搖玲瓏。馬蹄隱レ耳聲隆隆。入レ門下レ馬氣如レ虹。云是東京才子。文章鉅公。二十八宿羅二心胷一。元精炯炯貫二當中一。殿前作レ賦聲摩レ空。筆補二造化一天無レ功。厖眉書客感二秋蓬一。誰知死草生二華風一。我今垂レ翅附二冥鴻一。他日不レ羞蛇作レ龍。

高軒過（一）

（二）華裾翠を織つて青は葱の如く、金環轡を壓して搖れて玲瓏たり。（三）馬蹄耳に隱として聲隆隆、門を入り、馬を下れば氣虹の如し。云ふ是れ東京の才子、文章の鉅公と。（四）二十八宿心胸に羅ね、（五）元精炯炯として當中を貫く。殿前賦を作つて聲は空を摩し、筆は造化を補つて天も功無し。（六）厖眉の書客秋蓬に感ず、誰か知る、死草の華風に生くるを。我今翅を垂れて（七）冥鴻に附く、他日羞ぢず、蛇の龍と作るを。

（一）立派なる車の門に至れる義、李賀の幼時韓愈皇甫湜之の文名を聞いて之を訪ふに賀即ち此の詩を上りぬ（二）華麗なる衣服の緑色なる義（三）意氣昂然として氣を吐くことは虹の如し（四）天上の星宿なり（五）天の精氣なり（六）厚き眉の書生なり、自ら言ふ（七）二公に攀附するを稱す

思ふ所有り　盧仝

不レ見梁王池上月。昔照二梁王樽酒中一。梁王已去明月在。黄鸝愁醉啼二春風一。分明感激眼前事。莫レ惜二醉臥桃園東一。

(一)梁の孝王が遊びし山なり、孟氏こゝに桃園を拓けり　(二)晉の謝安東山に棲遁し妓者を蓄めし事世說に見ゆ　(三)梁孝王遊宴當時に映りし月　(四)今古の興亡に感慨を催するなり

琉璃鍾。琥珀濃。小槽酒滴眞珠紅。烹レ龍炮レ鳳玉脂泣。羅幃繡幕圍二香風一。吹二龍笛一。擊二鼉鼓一。皓齒歌。細腰舞。況是青春日將レ暮。桃花亂落如二紅雨一。勸レ君終日酩酊醉。酒不レ到二劉伶墳上土一。

將に酒を進めんとす　　李長吉

(一)琉璃の鍾、琥珀濃なり。小槽酒滴つて(二)眞珠紅なり。龍を烹、鳳を炮いて(三)玉脂泣き、羅幃繡幕香風を圍む。(四)龍笛を吹き、鼉鼓を撃ち、皓齒歌ひ、細腰舞ふ。況んや是れ青春日將に暮れんとし、桃花亂れ落ちて紅雨の如きをや。君に勸む、終日酩酊して醉へ、(五)酒は劉伶墳上の土に到らず。

(一)瑠璃の酒杯　(二)酒名ならんとの說あり　(三)脂肪分の煮え立つ響　(四)笛に同じ　(五)伶字は伯倫酒德頌を作りし人なれど死後は飲むを得ずとの義

秋風清。秋月明。落葉聚還散。寒鴉棲復驚。相思相見知何日。此日此夜難レ爲レ情。

（二）

碧草已滿レ地。柳與レ梅爭レ春。謝公自有二東山妓一。金屛笑坐如レ花人。今日非二昨日一。明日還復來。白髮對二綠酒一。强歌心已摧。君

三五七言（一）

秋風清く、秋月明なり。落葉聚つて還散じ、寒鴉棲んで復た驚く。相思ふ、相見んことは知んぬ何の日ぞ、此の日此の夜（二）情を爲し難し。

（一）三言二句五言二句七言二句より成る新詩體なり　（二）相思の情に堪へ難き意なり

梁王が棲霞山孟氏の桃園中に登る（一）

碧草已に地に滿ち、柳と梅と春を爭ふ。謝公は（二）自ら東山の妓有り、金屛笑つて坐す、花の如き人。今日は昨日に非ず、明日還た來らん。白髮綠酒に對し、强歌して心已に摧く。君見ずや、（三）梁王池上の月、昔は梁王樽酒の中を照せり。梁王已に去つて明月のみ在り、黃鸝愁醉して春風に啼く。（四）分明感激す、眼前の事、惜む莫れ、桃園の東に醉臥するを。

昔遊ニ三峽ー見ニ巫山ー。見レ畫ニ巫山ー宛相似。疑是天邊十二峯。飛入ニ君家彩屛裏ー。寒松蕭瑟如レ有レ聲。陽臺微茫如レ有レ情。錦衾瑤席何寂寂。楚王神女徒盈盈。高咫尺如ニ千里ー。翠屛丹崖粲如レ綺。蒼蒼遠樹圍ニ荊門ー。歷歷行舟汎ニ巴水ー。水石潺湲萬壑分。煙光草色俱氳氛。溪花笑レ日何時發。江閣聽レ猿幾歲聞。使ニ人對レ此心緬邈ー。疑入ニ嵩丘ー夢ニ綵雲ー。

昔(一)三峽に遊んで巫山を見たり。巫山が畫けるを見るに宛も相似たり。疑ふらくは是れ天邊の十二峯(二)、飛んで君が家の彩屛の裏に入るか。寒松蕭瑟として聲有るが如く、陽臺微茫情有るが如し。錦衾瑤席何ぞ寂寂たる。楚王神女(三)徒に盈盈。高きこと咫尺、千里の如く、翠屛丹崖(四)粲として綺の如し。蒼蒼たる遠樹荊門(五)を圍み、歷歷たる行舟巴水(六)に汎ぶ。水石潺湲として萬壑分れ、煙光草色、俱に氳氛(七)。溪花日に笑うて何の時か發け、江閣猿を聽くは幾歲よりか聞かん。人をして此に對して心緬邈(八)たらしむ。疑ふらくは嵩丘(九)に入つて綵雲を夢むかと。

(一) 以前 (二) 巫山に望霞翠屛朝雲等の十二峰あり (三) 楚の襄王夢に巫山の神女を訪す今は其名殘だになく、只盈々たる神女の姿を思ふのみ (四) 綠色の崖や赤色の崖 (五) 山名 (六) 江の上流を稱す (七) 祥氣の匂やかなる貌 (八) はるかに遠し (九) 嵩山に同じ、五嶽の一なり

生得レ意須レ盡レ歡。莫レ使下金樽空對上レ月。天生二我材一必有レ用。千金散盡還復來。烹レ羊宰レ牛且爲レ樂。會須二一飲三百杯一。岑夫子。丹丘生。與レ君歌二一曲一。請君爲レ我聽。鐘鼎玉帛不レ足レ貴。但願二長醉一不レ願レ醒。古來賢達皆寂寞。惟有三飲者留二其名一。陳王昔日宴二平樂一。斗酒十千恣二歡謔一。主人何爲言レ少レ錢。且須二沽レ酒對レ君酌一。五花馬。千金裘。呼レ兒將出換二美酒一。與レ爾同銷二萬古愁一。

には須らく一飲三百杯なるべし。(五)岑夫子、丹丘生、君と與に一曲を歌ふ。請ふ、君我爲めに聽け、(六)鐘鼎玉帛は貴ぶに足らず。但長へに醉はんことを願うて醒めんことを願はず。古來賢達は皆寂寞、(七)惟飲者の其名を留むる有るのみ。(八)陳王昔日平樂に宴し、斗酒十千歡謔を恣にす。主人何爲れぞ錢少しと言ふ、且つ須らく酒を沽うて君に對して酌むべし。(九)五花の馬、千金の裘、兒を呼んで將ち出して美酒に換へ、爾と同じく萬古の愁を銷せん。

(一)回り來らず　(二)綠の黑髮　(三)美酒を盛りたる銅製の酒樽　(四)金を散じ盡すもいつかは又還り來る　(五)岑勛と元丹丘と共に李白の好友　(六)鐘鼓の樂美珍の黃金玉飾帛の寶　(七)聖賢の徳あるも死後は斂めて寂寞たり　(八)陳思王曹植歸來平樂に宴す、美酒斗十千の句あり　(九)馬の毛色の數なり千金裘は一狐白裘直千金とある史記による

元丹丘が巫山屏風に坐するを觀る

問二春桂一。桃李正芳華。年光隨レ處滿。何事獨無レ花。春桂答。春華詎幾久。風霜搖落時。獨秀君知不。

君不レ見黃河之水天上來。奔流到レ海不二復廻一。又不レ見高堂明鏡悲二白髮一。朝如二青絲一暮如レ雪。人

一、春桂問答（一）　王維

春桂に問ふ、桃李正に芳しうして（二）華さき、（三）年光處に隨つて滿つ。何事ぞ獨り花無き。春桂答ふ、春華詎幾か久しからん、（四）風霜搖落の時、獨り秀づ君知るや不や。

（一）春の桂樹なり　（二）一に芽に作る　（三）麗かなる春の光　（四）此冬に至つて桂樹獨り秀づるの意を君知るや否やとなり

二、將に酒を進めんとす　李太白

君見ずや、黃河の水天上より來る、奔流海に到つて（一）復た廻らず。又見ずや、高堂の明鏡白髮を悲しむ。朝には（二）靑絲の如く、暮には雪の如し。人生意を得て須らく懽を盡すべし。（三）金樽をして空しく月に對せしむる莫れ。天我材を生ず、必ず用ふる有らん。（四）千金散じ盡せば還つて復た來る。羔を烹、牛を宰いて且つ樂を爲し、會

抱レ才終大用。
宰相未レ許終
不レ仕。假如不レ
在ニ陳レ力列一。立レ
言垂レ範亦足レ
恃。苗裔當レ蒙ニ
十世宥一。豈謂
貽厥無ニ基址一。
故知忠孝出ニ
天性一。潔レ身亂レ
倫安足レ擬。昨夜長鬚來下レ狀。隔レ墻惡少惡難レ似。每騎ニ屋山一下窺闞。渾舍驚怕走折レ趾。憑ニ依
婚媾一欺ニ官吏一。不レ信ニ令行能禁止一。先生受レ屈未ニ曾語一。忽此來告良有レ以。嗟我身爲ニ赤縣尹一。操レ
權不レ用欲ニ何俟一。立召ニ賊曹一呼ニ五百一。盡取ニ鼠輩一尸ニ諸市一。先生又遣ニ長鬚一來。如レ此處置非レ所レ喜。
況又時當ニ長養節一。都邑未レ可レ猛ニ政理一。先生固是余所レ畏。度量不三敢窺ニ涯涘一。放縱是誰之過
歟。效レ尤戮レ僕愧ニ前史一。買レ羊沽レ酒謝ニ不敏一。偶逢三明月曜ニ桃李一。先生有レ意許ニ降臨一。更遣下長鬚致中
雙鯉上。

盧は両度まで拾遺を以て召されも就かず　一三　世学を批評すれども終に有力者に使用せらる　一四　法度に同じ　一五　左氏伝穀梁伝公羊伝を捨て去り唯春秋の本経を研究す　一六　當時馬異といふ者あり、盧仝詩を贈つて之を驚かせり　一七　平易の言辞を主とすれども猶名馬の空に践るが如し　一八　男子廿一歳を丁とす　一九　宰相の官にあらざれば仕へず　二〇　力を致さずとも立言不朽の法ありとなす　二一　子孫十世皆罪を宥さるべし、子孫に貽すもの無しと謂ひ難し　二二　乱暴たとへんに物なし　二三　屋根の隅　二四　姻家に縁組せる男を恃む　二五　河南に同じ　二六　直に賊を捕ふる役人を喚び先駆者を従へて悪少を捕へんとす、五百は一に伍佰に作る、前道の義なり　二七　萬物長養の春の時節　二八　涯岸に同じ　二九　春秋左伝襄公三年の條及び廿一年の條参看　三〇　桃李の下に一酌せんとす何卒御返事を下されたし

長短句

彼皆刺口論ニ世事一。有レ力未レ免レ遣ニ驅使一。先生事業不レ可レ量。惟用ニ法律一自繩已。春秋三傳束ニ高閣一。獨抱ニ遺經一究ニ終始一。往年弄レ筆嘲ニ同異一。怪辭驚レ衆謗不レ已。近來自說尋ニ坦途一猶下上ニ虛空一跨中騄騏上。去年生レ兒名ニ添丁一。意令三與レ國充ニ耘耔一。國家丁口連ニ四海一。豈無三農夫親ニ耒耜一。先生

や。昨夜長鬚來つて狀を下す、墻を隔つる惡少(二二)惡似難し、每に屋山(二三)に騎つて下を窺ひ瞰、渾舍驚き怕れて走つて趾を折く。婚媾(二四)に憑依して官吏を欺き、令行はれて能く禁止することを信ぜず。先生屈を受けて未だ曾て語らず、忽ち此に來り告ぐるは良に以有り。嗟我が身は赤縣(二五)の尹爲り、權を操つて用ひずんば何をか俟たんと欲せん。立に賊曹を召して五百を呼び、盡く鼠輩を取へて諸を市に尸せん。先生又長鬚(二六)をして來らしむ。此の如きの處置は喜ぶ所に非ず。況んや又時は長養(二七)の節に當れり。都邑未だ政理を猛にすべからずと。先生は固是れ余が畏るゝ所、度量敢て涯涘(二八)を窺はず。放縱は是れ誰の過ぞや、尤(二九)に效ひ僕を戮せんは前史に愧づ。羊を買ひ酒を沽うて不敏を謝し、偶ゝ明月の桃李に耀くに逢ふ。先生降臨を許すに意有らば、更に長鬚をして雙鯉(三〇)を致さしめよ。

(一) 盧仝の號 (二) 鬚長くして頭巾なし (三) 足袋なしを曰ふ (四) 少年の時より (五) 十有二年を紀とす (六) 韓公自ら賢士を困窮せしむるを愧づ (七) 菲薄の金品を呈して祖先の祭祀を助く (八) 東都の留守又は河南の尹に謁見せよと勸む (九) 八家文に見えたる處士石洪なり (一〇) 烏重胤が幕僚となる (一一) 溫處士名は造 (一二) 字

妻子。先生結髮僧二俗徒一。閉レ門不レ出動一紀。至レ今鄰僧乞レ米送。僕忝二縣尹一詑不レ恥。俸錢供給公私餘。時致二薄少一助二祭祀一。勸下參二留守一謁中大尹上言語纔及輒掩レ耳。水北山人得二名聲一。去年去作二幕下士一。水南山人又繼往。鞍馬僕從塞二閭里一。少室山人索レ價高。兩以二諫官一徵不レ起。

言語纔に及べば輒ち耳を掩ふ。(九)水北の山人名聲を得て、去年去つて(一〇)幕下の士と作りぬ。(一一)水南の山人も又繼ぎ往き、鞍馬僕從閭里を塞ぐ。(一二)少室の山人は價を索むること高く、兩び諫官を以て徵せども起たず。(一三)彼皆刺口して世事を論ず、力有るも未だ驅使に遭ふことを免れず。先生の事業は量るべからず、惟法律を用て自ら己を繩す。(一五)春秋の三傳は高閣に束ね、獨り遺經を抱いて(一四)終始を究む。往年筆を弄して(一六)同異を嘲り、怪辭衆を驚かして謗己まざりき。近來自ら說く(一七)坦途を尋ねんと、猶ほ虛空に上つて騄駬に跨るがごとし。去年兒を生んで添丁と名づく、意は國の與に耘耔に充てしめんとなり。國家の(一八)丁口四海に連る、豈農夫の耒耜に親むもの無らんや。先生才を抱いて終に大用せらるゝも、(一九)宰相未だ許されざれば終に仕へず。(二〇)假如力を陳ぶるの列に在らずとも、言を立て範を垂るゝも亦恃むに足れり。(二一)苗裔當に十世の宥を蒙るべし、豈謂はんや、基址無しと。故に知る忠孝天性より出づるを、身を潔うし倫を亂るは安んぞ擬するに足らん

不レ知入間何處有二此境一。徑欲三往置二二頃田一。君不レ見武昌樊口幽絶處。東坡先生留五年。春風搖レ江天漠漠。暮雲捲レ雨山娟娟。丹楓翻レ鴉伴二水宿一。長松落レ雪驚二醉眠一。桃花流水在二人世一。武陵豈必皆神仙。江山清空我塵土。雖レ有二去路一尋無レ緣。還二君此畫一三嘆息。山中故人應レ有二招レ我歸來篇一。

んとするが如し　(六)有位者の尊稱　(七)用意の精緻なるを稱するなり　(八)田百畝を頃とす　(九)元豐三年以來貶室を營んで是に居る　(一〇)水邊の旅宿　(一一)塵土の中に奔走する義　(一二)山中の友人予に歸來を勸むる詩などを寄せ來るべき筈なり

玉川先生洛城裏。破屋數間而已矣。一奴長鬚不レ裹レ頭。一婢赤脚老無レ齒。辛勤奉養十餘人。上有二慈親一下

盧仝に寄す

韓退之

(一)玉川先生洛城の裏、破屋數間のみ。一奴は長鬚にして裹頭せず、(二)一婢は赤脚(三)にして老いて齒無し。辛勤して奉養す、十餘人、上に慈親有り、下には妻子あり。(四)先生結髮より俗徒を憎み、門を閉ぢて出でざること動もすれば一紀なり。(五)今に至るまで鄰僧米を乞へて送り、(六)僕は縣尹を忝うす、能く恥ぢざらんや。俸錢供給す、公私の餘、時に(七)薄少を致して祭祀を助く。(八)留守に參じて大尹に謁せよと勸め、

江上愁心三疊山。浮空積翠如雲煙。山耶雲耶遠莫知。煙空雲散山依然。但見兩崖蒼蒼暗絕谷。中有百道飛來泉。縈林絡石隱復見。下赴谷口爲奔川。川平山開林麓斷。小橋野店依山前。行人稍度喬木外。漁舟一葉江呑天。使君何從得此本。點檢毫末分淸妍。

江上の愁心(三)三疊の山、空に浮ぶ積翠雲煙の如し。山か雲か遠くして知る莫し、煙空しく雲散じて山は依然。但見る兩崖蒼蒼として絕谷に暗きを。中に(四)百道飛來の泉有り、林を縈り石に絡うて隱れて復た見はれ、下のかた谷口に赴いて奔川と爲る。川平に山開けて林麓斷え、小橋野店山前に依る。行人稍ゝ度る喬木の外、漁舟一葉(五)江天を呑む。使君何より此本を得たる、(七)毫末を點檢して淸妍を分つ。知らず、人間何の處にか(六)此境有るぞ、徑に往いて(八)二頃の田を置かんと欲す。君見ずや、(九)武昌樊口幽絕の處、東坡先生留ること五年なり。春風江を搖かして天漠漠、暮雲雨を捲いて山娟娟。丹楓鴉を翻して(一〇)水宿に伴ひ、長松雪を落して醉眠を驚かす。桃花流水人世に在り、武陵豈必ずしも皆神仙ならんや。江山は淸空我は(一一)塵土、去路有りと雖も尋ぬるに緣無し。君に此畫を還して三たび嘆息す、(一二)山中の故人應に我を招く歸來の篇有るべし。

(一) 名は鞏、東坡の友人なり　(二) 名は詵、畫名あり　(三) 一に只疊に作る　(四) 道は條に同じ　(五) 江は天を呑ま

川原遠近蒸ニ紅霞一。初來猶自念ニ郷邑一。識久此地還成レ家。漁舟之子來ニ何所一物色相猜更問訊。大蛇中斷喪ニ前王一。群馬南渡開ニ新主一。聽終辭絶共悽然。自說經レ今六百年。當時萬事皆眼見。不レ知幾許猶流傳。爭持ニ牛酒一來相餽。禮數不レ同樽俎異。月明伴宿ニ玉堂一空。骨冷魂清無ニ夢寐一。夜半金雞啁哳鳴。火輪飛出客心驚。人間有レ累不レ可レ住。依然離別難レ爲レ情。船開棹進一回顧。萬里蒼茫煙水暮。世俗寧知僞與レ眞。至レ今傳者武陵人。

萬里蒼茫として煙水暮る。世俗寧ぞ知らんや、僞と眞と。今に至るまで傳ふる者は武陵の人のみ。

（一）根無しごと （二）數幅の畫絹に寫し出されたる桃源の圖、この中堂に掛れり （三）詩を題し封緘して之を禮部郎中在官の者に贈り來りぬ （四）秦の姓なり劉は漢の姓、次の句は魏晉の亂を指す （五）最初に移住したる時 （六）疑ひさぐるなり （七）漢の高祖蛇を斬りて秦幾干もなく亡ぶ （八）晉元帝頃の童謠によりて東晉の事を言ふ （九）酒肴 （一〇）禮儀作法今代と形式を異にす （一一）寂寞なるさびしき家中 （一二）鮮明なり美術 （一三）太陽に同じ （一四）諸種の係累なり

王定國(一)が藏する所の煙江疊嶂圖に書す　蘇子瞻

（一）（二）王晉卿が畫なり

渺茫。桃源之說誠荒唐。流水盤廻山百轉。生綃數幅垂二中堂一。武陵太守好事者。題封遠寄南宮下。南宮先生忻レ得レ之。波濤入レ筆驅二文辭一。文工畫妙各臻レ極。異境恍惚移二於斯一。架レ巖鑿レ谷開二宮室一。接レ屋連レ甍千萬日。嬴顚劉蹶了不レ聞。地拆天分非レ所レ恤。種レ桃處處惟開レ花。

數幅中堂に垂る。武陵の太守は好事の者、題封遠く寄す、南宮の下。南宮先生之を得たるを忻び、波濤筆に入つて文辭を驅る。(三)文工に畫妙にして各〻極に臻り、異境恍惚として斯に移る。巖に架し谷に鑿つて宮室を開き、屋を接し、甍を連ぬる千萬日。(四)嬴顚し、劉蹶くも了に聞かず、地拆け天分るゝも恤ふる所に非ず。桃を種ゑて處處に惟花を開けば、川原遠近紅霞を蒸す。(五)初來猶ほ自ら鄕邑を念ひ、歲久しうして此地還家を成す。漁舟の子は何の所よりか來る、(六)物色相猜して更に問語す。(七)大蛇中斷して前王を喪ひ、(八)羣馬南に渡つて新主を開く。聽終り、辭絕えて共に悽然、自ら說く、今を經ること六百年と。當時の萬事は皆眼に見る。知らず、幾許か猶ほ流傳するを。(九)爭うて牛酒を持して來つて相餽る、(一〇)禮數同じからず樽俎異り、月明伴つて玉堂の空に宿するに、(一一)骨冷に魂淸うして夢寐無し。(一二)夜半に金雞啁哳として鳴き、火輪飛び出でて客心驚く。人間累有り、住まるべからず。依然として離別情を爲し難し。(一三)船開き棹進んで一たび回顧すれば、(一四)

嬌凝愛二梨栗一。老妻日暮荷レ鋤歸。欣然一笑共二蝸室一。哦レ詩未レ遣レ愁二肝腎一。醉裏呼レ兒供二紙筆一。時時得レ句輒寫レ之。五言平淡用二一律一。田家酒熟夜打レ門。頭上自有二漉酒巾一。老農時問桑麻長。提レ壺挈レ榼來相親。一樽徑醉北窓臥。蕭然自謂羲皇人。此公聞レ道窮亦樂。容貌不レ枯似二丹渥一。儒林紛紛隨二溷濁一。山林高義久寂寞。假令九原今可レ作。舉二公藍輿一也不レ惡。

謂ふ、羲皇の人と。(九)此公道を聞いて窮も亦樂み、容貌枯ならず、丹渥に似たり。(一〇)儒林は紛紛溷濁に隨ひ、山林の高義は久しく寂寞。假令九原今にして作すべくんば、公の藍輿を舉ぐるも也惡しからじ。(一一)

(一)肖像の圖に題したるなり (二)あかざの杖に草履をはき一幅の頭巾を被る (三)世上紛々たる事一も眼を遏ぐるなし (四)淵明はもと王佐の才あるも草深き田舍に老を送る (五)狹くさびしき室內 (六)前出子を責むる詩參照 (七)心胸に同じ (八)酒器なり (九)陶淵明至道を聞けり故に窮境にありても樂を改めず (一〇)當今の學者は皆世間の濁に染めり (一一)輿を舁いで輿僕の役に服するをも甘んぜん

桃源の圖

韓退之

神仙有無何

神仙の有無何ぞ渺茫たる、桃源の說は誠に(一)荒唐。流水盤迴して山百轉、(二)生綃

捫レ腹。不レ問三人家與二僧舍一。拄レ杖敲レ門看二脩竹一。忽逢三絕艷照二衰朽一。歎息無レ言揩二病目一。陋邦何處得二此花一。無三乃好事移二西蜀一。寸根千里不レ易レ到。銜レ子飛來定鴻鵠。天涯流落俱可レ念。爲飲二一樽一歌二此曲一。明朝酒醒還獨來。雪落紛紛那忍レ觸。

陶淵明が寫眞の圖 (一)

謝幼槃

淵明歸去潯陽曲。杖藜蒲鞵巾一幅。陰陰老樹囀二黃鸝一。艷艷東籬粲二霜菊一。世紛無レ盡過眼空。生事不レ豐隨レ意足。廟堂之姿老二蓬蓽一。環堵蕭條僅容レ膝。大兒頑鈍懶二詩書一。小兒

淵明歸り去る潯陽の曲、(二)杖藜蒲鞵巾一幅。陰陰たる老樹に黃鸝囀り、艷艷たる東籬霜菊粲たり。(三)世紛盡くる無し、過眼空しく、生事豐ならざるも意に隨つて足る。(四)廟堂の姿、蓬蓽に老い、(五)環堵蕭條として僅に膝を容る。(六)大兒は頑鈍詩書に懶く、小兒は嬌癡梨栗を愛す。老妻日暮に鋤を荷うて歸り、欣然として一笑し、蝸室を共にす。詩を哦して未だ(七)肝腎を愁へしめず、醉裏に兒を呼んで紙筆を供せしむ。時時に句を得れば輒ち之を寫し、五言平淡一律を用ふ。田家酒熟して夜門を打き、頭上自ら漉酒の巾有り。老農時に問ふ、桑麻の長ずるを。壺を提げ、(八)榼を挈へて來つて相親む。一樽徑に醉うて北窓に臥し、蕭然として自ら

花苦幽獨。嫣然一笑竹籬間。桃李漫山總麤俗。也知造物有深意。故遣佳人在空谷。自然富貴出天姿。不待金盤薦華屋。朱唇得酒暈生臉。翠袖卷紗紅映肉。林深霧暗曉光遲。日暖風輕春睡足。雨中有涙亦悽愴。月下無人更清淑。先生食飽無一事。散歩逍遙自

籬の間、桃李は山に漫るも總て麤俗。也知る造物の深意有るを、故に佳人をして空谷に在らしむ。自然の富貴天姿より出で、(三)金盤の華屋に薦むるを待たず。(四)朱唇酒を得て暈は臉に生じ、翠袖紗を卷いて紅は肉に映ず。林深く霧暗うして曉光遲く、日暖に風輕うして春睡足る。雨中涙有り亦悽愴、月下人無し更に清淑。先生食飽つて一事無く、散歩逍遙自ら腹を捫む。人家と僧舍とを問はず、杖を柱へ、門を敲いて脩竹を看る。(五)忽ち絶艶の衰朽を照すに逢ひ、歎息言無く病目を揩ふ。(六)陋邦何の處にか此花を得たる、乃ち好事の西蜀より移す無らんや。寸根千里到り易からず。子を銜んで飛び來るは定めて鴻鵠か。(七)天涯流落倶に念ふべし、爲に一樽を飲んで此曲を歌ふ。明朝酒醒めて還獨り來らば、(八)雪落ちて紛紛那ぞ觸るゝに忍びん。

(一)黄州府城は江邊に在り　(二)海棠を指し言ふ　(三)金盤に植えて高大の家に薦むる要なし　(四)美人の紅脣酒を受けて顔微紅に翠袖の手もて綃紗を捲くに紅肉に映ずるがごとし　(五)偶然にもこの定惠院に海棠を得たりとの意　(六)陋俗僻遠の地　(七)海棠の實と東坡自身と共に他鄕に在るを類す　(八)花散ること雪の如し

哉。貢取二之涪一。至レ今欲レ食二林甫肉一。無三人擧レ觴酹二伯游一。我願天公憐二赤子一。莫下生二尤物一爲中瘡痏上。雨順風調百穀登。民不二飢寒一爲二上瑞一。君不レ見武夷溪邊粟粒芽。前丁後蔡相籠加。爭レ新買レ寵各出レ意。今年鬪品充二官茶一。吾君所レ乏豈此物。致二養口體一何陋邪。洛陽相君忠孝家。可レ憐亦進二姚黃花一。

や。養を口體に致すは何ぞ陋なるや。(一六)洛陽の相君は忠孝の家なり、憐むべし、亦姚黃の花を進む。

(一) 名つぎを置くなり (二) 一里毎の站なり、驛を傳ふるを指す (三) 死傷の者相つぐを謂ふ (四) 共に是州產の果實 (五) 東名なり、伯は船 (六) 楊貴妃を暗指す、貴妃珍果を見て微笑せしがその爲め數十の人命を失へり (七) 漢和帝の年號 (八) 唐の玄宗の年號 (九) 唐相李林甫玄宗の奢侈を諫止する能はず (一〇) 漢の唐羌和帝を諫む伯游はその字なり (一一) 珍奇の品物 (一二) 建州武夷產の茶なり (一三) 丁謂蔡襄等之が改良を圖る (一四) 大小龍團の佳品を送つて恩寵を得んとせり (一五) 品評のために官茶として徵發するに至る (一六) 錢惟演なり、錢も亦牡丹花を獻ぜしを憐むなり、姚黃は牡丹の一種、千葉黃花、民姚氏の家より出づと牡丹譜に見ゆ

定惠院の海棠

江城地瘴蕃二草木一。只有二名

(一)江城地瘴にして草木蕃し、只名花の(二)苦だ幽獨なる有り。嫣然として一笑す、竹

白頭眞可レ憐。伊昔紅顏美少年。公子王孫芳樹下。淸歌妙舞落花前。光祿池臺文二錦繡一。將軍樓閣畫二神仙一。一朝臥レ病無二相識一。三春行樂在二誰邊一。宛轉蛾眉能幾時。須臾鶴髮亂如レ絲。但看古來歌舞地。惟有二黃昏鳥雀飛一。

荔枝歎

蘇子瞻

十里一置飛二塵灰一。五里一堠兵火催。顚レ坑仆レ谷相枕藉。知是荔枝龍眼來。飛車跨レ山鶻橫レ海。風枝露葉如二新採一。宮中美人一破レ顏。驚塵濺血流二千載一。永元荔枝來二交州一。天寶

十里一置塵灰を飛ばし、五里一堠兵火催す。坑に顚し谷に仆れて相枕籍す、知る是れ荔枝龍眼の來るを。飛車山に跨り、鶻海に橫はる、風枝露葉新に採るが如し。宮中の美人一たび顏を破り、驚塵濺血千載に流る。永元の荔枝は交州より來り、天寶の歲貢は之を涪に取る。今に至るまで林甫が肉を食はんと欲し、人の觴を擧げて伯游に酹するもの無し。我は願ふ、天公赤子を憐んで、尤物を生じて瘡痏を爲すこと莫らんを。雨順ひ風調つて百穀登り、民飢寒せざるを上瑞と爲す。君見ずや、武夷谿邊粟粒の芽、前には丁、後には蔡相籠加す。新を爭ひ寵を買うて各〻意を出し、今年は鬪品官茶に充つ。吾君の乏しき所は豈此物ならん

洛陽城東桃李花。飛來飛去落㆓誰家㆒。幽閨兒女惜㆓顏色㆒。坐見㆓落花㆒長歎息。今年花落顏色改。明年花開復誰在。已見松栢摧爲㆑薪。更聞桑田變成㆑海。古人無㆑復洛城東。今人還對落花風。年年歲歲花相似。歲歲年年人不㆑同。寄㆑言全盛紅顏子。須㆑憐㆓半死白頭翁㆒。此翁

洛陽城東桃李の花、飛び來り飛び去つて、誰が家にか落つ。幽閨の兒女、顏色を惜み、（二）坐に落花を見て長へに嘆息す。今年花落ちて顏色改まり、明年花開いて復た誰か在る。已に見る松栢（三）摧けて薪と爲るを、更に聞く、桑田（四）變じて海と成るを。古人は復ること無し洛城の東、今人は還對す落花の風、年年歲歲花相似たり。歲歲年年人同じからず、言を寄す、全盛（五）の紅顏子、須らく半死の白頭翁を憐むべし。此の翁の白頭眞に憐むべし。伊れ昔紅顏の美少年。公子王孫（六）芳樹の下、淸歌妙舞落花の前。光祿池臺（七）錦繡を文り、將軍樓閣（八）神仙を畫く。一朝病に臥して相識無し、三春の行樂誰が邊にか在る。婉轉（九）たる蛾眉能く幾時ぞ、須臾に鶴髮亂れて絲の如し。但看る古來歌舞の地、惟黃昏鳥雀の飛ぶ有るのみ。

㊀ この詩はもと劉廷芝の作る所、其舅宋之問「年々歲々花相似、歲々年々人不同」の一聯を愛し、之を得んが爲めに遂に奴をして劉廷を壓殺せしめたりとの傳說あり ㊁ 顏色の衰へはつるを惜む ㊂ 古詩十九首中にも見えて他の古詩にも見ゆ ㊃ 前詩に出づ ㊄ 今年全盛を誇る紅顏の美少年等 ㊅ 貴游の子の汎稱なり ㊆ 光祿大夫王根の滿臺の類 ㊇ 大將軍梁冀邸宅を美大にせり ㊈ 卷曲せる貌

事有ニ至難一天幸耳。上皇蹕還ニ京師一。內間ニ張后色可否一。外間ニ李父頤指揮一。南內淒涼幾苟活。高將軍去事尤危。臣結春陵二三策。臣甫杜鵑再拜詩。安知ニ忠臣痛至ニ骨。後世但賞ニ瓊琚詞一。同來野僧六七輩。亦有ニ文士相追隨一。斷崖蒼蘚對立久。凍雨爲洗前朝悲。

亦文士の相追隨する有り。(一七)斷崖蒼蘚對立すること久しく、凍雨爲に洗ふ前朝の悲。

(一)唐の元結が大唐中興頌を刻せる碑なり、浯溪に在り　(二)あかざの杖　(三)石摺を見たるのみなりしが今日碑を實見しつゝ、髯髮を風に吹かるゝとなり　(四)玄宗皇帝は大亂豫防の計を爲さず　(五)安祿山を指す　(六)天子は七廟を是とすれど王莽以來は九廟となれり、宗廟なり　(七)太子の出征を撫軍とし、內守を監國とす　(八)肅宗が命を受けずして卽位せるを指す　(九)不安の態なり詩經正月の篇參照　(一〇)肅宗の皇后なり、肅宗后に制せられて還御の玄宗にも謁する能はざりき　(一一)李輔國肅宗を掣肘して玄宗を困しむ　(一二)玄宗興慶宮に居る、卽ち南內なり　(一三)高力士なり　(一四)元結春[illegible]にて時議三篇を上つる　(一五)杜甫に杜鵑の詩歎篇あり皆時政を譏る　(一六)辭句玉の如くなるを美するなり　(一七)斷崖下の蒼苔上に相對立す

七言古風長篇

思ふ所有り(二)

宋之問

機上疎螢度。烏鵲橋邊一鴈飛。鴈飛螢度愁難ㇾ歇。坐見朝河漸微沒。已能舒卷任二浮雲一。不ㇾ惜三光輝讓二流月一。明河可ㇾ望不ㇾ可ㇾ親。願得二乘ㇾ槎一問二迷津一。更將二織女支機石一。還訪二成都賣卜人一。

磨崖の碑に題す　　黄山谷

春風吹ㇾ船著二浯溪一。扶ㇾ藜上讀中興碑。平生半世看二墨本一。摩二挲石刻一鬢如ㇾ絲。明皇不ㇾ作二包桑計一。顚二倒四海一由二祿兒一。九廟不ㇾ守乘輿西。萬官奔竄鳥擇ㇾ棲。撫軍監國太子事。何乃趣取二大物一爲。

春風船を吹いて浯溪に著く、藜に扶つて上つて讀む、中興の碑。平生半世は墨本を看しが、石刻を摩挲して鬢絲の如し。明皇は包桑の計を作さず、四海を顚倒せるは祿兒に由れり。九廟守らず、乘輿西し、萬官奔竄して鳥は栖を擇ぶ。撫軍監國は太子の事たり、何ぞ乃ち趣に大物を取ることを爲ん。事に至難有るは天幸のみ、上皇跼蹐して京師に還るも、内は張后の色もて可否するに間てられ、外は李父が頤もて指揮するに間てられ、南内淒凉として幾ど苟も活き、高將軍去つて事尤も危し。臣結が春陵の二三策、臣甫が杜鵑再拜の詩。安ぞ忠臣の痛骨に至ることを知らん、後世但瓊琚の詞のみを賞す。同來の野僧六七輩、

八月涼風天
氣晶。萬里無
雲河漢明。昏
見南樓清且
淺。曉落西山
縱復横。洛陽
城闕天中起。
長河夜夜千
門裏。複道連
甍共蔽虧。畫
堂瓊戶特相
宜。雲母帳前
初汎濫。水精
簾外轉透迤。
倬彼昭回如
練白。復出東
城接南陌。南
北征人去不
歸。誰家今夜
擣寒衣。鴛鴦

八月涼風天氣晶に、萬里雲無くして河漢(一)明なり。昏に南樓に見はれて清且つ淺、曉に西山に落ちて縱復た横。洛陽の城闕天中に起り、(二)長河夜夜千門の裏、複道連甍共に蔽虧し、(三)畫堂瓊戶特に相宜し。(四)雲母帳前初めて汎濫し、水精簾外轉透迤たり。倬たる彼の昭回は練白の如く、(五)復た東城を出でて南陌に接す、南北の征人去つて歸らず、誰が家か今夜寒衣を擣く。(六)鴛鴦機上疎螢度り、(七)烏鵲橋邊一鴈飛ぶ。鴈飛び螢度つて愁歎き難く、坐に見る、明河の漸く微沒するを。已に能く(八)舒卷を浮雲に任す、光輝の流月に讓るを惜まず。明河は望むべし、親しむ可からず、願はくは(九)槎に乘じて一たび津を問ふことを得ん。更に織女の支機石を將て還た成都賣卜の(一〇)人を訪はん。

(一)あまの河 (二)天半に高く聳ゆ (三)銀河を蔽うて見しめず (四)本草綱目に華容方臺山に長五六尺の雲母あり屏風を作るべしとあり (五)光の天に隨つて轉ずることねり絹の如し (六)鴛鴦の模様ある錦を織る機 (七)淮南子に烏鵲河をうづめて織女を渡す云々 (八)或は卷き或は舒ぶ (九)一種の舟なり、博物志に槎に乘じて河を尋ね、一婦人に遇ひ一石を得て歸り嚴君平に問うて支機石なるを知りたる人の事を記せり (一〇)卽ち嚴君平なり

東巷四勢六龍。六龍西幸峨眉棧。悲風便入清華院。霓裳蕭散羽衣空。麋鹿來遊猿鶴怨。我上朝元春半老。滿地落花無人掃。羯鼓樓高掛夕陽。長生殿古生青草。可憐吳楚兩醯雞。築臺未就已堪悲。長楊五柞漢幸免。江都樓成隋自迷。由來流連多喪國。宴安鴆毒因奢惑。三風十愆古所戒。不必驪山可亡國。

ず。憐むべし吳楚の(九)兩醯雞、臺を築いて未だ就らず、已に悲しむに堪へたり。(一〇)長楊五柞漢幸に免かれ、(一一)江都樓成つて隋自ら迷ふ。由來流連は多く國を喪ひ、(一二)宴安は鴆毒なり奢惑に因る。(一三)三風十愆は古へより戒むる所、必ずしも驪山のみ國を亡す可しといふにあらず。

(一) 主君の門は九重といへるに本づく (二) 二重の廊下 (三) 周の穆王八駿馬に乗りて天下を周行す (四) 天子の車なり、下は玄宗皇帝の蒙塵を指す (五) 驪山清華宮に在り (六) 羽衣と共に舞曲の名 (七) 朝元閣は驪山に在り (八) 長生殿と共に宮名 (九) 吳王夫差姑蘇臺を築き楚の靈王章華臺を築きしが共に瓮の中の蟲の如く何の價値もなし (一〇) 漢の武帝の建てし殿名 (一一) 隋の煬帝迷樓を江都に建つ (一二) 左傳閔公元年の條參看 (一三) 書經伊訓に就いて見るべし

明河篇

宋之問

金積レ玉誇二豪殺一。毎揖二閑人一多二意氣一。生來不レ讀半行書。只把二黃金一買二身貴一。少年安得二長少年一。海波尙變爲二桑田一。枯榮遞傳急如レ箭。天公豈肯爲レ君偏。莫レ道韶華鎭長在。白頭面皺專相待。

(五) 他人の厄介 (六) 勢力の盛なるを誇る (七) 遊俠隱逸の人を禮遇す (八) 列仙傳に東海の三たび變じて桑田と爲るを見るの語あり (九) 春光其儘永久に在ることなし、鎭は其儘の意

驪山　蘇子瞻

君門如レ天深幾重。君王如レ帝坐二法宮一。人生難レ處是安穩。何爲來二此驪山中一。複道凌レ雲接二金闕一。樓觀隱レ煙橫二翠空一。林深霧暗迷二八駿一。朝

君門は天の如くして深さ幾重ぞ、君王は帝の如くして法宮に坐す。人生處り難し(一)是安穩、何爲れぞ此の驪山の中に來れる。(二)複道雲を凌いで金闕に接し、樓觀煙に隱れて翠空に橫はる。林深く霧暗うして(三)八駿を迷はし、朝には東暮には西(四)六龍を勞す。六龍西に幸す、峨眉の棧、悲風便ち(五)淸華院に入る。(六)霓裳蕭散として羽衣空しく、麋鹿來り遊んで猿鶴怨む。我(七)朝元に上れば春半ば老い、滿地の落花人の掃ふもの無し。(八)羯鼓樓は高うして夕陽を掛け、長生殿は古りて靑草を生

青驄馬肥金鞍光。龍腦入縷羅衣香。美人狎坐飛瓊觴。貧人喚云天上郞。別起高樓連碧篠。絲曳紅鱗出深沼。有時半醉百花前。背把金丸落飛鳥。自說生來未爲客。一身美妾過三百。豈知斸地種田家。官稅頻催沒人織。長

年少を刺る

李長吉

青驄馬(一)は肥えて金鞍光り、龍腦縷に入つて(二)羅衣香し。美人狎れ坐して瓊觴を飛ばし、貧人喚んで天上郎と云ふ。別に高樓を起して碧篠(三)に連ね、絲は紅鱗を曳いて深沼より出づ、時有りて半醉す、百花の前、背に金丸(四)を把つて飛鳥を落す。自ら說く生來未だ客(五)と爲らずと、一身の美妾三百に過ぎたり。豈知らんや地を劚つて田を種うるの家、官稅頻に催して人の織るものを沒す。金を長じ、玉を積んで豪毅(六)に誇り、每に閑人を揖して意氣多し。生來讀まず半行の書、只黃金を把つて身の貴を買ふ。少年安ぞ(七)長へに少年たるを得ん、海波(八)尙ほ變じて桑田と爲る。枯榮は遞に傳へて急なること箭の如し、天公豈肯て君が爲に偏せんや。道ふ莫れ、韶(九)華鎭して長へに在りと、白頭面皺專ら相待てり。

(一) 背白毛の馬　(二) うすものの衣に香料を燻きしむ　(三) 閑静なる竹籔のほとり　(四) 黄金製の小丸なり、一本に出

兵夜流レ血。咸陽宮殿三月紅。霸業已隨二煙燼一滅。剛強必死仁義王。陰陵失レ道非二天亡一。英雄本學萬人敵。何用三屑屑悲二紅粧一。三軍散盡旌旗倒。玉帳佳人坐中老。香魂夜逐二劍光一飛。青血化爲二原上草一。芳心寂寞寄二寒枝一。舊曲聞來似レ斂レ眉。哀怨徘徊愁不レ語。恰如下初聽二楚歌一時上。滔滔逝水流二今古一。漢楚興亡兩丘土。當年遺事久成レ空。慷二慨樽前一爲レ誰舞。

業は已に煙燼に隨って滅びぬ。剛強は必ず死し仁義は王たり、(五)陰陵に道を失へるは天の亡せるに非ず。(六)英雄本學ぶ萬人の敵、何ぞ屑屑として紅粧を悲しむを用ひん。三軍散じ盡して旌旗倒れ、(七)玉帳の佳人坐中に老いたり。(八)香魂は夜劍光を逐うて飛び、青血は化して原上の草と爲る。芳心寂寞寒枝に寄せ、(九)舊曲聞き來れば眉を斂むるに似たり。哀怨徘徊愁へて語らず、恰も初めて楚歌を聽きし(一〇)時の如し。滔滔たる逝水今古に流る、(一一)漢楚の興亡兩つながら丘土。當年の遺事久しく空と成れり、樽前に慷慨して誰が爲にか舞はん。

(一) 楚の項羽の愛姬虞美人の塚上に生じたる草花、ひなげしの類 (二) 鴻門の會に范增玉斗を撞破せり (三) 項羽は楚の降兵を坑殺す (四) 亦項羽の爲に燒かる (五) 項羽垓下の戰に敗れ天の我を亡すなりと謂へるを引く (六) 項羽本紀に出づ (七) 虞姬を指す (八) 虞姬劍によりて自殺す (九) この草が人の舊曲を唱ふるを聞いて舞ふるとなり (一〇) 項羽垓下の帳中に四面楚歌を聞けり (一一) 漢も楚も共に邱墓の殘存するのみ

来到亭中名已好、紫蟹肥時晩稻香、黃雞啄處秋風早。我憶金鑾殿上人。醉著宮錦烏角巾。巨靈擘山洪河竭。長鯨吸海萬壑貧。如傾元氣入胷腹。須臾百媚生陽春。讀書不必破萬卷。筆下自有鬼與神。我曹本是狂吟客。寄語溪山莫相憶。他年須使襄陽兒、再唱銅鞮滿街陌。

長鯨海を吸うて萬壑貧し。(八)元氣を傾けて胷腹に入るゝが如く、須臾に百媚陽春を生ず。讀書必ずしも萬卷を破らずとも、筆下自ら鬼と神と有り、我曹本是れ狂吟の客なり、(九)語を寄す、溪山相憶ふ莫らんや。他年須らく(一〇)襄陽の兒をして、再び銅鞮を唱へて街陌に滿たしむべし。

(一)所在を詳にせず　(二)采石月詩參照　(三)後出飲中八仙歌參照　(四)賀知章李白を愛し腰間の金龜を酒に換ふ　(五)李白が天寶中に召見せられし殿名　(六)黃色の頭巾　(七)河神なり　(八)宇宙間の根本動力　(九)杜甫の句を襲用す　(一〇)後出襄陽歌參照

鴻門玉斗紛如雪。十萬降

(一)虞美人草

曾子固

(二)鴻門の玉斗紛として雪の如く、(三)十萬の降兵夜血を流す。(四)咸陽の宮殿三月紅く、覇

帶二弓箭一。白馬嚼囓黃金勒。翻レ身向レ天仰射レ雲。一箭正墜雙飛翼。明眸皓齒今何在。血汚二遊魂一歸不レ得。清渭東流劍閣深。去住彼此無二消息一。人生有レ情淚沾レ臆。江水江花豈終極。黃昏胡騎塵滿レ城。欲レ往二城南一忘二南北一。

る。

(一)江頭即ち曲江池を愁しむ意　(二)杜甫自ら言ふ　(三)天子の屢々行幸ありしを言ふ　(四)楊貴妃を指して言ふ　(五)女官なり正五品　(六)くつわ　(七)二羽の鳥を射墜せしは或は何等かの前兆なりしならん　(八)貴妃の死を傷むなり　(九)馬嵬驛に縊り殺されて其魂は中有をさまよふなり　(一〇)彼は去り、是は住まる　(一一)夕方胡騎の賊兵に逢ひ倉皇家に還るに方角を忘れたりと愁の深きを言ふなり

燕思亭(一)

馬子才

李白騎レ鯨飛上レ天。江南風月閑多年。縱有三高亭與二美酒一。何人一斗詩百篇。主人定是金龜老。

李白鯨に騎つて飛んで天に上り、江南の風月閑すること多年なり。(二)縱ひ高亭と美酒と有りとも、何人か一斗詩百篇ならん。(三)主人は定めて是れ金龜の老か、(四)未だ亭中に到らざるに名已に好し。紫蟹肥ゆる時晩稻香しく、黃雞啄む處秋風早し。我は憶ふ、(五)金鑾殿上の人、醉うて宮錦を著く烏角巾。(六)巨靈山を擘いて洪河竭き、(七)

幻出眞天人。恍然坐ニ我水仙府ー。蒼煙萬頃波粼粼。玉堂學士今劉向。禁直岩嶢九天上。不レ須對レ此融ニ心神ー。會植ニ青藜ー夜相訪。

延の翰林學士たる我は昔の劉向に似たり　(一〇)禁中の宿直に何もこの圖に對し心神を融合するには非ざれど圖中の仙人は劉向を天祿閣に訪ひし如く尋ね來るならんとの意なり

少陵野老呑レ聲哭。春日潛行曲江曲。江頭宮殿鎖ニ千門ー。細柳新蒲爲レ誰綠。憶昔霓旌下ニ南苑ー。苑中萬物生ニ顏色ー、昭陽殿裏第一人。同レ輦隨レ君侍ニ君側ー。輦前才人

哀江頭（一）

杜子美

(一)少陵の野老聲を呑んで哭す、春日潛行す、曲江の曲。江頭の宮殿千門を鎖し、細柳新蒲誰が爲にか綠なる。(二)憶ふ、昔霓旌の南苑に下りしを、(三)苑中の萬物顏色を生じき。(四)昭陽殿裏の第一人、輦を同じうし君に隨つて君側に侍しき。輦前の才人(五)弓箭を帶び、白馬嚼齧す、黃金の勒。身を飜して天に向つて仰いで雲を射、一箭正に墮す、雙飛の翼。(六)明眸皓齒今何くにか在る、(八)血は遊魂を汚して歸ること得ず。(九)淸渭は東流し(七)劍閣は深し、去住彼此消息無し。(一〇)人生情有り、淚臆を沾す、江水江花豈終極あらんや。(一一)黃昏に胡騎あり、塵城に滿つ、城南に往かんと欲して南北を忘

雪霜。行人不レ過聽二竽籟一。虎倒龍顚委二榛棘一。淚痕血點垂二胸臆一。我有二新詩一何處吟。草堂自レ此無二顏色一。

太乙眞人蓮葉舟。脫レ巾露レ髮寒颼颼。輕風爲レ帆浪爲レ檝。臥看二玉宇一浮二中流一。中流蕩漾翠綃舞。穩如二龍驤萬斛擧一。不二是峯頭十丈花一。世間那得二葉如一レ許。龍眠畫手老入レ神。尺素

太乙眞人が蓮葉の圖に題す(一)

韓子蒼

太乙の眞人蓮葉の舟、巾を脫し、髮を露はして寒(二)颼颼たり。輕風を帆と爲し、浪を檝と爲し、臥して(三)玉宇を看て中流に浮ぶ。中流蕩漾として(四)翠綃舞ひ、穩にして(五)龍驤萬斛の擧るが如し。是れ(六)峯頭十丈の花ならずば、世間那ぞ葉の許の如くなるを得んや。(七)龍眠の畫手老いて神に入り、(八)尺素幻出す、眞天人。恍然として我を水仙の府に坐せしむ、蒼煙萬頃波粼粼たり。(九)玉堂の學士は今の劉向、(一〇)禁直岧嶢たり九天の上。須ひず、此に對して心神を融するを、會〻青藜を植いて夜相訪はん。

(一)李伯時に太一眞人が一大蓮中に臥して書を讀めるの圖あり　(二)寒さうにざわ〳〵す　(三)青天　(四)蓮葉に喩ふ　(五)巨舟の意　(六)前出玉井蓮を見るべし　(七)李伯時は卽ち龍眠居士なり　(八)幅狹き書絹の中　(九)朝

金樽裏。

倚江楠樹草堂前。故老相傳二百年。誅茅卜居總爲此。五月髣髴聞寒蟬。東南飄風動地至。江翻石走流雲氣。幹排雷雨猶力爭。根斷泉源豈天意。滄波老樹性所愛。浦上童童一青蓋。野客頻留懼

楠木風雨の爲に拔かるゝ歎（一）　杜子美

江に倚る楠樹草堂の前、故老相傳ふ二百年と。（二）茅を誅して居を卜す總て此が爲なり、（三）五月寒蟬を聞くに髣髴たり。東南の飄風地を動かして至り、江翻り、石走つて雲氣を流す。幹は雷雨を排して猶ほ力爭すれども、（四）根は泉源に斷ゆ豈天意ならんや。（五）滄波老樹性の愛する所たり、浦上童童たる一靑蓋。野客頻に留つて雪霜を懼れ、行人過ぎずして（六）竽籟を聽く。虎のごとく倒れ龍のごとく顚りて榛棘に委し、淚痕血點胸臆に垂る。我に新詩有るも何の處にか吟ぜん、草堂此より顏色無けん。

（一）楠の木に同じ　（二）草茅をきり開いて住宅を構ふ　（三）夏の中に秋の蟬を聞くがごとし　（四）路に根こぎに拔け去る　（五）江上の滄波とこの老木とは予が鍾愛のものなりき　（六）行人立ちどまつて竽笙の如き樂聲を聽けり

郎。眉目眞似レ攻二文章一。死生往復猶康莊。樹穴探レ環知二姓羊一。

青天有レ月來幾時。我今停レ盃一問レ之。人攀二明月一不レ可レ得。月行卻與レ人相隨。皎如三飛鏡臨二丹闕一。綠煙滅盡清輝發。但見宵從二海上一來。寧知曉向二雲間一沒。白兎搗レ藥秋復春。姮娥孤栖與レ誰鄰。今人不レ見二古時月一。今月曾經レ照二古人一。古人今人若二流水一。共看二明月一皆如レ此。惟願當レ歌對レ酒時。月光長照二

酒を把つて月に問ふ　　李太白

青天月有りて來た幾時ぞ、我今盃を停めて一たび之を問はん。人明月を攀ぢんとは得べからざるも、月行は卻つて人と相隨ふ。皎として飛鏡の丹闕(一)に臨むが如く、綠煙滅盡して清輝發す。但見る宵に海上より來るを、寧ぞ知らんや、曉に雲間に向つて沒するを。白兎(二)藥を搗く秋復た春、姮娥(三)孤り栖む誰とか鄰せん。今人は古時の月を見ず、今日は曾て古人を照すことを經たり。古人今人流水の若く、共に明月を看て皆此の如し。惟願くは當に歌ふべし、酒に對する時、月光長に金樽の裏を照す。

(一) 仙宮の名　(二) 月中に白兎藥を搗くといふ傅玄の擬天問による　(三) 羿不死の藥を得たり、其妻姮娥之を盜んで月中に走る

遼東丁令威。作レ詩調レ我驚二逸興一。白雲遶レ筆聰前飛。待三取明朝酒醒罷一、與レ君爛熳尋二春輝一。

採石月下訪二謫仙一。夜披二錦袍一坐二釣船一。醉中愛二月江底懸一、以レ手弄レ月身翻然。不レ應三暴落飢蛟涎一。便當三騎レ鯨上二青天一。青山有レ冢人謾傳。却來二人間一知幾年。在昔孰識二汾陽王一。納レ官貫レ死義難レ忘。今觀郭裔奇

採石の月、郭功甫に贈る(一)　梅聖俞

(二)採石月下に謫仙を問へば、夜錦袍を披て釣船に坐せり。醉中月の江底に懸るを愛し、手を以て月を弄して身翻然。(三)應に暴に飢蛟の涎に落つべからず、便ち當に鯨に騎つて青天に上るべし。青山冢有り人謾に傳へ、却つて人間に來る知る幾年ぞ。在昔孰か汾陽王を識りし、(四)官を納れ死を貫く義忘れ難し。今は觀る郭裔奇後の郎、眉目眞に文章を攻くに似たり。(五)死生往復猶ほ康莊、(六)樹穴に環を探つて姓は羊なるを知りぬ。

(一) 名は祥正少より詩名ありき (二) 唐の李白、宮錦袍を衣ながら水中の月を捉へんとして水死せしところ (三) 飢えたる蛟龍の口に落つべきにもあらず (四) 郭子儀なり、李白は子儀を行伍の間に重識したり、子儀是を以て自己の官爵を以て白を贖へり (五) 死生は康莊の大道を往復するが如し (六) 羊祜五歳の時金環を李氏東垣桑木中に得たり、李氏驚いて祜の前身は李氏の子なりしを知りしが如く、功甫が李白の後身たること疑ふところなしとの意

函谷忽驚二胡馬來一。秦宮桃李向レ誰開。我愁遠謫夜郎去。何日金雞放赦回。

黄鶴高樓已槌碎。黄鶴仙人無レ所レ依。黄鶴上レ天訴二上帝一。却放二黄鶴一江南歸。神明太守再雕飾。新圖二粉壁一還芳菲。一州笑三我爲二狂客一。少年往往來相譏。君平簾下誰家子。云是

醉後丁十八が詩を以て予が黄鶴(一)樓を槌碎するを譏るに答ふ

黄鶴の高樓已に槌碎せり、黄鶴の仙人依る所無し。黄鶴天に上つて上帝に(二)訴ふるに、却つて黄鶴を放つて江南に歸らしむ。(三)神明の太守再び雕飾し、新(四)に粉壁に圖して還て芳菲す。一州我が狂客爲るを笑ひ、少年往往來つて相譏る。(五)君平が簾下誰が家の子ぞ、云ふ是れ(六)遼東の丁令威と。詩を作つて我に(七)調し、逸興を驚かす、白雲筆を遶つて牕前に飛ぶ。明朝酒醒め罷むを待ち取つて、君と爛熳(八)春輝を尋ねん。

(一) 韋南陵に贈る詩中の一句なり (二) 天帝なり (三) 漢の黄覇の故事なり、賢太守の義 (四) 白壁に畫きなどして再び美觀となす (五) 嚴遵字は君平賣卜し一日百錢を得れば足れりとして簾中に隱る (六) 神仙記に見えたる人なり、同姓なるにより言ふ (七) 嘲笑す (八) 一に春暉に作る蓋し輝は暉の通用也

昔在長安醉
花柳。五侯七
貴同盃酒。氣
岸遙凌豪士
前。風流肯落
他人後。夫子
紅顏我少年。
章臺走馬著
金鞭。文章獻
納麒麟殿。歌
舞淹留玳瑁
筵。與君相謂
長如此。寧知
草動風塵起。

(一)野郎に流さるゝとき辛判官に贈る

李太白

昔長安に在りて花柳に醉ひ、(二)五侯七貴と盃酒を同じうせり。(三)氣岸遙に凌ぐ豪士の前、風流肯て他人の後に落ちんや。夫子は紅顏我は少年、(四)章臺馬を走らせて金鞭を著く。文章獻納す、麒麟殿、歌舞淹留す、玳瑁筵。君と相謂ふ、長に此の如くならんと、寧ろ知らんや、(五)草動いて風塵起らんとは。(六)函谷忽ち胡馬の來るに驚く、秦宮の桃李誰に向つてか開かん。我は愁ふ、遠く謫せられて夜郎に去ることを、何の日か(七)金雞放赦せられて回らん。

(一) 雲南の南方 (二) 漢の王鳳等一族五人侯となる、又西都賦に呂霍上官趙丁傅王並に后族とあり (三) 意氣昂然たること (四) 花柳の巷、前出 (五) 四海騷亂するを謂ふ (六) 胡人函谷關を陷る (七) 放赦の日は金雞を樹てて宣制し終つて赦免す

月洞簫聲斷月明中。惟憂月落酒盃空。明朝捲地春風惡。但見綠葉栖殘紅。

人日杜二拾遺に寄す（一）　　高適

人日詩を題して草堂に寄す、（二）遙に憐む、故人の故郷を思ふを。柳條色を弄して見るに忍びず、梅花枝に滿ちて空しく腸を斷つ。身は南蕃に在りて（三）預る所無く、（四）心に懷く、百憂復た千慮。今年人日空しく相憶ふ、明年人日知る何の處ぞ。一臥東山（五）三十春、豈知らんや、書劍（六）の風塵に老ゆるを。龍鍾（七）として還二千石を忝うす、愧づ爾東西南北の人（八）。

（一）正月七日を人日とす、杜二は杜甫なり　（二）杜甫が浣花溪の家　（三）蜀、彭二州共に南蕃に在り　（四）關係する所　（五）晉の謝安が東山に隱遁せしを用ふ　（六）項羽が書を學び劍を學びし故事　（七）老病衰弱して郡守の俸給を忝うす　（八）心の儘に放浪する杜甫を指す

人日題詩寄草堂。遙憐故人思故鄉。柳條弄色不忍見。梅花滿枝空斷腸。身在南蕃無所預。心懷百憂復千慮。今年人日空相憶。明年人日知何處。一臥東山三十春。豈知書劍老風塵。龍鍾還忝二千石。愧爾東西南北人。

乘苦不早。著鞭跨馬涉遠道。會稽愚婦輕買臣。余亦辭家西入秦。仰天大笑出門去。我輩豈是蓬蒿人。

や。

(一)濁酒 (二)いつまでも居士となり (三)天子に説いて名利を得ることの早からんことを望みて旅程に上る (四)朱買臣の妻夫を棄て、離婚せり (五)草野賤民の義

月夜に客と酒を杏花の下に飲む　蘇子瞻

杏花飛簾散餘春　明月入戸尋幽人。褰衣步月踏花影　炯如流水涵青蘋。花間置酒清香發。爭挽長條落香雪。山城薄酒不堪飲。勸君且吸杯中

杏花簾に飛んで餘春を散じ(一)、明月戸に入つて幽人を尋ぬ。衣を褰げ月に歩して花影を踏むに、炯として流水の青蘋を涵すが如し(二)。花間に置酒すれば清香發し、爭うて長條を挽けば(三)香雪を落す。山城の薄酒は(四)飲むに堪へず、君に勸む且く杯中の月を吸へ。洞簫聲は斷ゆ、月明の中、惟憂ふ、月落ちて酒盃の空しからんことを。明朝地を卷いて昔風惡しく、但見る綠葉の殘紅を栖ましむるを。

(一)殘春の義 (二)水中に浮草のひたりたるが如し (三)長き枝を引き試む (四)山里の酒薄し

情不レ發。地形漸窄觀者多。雉驚弓滿勁箭加。衝レ人決起百餘尺。紅翎白鏃相傾斜。將軍仰笑軍吏賀。五色離披馬前墮。

將軍仰ぎ笑へば軍吏賀し、(五)五色離披として馬前に墮つ。

(一) 原野を焚いて鳥獸を狩り其跡小高くなれる處 (二) 技倆の巧妙 (三) 輕々しくは放たず (四) 雉驚飛すること百尺なる時矢放たれて紅き羽と矢鏃と相映斜す (五) 五色の雉なり

白酒初熟山中歸。黃雞啄レ黍秋正肥。呼レ童烹レ雞酌二白酒一。兒女嬉笑牽二人衣一。高歌取レ醉欲二自慰一。起舞落日爭二光輝一。遊二說萬

南陵に別を敍す　　李太白

(一)白酒初めて熟して山中に歸る、黃雞黍を啄んで秋正に肥えたり。童を呼び、雞を烹て白酒を酌み、兒女嬉笑して(二)人衣を牽く。高歌醉を取つて自ら慰めんと欲し、起ち舞へば落日光輝を爭ふ。(三)萬乘に遊說すること早からざるに苦しみ、鞭を著け馬に跨つて遠道を涉る。(四)會稽の愚婦は買臣を輕んじ、余も亦家を辭して西のかた秦に入る。天を仰いで大笑し、門を出でて去る、我輩豈是れ(五)蓬蒿の人ならん

樽酒相逢十載前。君爲二壯夫一我少年。樽酒相逢十載後。我爲二壯夫一君白首。我才與レ世不二相當一。戢レ鱗委レ翅無二復望一。當今賢俊皆周行。君何爲乎亦遑遑。盃行到レ君莫レ停レ手。破二除萬事一無レ過レ酒。

樽酒相逢ふ十載の前、君は壯夫爲り、我は少年たりき。樽酒相逢ふ十載の後、我は壯夫爲り、君は白首。我才世と相當らず、(一)鱗を戢め翅を委てて復た望むところ無し。當今賢俊皆周行、(二)君何爲れぞ亦遑遑たる。(三)盃行りて君に到らば手を停むる莫れ。萬事を破除する(四)は酒に過ぐるもの無し。

(一) 兵賣多須事態が該との說あり　(二) 自ら隱れて世事を度外視す　(三) 皆並び進む　(四) 忘れ去る

原頭火燒淨兀兀。野雉畏レ鷹出復沒。將軍欲二以レ巧伏一レ人。盤レ馬彎レ弓

雉、箭を帶ぶ

原頭火燒えて淨兀兀たり、野雉鷹を畏れて出でて復た沒す。將軍巧を以て人を(一)伏せんと欲し、馬を盤らし弓を彎いて惜んで發たず。(二)地形漸く窄うして觀る者多く、(三)雉驚き弓滿ちて勁箭加はる。(四)人を衝いて決起す百餘尺、紅翎白鏃相傾斜す。

上書自薦達。坐令㆔四海如㆓虞唐㆒。

古意

太華峯頭玉井蓮。開㆑花十丈藕如㆑船。冷比㆓雪霜㆒甘比㆑蜜。一片入㆑口沈痾痊。我欲㆑求㆑之不㆑憚㆑遠。青壁無㆑路難㆓夤緣㆒。安得㆓長梯㆒上摘㆑實。下種㆓七澤㆒根株連。

(一)太華峰頭の玉井蓮、花を開くこと十丈藕は船の如し。冷は雪霜に比し、甘は蜜に比す、一片口に入れば沈痾(二)も痊ゆ。我之を求めんと欲して遠きを憚らず、(三)青壁路無く、夤緣し難し。安んぞ長梯を得て上つて實を摘み、下つて七澤(四)に種ゑて根株連らしめん。

(一) 華山の頂に玉井池あり、中に千葉の蓮を生ずといふ　(二) 長病氣　(三) 千間の青壁聳ゆるによしなし　(四) 子虛賦に楚に七澤ありと見ゆ

(一)鄭兵曹に贈る

餘黃鶴樓。黃鶴一去不二復返一。白雲千載空悠悠。晴川歷歷漢陽樹。春草萋萋鸚鵡洲。日暮鄉關何處是。煙波江上使二人愁一。

て復た返らず、白雲千載空しく悠悠。晴川歷歷たり、漢陽の樹、春草萋萋たり、(三)鸚鵡の洲。日暮鄉關何の處か是れ。煙波江上人をして愁へしむ。

(一)武昌黃鶴山下にあり蜀の費禕仙となり黃鶴となりてこの地に來れりと傳ふ　(二)樓上の光景なり漢陽は武昌の西に在り　(三)武昌城西大江中に跨る洲の黃祖が禰衡を殺せしところ

虎有爪兮牛有角。虎可搏兮牛可觸。奈何君獨抱二奇才一。手把二犂鋤一餓二空谷一。當今天子急二賢良一。匭函朝出開二明光一。胡不上

唐衢に贈る (一)　韓退之

虎に爪有り、牛に角有り、虎は搏つ可く、牛は觸る可し。奈何せん、君獨り奇才を抱くも、手に犂鋤を把つて空谷に餓うるを。當今の天子は賢良に急なり、(二)匭函朝に出でて明光を開く、胡ぞ上書して自ら薦達し、坐から四海をして(三)唐の如くならしめざる。

(一)韓退之の門人　(二)銅を以て匭を作り、天子の上書を受くるもの、明光は招賢の宮名　(三)有虞陶唐の略、即ち堯舜なり

水仙花　　黃魯直

凌波仙子生ㇾ塵襪。水上盈盈步ニ微月一。是誰招ニ此斷腸魂一。種作ニ寒花一寄ニ愁絶一。含ㇾ香體ㇾ素欲ㇾ傾ㇾ城。山礬是弟梅是兄。坐對眞成被ニ花惱一。出ㇾ門一笑大江橫。

(一)凌波の仙子塵を生ずるの襪、水上盈盈として微月に步せしむ。是れ誰か此の(二)斷腸の魂を招いて、種ゑて寒花と作して愁絶を寄するぞ。香を含み(三)素を體にして城を傾けんと欲す。(四)山礬は是れ弟、梅は是れ兄。(五)坐對眞成に花に惱まさる、門を出でて一笑すれば大江橫はる。

(一) 曹植の洛神賦に見ゆ襪は靴下の類　(二) 水仙花を指す　(三) 白なり花瓣の純白なるを言ふ　(四) 七里香花　(五) 恭しく花に對す

黃鶴樓に登る(一)　　崔顥

(一) [illegible]

昔人已乘ニ黃鶴一去。此地空

昔人已に黃鶴に乘じて去る、此の地空しく餘す、黃鶴樓。黃鶴一たび去つ

恐汝後レ時難二獨立一。堂上書生空白頭。臨レ風三嗅二馨香一泣。

(一) 夏初に苗して七月に黄白花を開くえびす草　(二) 翠の車蓋を張れるが如き形状　(三) 細小の花黄金の錢を散ずるに似たり

二月梅を見る　唐子西

桃花能紅李能白。春深何處無二顏色一。不レ應三尙有二一枝梅一。可三是東君苦留レ客。向來開處當二嚴冬一。白者未レ白紅未レ紅。只今已是丈人行。肯與二年少一爭二春風一。

桃花は能く紅李は能く白、春深うして何の處か顏色無らん。(一)應に尙ほ一枝の梅有るべからず。是れ(二)東君の苦に客を留るなる可し。(三)向來開く處嚴冬に當り、白き者未だ白からず、紅は未だ紅ならず。只今已に是れ(四)丈人行、肯て年少と春風を爭はんや。

(一) 梅花有るべからざる筈との義　(二) 春の神　(三) 先日の義　(四) 桃李に比して隱居株なる義

陽不堪摘明日蕭條盡醉醒。殘花爛漫開何益。籬邊野外多衆芳。采擷細瑣升中堂。念茲空長大枝葉。結根失所纏風霜。

殘花爛漫として開くとも何の益かあらん。籬邊野外(二)衆芳多し、細瑣(三)なるを采り擷りて中堂に升す。茲(四)の空しく長じて枝葉を大にし、根を結び所を失うて風霜に纏ふを念ふ。

(一) 重陽の節に甘菊を摘む能はざりき　(二) 野菊の類を言ふ　(三) つまらぬ細小のものなれど之を摘み取る　(四) この甘菊を憐むなり

雨中百草秋爛死。堦下決明顏色鮮。著葉滿枝翠羽蓋。開花無數黄金錢。涼風蕭蕭吹汝急。

秋雨の歎

雨中の百草秋に爛死す、堦下の決明(一)顏色鮮かなり。葉は著けて枝に滿つ翠羽(二)蓋、花を開いて無數黄金(三)錢。涼風蕭蕭として汝を吹くこと急なり。恐らくは汝時に後れて獨立し難からん。堂上の書生は空しく白頭、風に臨んで三たび馨香を嗅いで泣く。

大鵬一日同風起。扶搖直上九萬里。假令風歇時下來。猶能簸却滄溟水。世人見我恆殊調。聞余大言皆冷笑。宣父猶能畏後生。丈夫未可輕年少。

(一)李邕に上る

大鵬一日風と同じく起ち、(二)扶搖して直に上る九萬里。假令風歇んで時に下り來るも、猶ほ能く滄溟の水を(三)簸却せん。世人我が恆に調を殊にするを見、余が大言を聞いて皆冷笑す。(四)宣父も猶ほ能く後生を畏れたり、丈夫は未だ年少を輕んず可からず。

(一) 字は泰和揚州の人 (二) 上行の風なり、一種のつじ風 (三) ふるひ起す (四) 孔子に後生畏るべしとの語あり

簷前甘菊移時晚。青蘂重

庭前の甘菊花を歎ず

杜子美

簷前の甘菊移す時晚く、(一)青蘂重陽摘むに堪へず。明日蕭條として盡く醉醒め、

滴二秋月一。月下長吟久不レ歸。古今相接眼中稀。解レ道澄江靜如レ練。令三人却憶二謝玄暉一。

て謝玄暉を憶はしむ。

㊀ 今の浙東西の地は即ち古の呉越なり ㊁ 相隔つるも相接するが如く我眼中の人物は幾人も稀しとなり ㊂ 謝朓の詩なり、玄暉は朓の字

杜陵賢人清且廉。東谿卜築歲將レ淹。宅近二青山一同二謝朓一。門垂二碧柳一似二陶潛一。好鳥迎レ春歌二後院一。飛花送レ酒舞二前簷一。客到但知留一醉。盤中秪有二水精鹽一。

東溪公の幽居に題す

(一)杜陵の賢人清にして且つ廉なり。(二)東谿に卜築して歲將に淹しからんとす。宅は青山に近うして謝朓に同じく、門は碧柳を垂れて(三)陶潛に似たり。好鳥春を迎へて後院に歌ひ、飛花酒を送つて前簷に舞ふ。客到れば但知る留めて一醉せしむるを、(四)盤中秪水精の鹽のみ有り。

㊀ 長安の東南方 ㊁ 東溪に隠遁して其閑居を修築す ㊂ 陶潛は門に五柳を植えたり ㊃ 盤中にはたゞ水晶の色なせる鹽あるのみ

聞道春還未相識。起傍寒梅訪消息。昨夜東風入武陽。陌頭楊柳黃金色。碧水渺渺雲茫茫。美人不來空斷腸。預拂靑山一片石。與君連日醉壺觴。

早春に王漢陽に寄す(一)

聞道く、春還つて未だ相識らず、起つて寒梅に傍うて消息を訪ふ。昨夜東風(二)武陽に入る。陌頭の楊柳黃金の色あり。碧水渺渺雲茫茫、(三)美人來らず空しく斷腸。(四)預め靑山一片の石を拂つて、君と連日壺觴に醉はん。

(一) 氏名不詳漢陽の令たり　(二) 武昌の地　(三) 貴君の義　(四) 山中一片の石を掃除して君の來訪を待つとの意

金陵夜寂涼風發。獨上高樓望吳越。白雲映水搖秋城。白露垂珠

金陵城の西樓月下の吟

金陵夜寂として涼風發る、獨り高樓に上つて吳越を望む。白雲水に映じて秋城を搖かし、白露珠を垂れて秋月に滴る。月下長吟して久しく歸らず、(三)古今相接すること眼中に稀なり。道ふことを解す、澄江靜にして練の如く、人をして却つ

晩。秋著二蘆花一兩岸霜。扁舟繫レ岸依二林樾一。蕭蕭兩鬢吹二華髮一。萬事不レ理醉復醒。長占二煙波一弄二明月一。

(三)鬢華髮を吹く。萬事理せず(四)醉うて復た醒む、長へに煙波を占めて明月を弄す。

(一) 白鷺の類 (二) 樹林の蔭 (三) 白髮に同じ (四) 處理すること無し

鳳凰臺上鳳凰遊。鳳去臺空江自流。吳宮花草埋二幽徑一。晉代衣冠成二古丘一。三山半落青天外。二水中分白鷺洲。總爲二浮雲能蔽一レ日。長安不レ見使二人愁一。

金陵の鳳凰臺に登る(一)

鳳凰臺上鳳凰遊ぶ、鳳去り臺空しうして江自ら流る。吳宮の花草は幽徑を埋め、(二)晉代の衣冠は古丘と成りぬ。(三)三山半は落つ、青天の外、(四)二水中分す、白鷺の洲。總て(五)浮雲の能く日を蔽ふが爲に、長安見えず、人をして愁へしむ。

(一) 城の東南にあり宋の元嘉中三鳳來り遊ぶ、王顗こゝに臺を起せり (二) 晉代衣冠繁華のところ、今日は一古丘となれり (三) 句容の三峰 (四) 秦淮の水二分して一は城に入り、一は城外を遶り共に一洲を夾む、即ち白鷺洲なり (五) 讒臣君明を蔽ふに喩ふ

若耶溪傍採蓮女。笑隔荷花共人語。日照新粧水底明。風飄香袖空中擧。岸上誰家遊冶郎。三三五五映垂楊。紫騮嘶入落花去。見此躊躇空斷腸。

採蓮の曲　　李太白

(一)若耶溪傍採蓮の女、笑つて荷花を隔てて人と共に語る。日は新粧を照して水底に明かに、風は香袖を飄へして空中に擧る。岸上誰が家の遊冶郎か、(二)三三五五垂楊に映ず。(三)紫騮嘶いて落花に入り去る、此を見て躊躇して空しく斷腸す。

(一) 越州會稽縣の東南方　(二) 風流の浮かれ男　(三) 良馬なり

屬玉雙飛水滿塘。菰蒲深處浴鴛鴦。白蘋滿棹歸來

淸江の曲

(一)屬玉雙飛して水は塘に滿ち、菰蒲深き處鴛鴦を浴す。白蘋棹に滿ちて歸り來ること晩く、秋は蘆花を著く兩岸の霜。扁舟岸に繫いで林樹に依り、(二)蕭蕭たる兩

烏夜啼

黃雲城邊烏欲棲。歸飛啞啞枝上啼。機中織錦秦川女。碧紗如煙隔窗語。停梭悵然憶遠人。獨宿孤房淚如雨。

(一)黃雲城邊烏棲まんと欲し、歸り飛んで啞啞枝上に啼く。(二)機中錦を織る秦川の女、碧紗煙の如くにして窗を隔てて語る。(三)梭を停めて悵然として遠人を憶ひ、獨り孤房に宿して淚雨の如し。

(一) 黃昏の雲氣深き城邊 (二) 機に上つて錦を織るなり、秦川竇滔の妻が廻文旋璣の圖を織りし故事による (三) 惆悵するなり

戲に禽語に和答す

黃山谷

南村北村雨一犁。新婦餉姑翁哺兒。田中啼鳥自四時。催人脫袴著新衣。著新替舊亦不惡。去年稅重無袴著。

南村北村雨一犁(一)、新婦は姑に餉し翁は兒に哺す。(二)田中の啼鳥自ら四時、人を催し袴を脫して新衣を著けしむ。新を著け舊に替ふる、亦惡しからざれども、去年は稅重うして袴の著くべき無かりき。

(一) 田を耕すに適當なる位の雨 (二) 田中の鳥は自然に四季を報じて人をして布袴(もゝひき)を脫却せしむ

風吹二柳花一滿店香。吳姬壓レ酒喚レ客嘗。金陵子弟來相送。欲レ行不レ行各盡レ觴。請君試問二東流水一。別意與レ之誰短長。

去歲何時君別レ妾。南園綠草飛二蝴蝶一。今歲何時妾憶レ君。西山白雪暗二秦雲一。玉關此去三千里。欲レ寄二音書一那得レ聞。

金陵酒肆の留別　　李太白

風は柳花を吹いて滿店香し、(一)吳姬酒を壓して客を喚んで嘗めしむ。(二)金陵の子弟來つて相送る、(三)行かんと欲して行かず、各々觴を盡す。請ふ、君試に東流の水に問へ、別意之と誰か短長ぞ。

(一) 柳絮に同じ　(二) 店の婦女酒を釀む、壓は酒を搾る義　(三) 別れ行くに忍びず

邊を思ふ

去歲何の時か君妾に別れき、(一)南園の綠草蝴蝶を飛ばせり。今歲何の時ぞ妾君を憶ふ、(二)西山の白雪秦雲に暗し、(三)玉關此を去る三千里。音書を寄せんと欲するも那ぞ聞くを得ん。

(一) 昨年離別の時の光景をいふ也　(二) 西山雪深うして秦地方の雲暗し　(三) 玉門關なり

凍雨霏霏半成雪。遊人履冷蒼崖滑。不辭携被岩底眠。洞口雲深夜無月。

漁翁夜傍西巖宿。曉汲清湘燃楚竹。煙消日出不見人。欸乃一聲山水綠。回看天際下中流。巖上無心雲相逐。

三遊洞に遊ぶ(一)　蘇子瞻

凍雨霏霏として半は雪と成る。遊人履(二)冷にして蒼崖滑なり。被(三)を携へて岩底に眠ることを辭せざるも、洞口雲深うして夜月無し。

(一) 荊州夷陵の西北方に在り、唐の白樂天之に遊びし事あり　(二) 足冷にして靴すべり易し　(三) 寢具あらば野宿を厭はざれど見るべき景色もなければ歸らんとなり

漁翁　柳子厚

漁翁夜西巖(一)に傍うて宿し、曉に清湘(二)を汲んで楚竹を燃す。煙消し、日出でて人を見ず、欸乃(三)一聲山水綠なり。天際を回り看て中流を下れば、巖上無心に雲相逐ふ。

(一) 地名なるべし　(二) 清らかなる湘江の水　(三) 船歌

芝何處一未二歸來一。白雲滿地無二人掃一。

青溪道士人不レ識。上レ天下レ天鶴一隻。洞門深鎖碧窗寒。滴レ露研レ朱點二周易一。

城中寸土如二寸金一。幽軒種レ竹只十箇。春風愼勿レ長二兒孫一。穿二我堦前綠苔一破。

㊀ 神仙人を尋ねんと蓬萊島に逃び入る　㊁ 靈芝なり

歩虚の詞（一）　高　駢

青溪の道士人識らず、天に上り天より下る鶴一隻。洞門深く鎖して碧窓寒し、露（二）を滴し朱を研いで周易を點ず。

㊀ 陳思王魚山に遊びて聞けりといふ、道家諷經の聲に擬するなり　㊁ 周易を讀んで朱點つるなり

十　竹　僧　清　順

城中の寸土（一）は寸金の如く、幽軒竹を種う、只十箇。春風愼んで兒孫（二）を長ずる勿れ、我が堦前の綠苔を穿ち破らん。

㊀ 土一升金一升　㊁ 筍を生ぜしめざれ

洞房昨夜春風起。遙憶美人湘江水。枕上片時春夢中。行盡江南數千里。

(一)洞房昨夜春風起る、遙に憶ふ、(二)美人湘江の水。枕上片時春夢の中、行き盡す、(三)江南の數千里。

(一)奥深き閨の中　(二)湘江の邊に在る美人を憶ふ　(三)湘江南方の地

少年行　王維

新豐美酒斗十千。咸陽遊俠多ニ少年一。相逢意氣爲レ君飲。繫レ馬高樓垂柳邊。

(一)新豐の美酒斗十千、咸陽の遊俠少年多し。相逢うて(二)意氣君が爲に飲む、馬を繫ぐ、高樓垂柳の邊。

(一)長安附近の地なり、斗十千は萬斗に同じ　(二)意氣相投じて君と共に飲むを辭せず

隱者を尋ねて遇はず　魏野

尋レ眞悞入蓬萊島。香風不レ動松花老。採ニ

(一)眞を尋ねて悞つて入る蓬萊島。香風動かず、松花老ゆ。(二)芝を何の處にか採る、未だ歸り來らず、白雲滿地人の掃ふ無し。

問レ余何事栖二碧山一笑而不レ答心自閑。桃花流水窅然去。別有二天地非一人間。

兩人對酌山花開。一盃一盃復一盃。我醉欲レ眠君且去。明朝有レ意抱レ琴來。

山中にて俗人に答ふ

余に問ふ何事ぞ、(一)碧山に栖むと。笑つて答へず、心自ら閑なり。桃花流水窅然(二)として去る。(三)別に天地の人間に非ざる有り。

(一) 碧山は青山に同じ、かく獨り青山に棲むの意如何と也　(二) 本集杳然に作る　(三) 世間以外の別天地あり

山中對酌

兩人對酌すれば(一)山花開く、一盃一盃復一盃。我醉うて眠らんと欲す、君且く去れ、(二)明朝意有らば琴を抱いて來れ。

(一) 山中の花　(二) 重ねて我を訪ふの意あらば

春夢

岑參

餘外徒繽紛。長安衆富兒。盤饌羅二羶葷一。不レ解二文字飲一。惟能醉二紅裙一。雖レ得二一餉樂一。有レ如二聚飛蚊一。今我及數子。故無二蕕與レ薫。險詰破二鬼膽一。高詞媲二皇墳一。至寶不二雕琢一。神功謝二鋤耘一。方今向二泰平一。元凱承二華勛一。吾徒幸無事。庶以窮二朝曛一。

に似たり　(一四) 高尚の文詞は三皇の書にも比すべし　(一五) 八元八凱にも比すべき名相輩出して、堯舜の如き天子を相く　(一六) 朝夕醉歌す

峨眉山月半輪秋。影入二平羌江水一流。夜發二三溪一向二三峽一。思レ君不レ見下二渝州一。

七言古風短篇

峨眉山月の歌　李太白

峨眉(一)の山月半輪の秋、影は平羌江(二)水に入つて流る。夜三溪(三)を發して三峽に向ふ、君(四)を思へども見えず、渝州に下る。

(一) 蜀の山名　(二) 江の名なり　(三) 清溪とあるを是とす、縣名なり、三峽は巴峽明月峽巫峽共に嶮難の地　(四) 月を指す

呼レ酒持勸レ君。
爲二此座上客一。
及レ余各能レ文。
君詩多二態度一。
藹藹春空雲。
東野動驚レ俗。
天葩吐二奇芬一。
張籍學二古淡一。
軒昂避二雞羣一。
阿買不レ識レ字。
頗知レ書二八分一。
詩成使二之寫一。
亦足レ張二吾軍一。
所三以欲レ得レ酒。
爲レ文俟二其醺一。
酒味既冷冽。
酒氣又氤氳。
性情漸浩浩。
諧笑方云云。
此誠得二酒意一。

は態度多く、藹藹として春空の雲のごとし。(三)東野は動もすれば俗を驚かし、(四)天葩奇芬を吐く。張籍は古淡を學び、(五)軒昂として雞羣を避く。(六)阿買は字を識らざるも、頗る八分を書するを知れり。(七)詩成るとき之をして寫さしむれば、亦吾軍を張るに足れり。酒を得んと欲する所以は、文を爲るに其醺を俟てばなり。(八)酒味既に冷冽、酒氣又氤氳たり。(九)性情漸く浩浩、諧笑方に云云たり。此れ誠に酒意を得たり、餘外は徒に繽紛たり。(一〇)長安の衆富兒、盤饌に羶葷を羅ぬるも、(一一)文字の飲を解せず、惟能く紅裙に醉ふ。一餉の樂を得と雖も、(一二)聚飛の蚊の如き有るのみ。今我及び數子と、故より瘠と羶と無し。(一三)險語鬼膽を破り、高詞皇墳に媲ぶ。(一四)至寶は雕琢せず、神功は鋤耘を謝す。方今秦平に向ひ、元凱華勛を承く。(一五)吾徒幸に無事、庶くは以て朝曛を窮めん。(一六)

、(一)要數ならんとの說あれど明確ならず　(二)風情雅致　(三)孟郊東野と號す　(四)天より下る花　(五)鶴の雞群を避くるが如し　(六)隸書の體　(七)一種の字體　(八)酒に醉ふこと　(九)氣の盛なること　(一〇)これ以外の者は徒に雜亂するのみ　(一一)皿に種々の肴を列す　(一二)一食頃の歡樂　(一三)臭草と香草と器を同じうすべからざる

暮隨二肥馬塵一。殘盃與二冷炙一。到レ處潛悲辛。主上頃見レ徵。欻然欲レ求レ伸。青冥却垂レ翅。蹭蹬無二縱鱗一。甚愧丈人厚。甚知丈人甚。每於二百寮上一。猥誦二佳句新一。竊效二貢公喜一。難レ甘二原憲貧一。焉能心怏怏。秖是走踆踆。今欲二東入一レ海。即將二西去一レ秦。尚憐終南山。回レ首清渭濱。常擬レ報二一飯一。況懷レ辭二大臣一。白鷗波浩蕩。萬里誰能馴。

白鷗波浩蕩たり、(一九)萬里誰か能く馴らさん。

(一)名は濟、尚書左丞となる (二)貴戚の子弟は一生涯を離れず、儒士は多く窮乏す (三)尊稱 (四)郷貢進士たるを言ふ、易に出でたる語 (五)漢の揚雄に敵せんと覺悟す (六)曹植に親近すべし (七)唐の人なり、杜甫を見て之を奇とせり (八)唐の文人盛名ありき (九)以上の志も頓挫して思ふ樣に行かず (一〇)一本に十三に作る (一一)頃日天子の士を召す (一二)忽然に同じ (一三)試驗に不合格なりしを歎ずるなり (一四)引き立てられしを喜ぶ義、貢公名は禹 (一五)顚出 (一六)奔走の貌、別を惜む意 (一七)山名なり (一八)一飯の恩も必ず報ゆるの精神を持するに大臣知己の恩に報いずして去らんとす (一九)白鷗馴らし難きが如く我は人亦た名利を爭ひ難し

酔うて張秘書に贈る(二)

韓退之

人皆勸二我酒一。我若二耳不一レ聞。今日到二君家一。

人皆我に酒を勸むれども、我は耳聞かざるが若くせり。今日君が家に到り、酒を呼んで持して君に勸む。此の座上の客と爲るもの、余と各々文を能くす。君が詩

儒冠多誤レ身。
丈人試靜聽。
賤子請具陳。
甫昔少年日。
早充二觀國賓一。
讀レ書破二萬卷一。
下レ筆如レ有レ神。
賦料二揚雄敵一。
詩看二子建親一。
李邕求レ識レ面。
王翰願レトレ隣。
自謂頗挺出。
立登二要路津一。
致二君堯舜上一。
再使二風俗淳一。
此意竟蕭條。
行歌非二隱淪一。
騎レ驢三十載。
旅食京華春。
朝扣二富兒門一。

陳べん。甫昔少年の日、早く觀國(四)の賓に充てられき。書を讀んで萬卷を破り、筆を下すに神有るが如し。賦は揚雄(五)が敵を料り、詩は子建(六)が親を看る。李邕(七)面を識らんことを求め、王翰(八)隣をトせんことを願ふ。自ら謂ふらく、頗る挺出すと。立つて要路の津に登り、君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳ならしめんとす。此の意竟に蕭條(九)、行歌は隱淪に非ず。驢に騎ること三十載(一〇)、旅食す、京華の春。朝には富兒の門を扣き、暮には肥馬の塵に隨ふ。殘盃と冷炙と、到る處潛に悲辛す。主上頃徵さる、欻然(一二)として伸を求めんと欲す。青冥(一三)却つて翅を垂れ、蹭蹬として縱鱗(一一)無し。甚だ愧づ、丈人の厚きに、甚だ知る、丈人の眞なるを。每に百寮の上に於て、猥に佳句の新なるを誦せらる。竊に、貢公(一四)が喜に效ひ、原憲(一五)が貧に甘んじ難し。焉んぞ能く心快快たらん、秖是れ走ること踆踆(一六)たらん。今は東して海に入らんと欲し、卽ち西のかた秦を去らんとす。尙ほ憐む終南山(一七)、首を回らす、清渭の濱、常に擬す、一飯(一八)に報いんとを、況んや大臣を辭するを懷ふをや。

乾坤繞漢宮。胡人愁逐北。宛馬又從東。受命邊沙遠。歸來御席同。軒墀曾寵鶴。畋獵舊非熊。茅土加名數。山河誓始終。策行遺戰伐。契合動昭融。勳業靑冥上。交親氣槩中。未為珠履客。已見白頭翁。壯節初題柱。生涯似轉蓬。幾年春草歇。今日暮途窮。軍事留孫楚。行間識呂蒙。防身一長劍。將欲倚崆峒。

倚らんと欲す。

（一）哥舒翰開府儀同三司となる （二）漢宮が功臣を畫かしめし建物 （三）使用聽命する人物 （四）王倕の部將となり王忠嗣の先鋒となり皆功あり （五）突厥吐蕃の地 （六）龍城を靑海に築く吐蕃敢て近づかず （七）薛仁貴三箭もて天山を定めたり （八）戰國趙の良將、史記參照 （九）晉の悼公に說いて戎と和せしめし人 （一〇）王忠嗣河湟を守りて寇の爲に敗らる （一一）翰河西の節度使となる （一二）叡慮に預る （一三）皇帝隆昌日月自ら低く天地も漢宮に及ばず （一四）大宛も名馬を貢獻す （一五）安祿山等と命によりて盟文せしを指す （一六）衞懿公が鶴を愛せしと周文王が獵をトせしとの故事 （一七）領地なり、封を進めて西平郡王となりしを言ふ （一八）寵恩永く渝ちず （一九）功勳天上に高く交友皆氣槪に浴す （二〇）史記春申君列傳參照 （二一）司馬相如志を立て、橋柱に題し後年の立身を誓へり （二二）蓬の風に轉ずる如きなり （二三）日暮れて途窮る義 （二四）晉人なり、才藻卓絕 （二五）吳人年十六にして孫策に知られたり （二六）山名なり、吐蕃入寇の途に當る、こゝを守らんとの義

（一）韋左丞に贈る

紈袴不餓死。

（二）紈袴餓死せず、儒冠多くは身を誤る。（三）丈人試に靜に聽け、賤子請ふ、具に

今代麒麟閣。何人第一功。君王自神武。駕馭必英雄。開府當朝傑。論兵邁古風。先鋒百勝在。略地兩隅空。青海無傳箭。天山早掛弓。廉頗仍走敵。魏絳已和戎。每惜河湟棄。新兼節制通。智謀垂睿想。出入冠諸公。日月低秦樹。

(一)哥舒開府に投贈す二十韻

今代の麒麟閣、(二)何人か第一の功ぞ。君王自ら神武、(三)駕馭必ず英雄。開府朝傑に當り、兵を論ずること古風に邁ぐ。(四)先鋒百勝在り、地を略して兩隅空し。(五)(六)青海箭を傳ふる無く、(七)天山早く弓を掛く、(八)廉頗仍敵を走らし、(九)魏絳已に戎を和ぐ。(一〇)每に河湟の棄つるを惜み、新に節制を兼ねて通ず。(一一)智謀は睿想を垂れ、出入は諸公に冠たり。(一二)日月秦樹に低れ、(一三)乾坤漢宮を繞る。胡人北に逐はるゝを愁へ、(一四)宛馬又東從す。命を受けて邊沙遠く、(一五)歸り來つて御席同じ。(一六)軒墀曾て鶴を寵し、畋獵舊熊に非ず、(一七)茅土名數を加へ、山河始終を誓ふ。策行はれて戰伐を遺れ、契合うて昭融を動かす。(一八)勳業青冥の上、交親氣槩の中。(一九)未だ珠履の客と爲らずして、(二〇)已に白頭翁を見る。(二一)壯節初め柱に題す、生涯は轉蓬に似たり。(二二)幾年か春草歇きん、今日暮途窮る。(二三)軍事孫楚を留め、(二四)行間呂蒙を識る。(二五)身を防ぐ一長劍、將に崆峒に(二六)

白日來ニ深殿一。青雲滿ニ後塵一。乞レ歸優詔許。遇レ我宿心親。未レ負ニ幽棲志一。兼全ニ寵辱身一。劇談憐ニ野逸一。嗜レ酒見ニ天眞一。醉舞梁園夜。行歌泗水春。才高心不レ展。道屈善無レ鄰。處士禰衡俊。諸生原憲貧。稻粱求未レ足。薏苡謗何頻。五嶺炎蒸地。三危放逐臣。幾年遭ニ鵩鳥一。獨泣向ニ麒麟一。蘇武先還レ漢。黃公豈事レ秦。楚筵辭レ醴日。梁獄上レ書辰。已用ニ當時法一。誰將ニ此義一陳。老吟秋月下。病起暮江濱。莫レ怪恩波隔。乘レ槎與問レ津。

屈して善（九）も鄰無し。（一〇）處士禰衡の俊、（一一）諸生原憲の貧。稻粱の求め未だ足らず、（一二）薏苡の謗何ぞ頻なる。（一三）五嶺炎蒸の地、三危放逐の臣。幾年か（一四）鵩鳥に遭ひ、獨り泣いて（一五）麒麟に向ふ。（一六）蘇武先つて漢に還る、（一七）黃公豈秦に事へんや。（一八）楚筵に醴を辭するの日、（一九）梁獄に書を上つるの辰。已に當時の法を用ひたり、誰か此義を將て陳ぜん。老吟す秋月の下、病起す暮江の濱、怪む莫れ、恩波の隔つるを、（二〇）槎に乘じて與に津を問はん。

（一）賀知章なり前出　（二）從前の謫屈を指す　（三）秀拔なる文彩によりて恩遇日に渥し　（四）玄宗白を召すに醉へり高力士扶けて舟に登らしむ　（五）樂章を作つて錦袍を受けたるを指す　（六）宿緣あるが如く親交を結べり　（七）予の如き者を憐む　（八）梁園醉歌は白の作なり　（九）德孤なり　（一〇）漢の高士なり　（一一）孔門の賢者　（一二）援根の誹謗　（一三）夜郎の地は五嶺三危に近し　（一四）賈誼鵩鳥賦を作る　（一五）孔子麟を見て泣く　（一六）漢の蘇武匈奴に在ること十九年　（一七）夏黃公は商山四皓の一なり秦を避けて隱る　（一八）漢の穆生楚元王が醴を設けざるを見て去りぬ　（一九）漢の鄒陽梁孝王に怒られ獄中より書を上る　（二〇）天の川を渡す船なり、天に訴へんとする義

才傑俱登用。愚蒙但隱淪。長歸多病久。子夏索居貧。回首驅流俗。生涯似衆人。巫咸不可問。鄒魯莫容身。感激時將晩。蒼茫興有神。爲公歌此曲。涕淚在衣巾。

の病ありき（二五）孔門の人甚だ貧しく群を離れて索居したり（二六）列子に鄭の季咸よく人の生死禍福を逆知るとあり（二七）孔子天下に容れられざるの語莊子に見ゆ（二八）老衰の意（二九）感激の餘興發現す

昔年有狂客。號爾謫仙人。筆落驚風雨。詩成泣鬼神。聲名從此大。汨沒一朝伸。文彩承殊渥。流傳必絕倫。龍舟移棹晩。獸錦奪袍新。

李白に寄す

昔年狂客有り、爾を謫仙人と號す。筆落ちては風雨を驚かし、詩成れば鬼神を泣かしむ。聲名此より大いに、（三〇）汨沒も一朝に伸びぬ。（三一）文彩殊渥を承け、流傳必ず絕倫なり。（三二）龍舟棹を移すこと晩く、（三三）獸錦袍を奪ふこと新なり。（三四）白日深殿に來り、靑雲後塵に滿つ。（三五）歸を乞ふに優詔もて許され、我を遇すること（三六）宿心親し。未だ幽棲の志に負かず、兼ねて寵辱の身を全うす。（三七）劇談野逸を憐み、酒を嗜んで天眞を見はす。醉うて舞ふ（三八）梁園の夜、行〻歌ふ、泗水の春。才高うして心展びず、道

沙汰江河濁。調和鼎鼐新。韋賢初相漢。范叔已歸秦。盛業今如此。傳經固絕倫。豫樟深出地。滄海闊無津。北斗司喉舌。東方領搢紳。持衡留藻鑒。聽履上星辰。獨步才超古。餘波德照鄰。聰明過管輅。尺牘倒陳遵。豈是池中物。由來席上珍。廟堂知至理。風俗盡還淳。

履して星辰(一八)に上るを聽す。獨歩の才は古に超え、餘波(一九)の德は鄰を照す。聰明は管輅(二〇)に過ぎ、尺牘は陳遵(二一)を倒せしむ。豈是れ池中の物ならんや、由來席上の珍(二二)たり。廟堂に至理を知り、風俗盡く淳に還る。才傑倶に登用せられ、愚蒙は但隱(二三)倫す。長卿(二四)の多病なる久しく、子夏(二五)の索居するや貧し。首を回らして流俗を臨る、生涯衆人に似たり。巫咸(二六)問ふ可からず、鄒魯(一七)身を容るゝ莫し。時の將に晩れ(二八)んとするに感激し、蒼茫(二九)として興に神有り。公の爲に此の曲を歌へば、涕涙衣巾に在り。

(一) 韋見素天寶十三年に同中書門下平章となる (二) 黄帝鳳鳥の至るを見て曆正の官に名づけたり (三) 玄宗即位以來の義 (四) 八方仁壽の境となる (五) 帝者の治化に喩ふ (六) 書經説命參照 (七) 漢代功臣を圖畫せし故事 (八) 曹植の文に見えたり (九) 即ち韋見素を指す (一〇) 政治に喩ふるなり、共に食物を烹る器 (一一) 漢宣帝の時の大臣 (一二) 范雎なり史記列傳に出づ (一三) 韋賢父子が經術相傳へしを言ふ (一四) くすの大木 (一五) 北斗は天の喉舌たり、尚書は君王の喉舌たり (一六) 書經康王之誥に見ゆ公時に丞相として理官を領せり (一七) 公平を守持す (一八) 帝の側に近き義 (一九) 餘りの德 (二〇) 魏の名臣にして天文に明かなりき (二一) 漢の人手紙の上手なり、是をも壓倒すとなり (二二) 儒者の義 禮記に儒に席上の珍あり云々とあり (二三) 隱れ沈む (二四) 司馬相如常に消渇

所レ貴知レ我寡。先生爾何事。四海望二陶冶一。兒童誦二君實一。走卒知二司馬一。持レ此欲二安歸一。造物不二我捨一。名聲逐二我輩一。此病天所レ赭。撫レ掌笑二先生一。年來效二瘖啞一。

や酒盃に映ず　(五)　風流文雅なるに近し　(六)　文彦博程珦等皆致仕して同甲會をなせるに光は若年を以て之に加へられたり　(七)　君の政治によつて天下の陶化せられんことを望む　(八)　司馬光の字　(九)　天罰の義、往昔の刑人は赤衣を着る故に言ふ　(一〇)　啞者の如く沈默するを怪しむ

鳳曆軒轅紀。龍飛四十春。八荒開二壽域一。一氣轉二洪鈞一。霖雨思二賢佐一。丹青憶二老臣一。應レ圖求二駿馬一。驚レ代得二麒麟一。

韋左相に上る二十韻　(一)

杜子美

(二)鳳曆軒轅の紀、(三)龍飛四十春。(四)八荒壽域を開き、(五)一氣洪鈞を轉ず。(六)霖雨に賢佐を思ひ、(七)丹青に老臣を憶ふ。(八)圖に應じて駿馬を求め、代を驚かして(九)麒麟を得たり。江河の濁れるを沙汰して、(一〇)鼎鼐の新しさを調和す。(一一)韋賢初め漢に相たり、(一二)范叔已に秦に歸す。盛業今此の如し、(一三)傳經固に絶倫なり。(一四)豫樟深く地より出で、滄海闊うして津無し。(一五)北斗喉舌を司り、(一六)東方搢紳を領す。(一七)衡を持して藻鑑を留め、

韻一。

青山在屋上。
流水在屋下。
中有五畝園。
花竹秀而野。
花香襲杖屨。
竹色侵盞斝。
樽酒樂餘春。
棊局消長夏。
洛陽古多士。
風俗猶爾雅。
先生臥不出。
冠蓋傾洛社。
雖云與衆樂。
中有獨樂者。
才全德不形。

司馬溫公の獨樂園　蘇子瞻

青山屋上に在り、流水屋下に在り。中に五畝(二)の園有り。花竹秀でて野なり(三)。花香(四)は杖屨を襲ひ、竹色は盞斝を侵す。樽酒餘春を樂み、棊局長夏を消す。洛陽は古より士多く、風俗(五)猶ほ雅に爾し。先生臥して出でず、冠蓋(六)洛社を傾く。衆と樂むと云ふと雖も、中に獨樂の者有り。才全うして德形はれず、貴ぶ所は我を知るものの寡きなり。先生獨り何事ぞ、四海陶冶(七)を望む。兒童も君實(八)を誦し、走卒も司馬を知る。此を持して安にか歸せんと欲する、造物我を捨てじ。名聲我輩を逐ふ、此の病は天の緒(九)うする所なり。掌を撫して先生を笑ふ、年來喑(一〇)啞に效ふことを。

(一) 司馬光閑居の時に造りし庭園の名　(二) 百歩を畝とす　(三) 俗氣なき貌　(四) 香は高く杖や屨に香り、竹は盃

鄴侯家多レ書。架插二三萬軸一。一一懸二牙籤一。新若二手未一レ觸。爲レ人強記覽。過レ眼不二再讀一。偉哉羣聖書。磊落載二其腹一。行年逾二五十一。出守數已六。京邑有二舊廬一。不レ容二久食宿一。臺閣多二官員一。無レ地寄二一足一。我雖二官在一レ朝。氣勢日局縮。屢爲二丞相一言。雖レ懇不レ見レ錄。送レ行過二滻水一。東望不レ轉レ目。今子從レ之遊。學問得レ所レ欲。入レ海觀二龍魚一。矯レ翮逐二黃鵠一。勉爲二新詩章一。月寄二三四

（一）鄴侯の家に書多し、架には三萬軸を插めり。一一に（二）牙籤を懸けて、新なること手未だ觸れざるが若し。人と爲り、（三）強記覽、眼を過して再讀せず。偉なるかな羣聖の書、磊落として其腹に載す。行年五十を逾えて、（四）出で守る數已に六なり。京邑に舊廬有れども、久しく食宿することを容さず。（五）臺閣には官員多けれども、一足を寄するに地無し。我官して朝に在りと雖も、（六）氣勢日に局縮して、屢〻丞相の爲に言ふに、懇なりと雖も、錄せられず。行を送つて（七）滻水を過ぎ、東望して目を轉ぜず。今（八）子之に從つて遊ばば、學問欲する所を得ん。（九）海に入つては龍魚を觀、翮を矯げては黃鵠を逐ひ、勉めて新詩の章を爲り、月に三四幅を寄せよ。

㊀ 李泌字は長源鄴侯に封ぜらる其子繁は隨州の刺史たり ㊁ 附箋の類なり ㊂ 記憶力强く一見して諳記す ㊃ 出でて刺史たること前後六回 ㊄ 臺閣官吏の列に交るを得ず ㊅ 政治腐敗の時なれば正氣漸く衰へ沮む ㊆ 京兆藍田谷より出でたる川の名 ㊇ 李繁を指す ㊈ 志を大にして龍の海に在り鵠の翼を擧ぐるが如くなるべしとの意

零落依二草木一。關中昔喪敗。兄弟遭二殺戮一。官高何足レ論。不レ得レ收二骨肉一。世情惡二衰歇一。萬事隨二轉燭一。夫婿輕薄兒。新人美如レ玉。合昏尙知レ時。鴛鴦不二獨宿一。但見二新人笑一。那聞二舊人哭一。在レ山泉水淸。出レ山泉水濁。侍婢賣レ珠廻。牽レ蘿補二茅屋一。摘レ花不レ插レ髮。采レ栢動盈レ掬。天寒翠袖薄。日暮倚二修竹一。

骨肉を收むるすら得ず。(四)世情は衰歇を惡み、萬事は轉燭に隨ふ。夫婿輕薄の兒、新人美なること玉の如し。(五)合昏も尙時を知り、鴛鴦は獨り宿せず。(六)但新人の笑を見るのみ、那ぞ舊人の哭するを聞かんや。(七)山に在れば泉水淸く、山を出ては泉水濁る。(八)侍婢珠を賣つて廻り、蘿を牽いて茅屋を補ふ。花を摘むも髮に插まず、(九)栢を采つて動もすれば掬に盈つ。天寒うして翠袖薄し、日暮れて修竹に倚る。

(一) 絕世の美人、深谷中の樓にあり (二) 草木によりて命をつなぐ (三) 親の官位は何の役にも立たず、兄弟を收養する事も出來ず (四) 世間は衰滅をきらひ、萬事興廢ある義 (五) 合歡の木を指す (六) 新に得たる女子、舊人は即ちこの佳人なり (七) 水に喩へて女子の貞操を破ると破らざるとを言ふ (八) 一人の召使が手細工の珠を與へて生命をつなぐ (九) 栢の實を拾つて糧とするなり

諸葛覺が隨州に往いて書を讀むを送る

韓退之

驚呼熱中腸。
焉知二十載。
重上君子堂。
昔別君未婚。
兒女忽成行。
怡然敬父執。
問我來何方。
問答未及已。
兒女羅酒漿。
夜雨剪春韮。
新炊間黃粱。
主稱會面難。
一擧累十觴。十觴亦不醉。感子故意長。明日隔山岳。世事兩茫茫。

を敬し、我に問ふらく、何の方より來ると。問答未だ已むに及ばざるに、兒女酒漿(六)を羅ねたり。夜雨に春韮を剪り、新炊に黃粱を間ふ。主は會面の難きを稱して、一擧に十觴(七)を累ぬ。十觴するも亦醉はず、子が故意(八)の長きに感ず。明日山岳を隔てば、世事兩つながら茫茫たらん。

㊀ 隱者衞某名は不明なり、八は排行なり　㊁ 東方と西方とに在る星の名　㊂ 最早髮の毛が蒼白となりし義　㊃ 君の家に參上せんとは思はざりき　㊄ 今日は妻子ありて男女の子供列を成す程なり　㊅ 酒肴を指す　㊆ 雨の夜なるに裏の畑の韮を摘み菜を加へし米飯を新しく炊く　㊇ 君が故舊に厚き情誼を感ず

絕代有佳人。
幽居在空谷。
自云良家子。

佳人

絕代佳人(一)有り、幽居して空谷に在り。自ら云ふ、良家の子と、零落して草木(二)に依る。關中に昔喪敗して、兄弟殺戮に遭ひぬ。官(三)の高きは何ぞ論ずるに足らん、

借問有レ酒不。牆頭過二濁醪一。展レ席俯二長流一。清風左右至。客意已驚レ秋。巣多衆鳥闘。葉密鳴蟬稠。苦レ遭二此物聒一。孰語吾廬幽。水花晩色静。庶足レ充二淹留一。預恐二罇中盡一。更起爲レ君謀。

遭ふを苦しむ、孰か語ふ、吾廬は幽なりと。水花晩色静なり、庶くは淹留(六)に充つるに足らん。預め罇中の盡きんことを恐れて、更に起つて君が爲に謀る。(七)

(一)太子家令の李炎 (二)土手の類 (三)陶侃貧なりし時隣人牆頭より酒と雞とを贈りし事あり (四)樊川なり (五)かまびすしきこと (六)滯在に同じ (七)酒を得る工夫をなさんとす

人生不二相見一。動如二參與一レ商。今夕復何夕。共二此燈燭光一。少壯能幾時。鬢髮各已蒼。訪レ舊半爲レ鬼。

衞八處士に贈る(一)

人生相見ざると、動もすれば參と商との如し。(二)今の夕は復た何の夕ぞ、此の燈燭の光を共にす。少壯能く幾時ぞ、鬢髮各〻已に蒼なり。(三)舊を訪へば半は鬼と爲る、驚呼して中腸熱し。焉んぞ知らん、二十載、(四)重ねて君子の堂に上らんとは。昔別れしとき君未だ婚せざりしが、(五)兒女忽ち行を成せり。怡然として父の執

池魚思故淵。
開荒南野際。
守拙歸園田。
方宅十餘畝。
草屋八九間。
楡柳蔭後簷。
桃李羅堂前。
曖曖遠人村。依依墟里煙。狗吠深巷中。鷄鳴桑樹顚。戶庭無塵雜。虛室有餘閑。久在樊籠裏。復得反自然。

の村、依依たり、墟里の煙。狗は吠ゆ、深巷の中、鷄は鳴く、桑樹の顚。戶庭塵の雜る無く、（六）虛室餘閑有り。久しく（七）樊籠の裏に在りしが、復た自然に反るを得たり。

㊟ ㈠ 俗人の氣風と一致する能はず ㈡ 官途に就きしを指す ㈢ 渡り鳥の類 ㈣ 拙なき性を守る ㈤ 明かならざる貌 ㈥ 來客少きなり ㈦ 鳥籠の中

遠林暑氣薄。
公子過我遊。
貧居類村塢。
僻近城南樓。
旁舍頗淳朴。
所願亦易求。
隔屋問西家。

㊂ 夏日李公訪はる（一）　　杜子美

遠林暑氣薄し、公子我を過ぎて遊ぶ。貧居村塢に類し、僻にして城南の樓に近し。旁舍は頗る淳朴、願ふ所亦求め易し。屋を隔てて西家に問ふらく、借問す、酒有りや不や。（三）牆頭より濁醪を過し、席を展べて長流に俯す。淸風左右より至り、客意已に秋に驚く。巢多くして衆鳥鬪ひ、葉密にして鳴蟬稠し。此の物の聒（五）に

禮樂暫得レ新。
洙泗輟二微響一。
漂流逮二狂秦一。
詩書亦何罪。
一朝成二灰塵一。
區區諸老翁。
爲レ事誠殷勤。
如何絕世下。
六籍無二一親一。
終日馳レ車走。不レ見レ所レ問レ津。若復不二快飲一。空負二頭上巾一。但恨レ多二謬誤一。君當レ恕二醉人一。

(六)區區たる諸老翁、事を爲すこと誠に殷勤なり。如何ぞ絕世の下、(七)六籍一も親むもの無し。終日車を馳せて走り、津を問ふ所を見ず。若し復快く飲まずんば、空しく(八)頭上の巾に負かん。(九)但謬誤多きを恨む、君當に醉人を恕すべし。

(一)伏羲神農 (二)孔子休息の間もなく努勉し之を補足して風俗を正す (三)論語に見ゆ (四)二水の名なり孔子の學統を指す (五)秦の焚書坑儒を指す (六)伏生以下漢初の老儒 (七)經學訓詁に專にして眞義を解する者なし (八)前に出でたる角巾の事 (九)飲酒の人に過失多きを言ふ

少無レ適レ俗韻。
性本愛二丘山一。
誤落二塵網中一。
一去三十年。
羈鳥戀二舊林一。

田園の居に歸る

少より俗に適するの韻無く、性本丘山を愛す。(二)誤つて塵網の中に落ち、一去三十年。(一)羈鳥舊林を戀ひ、池魚故淵を思ふ。荒を開く南野の際、(四)拙を守つて園田に歸る。(三)方宅十餘畝、草屋八九間。楡柳後簷を蔭ひ、桃李堂前に羅る。(五)曖曖たり、遠人

輾轉不レ可レ見。
枯桑知二天風一。
海水知二天寒一。
入レ門各自媚。
誰肯相爲言。
客從二遠方一來。
遺二我雙鯉魚一。
呼レ童烹二鯉魚一。
中有二尺素書一。
長跪讀二素書一。
書中竟何加。
上有レ加二餐食一。
下有二長相憶一。

魚を遺れり。童を呼んで鯉魚を烹るに、中に尺素(六)の書有り。長跪して素書を讀む、書中竟に何如。上には餐食(七)を加へよと有り、下には長く相憶へ有りと。

(一)思絶えざること　(二)前夜　(三)安眠を得ずして寝がへりするなり　(四)枝は無くとも風ふくを知る　(五)手紙の義、手紙を結んで鯉の形となす故に言ふとぞ、下句烹るといふもの、譬況の言ならん　(六)古へ紙なし絹ねり絹に書せり故に手紙を尺素と言ふ　(七)食物に注意して病氣などすなとの義、食一に飯に作る

飲酒

羲農去レ我久。
擧レ世少レ復レ眞。
汲汲魯中叟。
彌縫使二其淳一。
鳳鳥雖レ不レ至。

羲農は我を去ること久しく、世を擧げて眞に復るもの少し。汲汲(一)たり魯中の叟。彌縫(二)して其を淳ならしむ。鳳鳥(三)至らずと雖も、禮樂暫く新なるを得たり。洙泗(四)微響を輟め、漂流狂秦に逮ぶ。詩書亦何の罪ぞや、一朝(五)にして灰塵と成りぬ。

鷄黍事二筵席一。
各言官長峻。
文字多二督責一。
東鄕後二租期一。
車轂陷二泥濘一。
公門少ㇾ推恕。
鞭朴恣二狼籍一。
努力愼二經營一。
肌膚眞可ㇾ惜。迎ㇾ新在二此歳一。惟恐踵二前跡一。

營を愼しめ、肌膚は眞に惜むべし。新を迎ふること此の歳に在り、惟恐る(七)前跡を踵がんことを。

(一) 鄕の外に見ゆる炊煙燈光 (二) 葉落ちたる麻の寂しき有樣 (三) 村役人 (四) 文書 (五) 東村租期に後れしため車輪が泥中に陷りしごとく慘酷の目に遭ひたり、然るに官吏は少しも思ひやりの心なく之を鞭ちたりとの意 (六) 準備計劃 (七) 東村の眞似に陷ることなかれ

青青河畔草。
緜緜思二遠道一。
遠道不ㇾ可ㇾ思。
夙昔夢見ㇾ之。
夢見在二我傍一。
忽覺在二他鄕一。
他鄕各異ㇾ縣。

樂府上　　無名氏

青青たり河畔の草、緜緜(一)として遠道を思ふ。遠道は思ふべからず、夙昔(二)夢に之を見たり。夢に見しとき我が傍に在りしが、忽ち覺めて他鄕に在り。他鄕は各々縣を異にし、輾轉(三)して見るべからず。枯桑に天風を知り、海水に天寒を知る。門に入つて各々自ら媚ぶ、誰か肯て相爲に(四)言はん。客あり遠方より來り、我に雙鯉(五)

未盡反哺心。
百鳥豈無母。
爾獨哀怨深。
應是母慈重。
使爾悲不任。
昔有吳起者。
母歿喪不臨。
哀哉若此輩。其心不如禽。慈烏復慈烏。鳥中之曾參。

臨まざりき。哀しい哉此の若きの輩、其心禽にだも如かざるなり。慈烏復た慈烏、鳥中の曾參なるか。

(一) 烏の一種純黒にして大嘴なりとぞ　(二) 爽烏に餌をすゝめて幼時の恩に報ずる孝行なり　(三) 史記列傳に見ゆ一本者を去に作る　(四) 母歿せしも吳起は志未だ成らざるを以てして遂に歸喪せざりき　(五) 孔門の曾參、孝を以て名ありき

田家

籬落隔煙火。
農談四鄰夕。
庭際秋蛩鳴。
疎麻方寂歷。
蠶絲盡輸稅。
機杼空倚壁。
里胥夜經過。

籬落煙火を隔つ、農談四鄰夕なり。庭際に秋蛩鳴き、疎麻方に寂歷たり。蠶絲盡く稅を輸し、機杼空しく壁に倚る。里胥夜經過し、雞黍筵席を事とす。各〻言ふらく官長峻しく、文字に督責多しと。東鄉租期に後れて、車轂泥澤に陷るがごとし。公門は恕を推すこと少し、鞭朴して狼籍を恣にす。努力して經

自性得二久要一。
爲レ人制二頽齡一。
小草有二遠志一。
相依在二平生一。
醫和不レ並レ世。
深レ根且固レ蔕。
人言可レ醫レ國。
何用大早計。小大材則殊。氣味固粗似。

和世に並ばず、根を深うして且つ蔕を固うす。人は言ふ國を醫すべしと、何ぞ用ひん大早計。(五)小大材は則ち殊なるも、氣味は固に相似たり。

(一)淮南子に千年の松は下に茯苓あり上に兎絲ありと見ゆ (二)茯苓は自然の性よく久しきに堪へて人の老いんとするを引き留む (三)世說排調篇に見ゆ參照すべしこゝには小草ながら遠大の志ある義に用ひたり (四)國語晉語に出でたる古名醫の名 (五)松と苓とにて、自己と東坡とに比するなり

慈烏夜啼

白樂天

慈烏失二其母一。
啞啞吐二哀音一。
晝夜不二飛去一。
經レ年守二故林一。
夜夜夜半啼。
聞者爲沾レ襟。
聲中如二告訴一。

慈烏其母を失ひ、啞啞として哀音を吐く。晝夜飛び去らず、年を經て故林を守る。夜夜夜半に啼く、聞く者爲に襟を沾す。聲中告訴するが如し、未だ(二)反哺の心を盡さず。百鳥豈母無らんや。爾獨り哀怨深し。應に是れ母の慈重くして、爾をして悲み任へざらしむるなるべし。昔は(三)吳起といふ者有り、(四)母歿するに喪に

桃李終不言。朝露借恩光。孤芳忌皎潔。冰雪空自香。古來和鼎實。此物升廟廊。歲月坐成晩。煙雨青已黃。得升桃李盤。以遠初見嘗。終然不可口。擲置官道傍。但使本根在。棄捐果何傷。

芳皎潔を忌み、氷雪空しく自ら香し。古來(二)鼎實を和して、此物廟廊に升りぬ。歲月坐に晩を成し、煙雨青已に黃なり。(三)桃李の盤に升ることを得て、(四)遠を以て初めて嘗めらる。終然として口にすべからず。官道の傍に擲置せらる。但本根をして在らしめば、棄捐すとも果して何ぞ傷まん。

(一) 江蘺即ち東坡を他人皆疾忌して顧らず、獨り人主に知らるゝのみ　(二) 鼎中の鹽の味つけに必要なり　(三) 成熟して桃李と共に盤中に盛らる　(四) 遠方の產たる故

青松出澗壑。十里聞風聲。上有百尺絲。下有千歲苓。

又

青松澗壑より出で、十里風聲を聞く。(一)上に百尺の絲有り、下に千歲の苓有り。(二)自性久要を得て、人の傷に頹齡を制す。(三)小草遠志有り、相依ること平生に在り。(四)醫

浮雲終日行。
遊子久不レ至。
三夜頻夢レ君。
情親見二君意一。
告レ歸常局促。
苦道來不レ易。
江湖多二風波一。
舟楫恐失墜。
出レ門搔二白首一。
若レ負二平生志一。
冠蓋滿二京華一。
斯人獨顦顇。
孰云網恢恢。將レ老身反累。千秋萬歲名。寂寞身後事。

浮雲終日行いて、遊子は久しく至らず。三夜頻に君を夢み、情親しうして君が意を見る。歸を告げて常に局促す、(一)苦に道ふ來ること易からず、江湖風波多し、舟楫恐くは失墜せんことをと。門を出でて白首を搔く、平生の志に負くが若し。(二)冠蓋京華に滿つるに、斯の人獨り顦顇す。孰か云ふ(三)網恢恢たりと。將に老いんとして身反つて累ふ。(四)千秋萬歲の名、寂寞たり身後の事。

(一)蹙迫の貌 (二)群臣皆時を得獨り京師に跋扈するに君一人は痩せ衰へたり (三)老子に天網恢々疎にして漏らさず云々と (四)詩の盛名は千萬年に傳はるもこれ寂寞たる身後の事、眼前の有様は眞に傷むべし

江梅有二佳實一。
託二根桃李場一。

東坡に贈る

黃山谷

江梅に佳實有り、根を桃李の場に託す。(一)桃李終に言はず、朝露恩光を借す。孤

夢李白二首　杜子美

死別已吞聲。生別常惻惻。江南瘴癘地。逐客無消息。故人入我夢。明我長相憶。恐非平生魂。路遠不可測。魂來楓林青。魂返關塞黑。今君在羅網。何以有羽翼。落月滿屋梁。猶疑見顏色。水深波浪闊。無使蛟龍得。

死別は已に聲を呑み、生別は常に惻惻たり。(一)江南瘴癘の地、逐客消息無し。故人我夢に入り、我が長に相憶ふを明にす。恐くは平生の魂に非ざらん、路遠くして測るべからず。(二)魂來るとき楓林靑く、魂返るとき關塞黑しと。(三)今は君羅網に在り、何を以てか羽翼有らん。落月屋梁に滿つ、猶は疑ふらく顏色を見るかと。水深うして波浪闊し、(四)蛟龍をして得しむる無れ。

(一) 李白永王璘に坐して江南夜郎に流さる (二) 夢中李白が杜甫にいふ語、我魂來るとき我居る楚地の楓林靑く、我魂去らんとする時君が居る秦地の關塞暗しと也 (三) 杜甫夢中に答ふる語、顏は夢中の容 (四) 蛟龍其患を逞しうし君を溺死せしめざらんことを祈る

又

上弦驚二別鶴一。下弦操二孤鸞一。願留就レ君住。從レ今至二歳寒一。

孟夏草木長。繞レ屋樹扶疎。衆鳥欣レ有レ托。吾亦愛二吾廬一。既耕亦已種。時還讀二我書一。窮巷隔二深轍一。頗回二故人車一。欣然酌二春酒一。摘二我園中蔬一。微雨從レ東來。好風與レ之倶。汎覽二周王傳一。流二觀山海圖一。俛仰終二宇宙一。不レ樂復何如。

山海經を讀む

孟夏草木長じ、屋を繞つて樹扶疎(一)たり。衆鳥托する有るを欣び、吾も亦吾廬を愛す。既に耕して亦已に種ゑ、時に還つて我書を讀む。窮巷深轍(二)を隔つるも、頗る故人の車を回らす。欣然として春酒を酌み、我が園中の蔬を摘む。微雨は東より來り、好風之と倶なふ。汎く(三)周王の傳を覽て、(四)山海の圖を流觀す。(五)俛仰して宇宙を終ふ、樂まずんば復た何如せん。

(一) 枝葉の四方に廣がること (二) 車轍深き大路とは遠く距りたれど、時には友人の來訪する者もあり (三) 穆天子傳なり (四) 先秦の世界地誌なり挿繪あり (五) 俛仰の間に宇宙間の事を知り得たり

相去日已遠。衣帶日已緩。浮雲蔽二白日一。遊子不二顧返一。思レ君令二人老一。歲月忽已晚。棄捐勿二復道一。努力加二餐飯一。

㊀文選に出づ夫の遠行を送る妻の情なり　㊁北風に向つて嘶くは故郷を忘れ得ざるなり　㊂別後憔悴して衣帶舒びゆるむ　㊃君の爲に棄てらるゝ恨は姑く之を顧みず專ら君の健康ならんことを祈るとの義

古に擬す

陶淵明

東方有二一士一。被服常不レ完。三旬九遇レ食。十年著二一冠一。辛苦無二此比一。常有二好容顏一。我欲レ觀二其人一。晨去越二河關一。靑松夾レ路生。白雲宿二簷端一。知二我故來意一。取レ琴爲レ我彈。

東方に一士有り、被服常に完からず。三旬㊀に九たび食に遇ひ、十年に一冠を著く。辛苦此の比無きに、常に好容顏有り。我其人を觀んと欲し、晨に去つて河㊁關を越ゆ。靑松路を夾んで生じ、白雲簷端に宿す。我が故に來れる意を知り、琴を取つて我が爲に彈ず。上弦は別鶴を驚かし、下弦は孤鸞㊂を操る。願くは留つて君に就いて住し㊃、今より歲寒に至らん。

㊀三十日にたゞ九回の食を得る　㊁山河關塞の義　㊂孤鸞と共に琴曲の名なり　㊃松柏の歲寒に凋れざるが如く永久に變らざる交際を結ばん

蒼苔依レ砌上。
玆言翔ニ鳳池一。
鳴珮多ニ淸響一。
信美非ニ吾室一。
中園思ニ偃仰一。
朋情以鬱陶。
春物方駘蕩。安得ニ凌レ風翰一。聊恣ニ山泉賞一。

に駘蕩、安ぞ風を凌ぐの翰を得て、聊か山泉の賞を恣にせん。

（一）天子の御所　（二）赤く彩色したる敷石　（三）萬年樹は樟なりとする說と冬青なりとする說とあり　（四）漢武帝の作れる銅製の承露盤は上に仙人掌あり　（五）綾綺連錢の窓　（六）皆宮殿の飾なり　（七）巧藝　（八）中書省に在官する義　（九）俯仰に同じ　（一〇）玆には朋友も居らずして心憂愁するなり

古詩　　無名氏

行行重行行。
與レ君生別離。
相去萬餘里。
各在ニ天一涯一。
道路阻且長。
會面安可レ期。
胡馬依ニ北風一。
越鳥巣ニ南枝一。

行き行いて重ねて行き行く、君と生きながら別離す。相去ること萬餘里、各〻天の一涯に在り。道路阻つて且長し、會面安ぞ期すべけん。胡馬は北風に依り、越鳥は南枝に巣くふ。相去ること日に已に遠く、衣帶日に已に緩し。（一）浮雲白日を蔽ひ、遊子復た返らず。（二）君を思へば人をして老いしむ。（三）歲月忽に已に晚る。（四）棄捐は復た道ふ勿けん。努力して餐飯を加へよ。

風高楡柳疎。霜重梨棗熟。行人迷ニ去住ー。野鳥競ニ棲宿ー。田翁笑相念。昏黒慎ニ原陸ー。今年幸少豐。無レ惡ニ饘與ヒ粥。

慎しめ。(五)今年幸に少しく豐なり、饘と粥とを惡ふこと無しと。

(一)田舎道には實ある雑草など多し　(二)たゝへたる水、用水　(三)日暮方の光景をうつせるなり　(四)野原の道あぶなき故我庵にお泊りなさい　(六)今年少しく豐作なりしによりお粥位は御馳走すべしとの意

五言長篇

中書省に直す　謝霊運

紫殿肅陰陰。彤庭赫弘敞。風動ニ萬年枝ー。日華ニ承露掌ー。玲瓏結ニ綺錢ー。深沈映ニ朱網ー。紅藥當レ堦翻。

(一)紫殿肅として陰陰たり、(二)彤庭赫として弘敞たり。風は(三)萬年の枝を動かし、日は(四)承露の掌を華す。玲瓏として(五)綺錢を結び、深沈として(六)朱網に映ず。(七)紅藥は堦に當つて翻り、蒼苔は砌に依つて上る。玆に言れ(八)鳳池に翔り、鳴珮に清響多し。信に美なれども吾宅に非ず。中園にして(九)偃仰を思ふ。(一〇)朋情以だ鬱陶、春物方

白髮被二兩鬢一。肌膚不二復實一。雖レ有二五男兒一。總不レ好二紙筆一。阿舒已二八。懶惰故無レ匹。阿宣行志學。而不レ愛二文術一。雍端年十三。不レ識二六與一レ七。通子垂二九齡一。但覓二梨與一レ栗。天運苟如レ此。且進二盃中物一。

白髮兩鬢に被り、(一)肌膚復た實たず。五男兒有りと雖も、總て紙筆を好まず。(二)阿舒は已に二八、懶惰故ら匹なし。阿宣は行ゝ(三)志學ならんとするも、而も文術を愛せず。雍と端とは年十三、(四)六と七とを識らず、通子は九齡に垂んとして、但梨と栗とを覓む。天運苟も此の如し。(五)且く盃中の物を進めん。

(一) 年老いて瘦せ衰へ皮弛めるなり (二) 淵明に子五人あり長を舒、次を宣、三を雍、四を端、五を通と曰ふ (三) 將に十五ならんとするに文學儒術を愛せず (四) 六に七を足す事すらわからず (五) 酒を飲んで此憂を忘れん

田家

柳子厚

古道饒二蒺藜一。縈二廻古城曲一。蓼花被二隄岸一。陂水寒更綠。是時收穫竟。落日多二樵牧一。

(一)古道に蒺藜饒く、縈り廻る古城の曲。蓼花隄岸に被ひ、陂水寒うして更に綠なり。是の時收穫竟り、落日樵牧多し。風高うして楡柳踈に、(二)霜重うして梨棗熟す。(三)行人去徑に迷ひ、野鳥競うて棲宿す。田翁笑つて相念ふ、昏黑のとき(四)原陸を

陶淵明が古に擬するに和す　蘇子瞻

有レ客叩二我門一。繋二馬門前柳一。
庭空鳥雀噪。門閉客立久。
主人枕レ書臥。夢我平生友。
忽聞二剝啄聲一。驚散一盃酒。
倒レ裳起謝レ客。夢覺兩愧レ負。
坐談雜二今古一。不レ答顏愈厚。
問レ我何處來。我來二無何有一。

客有り我門を叩き、馬を門前の柳に繋ぐ。庭空しうして鳥雀噪ぎ、門閉ぢて客立つこと久し。主人書を枕にして臥し、我平生の友を夢む。忽ち剝啄の聲を聞き、(一)驚散す一盃の酒。裳を倒にして(二)起つて客に謝し、夢覺めて(三)兩ながら負くことを愧づ。坐談今古を雜ぶ、答へずして顏愈ゝ厚し。我に問ふ何の處よりか來ると、我は無何有より(四)來れり。

(一) 門を叩く聲に驚いて傍なる酒をこぼす　(二) 詩經齊風に出でたる句を假りて慌てたる有樣を寫す　(三) 夢さめて訪客と相見、主客共に久しく無沙汰して平生交歡の心に負くを愧づ　(四) 莊子に出づ假設的の地名

子を責む　陶淵明

三盃通二大道一。一斗合二自然一。但得二醉中趣一。勿下謂二醒者一傳上。

種レ苗在二東皐一。
苗生滿二阡陌一。
雖レ有二荷レ鋤倦一。
濁酒聊自適。
日暮巾二柴車一。
路暗光已夕。
歸人望二煙火一。
稚子候二簷隙一。
問レ君亦何爲。
百年會有レ役。
但願桑麻成。
蠶月得二紡績一。
素心正如此。
開レ逕望二三益一。

歸田園（一）　陶淵明

苗を種ゑて（二）東皐に在り、苗生じて（三）阡陌に滿つ。鋤を荷うて倦むこと有りと雖も、濁酒聊か自ら適す。日暮（四）柴車に巾す、路暗うして光已に夕なり。（五）歸人煙火を望み、稚子簷隙に候つ。君に問ふ亦何の爲ぞ、百年會ゝ役すること有り。但願ふ桑麻成つて、（六）蠶月に紡績を得んことを。（七）素心正に此の如し。（八）逕を開いて三益を望む。

（一）此の詩は陶淵明の眞作に非ず、江淹が淵明に擬して作る所といふ、而して江淹の集にありては、雜體詩三十首の内に在り、題を田居といへり（二）東方の田園（三）南北を阡とし東西を陌とす田間の路なり（四）粗末な車に巾を乘る（五）我家の炊煙燈火を望みつゝ急ぎ歸り行けば、兒等は軒先にてこれを待つとなり（六）蠶上簇の時に絲を紡績するを得んことを望む（七）本來の願望（八）三個の小路を造つて三益友を迎へんと欲す

朱華冒綠池。滑魚躍清波。好鳥鳴高枝。神飇接丹轂。輕輦隨風移。飄颻放志意。千秋長若斯。

(一) 魏の文帝曹丕　(二) 馬車の天蓋なり隨する車の義　(三) 群星繁しからず　(四) 涼風に吹かれながら赤塗の車を移す

獨酌　　李太白

天若不愛酒。酒星不在天。地若不愛酒。地應無酒泉。天地既愛酒。愛酒不愧天。已聞清比聖。復道濁如賢。賢聖既已飲。何必求神仙。

天若し酒を愛せずば、酒星(一)天に在らじ。地若し酒を愛せずば、地應に酒泉(二)無るべし。天地既に酒を愛す、酒を愛して天に愧ぢず。已に聞く(三)清は聖に比すと。復た道ふ濁は賢の如しと。賢聖も既に已に飲む、何ぞ必ずしも神仙を求めん。三盃大道に通じ、一斗(四)自然に合ふ。但醉中の趣を得たり、醒者に謂つて傳ふること勿れ。

(一) 晉志に軒轅の右角南に三星あり酒旗と曰ふ云々　(二) 漢の武帝の時河西に酒泉郡を置く　(三) 魏の太祖頃より清酒を聖とし濁酒を賢と稱す　(四) 宇宙と冥合する義

士女競ニ光陰一。凝妝耀ニ洲渚一。繁吹蕩ニ人心一。間關林中鳥。知レ時爲ニ和音一。豈無ニ一樽酒一。自酌還自吟。但悲時易レ失。四序迭相侵。我歌ニ君子行一。視レ古猶レ視レ今。

て和音を爲す。豈一樽の酒無らんや。自ら酌んで還自ら吟ず。但悲しむ時の失ひ易きを、(四)四序迭に相侵す。(五)我は君子の行を歌うて、古を視ること猶ほ今を視るがごとくす。

(一)一種のわびしき心地を除きかぬるなり　(二)粧を凝せる姿　(三)箏笛の繁き音樂　(四)四季に同じ　(五)文選に見えたる君子行の歌

公讌　曹子建

公子愛ニ敬客一。終レ宴不レ知レ疲。清夜遊ニ西園一。飛蓋相追隨。明月澄ニ清影一。列宿正參差。秋蘭被ニ長坂一。

公子客を愛敬し、宴を終ふるまで疲を知らず。清夜西園に遊ぶに、(一)飛蓋相追隨す。明月清影を澄し、(二)列宿正に參差たり。秋蘭は長坂に被り、朱華は綠池を冒へり。潛魚は淸波に躍り、好鳥は高枝に鳴く。(四)神飇丹轂に接し、輕輦風に隨つて移る。飄颻として志意を放にし、千秋長に斯の若し。

死者如有レ知。殺レ身以相從。向來歌舞地。夜雨鳴二寒蛩一。

青青水中蒲。
下有二一雙魚一。
君今上レ隴去。
我在與レ誰居。
青青水中蒲。
長在二水中一居。
寄レ語浮萍草。
相隨我不レ如。
青青水中蒲。
葉短不レ出レ水。
婦人不レ下レ堂。
行子在二萬里一。

青青たり水中の蒲　韓退之

青青たり水中の蒲、下に一雙の魚有り、君今(一)隴に上つて去らば、我在りとも誰と與にか居らん。青青たり、水中の蒲、長く水中に在つて居る。語を寄す浮萍の草、相隨ふこと(二)我は如かずと。青青たり水中の蒲、葉短うして水を出でず。(三)婦人堂を下らず、行子萬里に在り。

(一)陝西の隴山　(二)我は早く夫に別れてその浮草にも及ばず　(三)我は家を出でざるも主人は萬里の遠きにあり

幽懷不レ可レ寫。
行二此春江潯一。
適與二佳節一會。

幽懷

幽懷は寫す可からず、此の春江の潯を行く。適〻佳節と會し、士女光陰を競ふ。(一)凝妝は洲渚を耀かし、(二)繁吹は人心を蕩す。間關たる林中の鳥、時を知つ

古來妾薄命。事レ主不レ盡レ年。起舞爲レ主壽。相送南陽阡。忍下著二主衣裳一。爲レ人作中春妍上。有レ聲當レ徹レ天。有レ淚當レ徹レ泉。死者恐レ無レ知。妾身長自憐。

起舞して主の爲に壽し、相送る(三)南陽の阡。(四)主の衣裳を著て、人の爲に春妍を作すに忍びんや。聲有らば當に天に徹すべく、涙有らば當に泉に徹すべし。死者の知る無きを恐る。妾が身長に自ら憐む。

(一)我主は富貴にして青樓十二を有し鍾愛の美姫多かりしが我は三千の寵愛を一身に鍾め得たり　(二)幾干もなく主を喪ふ　(三)主人埋葬の地なり漢書游俠傳に故事あり　(四)主人より貰ひし衣服にて他人の爲に粧を成すに忍びず

又

葉落風不レ起。山空花自紅。捐レ世不レ待レ老。惠レ妾無二其終一。一死尚可レ忍。百歲何當レ窮。天地豈不レ寬。妾身自不レ容。

(一)葉落ちて風起らず、山空しうして花自ら紅なり。(二)世を捐つるに老を待たず、妾に惠むこと其の終無し。一死尚ほ忍ぶ可し。百歲何ぞ當に窮むべけんや。天地豈寬ならざらんや。妾が身自ら容れず。死者如し知ること有らば、身を殺すとも以て相從はん。(三)向來歌舞の地、夜雨寒蛩を鳴かしむ。

(一)良材皆亡して空山たゞ野花の紅なるを見るとの意　(二)主人世を謝するを早し　(三)さきに主人と歌舞せしところも今は秋雨の夜蛩の聲寂しきあるのみ

桑麻日巳長。我土日巳廣。常恐霜霰至。零落同二草莽一。

太倉失二陳紅一。狡穴得二餘腐一。既興二丞相歎一。又發二廷尉怒一。磔レ肉餧二餓猫一。分レ髯雜二霜兎一。挿レ架刀槊健。落レ紙龍蛇驚。物理未レ易レ詰。時來卽レ所レ遇。穿レ墉何卑微。託レ此得二佳譽一。

主家十二樓。一身當二三千一。

鼠鬚筆　　蘇叔黨

（一）太倉陳紅を失ひ、狡穴餘腐を得たり。既に（二）丞相の歎を興し、又（三）廷尉の怒を發す。肉を磔にして餓猫に餧し、髯を分つて（四）霜兎に雜ふ。架に挿めば刀槊健に、紙に落せば龍蛇驚る。物理未だ詰り易からず、時來つて遇ふ所に卽く。（五）墉を穿つは何ぞ卑微なる。此に託して佳譽を得たり。

（一）太倉の古米古くして赤味を帶びたるなり　（二）秦の李斯倉中の鼠を見て發憤したり　（三）漢の張湯見たる時肉を盗みし鼠を裁判して磔す　（四）兎の毛に雜へて筆とす　（五）鼠が墉を破るは卑劣なれど之を筆とすれば美名を得となり

妾薄命二首　　陳無己

（一）主家の十二樓、一身三千に當る。古來妾が薄命なる、主に事ふるに（二）年を盡さず。

分散逐レ風轉。
此已非二常身一。
落レ地爲二兄弟一。
何必骨肉親。
得レ歡當レ作レ樂。
斗酒聚二比鄰一。
盛年不二重來一。
一日難二再晨一。及レ時當二勉勵一。歲月不レ待レ人。

身に非ず。地に落ちて兄弟と爲る。何ぞ必ずしも骨肉の親ならん。歡を得て當に樂を作すべし、斗酒比鄰を聚む。盛年は重ねて來らず、一日は再び晨なり難し。時に及んで當に勉勵すべし、歲月は人を待たず。

(一) 根本なり　(二) 四海の内皆兄弟の義　(三) 遊ぶべき時は隣近所を集めて大いに飲み歡はすべし

野外罕二人事一。
深巷寡二輪鞅一。
白日掩二柴扉一。
虛室絕二塵想一。
時復墟曲中。
披レ草共來往。
相見無二雜言一。
但道桑麻長。

田園の居に歸る

野外人事罕なり。深巷輪鞅寡し。白日柴扉を掩ひ、虛室塵想を絕つ。時に復た墟曲の中、草を披いて共に來往す。相見て雜言無く、但道ふ桑麻長ずと。桑麻日に已に長ずれば、我土は日に已に廣し。常に恐る霜霰至つて、零落して草莽に同じからんことを。

(一) 車輪と馬鞅と　(二) 閑室　(三) 野良　(四) 雜草繁茂たる處

蘇武在匈奴。十年持漢節。白鴈上林飛。空傳一書札。牧羊邊地苦。落日歸心絶。渴飲月窟水。飢餐天上雪。東還沙塞遠。北愴河梁別。泣把李陵衣。相看涙成血。

蘇武

(一)蘇武匈奴に在りて、十年漢節を持す。(二)白鴈上林に飛び、空しく一書札を傳ふ。羊を牧して邊地に苦しみ、落日歸心絶ゆ。渴しては月窟の水を飲み、飢ゑは天上の雪を餐ふ。東還すれば(三)沙塞遠く、北のかた(四)河梁の別を愴む。泣いて李陵の衣を把り、相看て涙血を成す。

(一)前漢の人壯年の時國使として匈奴に赴き留る十九年にして漢に歸りぬ　(二)天子上林苑に獵して蘇武が放ちし雁を得たりとあるによる　(三)沙漠邊境の城塞　(四)友人李陵と別を惜みし處なり

人生無根蔕。飄如陌上塵。

雜詩　陶淵明

人生(一)根蔕なし、飄として陌上の塵の如し。分散風を逐うて轉ず、此れ已に常の

暫伴レ月將レ影。行樂須レ及レ春。
我歌月徘徊。我舞影凌亂。
醒時同ニ交歡一。醉後各分散。永結ニ無情遊一。相期邈ニ雲漢一。

して雲漢に邈なり。

(一)月と我と影と (二)亂れかげろふ (三)俗世間を離れたる交際 (四)他日銀河の邊にて相會せんことを期す

春日醉起言レ志

處レ世若ニ大夢一。胡爲勞ニ其生一。
所以終日醉。頽然臥ニ前楹一。
覺來眄ニ庭前一。一鳥花間鳴。
借問如何時。春風語ニ流鶯一。
感レ之欲ニ歎息一。對レ酒還自傾。
浩歌待ニ明月一。曲盡已忘レ情。

春日醉起志を言ふ

世に處するは大夢の若し。(一)胡爲れぞ其生を勞する。所以に終日醉ひ、頽然として前楹に臥す。(二)覺め來つて庭前を眄れば、一鳥花間に鳴く。借問す如何の時ぞ。春風流鶯に語る。(三)之に感じて歎息せんと欲し、酒に對して還つて自ら傾く。(四)浩歌して明月を待ち、曲盡きて已に情を忘る。

(一)莊子に見ゆ、長き夢の義 (二)柱の前 (三)光陰の過ぎ易きに感傷す (四)大いに歌ふ

可レ使二食無一レ肉。
不レ可二居無一レ竹。
無レ肉令二人痩一。
無レ竹令二人俗一。
人痩尚可レ肥。
俗士不レ可レ醫。
傍人笑二此言一。
似レ高還似レ癡。
若對二此君一仍
大嚼。世間那
有二揚州鶴一。

食をして肉無らしむ可し、居に竹無くばある可からず。肉無ければ人をして痩せしめ、竹無ければ、人をして俗ならしむ。人の痩せたるは尚ほ肥やす可し。俗士は醫す可からず。傍人此の言を笑ふ、(二)高きに似て還つて癡に似たりと。若し此君(三)に對して仍ほ大いに嚼まば、世間那ぞ揚州の鶴有らん。

㈠ 僧道潜の住家なり家の四周に竹を植ゑてこの名を附したるなり ㈡ 高尚なるに似て實は馬鹿々々し ㈢ 竹の異名なり竹に對して大酒せんには腰に十萬貫を纏ひ鶴に騎して揚州に下らんといへる慾張りたる話を學ぶの要もなし

花下一壺酒。
獨酌無二相親一。
擧レ盃邀二明月一。
對レ影成二三人一。
月既不レ解レ飲。
影徒隨二我身一。

月下の獨酌　　李太白

花下一壺の酒、獨り酌んで相親むもの無し。盃を擧げて明月を邀へ、(一)影に對して三人と成る。月既に飲を解せず、影は徒に我身に隨ふのみ。暫く月に伴つて影を將る、行樂須らく春に及ぶべし。我歌へば月徘徊し、我舞へば(二)影凌亂す。醒むる時交歡を同じうし、醉うて後各〻分散す。(三)永く無情の遊を結ぶ、(四)相期

終日不レ成レ章。
涕泣零如レ雨。
河漢清且淺。
相去復幾許。
盈盈一水間。
默默不レ得レ語。

た幾許ぞ。盈盈として一水間り、(三)默默として語るを得ず。

(一)涕に泣き貌 (二)纖女がしなやかなる手を擧げて機を織るなり (三)だまつてをること

古詩

生平不レ滿レ百。
常懷二千歲憂一。
晝短苦二夜長一。
何不三秉レ燭遊一。
爲レ樂當レ及レ時。
何能待二來茲一。
愚者愛二惜費一。
但爲二後世嗤一。
仙人王子喬。
難レ可二以等一レ期。

(一)生平百に滿たず、常に千歲の憂を懷く、晝短くして夜の長きに苦しむ。何ぞ燭を秉つて遊ばざる。樂を爲す當に時に及ぶべし。何ぞ能く(二)來茲を待たん。愚者は費を愛惜して、但後世の嗤と爲る。(三)仙人王子喬、以て期を等しうすべきに難し。

(一)文選に生年に作る (二)來年に同じ (三)列仙傳には周の靈王の太子晉なりと言へり、意は王子喬の如く仙人となる事は得べからずとなり

(一)綠筠軒　　蘇子瞻

棄捐篋笥中。
恩情中道絕。

紈扇如圓月。
出自機中素。
畫作秦王女。
乘鸞向煙霧。
采色世所重。
雖新不代故。
竊愁涼風至。
吹我玉階樹。
君子恩未畢。
零落在中路。

迢迢牽牛星。
皎皎河漢女。
纖纖擢素手。
札札弄機杼。

(一)篋笥の細箱　(二)涼風に同じ　(三)手箱の中に棄てられて舊來の恩情中絕せんことを恐るとなり

雜詩(一)　江淹

紈扇圓月の如く、(二)機中の素より出づ。畫くに(三)秦王の女が、鸞に乘じて煙霧に向ふことを作す。采色世の重んずる所、新なりと雖も、故には代へず。竊に愁ふ涼風の至つて、我玉階の樹を吹き、君子の恩未だ畢らざるに、零落して中路に在らんことを。

(一)坊本に班婕妤の作と爲すは非、今改む　(二)鸞にかゝれる白糸　(三)秦穆公の女弄玉は蕭史の妻となり共に鳳凰に乘じて飛び去りし人

古詩　無名氏

迢迢たり牽牛星、皎皎たり河漢の女。纖纖として素手を擢き、札札として機杼を弄す。終日章を成さず、涕泣零ちて雨の如し。河漢清且つ淺なり、相去ること復

戚戚苦レ無レ悰。
攜レ手共行樂。
尋レ雲陟二累樹一。
隨レ山望二菌閣一。
遠樹曖芊芊。
生煙紛漠漠。
魚戲新荷動。
鳥散餘花落。
不レ對二芳春酒一。
還望二青山郭一。

(一)戚戚として悰(たのしみ)無きを苦しみ、手を攜へて共に行樂す。雲を尋ねて累樹に陟り、(三)山に隨つて菌閣を望む。(四)遠樹は曖として芊芊たり、(五)生煙は紛として漠漠たり。魚戲れて新荷動き、鳥散じて餘花落つ。芳春の酒に對せずんば、還つて青山の郭を望まん。(六)

(一)憂愁の貌 (二)樂しみ (三)重りたる巖樹なり (四)香草なり、立派なる閣の義 (五)煙りて茂美なり (六)悵恨として青山を空望するが如しとなり

怨歌行　　班婕妤

新裂二齊紈素一。
皎潔如二霜雪一。
裁爲二合歡扇一。
團圓似二明月一。
出二入君懷袖一。
動搖微風發。
常恐秋節至。
涼飆奪二炎熱一。

新に齊の紈素を裂くに、皎潔にして霜雪の如し。裁つて合歡の扇と爲す、團圓(一)として明月に似たり。君の懷袖に出入して、動搖すれば微風發る。常に恐くは秋節至つて、(二)涼飆の炎熱を奪ひ、(三)篋笥の中に棄捐せられて、恩情の中道に絕えんことを。

飛蓋夾ニ馳道一。
垂楊蔭ニ御溝一。
凝レ笳翼ニ高蓋一。
疊レ鼓送ニ華輈一。
獻ニ納雲臺表一。
功名良可レ收。

宛洛佳ニ遨遊一。
春色滿ニ皇州一。
結軫青郊路。
迴瞰ニ蒼江流一。
日華川上動。
風光草際浮。
桃李成ニ蹊徑一。
桑楡蔭ニ道周一。
東都已俶載。
言歸望ニ綠疇一。

を送る。（六）雲臺の表に獻納す、功名良に收む可し。

（一）軍中に使用する軍樂の一種　（二）諸葛孔明曰く、金陵は眞に帝王の居なりと　（三）遠く高き貌　（四）天子出行の道　（五）擂聲鼓吾將軍の車を送る義　（六）後漢明帝の時光武の二十八將を南宮の雲臺に圖したる故事

徐都曹に和す

（一）[illegible]

宛洛遨遊に佳しく、春色皇州に滿つ。（三）軫を青郊の路に結んで、迴に蒼江の流るゝを瞰る。（四）日華川上に動き、風光草際に浮ぶ。（五）桃李蹊徑を成し、桑楡道の周を蔭へり。東都已に（六）俶めて（七）載あり、言に歸つて綠疇を望む。

（一）名は朓、字は玄暉　（二）二水の名　（三）車馬相從ふ貌　（四）日光　（五）史記李廣傳に桃李言はざれども下自ら蹊を成す　（六）始めて也　（七）農事に取りかゝる

東園に遊ぶ

聊復得レ此生。

日暮天無レ雲。
春風扇微和。
佳人美清夜。
達レ曙酣且歌。
歌竟長歎息。
持レ此感レ人多。
皎皎雲間月。
灼灼葉中華。
豈無一時好。
不レ久當如何。

江南佳麗地。
金陵帝王州。
逶迤帶綠水。
迢遞起朱樓。

が、盃を飲みはすとはつぎ〳〵盃も自然に傾く ㈡ 塵世を超逸して自適するなり

古に擬す

日暮れて天に雲無く、春風微和を扇ぐ。㈠佳人清夜を美とし、曙に達るまで酣に且つ歌ふ。歌竟つて長く歎息す。此を持して人を感ぜしむること多し。皎皎たり、雲間の月、灼灼たり、葉中の華。豈一時の好き無らんや。㈡久しからざるを當に如何かすべき。

㈠ 靜に緩く吹きあふる ㈡ 榮枯盛衰の轉移り易き譬

鼓吹の曲（一）　謝玄暉

江南佳麗の地、（二）金陵帝王の州。逶迤として綠水を帶び、（三）迢遞として朱樓を起す。飛甍は（四）馳道を夾み、垂楊は御溝を蔭ふ。（五）笳を凝して高蓋を翼け、鼓を疊んで華輈

結廬在人境、
而無車馬喧。
問君何能爾。
心遠地自偏。
採菊東籬下、
悠然見南山。
山氣日夕佳、
飛鳥相與還。
此間有眞意、
欲辨已忘言。

秋菊有佳色、
裛露掇其英、
汎此忘憂物、
遠我遺世情。
一觴雖獨進、
盃盡壺自傾。
日入羣動息、
歸鳥趨林鳴。
嘯傲東軒下、

雜詩　　陶淵明

廬を結ぶこと人境に在り、而も車馬の喧無し。君に問ふ、何ぞ能く爾る、心遠くして地自ら偏なり。菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る。山氣日夕佳なり。飛鳥相與に還る。此の間眞意有り、辨ぜんと欲して已に言を忘る。

㊀ 我心世と離る故に偏僻の地に同じきなり

雜詩

秋菊に佳色有り、露に裛うて其英を掇ふ。此を忘憂の物に汎べて、我が遺世の情を遠くす。一觴獨り進むと雖も、(二)盃盡れば壺自ら傾く。日入つて羣動息み、歸鳥林に趨つて鳴く。東軒の下に嘯傲して、(三)聊か復た此生を得たり。

㊀ 露にぬれたる菊の花瓣を拾うて酒盃中に汎べ飲み、以て浮世を遁れし我が情を愈遠からしむ　㊂ 陶酔である

金陵風景好。
豪士集新亭。
擧目江河異。
偏傷周顗情。
四坐楚囚悲。
不憂社稷傾。
王公何慷慨。
千載仰雄名。

金陵は風景好し、豪士新亭に集る。目を擧ぐれば江河異なり、偏に傷む周顗が情。四坐楚囚の悲あるも、社稷の傾くを憂へず。王公何ぞ慷慨なる、千載雄名を仰ぐ。

(一) この話は晉書王導傳に委し、十八史略にも見えたり (二) とらはれ人 (三) 王導

長歌行　　無名氏

青青園中葵。
朝露待日晞。
陽春布德澤。
萬物生光輝。
常恐秋節至。
焜黃華葉衰。
百川東到海。
何時復西歸。
少壯不努力。
老大徒傷悲。

青青たる園中の葵、朝露は日を待つて晞く。陽春德澤を布き、萬物光輝を生ず。常に恐らくは秋節至りて、焜黃として華葉の衰へんことを。百川東して海に到る。何の時にか復た西に歸せん。少壯にして努力せずんば、老大徒に傷悲せん。

(一) この詩は文選にも出でたる漢の樂府也、坊本に沈休文(沈約)の作と爲せども非也 (二) 黃色となるなり焜も亦黃に同じ

子瞻謫ニ海南ー
時宰欲レ殺レ之。
飽喫ニ惠州飯一。
細和ニ淵明詩一。
彭澤千載人。
東坡百世師。
出處雖レ不レ同。
氣味乃相似。

子瞻海南に謫せらる、時の宰之を殺さんと欲す。飽まで惠州の飯を喫し、細に淵明が詩に和す。彭澤は千載の人、東坡は百世の師なり。出處同じからずと雖も、氣味は乃ち相似たり。

(一)蘇東坡　(二)當時の執政　(三)卽ち海南なり　(四)陶淵明彭澤の令となる

少年子

青春少年子。
挾レ彈章臺左。
鞍馬四邊開。
突如ニ流星過一。
金丸落ニ飛鳥一。
夜入ニ瓊樓一臥。
夷齊是何人。
獨守ニ西山餓一。

青春の少年子、彈を挾む章臺の左、鞍馬四邊に開き、突として流星の過ぐるが如し。金丸飛鳥を落し、夜瓊樓に入つて臥す。夷齊は是れ何人ぞや。獨り西山の餓を守りぬ。

(一)黄金製の小丸にして主として鳥などを擊つものなり、章臺は楚靈王の宮名轉じて娼家の所在地を言ふ　(二)章臺の高樓を指す

金陵の新亭

遠餉ニ採薇客一。
遙知獨酌罷。
醉臥ニ松下石一。
幽人不レ可レ見。
清嘯聞ニ月夕一。
聊戲ニ庵中人一。
空飛本無レ迹。

人皆苦ニ炎熱一。
我愛ニ夏日長一。
薫風自レ南來。
殿閣生ニ微涼一。
一爲レ居所レ移。
苦樂永相忘。
願言均ニ此施一。
清陰分ニ四方一。

に臥するを。幽人は見る可からず、清嘯月夕に聞ゆ。聊か庵中の人に戲る。空飛は本迹無し。(三)

㊀東坡白家用の酒名　㊁伯夷叔齊の故事より鄧道士に比するなり　㊂當時羅浮山に野人ありと傳へ言ふ晉の葛洪が類なりと

柳公權が聯句を足す(一)

人は皆炎熱に苦しむ、我は夏日の長きを愛す。薫風南より來り、殿閣微涼を生ず。一たび居の爲に移されて、苦樂永く相忘る。願くは言に(二)此施を均しうして、清陰四方に分たん。

㊀唐の柳公綽が弟にして辭賦に工に筆法に妙なりし人、初の四句は公權が唐太宗と作りし聯句なり　㊁この幸福を四海に均分して上の恩施を遍からしめんとなり

子瞻海南に謫せらる(一)　黄山谷

繋二馬堂堦下一。
醉即騎レ馬歸。
頗遭二官長罵一。
才名三十年。
坐客寒無レ氈。
近有三蘇司業。
時時與二酒錢一。

今朝郡齋冷。
忽念二山中客一。
澗底束二荊薪一。
歸來煮二白石一。
遙持二一盃酒一。
遠慰二風雨夕一。
落葉滿二空山一。
何處尋二行迹一。

一盃羅浮春。

頗る官長の罵に遭へり。才名三十年、坐客(二)寒うして氈無し。近ごろ蘇司業が時時に酒錢を與ふる有り。

(一)廣文博士鄭虔に手紙を送り國子司業蘇源明にも呈するなり (二)鄭虔貧しき官に居り坐上の客皆寒中に著くべき氈衣も無し

全椒(一)山中の道士に寄す　韋應物

今朝郡齋(二)冷かなり、忽ち山中の客を念ふ。澗底に荊薪を束ね、歸り來つて白石(三)を煮る。遙に一盃の酒を持し、遠く風雨の夕を慰せん。落葉空山に滿つ、何の處にか行迹を尋ねん。

(一)滁陽府に屬する縣の名 (二)郡の役所 (三)道家に用ふる一種の藥石

韋蘇州が詩に和して鄧道士に寄す　蘇東坡

一盃羅浮(一)の春、遠く採薇(二)の客に餉る。遙に知る獨酌し罷んで、醉うて松下の石

山花向レ我笑。
正好啣レ盃時。
晩酌ニ東山下一。
流鶯復在レ玆。
春風興ニ醉客一。
今日乃相宜。

已從ニ招提遊一。
更宿ニ招提境一。
陰壑生ニ靈籟一。
月林散ニ清影一。
天闕象緯逼。
雲臥衣裳冷。
欲レ覺聞ニ晨鐘一。
令ニ人發ニ深省一。

廣文到ニ官舍一。

し盃を啣むの時。晩に東山の下に酌む、流鶯復た玆に在り。春風と醉客と、今日乃ち相宜し。

（一）酒をこぼさぬ用意なり

龍門の奉先寺に遊ぶ　杜子美

已に招提の遊に從ひ、更に招提の境に宿す。（二）陰壑は靈籟を生じ、月林は清影を散ず。（三）天闕象緯逼り、雲臥衣裳冷なり。覺めんと欲して晨鐘を聞けば、人をして深省を發せしむ。

（一）寺院の義　（二）山北の深谷風を生ず　（三）二山對立して門の如きところ中天の星宿近きなり象緯は星象經緯

戲に鄭廣文に簡して兼ねて蘇司業に呈す

廣文の官舍に到るとき、馬を堂堦の下に繫けり。醉うては即ち馬に騎つて歸り、

不ㇾ飲二盃中酒一。
徒撫二一張琴一。
虛栽二五株柳一。
空負二頭上巾一。
吾於ㇾ爾何有。

紫騮行且嘶。
雙翻碧玉蹄。
臨ㇾ行不二肯渡一。
似ㇾ惜二錦障泥一。
白雪關山遠。
黃雲海戍迷。
揮ㇾ鞭萬里去。
安得ㇾ念二香閨一。

玉壺繫二靑絲一。
沽ㇾ酒來何遲。

吾爾に於て何か有らんや。(三)

(一)氏名詳かならず　(二)栽は助辭なり　(三)我が酒を好むと其の好まざると別段相關するところなしとの言

紫騮馬(一)

紫騮行〻且つ嘶く、雙翻す、碧玉の蹄。(二)行に臨んで肯て渡らず。(三)錦障泥を惜むに似たり。白雪關山遠く、黃雲海戍迷ふ。鞭を揮うて萬里に去る、安ぞ香閨を念ふことを得ん。

(一)赤きあかくりげの馬　(二)馬蹄の堅固なるを形容す　(三)晉の王濟よく馬の性を解す、水を渡らんとするに馬肯かず障泥を去るに便ち渡りし事あり

酒を待てども至らず

玉壺に靑絲を繫ぐ、(一)酒を沽うて來ること何ぞ遲き。山花我に向つて笑ひ、正に好

滄波杳難レ期。
呉洲如レ見レ月。
千里幸相思。

陶令日日醉。
不レ知二五柳春一。
素琴本無絃。
漉レ酒用二葛巾一。
清風北窻下。
自謂羲皇人。
何時到二栗里一。
一見二平生親一。

地白風色寒。
雪片大如レ手。
笑殺陶淵明。

(一) 風期舍人たりし襄親なるべしとの說あり (二) 同姓なるために晉の名士を引用せるなり、秋風呉中など皆翰の故事を參照すべし

戯に鄭溧陽に贈る (一)

陶令(一)日日に醉ひ、五柳の春を知らず。(二)素琴本無絃、酒を漉すには葛巾を用ひぬ。(三)清風北窻の下、自ら謂ふ、羲皇の人と。何の時か栗里に到つて、一たび平生の親を見ん。(四)

(一) 鄭は時に溧陽の令たり (二) 彭澤の令陶淵明は門に五柳を植えたり (三) 淵明の琴は無絃にして常に頭巾にて酒を漉したりとぞ (四) 淵明自ら北窓の下に高臥すれば涼風至りて伏羲氏以前の人物の如き心地すと謂へり

王歷陽(一)が肯て酒を飮まざるを嘲る

地白うして風色寒く、雪片大いさ手の如し。(二)笑殺す陶淵明が、盃中の酒を飮まざるを。浪に一張の琴を撫し、虚しく五株の柳を栽う。空しく頭上の巾に負く、

今爲二松下塵一。
金龜換レ酒處。
卻憶淚沾レ巾。

狂客歸二四明一。
山陰道士迎。
勅賜二鏡湖水一。
爲二君臺沼榮一。
人亡餘二故宅一。
空有二荷花生一。
念レ此杳如レ夢。
凄然傷二我情一。

張翰江東去。
正値二秋風時一。
天晴一鴈遠。
海闊孤帆遲。
白日行欲レ暮。

㊀ 唐の秘書監賀知章字は季眞　㊁ 知章の故郷たる會稽の四明山　㊂ 下界に謫されし仙人　㊃ 知章初めて李白を見其才を愛し腰間佩ぶる所の金龜飾を酒に代へて共に傾け盡しぬ

又

狂客四明に歸る、山陰道士迎ふ。勅して鏡湖の水を賜ひ、君が臺沼の榮と爲す。人亡して故宅のみ餘し、空しく荷花の生ずる有り。此を念ふに杳として夢の如く、悽然として我が情を傷ましむ。

㊀ 晉の王右軍の故事　㊁ 知章の官を辭して去る時勅して鏡湖剡川の一曲を賜へるをいふ

張舍人の江東に之くを送る　李太白

張翰江東に去る、正に秋風の時に値へり。天晴れて一鴈遠く、海闊うして孤帆遲し。白日行〻暮れんと欲し、滄波杳として期し難し。吳洲如し月を見ば、千里幸に相思へ。

右軍本清眞。
瀟洒在風塵。
山陰遇羽客。
要此好鵝賓。
掃素寫道經。
筆精妙入神。
書罷籠鵝去。
何曾別主人。

四明有狂客。
風流賀季眞。
長安一相見。
呼我謫仙人。
昔好盃中物。

(一)王右軍　李太白

右軍は本清眞、瀟洒として風塵に在り。(二)山陰に羽客に遇ふに、此の鵝を好むの賓を要むと。素を掃つて道經を寫せば、筆精妙にして神に入る。書し罷めば鵝を籠にして去るのみ。何ぞ曾て主人に別れんや。

(一)晉の王羲之字は逸少右軍將軍會稽の長史たり　(二)清白眞率なり　(三)山陰に道士あり好んで鵝を養ふ右軍之を買ふや道士は老子經を寫さんことを請へり右軍寫し了り悉く鵝を籠にして道士に挨拶もなく歸り去りぬ

酒に對して賀監を憶ふ二首(一)

四明に狂客有り、風流の賀季眞。長安にて一たび相見る。我を(三)謫仙人と呼ぶ。(二)昔は盃中の物を好みしが、今は松下の塵と爲りぬ。(四)金龜もて酒を換へし處、卻つて憶ひて涙巾を沾す。

種豆南山下。
草盛豆苗稀。
侵晨理荒穢。
帶月荷鋤歸。
道狹草木長。
夕露沾我衣。
衣沾不足惜。
但使願無違。

爾從山中來。
早晚發天目。
我屋南山下。
今生幾叢菊。
薔薇葉已抽。
秋蘭氣當馥。
歸去來山中。
山中酒應熟。

田園の居に歸る　陶淵明

豆を南山の下に種う、草盛にして豆苗は稀なり。晨を侵して荒穢を理め、月を帶びて鋤を荷うて歸る。道狹うして草木長じ、夕露我が衣を沾す。衣の沾は惜むに足らず、但願をして違ふこと無らしめん。

(一) 雜草繁茂す　(二) 朝早くより畑を整理す　(三) 豆の成育結實せんこと

來使に問ふ　[illegible]

爾山中從り來れり、早晚天目を發したる。我は南山の下に屋せり、今幾叢の菊をか生ぜる。薔薇の葉は已に抽き、秋蘭の氣は當に馥しかるべし。歸りなん去來山中、山中酒應に熟すべし。

(一) 杭州府に在り　(二) 淵明の故宅を問ふなり

丈夫非レ無レ涙。
不レ灑二離別間一。
杖レ劍對二樽酒一。
恥レ爲二游子顔一。
蝮蛇一螫レ手。
壯士疾解レ腕。
所レ思在二功名一。
離別何足レ歎。

客從二遠方一來。
遺二我一端綺一。
文綵雙鴛鴦。
裁爲二合歡被一。
著以二長相思一。
縁以二結不一レ解。
以レ膠投二漆中一。
誰能別二離此一。

離別　　陸魯望

丈夫涙無きに非ず、離別の間に灑がず。(一)劍を杖ついて樽酒に對し、游子の顔を爲すことを恥づ。蝮蛇一たび手を螫せば、(二)壯士疾く腕を解く。思ふ所は功名に在り、離別何ぞ歎くに足らん。

(一) 精神自ら奮うて女々しき哀愁の顔を爲さず　(二) 速にその腕を斬つて毒の身に入るを防ぐ

古詩(一)　　無名氏

客あり遠方從り來り、我に一端の綺を遺る。(二)文綵に雙鴛鴦あり、裁ちて(三)合歡の被と爲す。(四)著するに長く相思ふを以てし、(五)縁するに結んで解けざるを以てす。(六)膠を以て漆中に投ず、誰か能く此に別離せん。

(一) 文選古詩十九首の一なり原詩には一端綺の下に相去萬餘里故人心尙在の二句あり　(二) 綾の模樣につがひの鴛鴦が描けるなり　(三) 同衾の夜具　(四) 綿を入るゝこと　(五) 四邊をくけるなり　(六) 雷陳膠漆の義に取る親みの堅固なるを謂ふ。

二月賣ニ新絲一。五月糶ニ新穀一。醫ニ得眼前瘡一。剜ニ卻心頭肉一。我願君王心。化作ニ光明燭一。不レ照ニ綺羅筵一。偏照ニ逃亡屋一。

貴人昔未レ貴。咸願レ顧ニ寒微一。及三自登ニ樞要一。何曾問ニ布衣一。平明登ニ紫閣一。日晏下ニ彤闈一。擾擾路傍子。無レ勞レ歌ニ是非一。

田家を傷む　聶夷中

(一)二月新絲を賣り、五月新穀を糶る。(二)眼前の瘡を醫し得て、心頭の肉を剜卻す。我は願ふ、君王の心、化して光明燭と作り、綺羅の筵を照さずして、偏く(三)逃亡の屋を照さんことを。

(一)二月は未だ蠶を飼ふのみなるに既に早く絲を賣りて急場を凌ぐ　(二)差迫つたる困難を救ふも是は胸の肉を自ら剜きとるに同じとなり　(三)收斂に堪へずして逃亡する貧家の現狀を見そなはせよと也

時興　楊貴

貴人も昔は未だ貴からず、(一)咸く寒微を顧みんことを願ふ。自ら樞要に登るに及んでは、何ぞ曾て布衣を問はん。(二)平明紫閣に登り、日晏れて彤闈より下る。(三)擾擾たり、路傍の子、是非を歌ふに勞すること無れ。

(一)貴人の昔寒微なりし時は寒微を眷顧せられんことを願望せり　(二)早朝に紫宸の殿閣に上り日暮に朱塗の宮内より出づ　(三)騷はしき様

總是玉關情。
何日平胡虜、
良人罷遠征。

(一) 晉代の一女子夜この歌を作る後人擬作する者多し (二) 玉門關に同じ、詩意は遠征の夫のために衣を調へんとして月下に衣を擣つ心地を詠じたるなり

友人會宿

滌蕩千古愁、
留連百壺飲。
良宵宜且談、
皓月未能寢。
醉來臥空山、
天地卽衾枕。

千古の愁を滌蕩して、留連して百壺を飲む。良宵宜しく且く談ずべし、皓月未だ寢る能はず。醉來つて空山に臥すれば、天地卽ち衾枕たり。

(一) 洗ひ清め去る (二) 夜通しに深山の酒を飲む

雲谷の雜詠　　朱晦庵

野人載酒來。
農談日西夕。
此意良已勤。
感歎情何極。
歸去莫頻來、
林深山路黑。

野人酒を載せて來る、農談日西に夕なり。此の意良に已に勤む、感歎情何ぞ極らん。歸り去つて頻に來ること莫れ、林深うして山路黑し。

(一) 晦庵讀書の地名 (二) 農人の親切はありがたき事なれど餘り再三は迷惑なりとの詩意、結句は客を謝する辭令なり

當時歌舞地。
不レ說二草離離一。
今日歌舞盡。
滿園秋露垂。

慈母手中線。
遊子身上衣。
臨行密密縫。
意恐遲遲歸。
誰下將二寸草心一。
報中得三春輝上。

長安一片月。
萬戸擣レ衣聲。
秋風吹不レ盡。

當時歌舞の地、(一)草の離離たるを說かず。今日歌舞盡きて、滿園秋露垂る。

㊀ 昔の石崇が別莊なり ㊁ 後年斯の如く雜草の茂り荒れんことを思はず

遊子の吟　　孟郊

慈母手中の(一)線、遊子身上の衣。行に臨んで(二)密密に縫ふ、(三)意に恐る遲遲として歸らんことを。(四)寸草の心を將て、三春の暉に報い得んこと難し。

㊀ 針線に同じ ㊁ 破れ綻びざるやう縫目を綿密にするなり ㊂ 歸郷の早からんことを祈る意 ㊃ 短き雜草の如きはかなき我が才にては迚も春の光の如き慈母の恩に報い難し

(一)子夜吳歌　　李太白

長安一片の月、萬戸衣を擣つの聲。秋風吹き盡さず、總て是(二)玉關の情。何の日か胡虜を平げて、良人遠征を罷めん。

古人云此水。一歃懷二千金一。試使二夷齊飲一。終當レ不レ易レ心。

萬里路長在。六年今始歸。所レ經多二舊館一。大半主人非。

貪泉(一)　呉隱之

古人云ふ此の水、一たび歃れば千金を懷ふと。試に夷齊(二)をして飲ましむとも、終に當に心を易へざるべし。

(一) 廣州に在り、之を飲めば皆貪ると傳ふ　(二) 古の廉潔なりし伯夷叔齊

商山の路にて感有り　白居易

萬量路長へに在り、六年今始めて歸る。(一)經る所舊館多きも、大半は主人非なり。(二)

(一) 白樂天元和十年九江司馬となり、其後四年にして忠州に遷り、後二年にして長安に召還さる　(二) 主人は大抵この世にあらざるを指す

金谷園(一)　無名氏

上レ馬啼二紅頰一。
今日漢宮人。
明朝胡地妾。

十年磨二一劍一。
霜刃未二曾試一。
今日把似レ君。
誰有二不平事一。

煮レ豆燃二豆萁一。
豆在二釜中一泣。
本是同根生。
相煎何太急。

妾。

(一)漢宮の名妃にして出でて匈奴の單于に嫁せしめられたる人　(二)涙が紅の頰を傳うて流るゝ義

劍客　　賈島

十年一劍を磨す、(一)霜刃未だ曾て試みず。今日把つて君に似す、(二)誰か不平の事有りや。

(一)刃の色霜の如く清めるなり　(二)不平を抱く者あらば之を一撃にせんとの義

(一)七步詩　　曹子建

豆を煮るに豆の萁を燃く、豆は釜中に在りて泣く。(二)本是同根生なり、相煎ること何ぞ太だ急なる。

(一)魏の文帝其弟に命をし七步に詩を作らしめ成らずんば之を殺さんとす　(二)豆と實と同根に生ずるが如く君と我とは兄弟に非ずや、煎るに何とて斯くはいぢめ給ふかとの意

鋤レ禾日當レ午。
汗滴禾下土。
誰知盤中飧。
粒粒皆辛苦。

欺レ暗常不レ然。
欺レ明當ニ自戮一。
難下將ニ一人手一。
掩中得天下目上。

昭君拂ニ玉鞍一。

農を憫む　李紳

禾を鋤いて日午に當る、汗は滴る禾下の土。誰か知らん(一)盤中の飧、粒粒皆辛苦せしを。

(一)盤に盛りたる結構な食物

(一)李斯の傳を讀む　李鄴

(二)暗を欺くは常に然らず、明を欺くは當に自ら戮せらるべし。一人の手を將て、天下の目の掩ひ得んこと難し。

(一)暴君を欺いて遂に刑禍に罹りし人物　(二)人の知らざるを欺くすら永く保つ能はず況んや天下周知の事をや

(一)王昭君　李白

昭君玉鞍を拂ひ、馬に上つて(二)紅頰を啼かしむ。今日漢宮の人、明朝は胡地の

夏雲多二奇峰一。
秋月揚二明輝一。
冬嶺秀二孤松一。

㊀ 許彦周はこの詩を顧愷之の作とせり

(一)道者を訪うて遇はず　　僧無本

松下問二童子一。
言師採レ藥去。
只在二此山中一。
雲深不レ知レ處。

松下童子に問へば、言ふらく、(二)師は藥を採つて去ると。只此の山中に在るべし、雲深うして處を知らず。

㊀ 一本に隱者とあり、作者僧無本とは賈島が初め浮屠たりし時の名 ㊁ 藥草採集のため山中に入りたり

蠶婦　　無名氏

昨日到二城郭一。
歸來淚滿レ巾。
遍身綺羅者。
不二是養レ蠶人一。

昨日城郭に到り、歸り來つて淚巾に滿つ。(一)遍身綺羅の者、是蠶を養ふ人にあらず。

㊀ あやうすものを着て奔侈なる者は養蠶の婦女にあらずとの詩意

潢潦無二根源一。朝滿夕已除。人不レ通二古今一。馬牛而襟裾。行レ身陷二不義一。況望レ多二名譽一。時秋積雨霽。新涼入二郊墟一。燈火稍可レ親。簡編可二卷舒一。豈不二旦夕念一。爲レ爾惜二居諸一。恩義有二相奪一。作レ詩勸二躊躇一。

五言古風短篇

清夜吟　　邵康節

月到二天心一處。風來二水面一時。一般清意味。料得少二人知一。

月天心(一)に到るの處、風水面に來るの時、(二)一般の清意味、料り得たり人の知るもの少きを。

(一) 中天　(二) 一面に行き渉りて限りなく天地の間に充ち滿ちたる清氣

四時(一)　　陶淵明

春水滿二四澤一。

春水四澤に滿ち、夏雲奇峰多し、秋月明輝を揚げ、冬嶺孤松秀づ。

飛黃騰踏去。
不レ能レ顧二蟾蜍一。
一爲二馬前卒一。
鞭レ背生二蟲蛆一。
一爲二公與一レ相。
潭潭府中居。
問レ之何因爾。
學與レ不レ學歟。
金璧雖二重寶一。
費用難二貯儲一。
學問藏二之身一。
身在則有レ餘。
君子與二小人一。
不レ繫二父母且一。
不レ見公與レ相。
起レ身自二犂鉏一。
不レ見三公後。
寒飢出無レ驢。
文章豈不レ貴。
經訓乃菑畬。

畬たり。潢潦根源無し、朝に滿るも夕に已に除る。人にして古今に通ぜんずんば、馬牛にして襟裾するなり。身を行ふすら不義に陷る、況んや名譽多からんことを望むをや。時秋にして積雨霽れ、新涼郊墟に入り、燈火稍親しむ可く、簡編卷舒す可し。豈旦夕に念はざらんや、爾が爲に居諸を惜む。恩義相奪ふこと有り、詩を作つて躊躇を勸む。

(一) 韓文公の子なり城南は文公別莊の所在地　(二) 木工の巨石なり、梓は指物、匠は大工、輪は車を作り、輿は輿を作る人　(三) 六經中特に主要なるものを擧ぐんなり　(四) 得る所有り　(五) いなき始へらる、二三歳　幼兒までは甲乙皆同じ位の智慧なり　(六) 水中同類の魚い如く差異あることなし　(七) 學ぶ者は嶄然頭角を現はす様　(八) そむき離る　(九) 一は清き溝の如く、一は濁れる渠の如し　(一〇) 神馬なり、神馬の飛騰し踏みとめざるが如き様　(一一) 無學者に喩ふ　(一二) 鞭有れば撃うたれ其跡の肉腐れば蛆を生ず　(一三) 三公とな・宰相なり、奥深き宮殿に安居す　(一四) 黄金珠玉　(一五) 三公宰相にして身を田野の農夫より起せし者多し　(一六) 經學の教訓は卽ち田地を耕作するに同じとなり　(一七) 溜り水は根柢無きにより忽ち涸れ果つるなり　(一八) 牛や馬が衣服を著くるが如き狀態　(一九) 長雨漸に霽れたり　(二〇) 郊野の間に涼　滿ちわたる　(二一) 日月に同じ　(二二) 父子間の恩愛が動もすれば正義を犯すことあるを憂へて特にこの詩を作り躊躇することなく勉強せしめんとす

木之就二規矩一。
在二梓匠輪輿一。
人之能爲レ人。
由三腹有二詩書一。
詩書勤乃有。
不レ勤腹空虛。
欲レ知二學之力一。
賢愚同一初。
由二其不一レ能レ學。
所レ入遂異レ閭。
兩家各生レ子。
提孩巧相如。
少長聚嬉戲。
不レ殊二同隊魚一。
年至二十二三一。
頭角稍相疏。
二十漸乖張。
清溝映二汙渠一。
三十骨骼成。
乃一龍一豬。

木の規矩に就くは、梓匠輪輿に在り。人の能く人爲るは、腹に詩書有るに由る。詩書勤むれば乃ち有り、勤めざれば腹は空虛なり。學の力を知らんと欲するは、賢愚同一初のみ、其の學ぶこと能はざるに由りて、入る所遂に閭を異にするなり。兩家各〻子を生まんに、提孩まで巧は相如き、少しく長じ聚つて嬉戲するにも、同隊の魚に殊ならず。年十二三に至れば、頭角稍相疎に、二十にして漸く乖張し、清溝汙渠に映ず。三十にして骨骼成るとき、乃ち一は龍一は豬、飛黃騰踏して去り、蟾蜍を顧る能はず。一は馬前の卒と爲り、背に鞭たれて蟲蛆を生ず。一は公と相と爲り、潭潭として府中に居る。之を問ふ、何に因りて爾るぞ、學ぶと學ばざるとか。金璧は重寶なりと雖も、費し用ひて貯儲し難し。學問は之を身に藏む、身在るときは則ち餘有り。君子と小人と、父母には繫はらざるなり。見ずや公と相と、身を起すこと犂鋤よりするを。見ずや三公の後、寒え饑ゑて出づるに驢無きを。文章豈貴からざらんや、經訓は乃ち菑

有レ田不レ耕倉廩虛。有レ書不レ敎子孫愚。倉廩虛兮歲月乏。子孫愚兮禮義疎。若二惟不レ耕與レ不レ敎。是乃父兄之過歟。

田有れども耕さざれば倉廩虛しく、書有れども敎へざれば子孫愚なり。倉廩虛しければ歲月乏しく、子孫愚なれば禮義疎なり。惟耕さざると敎へざるとの若きは、是乃ち父兄の過か。

㊀ 名は居易、唐の人　㊁ 長年月の間には生活にも困るに至る

朱文公が勸學文

勿レ謂今日不レ學而有二來日一。勿レ謂今年不レ學而有二來年一。日月逝矣。歲不二我延一。嗚呼老矣。是誰之愆。

謂ふこと勿れ、今日學ばずして來日有りと。謂ふこと勿れ、今年學ばずして來年ありと。日月逝きぬ、歲は我と延びず。嗚呼老いたり、是誰の愆ぞや。

㊀ 宋の大儒朱熹　㊁ 歲月は我が爲めに延長しては呉れぬ

符、書を城南に讀む　韓退之

白樂天が勸學文(一)

讀レ書不二破費一。讀レ書萬倍利。書顯二官人才一。書添二君子智一。有卽起二書樓一。無卽致二書櫃一。窓前看二古書一。燈下尋二書義一。貧者因レ書富。富者因レ書貴。愚者得レ書賢。賢者因レ書利。只見二讀レ書榮一。不レ見二讀レ書墜一。賣レ金買レ書讀。讀レ書買レ金易。好書卒難レ逢。好書眞難レ致。奉レ勸二讀書人一。好書在二心記一。

書を讀めば破費(二)せず、書を讀めば萬倍の利あり。書は官人の才を顯はし、書は君子の智を添ふ。有らば(三)卽ち書樓を起てよ、無くば卽ち書櫃(四)を致せ。窓前に古書を看て、燈下に書義を尋ねよ。貧しき者は書に因りて富み、富める者は書に因りて貴く、愚なる者は書を得て賢に、賢なる者は書に因りて利あり。只書を讀んで榮ゆるを見る、書を讀んで墜つる(五)を見ず。金を賣りて(六)書を買つて讀め、書を讀んで金を買ふは易し。好書は卒に逢ひ難く、好書は眞に致し難し。讀書の人に勸め奉る、好書は心記(七)に在り。

(一) 宋の王安石なり (二) 財物を浪費する事無き義 (三) 餘力あらば (四) 書籍函の類を作れ (五) 敗壞し失敗す
(六) 金を以て書籍に換ふる義 (七) 心によく記憶す

父母養二其子一而不レ教。是不レ愛二其子一也。雖レ教而不レ嚴。是亦不レ愛二其子一也。父母教而不レ學。是子不レ愛二其身一也。雖レ學而不レ勤。是亦不レ愛二其身一也。是故養レ子必教。教則必嚴。嚴則必勤。勤則必成。學則庶人之子爲二公卿一。不レ學則公卿之子爲二庶人一。

柳屯田が勸學文(一)

(二)父母其子を養うて教へざるは、是其子を愛せざるなり。教ふと雖も而も嚴ならざるは、是亦其子を愛せざるなり。父母教ふれども而も學ばざるは、是子の其身を愛せざるなり。學ぶと雖も而も勤めざるは、是亦其身を愛せざるなり。是の故に子を養へば必ず教へ、教ふれば則ち必ず嚴にす。嚴なれば則ち必ず勤め、勤むれば則ち必ず成る。(三)學べば則ち庶人の子も公卿と爲り、學ばざれば則ち公卿の子も庶人と爲る。

(一) 柳永字は耆卿宋代の人なり、屯田員外郎たりき　(二) この節は無韻なり　(三) 學べば賤者も貴人となり學ばざれば貴者も賤人となる

王荊公が勸學文(一)

養レ子不レ教父之過。訓導不レ嚴師之惰。父教師嚴兩無レ外。學問無レ成子之罪。煖衣飽食居二人倫一。視レ我笑談如二土塊一。攀レ高不レ及下品流。稍過二賢才一。無二與對一。勉二後生一力求レ誨。投二明師一莫二自昧一。一朝雲路果然登。姓名亞等呼二先輩一。室中若未レ結二親姻一。自有二佳人求二匹配一。勉レ旃汝等各早修。莫下待二老來一徒自悔上。

子を養うて教へざるは、父の過なり。訓導(二)して嚴ならざるは師の惰なり。父の教、師の嚴、兩つながら外無け(三)れども、學問成ること無きは、子の罪なり。煖に衣、飽くまで食うて人倫に居り、我を(四)視て笑談土塊の如くす。高きに攀ぢんとして及ばず下品に流れ、稍(五)賢才に遇へば與に對ふる無し。後生を勉む、力めて誨を求めよ。明師(六)に投じて、自ら昧ます莫れ。一朝雲路(七)果然として登らば、姓名亞(八)いで等しく先輩と呼ばれん。室中若し未だ親姻を結ばずんば、自ら佳人の匹配を求むる有らん。旃を勉めよ、汝等各〻早く修せよ、老來を待つて徒に自ら悔ゆること莫れ。

(一) 司馬光字は君實、宋神宗頃の名臣 (二) 教へみちびく (三) 專心一意心を外に馳せざるなり (四) 賢者の話を聞くも判らざるなり (五) 少しの賢才に出逢へば應對すること能はず (六) 立派なる教師に身を託す (七) 文官試驗に首席にて合格するをいふ。汎く昇進の義と見るも亦通ず (八) 先輩の人々と同等の聲名を得ん

平生志。六經勤向窓前讀。

朕觀無學人。無物堪比倫。若比於草木。草有靈芝木有椿。若比於禽獸。禽有鸞鳳獸有麟。若比於糞土。糞滋五穀土養民。世間無限物。無比無學人。

（一）仁宗皇帝の勸學文

朕、無學の人を觀るに、物の比倫（二）するに堪ふるもの無し。若し草木に比せんに、草に靈芝（三）有り木に椿有り。若し禽獸に比せんに、禽に鸞鳳（四）有り、獸に麟有り。若し糞土に比せんに、糞は五穀（五）を滋し、土は民を養ふ。世間限り無きの物、無學の人に比すべき無し。

（一）眞宗の第六子なり　（二）比較す　（三）靈芝は瑞草椿は靈木　（四）鳳凰の類なり、瑞鳥　（五）黍稷麥菽禾

（二）司馬溫公勸學の歌

富ㇾ家不ㇾ用ㇾ買ニ良田一。書中自有ニ千鍾粟一。安ㇾ居不ㇾ用ㇾ架ニ高堂一。書中自有ニ黃金屋一。出ㇾ門莫ㇾ恨ㇾ無ニ人隨一。書中車馬多如ㇾ簇。娶ㇾ妻莫ㇾ恨ㇾ無ニ良媒一。書中有ㇾ女顏如ㇾ玉。男兒欲ㇾ遂ニ

古文眞寶前集

勸學文

(一)眞宗皇帝の勸學文

家を富ますには良田を買ふを用ひず、書中自ら千鍾(二)の粟有り。居を安うするには高堂を架するを用ひず、書中自ら黃金(三)の屋有り。門を出づるに人の隨ふもの無きを恨むること莫れ、書中の車馬は多くして簇るが如し。妻を娶るに良(四)媒無きを恨むること莫れ、書中に女有り、顏玉の如し。男兒平生の志を遂げんと欲せば、六經(五)勤めて窗前に向つて讀め。

(一) 宋太宗の太子　(二) 六斛四斗を一鍾とす　(三) 漢の武帝涌靈を作る、高さ二十丈黃金を以て屋上を飾れりとの故事に取る　(四) 良き媒妁人　(五) 易詩書禮樂春秋の諸經

[illegible]

らざるなし。屈原の文辭の支那文學に與へたる影響と價値との偉大なることは恐らくは詩經の下に在らざるべし。

大正十年九月

文學博士　岡　田　正　之　識

屈原の作一たび出でて、楚調の一法門を開き、宋玉・景差・唐勒の徒は之を學びて衣鉢を傳へ、秦漢以後は愈ゝ之を祖述し、楚調は文學の中心となり、詩歌には項羽が垓下の歌・漢高の大風の歌を始めとし、武帝の秋風辭・昭帝の黄鵠歌の如き楚音ならざるなく、李陵の別歌・白頭吟の古歌・班婕妤の怨歌行も亦皆楚の遺響なり。 武帝が樂府を立つるや、代・趙の謳、秦・楚の風に取れるものあれば、楚風が樂府に與へたる功も少からざるべし。 殊に前漢より起れる五言・七言の詩形は楚賦に負ふ所ありしは爭ふべからざる所なり。 辭賦は漢代の君臣上下の嗜む所にして、學士大夫は互に競ひて之を製し、名匠巨手も蔚然として興れり、成帝の時に賦を奏御したるもの千有餘篇ありしと云ひ、漢書藝文志に據れば、前漢の賦家五十一家にして、其の作八百四十九篇あり、如何に辭賦流行の盛なりしかを想像すべし。 是れ單に前漢の一代に就いて其の流風の及べる所を擧げしに過ぎず、後漢も前漢に讓らず、六朝唐宋に至りても、名儒博達の士の辭賦を作るものは極めて多く、而かも皆模範を屈原に取

懐といふ。

劉向と九歎　劉向は漢の宗室の子にして、字を子政といふ、宣帝の時に、名儒材俊の選に加はる、元帝の時に中壘校尉となる、著す所に洪範五行傳列女傳新序・說苑等あり。

九歎は劉向の作なり、歎は傷なり、息なり、屈原が放れて山澤に在り、猶君を傷ち念ひて歎息已むなきことを賦す、是も九篇あり故に九歎といふ。

王逸と九思　王逸は後漢の時の人なり、字を叔師といふ、順帝の時、侍中となる、著作少からず、楚辭章句最も著はる、其の子延壽も亦文辭を以て稱せらる。

九思は王逸が屈原を傷みて作れるものなるが、王逸は屈原と同鄉の關係ありしにより、哀悼の常情に倍するものあり、此も九篇あるを以て九思といふ。

第六章　楚辭の影響

一 **莊忌と哀時命**　莊忌は司馬相如と共に辭賦を好み梁に客遊す、梁の孝王甚だ之を重んず、忌は屈原が忠貞の性を以て明君に逢はずして、暗世に遇ひしを哀みて哀時命の篇を作りしなり。

一 **東方朔と七諫**　東方朔は字を曼倩と云ひ、詼諧滑稽を善くし、漢の武帝の時、金馬門侍中となり、數〻帝を諷諫す、最も文藝に長じ、嘗て答客難を作る、揚雄班固等皆之に倣ふ。

七諫は東方朔の作りし所なり、屈原が楚の公室の同族なるを以て、國を去る義なし、故に七回の諫をなして、忠厚の節を致したるとの意によりて七諫といふ。

一 **王褒と九懷**　王褒は蜀の人なり、字を子淵と云ふ、漢の宣帝の時、徵されて都に入り聖主得賢臣頌を作る、後諫大夫に至る。

九懷は王褒が屈原の放逐せられしも、猶其の君を思ひ國の傾危を憂ひて忘るゝ能はざるの至情ありしことを作りしなり、懷は思なり、其の辭は九篇あるを以て九

て死せり、時に年三十三、其の文章として有名なるは治安策なり、其の外過秦論・鵩賦・弔屈原賦等あり。

惜誓の惜とは哀しむなり、誓とは約信なり、約信を果さざりしを哀みて惜誓といふ、卽ち賈誼は屈原に代り懷王の始には信じ終には疎んじ、其の誓約に背きたるを哀み惜みたるものなり。

淮南小山と招隱士　淮南王安は古を好み士を愛して賓客を招き致す、時に八公の徒あり、詞賦を分ち造りて之を類別し、或は大山と稱し、或は小山と稱す、其の意は詩經に大雅小雅ある如しといふ、招隱士は小山の作なり。

招隱士とは隱士を招くなり、卽ち屈原を招く意を寓したるものなり、屈原は遠く逝きて歸らざるを以て、山中に隱れて世に出でざるになぞらへ、山中は君子の居るべき處にあらざれば、早く郢都に歸り來れと勸めたるものにして、深く屈原の死を傷みしものなり。

此の亂の形に擬へたるものといふ。

第五章　宋玉以下の作家と其の作品

宋玉と九辯　宋玉は屈原の弟子なり、楚の襄王に事へて大夫となれり。其の作としては九辯及び風賦・高唐神女賦・登徒子好色賦・楚王問の七篇あり、風賦以下は文選に見ゆ。

九辯は宋玉が其の師屈原の忠ありて放逐せられ、久しく還ることを得ざるを憐み傷みて作れるものなり。辯は忠邪の分るゝ所以を辯明したる意にて、其の辭は九章あるを以て九辯と名けしといふ。

賈誼と惜誓　賈誼は洛陽の人なり、漢の文帝に任へ博士となり、超遷して大中大夫に至りしが、絳灌等の讒する所となり、文帝之を疎んじ長沙王の大傅に貶す、又召されて梁王の大傅たりしが、梁王の馬より墜ちて死するに及び、深く傷み、歳餘にし

きに韻を蹈みたるものなり離騷・遠遊の諸篇は是なり。第二は首句次句に韻を連用し、第三句を隔て第四句に至り又韻を蹈みたるものなり、九歌の諸篇には此の押韻の法多し。第三は連句韻にして每句韻を蹈むものなり、九歌の禮魂國殤及び遠遊篇中に此の韻法あり。以上の三種は常格なり、變格としては上下句各自に韻をなせるものあり、腰韻卽ち句中に韻を蹈むもの等ありき。

亂● 一篇の終に亂と稱せるものあり、卽ち全篇を總括反覆したる小詩歌なり離騷・涉江・哀郢・懷沙・招魂の諸篇に見ゆ。抽思の篇には少歌と倡と亂との三種までも附けたり。荀子の賦にも、反辭又は小歌の語あり、其の楊倞の註に「反覆叙說之辭、猶楚辭曰亂」と云ひ「反覆故謂之小歌。總論前意也」と云へり。蓋し音樂の詩の卒章を亂と稱せり、卽ち亂は樂章の終を意味するものなり、然るに一轉して詩歌の終に一小詩歌を加ふるも亦亂と稱し、或は反辭・小歌・倡とも呼び、特に楚人の間に行はれしならん。我邦の萬葉集に見ゆる長歌の終に、反歌なるものあるは、卽ち反辭にして亦

第四章　楚辭の形式

屈原の辭は詩經の詩に比すれば、長篇大作多し離騷の如きは三百七十五句を以て成り、天問の如きも三百五十四句あり、九歌の諸篇は比較的短篇なるも、尙ほ十五句以上にして、四十句に至るものは十一篇中九篇あり、如何に詩形の長大なるかを知るべし。

句形　詩經は專ら四言の形を以て成れるも、屈原の辭は過半は六言にして、四言は之に亞げり、而して其の形は二句を一聯とし、兮の字を加へて音節を調へたるものなり。兮の字は上句の下に入れたるものあり、下句の下に入れたるものあり、句間に入れたるものあり、又或は兮に代ふるに些只の字を以てしたるものあり。

韻礎　韻文に於ける必要條件の一は用韻なり、楚辭の韻法は略詩經と同じく、句尾に韻を踏みたり、其の類に大略三種あり、第一は隔句韻にして第二句より一句お

枉げて、其の生を求むるものにあらざるなり。

卜居は自ら處する所以の方法を卜し問ふに託して、世人が邪佞に習ひ、正直に背けるを哀みたるものなり。

漁父は屈原が漁父との問答に託して、決死の意を明にしたるものなり。

招魂は屈原が魂魄の離散せしを以て、此の文を草して、自ら其の魂を招きたるものなり。古人の魂を招く禮は死者に行へたるものなるも、後には生人にも施したることあり。屈原の意は之を假りて楚王の己を召還して、楚國を興さしめんことを欲したるものならん。王逸は此の篇を以て宋玉の作となし、宋の朱熹等も亦同說なるも、史記及び明清の考證家の說には屈原の作となせり。

大招は屈原が懷王の秦に客死したるを痛みて、其の魂を招きたるものなり。大招の大は君を尊ぶ辭ならん。此の篇は王逸も原の作とし、一說として景差なりと云ふ、後來の學者は皆原の作として疑はざるなり。

橘頌の一篇は橘の樹の美質にして貞固なることを頌して、自ら其の心に譬へしものなり。

悲回風は秋風の搖落に感じて、益々彭咸の志を固めしことを反覆申明したるものなり。

惜往日　今の擯斥を傷み、昔の恩遇を思ひ、遂に死を以て其の君を悟さんと決心せしことを述ぶ。

懷沙　沙石を抱きて將に自ら水に投ぜんとする時の作にして、之を屈原の絶命の辭となす。

遠遊は屈原が悲觀の餘り勇退高蹈の情を述べたるものなり、人の宇内に寓するもの幾何ぞ、既に年壽の長からざるに、況して世の汚穢卑狹なる、素懷展ぶる所なく徒に愁苦して死に就かんよりは、寧ろ仙人に從ひ、高く擧がり、遠く遊び、泰始と鄰となるに如かずとは、即ち本篇の主旨なり。然れども屈原は終に理想を變じ自信を

九章は惜誦・思美人・抽思・渉江・橘頌・悲回風・惜往日・哀郢・懐沙の九篇あるを以て九章といふ。此の中惜誦・思美人・惜往日・悲回風の四篇は篇首の文字を取りて篇名とし其の餘は一篇の旨を取りて名けたるものなり。而して九章の作は一時の作にあらざることは古人の定説なり。

惜誦　進言の察せられざるを惜み、忠貞の心は讒毀の爲に變更することなきを詠みしものにして、始めて懐王に疏んぜられし時の作に係かる。

思美人・抽思　の二篇は懐王の時、漢北に貶謫せられて作りしものにして、君の舊を念ひて一悟せんことを願ひ、自ら彭咸の死諫を期せしことを賦す。

哀郢　は頃襄王の時に郢の都を發して陵陽に至るものにして、嚴譴を蒙りて故國を去るの悲を述ぶ。此の篇以下は皆頃襄王の時の作に係かれり。

渉江　は江を渉りて鄂渚より漵浦に入るものにして、憤懣に激して、人を絶つの志を歌ひしものなり。

國殤　國家の爲に戰死したるものを祭れる歌なり。

禮魂　禮を以て終りしものを祭れる歌なり。

九歌と題しながら、歌の數の十一篇ありしに由り、古來種々の說ありて定論なし。但し九歌と云へることは、古くよりあることにして、屈原は舊製に倣ひて作りしものならん。

天問　天問とは天そのものの如何なるものなるかを問はんとしたるものなり、語を換へて之を言へば、宇宙及び人生に對する幾多の疑問を發したるものなり。茫々たる宇宙の萬象に就いて、古今誰れか其の解決を與ふるものぞ、善惡は顚倒し禍福は地を易へ、讒佞の徒は勢を得て、忠貞の臣は殺害せられ、國の亡ぶべきものは却つて存し、家の廢すべきものは却つて興る、大道果して是なるか、人事果して非なるか、耳目の觸るる所は、一として疑問ならざるなし、是れ此の篇の一百七十二種の問題を提出したる所以なり。

九歌は神を迎へ神を祭る辭に託して、君臣の間に於ける遇合阻隔の情を述べ、眷戀忘るべからざるの赤誠を寄せたるものなり。九歌の篇目と其の大要を擧ぐれば左の如し。

東皇太一　天神の最も尊きものを迎ふる歌なり。

雲中君　雲の神を祭れる歌なり。

湘君・湘夫人　楚の傳說に、堯の二女娥皇・女英は舜の妃となり、後舜の南方に往くに及び、其の後を追ひ、湘水に溺死す。後人之を憐みて崇祀し、娥皇を湘君と云ひ、女英を湘夫人と云ふ。此の二篇は卽ち此兩女神を祭れる歌なり。

大司命・小司命　並に星を祭れる歌なり。

東君　日の神を祭れる歌なり。

河伯　河の神を祭れる歌なり。

山鬼　山神を祭れる歌なり。

ひて天分を發揮し得べき絕佳の境遇を與へたるものと謂はざるべからざるなり。

第三章　屈原の作品

漢書の藝文志に「屈原賦二十五篇」とあり、二十五篇の數へ方は明かならざるも、今存せる離騷・九歌・天問・九章・遠遊・卜居・漁父・招魂・大招は屈原の作なりとは略定說となれり。玆に各篇の大旨を略述すれば左の如し。

離騷は屈原の辭藻中否な古今の辭賦中の第一に數へらるるものなり。高潔の身を以て忠貞の節を致すも、上は君に察せられず、下は世に容れられず、故都を去りて其の身を潔くせんか、宗國の亡を如何せん、君側に侍りて世と推移せんか、正義の墜つるを如何せん、一片の孤忠訴ふるに所なく、君國の覆亡は坐視するに忍びず、其の身を處する道は、死諫の一途あるのみとの一大覺悟を詠みたるものにして、炎ゆるが如き情と、湧くが如き血との最高潮に達したる悲愴痛絕の一大詩なり。

憂憤遣る所なく、終に汨羅に身を投じたり。後人其の死を傷まざるものなく、其の精誠は永く世道人心を支配し、唐の時には昭靈侯に封じ、宋の時には忠潔侯に封じ、又清烈公を贈り、元に及び、忠節清烈公に封じたり。忠節清烈の四字は屈原の一生を盡せり。

性格。 屈原は熱情の人なり、意志の人なり、纏綿悽惻の情緒と、勇往邁進の意志とは君國に對して壯烈なる熱血となり、自己に對しては絶大なる自信と化し、殊に其の清廉高潔の性癖は到底俗世界の濁れるに一致するを許さず、是れ屈原をして逆境に陷らしめたると共に、幾多の詩を作らしめたる所以なり。要するに屈原は理想に富みたる多情多感の一大詩人なり、故に詩は屈原の生命にして、屈原は詩の爲に生き、詩の爲に死せしものなり。若し屈原をして平平坦坦たる順境に終らしめば、恐らくは其の辭藻を天地に留むるを得ざるべし。其の一生涯現實に反抗し、時世と奮闘し、運命は仇と謀り、終始葛藤を絶えざらしむるものは、即ち天が屈原に向

經歷　屈原は楚の王族にして門閥家なり。名を平と云ふ。原は其の字なり。或は原は名にして平は字なりとも云ふ。博聞彊識にして辭令に嫺ひ、治亂の事を明にせり。出でて懷王に仕へ、左徒となり、三閭の大夫となれり。左徒とは後世に於ける左右拾遺の如き官にして、君の過失を補ひ、缺遺を拾ふことを掌るものなり。三閭の大夫とは楚の王族たる昭・屈・景の三氏の事を掌るものなり。屈原は三氏の賢良を率ゐて國士を勵まし、入りては懷王と政事を謀りて號令を發し、出でては賓客に接し、諸侯に應對し、爲に懷王の信任する所となり、諫行はれ、職修りぬ。

然るに讒人の構ふる所となりて、懷王に疏せられ、一時漢北に遷されしが、幾ならずして召還せられて朝に立ち、又齊に使したることもありき。

後、懷王は秦に欺かれて其の國に行かんとす、屈原固く之を留めしも聽かれず、懷王は遂に秦に客死せり。頃襄王嗣ぎ立つに及び、屈原は又小人等の妬忌する所となりて江南の野に流され、國政日に非にして、宗室の亡びんとするを見るに忍びず、

楚辭解題

第一章　總略

支那古代に於て周室を中心としたる北方諸國の詩を集めたるものは詩經にして、南方楚國の歌を集めたるものは楚辭なり。楚辭とは楚國の歌の調を有せる詩を云ふ。其の詩の權威は屈原にして其の門弟には宋玉・景差等の名士あり、漢に及び文學の士は其の風を學び、其の體を倣ひ、通じて之を楚辭といふ。劉向は屈原・宋玉其の他漢人の諸賦を輯めて一集となし、後漢に至り王逸は劉向の舊に因りて更に班固及び自家の作を加へて註釋を施し之を楚辭章句と稱せり。是より楚辭は詩經と相竝びて文學者の間に尊重せられたり。

第二章　屈原の小傳

九)に及び、鈴木益堂は訛脱を校訂し、前集十卷を三卷に、後集十卷を上下二卷に併せて刊行したり。明治以後にも評註訓點の書四五種を出せり、是等は皆古文眞寶の流行を語れるものなり。

文學博士　岡田正之識

べからざるも、明人の手に成れるは爭ふべからざるなり。

朝鮮　朝鮮には孰れの時に入りしか詳ならず。朝鮮にて出版したるものあり古文眞寶大全又は詳說古文眞寶大全といふ。後集の如きは卷數は同じく十卷なるも、增補せるもの甚多く、全部百二十七篇を收め、其の內舊來のものは六十一篇、新に增せしものは六十六篇なり。其の文は文章軌範、續文章軌範等に參して取りしものの如し。我內閣記錄課に朝鮮本三種を藏せり、其の篇數三種同一なり。朝鮮にて行はれたる古文眞寶は、我邦に傳はれるものとは異なれるを知るべし。

本邦　我邦に於ては、室町時代の中世以來、五山の間に行はれ、名僧の桂林德昌、笑雲清三、梅屋宗香等各〻註釋あり、元版本に依りて翻刻したる書も出づ、德川氏以降は士林にも盛んに用ひられ、慶長十四年(二二六九)に活字本成り、寬永元年(二二八四)に木版本出で、林羅山は後集に對して諺解を著し、鵜飼石齋は更に增補して古文眞寶後集諺解大成を作り、榊原篁洲は古文眞寶前集諺解大成を編み、安政五年(二五一

るを以て、特に三十五篇を益して上木せしめしが、後其の版の磨滅せしに因り、萬曆十一年に重ねて刻版に付せしものと云ふ。恐らくに射利の書肆の假托ならん。

(三)萬曆戊申刻本　書名は古文眞寶と書せずして、古文大全、又は新增注釋古文大全と云ひ、葉向高の詩釋と稱せり、萬曆三十六年戊申(二二六八)の翰林の吳曙谷の序あり、後集には辭類と銘類とに各〻一篇を加へ、論類には諍臣論・朋黨論・管仲論等の八篇を、書類には報燕惠王書・上秦始皇帝書等五篇を增したり、是れも葉向高に假托したるものなるべし。

(四)明版本　書名を評林注釋古文大全と題し、或は新增註釋古文評林又は評林註釋要刪古文大全とも稱せり。辭類に一篇、序類に三篇を增し、又一卷を加へて十一卷となし、韓愈の雜說・柳宗元の捕蛇者說・柳州孔子廟碑・皮日休の孔子廟碑・錢公輔の義田說・朱熹の敬齋箴等を載せたり。上梓の年を署せざるを以て、其の年代知る

に便利なるものあり。是れ此の書の世俗に歡迎せられし所以ならん。

第四章　流傳

元明　古文眞寶は詩文を學ぶ參考書として手頃のものなるを以て、大に世に行はれ、從ひて版本の種類も多く、殊に後集の如きは加删を爲し、而かも名を帝王に假り或は名士に假托して利を圖らんとしたるものあり、今篇數等の相異なるものを擧ぐれば左の如し。

(一)元版本　黃堅の原選にして、元の林以正の删定し、至正二十六年(二〇二六)の頃に出版せられたるものなり。明の弘治年間に重刊せらる。我邦に傳はりて校刊注釋せられしは、此の元版及び弘治本なり。

(二)萬曆重刻本　此の本は明の神宗の增益したりと稱するものなり。巻首に神宗の萬曆十一年(二二四三)の御製の序あり。神宗は舊來の古文眞寶が糟粕で闕きた

(宋)歐陽修四　蘇軾四　司馬光二
范仲淹二　張載二　王禹偁二
周惇一　蘇洵一　李覯一
陳師道一　程頤一　王安石一
呂大臨一　唐庚一

本集の分類及び文章の取捨は、古文の模範としては慊焉たらざるものなきにあらず、且つ往々分類を誤混し、賈誼の弔屈原文を賦となして賦類に收め、王羲之蘭亭序を記として記類に入れ、甚しきは王安石の讀孟嘗君傳を傳類に置く如し、先儒大江藍田も其の誤を說き、鈴木益堂が本書を校刻せし時に改定する所あり、更に讀の一類を增して讀孟嘗君傳の篇を收めたり。之を文章軌範に比すれば、選擇の精、遙に及ばざるものあり。然れども文章軌範は唐宋時代の文章に限らる。此の書は戰國以來唐宋に至る諸家の作を收め、且つ各種の文體に類別せるを以て、參考閲覽

(一)辭三　(二)賦五　(三)説五　(四)解二　(五)序七
(六)記二　(七)箴二　(八)銘五　(九)文三　(一〇)頌三
(一一)傳三　(一二)碑一　(一三)辨二　(一四)表三　(一五)原二
(一六)論二　(一七)書五　十七類、六十四篇。

作者及び其の作の數は左の如し。

(楚)屈原一　(前漢)賈誼二　武帝一
王子淵一　(後漢)仲長統一　(蜀)諸葛亮二
(晉)陶潛二　王羲之一　李密一
劉伶一　(齊)孔德璋一　(唐)韓愈一三
柳宗元三　李白二　王勃二
張蘊古一　李華一　元結一
杜牧一　李漢一　劉禹錫一

唐庚二	張文潛二	陳師道二
眞宗一	仁宗一	司馬光七
柳永一	邵雍一	蘇過一
王禹偁一	魏野二	僧清順一
梅堯臣一	曾鞏一	韓駒一
謝幼槃一	張詠一	謝枋得一
張轂一	（外）古詩五	無名氏一

選者の最も多く取りしは、李白・杜甫の詩にして、蘇軾・韓愈は之に亞げり、其の古詩に對して平素崇ぶ所は何處にあるかを窺はるべし。

後集　は戰國末に於ける楚の屈原より宋代に至る人の文章を文體別に編纂したるものなり。其の文體は十七類あり、左の如し。其の體に屬せる文章の數も附書す。

(宋)謝靈運一	(齊)謝朓三	(梁)沈約一
(唐)李白三九	杜甫三四	韓愈一四
白居易七	柳宗元三	李賀三
宋之問二	王維二	賈島二
盧同二	劉禹錫二	李紳一
李鄴一	孟郊一	聶夷中一
楊賁一	陸龜蒙一	韋應物一
岑參一	高駢一	崔顥一
高適一	貫休一	吳融一
王轂一	王翰一	無名氏一
(宋)蘇軾一六	黃庭堅九	王安石五
馬子才四	歐陽修三	朱熹二

集めたり。凡二十一首。

(七)歌類　漢の高祖の大風歌・杜甫の飲中八仙歌の如き類。凡十七首。

(八)行類　杜甫の貧交行・兵車行・白樂天の琵琶行の類。凡十七首。

(九)吟類　諸葛亮の梁父吟、王翰の古長城吟の類。凡三首。

(一〇)引類　杜甫の丹青引の類。凡三首。

(一一)曲類　歐陽修・王安石等の明妃曲等の類。凡六首。

以上十一體の分類及び詩の選擇は議ずべきものなきにあらざるも、大體に於ては著名の作を取りしは多とすべし。又其の主として古體の詩を取りて近體の詩に及ばざりしは本書の特色として見るべきものなり。

書中收むる所の詩家及び詩數は左の如し。

(漢)班婕妤二　高祖一　(蜀)諸葛亮一

(魏)曹植二　(晉)陶潛一四　吳隱之一

體及び詩數は左の如し。

(一)勸學文　宋の眞宗仁宗又は司馬光等の作に係かる勸學の韻文を集めたり。凡八篇。

(二)五言古風短篇　短きは四句、長きは十四句を以て成れる五言古詩を集めたり。凡六十六首。

(三)五言古風長篇　十六句より(十四句のもの一首あり)四十四句に至る句數を以て成れる五言古詩を集めたり。凡二十三首。

(四)七言古風短篇　短きは四句、長きは二十四句に至る七言古詩を集めたり。凡四十六首。

(五)七言古風長篇　短きは二十六句(二十四句の詩一首あり)長きは六十六句に至る七言古詩を集めたり。凡七首。

(六)長短句　李白の將進酒白樂天の大行路の如き五言七言等取り交ぜて作れる詩を

（皇紀二一六二）の青藜齋の重刊に係かる其の跋に「永陽黃堅氏所集古文眞寶二十卷載二七國而下諸名家之作一凡二十有七體、三百十有二篇、蓋精選也。」とあり、黃堅の選となせるは、何等かの據る所ある傳來の說なるべし。黃堅の生卒事蹟知るべからず、普通に黃堅を宋代の人となせるも、果して然るや否やは明ならず。

校註者。　元の至正二十六年（二〇二六）盱江の鄭本の序に據れば、林以正と云へる學者は舊來刊行の此の書に刪略多く、註釋明ならざるを憾み、教授の暇に、繁を削り略を詳にし、且つ大意を篇題の下に掲げ、訓解を句讀の間に明にしたりといふ。さればは今傳ふる所のものは黃堅の原選にして、林以正の刪定したりしものならん。林以正は名は楨、以正は其の字、詩學大成の著者なり。

第三章　編次

前集。　前集は漢より宋に至るまでの詩を集め、體を以て之を分類せり。其の詩

古文眞寶解題

第一章　總略

古文眞寶は前後の二集に分たれ、前集には詩を集め、後集には文を集めたるものなり。其の詩文が尤も重んずべく寶とすべきものなりとの意を以て眞寶と名けしならん。元明の間には校刻せられて頗る行はれ、朝鮮に於ても、増補刊行し、我邦に於ても、室町時代に五山の學僧に喜ばれ、德川時代には初學の詩文を學ばんとするものの必讀の書となり、近年に至りても文部省の中等敎員檢定試驗に於ける國漢文受檢者の閲讀すべき書中の一となれり。

第二章　編者と校註者

編者　此の書は宋末元初に出でしものならん、編者詳ならず。明の弘治十五年

卷之十六

卷之十七

—（目次終）—

楚辭

論類

書類

賦類

說類

解類

序類

記類

吟類

引類

曲類

後集

辭類

歌類

行類

七言古風長篇

長短句

七言古風短篇

五言長短篇

目次

古文眞寶

前集

勸學文

五言古風短篇

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

例言

一古文眞寶前後集及び楚辭の各全部を收めて本書一卷とす。

一古文眞寶は流布の版本に據る。

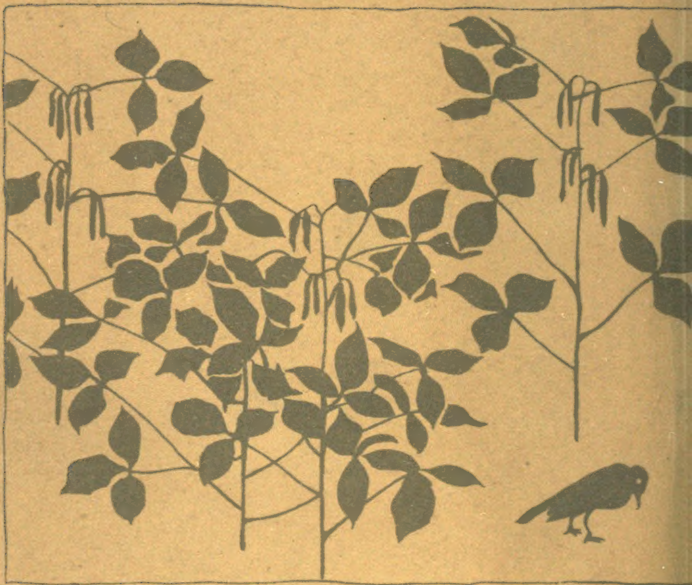
一楚辭は王逸註を以て底本とし、朱熹註を參照して其同異の甚しきものを註記せり。而して段絡の分ち方は大要朱註に從ふ事とせり。

一王註に見えたる各篇の概說は、固より本文に關係なく、又それに對して諸家異見の存するもののなきに非ざるも、各篇の大意を知るに於て、其利便蓋し尠少ならざるべきを信じ、姑く小活字を以て其譯文のみを揭ぐる事とせり。

一訓讀及び註解に關しては、二書共に和漢諸家の說を參考して其宜しきに從はん事を期したり。

古文眞寶　全

楚辭　全



Ku wen chen pao
Kobun shimpo